

百間川米田遺跡 3 (旧当麻遺跡)

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 VII
(本文)

1989

建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会



巻頭カラー図版1 百間川鳥瞰（北西から）（A：百間川米田遺跡 B：百間川兼基・今谷遺跡 C：百間川沢田遺跡 D：百間川原尾島遺跡）



巻頭カラー図版 2 1984・1985年度調査区航空写真（北から）



1. 井戸114（東から）



2. 井戸119 半截（北から）



1. 井戸137（北から）



2. 井戸132 半截（南から）

序

百間川（旭川放水路）は、旭川の洪水から岡山城下を守るため、江戸時代（1686年）に造られた人工河川です。

この百間川は、築造以来数多くの大洪水から岡山市街地を救ってきましたが、上流部の山林の伐採や、砂鉄採取による河床への土砂堆積のため、明治維新後たびたび災害に見舞われることとなりました。特に、昭和9年9月の室戸台風、昭和20年9月の枕崎台風による洪水では旭川本川、百間川ともに各所で堤防が決壊し、大きな被害がでました。

その間、昭和元年には国による改修工事が開始されましたが、戦局の悪化のため、ほとんど手がつけられないまま中止されるに至りました。その後、昭和38年から43年にかけて河口水門の改築を行ったものの、他は大部分が築造当時の原形をとどめたまま長らく放置されていました。

一方、近年の都市化に伴い、土地利用形態も大きく変化しており、先の室戸、枕崎台風クラスの大洪水に見舞われれば被害は甚大なものになると予想されます。

このため、旭川を管理している建設省では、百間川を近代的な旭川放水路としての機能を發揮させるため、昭和40年度より事業を再開し、地元の方々の多大なる御協力を戴き改修工事を進めてきました。その結果、昭和58年に第1期工事（戦後最大流量に対応した河道）が概成し、現在第2期工事を進めているところです。

百間川には、縄文から江戸時代に至る貴重な遺跡が埋蔵されていることが知られています。建設省では、岡山県教育委員会と協議を重ね、昭和52年度から同委員会に委託し、発掘調査を実施しています。

本書は、この発掘調査のうち、昭和58年度から昭和60年度にわたって調査が行われた、百間川米田遺跡（旧当麻遺跡）の調査結果をまとめたものです。本書が、百間川埋蔵文化財に対する認識と理解のため、また教育並びに学術、文化のため、大いに活用されることを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集に当たられた、岡山県教育委員会をはじめとする関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

平成元年9月

建設省岡山河川工事事務所

所長 西口泰夫

序

百間川（旭川放水路）は、岡山の城下町を水害から守るため、江戸時代の初めに築堤・開削された人工の川ですが、今では、岡山市民の緑のオアシスとして広く親しまれています。そこには、アユモドキやオニバスを代表に、数多くの動植物が生息し、まさに、都会に囲まれた自然の宝庫となっています。さらにこの川の下には、昔の人々の暮らしを伝える遺跡が、広く残されています。このかけがえのない自然と文化財をどのように保護していくかは、現在の私達にとって、大きな課題となっています。

岡山県教育委員会では、昭和50年から本格化した百間川の改修工事に伴い、河川敷内の遺跡の保存について建設省岡山河川工事事務所と協議を進めてきました。その結果、やむをえず破壊される遺跡の一部については記録による保存の処置をとることとし、昭和52年から発掘調査を実施しています。そのうち、戦後の最大流量に対応した第1期工事分の調査（昭和52～56年度）結果については、すでに『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』I～VIとして6冊を刊行しました。その後の発掘調査報告書の刊行につきましては、本州四国連絡橋や山陽自動車道などの大規模工事に伴う調査量の急増のため、やむなく作業を一時中断しておりましたが、このほど『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』VIIを刊行するはこびとなりました。

この報告書では、昭和58年度から60年度にかけて調査を行った百間川米田遺跡（旧当麻遺跡）についての結果の概要を述べています。弥生時代から江戸時代までの長期間にわたる多くの遺構・遺物がみつかりましたが、なかでも、中世の集落の一部がまとまった姿で検出されたことは、当時の村や町のようすを考えるうえで注目されます。今後、この報告書が文化財の保護・保存に少しでも役立てられ、また、研究資料の一助として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査の実施、及び報告書の作成にあたって、建設省岡山河川工事事務所、並びに百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員会をはじめとする関係各位から寄せられた多大の御協力と御指導に対し、厚くお礼申し上げます。

平成元年9月

岡山県教育委員会

教育長 竹内 康夫

例　　言

1. 本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の委託を受け、岡山県教育委員会が1983～1985年度に発掘調査を実施した、百間川米田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査期間は、1983年度が1983年8月17日～12月10日、1984年度が1985年1月8日～3月31日、1985年度は1985年4月1日～1986年1月19日で、調査総面積は12,978m²である。
3. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

池葉須藤樹（岡山県遺跡保護調査団員）

鎌木義昌（岡山理科大学教授）

近藤義郎（岡山大学教授）

角田　茂（岡山県遺跡保護調査団員）

出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課課長補佐）

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

4. 出土遺物のうち輸入陶磁器については亀井明徳氏（専修大学助教授）、木簡類については水野正好氏（奈良大学教授）に教示を受けた。

また、自然遺物の鑑定・同定については下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、報告文を頂戴した。これらについては付載として本報告書に掲載している。

人骨鑑定　池田次郎（岡山理科大学教授）　石器石材鑑定　三宅寛（岡山理科大学教授）

動物遺骨　茂原信生（獨協医科大学講師）　木器樹種・種子同定　パリノ・サーヴェイ株式会社

ただし、いずれも出土量が多かったため、担当者の選別した一部の資料について実施したものである。

5. 発掘調査の実務は、1983年度は岡山県教育庁文化課が担当し、1984年度以降については岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

6. 発掘調査ならびに報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センター職員　井上弘・柳瀬昭彦・平井勝・古谷野寿郎・岡本寛久・江見正巳・平井泰男・宇垣匡雅が担当した。

7. 報告書の作成にあたっては、1984年4月1日～1987年3月31日まで百間川遺跡調査事務所において洗浄・注記作業を実施し、1987年4月1日～1989年3月31日にかけては岡山県古代吉備文化財センターにおいて注記・復元・実測・写真撮影・原稿執筆を行った。

8. 本文の執筆には調査員全員が分担してあたったが、その分担は目次に示すとおりである。ただし、第3章第2節については各遺構の文末に文責を明示している。

9. 本書の編集は岡本寛久が担当した。

10. 出土遺物ならびに図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

凡　　例

1. 今回報告する遺跡はかつて百間川当麻遺跡と呼称していたが、当麻は小字名のために今回の地区まで及んでいないことが判明した。遺跡としては一連のものであるため、百間川原尾島遺跡や同沢田遺跡のように、大字名の米田をつけて遺跡名を百間川米田遺跡に変更することとした。ただし混乱を避けるため、今回の報告に限り（旧当麻遺跡）を付記する。なお、従来の当麻遺跡は米田遺跡当麻地区、岩間遺跡は米田遺跡岩間地区と呼称する。
2. 調査地区には従来から当麻地区で使用していた10m方眼を延長して使用することとした。東西のラインは北からA・B・Cとアルファベット記号で呼び、ZをすぎるとAA・BB・CCと続けることとした。南北のラインは西から1・2・3と数字をついている。そして、方眼の枠目の呼称は、北西隅の交点の名称、すなわち5Bとか14Sに区を付けて呼ぶこととした。なお、方眼の割付けにあたっては、旧調査区に残存していた杭から測量したため、いくらかの誤差は免かれない。調査グリッドと国土座標との関係については、第2章第4節を参照されたい。
3. 本報告書に掲載した遺構実測図の北方位はすべて磁北であり、建物・塀等の方位角のNも磁北を示す。ただし、第2～4図は真北であり、調査地区付近の磁北は西偏6°30'を測る。
4. 本報告書に掲載した遺構実測図の高度はすべて海拔高度を示す。なお、調査中の基準高度は建設省が改修工事に伴って設置したBMから引いたものである。
5. 本報告書に掲載した遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は下記のとおり統一していて、例外については縮尺率を明記している。

遺構

竪穴住居・建物・塀：1/80 井戸（奈良時代以前）・土壙・溝断面：1/30

井戸（平安時代後期以後）：1/40

遺物

土器：1/4 土錐：1/3 石器・金属器：1/2 木器：1/4 砥石・石錐：1/3

6. 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、口径の残存率が1/8以下の小破片であることを示し、口径推定が困難なものである。

7. 遺構番号は、過去に報告された遺構との重複を避けるため、新たに101番から順次付した。

8. 遺物番号は、材質を示すため、土器・瓦以外のものについて、下記のような略号を番号の前に付した。

石器：S 鉄器：I 銅器：B 土製品：C 木器：W

9. 本報告書第2図に掲載した地図は、国土地理院発行1/25000地形図、和氣・西大寺・岡山北部・岡山南部の一部を復製したものである。また、第3図と第4図は岡山市域図1/2500地形図8-4を復製したものである。

10. 本報告書で使用した土器編年は『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』において採用したものである。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	(岡本寛久)	1
第2章 調査の経緯.....		9
第1節 発掘調査の契機	(井上弘)	9
第2節 過去の調査結果	(井上弘)	11
第3節 調査の体制	(岡本寛久)	13
第4節 調査の経過	(柳瀬昭彦)	16
第3章 調査の概要.....		19
第1節 調査区の概況.....	(宇垣匡雅)	19
第2節 遺構・遺物.....		22
1 弥生時代・古墳時代.....		22
a 積穴住居.....		22
b 建物.....		34
c 井戸.....		38
d 土壙.....		72
e 溝		105
f 落ち込み		125
g 包含層（土器溜り）		128
2 奈良時代～平安時代中期		142
a 建物		142
b 井戸		145
c 土壙		150
d 溝		151
e 包含層（土器溜り）		156
3 平安時代後期～室町時代		160
a 建物		160
b 塚		208

c 井戸	213
d 土壌	246
e 溝	276
4 江戸時代	328
a 土壌	328
b 池	330
5 遺構に伴わない遺物	333
第4章 考察	337
第1節 中世の遺構について	337
1 井戸	(井上弘) 337
2 大溝	(平井勝) 341
第2節 中世米田遺跡の構造と変遷	(岡本寛久) 343
付載1 岡山市百間川米田遺跡（昭和60年度調査）出土の中世人骨	(池田次郎) 347
付載2 百間川米田遺跡（中世）出土の獣骨	(茂原・江藤・桜井・芹澤) 348
付載3 百間川米田遺跡出土の犬骨	(茂原信生) 372
付載4 百間川遺跡 木器樹種同定、種子同定報告	(パリノ・サーヴェイ K. K.) 379

挿 図 目 次

第1図 百間川の位置	1	第14図 竪穴住居103 (1/80・1/40)	31
第2図 百間川周辺遺跡分布図 (1/50000)	2	第15図 竪穴住居104 (1/80)	32
第3図 百間川米田遺跡周辺地形図 (1/7500)	7	第16図 竪穴住居105 (1/80)	33
第4図 百間川米田遺跡既調査区位置図 (1/5000)	10	第17図 建物101 (1/80)	34
第5図 調査範囲およびグリッド設定 (1/4000)	16	第18図 建物102 (1/80)	34
第6図 微高地北側斜面堆積 (1/100)	20	第19図 建物103 (1/80)	35
第7図 R～L区土層概念図 (1/30)	21	第20図 建物104 (1/80)	35
第8図 竪穴住居101 (1/80・1/40) 出土遺物	22	第21図 建物105 (1/80)	36
第9図 B～J区遺構全図 (1/400)	23・24	第22図 建物106 (1/80)・出土遺物	36
第10図 K～R区遺構全図 (1/400)	25・26	第23図 建物107 (1/80)	37
第11図 R～MM区遺構全図 (1/400)	27・28	第24図 井戸101 (1/30)・出土遺物	38
第12図 竪穴住居102 (1/80)	29	第25図 井戸102 (1/30)・出土遺物	39
第13図 竪穴住居103出土遺物	30	第26図 井戸103 (1/30)・出土遺物〔1〕	40
		第27図 井戸103出土遺物〔2〕	41
		第28図 井戸103出土遺物〔3〕	42
		第29図 井戸103出土遺物〔4〕	43
		第30図 井戸103出土遺物〔5〕(1/6)	44
		第31図 井戸103出土遺物〔6〕	45

第32図	井戸104（1／30）・出土遺物	45	第73図	土壌107（1／30）	82
第33図	井戸105（1／30）・出土遺物〔1〕	46	第74図	土壌108（1／30）・出土遺物	82
第34図	井戸105出土遺物〔2〕	47	第75図	土壌109（1／30）・出土遺物	83
第35図	井戸106（1／30）・出土遺物	48	第76図	土壌110（1／30）・出土遺物	83
第36図	井戸107（1／30）	49	第77図	土壌111（1／30）	84
第37図	井戸107出土遺物〔1〕	50	第78図	土壌112（1／30）・出土遺物	84
第38図	井戸107出土遺物〔2〕（1／4）	51	第79図	土壌113（1／30）・出土遺物	85
第39図	井戸108（1／30）・出土遺物	52	第80図	土壌114（1／30）・出土遺物〔1〕	85
第40図	井戸109（1／30）	52	第81図	土壌114出土遺物〔2〕	86
第41図	井戸110（1／30）・出土遺物	53	第82図	土壌115・116（1／30）	87
第42図	井戸111（1／30）	54	第83図	土壌115・116出土遺物	88
第43図	井戸111出土遺物〔1〕	55	第84図	土壌116出土遺物	89
第44図	井戸111出土遺物〔2〕	56	第85図	土壌117（1／30）	89
第45図	井戸111出土遺物〔3〕	57	第86図	土壌117出土遺物〔1〕	90
第46図	井戸111出土遺物〔4〕	58	第87図	土壌117出土遺物〔2〕	91
第47図	井戸111出土遺物〔5〕	59	第88図	土壌118（1／30）	92
第48図	井戸111出土遺物〔6〕	60	第89図	土壌119（1／30）・出土遺物	92
第49図	井戸112（1／30）・出土遺物	61	第90図	土壌120・121（1／30）	93
第50図	井戸112出土遺物	62	第91図	土壌122（1／30）・出土遺物	93
第51図	井戸113（1／30）・出土遺物	63	第92図	土壌123（1／30）・出土遺物	94
第52図	井戸114（1／30）	64	第93図	土壌124・125（1／30）	94
第53図	井戸114井戸枠（1／12・1／6）	65	第94図	土壌124出土遺物	95
第54図	井戸114出土遺物〔1〕	66	第95図	土壌126（1／30）・出土遺物	95
第55図	井戸114出土遺物〔2〕	67	第96図	土壌127（1／30）・出土遺物	96
第56図	井戸115（1／30）	67	第97図	土壌128（1／30）	97
第57図	井戸116（1／30）	68	第98図	土壌129（1／30）・出土遺物	97
第58図	井戸116出土遺物〔1〕	69	第99図	土壌130（1／30）・出土遺物	98
第59図	井戸116出土遺物〔2〕	70	第100図	土壌131・167（1／30）	98
第60図	井戸117（1／30）・出土遺物	71	第101図	土壌131出土遺物	99
第61図	土壌101（1／30）・出土遺物	72	第102図	土壌132（1／30）	99
第62図	土壌102（1／30）・出土遺物	72	第103図	土壌133（1／30）	99
第63図	土壌103（1／30）・出土遺物	73	第104図	土壌134（1／30）	100
第64図	土壌104（1／30）	73	第105図	土壌135（1／30）	100
第65図	土壌105（1／30）	74	第106図	土壌136出土遺物	101
第66図	土壌105出土遺物〔1〕	75	第107図	土壌138（1／30）	101
第67図	土壌105出土遺物〔2〕	76	第108図	土壌138出土遺物	102
第68図	土壌105出土遺物〔3〕	77	第109図	土壌139（1／30）・出土遺物	102
第69図	土壌105出土遺物〔4〕	78	第110図	土壌140（1／30）	102
第70図	土壌105出土遺物〔5〕	79	第111図	土壌141出土遺物	102
第71図	土壌105出土遺物〔6〕	80	第112図	土壌141（1／30）	103
第72図	土壌106（1／30）・出土遺物	81	第113図	土壌142出土遺物	103

第114図 土壌143 (1／30)	103	第146図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔5〕	136
第115図 土壌144 (1／30)	104	第147図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔6〕	137
第116図 土壌145 (1／30)	104	第148図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔7〕	138
第117図 溝102・103 (1／40)	105	第149図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔8〕	139
第118図 溝102出土遺物〔1〕	106	第150図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔9〕	140
第119図 溝102出土遺物〔2〕	107	第151図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔10〕	141
第120図 溝102出土遺物〔3〕 〔1／2・1／3〕	108	第152図 建物108 (1／80)	142
第121図 溝105 (1／30)	110	第153図 建物109 (1／80)	143
第122図 溝105出土遺物〔1〕	111	第154図 建物110 (1／80)	144
第123図 溝105出土遺物〔2〕	112	第155図 井戸118出土遺物〔1〕	145
第124図 溝105出土遺物〔3〕	113	第156図 井戸118 (1／30)	146
第125図 溝105出土遺物〔4〕	114	第157図 井戸118出土遺物〔2〕	147
第126図 溝105出土遺物〔5〕	115	第158図 井戸119 (1／30)	148
第127図 溝106 (1／30)	116	第159図 井戸119出土遺物	149
第128図 溝107 (1／30)	116	第160図 土壌146 (1／30)	150
第129図 溝110・111・112 (1／100)	118	第161図 土壌147 (1／30)	150
第130図 溝111出土遺物〔1〕	119	第162図 溝115 (1／120・1／30)	151
第131図 溝111出土遺物〔2〕	120	第163図 溝115 (1／150)	152
第132図 溝112出土遺物	121	第164図 溝115断面 (1／30)	153
第133図 溝111・112出土遺物	122	第165図 溝115出土遺物〔1〕	154
第134図 溝113 (1／30)	123	第166図 溝115出土遺物〔2〕	155
第135図 溝114 (1／30)	124	第167図 溝101上部土器溜り上層出土遺物 〔1〕	156
第136図 落ち込み101 (1／80)	125	第168図 溝101上部土器溜り上層出土遺物 〔2〕	157
第137図 落ち込み101出土遺物	126	第169図 溝101上部土器溜り上層出土遺物 〔3〕	158
第138図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔1〕 (1／4)	128	第170図 溝101上部土器溜り上層出土遺物 〔4〕 (1／3・1／2)	159
第139図 溝101上部土器溜り出土遺物分布 〔9・10区〕 (1／80・1／8)	129	第171図 建物111 (1／80)	160
第140図 溝101上部土器溜り出土遺物分布 ・断面〔11・12区〕 (1／80・1／8)	130	第172図 建物112 (1／80)	160
第141図 溝101上部土器溜り出土遺物分布 ・断面〔12・13区〕 (1／80・1／8)	131	第173図 建物113 (1／80)	160
第142図 溝101上部土器溜り出土遺物分布 〔13・14区〕 (1／80・1／8)	132	第174図 建物114 (1／80)	160
第143図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔2〕	133	第175図 建物115 (1／80)	161
第144図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔3〕	134	第176図 建物116 (1／80)	162
第145図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 〔4〕	135		

第177図	建物117 (1／80)162	第218図	建物153 (1／80)193
第178図	建物118 (1／80)163	第219図	建物154 (1／80)194
第179図	建物119 (1／80)163	第220図	建物155 (1／80)195
第180図	建物120 (1／80)163	第221図	建物156 (1／80)195
第181図	建物121 (1／80)164	第222図	建物157 (1／80)197-198
第182図	建物122 (1／80)164	第223図	建物158 (1／80)200
第183図	建物123 (1／80)165	第224図	建物159 (1／80)200
第184図	建物124 (1／80)165	第225図	建物160 (1／80)201
第185図	建物125 (1／80) · 出土遺物166	第226図	建物161 (1／80) · 出土遺物202
第186図	建物126 (1／80)167	第227図	建物162 (1／80) · 出土遺物202
第187図	建物127 (1／80)168	第228図	建物163 (1／80) · 出土遺物203
第188図	建物128 (1／80)169	第229図	建物164 (1／80) · 出土遺物204
第189図	建物129 (1／80)170	第230図	建物165 (1／80)204
第190図	建物130 (1／80)170	第231図	建物165出土遺物205
第191図	建物131 (1／80)171	第232図	建物166 (1／80) · 出土遺物205
第192図	建物131出土遺物172	第233図	建物167 (1／80) · 出土遺物206
第193図	建物132 (1／80) · 出土遺物173	第234図	建物168 (1／80)206
第194図	建物133 (1／80)174	第235図	建物169 (1／80)206
第195図	建物134 (1／80)175	第236図	建物170 (1／80) · 出土遺物207
第196図	建物135 (1／80)175	第237図	塙101 (1／80)208
第197図	建物136 (1／80)176	第238図	塙102 (1／80)209
第198図	建物137 (1／80)177	第239図	塙103 (1／80)209
第199図	建物138 (1／80)179-180	第240図	塙104 (1／80)209
第200図	建物139 (1／80)181	第241図	塙105 (上) 106 (下) (1／80)210
第201図	建物140 (1／80)181	第242図	塙105出土遺物210
第202図	建物141 (1／80)182	第243図	塙107 (1／80) · 出土遺物211
第203図	建物142 (1／80)182	第244図	塙108 (1／80)211
第204図	建物143 (1／80)183	第245図	塙109 (1／80)211
第205図	建物144 (1／80)184	第246図	塙110 (1／80)212
第206図	建物144出土遺物185	第247図	井戸120 (1／30) · 出土遺物213
第207図	建物145 (1／80)186	第248図	井戸121 (1／40) · 出土遺物 (1／3)214
第208図	建物146 (1／80)186	第249図	井戸121出土遺物215
第209図	建物147 (1／80)187	第250図	井戸122 (1／40)215
第210図	建物147出土遺物188	第251図	井戸122出土遺物〔1〕216
第211図	建物148 (1／80)188	第252図	井戸122出土遺物〔2〕217
第212図	建物148出土遺物189	第253図	井戸122出土遺物〔3〕218
第213図	建物149出土遺物189	第254図	井戸122出土遺物〔4〕 (1／4 · 1／2 · 1／3)219
第214図	建物149 (1／80)190	第255図	井戸123 (1／40) · 出土遺物220
第215図	建物150 (1／80) · 出土遺物191	第256図	井戸124 (1／40)221
第216図	建物151 (1／80)191			
第217図	建物152 (1／80)192			

第257図	井戸125(1/40)・出土遺物(1/4)	222	第295図	土壙159出土遺物〔4〕	254
第258図	井戸126(1/40)	222	第296図	土壙159出土遺物〔5〕	255
第259図	井戸127(1/40)	223	第297図	土壙159出土遺物〔6〕(1/4・1/6)	256
第260図	井戸128(1/40)	224	第298図	土壙159出土遺物〔7〕(1/6)	257
第261図	井戸129(1/40)	224	第299図	土壙161(1/30)	257
第262図	井戸130(左)・井戸131(右) (1/40)	225	第300図	土壙163(右)・土壙164(左) (1/30)	258
第263図	井戸132(1/40)	226	第301図	土壙166(1/30)	259
第264図	井戸133(1/40)	227	第302図	土壙167(1/30)	259
第265図	井戸133出土遺物	228	第303図	土壙168(1/30)	259
第266図	井戸134(右)・井戸135(左) (1/40)	229・230	第304図	土壙169(1/30)	260
第267図	井戸134出土遺物〔1〕	231	第305図	土壙170(右)・171(左)(1/30)	260
第268図	井戸134出土遺物〔2〕	232	第306図	土壙172(1/30)	261
第269図	井戸135出土遺物〔1〕	233	第307図	土壙174(1/30)	261
第270図	井戸135出土遺物〔2〕	234	第308図	土壙175(1/30)	262
第271図	井戸135出土遺物〔3〕	235	第309図	土壙176(1/30)・出土遺物	262
第272図	井戸136(1/40)	236	第310図	土壙177(1/30)・出土遺物	263
第273図	井戸137(1/40)・出土遺物	237	第311図	土壙178(1/30)・出土遺物	263
第274図	井戸138(1/40)	237	第312図	土壙179(1/30)・出土遺物	264
第275図	井戸139(1/40)・出土遺物	238	第313図	土壙180(1/30)・出土遺物	264
第276図	井戸140(1/40)	239	第314図	土壙181(1/30)	265
第277図	井戸140出土遺物	240	第315図	土壙182(1/30)・出土遺物	265
第278図	井戸141(1/40)	241	第316図	土壙183(1/30)・出土遺物	266
第279図	井戸141出土遺物〔1〕	242	第317図	土壙184(1/30)・出土遺物	266
第280図	井戸141出土遺物〔2〕	243	第318図	土壙185(1/30)	266
第281図	井戸141出土遺物〔3〕	244	第319図	土壙186(1/30)・出土遺物	267
第282図	土壙149(1/30)・出土遺物	246	第320図	土壙187(1/30)・出土遺物	268
第283図	土壙150(1/30)	246	第321図	土壙188・189(1/30)	268
第284図	土壙151(1/30)	247	第322図	土壙190(1/30)	269
第285図	土壙152(1/30)	247	第323図	土壙191(1/30)・出土遺物	269
第286図	土壙153(1/30)	247	第324図	土壙192(1/30)	270
第287図	土壙154(1/30)	248	第325図	土壙193(1/30)・出土遺物	270
第288図	土壙155(1/30)	248	第326図	土壙194(1/30)・出土遺物	270
第289図	土壙156(1/30)・出土遺物	249	第327図	土壙195(1/30)	270
第290図	土壙159(1/30)	250	第328図	土壙196(1/30)・出土遺物	271
第291図	建物138・土壙159位置関係 (1/150)	251	第329図	土壙197(1/30)・出土遺物	271
第292図	土壙159出土遺物〔1〕	251	第330図	土壙198(1/30)	272
第293図	土壙159出土遺物〔2〕	252	第331図	土壙199(1/30)	273
第294図	土壙159出土遺物〔3〕	253	第332図	土壙200(1/30)・出土遺物	273
			第333図	土壙201(1/30)	274
			第334図	土壙202(1/30)	274

第335図 土壙203（1／30）	274	第373図 溝123 1層・2層・3層出土遺物 〔1〕	310
第336図 土壙204（1／30）	275	第374図 溝123 1層・2層・3層出土遺物 〔2〕	311
第337図 土壙205（1／30）	275	第375図 溝124（1／200、1／80）	312
第338図 溝116（1／30）	276	第376図 溝122・123出土遺物〔1〕(1/4)・(1/8)	313
第339図 溝120（上・中）・121（下）(1/30)	277	第377図 溝122・123出土遺物〔1〕	314
第340図 溝120・121・建物157位置関係 (1／200)	277	第378図 溝122・123出土遺物〔2〕	315
第341図 溝122（1／200、1／80）〔1〕	279	第379図 溝122・123出土遺物〔3〕	316
第342図 溝122（1／80）〔2〕	280	第380図 溝122・123出土遺物〔4〕	317
第343図 溝122 1層出土遺物	281	第381図 溝122・123出土遺物〔5〕	318
第344図 溝122 2層出土遺物〔1〕	282	第382図 溝122・123出土遺物〔6〕	319
第345図 溝122 2層出土遺物〔2〕	283	第383図 溝122・123出土遺物〔7〕	320
第346図 溝122 2層出土遺物〔3〕	284	第384図 溝125（1／80）	320
第347図 溝122 2層出土遺物〔4〕	285	第385図 溝125出土遺物〔1〕	322
第348図 溝122 貝層出土遺物〔1〕	286	第386図 溝125出土遺物〔2〕	323
第349図 溝122 貝層出土遺物〔2〕	287	第387図 溝125出土遺物〔3〕	324
第350図 溝122 貝層出土遺物〔3〕	288	第388図 溝125出土遺物〔4〕	324
第351図 溝122 3層出土遺物〔1〕	289	第389図 溝127・溝128・溝129・溝130 (1／60、1／30)	325
第352図 溝122 3層出土遺物〔2〕	290	第390図 溝129出土遺物	325
第353図 溝122 3層出土遺物〔3〕	291	第391図 溝131（1／30）	326
第354図 溝122出土遺物〔1〕	292	第392図 溝132・溝133・溝134（1／80） 〔1〕	326
第355図 溝122出土遺物〔2〕	293	第393図 溝132・溝133・溝134（1／30） 〔2〕	327
第356図 溝122出土遺物〔3〕	293	第394図 溝132出土遺物	327
第357図 溝122（1／200、1／80）	294	第395図 溝133出土遺物	327
第358図 溝122上層・中層・貝層出土遺物	295	第396図 土壙207（1／30）	328
第359図 溝122上層・中層出土遺物	296	第397図 土壙208（1／30）	329
第360図 溝122下層出土遺物〔1〕	298	第398図 池101(1/100)・出土遺物〔1〕	330
第361図 溝122下層出土遺物〔2〕	299	第399図 池101出土遺物〔2〕	331
第362図 溝122下層出土遺物〔3〕	300	第400図 池101出土遺物〔3〕	332
第363図 溝122下層出土遺物〔4〕	301	第401図 遺構に伴わない遺物〔1〕(埴輪)	333
第364図 溝122下層出土遺物〔5〕	302	第402図 遺構に伴わない遺物〔2〕(埴輪)	334
第365図 溝122凹地出土遺物〔1〕	303	第403図 遺構に伴わない遺物〔3〕	335
第366図 溝122凹地出土遺物〔2〕	304	第404図 遺構に伴わない遺物〔4〕	336
第367図 溝122出土遺物〔1〕	305	第405図 井戸形態分類図（1／60）	339
第368図 溝122出土遺物〔2〕	306		
第369図 溝122出土遺物〔3〕	306		
第370図 溝122出土遺物〔4〕	307		
第371図 溝123（1／200）〔1〕	308		
第372図 溝123（1／80）〔2〕	309		

表 目 次

表 1	岡山県百間川米田遺跡出土脊椎動物 遺存体の種別リスト	351～354
表 2	岡山県百間川米田遺跡出土脊椎動物遺 存体の層別リスト	355～358
表 3	百間川米田遺跡出土の牛歯の計測値と 比較資料（単位mm）	361
表 4	百間川米田遺跡出土の馬歯の計測値と 比較資料（単位mm）	363・364
表 5	参考資料 岡山県百間川米田遺跡出土 のウシ、ウマの歯種別リスト	367・368
表 6	百間川米田遺跡出土犬骨の頭蓋計測値 と比較資料（単位はmm）	375・376
表 7	百間川米田遺跡出土犬骨の上顎歯と比 較資料（単位はmm）	377・378
表 8	百間川米田遺跡出土材の推定される用 途・時代とその樹種	387・393
表 9	井戸材の部位別の使用樹種	394
表10	百間川米田遺跡出土種子同定結果	396
表11	百間川遺跡出土種子資料表(抜粋)	397

図 版

卷頭カラー図版 1	百間川鳥瞰（北西から）
卷頭カラー図版 2	1984・1985年度調査区 航空写真
卷頭カラー図版 3	1. 井戸114（東から） 2. 井戸119半截 (北から)
卷頭カラー図版 4	1. 井戸137（北から） 2. 井戸132半截 (南から)
図版 1	1. 百間川米田遺跡調査前遠景 (東から) 2. E～R調査区全景（南西から）
図版 2	1. F～J調査区全景（南西から） 2. G～J調査区全景（西から）
図版 3	1. F～H調査区全景 (部分・南西から) 2. F～I調査区全景（南東から）

表12	百間川遺跡出土種子同定結果(抜粋)	397
表13	資料表(抜粋)	398
表14	同定結果(抜粋)	398・399
表15	百間川米田遺跡出土土器観察表	405
表16	木器一覧表	473
表17	石器一覧表	485
表18	鉄器一覧表	488
表19	銅器一覧表	491
表20	骨角器一覧表	492
表21	土錘一覧表	493
表22	土器転用土製円盤一覧表	502
表23	動物遺体同定資料一覧表	506
表24	種子同定資料一覧表	511
表25	建物・塀一覧表	519
表26	新旧遺構名称対照表	522

図 目 次

図版 4	1. 竪穴住居102（南から） 2. 竪穴住居103（北から）
図版 5	1. 竪穴住居105（北西から） 2. 建物142（北から）
図版 6	1. 井戸101断面（西から） 2. 井戸101遺物出土状態（東から） 3. 井戸101出土遺物（約1／4）
図版 7	1. 井戸102断面（南東から） 2. 井戸102完掘状態（東から）
図版 8	1. 井戸103断面（南西から） 2. 井戸103遺物出土状態〔1〕 (南西から)
図版 9	1. 井戸103遺物出土状態〔2〕 (南西から) 2. 井戸103遺物出土状態〔3〕 (南西から)
図版10	井戸103出土遺物〔1〕（約1／4）

- 図版11 井戸103出土遺物〔2〕
(約1/4・約2/5)
- 図版12 井戸103出土遺物〔3〕
(約1/4・約1/5)
- 図版13 1. 井戸104断面(南西から)
2. 井戸105断面(西から)
- 図版14 1. 井戸105完掘状態(西から)
2. 井戸105 出土遺物(約1/4)
- 図版15 1. 井戸105出土鉢69の内面に描かれた線刻絵画〔1〕(鹿と弧文)
2. 井戸105 出土鉢69の内面に描かれた線刻絵画〔2〕(鹿と弧文の拡大)
- 図版16 1. 井戸106断面(西から)
2. 井戸107断面(南西から)
- 図版17 1. 井戸107検出過程(南西から)
2. 井戸107底部出土蔓製品
(西から)
- 図版18 井戸107出土遺物(約1/4)
- 図版19 1. 井戸108断面(南東から)
2. 井戸109断面(西から)
- 図版20 1. 井戸110断面(西から)
2. 井戸110遺物出土状態(西から)
- 図版21 1. 井戸111遺物出土状態(西から)
2. 井戸111出土遺物〔1〕
- 図版22 井戸111出土遺物〔2〕
- 図版23 1. 井戸112(南から)
2. 井戸112出土土器195内面に付着する炭化米
- 図版24 井戸112出土遺物
- 図版25 1. 井戸113
2. 井戸115・出土遺物
- 図版26 1. 井戸114(北東から)
2. 井戸114井戸枠(北東から)
- 図版27 1. 井戸114井戸枠内遺物出土状態
(南東から)
2. 井戸114出土遺物
- 図版28 1. 井戸114井戸枠(W4)
- 図版29 1. 井戸116遺物出土状態(北から)
2. 井戸116完掘状態(東から)
- 図版30 井戸116出土遺物〔1〕
- 図版31 井戸116出土遺物〔2〕
- 図版32 1. 井戸116出土遺物〔3〕
2. 井戸117
- 図版33 1. 土壙103(西から)
2. 土壙113(南西から)
- 図版34 1. 土壙105遺物出土状態(西から)
2. 土壙105出土遺物〔1〕(約1/4)
- 図版35 土壙105出土遺物〔2〕(約1/4)
- 図版36 土壙105出土遺物〔3〕(約1/4)
- 図版37 土壙105出土遺物〔4〕(約1/4)
- 図版38 土壙105出土遺物〔5〕(約1/4)
- 図版39 1. 土壙106(西から)
2. 土壙108(西から)
3. 土壙110(南東から)
- 図版40 土壙114(南西から)・出土遺物
- 図版41 1. 土壙115・116(南西から)
2. 土壙115・116(北西から)
3. 土壙116出土遺物(約1/4)
- 図版42 土壙117遺構検出過程
- 図版43 土壙117出土遺物(約1/4)
- 図版44 1. 土壙128(南から)
2. 土壙128出土はしご状木器
- 図版45 1. 土壙131(南から)
2. 土壙134(東から)
- 図版46 1. 溝101全景(西から)
2. 溝101全景(東から)
- 図版47 1. 溝102B-B'断面(東から)
2. 溝102C-C'断面(西から)
- 図版48 溝102出土石器
- 図版49 溝111・110(左下)・105(右下)出土遺物
- 図版50 1. 溝101上部包含層下層遺物出土状態〔1〕(西から)
2. 溝101上部包含層下層遺物出土状態〔2〕(東から)
- 図版51 1. 溝101上部包含層下層遺物出土状態〔3〕(南から)
2. 溝101上部包含層下層遺物出土状態〔4〕(南西から)
- 図版52 溝101上部包含層下層出土遺物〔1〕(約1/4)

- 図版53 溝101上部包含層下層出土遺物
〔2〕(約1／4)
- 図版54 溝101上部包含層下層出土遺物
〔3〕(約1／4)
- 図版55 溝101上部包含層下層出土遺物
〔4〕(約1／4・約1／2)
- 図版56 溝101上部包含層下層出土遺物
〔5〕(約9／10、約1／2)
- 図版57 1. 井戸118断面(南西から)
2. 井戸118遺構検出過程〔1〕
(西から)
- 図版58 井戸118遺構検出過程〔2〕・
出土遺物〔1〕
- 図版59 井戸118部材
- 図版60 1. 井戸119井筒検出状態
2. 井戸119出土遺物
- 図版61 1. 溝115(南西から)
2. 溝115出土遺物
- 図版62 1. 溝101上部包含層上層遺物出土状
態(北から)
2. 溝101上部包含層上層出土須恵器
- 図版63 1. 溝101上部包含層上層出土土錐
(約1／2)
2. 溝101上部包含層上層出土土馬
(約4／5)
- 図版64 1. 建物108・119(南西から)
2. 建物111(北から)
- 図版65 1. 建物112(北西から)
2. 建物113(東から)
- 図版66 1. 建物114・115(南から)
2. 建物116・117(南から)
- 図版67 1. 建物118(南から)
2. 建物120(南西から)
- 図版68 1. 建物121・122(南から)
2. 建物123・124(南東から)
- 図版69 14～19M～Q区中世遺構群全景(南
から)
- 図版70 1. 1983年度調査区全景(南西から)
2. R区以南調査区全景(南から)
- 図版71 1. 建物126(南から)
2. 建物126・塙101(西から)
- 図版72 1. 建物130・131・132(南から)
2. 建物131柱穴1(左上)・3(左
下)・11(右上)・12(右下)
- 図版73 1. 建物133・134(南から)
2. 建物137(東から)
- 図版74 1. 建物138(南から)
2. 建物137・138・塙103(南から)
- 図版75 1. 調査風景N～R区(北西から)
2. 建物151・152(北から)
- 図版76 1. 建物143～149(南から)
2. 建物143・144・146・塙105・106(南
から)
- 図版77 1. 建物147・149(南から)
2. 建物148・塙107(西から)
- 図版78 1. 14～16P・Q区中世建物群と溝
122(南から)
2. 建物154・155(北から)
- 図版79 1. 建物153(北から)
2. 建物153～160(西から)
- 図版80 1. 建物157(南から)
2. 建物153～160(北から)
- 図版81 1. 建物165(南から)
2. 建物166・167(南から)
- 図版82 1. 井戸120半掘状態(南から)
2. 井戸120検出状態(南から)
- 図版83 井戸120遺構検出過程
- 図版84 1. 井戸121(西から)
2. 井戸122(西から)
- 図版85 1. 井戸122遺物出土状態
(南西から)
2. 井戸122出土遺物
- 図版86 1. 井戸123(北から)
2. 井戸123井戸枠と曲物(北から)
- 図版87 1. 井戸124(南から)
2. 井戸126(西から)・出土遺物
- 図版88 1. 井戸125(南から)
2. 井戸125出土陶硯
- 図版89 1. 井戸127半掘状態(南から)
2. 井戸127井筒完掘状態(南から)・
出土遺物
- 図版90 1. 井戸128・129(西から)・井戸129

- 出土遺物
2. 建物161・162（北から）
- 図版91 1. 井戸130半掘状態（西から）
2. 井戸130完掘状態（西から）・出土遺物
- 図版92 1. 井戸130（西から）・出土遺物
2. 井戸131（北から）・出土遺物
- 図版93 1. 井戸出土の横桟（井戸130・131）
2. 横桟の木組状態
- 図版94 1. 井戸132完掘状態（南から）
2. 井戸132半截状態（南から）
- 図版95 1. 井戸133完掘状態（南から）
2. 井戸133半截状態（南から）
- 図版96 1. 井戸135（東から）
2. 井戸135出土遺物
- 図版97 1. 井戸136完掘状態（北から）
2. 井戸136半截状態（北から）
- 図版98 1. 井戸137完掘状態（東から）・出土遺物
2. 井戸138完掘状態（西から）
- 図版99 1. 井戸139完掘状態（西から）
2. 井戸139半截状態（東から）
- 図版100 1. 井戸134完掘状態（西から）
2. 井戸140完掘状態（西から）・出土串
- 図版101 井戸140出土遺物
- 図版102 1. 井戸141（南から）
2. 井戸141内部（南から）
- 図版103 井戸141出土遺物
- 図版104 1. 土壙141（南東から）
2. 土壙149（西から）
- 図版105 1. 土壙156（南から）
2. 土壙161（西から）
- 図版106 1. 土壙159遺物出土状態（東から）
2. 土壙159出土遺物〔1〕
- 図版107 土壙159出土遺物〔2〕
- 図版108 土壙159出土遺物〔3〕
- 図版109 土壙159出土遺物〔4〕
- 図版110 土壙159出土遺物〔5〕
- 図版111 土壙159出土遺物〔6〕
- 図版112 土壙159出土遺物〔7〕
- 図版113 土壙159出土遺物〔8〕
- 図版114 土壙159出土遺物〔9〕
- 図版115 1. 土壙168（西から）
2. 土壙207（東から）
- 図版116 1. 土壙177（南から）
2. 土壙178（南から）
- 図版117 1. 土壙179（西から）
2. 土壙180（南から）
- 図版118 1. 土壙181（南から）
2. 土壙182（東から）
- 図版119 1. 土壙183（東から）
2. 土壙184（南から）
- 図版120 1. 土壙187（南から）
2. 土壙191（南から）
- 図版121 1. 土壙193（東から）
2. 土壙194（東から）
- 図版122 1. 土壙196石組（南から）
2. 土壙196石組下の土壙（北から）
- 図版123 1. 土壙197（南から）
2. 土壙198（南から）
- 図版124 1. 土壙199（南から）
2. 土壙200（北から）
- 図版125 1. 土壙201（西から）
2. 土壙203（東から）
- 図版126 1. 溝122（東から）
2. 溝122（西から）
3. 溝122 16R区貝塚および遺物検出状態（東から）
- 図版127 1. 溝122 18R区貝塚および遺物検出状態（西から）
2. 溝122 20R区凹地内の呪符出土状態
- 図版128 1. 溝122椀出土状態
2. 溝122下駄出土状態
- 図版129 溝122第3層出土遺物
- 図版130 溝122下層出土遺物
- 図版131 溝122出土遺物
- 図版132 溝122出土遺物
- 図版133 1. 溝123（南から）
2. 溝123木製品出土状況
- 図版134 溝123出土遺物

- 図版135 1. 溝124（西から）
2. 溝124出土遺物
- 図版136 1. 溝125遺物出土状態（北西から）
2. 溝125（北西から）
- 図版137 溝122・125出土遺物
- 図版138 1. 溝131（南から）
2. 溝132・133・134（北から）
- 図版139 1. 池101（北から）
2. 池101茶碗出土状態
3. 池101下駄出土状態
- 図版140 池101出土遺物
- 図版141 百間川米田遺跡出土の人骨
- 図版142 百間川米田遺跡出土の魚類、爬虫類、鳥類および哺乳類
- 図版143 百間川米田遺跡出土のシカ
- 図版144 百間川米田遺跡出土のウシ
- 図版145 百間川米田遺跡出土のウシ
- 図版146 百間川米田遺跡出土のウシ
- 図版147 百間川米田遺跡出土のウシ
- 図版148 百間川米田遺跡出土のウシ
- 図版149 百間川米田遺跡出土のウマ
- 図版150 百間川米田遺跡出土のウマ
- 図版151 百間川米田遺跡出土のイヌの頭蓋骨
- 図版152 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔1〕
- 図版153 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔2〕
- 図版154 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔3〕
- 図版155 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔4〕
- 図版156 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔5〕
- 図版157 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔6〕
- 図版158 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔7〕
- 図版159 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔8〕
- 図版160 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔9〕
- 図版161 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔10〕
- 図版162 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔11〕
- 図版163 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔12〕
- 図版164 百間川米田遺跡出土材同定（昭和62年度）顕微鏡写真〔13〕
- 図版165 百間川米田遺跡出土種子同定（昭和62年度）写真
- 図版166 百間川米田遺跡出土種子同定（昭和61年度）写真
- 図版167 百間川米田遺跡出土材同定（昭和60年度）顕微鏡写真〔1〕
- 図版168 百間川米田遺跡出土材同定（昭和60年度）顕微鏡写真〔2〕

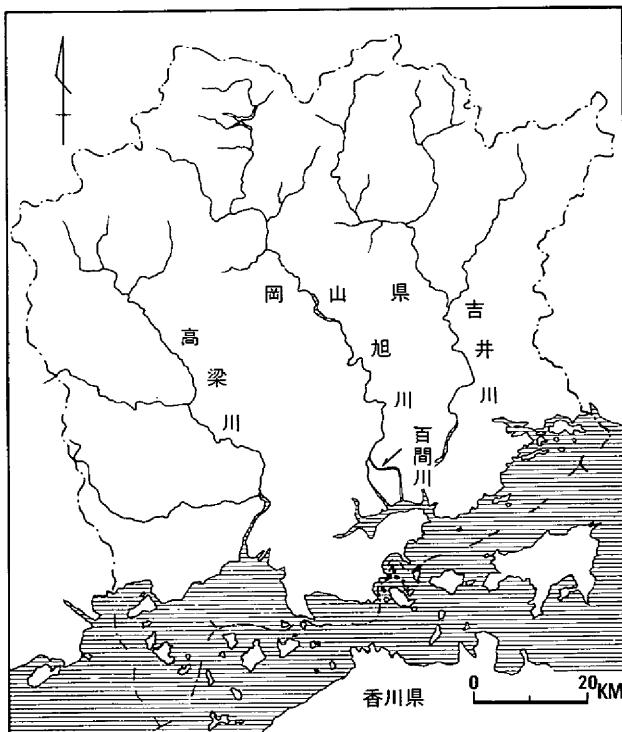
第1章 地理的・歴史的環境

百間川は、江戸時代はじめの寛文9年（1669年）から貞享4年（1687年）にかけて、旭川の放水路として造られた一大人工河川である。

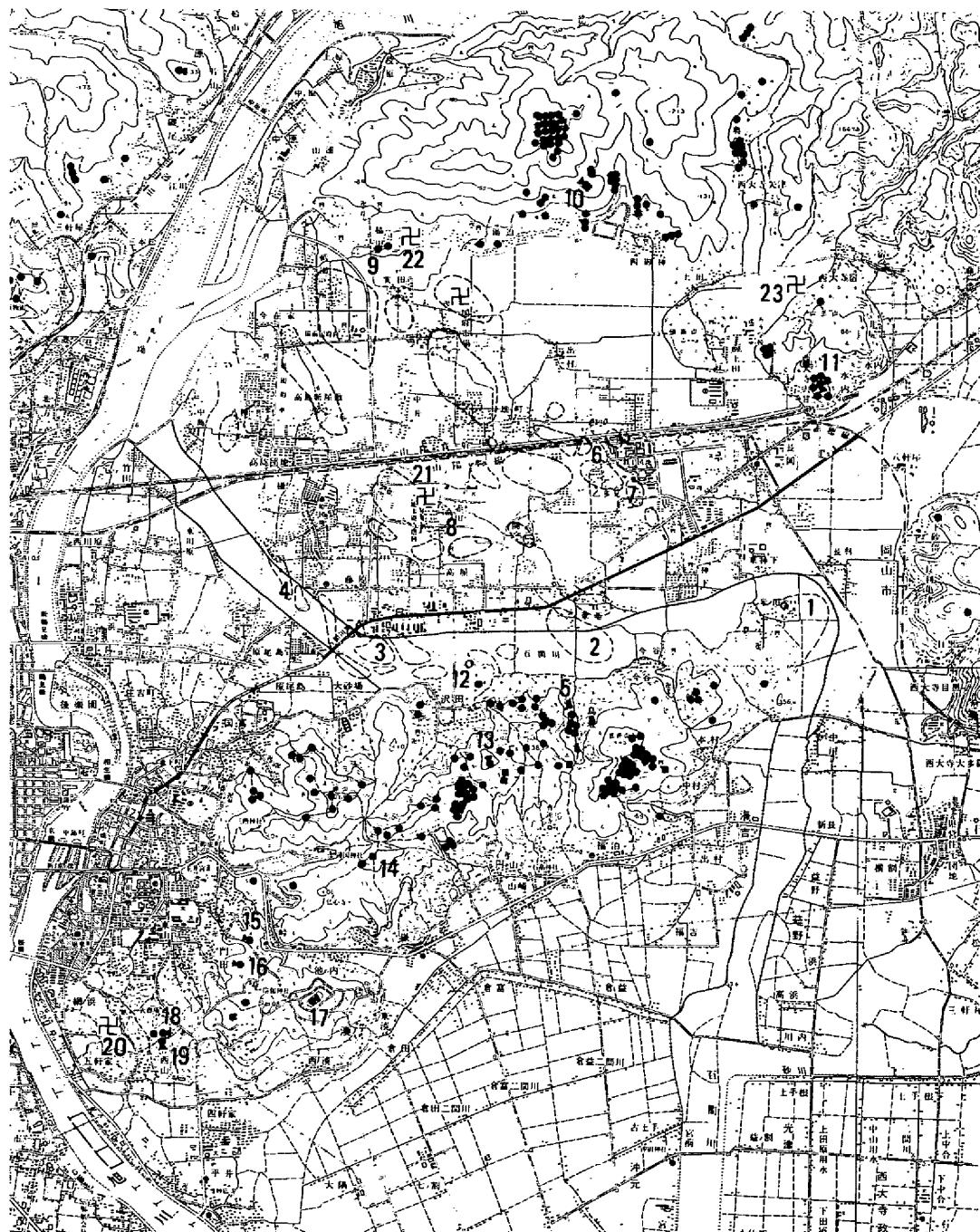
それ以前の旭川は、竜の口山系の西端にあたる岡山市中原付近で平野に流れ出す際に分流し、大きくなれば、現在の流路のように南下するものと、岡山市米田と大多羅町の間の低位部に向かって南東へ流れるものと二つの流れがあったようである。

ところが、岡山城主であった宇喜多秀家が天正18年（1590年）から岡山城の大改築を行い、その際、旭川の流路を城の堀として取り込むために付け替え、ほぼ現在の姿に変えてしまった。この新しい流路は城の北方で大きく屈曲する不自然なものであったため、これ以後、岡山城下は度々洪水の被害を受けることとなった。

この洪水を防ぐために熊沢蕃山や津田永忠により考え出されたのが百間川である。すなわち、岡山城と岡山市中原の中間付近に位置する岡山市竹田付近の東岸堤防筋に、「荒手」と称する洪水の越流堤を設け、ここからあふれ出た洪水を操山の北麓へ導き、そこから山裾に沿って東流させ、やがて操山丘陵の東端である岡山市米田の通称「大曲り」から南流させ、海へ流そうという構想である。この構想は寛文9年（1669年）現実に移され、その後、百間川内には洪水の力を更に弱めたり、沈砂の機能を備えた、第2、第3の「荒手」が築かれ、完成をみたのである。これが現在の百間川までに至っている。百間川にまで名の由来も「二の荒手」の幅が導流堤を含め100間あったことによる（註1）。百間川の流路延長は岡山市



第1図 百間川の位置



1. 百間川米田遺跡 2. 百間川兼基, 今谷遺跡 3. 百間川沢田遺跡 4. 百間川原尾島遺跡 5. 兼基遺跡 6. 雄町遺跡 7. 乙多見遺跡 8. 赤田遺跡 9. 唐人塚古墳 10. 備前車塚古墳 11. 山王山古墳 12. 沢田大塚古墳 13. 金蔵山古墳 14. 旗振台古墳 15. 操山103号墳 16. 操山106号墳 17. 渕茶臼山古墳 18. 網浜茶臼山古墳 19. 操山109号墳 20. 網浜廃寺 21. 幡多廃寺 22. 賞田廃寺 23. 井寺廃寺

第2図 百間川周辺遺跡分布図(1/50000)

竹田から河口の沖元まで約13kmにおよぶ。

百間川の本流である旭川は、吉井川・高梁川とともに岡山三大河川の一つに数えられる。その源は岡山県最北端の蒜山盆地の西南端、朝鍋鷺ヶ山(1081m)に発し、真庭郡川上村をはじめとして、3村・8町・1市を流れ下り、岡山市江並で瀬戸内海に注ぐ。流路延長は142kmに達する。

その上流域は早壯年期の侵食を示す（註2）山容の中国山地内にある。海拔1000～1100mの山々がそびえ、その谷間では古代より製鉄業が盛んに行われた。とくに、江戸時代から明治期にかけては大規模なたら製鉄（註3）が盛行し、これに伴う大量の樹木の伐採は、岡山市における洪水の頻発と密接な関係をもつといわれる。

中流域はかつて隆起準平原の典型といわれた吉備高原一帯で、海拔400～500mの高原を深く削って流れる。この吉備高原の南端にあるのが海拔257mの竜の口丘陵で、その西端から、長い谷を下ってきた旭川はどっと平野へ流れ出す。

このように旭川の流域は山がちで、総面積の82.5%は山地によって占められ、平地はわずか14.7%にすぎない。しかも平地の大部分は岡山平野である（註1）。したがって大量の土砂が侵食によって運ばれ、下流の平野部でいっきに吐き出されることになる。

さてここで、百間川の位置する旭川東岸の平野（以下旭東平野と呼ぶ）について、その地理的な環境をみてみたい。この旭東平野は、地形的にはかなり外界から閉塞された状態にあるといえる。西は旭川が流れ、北には竜の口丘陵、南には操山丘陵が長く横たわっている。この三方向の閉鎖線は強固であり、明瞭な境界線となりうる。これに対して東はやや閉鎖性が弱い。しかし、南東には芥子山を中心とする丘陵があり、北東には穴甘山王山丘陵が北から派生し、この両丘陵の間も低平ではあるが丘陵状を呈している。古代以前においては、一つの地域として認識しやすい地理的条件にあったといえる。

このように、旭東平野は単一地域としてのまとまりをもっているが、他地域との連絡は困難ではない。西では、旭川を渡れば旭川西岸の平野部が続き、20km離れた高梁川まで平野が連続している。東へは、芥子山と山王山の間の小さな谷部を溯れば、幅広く、低い峠を越えて、砂川流域の平野部に出る。この道は現在国道2号線やJR山陽本線が走っている。この平野部からさらに3km程東へ平野部を行けば吉井川に達し、北へ砂川を溯れば山陽町の広い盆地部に至る。また、旭川の水運もあり、その上、操山丘陵と芥子山の間では、干拓以前には海岸線が入り込んでいたと推定されることから、航海船の定泊も不可能ではない。むしろ、旭東平野は交通の要所ともいえる。奈良時代、この平野に国府が置かれたことは、きわめて自然な成り行きであったとも思われる。

この旭東平野には縄文時代以後、数多くの遺跡が形成されるが、その基盤となっている平野

第1章 地理的・歴史的環境

の地学的な構造について略述しておきたい。

百間川遺跡群のうち、原尾島遺跡や沢田遺跡では、微高地を掘り下げると、やがて砂層が現われるが、その上面には腐植物が薄層をつくって一面に堆積している。その面の高度は海拔50cm前後であるが、それに連なると考えられる腐植物を資料として、広島大学の協力で¹⁴C年代測定を試みたところ 6005 ± 105 y.B.P. (HR-095) の年代を得た。これに対しては、この腐植物の載った砂層が縄文海進最盛期の三角州堆積物とみなされている（註4）。

前述のように、旭川は長い丘陵地帯を侵食して深い河谷を形成し、岡山市中原で一気に平野部へ注ぐ。このため、この地点で扇状地を形成し、その末端からは低平な三角州地帯を生じる。旭東平野では、中原付近を頂点とし、東南方向へ緩く傾く扇状地が形成され、その末端は4mの等高線付近にあたる。このため、この付近には国府市場・雄町・清水などの湧泉が分布するという（註4）。扇状地の末端から海側は三角州低地になっているが、この三角州地帯が弥生小海退に伴う浅谷の開削作用を受け、分断されたものが微高地となっていて、自然堤防の微高地とは異なるとされる。（註4）。この三角州の微高地上に遺跡が展開する。

なお、JR赤穂線以東の上道地区や平野北東部の東岡山地区は旭川の堆積作用が及ばないため、広範囲に後背湿地が残っていたとされる（註4）。

地理的環境についての説明はこれで終わり、次に、歴史的環境について述べることとする。

旭東平野周辺で確認されたもっとも古い遺物として、操山旗振台北遺跡（註5）出土のナイフ型石器がある。後期旧石器時代のもので、旧石器時代の遺物としてはこれのみが付近で確認されたものである。

縄文時代の遺跡としては、これまで旭東平野では、百間川遺跡群の調査の端緒となった、国道2号線百間川橋建設工事の際の縄文土器の出土と雄町遺跡（註6）出土の晩期の土器しか知られていなかった。しかし、改修工事に伴う発掘調査の進行によって、次々と新しい事実が発見され、今や、百間川の各地から縄文土器の出土が相続している。もっとも古いものでは沢田遺跡の旧河道から出土した中期の土器片が2片ある（註7）。これについては磨滅が激しいため、また旧河道からの出土ということもあって、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性を考えられる。しかし、同じく沢田遺跡から出土した後期終末の凹線文土器（註7）については大形の破片で磨滅もなく、この付近での居住が推測されることになった。1984年度には百間川橋下の微高地内から、一定の範囲でやはり後期終末の土器片の散布が確認された。そして1987年度には、沢田遺跡の東端の丘陵裾部から微高地上にかけて、多量の後期後半の彦崎KII式土器片の散布がみつかり（註8）、その包含層の下では貯蔵穴も確認されたことから、この時期からすでに低地部への人々の進出がみられ、定住が始まっていたことが明らかになった。

縄文時代晩期の遺物は雄町遺跡をはじめ、百間川遺跡群すべての遺跡から出土している。な

かでも、百間川沢田遺跡からは多量の出土があり、これに伴って、サヌカイト製の打製石鋤や石庖丁形打製石器の出土がみられ（註9）、農耕の開始を遺物の面から裏付けようとしている。これに対して、水田や堰等の遺構は今だ検出されず、旭東平野における水稻耕作の開始は今だ弥生時代前期中葉から溯りえていない。

弥生時代前期の遺跡は縄文時代晩期から続くものが多い。旭東平野では雄町遺跡・百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡・百間川米田遺跡などが知られているが、やはり、百間川遺跡群の調査の進展により、新しい事実が判明している。

1984年度には百間川原尾島遺跡で前期後半の水田が検出されたが、1986年度には百間川沢田遺跡でやはり前期の水田が2面重なって検出され（註10）、下層のものは前期の中葉ではないかと考えられている。これら前期の水田は地形のたわんだ部分に作られたものが多く、全体に等高線に平行した方向に長くなる傾向があり、後期の方眼状の規格化された形状とは大きく異なる。また水田面積も小さいようである。

百間川沢田遺跡では前期中葉の環濠集落が確認された（註11）。幅4m、深さ2mの環濠を、90×100mの卵形にめぐらせた集落で、環濠の内側から竪穴住居4軒、円形周溝遺構2基が検出された。岡山県内では初の確実な検出例であり、今後の類例が注目される。

また、百間川原尾島遺跡の旧河道では、前期の杭列が水路を横断する形で10mにわたって打ち込まれているのが確認され、かなり大規模な灌漑土木事が実施されていたことが明らかとなった（註12）。

このように、旭東平野では、すでに弥生時代前期にはかなり大規模な水田経営が行なわれていたことが考えられ、その力を生みだす人的結合も進んでいたことが想定される。それに対して、環濠集落の存在がどういう意味をもつのか、今後検討されるべき課題である。

弥生時代中期の遺跡は前述の遺跡の他に、赤田遺跡（註13）、乙多見遺跡（註14）などがある。赤田遺跡では高杯形土器で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川遺跡群の中では百間川兼基・今谷遺跡が中心的な位置を占めるようになり、多くの遺構や遺物が集中して出土している（註15）。なかでも、多量のガラス溶滓や20数棟にもものぼる掘立柱建物の存在は注目され、ガラス工房の可能性も考えられている。この遺跡の南に位置する操山丘陵の谷部からは3個の銅鐸が出土していて（註16）、これとの関連も注意される。

弥生時代後期になると遺跡の数はさらに増加するが、それと同時に、微高地間には水田がびっしりと展開し、今日と変わらぬ風景がみられるようになる。この水田は百間川の外へも当然続いていくもので、藤原遺跡（註17）の調査などでも確認されている。百間川遺跡群の中では百間川原尾島遺跡が母村的な大規模集落に成長し、各居住跡からガラス小玉や銅鏡などの優秀な遺物を出土している。また、周溝をめぐらせた住居なども検出されている。原尾島遺跡はその

後も長く、中心集落としての姿を保っていく。

弥生時代の最終末には、あたかも古墳時代の到来を招くかのように、大洪水が旭東平野を被りつくす。百間川遺跡群内の各所で厚い洪水砂の堆積が確認されている。

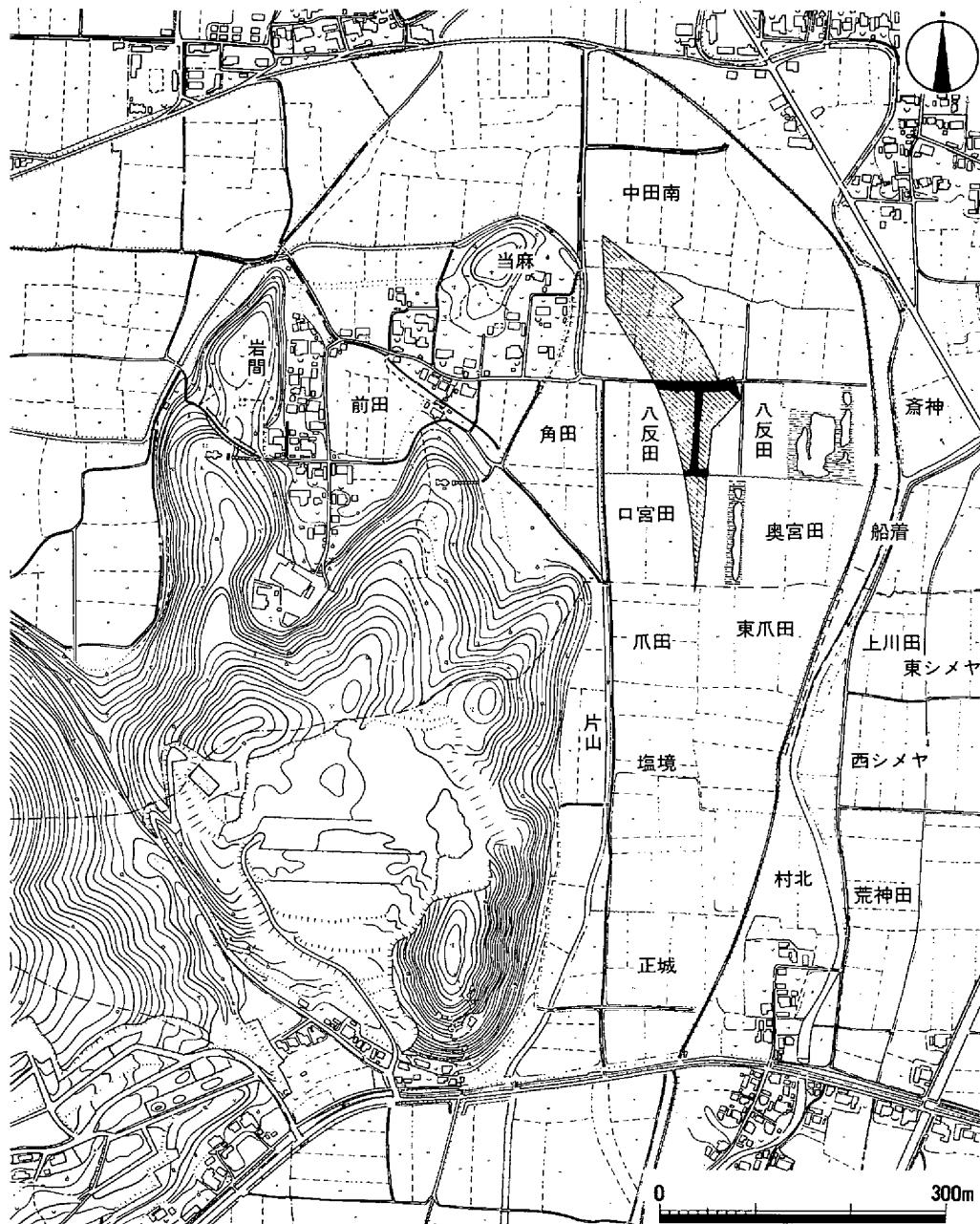
古墳時代の象徴である前方後円墳は旭東平野の周縁の丘陵にも多く築造されている。なかでも、操山丘陵では、特殊器台形埴輪の出土が知られている網浜茶臼山古墳（全長74m）（註18）や操山109号墳（全長74m）（註19）に始まり、湊茶臼山古墳（全長150m）（註20）、そし金蔵山古墳（全長165m）（註21）と続く、首長墳の系譜がたどられ、まさに旭東平野に君臨した首長の奥津城にふさわしい。これに対して、三角縁神獣鏡11面を含む、総数13面の鏡を出土し、小林行雄氏の「同范鏡論」（註22）の中で重要な位置を占める、竜の口丘陵の独立墳、備前車塚古墳（註23）は、吉備の最古式古墳の中で例外的に特殊器台形埴輪をもたず、その孤立性が注意されていたが、最近では、豎穴式石室の使用石材からも、その特異性が指摘されている（註24）。

古墳時代の集落遺跡は弥生時代後期からさらに増加するようである。方形の住居が一般的となり、やがて5世紀の末からはカマドが造りつけられるようになる。掘立柱建物の住居も登場するようで、それぞれの集落で定着の動きがみられる。百間川沢田遺跡では、多くの井戸が掘られ、1軒の住居が1基の井戸を所有することが考えられるという（註25）。

飛鳥・奈良時代の代表的な遺跡は寺院跡である。旭東平野でも賞田廃寺（註26）幡多廃寺（註27）・井寺廃寺の存在が知られている。このうち前の2廃寺は発掘調査が実施され、いずれも奈良時代の盛期には壇上積基壇で整備され、奈良三彩などの優秀な遺物を出土していることから、これらの寺院の檀那であった氏族（おそらく上道氏）が、中央政府ときわめて強い関係にあったことが知られる。また、この三ヵ寺の建築・修復時期を考えると補完関係にあることが指摘され（註28）、これら三ヵ寺それぞれの建立者である氏族が互いに強いきずなで結ばれていたことが想定されている。

奈良時代にはこの旭東平野に備前国府が置かれていたといわれている。しかし、その所在地には諸説があり（註29）、いまだ明らかにはされていない。しかし、これを傍証するかのような資料として、百間川米田遺跡における倉庫群（註30）と百間川原尾島遺跡の人形、斎串等の出土した溝跡（註31）がある。前者は「上三宅」と墨書きされたり、「官」の字を押した須恵器が出土して、官衙関連施設の可能性が強く、国府の物資積み出し港かともいわれている。後者は「祓」の儀式をとり行なった場所ではないかといわれ、国府の辺境という位置から、この地が選ばれたのではないかと考えている。

なお、奈良時代の文献資料として著名な『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（天平19年（747年）には、備前国の水田の記載があり、その中に「上道郡五十町 大邑良葦原東山守江 西石間江南海 北山」（註32）という字が見られる。この「大邑良」を現在の「大多羅」に、「石間」を



斜線部分は今回報告の調査区 黒塗りは大溝(溝122~125)

第3図 百間川米田遺跡周辺地形図(1/7500)

現在の「岩間」に比定する考えがある。この考えに立てば、百間川米田遺跡は、芥子山の南麓付近にあった大安寺領と隣接していたこととなる。

平安時代以降の旭東平野の状況はあまり明確ではないが、百間川原尾島遺跡からは多量の輪入陶磁器を含む中世遺物が出土し、近年の発掘では規格された集落の一部が明らかになってい

第2章 調査の経緯

る(註33)。また百間川米田遺跡では、すでに多量の畿内産瓦器が出土し、その活発な交流が知られている。

(岡本寛久)

註

- (註1) これらの歴史については『百間川小史』建設省・岡山県・岡山市 1986年 に負うところが多い。
- (註2) 光野千春・沼野忠之・高橋達郎『岡山の地学』山陽新聞社 1982年
- (註3) 柳瀬昭彦他『奥土用・神庭谷製鉄遺跡』中国電力俣野川発電所埋蔵文化財発掘調査委員会 1986年
- (註4) 藤原健蔵・白神宏「岡山平野中部の沖積層と海水準変化」『瀬戸内海地域における完新世海水準変動と地形変化』藤原健蔵(広島大学文学部) 1986年
- (註5) 鎌木義昌「第1編 原始時代」『岡山市史・古代編』岡山市 1962年
- (註6) 高橋護・正岡睦夫他「雄町遺跡」「埋蔵文化財発掘調査報告」岡山県教育委員会 1972年
- (註7) 岡田博・浅倉秀昭・二宮治夫・中野雅美・内藤善史他「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」岡山県教育委員会 1985年
- (註8) 『岡山県埋蔵文化財報告18』岡山県教育委員会 1988年
- (註9) 『岡山県埋蔵文化財報告14』岡山県教育委員会 1984年
- (註10) 『所報 吉備』第2号 岡山県古代吉備文化財センター 1987年
- (註11) 『岡山県埋蔵文化財報告18』岡山県教育委員会 1988年
『百間川の遺跡群』岡山県古代吉備文化財センター 1989年
- (註12) 河本清「百間川遺跡群 水田跡が語る稻作技術」「原像日本⑤発掘と復元」旺文社 1988年
- (註13) 出宮徳尚・根木修・間壁忠彦・間壁葭子・水内昌康『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 1975年
- (註14) 正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴なう出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告3』岡山県教育委員会 1973年
- (註15) 正岡睦夫・下澤公明・高畠知功・内藤善史他「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」岡山県教育委員会 1982年
- (註16) 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」「日本農耕文化の生成」 1961年
- (註17) 高畠知功「IX. 発掘調査報告(1) 藤原遺跡」「岡山県埋蔵文化財報告16」岡山県教育委員会 1986年
- (註18) 宇垣匡雅「竪穴式石室の研究—使用石材の分析を中心に—」『考古学研究』第34巻第1号・第2号 考古学研究会 1987年
- (註19) (註18) と同じ
- (註20) 近藤義郎「湊茶臼山古墳」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県 1986年
- (註21) 西谷真治・鎌木義昌「金蔵山古墳」倉敷考古館 1959年
- (註22) 小林行雄「古墳時代の研究」青木書店 1961年
- (註23) 近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」「岡山県史」第18巻 考古資料 岡山県 1986年
- (註24) (註18) と同じ
- (註25) 中野雅美「弥生・古墳時代初頭の井戸」「考古学と関連科学」鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会 1988年
- (註26) 出宮徳尚・伊藤晃・水内昌康「貴田廃寺発掘調査報告」岡山県教育委員会 1971年
- (註27) (註13) と同じ
- (註28) (註13) と同じ
- (註29) 高橋護「古地形からみた備前国府」「岡山県埋蔵文化財報告1」岡山県教育委員会 1971年
- (註30) 井上弘・岡田博・二宮治夫・光永真一他「百間川当麻遺跡2」岡山県教育委員会 1982年
- (註31) 『所報 吉備』第6号 岡山県古代吉備文化財センター 1989年
- (註32) 『岡山県史』編年資料 岡山県 1988年 67ページ 147号文書
- (註33) 『岡山県埋蔵文化財報告19』岡山県教育委員会 1989年

第2章 調査の経緯

第1節 発掘調査の契機

旭川放水路（百間川）の工事が具体化するに伴い、百間川内に所在する遺跡の取り扱いが重要な問題となってきた。百間川内には、数個所の土器出土地点が知られていたものの、具体的な遺跡の広がりは不明であった。そこで、遺跡の範囲の確定と、それに伴う発掘計画の策定のために、グリッドによる確認調査を実施することとなった。この確認調査は、昭和51年11月より着手された。

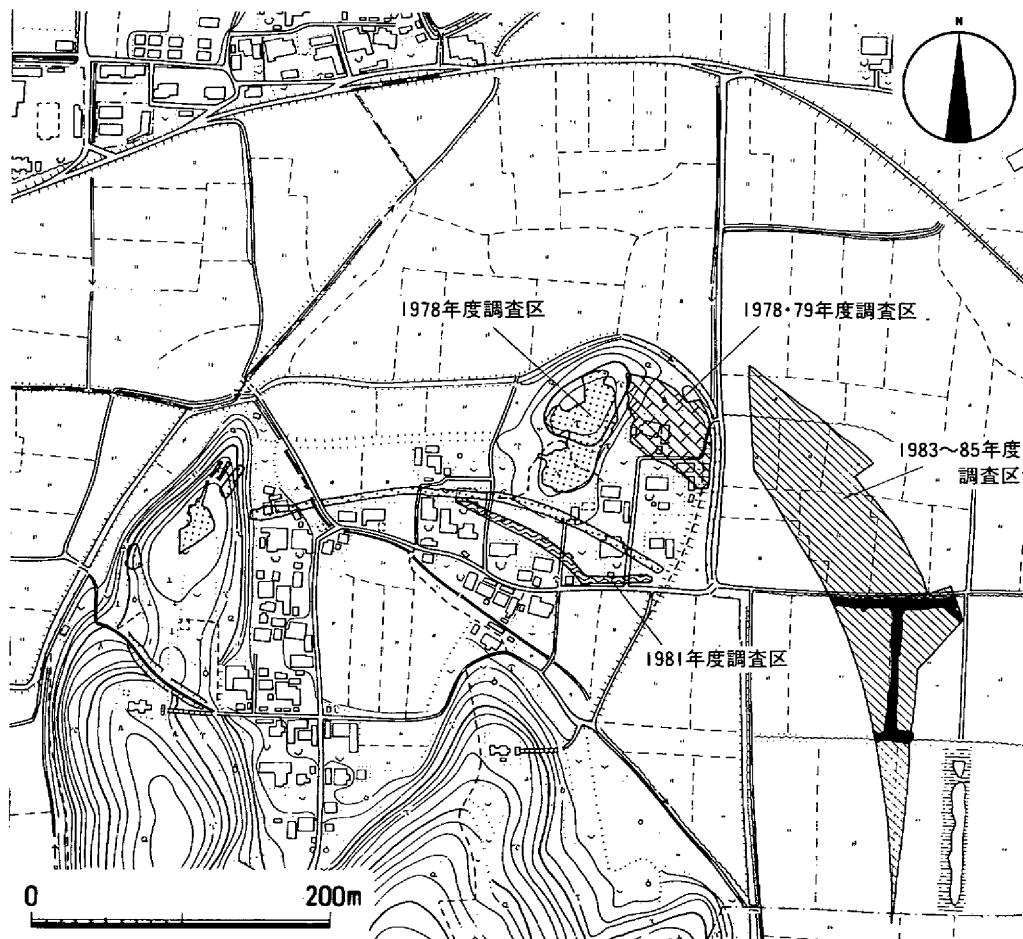
昭和51年度に実施した第一次調査では、米田付近は海砂が確認され、古代の海岸線であろうとされた。この第一次調査は、岡山市竹田から、中川橋付近まで100m間隔で調査するものであった。さらに川の中央部の低水路を中心とする確認調査であった。そのため、低水路部分の概略を知り得たのである。その結果として、米田付近は、先のように結論づけられ、遺跡の無いとされた部分の低水路は掘削工事が着工された。

第一次調査の結果に基づき、昭和52年度から本格的に調査が実施された。調査が本格化すると同時に、工事も本格化し、用水路の工事がまず急がれることとなった。第一次調査においては、低水路部分についてはほぼ判明しているものの、右岸側については、今だ不明な部分もあるため、昭和52年5月6日から、5月25日にかけて確認調査を実施した。この結果に基づき、昭和53年度中に用水路工事が完了することを目標として右岸用水路の調査を実施した。米田遺跡は、昭和52年度の確認調査において遺跡の存在が確認されたものである。確認された当初は、用水路部分の調査のみで完了するものと考えられていた。しかし、本格的調査が進行するなかで、当麻地区に存在した小丘陵の裾に検出した溝から多量の埴輪片が出土した。それらの埴輪が一次的に存在した場所を考えると、用水路北側に所在する小丘陵上に古墳が存在したとするのが最も妥当と考えられるに至った。この小丘陵は工事により削平されるため、右岸用水路の調査中に丘陵部の確認調査を実施した。その結果、丘陵上に遺跡の存在することが認められ、右岸用水路の調査終了後に丘陵部の調査に着手した。また、右岸用水路の調査結果を基に、用水路の北側、丘陵部の東側が一部低水路になることもあって、遺構の存在の有無が問題となつた。そこで、丘陵部の調査中に確認調査を実施したところ、遺構の存在が認められ、遺跡の範囲は、ほぼ旧堤防より南側の部分と推定された。調査は、丘陵部の調査が終了すると、それに続き昭和53年12月から調査が実施された。調査が進行するに従い旧堤防の下にも遺跡が広がる

ことが明らかとなり、遺跡全体の広がりが問題となった。

低水路部分の調査中に、米田地区低水路の右岸側の掘削工事が行われた。そこで、遺跡の範囲を確認するため、掘削された法面を観察した。全体の法面は観察できなかったが、井戸状遺構（本報告書の井戸112・113）を発見したため、トレンチによる確認調査を実施することとした。トレンチ調査の結果、米田遺跡グリッドのRラインより北側においては、耕作土直下において柱穴等の遺構を確認した。Rラインより南側においては、約30m南までは、北側で検出した地山層を確認したため、その付近までは遺跡が広がるものと想定され、今回の低水路部分の調査が実施されることとなった。

（井上弘）



第4図 百間川米田遺跡既調査区位置図(1/5000)

第2節 過去の調査結果

米田遺跡の調査は、右岸用水路の調査から本格的となった。昭和53年度に調査を実施した用水路の調査区は、幅6mで延長約240mである。調査の結果、東端と西端において、遺構の密度は薄いものの、全体的には多くの遺構を検出した。検出した遺構の時代としては、弥生時代末から江戸時代にかけてのものである。中でも、最も多く検出したものは、中世にかかる遺構である。

弥生時代の遺構としては、溝、竪穴住居がある。住居は、西半が削平されているため、全体の規模は不明であるが、床面に炭化物、焼土等が散在しており、火災住居跡の可能性が強い。

古墳時代の遺構としては、竪穴住居がある。一辺約2.8mを測る方形の住居跡で、先に述べた弥生時代の住居跡と重複して検出した。

奈良・平安時代と考えられるものは、溝を調査している。

この調査区で、最も多く調査した遺構の時代は、中世に属するものである。この時期のものとしては、井戸4基、溝、墓等である。墓は、備前焼大甕を使用したもので、古銭41枚が出土している。井戸は、石組みのものと素掘りのものを調査している。特に、井戸ー3とする素掘りの井戸からは、竹製の横笛と共に、土師器、瓦器が多く出土している。土師器椀は、岡山県南部で造られたと推定されるものである。また、同じく県南部で作られたと推定される須恵器椀等と共に、畿内和泉地方で作られたと推定される瓦器椀が出土している点が注目される。溝状遺構（D-25）からは、多量の埴輪片が出土している。埴輪の種類は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、楯形埴輪等が出土している。

これ等埴輪が出土したことにより、その埴輪の一次的所在地が問題となった。この埴輪を出土した溝の北側には小丘陵があるため、この丘陵上に古墳があったものとして、丘陵上に確認の調査を実施し、右岸用水路の調査に引き続き調査を実施した。検出した遺構は、建物4棟、柵列2列、堀状遺構3条、土壙墓6基である。建物・柵列は、室町時代～江戸時代、堀状遺構は、室町時代、室町～江戸時代、江戸時代後期のものがある。土壙墓は、いずれも江戸時代のものである。丘陵部で検出した遺構は以上のものであり、古墳は検出されなかったことから、それ等の遺構の造られる時に破壊されたものと考えられる。

低水路の調査では、弥生時代前期から江戸時代にかけての遺構を検出した。調査した遺構は、溝、土壙、井戸、住居跡、建物、墓壙等である。弥生時代の遺構としては、前期後半と、後期後半のものがある。前期のものは、溝を調査した。溝は、逆台形に掘られたもので、東西方向のものと南北方向のものを検出した。後期のものは、径7.2mを測る円形の住居跡、土壙、壺棺

第2章 調査の経緯

墓等を調査した。古墳時代のものとしては、住居跡、井戸、溝等である。住居跡は方形を呈するものである。溝は6本までを確認した。井戸は4基を調査した。いずれも素掘りの井戸であり、断面で見ると、底面から上方に向けて開くものと、下半は垂直に掘られ、上半は外方に開くものがある。調査した古墳時代の遺構は、古墳時代前期のものである。

古代の遺構としては、建物13棟を検出した。この建物群は、全体的に企画性が見られ、5グループに分けられる。6棟の建物が総柱建物である等の特徴が見られ、倉庫群の一部と推測された。また「官」の字の左文字が押印された須恵器が出土しており、官衙的性格が強い。

中世の遺構としては、建物7棟、井戸2基、土壙や溝2本、土壙墓1基等を調査した。建物は、7棟のみを確認したが、柱穴は多数検出し、遺物も多量に出土している。

この低水路部分の調査は、丘陵部の調査終了後、引き続き調査を実施した。調査期間は、昭和53年10月1日～昭和54年9月30日である。

右岸用水路の調査は、昭和53年度に完了していたが、その後地元との協議で設計変更がなされた。そのため、変更区間を昭和56年4月1日～5月31日の間で調査した。弥生時代の遺構としては、溝を調査した。古墳時代のものとしては、土壙、土器溜りを調査した。奈良時代としては、掘立柱建物等を調査しており、低水路で調査した遺構との関連が強い。また銅製帶金具、「上三宅」墨書き土器が出土しており、官衙の可能性はさらに強くなった。中世のものは、柱穴、溝等と共に多量の遺物を出土しており、中世この地区が隆盛であったことを推測させる。

(井上)

参照文献

- 『百間川遺跡第一次調査概報』 岡山県教育委員会 1977年3月
- 『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ 百間川原尾島遺跡1』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1980年11月
- 『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査II 百間川沢田遺跡1 百間川長谷遺跡百間川岩間遺跡 百間川当麻遺跡1』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1981年11月
- 『百間川当麻遺跡2 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査IV』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1982年11月

第3節 調査の体制

旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受け、昭和52年度から実施している。実施初年度は調査員6名（3班）で調査を開始したが、次年度よりは12名（6班）と倍増され、戦後の最大流量に耐えることを目標とした第1期工事の完成に向け、主力を注ぐこととなった。昭和56年度で第1期工事分の発掘調査が終了したため、翌57年度からは再び調査員6名（3班）と体制を縮小したが、この時にはすでに、本州四国連絡橋と山陽自動車道という大規模プロジェクトが盛期にかかり、新たに広大な発掘調査対象地を産み出していた。教育委員会の主力は百間川から山陽自動車道に移されるかたちとなった。昭和61年度に山陽自動車道倉敷ジャンクション～岡山ジャンクション間の調査に入ることとなったが、さらに膨大な調査面積が確認されたため、昭和62年度より百間川の発掘調査体制はさらに縮小され、調査員3名（1班）で継続されることとなり、現在に至っている。

発掘調査の実務は調査開始から岡山県教育府文化課が主管してきた。しかし、昭和59年11月に、従来から発掘調査の基地的な性格にあった文化課分室が教育委員会の一機関として独立し、岡山県古代吉備文化財センターになったことに伴い、発掘調査そのものは岡山県古代吉備文化財センターが担当することとなった。

なお、調査の専門的な指導および助言を得るために、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

以下、今回の報告書の掲載対象となっている百間川米田遺跡を発掘調査した、昭和58・59・60年度の調査体制を記す。

旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

池葉須藤樹	犬島中学校校長	鎌木義昌	岡山理科大学教授
近藤義郎	岡山大学教授	角田 茂	岡輝中学校教諭
出宮徳尚	岡山市教育委員会文化課 文化財係長	水内昌康	岡山女子看護専門学校教頭

昭和58年度

岡山県教育府文化課 課 長	早田憲治	課長代理	橋本泰夫
------------------	------	------	------

第2章 調査の経緯

課長代理	吉本唯弘	文化財主幹	高原健郎
課長補佐	河本 清	主任	遠藤勇次
文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）	文化財保護主事	平井 勝（調査担当）
文化財保護主事	古谷野寿郎（調査担当）	文化財保護主事	江見正己（調査担当）
主 事	榎原充二	文化財保護主事	山本明雄（調査担当）
主 事	岩崎仁司（調査担当）		

昭和59年度（4月1日～10月30日）

岡山県教育庁文化課

課 長	松元昭憲	参 事	橋本泰夫
課長代理	逸見英邦	課長代理	吉本唯弘
文化財主幹	佐々木清	課長補佐	河本 清
主任	古瀬 宏	主任	遠藤勇次
文化財保護主査	井上 弘（調査担当）	文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）
文化財保護主事	平井 勝（調査担当）	文化財保護主事	岡本寛久（調査担当）
文化財保護主事	江見正己（調査担当）	主 事	榎原充二
文化財保護主事	平井泰男（調査担当）	文化財保護主事	山本明雄（調査担当）
主 事	宇垣匡雅（調査担当）		

昭和59年度（11月1日～3月31日）

岡山県教育庁文化課

課 長	松元昭憲	課長代理	逸見英邦
課長代理	吉本唯弘	課長補佐	河本 清
主任（兼）	遠藤勇次		

岡山県古代吉備文化財センター

所 長（兼）	松元昭憲	次 長	橋本泰夫
総務課長	佐々木清	調査課長（兼）	河本 清
主任	古瀬 宏	主任	遠藤勇次
文化財保護主査	井上 弘（調査担当）	文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）
文化財保護主事	平井 勝（調査担当）	文化財保護主事	岡本寛久（調査担当）
文化財保護主事	江見正己（調査担当）	主 事	榎原充二

第3節 調査の体制

文化財保護主事 平井泰男（調査担当） 文化財保護主事 山本明雄（調査担当）

主 事 宇垣匡雅（調査担当）

昭和60年度

岡山県教育庁文化課

課 長 松元昭憲（4月1日～12月15日）

課 長 高橋誠記（12月16日～3月31日）

課長代理 逸見英邦 課長代理 吉本唯弘

埋蔵文化財係長 正岡睦夫 主査（兼） 遠藤勇次

岡山県古代吉備文化財センター

所 長（兼） 松元昭憲（4月1日～12月15日）

所 長（兼） 高橋誠記（12月16日～3月31日）

次 長 橋本泰夫 総務課長 佐々木清

調査課長 河本 清 主 査 遠藤勇次

文化財保護主査 井上 弘（調査担当） 文化財保護主査 柳瀬昭彦（調査担当）

主任 花本静夫 文化財保護主任 平井 勝（調査担当）

文化財保護主事 岡本寛久（調査担当） 文化財保護主事 江見正己（調査担当）

主 事 楢原充二 主 事 宇垣匡雅（調査担当）

最後になりましたが、酷暑の夏、厳寒の冬、日々発掘調査に従事され、調査員を助けて数々の成果を共にされた作業員の方々の氏名を次に記し、深く感謝申し上げます。

赤城久夫 尾松代吉 佐々木和勲 松本友彦 笹田誠 松本包房 岡崎洋子

伍賀芳子 坂本由美子 西崎宏子 藤田光子 難波靖代 赤木輝吉 遠藤明雄

大森善太郎 岡本汎 小西修 畑本敏男 籠井英夫 石田美美子 入江美代子

国塙志保里 中村初子 服部勝得 服部美登利 兵藤きよ子 大前仁介

佐野雅男 新開清 永井巳之助 服部弘 松本三郎 成本和繁 出原喜美子

新名定子 津島健子 原年子 原住子 明坂善美 加藤勢津子 石浜常夫

国重正武 西郷安夫 藤原勝治 山田道夫 鈴木順一 岡本孝 楠見静子

西崎知子 野崎千珠子 藤田球江 岡本喜代子 榊原未美 石田義人 橋本基

富田孝行 内田賢二 吉永京市 山下誠 藤本順一 (敬称略 順不同)

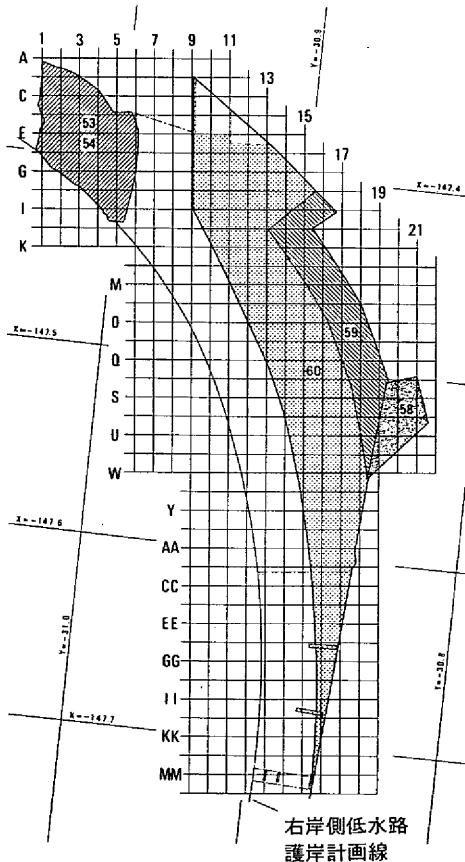
第4節 調査の経過

米田遺跡は、当初小字当麻にのみ遺跡の広がりが認識されていたが、当麻の東から南にかけての小字中田南、八反田、口宮田などの低水路掘削予定部分にも遺跡が大きく広がることがわかり、発掘調査に至ったことは第1節のとおりである。この地区の調査は、掘削工事の工程との絡みで、まず昭和58年度調査として、水路側に台形につき出した部分約1200m²について実施した。昭和59年度には、低水路右岸の計画予定線から約60m地点までの一部約3000m²、引き続いて昭和60年度には、同様に約30m地点までの工事用道路下を除く約9000m²を対象にして、それぞれ調査を実施したものである。

調査のためのグリッド設定は、昭和53・54年度の10mグリッドを踏襲し、それを東および南に延長して使用した。また、前回調査のグリッドは任意に設定されていたため、昭和61年度の測量委託事業で国土座標との関係を求め、第5図の位置関係を得ている。

これらの調査のうち、昭和60年度の対象地区は、グリッドのWラインまでとしていたが、調査の進む7月の時点で、Rラインに沿って検出された溝122のほぼ中央からT字形に派生する溝123が、Wラインよりさらに南に伸びることが判明した。そのため、協議のうえ8月中旬に遺構の南端を明確にする目的で、W～MMライン間の5カ所について幅2m、長さ5～15mのトレンチを設定し、掘下げた。その結果、溝123はAAラインまで伸び、さらに直交する東西方向の溝124の存在も判明した。それらの結果をもとに、W～MMの範囲のうちW～BBまでは、昭和60年度調査分に加えて全面調査を実施したものである。

なお、CC～MM間のトレンチからもわずかではあるが中世遺物の出土が認められたので、遺物包含層下のレベルで表土剥ぎを行ったが、遺構は確認されていない。ただ、今回調査の対象地からは除外されるMMライン付近には、断



第5図 調査範囲およびグリッド設定(1/4000)

第4節 調査の経過

面観察によって幅約3m、深さ約1mの東西方向の溝が確認されているので、少なくともその溝を含む幅約8mの範囲と、Dライン～B B + 3mラインまでの低水路掘削予定部分については、今後の調査対象となる。

また、調査対象範囲は最終的に3つの小字にわたることが判明したが、遺跡としては一連のものであり、とくに小字を調査区名としては扱わず、調査の単位はグリッドによって進めた。

以下に調査経過の概略を記す。

昭和58年度 担当調査員（平井勝・古谷野寿郎）

8月17日 調査開始

9月27日 百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員会

12月10日 調査終了

昭和59年度 担当調査員（井上弘・平井泰男）

12月4日 調査開始

1月23日 百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員会

3月28日 調査終了

昭和60年度 担当調査員（1班：柳瀬昭彦・宇垣匡雅、2班：井上弘・岡本寛久、3班：平井勝・江見正己）

4月10日 1～3班調査開始

7月16日 百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員会

10月8日 百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員会

10月9日 1班B～J区調査終了

12月6日 3班R～B B区調査終了

12月17日 百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員会

1月11日 2班K～S区調査終了

(柳瀬昭彦)

第3章 調査の概要

第1節 調査区の概要

百間川米田遺跡は岡山市米田に所在する。

現在の旭川は岡山平野をほぼ南北につらぬいて南流しているが、かつては龍の口丘陵の西側で流路が分岐して南東方向に流れていたと考えられている。この分流は操山丘陵の東端部をめぐるように屈曲して後、南流して内海に注いでいたとみられ、また、操山丘陵の東側付近で別に北東方向から流下してくる小河川が合流していたと考えられる。

この旭川の分流の堆積作用によって、操山丘陵の東端には広い微高地（自然堤防）が形成されており、それは西側の操山丘陵の山麓に接続している。百間川米田遺跡はこの部分にひろがっており、今回の調査区は微高地（自然堤防）部分である。

調査区の北端、F区付近から北側は微高地の北側にひろがる低位部となり、植物遺体を含む砂層、粘土層の堆積が認められる。F区よりも南側が微高地部となり、南側にむかって徐々に高さを減じてゆく。この微高地の東側へのひろがりは明らかではないが、東側にむかって下降する状況が認められないことからすれば、かなりのひろがりをもつものであったと考えられ、河道は東側の芥子山丘陵に接して位置していたのではないかと思われる。

調査区は百間川堤防の東側に位置し、長さ280m、幅60mの南北に長い不整形である。

海拔1.4m付近が近・現代の水田面であり、水田層の厚さは15cmを測る。調査区北部は水田の造成によって削平を受けているため、水田層下が遺構面である黄色粘性砂質土～灰白色粘土となり、G区で海拔1.25mを測る。調査区中央部の14L区においては水田層下には厚さ10cmの中世包含層、灰褐色砂質土があり、その下が基盤層、黄白色粘土となる。中世遺構面の高さは海拔1.3mを測る。また、調査区南部のS区付近では、調査区中央部南側を東西に走る農道を境にして、そこから南側の水田が下がっていたため包含層はほとんど認められず、耕土層下が基盤層、灰褐色粘質土となる。中世遺構面の高さは海拔1.1mであり、調査区南端L区ではさらに下降して0.9mになる。

本来高かった調査区北部は、水田の造成による削平を最も被るかたちになっており、さらに工事による攪乱・削平を幅20m、長さ50mにわたって受けていたため、遺構の遺存状況は良くないが、弥生～奈良時代を中心に遺構が分布している。また、北側の低位部にはその時期の斜面堆積の包含層が認められた。遺構密度が最も濃いのは調査区中央部であり、弥生時代から中

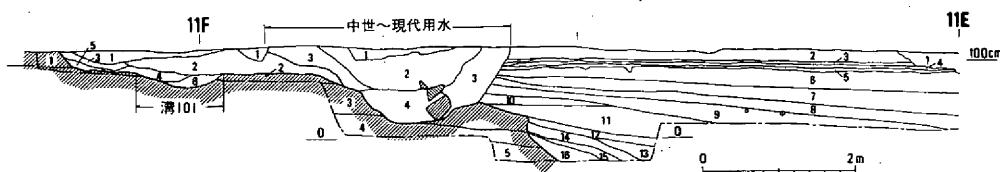
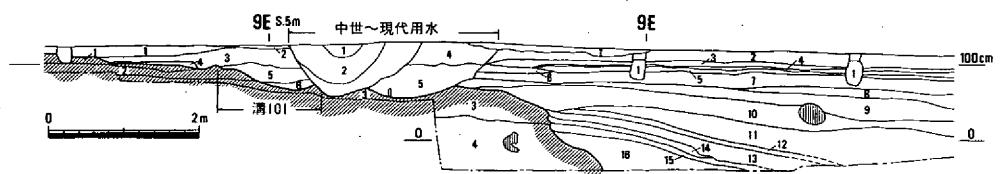
第3章 調査の概要

世にわたる多数の遺構が検出された。調査区北部の削平を考慮に入れても、やはり遺跡の中心は調査区中央部になるようである。調査区南端は低いため遺構の密度は低くなるが、中世の運河等が所在する。

現在の百間川の流水も潮汐の影響がみられるが、弥生時代～中世にあっては海岸線がかなり近かったと考えられ、この遺跡は河口近くに位置する海浜集落として位置付けられる。

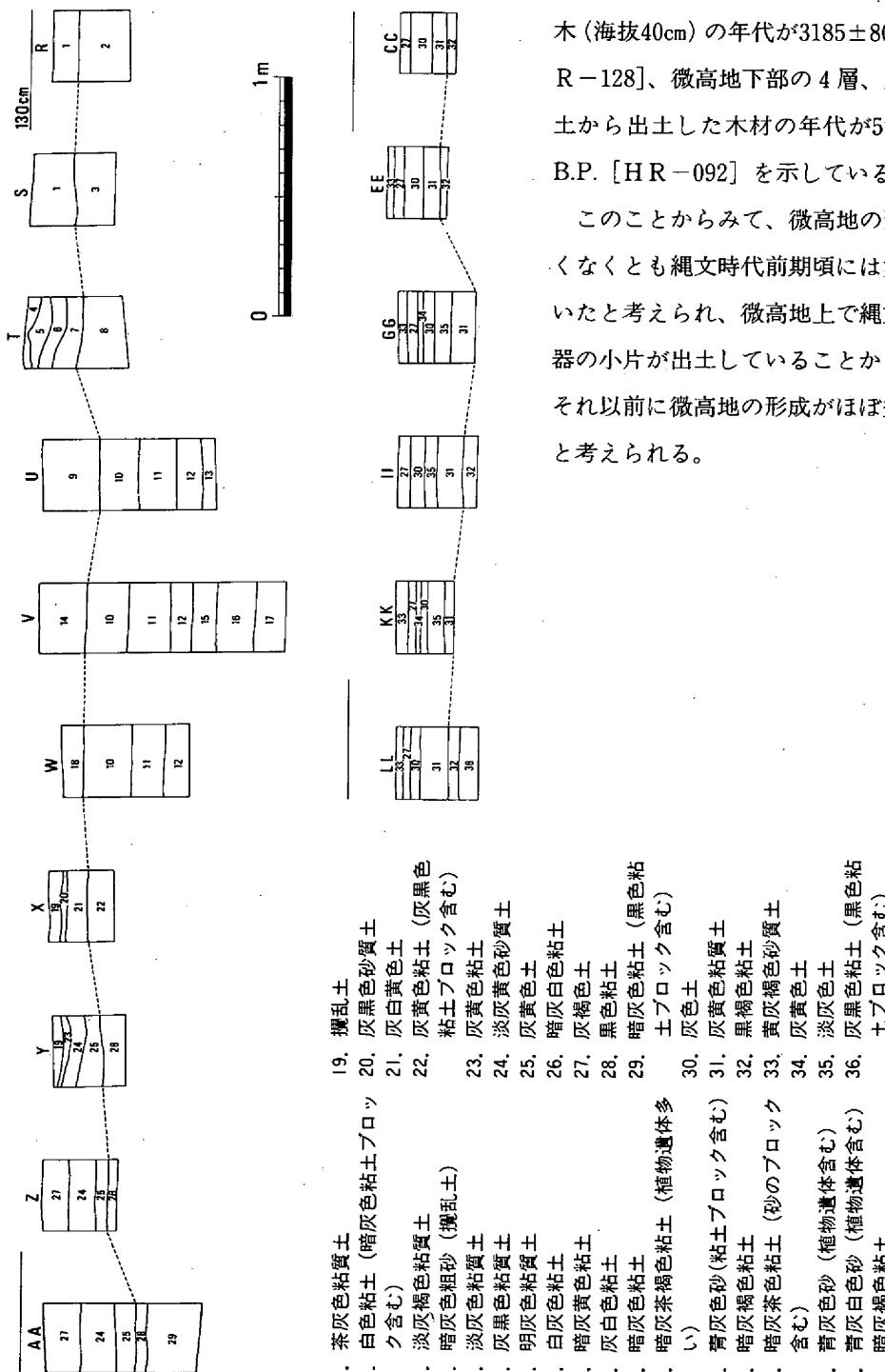
さて、ここで調査区北部の土層にもとづいて微高地（自然堤防）の形成について述べておこう。微高地上部の粘土層1～3層は上下に二分でき、下部の3層は再堆積による基盤層の形成を思わせるブロック状の灰色・黒色粘土層である。その下は青灰色砂質土4層となり、少量の植物遺体、まれに木片を含んでいる。4層上面で海拔30cmを測る。この層が湧水層となるため、井戸の多くがこの層に達している。別地点でおこなった深掘りの断面によれば、この層の下は海拔-1mで10～2cmの角礫を含む灰色砂層となり、樹枝等の植物遺体を含んでいる。

一方、微高地北側は前述のように低位部となっている。微高地の下がりはかなりゆるやかであり、そこには砂層、砂質土層が堆積している。層中には面的にアシ・ヨシ等の植物遺体を含む部分があり、樹枝・流木（太さ最大40cm）等も認められる。



中世～現代用水路	斜面堆積（微高地側）	斜面堆積（低位部）	
1. 搾乱	1. 黄灰色砂質土	1. 搾乱	10. 暗紫色砂質土 (含有機質・流木)
2. 淡黄灰色粘質土	2. 暗褐灰色砂質土	2. 黄灰色粘質土（水田層）	11. 暗青灰色砂質土
3. 黄灰色砂質土	3. 灰褐色砂質土	3. 暗灰色粘質土	12. 灰白色砂（含有機物）
4. 灰色砂質土	4. 暗灰色砂質土	4. 暗灰褐色粘質土	13. 暗灰色砂
5. 淡青灰色粘質土	5. 黄灰色砂質土	5. 黑灰色粘質土	14. 暗青褐色砂質土
基盤層	6. 黑灰色砂質土	6. 灰色砂質土	15. 青灰白色砂
1. 灰白色粘土		7. 黄灰色砂質土	16. 暗青灰色砂
2. 灰色粘土		8. 暗灰色粘質土	
3. 灰色・黒灰色粘土混合		9. 灰褐色粘質土（含有機質）	
4. 青灰色砂質土			

第6図 微高地北側斜面堆積 (1/100)



広島大学地理学教室による年代測定の結果、低位部堆積層10層から出土した流木（海拔40cm）の年代が 3185 ± 80 B.P. [H R-128]、微高地下部の4層、灰色砂質土から出土した木材の年代が 5730 ± 105 B.P. [H R-092] を示している。

のことからみて、微高地の形成はすくなくとも縄文時代前期頃には始まっていたと考えられ、微高地上で縄文晩期土器の小片が出土していることからすれば、それ以前に微高地の形成がほぼ完了したと考えられる。

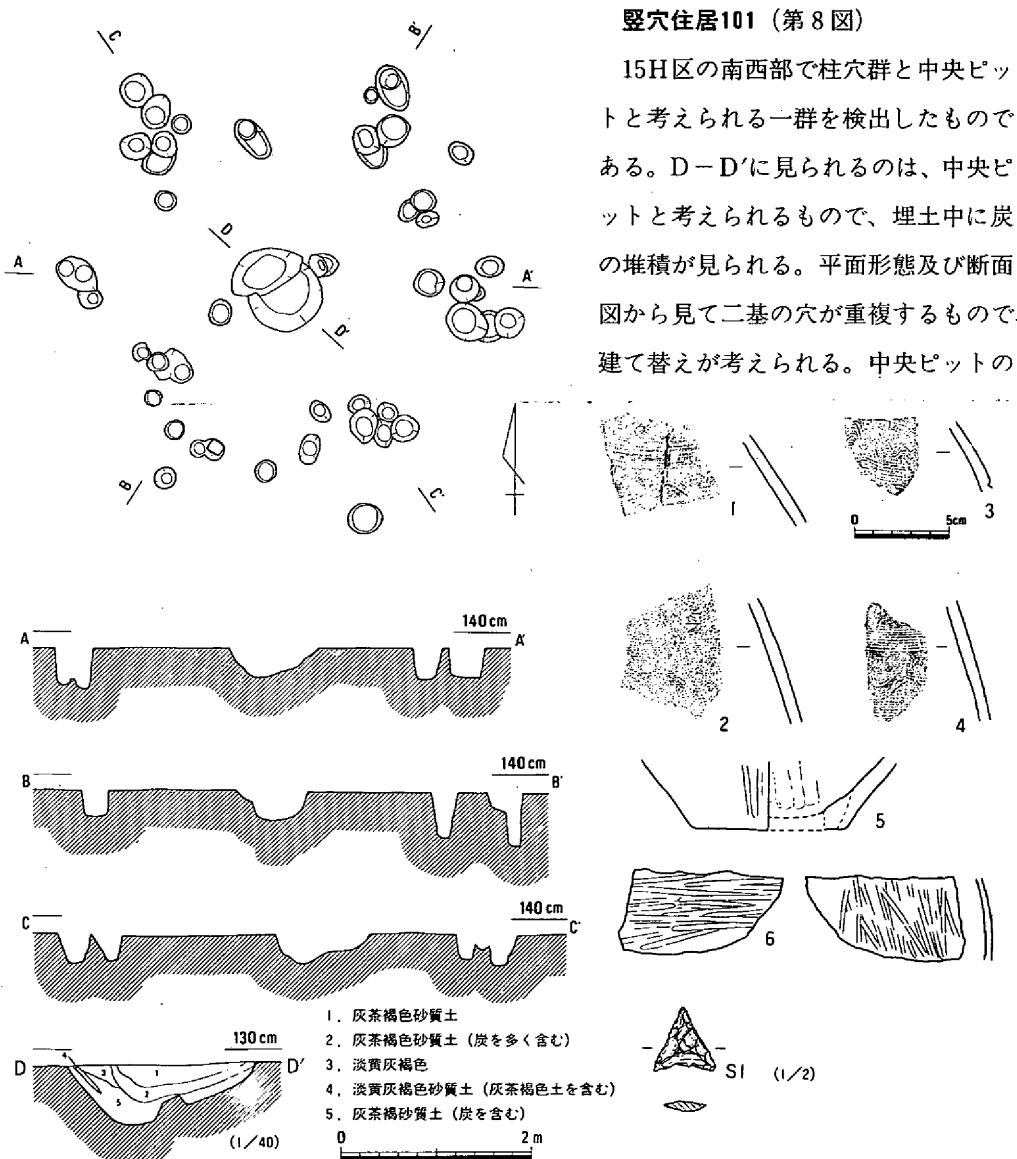
(宇垣)

第7図 R~LL区土層概念図 (1/30)

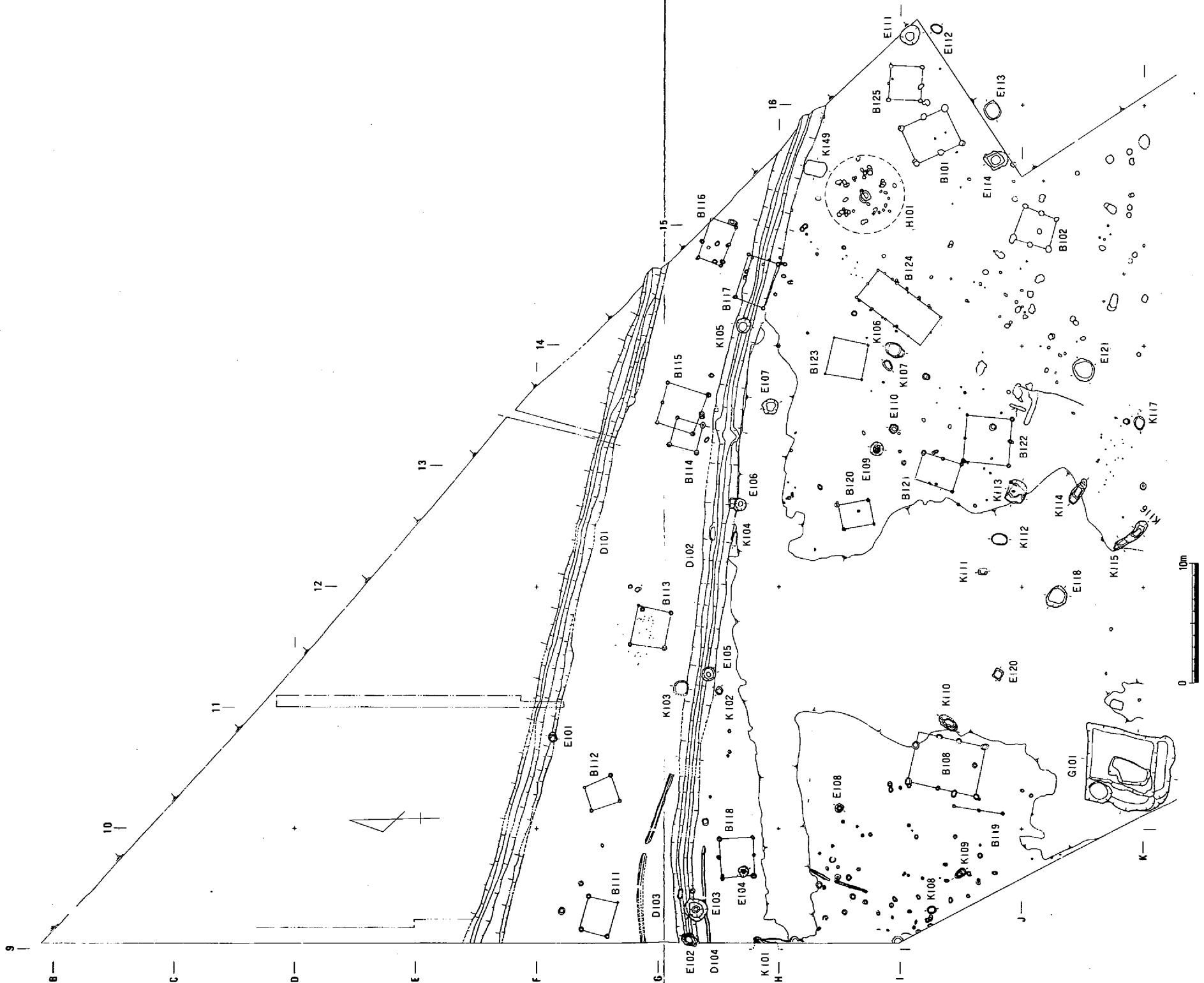
第2節 遺構・遺物

1 弥生時代・古墳時代

a 壇穴住居



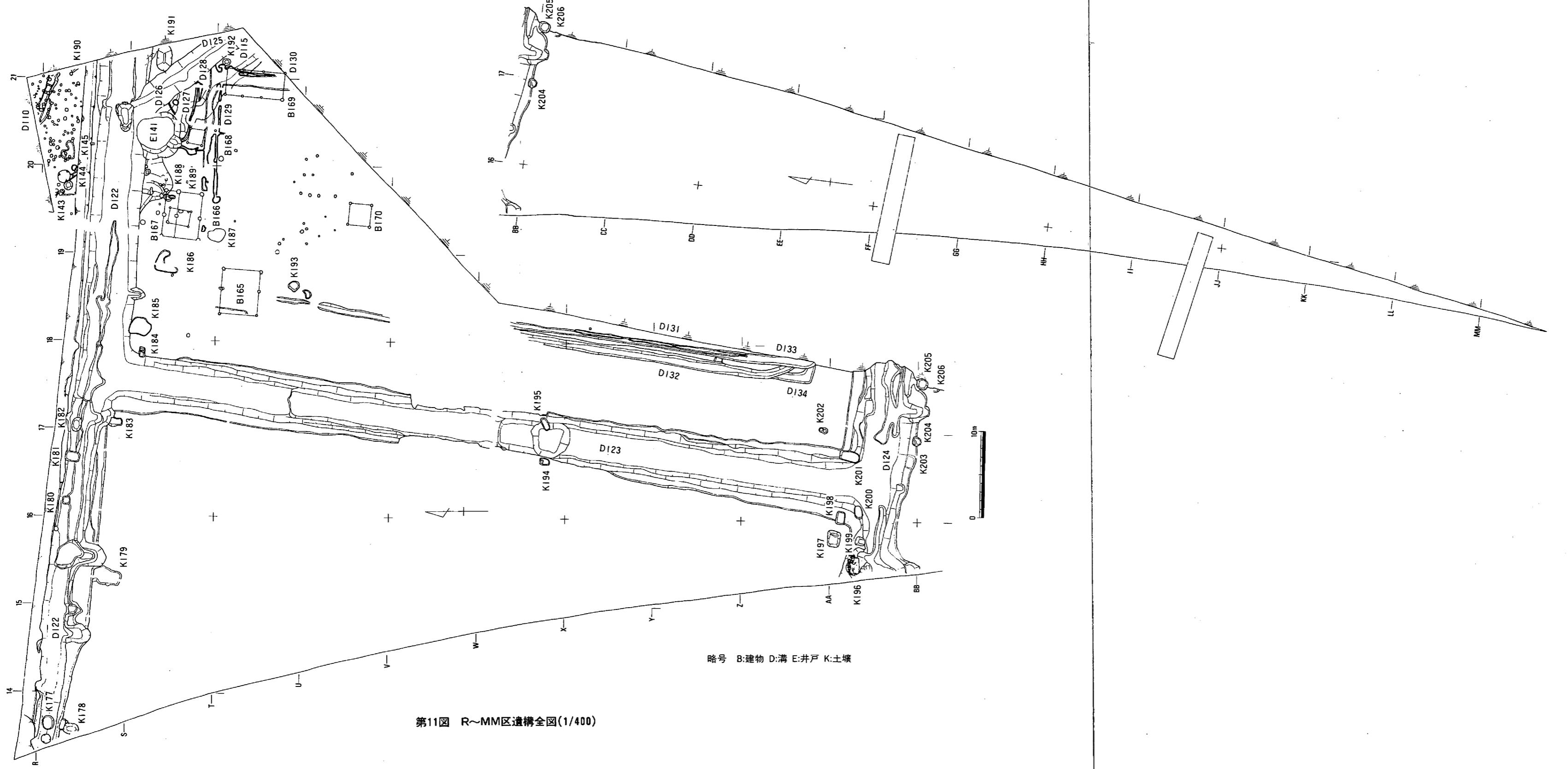
第8図 壇穴住居101 (1/80・1/40)・出土遺物



第9図 B～J区遺構全図(1/400)

略号 B:建物 D:溝 E:井戸 G:池 H:竪穴住居 K:土壤





東側、西側には、径10cm程度の柱穴がピットに接して検出された。この中央ピットを囲むように、6個所に柱穴群が認められる。柱穴群は、3~6個が集まるもので、中央ピットよりほぼ等距離の位置に見られる。個々の柱穴の、柱穴群との対応は不明であるが、2~3回の建て替えが考えられる。壁体及び壁体溝は検出されなかったが、6本柱を持つ円形の住居跡と考えられる。

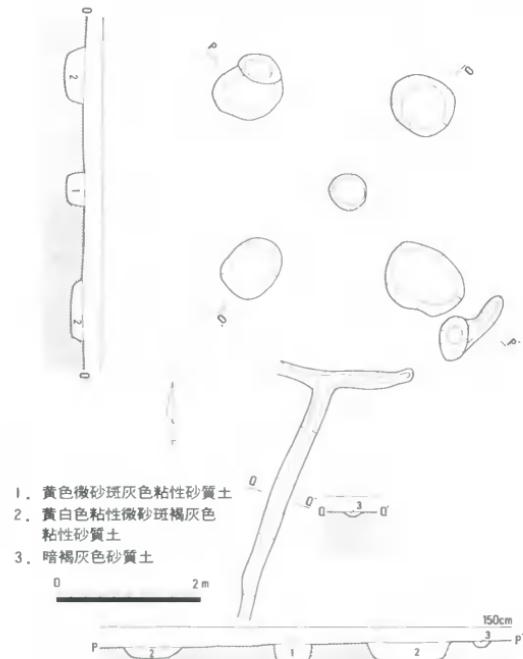
出土遺物としては、1~4は、櫛描の平行線文及び波状文の施されるものである。5は、外面にヘラミガキ、内面はナデの施されるものである。6は、内外面ともにヘラミガキの施されるものである。時期としては、弥生時代中期と考えられる。
(井上)

竪穴住居102 (第12図、図版4)

13K区の西半で検出された。残存状況はきわめて悪く、床面は削平されて消滅し、わずかに残存した4個の柱穴の配置状況から住居跡と認識することができた。4個の柱穴は楕円形をなし、長径が89~114cmと大きいものの、深さは30cmと浅く、通常の竪穴住居の柱穴とは一見異質な感じを受ける。しかし、

各柱穴間の距離は240cm程度で等しく、4個の柱穴の中心点を結ぶ線は正方形をなし、その中心には中央ピットまで存在している。中央ピットはほぼ円形で、長径は52cmを測り、深さは柱穴と等しい。中央ピットの埋土は黄色微砂斑灰色粘性砂質土であったが、炭や焼土は含まれていなかった。

なお、柱穴の埋土は黄白色粘性微砂斑褐色粘性砂質土で、柱痕が認められなかった。さらに、柱穴の南側で、どうも壁体溝の一部とみられる、幅25cmの湾曲する溝が2.5mほど検出され、このことから、竪穴住居102



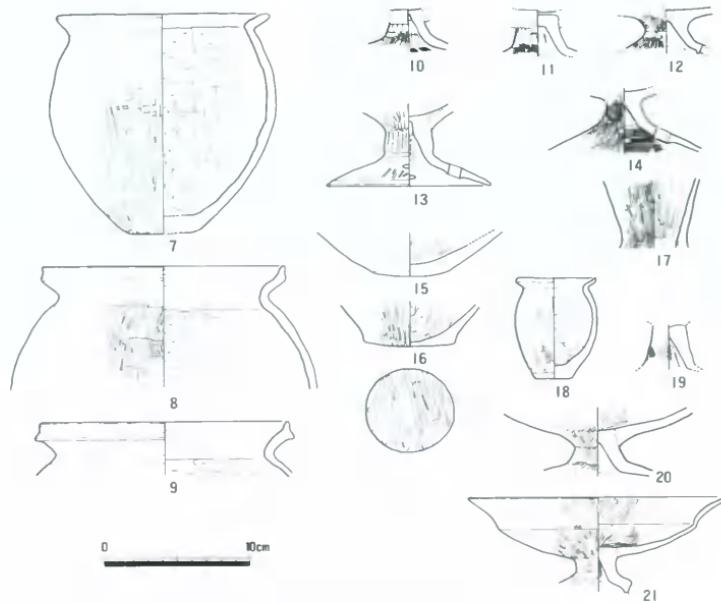
第12図 竪穴住居102 (1/80)

は直径5m前後の円形の平面形をもつことが推定可能となった。この壁体溝は住居の南からほぼ直線的に住居の外へ伸びていき、3.4m程で溝105と重複して行方不明となる。あるいは、埋没直前の溝105に注いでいたかもしれない。溝の深さはわずか5cmにすぎない。

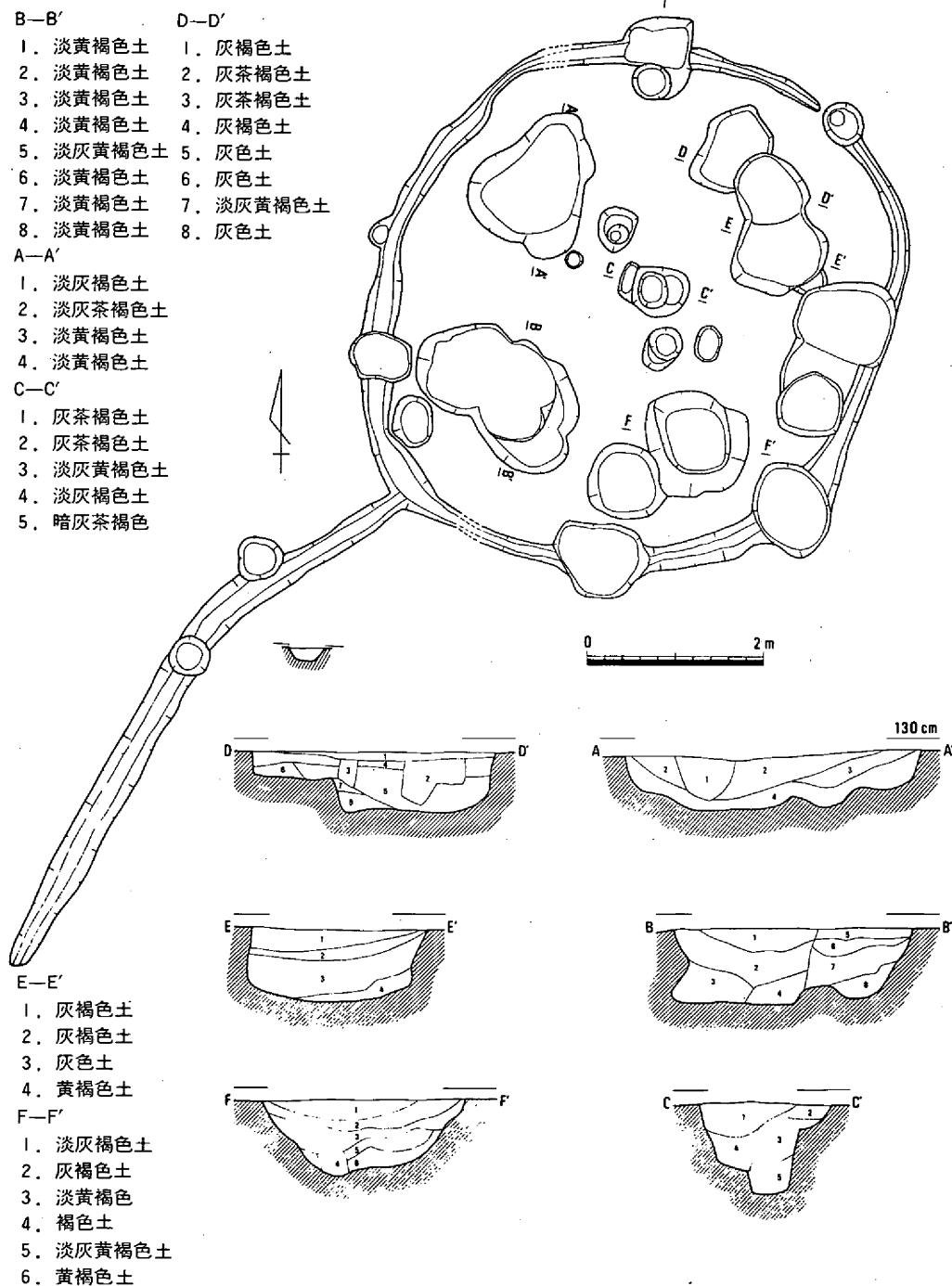
土器片が中央ピット・柱穴・壁体溝のいずれからも出土しているが、いずれも少量で小片にすぎず、細かな年代比定は困難である。ただ、それが弥生時代後期に属することだけは確かであり、この竪穴住居102は、その形態からみても、弥生時代後期のものと判断される。なお、後述する竪穴住居103ときわめてよく類似していることが注意される。
(岡本)

竪穴住居103（第13・14図、図版4）

16M区から17M区にかけて検出された、ほぼ円形を呈する住居跡である。住居跡の規模は、長径6.04m、短径5.8mを測る。検出した住居跡は、壁体は検出されず、ほぼ床面まで削平されていた。検出した壁体溝も深さ5~10cmである。床面には、柱穴と考えられる位置に大きな土壙を検出した。土壙は、各々2~3個が重複するもので、住居跡の建て替えとも考えたが、柱穴の掘り方としては、大きすぎ、柱痕跡が見られること、住居跡の溝に埋まる土とは異なることから、住居跡に伴うものではなく、住居跡より新しいものとも考えられる。C-C'は、中



第13図 竪穴住居103出土遺物



第14図 穫穴住居103 (1/80・1/40)

央ピットと考えられるもので、埋土及び周囲から炭片が検出された。住居跡の南西側には、壁体溝から続く溝を検出した。溝は、南西方向から、やや南方向に曲るものを探査したもので、

全長7mを測る。住居跡は、明確に柱穴を検出しなかったため、柱穴の数は不明であるが、本来柱穴が存在したであろう位置に大きな土壙があり、それが柱穴の掘り方とも考えられる。いずれにしても、4本柱の住居跡と考えられる。

出土遺物としては、7~18は排水溝からの出土であり、19~21は、中央ピットからの出土である。甕は、外方に大きく外反した口縁部の端部が丸いものと、端部が少し上方に拡張するものとがある。高杯は、いずれも短脚で、外面には、小さく入念なヘラミガキが施されている。杯部は浅く、口縁部が外反しながら開く。杯部の内外面はヘラミガキが施される。住居跡の時期としては、弥生時代終末と考えられる。

(井上)

竪穴住居104 (第15図)

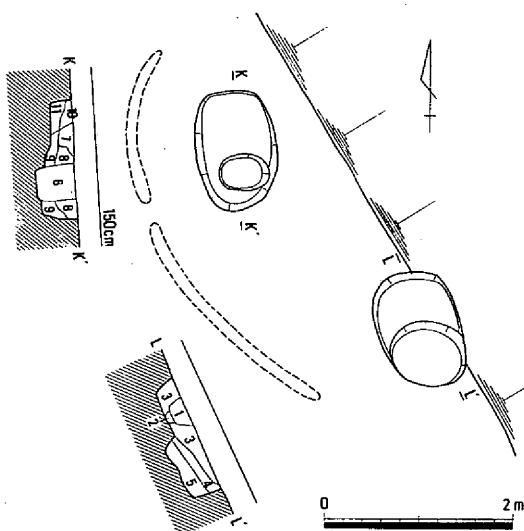
17M区の南東部で検出された。調査中は、土壙として扱ったものである。ほぼ同形の土壙を2基検出したもので、その東側は、低水路掘削により削平されていた。K-K'のものは、掘方の南側に径20cm程度の柱穴痕と考えられるものが検出されている。L-L'については、1、2層を柱痕跡と見ることもできる。いずれも、掘り方は、楕円形を呈するもので、長径124~130cm、短径84~86cmを測るものである。調査終了後の遺跡の検討において、土壙の西側に、破線の様に溝状の遺構が判明した。溝状遺構は、住居跡の壁体溝に似るものがあることから、これ

ら2個の土壙は、住居跡内の柱穴の掘り方とも考えられるに至った。しかしながら、大半が削平されているため確定的なことは不明であるが、可能性として示しておきたい。時期としては、弥生時代と考えられる。

(井上)

竪穴住居105 (第16図、図版5)

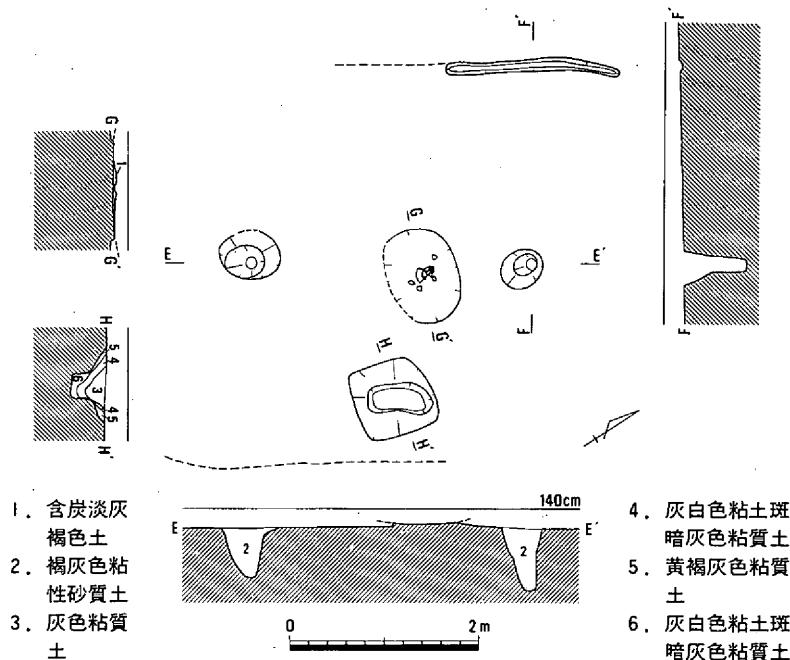
13Q区と14Q区の境界付近に位置する竪穴住居である。高杯の大形破片を含む炭層の拡がりがまず確認され、その後の周辺の掘り下げによって、2個の深い柱穴が検出された。さらに、2個の柱穴の中間点の南東側で方形の土壙が掘り出され、これら一連の遺構を総合して、竪穴住居の存在を確定することができた。住



- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 茶褐色土 | 6. 灰茶褐色砂質土 |
| 2. 茶褐色土 | 7. 灰茶褐色砂質土 |
| 3. 淡茶灰褐色土 | 8. 淡黄灰褐色砂質土 |
| 4. 淡茶灰褐色土 | 9. 淡灰茶褐色砂質土 |
| 5. 暗茶褐色土 | 10. 淡灰茶褐色砂質土 |
| | 11. 淡灰茶褐色土 |

第15図 竪穴住居104 (1/80)

居の床面はすでに削平されていて、当初に検出された炭層の部分は、中央部分がわずかに凹むことから、古墳時代初頭の住居でしばしばみられる、浅い中央ピットの底部が残存したものと考えられる。柱穴は、北のものが長径47cm、深さ67cm、南のものは長径64cm、深



第16図 竪穴住居105 (1/80)

さ73cmを測る。柱穴の埋土はいずれも褐灰色粘性砂質土である。方形の土壙は、これもしばしば古墳時代初期の住居の南壁あるいは東壁側に検出されるもので、当住居でも南東側に位置し、この付近に住居の壁があったことが推測される。土壙の大きさは、検出面で長辺が84cm、短辺は79cmを測るが、穴の途中からは、長辺68cm、短辺30cmと縮少し、土壙の下半部は箱形になっている。壙内の埋土は4層からなるが、上から2層目には炭が含まれている。この方形土壙の存在から住居の規模がある程度推測されるとしたが、さらに周辺を精査したところ、中央ピットの北西で、幅15cm、長さ185cm、深さ3cm程の小さな溝状の遺構を検出することができた。この溝は柱穴を結ぶ線とほぼ平行していて、その間の距離が、方形土壙の東辺とその線との距離に近似している。このことから、この溝は竪穴住居105の壁体溝のかすかな痕跡と考え、これに基づいて住居の規模を復元すると、一辺は、4.2mとなる。もう一辺の長さについては、柱穴間の距離が295cmであることや、壁体溝の残存位置から判断して、4.2mより長かったことは確実であり、住居の平面形は長方形を呈していたものと推定される。

遺物は柱穴・方形土壙・中央ピットいづれからも少量の出土がみられるが、住居の年代を考える上では、中央ピット出土の高杯片が有力である。その年代は古墳時代初頭で、百・古・I期と考えられることから、住居の年代もこれとそう異ならないものとみて差し支えない。

(岡本)

b 建 物

建物101（第17図）

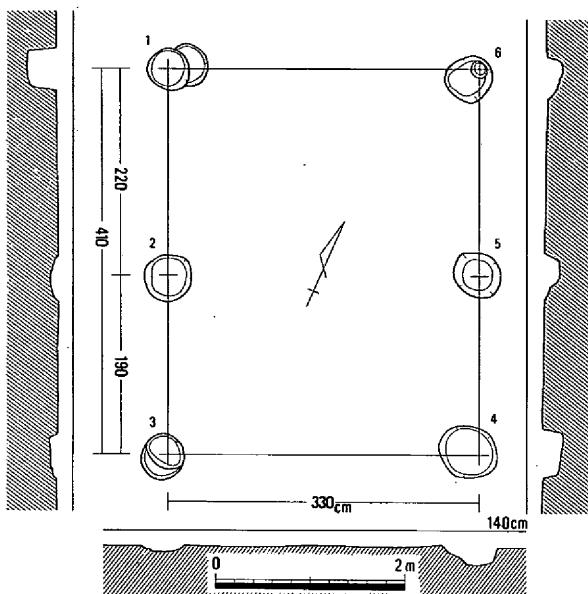
15 I 区の北西部に位置する、桁行 2 間、梁間 1 間の建物である。柱穴は、6 個を検出したが、柱痕跡は柱穴 6 以外には、確認されなかった。柱穴の中心間の距離は、梁間が 330cm、桁行が 220cm、190cm を測る。柱穴の掘り方の平面形は、円形を呈するものである。柱穴の径は 40~60cm を測るものである。柱穴 6 の北隅には、径 15~16cm を測る柱痕跡を確認した。柱穴の検出面からの深さは、最も深い柱穴 1 が 25

cm、最も浅い柱穴 3 が 10cm を測る。建物の長軸の方向は、ほぼ北北西を向く。建物の時期としては、弥生時代が考えられる。

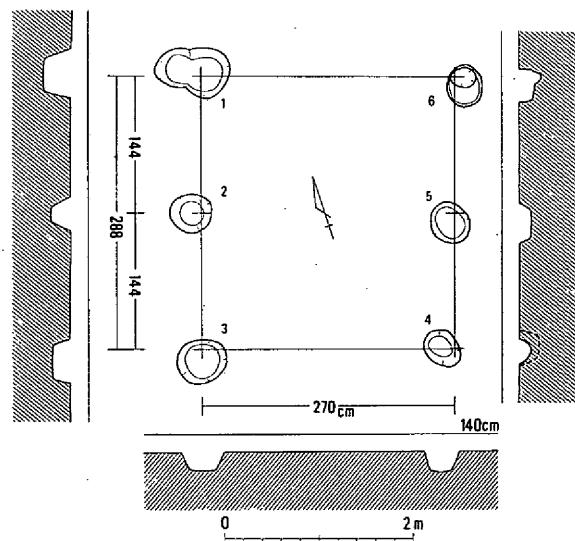
(井上)

建物102（第18図）

15 J 区付近に中心を置く、桁行 2 間、梁間 1 間の建物である。柱穴は、6 個を検出し、柱穴 6 に柱痕跡を検出した以外は柱痕は確認されなかつた。建物の規模は、梁間 270cm、桁行は、144、144cm を測る。柱穴の掘り方は、ほぼ円形を呈するもので、径 46~40cm を測る。柱穴 6 の北端には、径約 15cm の柱痕跡を検出した。掘り方の深さは、検出面から最も深いもので 25cm、最も浅いもので 15cm を測る。建物の長軸の方向は、北北東を向く。建物の時期としては、古墳時



第17図 建物101 (1/80)



第18図 建物102 (1/80)

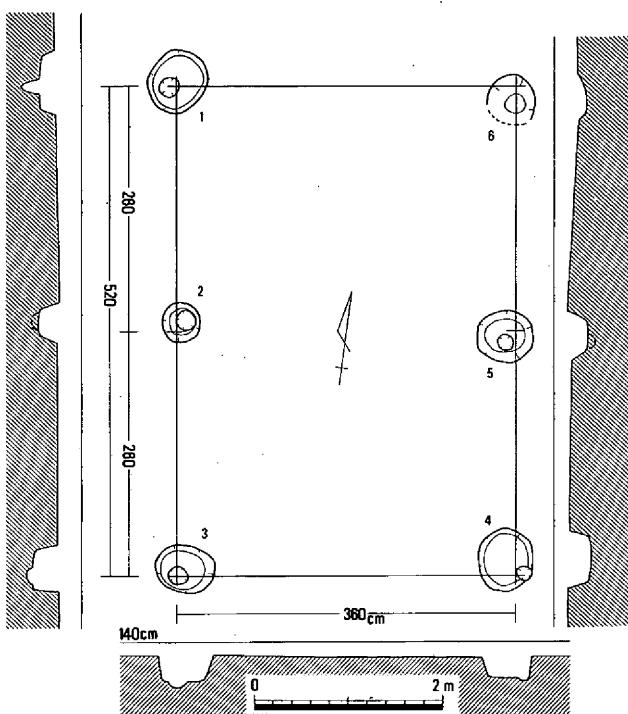
代と考えられる。(井上)

建物103 (第19図)

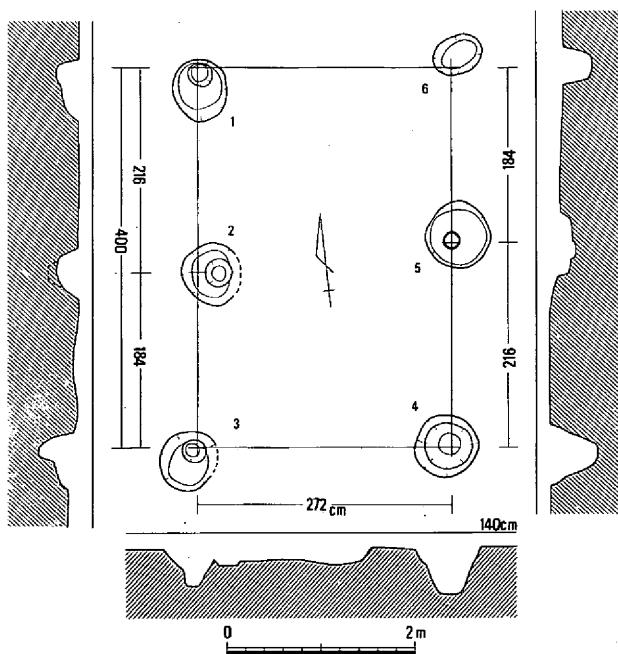
15K区の東半に位置する、桁行2間、梁間1間の建物である。柱穴は、6個を検出し、各柱穴に柱痕跡を確認した。柱痕跡は、各柱穴とも、掘り方の低面より深くなるものである。柱穴の掘り方は、ほぼ円形を呈するもので、最も大きいもので径約60cm、最も小さいもので、径40cmを測る。柱痕の径は16~20cmを測る。掘り方の検出面からの深さは22~12cmを測る。建物の規模は梁間360cm、桁行は260、260cmを測る。建物の長軸方向は、少し西に振るが、ほぼ南北に近い方向を向く。建物の時期としては、弥生時代末と考えられる。(井上)

建物104 (第20図)

15L区の南西部に位置する、桁行2間、梁間1間の建物である。柱穴は、6個を検出した。柱穴6以外の柱穴からは、柱痕跡が検出された。柱痕跡は、柱穴の掘り方の底部よりも深くなるものである。柱穴の掘り方は、ほぼ円形を呈するもので、最も大きいもので径68cm、最も小さいもので径



第19図 建物103 (1/80)



第20図 建物104 (1/80)

46cmを測る。柱痕跡の径は18~22cmを測る。掘り方の検出面からの深さは45~12cmを測る。建物の規模は柱の中心間で梁間272cm、桁行は216、186cmを測る。建物の長軸の方向は、少し東に振るがほぼ南北に近い方向を向く。建物の時期としては、弥生時代が考えられる。

(井上)

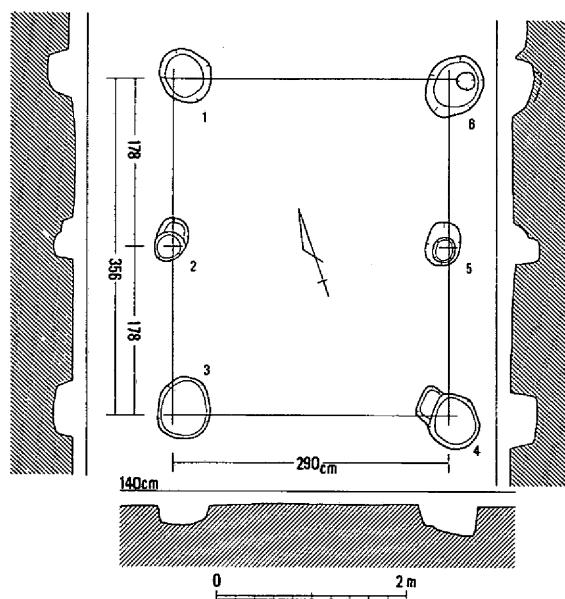
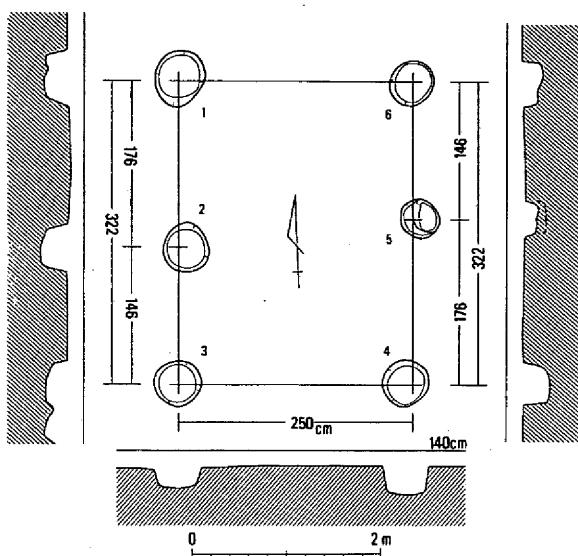
建物105 (第21図)

16L区の中央付近に位置する、桁行2間、梁間1間の建物である。柱穴は、6個を検出した。

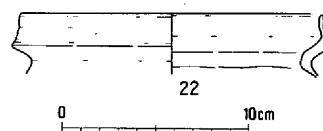
各柱穴内に柱痕跡は確認されなかった。柱穴の掘り方はほぼ円形を呈するもので、最も大きいもので径46cm、最も小さいもので径40cmを測る。掘り方の検出面からの深さは、最も深いもので30cm、浅いもので10cmを測る。建物の規模は、梁間は250cm、桁行は176、146cmを測る。建物の長軸方向は、ほぼ南北を向く。建物の時期は、弥生時代と考えられる。

(井上)

第21図 建物105 (1/80)



第22図 建物106 (1/80)・出土遺物



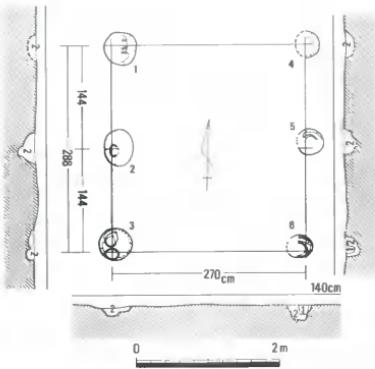
建物106 (第22図)

16L区と16M区にまたがって位置する、桁行2間、梁間1間の建物である。柱穴は、6個を検出し、柱穴2・5・6には、柱痕跡を確認した。柱痕跡は、柱穴の掘り方より深くなるものである。柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈するもので、最も大きいもので径60cm、小さいもので径26cmを測る。掘り方

の検出面からの深さは20~24cmを測る。柱痕跡の径は10~22cmを測る。建物の規模は、梁間は290cm、桁行は178、178cmを測る。建物の長軸の方向は、ほぼ北北東を向く。建物の柱穴からは、図示する遺物が出土している。22は、口縁端部が、上方に折れ曲がるもので、胴部内面は、口縁部近くまでヘラケズリが施されている。建物の時期としては、弥生時代終末と考えられる。

(井上)

建物107 (第23図)



第23図 建物107 (1/80)
1. 淡灰黄褐色砂質土 2. 黒褐色粘質土

17N区の西半に位置する、桁行2間、梁間1間の建物である。柱穴は、6個を検出し、柱穴2・3・6には柱痕跡を確認した。柱穴の掘り方の平面形は、ほぼ円形を呈するもので、最も大きなもので径44cm、小さいもので径26cmを測る。柱痕跡は、柱穴の掘り方底部より深くなるもので、柱痕跡の径は8~10cmを測る。柱穴の掘り方の検出面からの深さは6~18cmを測る。建物の規模は、梁間は270cm、桁行は144、144cmを測る。建物の時期としては、弥生時代と考えられる。

(井上)

c 井 戸

井戸101（第24図、図版6）

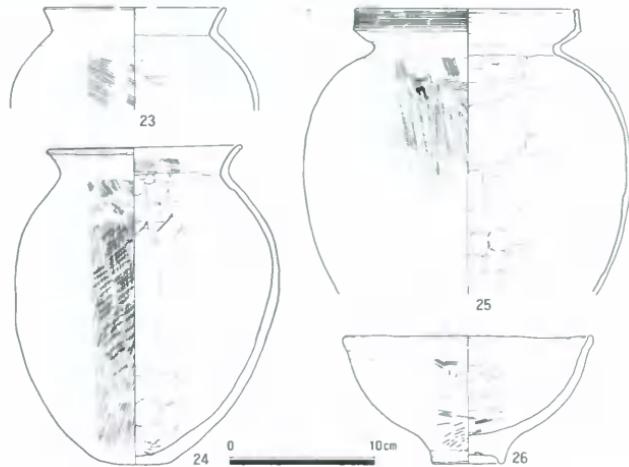
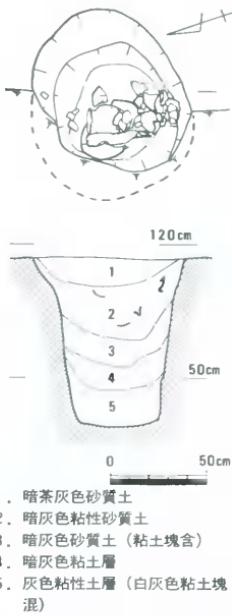
微高地の北側の肩部に位置し、近・現代用水路に井戸の肩の一部を削られて存在する。径85~100cmの不正円形の平面形態をもち、深さ約90cmを測る。井戸内の堆積土は、中央部が窪み、自然堆積の様相を呈す。

遺物は2層と5層に比較的多くの土器の出土をみたが、2層中の土器は破片が大勢を占める。また、木質が4・5層に認められたが、木器の可能性があるものはない。また、モモの種が完形で10個、半欠9片が出土している。

土器の器種は、「く」の字口縁（23・24）と櫛描沈線を口縁外面に施す二重口縁（25）の2種類の甕や、あげ底をもつ小鉢（26）などがある。他にも図示できない破片の中には、二重口縁の壺・同甕・高杯も1~2個体分含まれていた。「く」の字口縁の甕と小鉢の一部にはタタキが認められる。

上層・下層出土の土器にとくに形式差はなく、百・古・Iの時期を示す。

(柳瀬)



第24図 井戸101 (1/30)・出土遺物

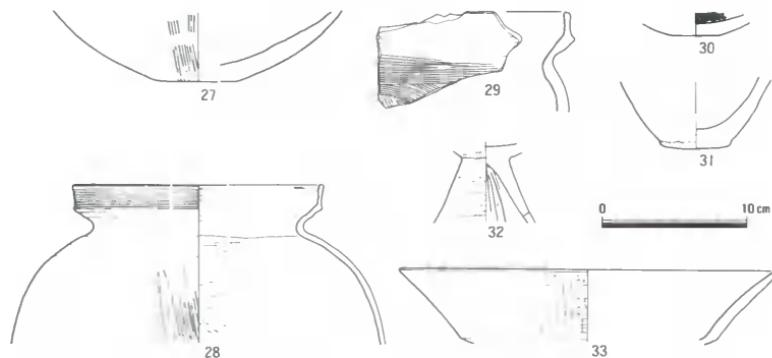
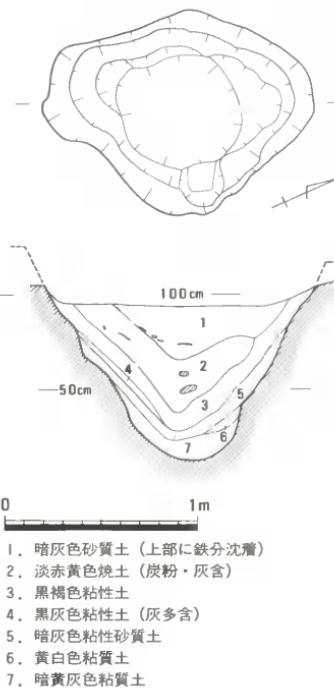
井戸102（第25図、図版7）

調査区の西端部に位置し、溝102のはば中央部に掘削されている。長径約140cm・短径約110cmの不整楕円形の平面形態をもち、深さ約90cmを測る。掘削は比較的緩やかな傾斜で底に至る。壁は凹凸が目立ち、東側の一部は幅約25cmにわたって窪んでいる。堆積土は中央に深く落ち込んでおり、2層には多量の焼土と炭粉や灰が認められ、4層にも灰が多い。土器は1・2層に比較的多く認められたが、細片が多い。1層からモモの種が1粒出土している。形状や深さからすれば、井戸ではなく他の機能（例えばゴミ穴）を考えた方がいいかもしれない。

土器は、壺・甕・高杯・鉢・小壺などの器種が認められるが、図示できるのは第25図くらいであった。甕の破片の一部にはタタキを有するものも含まれる。壺・甕の底部はわずかに平底の形態を残し、鉢の口縁端部の拡張も少ない。

時期としては、百・古・Iの範囲をぐるものではない。

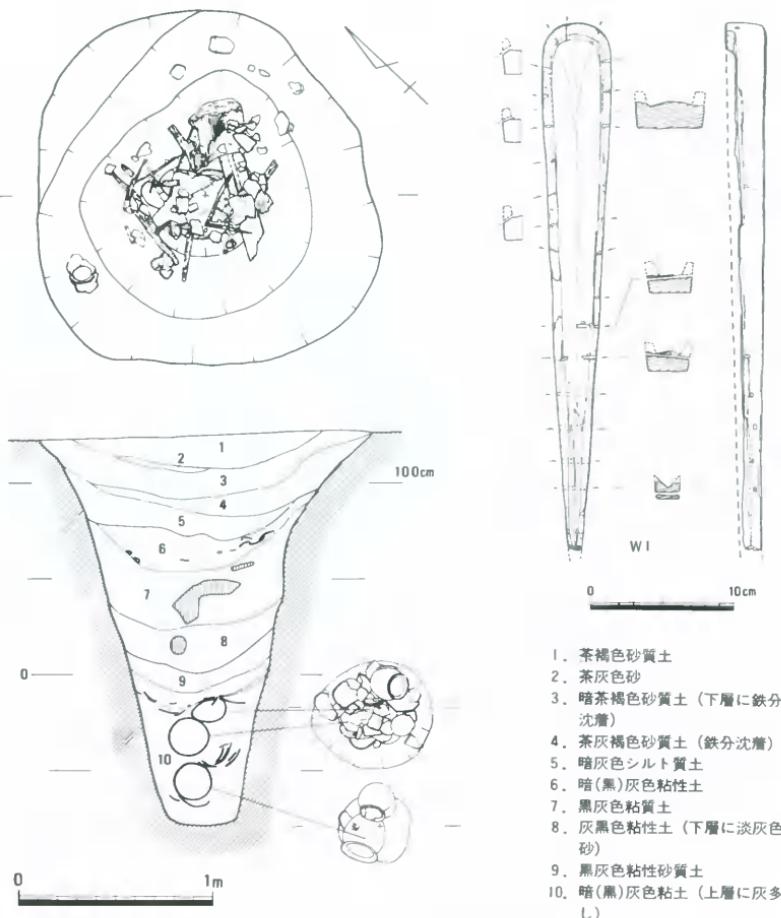
（柳瀬）



第25図 井戸102 (1/30)・出土遺物

井戸103 (第26~31図、図版 8 ~12)

井戸102の東側に隣接して存在する。径175~195cmの不整円形の平面形態をもつ。掘削の傾斜は約50cmの深さまでは緩やかであるが、それ以下は深さ約2mを測る井戸の底まで比較的急傾斜で掘り込まれている。井戸の底は海拔下80cmを測り、同70cmから始まる湧水層(青灰色砂層)に達している。堆積土層は、上層(1~5層)・中層(6~8層)・下層(9~10層)の3層に大別され、それぞれ砂質土・粘質土・粘性土または粘土質である。

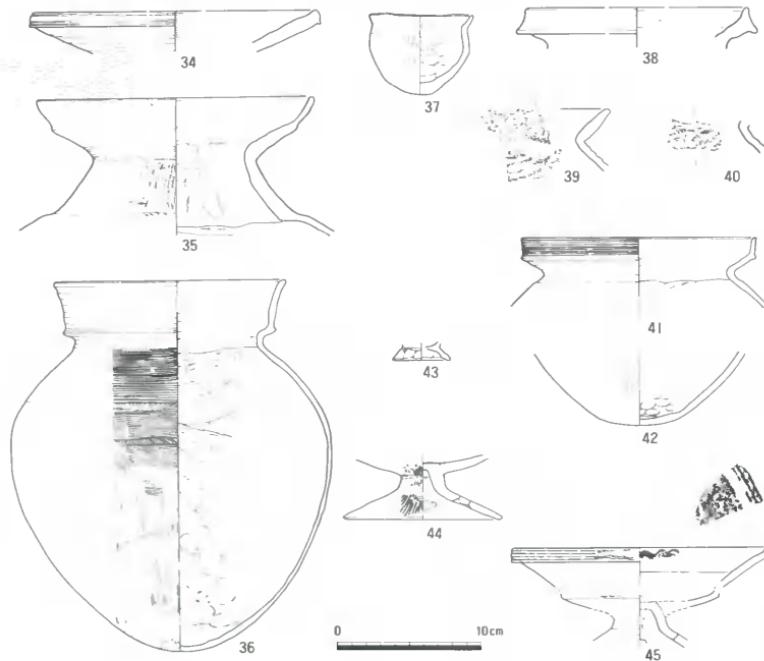


第26図 井戸103 (1/30)・出土遺物(1)

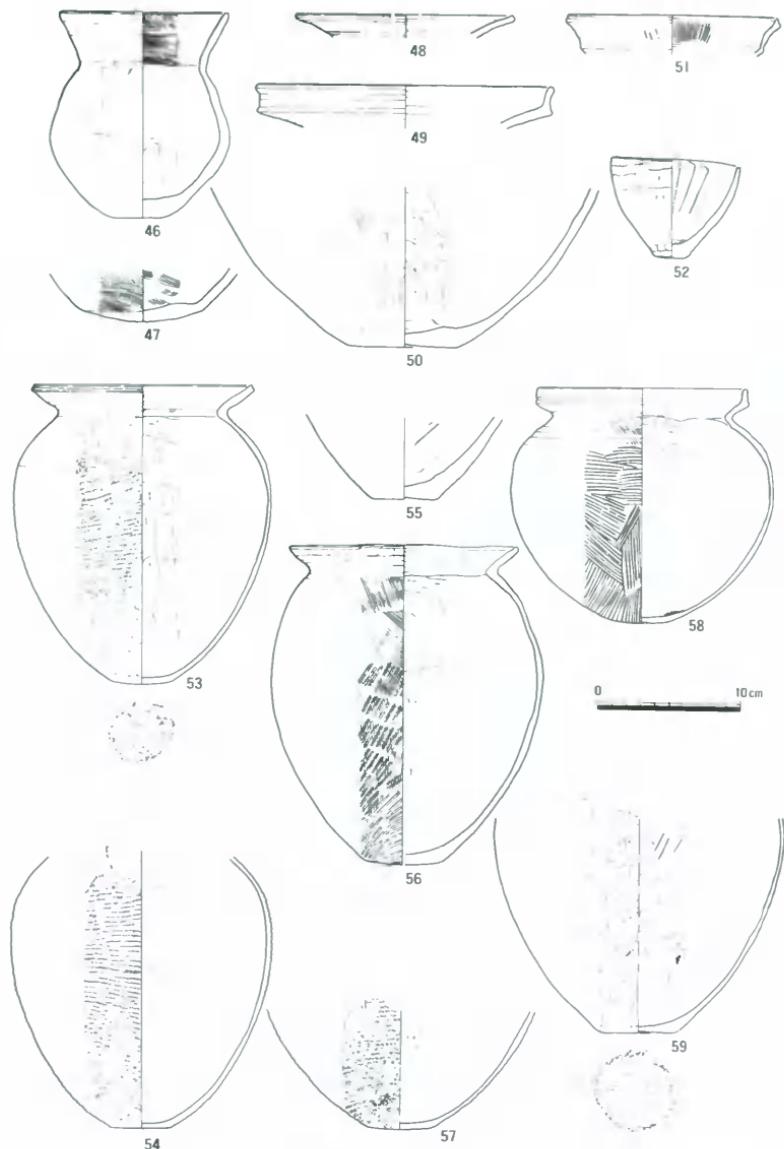
遺物は、土器片のほか、石器（S 2）、木器（W 1・W 2）、木質、種子（モモ 2 粒・ヒョウタン 1 粒・タデ属の一種 58 粒・不明 3 粒）などもある。土器は 6 層上面と 10 層中に多く出土し、とくに 10 層には完形の甕が 5 ~ 6 個体含まれる。そのうち 64 は頸部に綱状の植物質が繞り、さらに相対する 2 カ所には結び目も残存していた。これは、釣り下げる水を汲むのに使用されたらしい。井戸の底に完形を含む甕が 1 ~ 数個検出されるという例は、古墳時代初頭前後の井戸に比較的多くの類例が認められ、この時期の井戸の廃絶に伴う祭祀儀礼として一般的なあり方かもしれない。

また、上・中層には確実に弥生後期に遡る 38 や 44 も混在しているが、他の多くは下層の一群と同時期の範疇で捉えられる。土層堆積は中央に深い自然堆積を示すが、中層には比較的多くの木質や破損した臼状木製品などが出土しており、井戸の廃絶後ゴミ捨てなどにも使用され、徐々に埋まったものと考えられる。

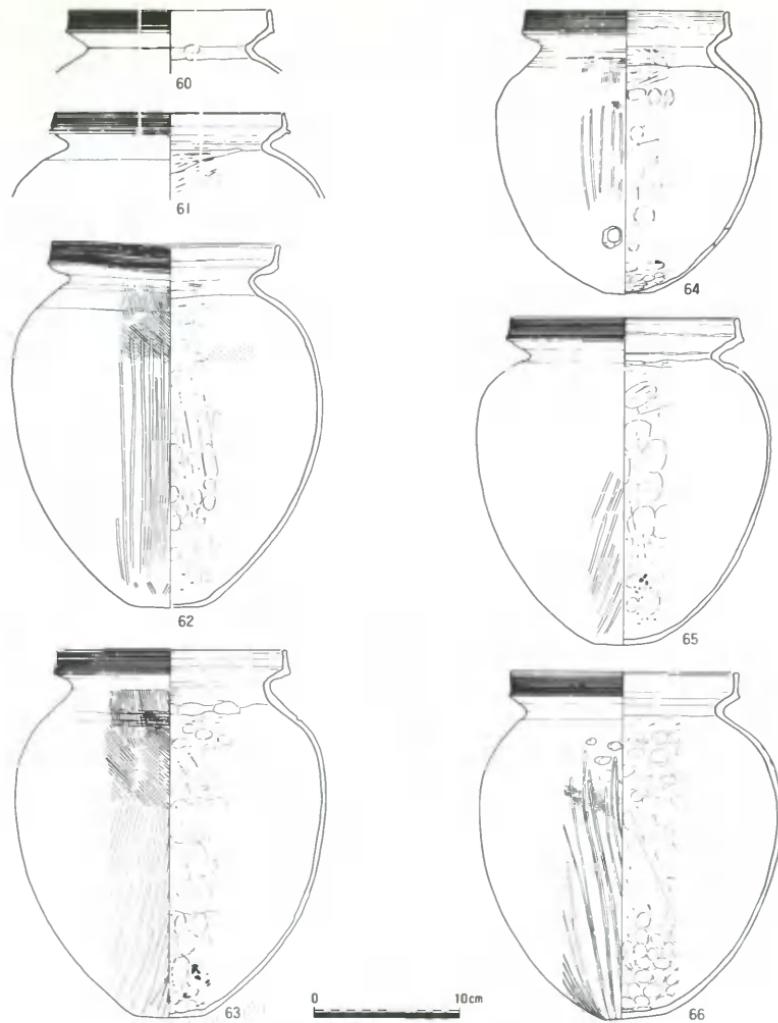
中層出土の二重口縁の甕 36 は、口縁端部が上部やや外方に大きく拡張し、肩部に粗い横方面的ハケ目を施し、胎土も白っぽいなど山陰からの搬入品の可能性が強い。下層遺物のうち壺・



第27図 井戸103出土遺物[2]



第28図 井戸103出土遺物[3]



第29図 井戸103出土遺物[4]

高杯はいずれも破片であり、小形鉢と甕の一部は完形である。甕は、「く」の字口縁でおもに肩部にハケ目を、肩部以外の体部に荒いタタキ目を施す53・54・56・57と、二重口縁で肩部以下に荒いハケを施す58・59、さらに二重口縁で口縁拡張部外面に横描沈線を施し、肩部に細かな

第3章 第2節 造構・遺物

ハケ目それ以下の体部に範磨きを施した62~66に3分類される。甕の底部はいずれもわずかに平底を残すタイプで、内部には底部近くに何らかのコゲ付き痕があり、とくに二重口縁の前者にはアワ状の炭化物、後者には米の炭化物がそれぞれに認められる。

木器W2は、7層のほぼ中央部から出土しているが、同一個体の一部は保存不良ながら6層にも認められている。全

体からいえば約2/3以

上を欠損し、一部に火を

受けて炭化しているなど、

保存は必ずしも良好とい

えないが、残存部の形状

や使用痕跡から臼である

ことは間違いない。上縁

(口縁)径48cm、下縁(脚

端)径推定54cm、高さ39

cmを測る。

年輪からして樹齢150

年以上のマツ材が利用さ

れ、丸太の腹部を削り窪

めて鼓形にくびれさせた

シンプルな造りである。

外面は口縁端と脚端に6

cm幅の端面を残し、底面

から約1/3の高さのと

ころが最大にくびれてい

る。くびれ面には細かな

加工痕を残すが、比較的

ていねいな製作である。

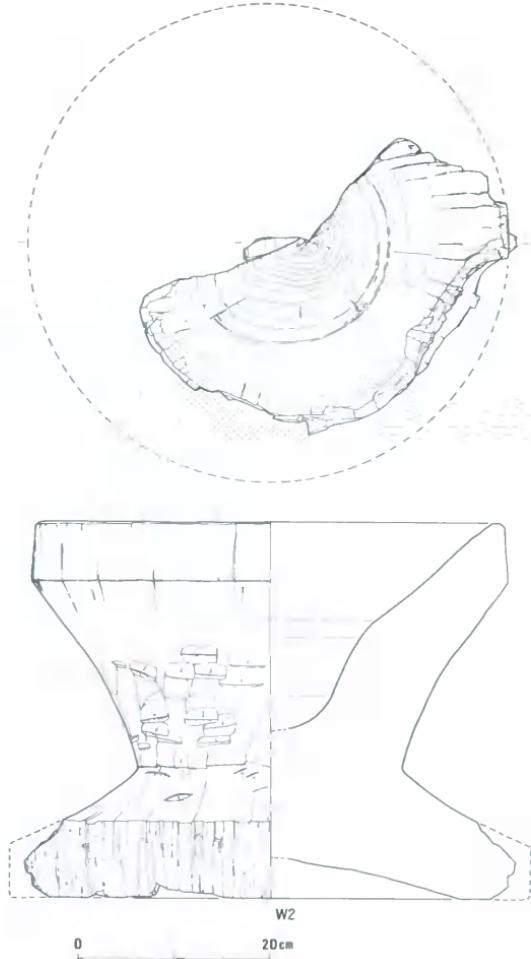
受部・脚底ともに、製作

当初から前者は深く(推

定約14cm)、後者は浅く

(約4cm)窪みがつけら

れていたと思われるが、



第30図 井戸103出土遺物(5) (1/6)

前者は中央部がさらに一段深く（推定約8cm）窪むほど使用痕跡が顕著で、製作後廃棄されるまでの間にかなり使用頻度が高かったことを示している。

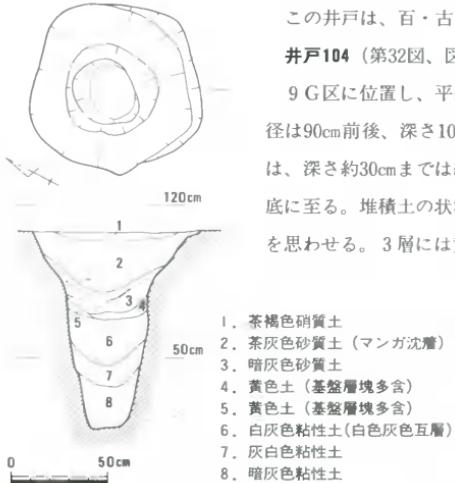
木器W1は、8層下部のほぼ中央部に出上をみた。比較的大きな樹木（スギ）の片材が使用されており。現存長36.6cm、最大幅4.8cm、最大厚さ2.8cmを測る。端部の一方の小口は丸く面取りされ、片方は中心に向かって尖る。材の内面にあたる部分は一部に破損がみられるが、内部を削り窪めることによって、縁には幅約8mm、高さ約7mmの突起が削り出されて繞っていたと思われる。側面からは、対面向かって径約2mmの小孔が穿たれ、そのうち尖った部位に近い6カ所の孔は体部を貫通し、その他の孔は突起部のみ貫通している。穿孔の角度は、断面図のように一定していない。この木器は周縁の突起部の大半を欠損していることから、本来の形状を完全には把握し得ない。また、何らかの使用痕跡もとくに認められず、用途は不明である。

石器S2は、不整立方体の表裏2面に使用痕跡が認められる砂岩製の砥石である。A・B面ともにほぼ全体が使用されているが、B面の約半分は表面に細かな凹部が散在しその部分は使用頻度が少なかったと思われる。重さは1,190gを量る。

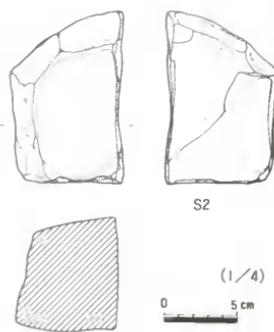
この井戸は、百・古・Iの時期が与えられる。（柳瀬）

井戸104（第32図、図版13）

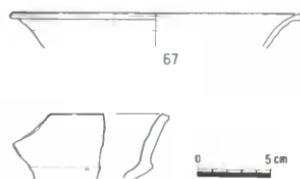
9G区に位置し、平面形態は五角形に近い不整円形を呈す。径は90cm前後、深さ104cm（底の海拔13cm）を測る。掘り方は、深さ約30cmまでは緩やかで、そこから急に傾斜を増して底に至る。堆積土の状況は井戸の中心部に低く、自然堆積土を思わせる。3層には黄色の基盤層ブロックが帶状に堆積し、



第32図 井戸104（1/30）・出土遺物



第31図 井戸103出土遺物〔6〕



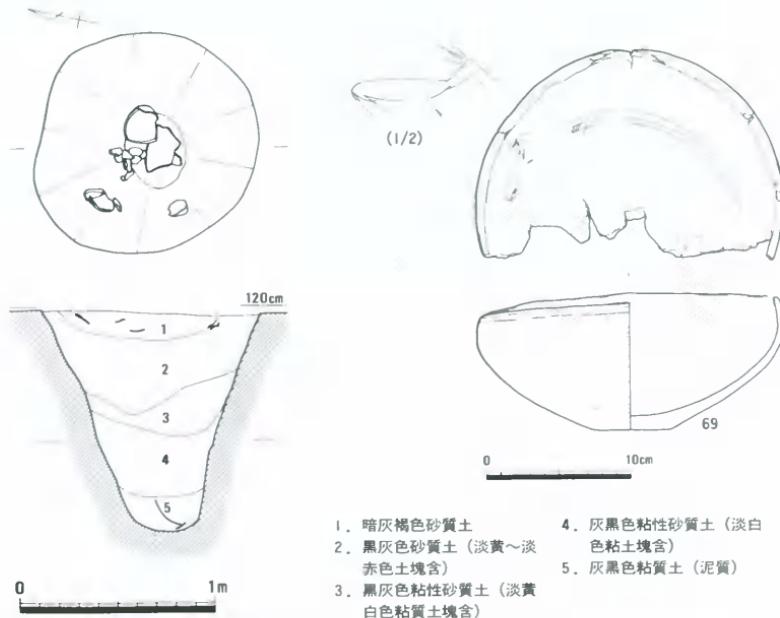
4層から下は全体にグライ化している。

遺物は全体で土器が約20片ほど出土しているのみで、おもに2層に包含されていた。図示できる2個の土器の特徴からは、百・古・Iの時期が考えられる。
(柳瀬)

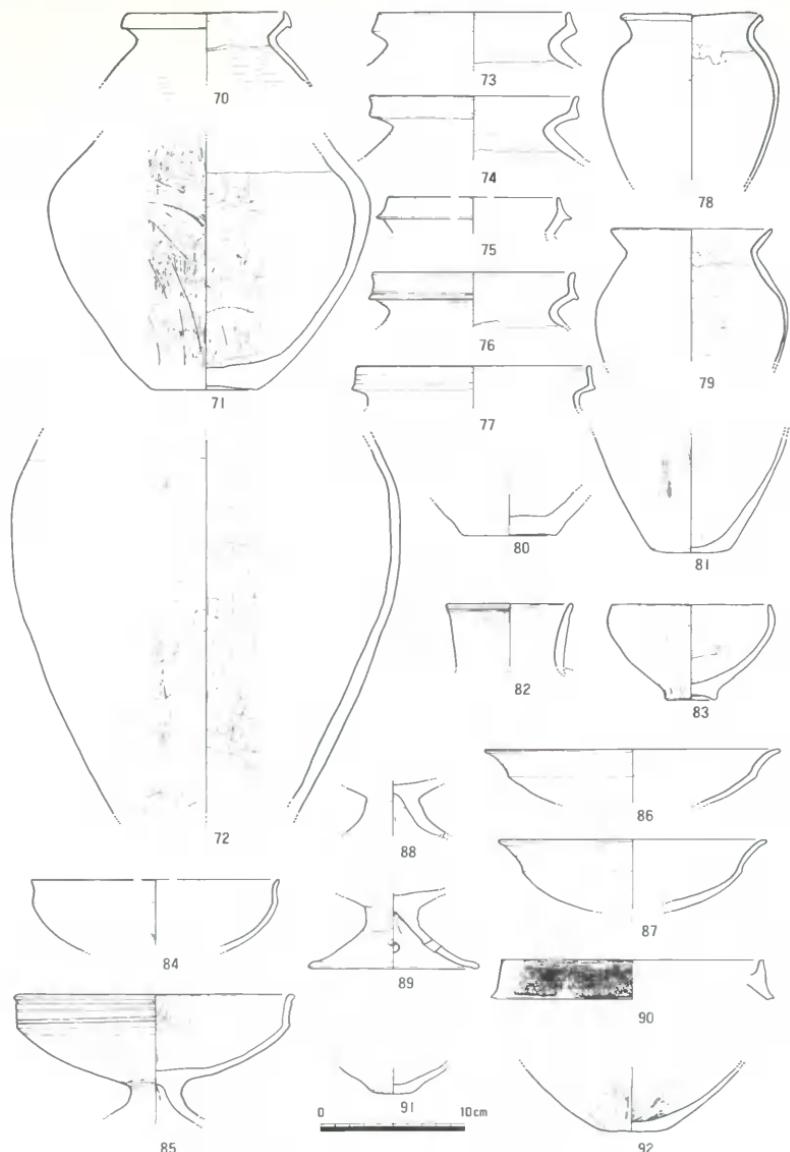
井戸105（第33・34図、図版13～15）

11G区西寄りに位置する井戸でG溝を切って作られている。上面径117cm、深さ114cmを測る。埋土は上半の1～4層が砂質土、5層が粘質土である。遺物は1・2層、5層を中心に出土しており、69が4層、71・72が5層からの出土であるほかは1層および2層上部からの出土である。

注目される遺物は鉢69であり、底部からゆるやかにひろがってのち口縁部がわずかに内傾する。内面中ほどの部分に体長4.9cmの鹿の絵が、その右側に平行の3本の線と短い斜めの平行線によって構成される文様が描かれている。細い線で丁寧に描かれており、鹿の頭部には角が表現されている。水辺の草と鹿を表現したものであろうか。岡山県下の弥生絵画資料で鹿を描いたものは少なく、この資料以外には岡山市津島遺跡出土の高杯、総社市堀遺跡出土の壺が知られているにすぎない。このほかに壺、甕、高杯等の破片が出土しており、その特徴から見て、



第33図 井戸105 (1/30)・出土遺物[1]



第34図 井戸105出土遺物[2]

第3章 第2節 遺構・遺物

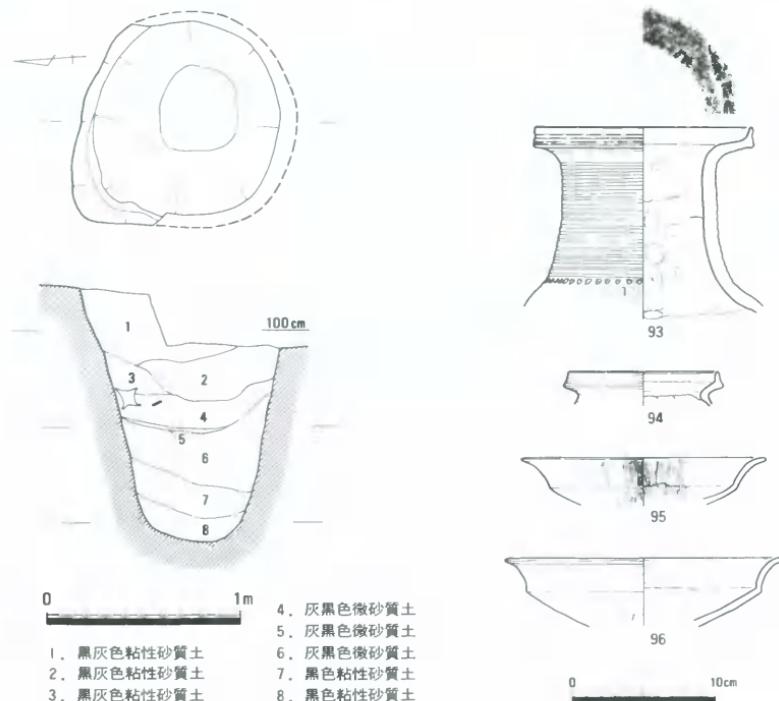
この井戸は井戸106や土壙117などと同じく百・後・IIIの遺構と考えられる。

(字垣)

井戸106 (第35図、図版16)

G溝の南側、12G区に位置する井戸である。遺構の上部は中央部から南側が掘削を受けている。上面は残存径100cmの不整円形を呈し、深さ132cmを測る。埋土は底部の7、8層とそれ以上の層とに区分でき、上層は中ほどの砂質土5層を境にしてさらに上下に区分することができる。7、8層は黒色粘質で井戸の使用時の堆積層とみられるが、1~4、6層は基盤層である黄白色粘質土のブロックを多く含んでおり、井戸の埋没はかなり急速であったことを示すと考えられ、特に1~3層は土層の状態からみて人為的な埋め土である可能性が考えられる。

遺物は少なく壺、甕、高杯の破片が出土しているのみである。93の壺は短い口縁受け部の内面に鋸歯文が施されている。遺物の特徴から見て百・後・IIIの時期と考えられる。 (字垣)



第35図 井戸106 (1/30)・出土遺物

井戸107（第36～38図、図版16～18）

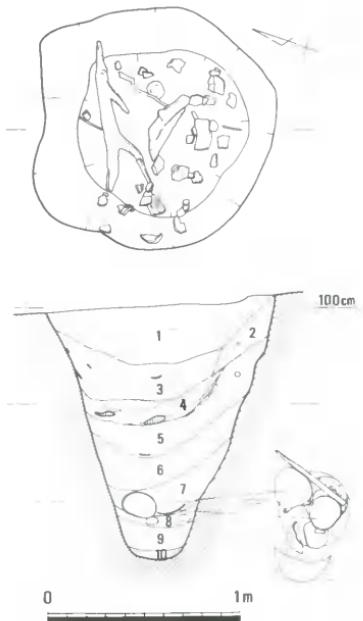
14G区西側にG溝を切って作られた井戸である。上面径134cm、深さ137cmと比較的大形であり、上面は不整円形をなす。埋土は1～3、4、5～8、9～10層に大別することができる。9、10層は井戸の使用期間に形成された層とみられ、砂層、シルト層で遺物は含んでいない。8層および7層は井戸が放棄された時点の層と考えられ、完形の甕をはじめ大形の土器破片が出土した。埋没がかなり進んだ段階で井戸跡が廃棄場所として利用されたようであり、その際に形成されたとみられる4層は、黒灰色を呈し多数の土器小破片や樹枝、円碟などを含むほか、赤黒褐色の有機質を多く含んでいる。このように、井戸の廃絶過程で廃棄場所として用いられた例はしばしば認められており、当調査区の井戸103も同様なありかたを示している。

117は7層から出土した完形の甕である。口縁部の約1/4を打ち欠き、頸部には細い縄が付けられており、おそらくこの井戸のつるべとして用いられたものと考えられる。丸味の強い胴部をもち、痕跡的な底部が認められる。内面の上半はヘラケズリ、下部は指頭押圧が施され、外面調整は縦のヘラミガキである。

これ以外に土器は壺、甕、高杯、小型器台、

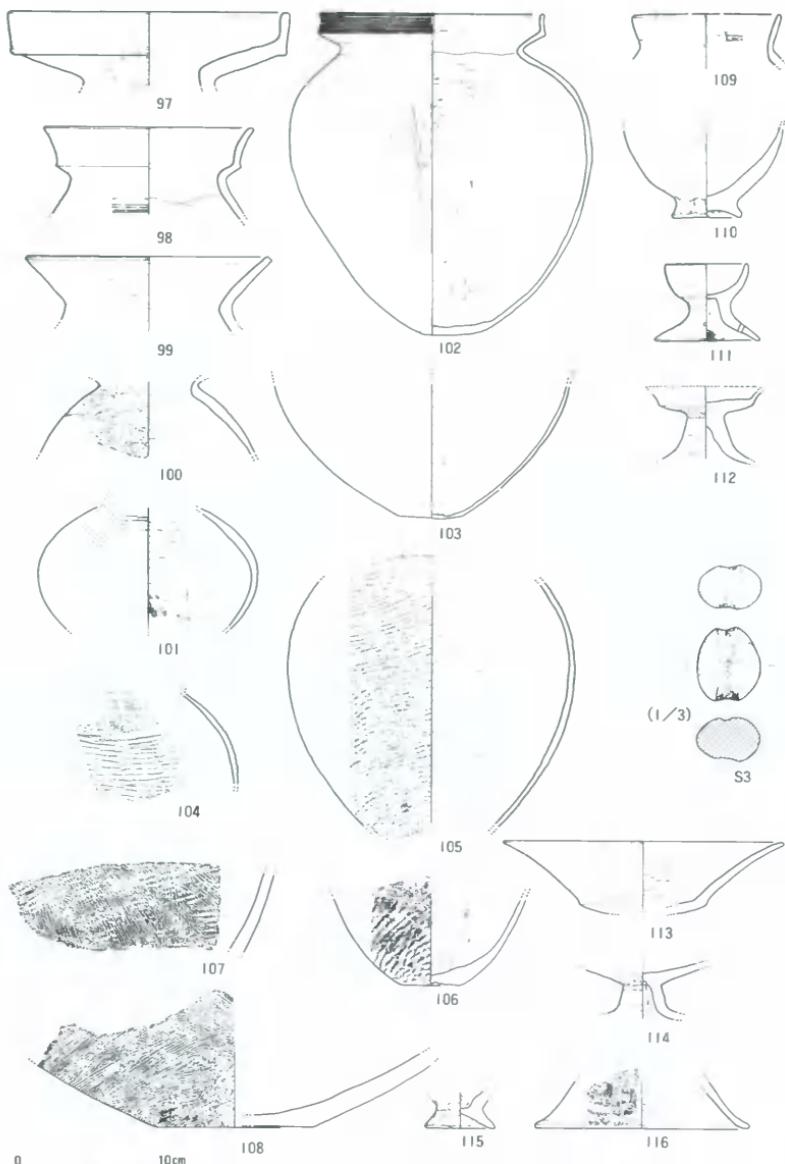
小形高杯などがあり、103～105・108・115・117が7、8層から、100・101・110・116が1～3層から、他が4層からの出土である。甕のうち102は117と同様な器形・調整をもつて対し、104～106では外面にタタキが施されている。鉢と考えられる107、108(同一個体)もハケメで大分が消されているが、やはりタタキが認められる。また、110～112はそれぞれ小形の鉢・高杯、小型器台であるが、いずれも精良な胎土が用いられている。なお、111は手づくねの小形高杯である。

このほかに上層から石錐S 3が、また、7

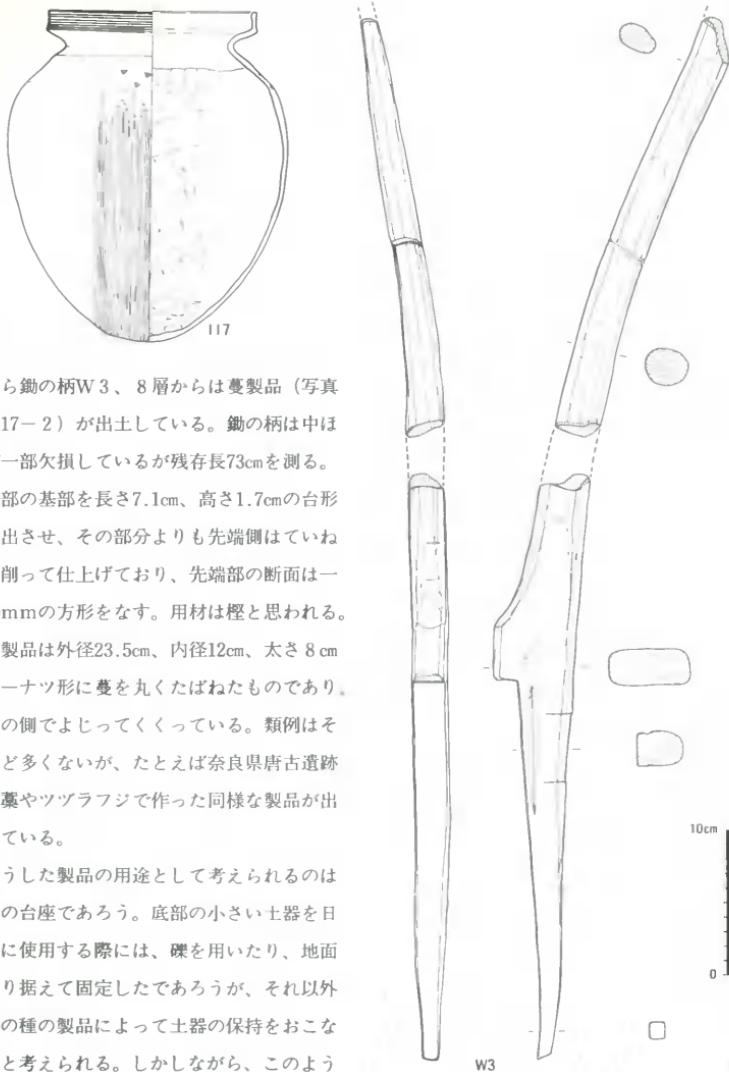


第36図 井戸107 (1/30)

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1. 暗灰色砂質土（黄白色土塊多含） | 5. 淡灰色粘性砂質土（白色砂質土塊含） |
| 2. 暗灰色砂質土（黄白色土塊含） | 6. 黒灰色粘性砂質土 |
| 3. 黑灰色砂質土（炭片含） | 7. 暗灰色粘性砂質土 |
| 4. 黑灰色粘性砂質土 | 8. 暗灰色粘質土 |
| | 9. 暗灰色砂 |
| | 10. 暗灰色粘土（シルト） |



第37図 井戸107出土遺物(1)



第38図 井戸107出土遺物〔2〕(1/4)

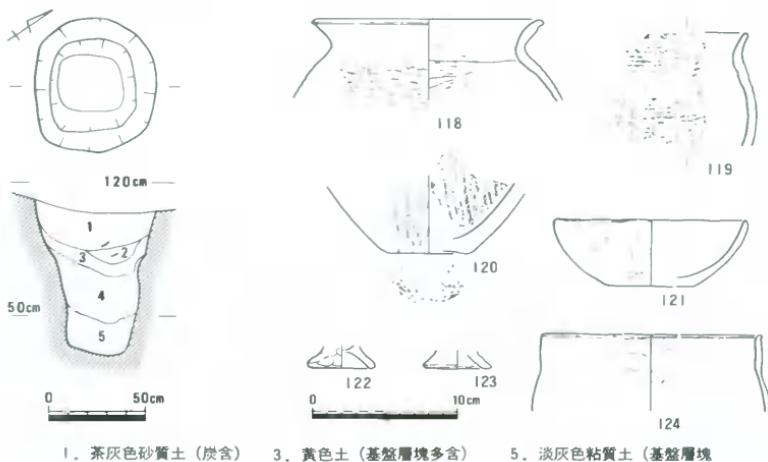
層から鋤の柄W3、8層からは蔓製品（写真図版17-2）が出土している。鋤の柄は中ほどが一部欠損しているが残存長73cmを測る。着裝部の基部を長さ7.1cm、高さ1.7cmの台形に突出させ、その部分よりも先端側はていねいに削って仕上げており、先端部の断面は一辺10mmの方形をなす。用材は櫻と思われる。

蔓製品は外径23.5cm、内径12cm、太さ8cmのドーナツ形に蔓を丸くたばねたものであり。一方の側でよじってくくっている。類例はそれほど多くないが、たとえば奈良県唐古遺跡から藁やツヅラフジで作った同様な製品が出土している。

こうした製品の用途として考えられるのは土器の台座であろう。底部の小さい土器を日常的に使用する際には、碟を用いたり、地面に掘り据えて固定したであろうが、それ以外にこの種の製品によって土器の保持をおこなったと考えられる。しかしながら、このようなきわめて腐朽しやすいものであるため、遺存した例が少ないのではないかと考えられる。

土器は百・古・Iに比定される。

(字垣)



第39図 井戸108 (1/30)・出土遺物

井戸108 (第39図、図版19)

10H区に位置する隅丸方形を呈する井戸である。径62~73cm、深さ約80cm（底は海拔29cm）を測る。埋土は自然堆積を思わせるが、3層は黄色の基盤ブロックが6~8cmのほぼ均等な厚さに堆積し、人の手が加った可能性もある。

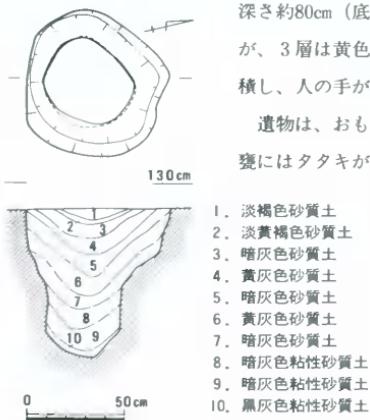
遺物は、おもに1~2層に約30片の土器片が含まれており、甕にはタタキがみられ、製塙土器片も2片出土している。甕120や

小形鉢121の底部は平底を残している。

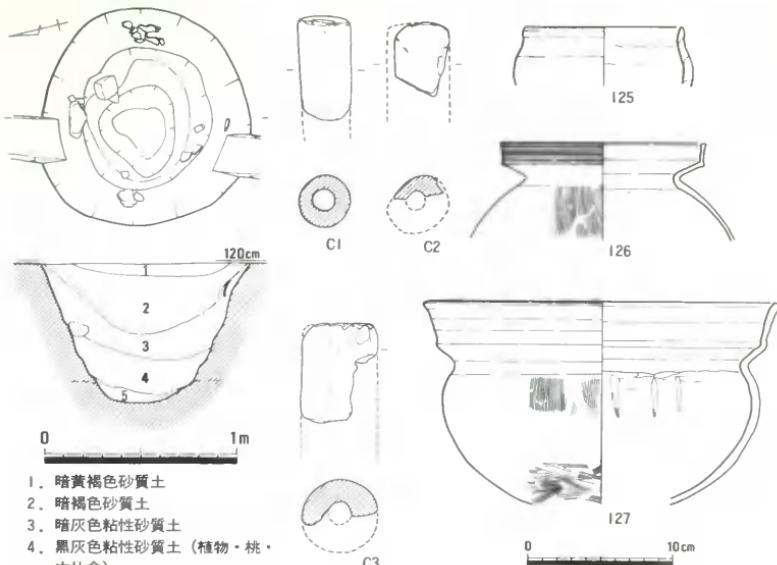
(柳瀬)

井戸109 (第40図、図版19)

13H区の南端、井戸110に近接して所在する。径72cm、深さ77cmを測り、掘り方は段をもって急角度に下がる。埋土は基本的に砂質土であり、急速に埋没したような感じを受け



第40図 井戸109 (1/30)



第41図 井戸110 (1/30)・出土遺物

加工小木片1点が出土した以外は全く遺物が出土していないため、時期を決定することができないが、おそらくは他の多くの井戸と同様、百・古・Iのころのものと思われる。（宇垣）

井戸110（第41図、図版20）

井戸109の北西に位置する井戸である。上面は径107cmで円形をなし、深さ71cmを測る。かなりゆるやかな掘り方をもち、底面は湧水砂層に達している。埋土は1～3、4、5層に大別でき、5層が井戸の使用時の堆積層、4層が井戸が放棄されたころの堆積層と考えられる。5層には植物質の有機物が、4層には有機物のほかに木片、桃核などが含まれている。

遺物は主に1～3層から出土しており、甕、小形の椀、鉢のほか、管状の土錐3点が出土している。鉢127はこの種の器形をもつものとしては比較的小形であるが、球形の体部と外反する口縁部をもつ。これらの土器は百・古・Iに位置付けられる。（宇垣）

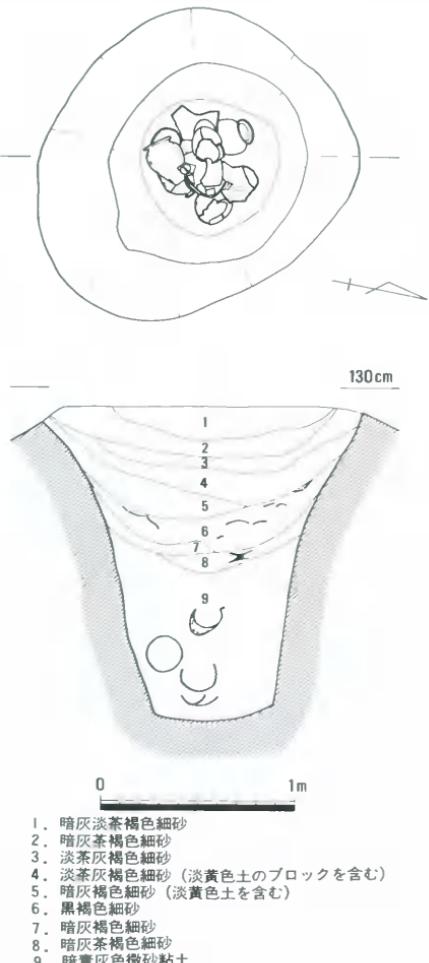
井戸111（第42～48図、図版21・22）

16 I区に位置する。掘り方の平面形が円形を呈する素掘りの井戸である。検出面での規模は、長径1.68m、短径1.47mを測るもので、検出面からの深さは1.64mを測る。断面を見ると、底面より中位までは垂直に近く掘られ、中位から上は外方に大きく開くものである。底面もほぼ

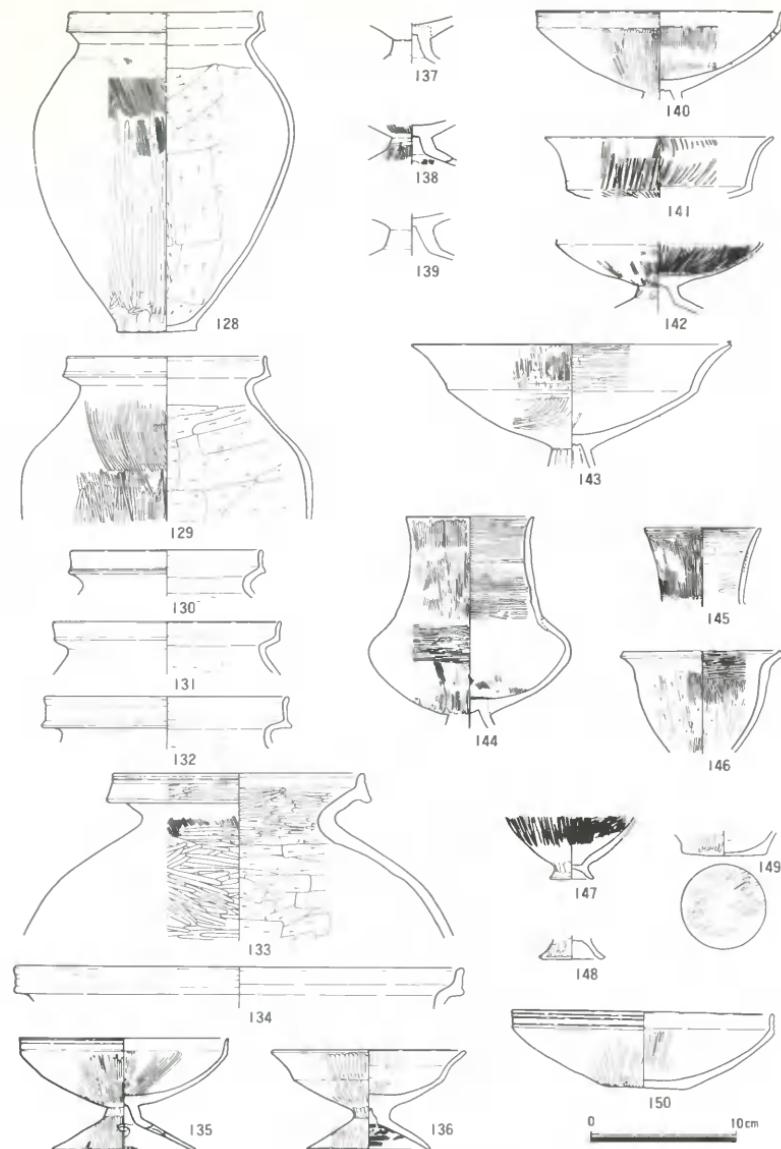
円形を呈するもので、長径72cm、短径68cmを測る。井戸の底面の海拔高は-40cmである。井戸は1~8層までは薄い堆積層を見せるが、9層にはその状況は見られない。出土遺物としては、土器を多量に出土している。遺物は大略上・中・下の3層に分けて取り上げた。第43図は1~5層までの出土土器であり、第44・45図は6~8層出土の土器である。第46・47・48図は9層出土の土器である。第43図は上層の出土遺物で、甕の口縁端部は上方に折れ曲がり、下端は突出

するものが多い。高杯は、口縁端が立ち上がるるものと、大きく外反するものがある。いずれも短脚で、内外面ともにこまかにヘラミガキが施されている。

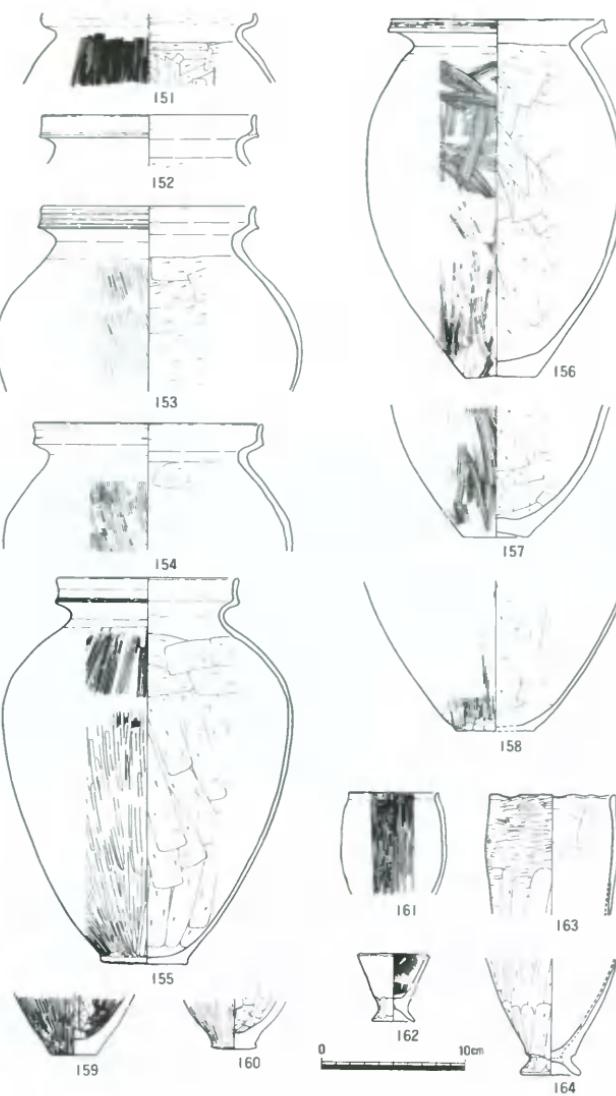
中層の土器（第44・45図）は、甕の口縁は上方に折れ曲がり下端は少し突出するもので、明瞭な稜をなす。155は、口縁部下端に数条の沈線が施される。163・164は製塩土器で、同一個体の可能性が強い。器形は、上半は筒状であり、下半は脚に向けて直線的にすぼまる。外面の上半には明瞭ではないがタタキが見られ、下半はヘラケズリである。下半のヘラケズリも、胴部の中位ではタタキの痕跡が見られるから、タタキはさらに下方まで施されていたものと考えられる。壺の頸部は、胴部に向けて開くもので、167は、ハケ目の後タテ方向のヘラミガキが施されるもので、胴部内面はヘラケズリが施される。高杯は、杯部が少し丸くなり口縁部は大きく外反する。杯部の内外面はヘラミガキが施される。脚柱は短く、脚端は丸い。脚部の外面はヘラミガキで、内面にはハケ目が施される。174は、脚の付く直口壺で、脚部は高杯と同様に短脚である。頸部は、上方に



第42図 井戸111 (1/30)

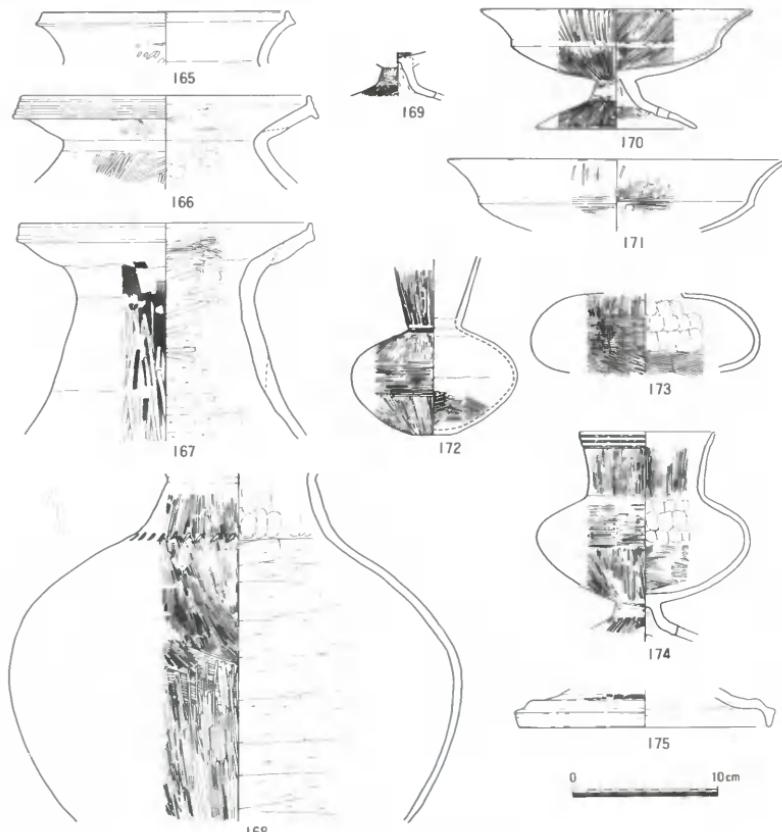


第43図 井戸111出土遺物(1)

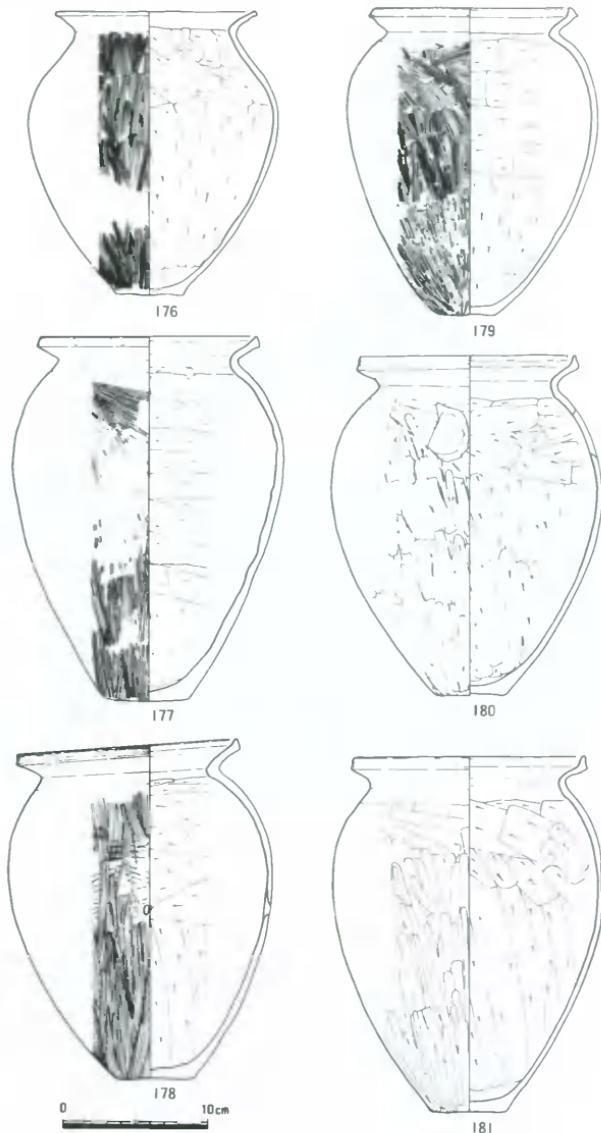


第44図 井戸111出土遺物〔2〕

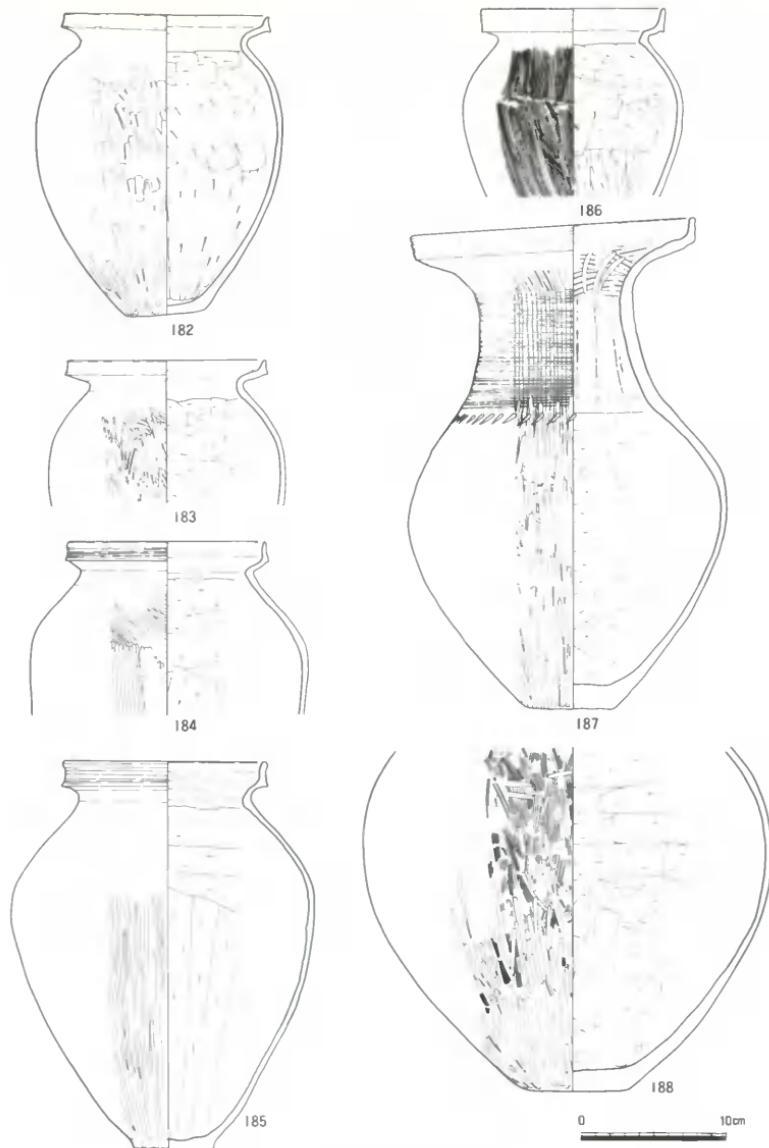
向て少し開くもので、頸部の直径が、胴部の直径に対し大きな比率を示す。第46・47・48図は9層出土の土器であり、井戸の底に近い位置から出土した。176は口縁部は外反し端部まで器壁の厚さが変わらないもので、外面はハケ目、内面はヘラケズリが施される。内面には一部に米の炭化したものが付着している。177～179は、口縁端部が少し肥厚するもので、内面はヘラケズリが施されている。外面は全体にハケ目が施されるものと、下半にヘラミガキの施されるものとがある。180～182は、口縁端部が少し上方に拡張するもので、外面は板状工具によるナデ、内面はヘラケズリが施される。184～186は、口縁端部が上方に折り曲がり、下端が少し突出するものである。187は、長頸壺で、頸部は下方に向けてわずかに開く。頸部にはハケ目の後



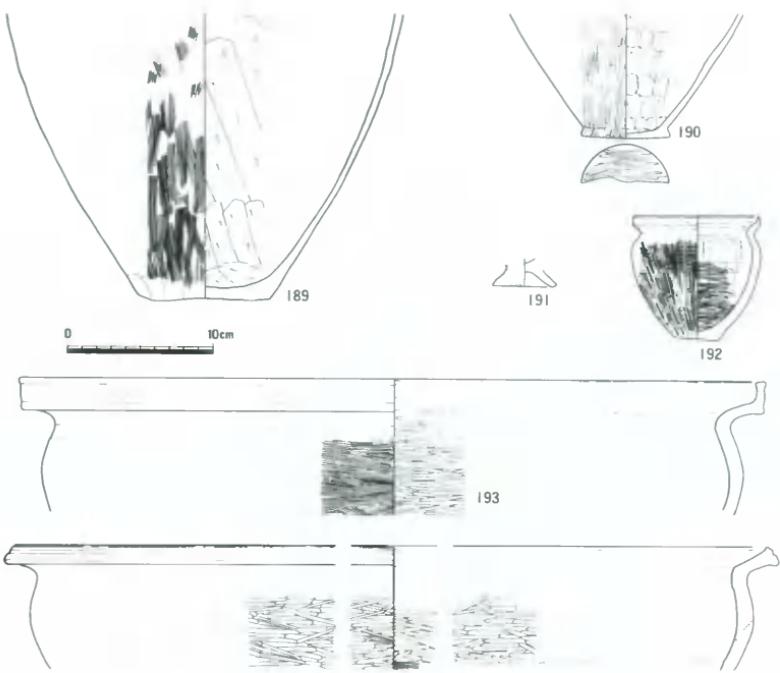
第45図 井戸111出土遺物(3)



第46図 井戸111出土遺物(4)



第47図 井戸111出土遺物[5]



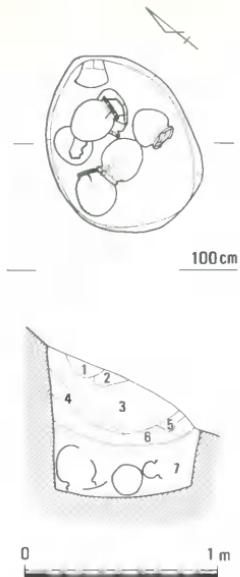
第48図 井戸111出土遺物(6)

に浅い凹線が施される。胴部は、内面へラケズリ、外面へラミガキが施される。193は、鉢である。口縁端部が上方に折れ曲がるもので、外面にはハケ目、内面にはヘラミガキが施される。194も鉢で、外方に折れ曲がった口縁部は、端部が少し上下に拡張する。口縁端部外面には浅い凹線が施される。胴部の内外面はヘラミガキが施されている。井戸の時期は、弥生時代後期末と考えられる。

(井上)

井戸112 (第49・50図、図版23・24)

16Ⅰ区に位置する。井戸111の南約2mの位置に検出した。低水路掘削の法面に検出したため上部は削平されている。井戸は素掘りで、平面形は楕円形を呈し、長径97cm、短径76cmを測る。井戸の壁は、ほぼ垂直に掘られており、検出面からの深さは75cmを測る。底面はほぼ平坦で、海拔高は-10cmである。底面からは、完形の土器がまとまって出土した。195は甌の底部である。わずかに底部が認められるもので、外面はハケ目、内面は指頭圧とヘラケズリが施される。



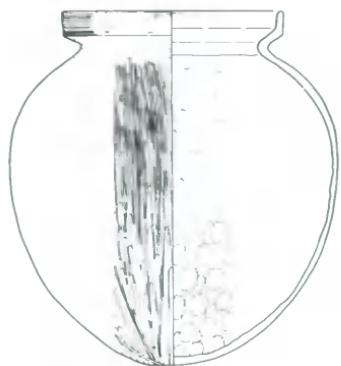
1. 暗灰色細砂 5. 暗灰色砂
 2. 淡灰色細砂 6. 灰色粘土
 3. 暗灰色細砂 7. 暗灰色細砂
 4. 暗灰色細砂

第49図 井戸112 (1/30)・
出土遺物

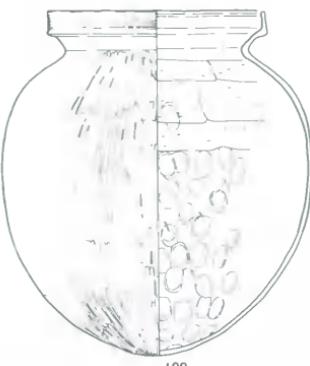
内側の壁面には部分的に炭化米の付着が見られ、外面には煤の付着が見られることから、炊飯に使用されたものと考えられる。196~201も甕で、完形もしくは、ほぼ完形の状態で出土した。196は、口縁端部が上方に折り曲げられ、外面に櫛描沈線が施される。胴部外面は、ハケ目後へラミガキが全体に施される。内面は、下半には指頭圧が見られ、上半は、頸部までヘラケズリが施される。底部は、わずかに認められ、ヘラミガキが施される。197は、196とほぼ同じであるが底部は196よりも明瞭に認められる。198は、上方に折れ曲がった口縁端が少し開くもので、外面には櫛描の沈線が施される。胴部外面は、上半はハケ目、下半はヘラミガキが施される。内面は、底部近くは明瞭な指頭圧が、他はヘラケズリが施されるが、肩部内面に一部指頭圧

が認められる。199は、胴部外面全体にヘラミガキを施すもので、底部は、わずかに認められる。内面は、頸部直下から肩にかけては明瞭なヘラケズリが見られる。下半部は、指頭圧の後ヘラケズリを施し、その上をナデているため、ヘラケズリの単位は判らない。200は、形態は199に似るが、胴部外面は、上半はハケ目、下半はヘラミガキが施される。底部もわずかに認められ、ヘラミガキが施される。内面は、頸部直下までヘラケズリが施されており、上半は明瞭なヘラケズリの痕跡を見ることができる。下半は、指頭圧の後ヘラケズリが施されている。201は、200とほぼ同じであるが、底部が200より明瞭である。胴部外面は、肩部がハケ目、下半はヘラミガキが施される。胴部内面は、頸部までヘラケズリが及んでおり、ケズリの痕跡は底部近くまで認められる。底部は、指頭圧の後、ヘラケズリが施されている。井戸の時期は、古墳時代の初頭と考えられる。

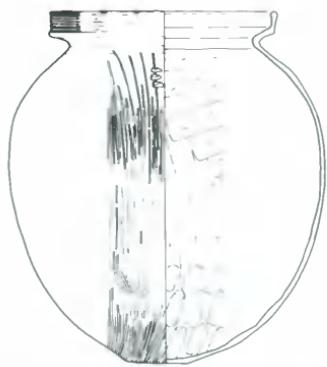
(井上)



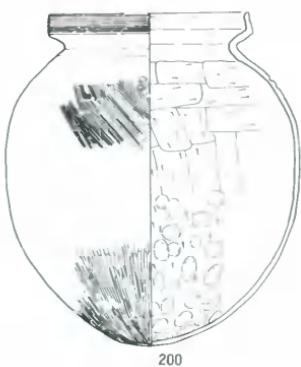
196



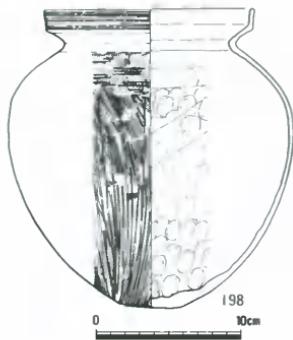
199



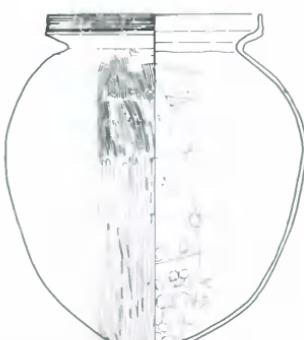
197



200

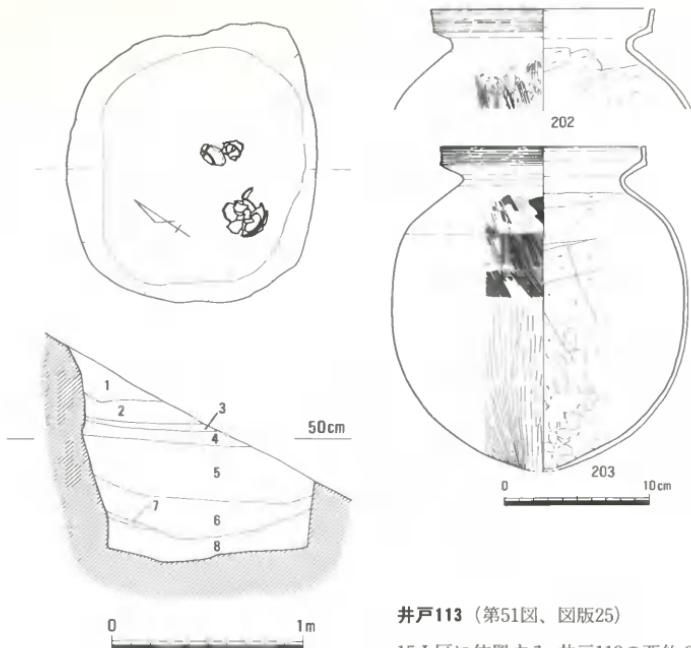


0
10cm



201

第50図 井戸112出土遺物



井戸113（第51図、図版25）

15 I 区に位置する。井戸112の西約8mの位置に検出した。この井戸も低水路掘削の法面に検出したため上半は削平されている。井戸の平面形は、円形を呈するもので、長径140cm、短径130cmを測る。井戸は素掘り

第51図 井戸113（1/30）・出土遺物

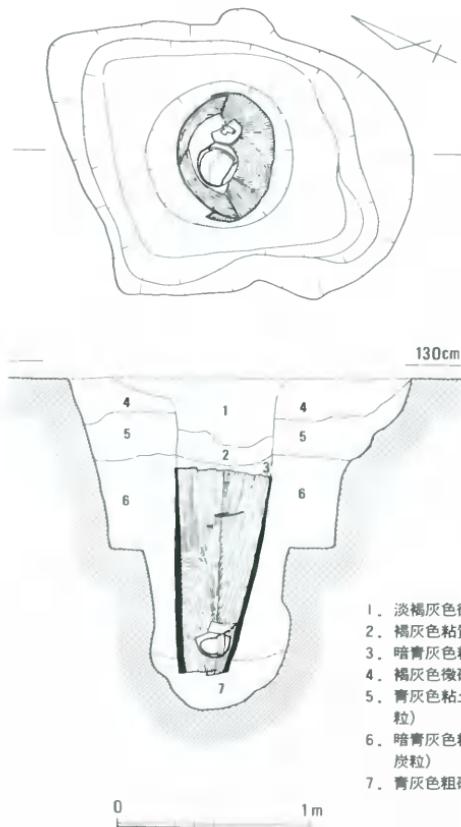
で、壁はほぼ垂直に掘られている。底面は、中央部が少し窪むが、全体的には平坦に掘られている。底面の平面形は、北側に直線的な部分もあるが、概略長円形を呈し、長径122cm、短径104cmを測る。底面からは、ほぼ2個体分の土器片が、それぞれまとまって出土した。202は、大きく外反した口縁部の端部が少し開きながら上方に折れ曲がるもので、外面には櫛描沈線が施されるものである。胴部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが施される。203は、外反した口縁部の端部が少し内傾しながら上方に折れ曲がるもので、外面には櫛描沈線が施される。胴部外面は、上半はハケ目、下半はヘラミガキが施される。内面は、底部付近は、指頭圧ヘラケズリ、上半は、ヘラケズリが明瞭に見られる。器形は、少し縦長の球形を呈するものである。底部については、土器が欠けているため不明である。井戸の時期は、古墳時代の初頭と考えられる。

(井上)

井戸114（第52図、図版26~28）

15Ⅰ区において検出された井戸である。検出面での平面形は約180×150cmの不定形な菱形を呈する。深さは最大で約170cmを測る。深さ約60cmで段がみられ、その面からは径約75cmの円形の掘り方となっている。

この円形の掘り方に納める形で井戸枠が設置されている。井戸枠は、割竹形の材を2個組み合わせて築いており、残存する上端で約50×65cm、下端で約25×40cmを測る。注目されるのはこの井戸枠材で、平面図の南側のものを第53図に示したが、その形状から木造船の一部を再利用したものと考えられる。

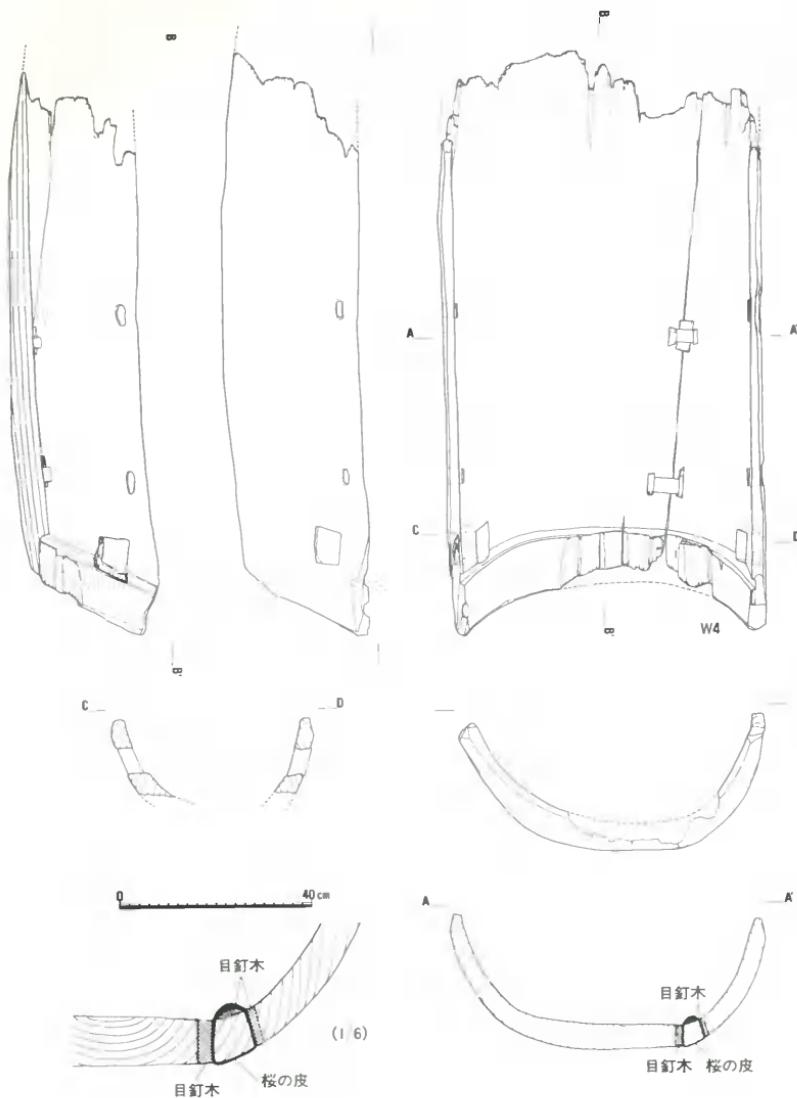


第52図 井戸114 (1/30)

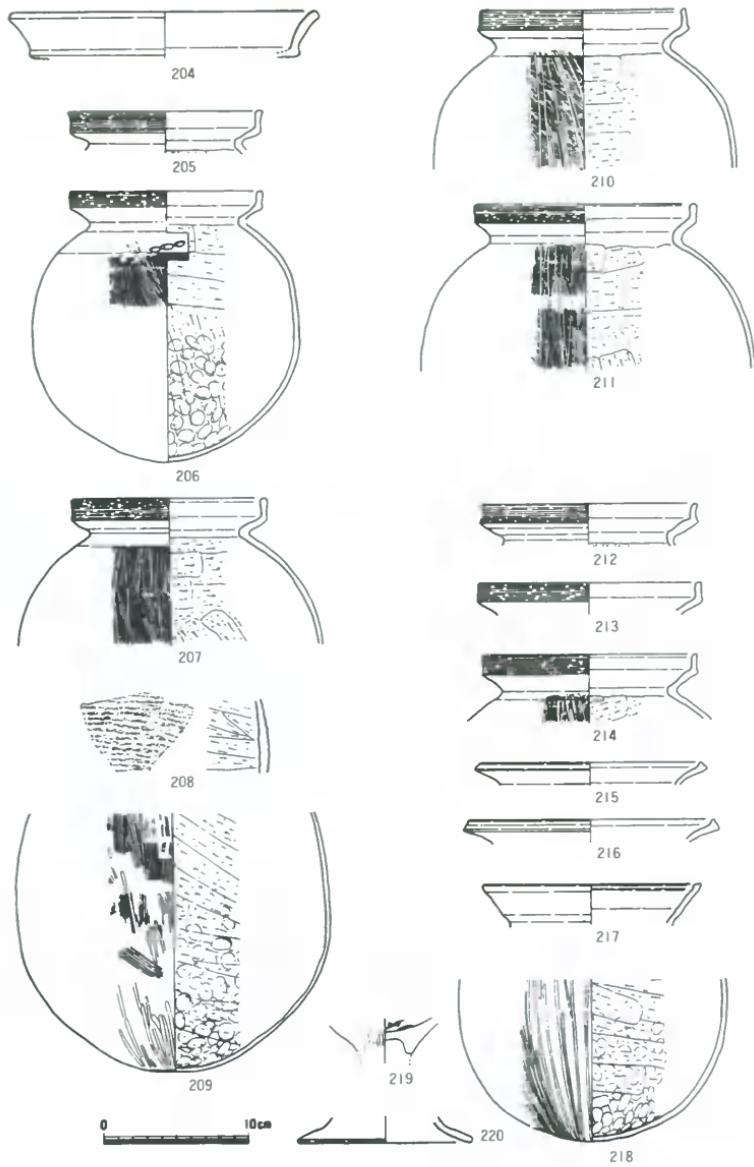
埋土については図の1~3層が廃絶後の埋土、4~6層は井戸枠の裏込めと考えられる。また、7層中にはおもに甕の小片が敷きつめられていた。

出土遺物は、井戸枠内および枠外から出土しており、土器（壺、甕、高杯）、土製品（土錘）、ヒヨウタンの果皮、種子（モモ、スモモ、ムクノキ）などがある。図示した遺物のうち、206・210・219は平・断面図に示した土器で、井戸枠内底面で出土したものである。また、208・209・211・212・214・217・220・221は7層から出土したものである。210の甕の底部内面に

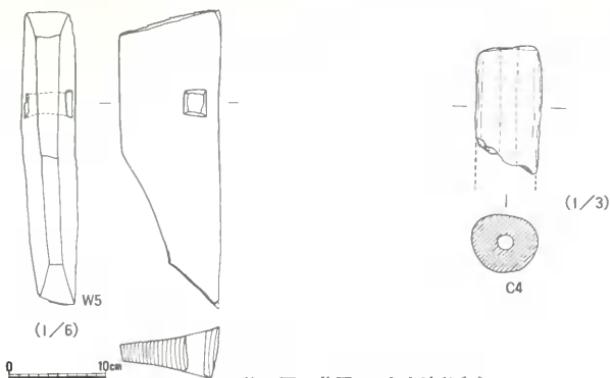
1. 淡褐灰色微砂
2. 褐灰色粘質微砂
3. 暗青灰色粘土（草の茎を含む）
4. 褐灰色微砂+黄色砂ブロック
5. 青灰色粘土+白色粘土ブロック（含炭粒）
6. 暗青灰色粘土+白色粘土ブロック（含炭粒）
7. 青灰色粗砂まじり暗青灰色粘土



第53図 井戸114 井戸枠 (1/12・1/6)



第54図 井戸114出土遺物〔1〕



第55図 井戸114出土遺物(2)

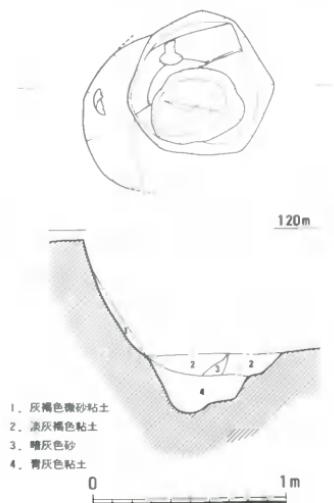
は炭化米が付着している。時期は百・古・Iと考えられる。

(平井泰男)

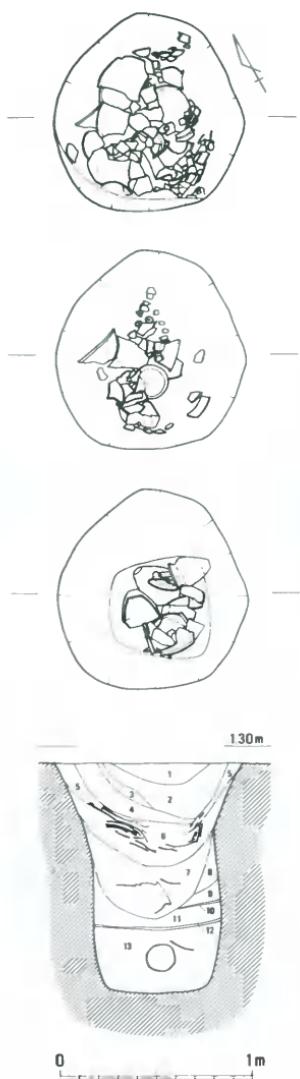
井戸115 (第56図、図版25)

140区に位置する。調査区のはば中央で検出したものであるが、工事中の置土とその除去によりそのほとんどを削平されている。元来は円形を呈する井戸であったと推測されるが、残存

するほとんどは底に近い部分である。井戸の推定長径は約90cmと考えられる。北壁側が最も深く残っており、検出面から底までの深さは90cmを測る。この北壁側は、円周の約4分の1が残存している。井戸は素掘りであり、その断面を見ると、底から上方へ開くもので、底面は窪んでおり平らではない。底面の海拔高は、26cmである。井戸の北東側の底部に一本の丸木を検出した。検出当初は、井戸の掘方に沿って丸く削られており、丸木の中心をくり抜くのではなく、外側をえぐり取ったものを組み合わせた井戸の可能性も考えた。しかし、丸木が、井戸の掘方の外方へ伸びて行くことが判明したため、それは、自然に埋没した丸木を偶然に掘り込んだものと判った。この丸木の直上から、胴部がたまねぎ形をし、口が上方に向けて少し開く直口壺



第56図 井戸115 (1/30)



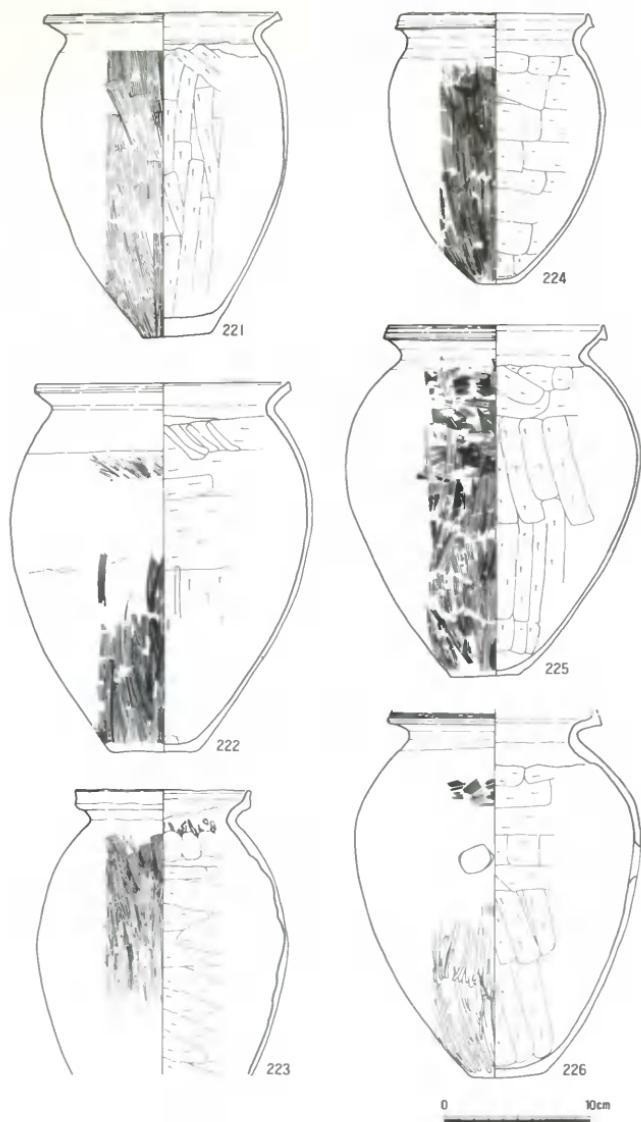
第57図 井戸116 (1/30)

が一個体出土した。井戸の時期としては、弥生時代後期末と考えられる。

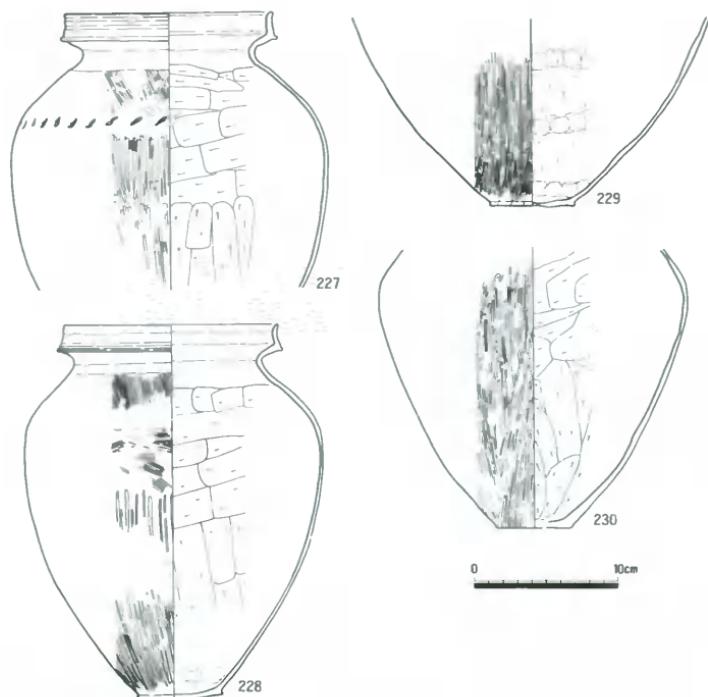
(井上)

井戸116(第57~59図、図版29~32)

16P区に位置する。検出面での平面形が、ほぼ円形を呈する素掘りの井戸で、長径101cm、短径98cmを測る。底面の平面形は隅丸の台形を呈し、長辺50cm、短辺35cmを測る。底面はほぼ平坦に掘られており、海拔高は4cmである。井戸は底から約3分の1まではほぼ垂直に掘られており、それより上には少し開く。検出面からの深さは、118cmを測る。出土遺物は、遺構を検出した時から多量の土器が出土した。第57図の上段は6層の遺物の出土状態である。中段は6層の遺物取り上げ後の土器出土状態で、7層を中心とするものである。下段は、底面、もしくは底面に近いものであり、層位としては13層出土の出土状態である。図示した出土遺物は、13層出土のものである。221は、外反した口縁端部が、わずかに厚くなるものである。胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリが施される。222は、外反した口縁の端部はその厚さに変化なく、端部外面に浅い凹線が施される。胴部外面は煤付着のため明瞭でない部分もあるが、ハケ目が施される。胴部内面は、下半は縦方向の、上半は横方向のヘラ

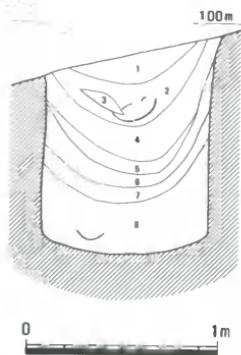


第58図 井戸116出土遺物[1]



第59図 井戸116出土遺物[2]

ケズリが施される。223は、外反した口縁部の端部が上方に伸ばされるものである。胴部の外面は、ハケ目後へラミガキが施される。内面はヘラケズリが施される。224は、外反した口縁部の端部が上方に引き伸ばされ、下端は、わずかに突出する。胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリが施される。225は、外反した口縁部の端部が上下に拡張するもので、端部下端は少し下方に突出する。胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリが施される。226は、大きく外反した口縁部の端部が上方に折れ曲がるものである。端部下端に数条の櫛描沈線が施される。胴部外面には、厚く煤が付着するため明瞭でない部分もあるが、上半はハケ目、下半はヘラミガキが施される。胴部内面はヘラケズリが施される。227は、大きく外反した口縁部の端部が上方に折り曲げられるもので、下端がわずかに突出する。口縁部外面には、浅い凹線が施される。胴部外面の肩部には刺突文が、その上側にはハケ目、その下にはヘラミガキが施される。胴部内面は、入念な



- | | |
|------------|-----------|
| 1. 暗灰色粘土 | 5. 青灰色粘土 |
| 2. 灰茶褐色粘土 | 6. 暗青灰色粘土 |
| 3. 灰茶褐色粘土 | 7. 青灰色粘土 |
| 4. 淡灰茶褐色粘土 | 8. 灰青色粘土 |

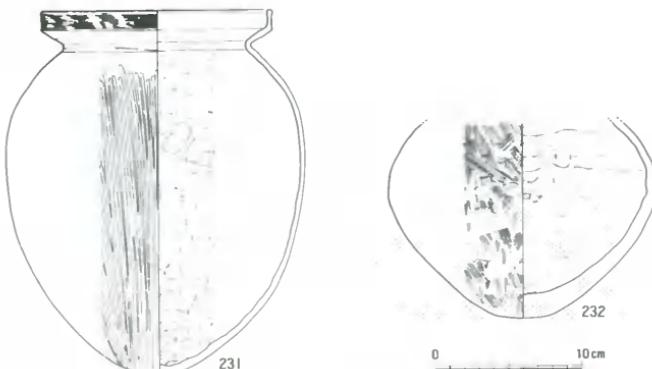
ヘラケズリが施される。228は、大きく外反した口縁部の端部が上方に折れ曲がるもので、下端は明瞭な稜をもつ。胴部外面は、上半はハケ目、下半はヘラミガキが、内面は、ヘラケズリが施される。229は、口縁部を欠くもので、胴部外面にはヘラミガキ、内面にはヘラケズリが施されるものである。井戸の時期としては、弥生時代後期後半と考えられる。

(井上)

井戸117 (第60図、図版32)

14P区に位置する。掘り方の平面形が楕円形を呈する素掘りの井戸である。検出面での規模は、長径150cm、短径90cmを測る。井戸は、底面から上方に90~100cmはほぼ垂直に掘られている。さらに上方は、外に向けて開く状況を呈するが、削平されていて詳細は不明である。検出面からの深さは110cmを測る。底面の形状は、長円形を呈するもので、長径98cm、短径90cmを測る。底面は、中央部が少し深くなるものの、ほぼ平坦である。底面の海拔高は-20cmである。井戸の時期は、出土した遺物からして、古墳時代前期と考えられる。

(井上)



第60図 井戸117 (1/30)・出土遺物

d 土 壤

土壤101 (第61図)

9G区の南西隅に検出された。平面形の約半分は、調査区外に延びる。さらに、一部側溝に切斷されて確認されたため、詳細は不明ながら2つの土壤が重複している可能性もある。側溝の断面観察によると、土壤は約70cmと比較的深いが、底は起伏がはげしく、底は一定していない。土層的には第6層の下部に面があり、第7～8層とは遺構的に区別されるのかもしれない。

遺物は甕・高杯などの細片が20数片出土しているのみで、高杯1個体のみ図示できた。

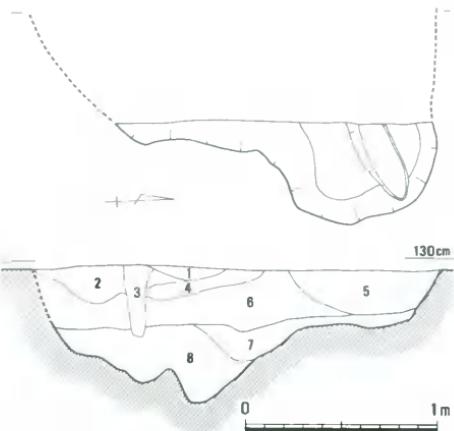
高杯はほかに長脚片も含まれているが、土壤の時期としては、百・後・IV期が考えられる。(柳瀬)

土壤102 (第62図)

11G区に検出された、ほぼ円形の土壤である。径約65cm、深さ約30cmを測る。この土壤は、浅いわりには土層が比較的細かく分層できる。第2層には炭片が含まれ、おもに第2～3層から、壺・甕・高杯の破片が出土している。

図示できた2点の土器についていえれば、百・後・IIIの時期を示す。

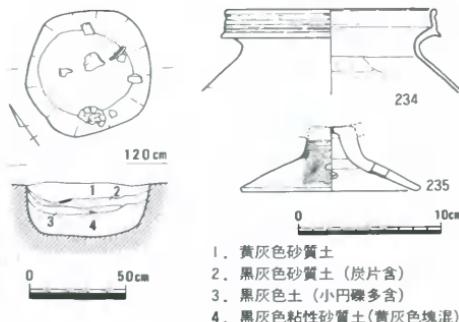
(柳瀬)



1. 黒灰色砂質土(擾乱土)
2. 黒灰褐色砂質土(黄色砂質土塊混)
3. 黑褐褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 暗黄褐色砂質土
6. 明黄色砂質土
7. 黄褐色粘性砂質土
8. 明灰色粘質土

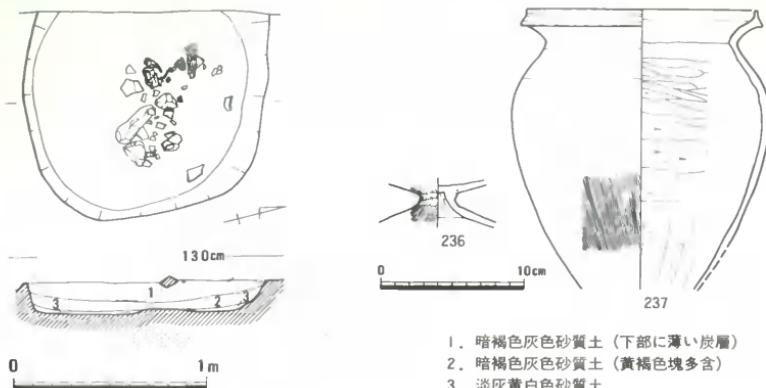


第61図 土壤101 (1/30)・出土遺物



1. 黄灰色砂質土
2. 黑灰色砂質土(炭片含)
3. 黑灰色土(小円窓多含)
4. 黑灰色粘性砂質土(黄灰色塊混)

第62図 土壤102 (1/30)・出土遺物



第63図 土壌103 (1/30)・出土遺物

土壌103 (第63図、図版33)

11G区に検出された、ほぼ円形の土壌である。土壌西側の一部は、現代の暗渠によって削平されている。径約125cm、深さ約15cmを測る。第1層の下面には薄い炭層が観察され、第1層中からは握拳大の石3個、炭片とともに土器が20片ほど出土している。

この土壌は、上部をいくらか削平されているとはいへ比較的浅く、また平面形態や遺物の出土状態からみても、とくに性格を明らかにするに至っていない。土器のうち、図示できるものは2片のみで、百・後・IIIの時期を示す。
(柳瀬)

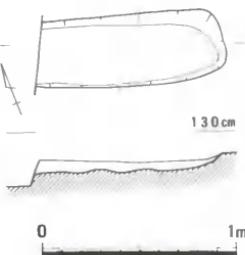
土壌104 (第64図)

この土壌は、西側の一部を暗渠によって切断され、さらに上部をいくらか削平を受けて、12G区に検出された。平面形は隅丸長方形を呈すと思われ、現存長98cm、幅37cm前後を測る。底部は多少の凹凸があり、削平されて浅いためか、埋土は灰色砂質土の一層しか看取できなかった。

遺物は甕の細片が2片出土しているのみで、その底部片からいえば、百・後期の終わり頃の時期を推定させるにすぎない。
(柳瀬)

土壌105 (第65~71図、図版34~38)

土壌は14G区に検出され、溝102に重複して存在する。平面形態はほぼ円形を呈し、上径120cm前後深さは約60cmを測る。底径は約60cmで、底面にはほとんど凹凸はなく、断面形は逆台形



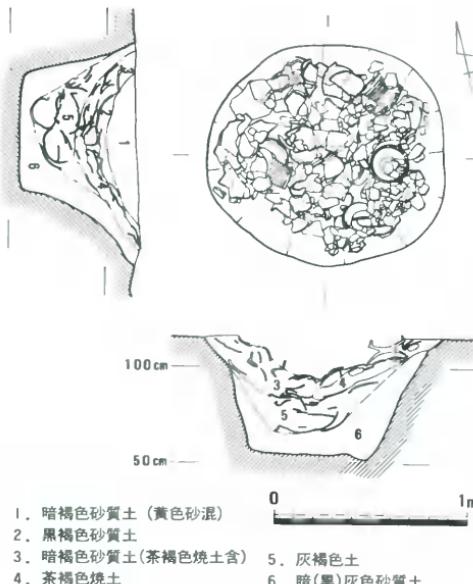
第64図 土壌104 (1/30)

を呈す。埋土は中央に窪むようく低く堆積し、とくに第3・5層中には完形を含む多量の土器が、押しつぶされたような状態で包含されていた。第4層は茶灰色の焼土粒および同色の焼土塊を多く包含し、土壤の南東側では第3層と5層の間層となっていた。第1層および第6層中からの土器の出土はない。

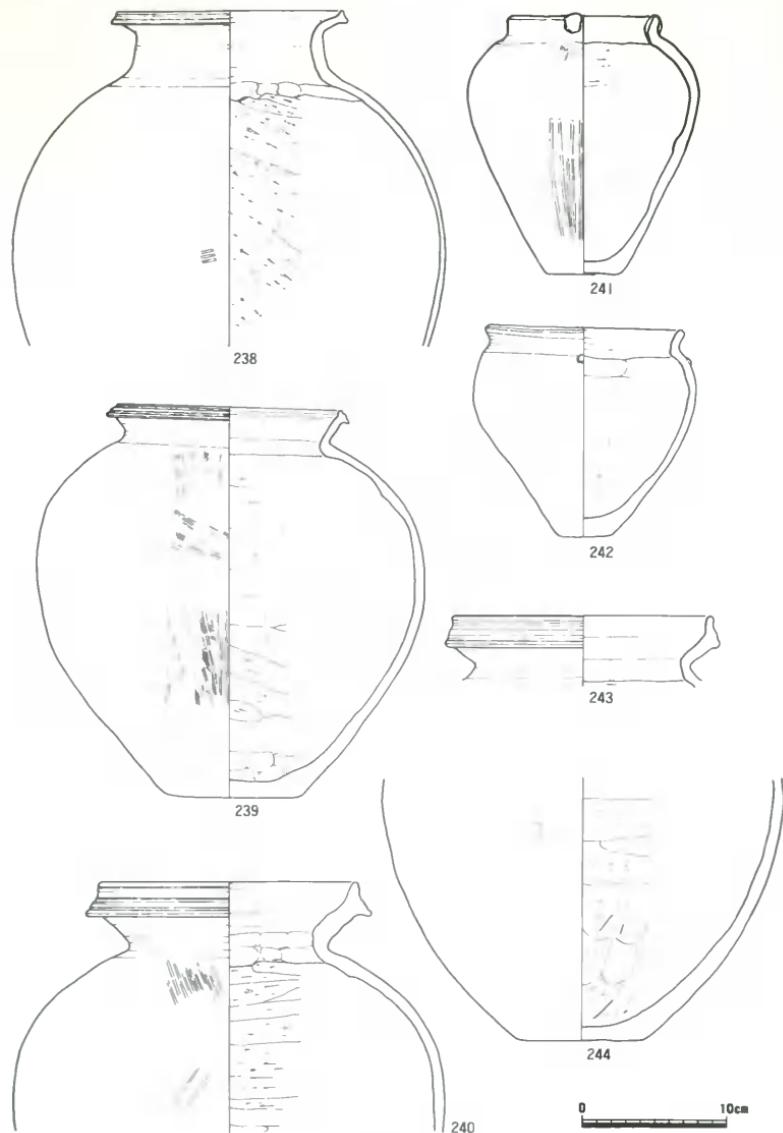
断面観察による土層の堆積状態からすれば、この土壤は少なくとも25cm以上上部を削平されているとみられ、第3・5層の土器溜りは第1層によって完全に覆われた一括性をもつと考えてよい。そし

て、土器片がぎっしり積み重なるような状況は、短期間にまとめて廃棄されたことをうかがわせる。また、これらの土器類の中に丹塗りなどの祭祀的なものは含まず、日常のそれも器表のいたみがほげしいよく使い古されたものが多い。これらのことから、この土壤のつくられた当初の目的が何であったにせよ、結果的にゴミ穴として使用されたことが考えられる。

土器は、壺・甕・高杯・鉢・椀などの器種があり、復元完形になる土器も多い。壺は小形の241・242と中・大形の238~240、243~255がある。後者はさらに、頸が短くまたは頸をもたず、口縁端部を内傾ぎみに上下に肥厚させる238~240、長頸の245~249、および短頸で口縁端部を大きく上方に拡張させる250~252の3タイプに大別される。甕は口縁端部の形態的な特徴だけをとっても、内傾ぎみに上部に肥厚させる256~258、ほぼ真上に肥厚させ端面に数条の退化した凹線をもつ259~262、同じく凹部だけの269、内傾ぎみに上下に肥厚させ端面に横ナデによる凹部をもつ265・266・272・273、真上に拡張させた口縁端面に横ナデによる2~3条の凹部をもつ267・271、「く」の字に外反する268、同じくわずかに端部に面をもつ274・275などに違いが認められる。高杯は口縁部が大きく外反する276~278と上方に拡張する281~284があり、小鉢は口縁部の外面に数条の細い凹線をもつ285・286やもたない287、台付の294などがある。ま



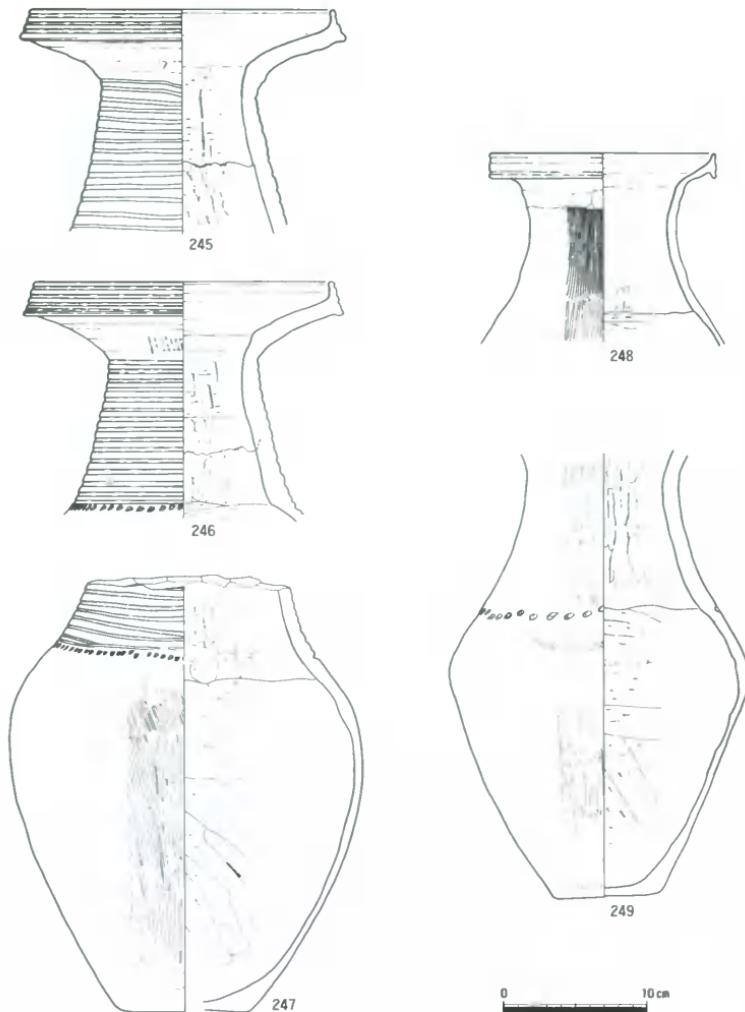
第65図 土壌105 (1/30)



第66図 土壌105出土遺物(1)

た、中～大形の鉢は口縁端部を斜め上下に肥厚させる289や上方に拡張させる290、斜め上方にわずかに肥厚させる291などがある。

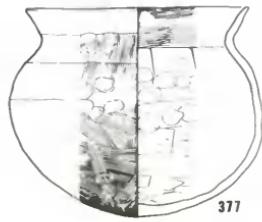
また、土器類の胎土や色調にはとくに際立った特徴はなく、県南部地域以外からの移入は認



第67図 土壌105出土遺物〔2〕

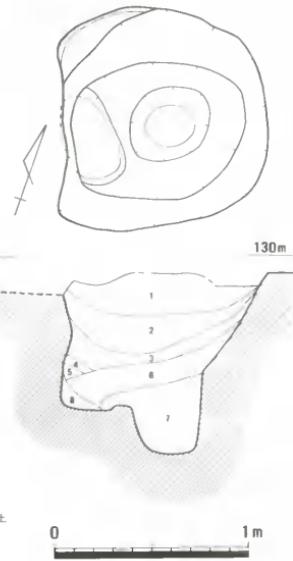
は南北を向く。375・376は、甕の口縁部から胴部にかけての破片である。375は、倒L字状に口縁部が折れ曲るもので、口縁部直下には、櫛描による多条の沈線が施されるものである。376は、櫛描沈線の下端に刺突文の施されるものである。374は、胴部の破片で、櫛による波状文が施される。土壙の時期は、弥生時代中期前半と考えられる。

(井上)



377

- 1 灰灰茶褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 灰茶灰褐色土
- 4 茶褐色土
- 5 淡黄褐色土
- 6 淡茶灰褐色土
- 7 喀灰褐色粘質土
- 8 淡黄褐色土



第96図 土壙127(1/30)・出土遺物

土壙127 (第96図)

14L区の南西隅に位置する。平面形は、隅丸方形を呈するもので、長辺112cm、短辺106cmを測る。底面は、二段になり、深い方が検出面より92cm、浅い方で64cmを測る。深い部分は、ほぼ中央部に、円形で掘られるもので、径40cmを測る。その西側に、約20cm浅く長円形の平面がある。長径50cm、短径28cmを測るものである。土壙の時期としては、古墳時代前期と考えられる。

(井上)

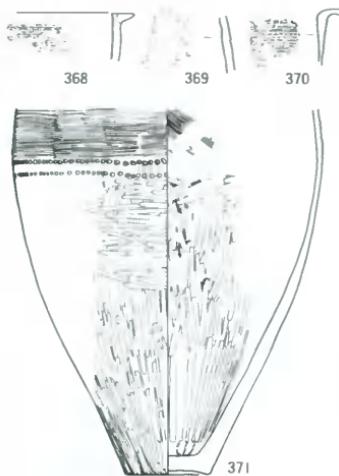
土壙128 (第97図、図版44)

14L区と14M区の境界で検出された。平面形が円形を呈する土壙で、長径202cm、短径184cmを測る。検出面からの深さは、120cmを測る。底面は平坦であり、平面形は、長円形を呈する。底面の規模は、長辺114cm、短辺70cmを測る。土壙の掘り方は、上方に向けて大きく開くもので、擂鉢状を呈する。底面には、土器1個体と、その上に梯子状に段を切り込んだ木器が出土した。木器は、段を切り込んだ側を下に向けて出土したもので、検出した全長は100cmを測る。土壙の時期は、弥生時代後期と考えられる。

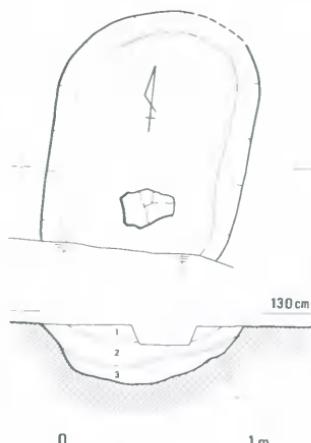
(井上)

土壙129 (第98図)

13M区と14M区の境界中央付近に位置する。平面形は橢円形で、長径は89cm、短径は73cmを



第94図 土壙124出土遺物



1. 淡灰茶褐色
2. 茶褐色（黄色土を少し含む）
3. 灰茶褐色

第95図 土壙126（1/30）・出土遺物

られる。

(井上)

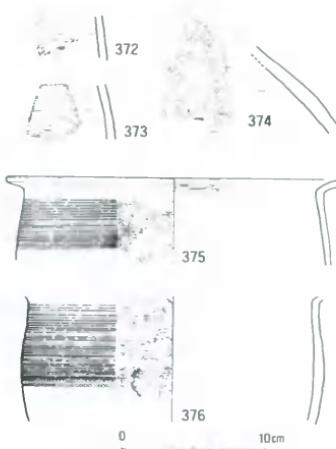
土壙125（第93図）

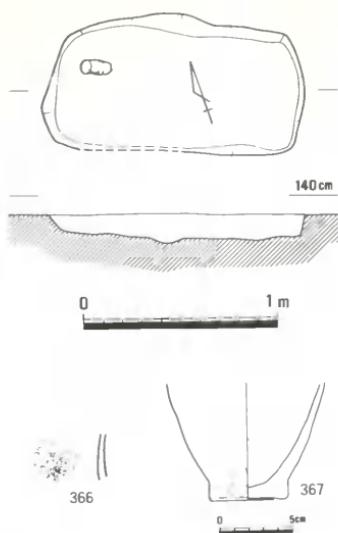
15K区の中央付近に位置する。平面形が橢円形を呈するもので、長径182cm、短径78cmを測る。西端部分で、土壙124（B）と重複して検出したもので、土壙125が古い。検出面からの深さは21cmを測る。底面は、中央部が少し窪むもので、壁は、ほぼ垂直に掘られている。土壙の長軸の方向は、西北西を向くものである。土壙の時期としては、弥生時代中期前半と考えられる。

(井上)

土壙126（第95図）

15K区の南東端で検出された。平面形が長円形を呈するもので、長径は124cm以上で、短径102cmを測る。検出面からの深さは28cmを測る。底面は浅く窪むもので、壁は、上方に向けて大きく開く。土壙の南側は、溝により切断されており、全体の規模は不明である。土壙の長軸方向はほ





第92図 土壙123 (1/30)・出土遺物

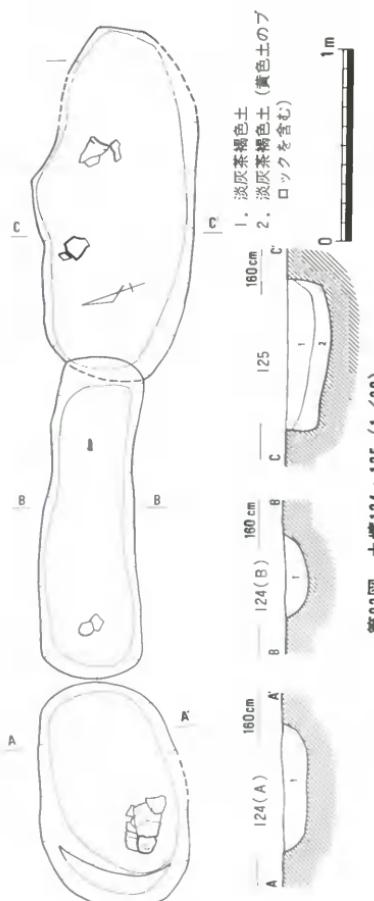
の深さは12cmを測るもので、底面は、ほぼ平坦である。371は、土壙内の西側に出土したものである。口縁部直下に櫛描による多条の沈線文が施され、沈線文の下端に刺突文が施される。胴部下半は、内外面ともにヘラミガキが施される。土壙の長軸方向は、西北西を向く。土壙の時期としては、弥生時代の中前期と考えられる。

土壙124 (B) は、長方形を呈する土壙で、長辺166cm、短辺52cmを測る。検出面からの深さは12cmを測る。底面は、丸く窪む。土壙の長軸の方向は、西北西を向く。土壙の時期は、壙内からの出土遺物からして、124 (A) とはほぼ同時期と考え

されるものである。367は、内・外面に指頭圧痕の施されるものである。土壙の時期としては、弥生時代中期と考えられる。(井上)

土壙124 (A) (B) (第93・94図)

15K区の中央付近で検出された。土壙124 (A) は、平面形が橢円形を呈するもので、長径118cm、短径78cmを測る。検出面から



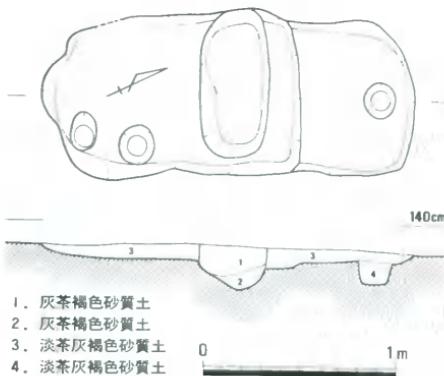
第93図 土壙124・125 (1/30)

は、弥生時代と考えられる。

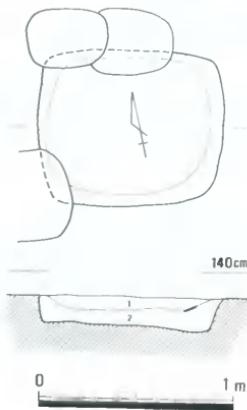
(井上)

土壤121 (第90図)

15K区の北西部で検出された。平面形が長方形を呈するもので、長辺190cm、短辺82cmを測る。検出面からの深さは、最も深い部分で10cmを測る。残存が浅いため、壁体の形状は不明であるが、底面は、ほぼ平坦であるが、北端から約60cmで段がつく。土層断面の観察では埋土に差異はない。



第90図 土壌120・121 (1/30)



第91図 土壌122 (1/30)

・出土遺物

向くもので、時期としては、弥生時代中期前半と考えられる。

(井上)

土壤122 (第91図)

15K区の北西部に位置する。平面形が、長方形を呈する土壌で、長辺98cm、短辺80cmを測る。検出面からの深さは、16cmを測る。壁は、上方に向けて少し開くものの、直線的に掘られている。底面は、ほぼ平坦であるが、壁に沿う部分で少し窪む状況を呈している。364・365は、土壌内からの出土遺物であるが、甕の上半部分である。口縁部直下に多条の沈線を施すものである。土壌の長軸は、ほぼ東西を

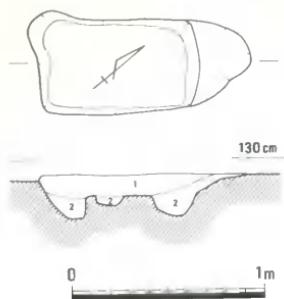
かったが、この部分で二つの土壌が重複している可能性もある。土壌の長軸方向は、北北東を向くもので、時期としては、弥生時代中期

と考えられる。

土壤123 (第92図)

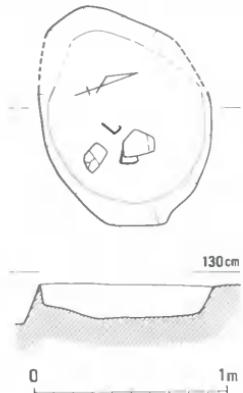
14K区の東端で検出された。平面形が、長方形を呈するもので、長辺132cm、短辺68cmを測る。検出面からの深さは、12cmを測る。土壌の壁は、上方に向けて少し開くもので、底面は、ほぼ平坦である。土壌の長軸は、北北西を向くものである。366は、外面に多条の横描沈線の施

(井上)



1. 灰茶褐色砂質土（炭片を少し含む）
2. 淡灰茶褐色砂質土

第88図 土壌118 (1/30)



第89図 土壌119 (1/30) ·

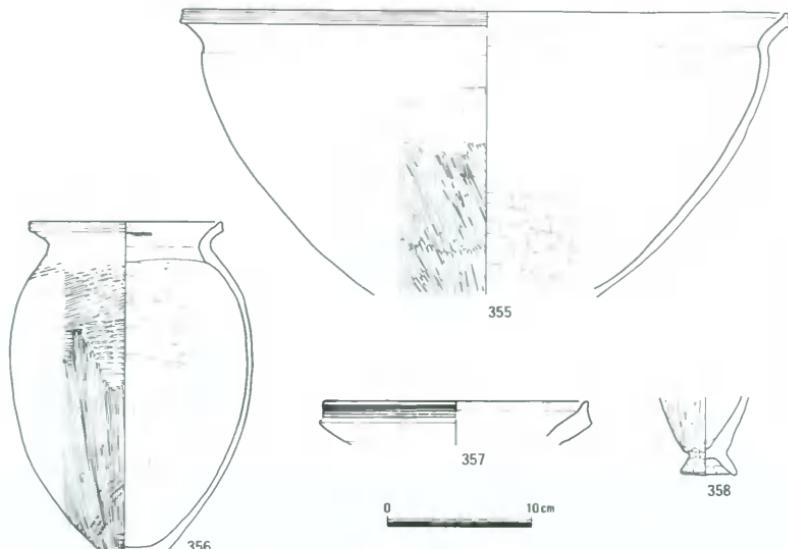
出土遺物

されたものである。口縁部直下には、横描多条の沈線が施されるものである。360は、内面にヘラミガキが施される。363は、内外面にヘラミガキが施されるものである。362は、条線文の下端に円形の浮文が貼付されたものである。土壌の時期としては、弥生時代中期前半と考えられる。

(井上)

土壌120 (第90図)

15K区の北半に位置する。長方形を呈する土壌で、長辺79cm、短辺38cmを測る。土壌121のはば中央に検出したもので、検出面からの深さは22cmを測る。土壌の壁は、ほぼ垂直に立ち上がるものであるが、底面は丸く窪む。土壌の長軸方向は、ほぼ北西を向くものである。時期として

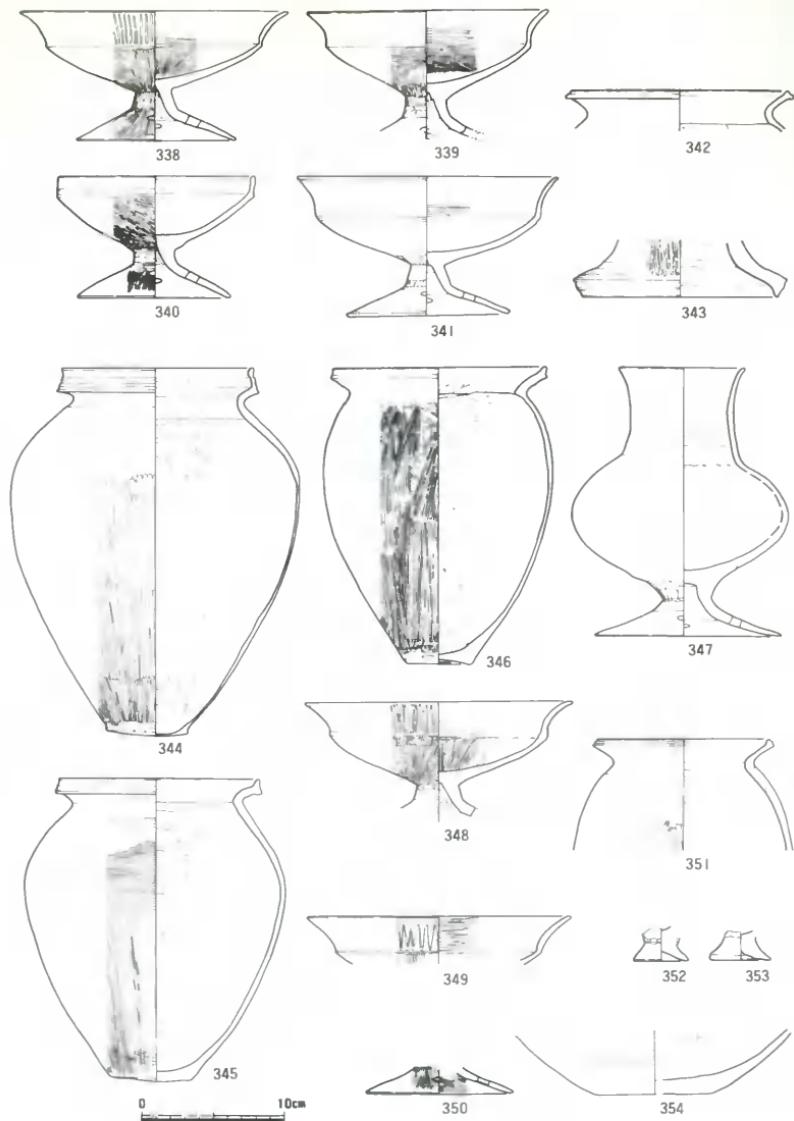


第87図 土壙117出土遺物(2)

れたもので、344～348からなる。甕3点のほか高杯、脚付き直口壺などであり、高杯348の脚部が欠損し、344が約 $1/2$ の残存率である以外は、いずれも完形に復元された。土器溜り3は9層の上面に形成されたもので355～358からなり、甕356は完形、鉢355は全体の $1/3$ の大形の破片である。これら以外の土器は上・中層から出土したものであり、9、10層からはほとんど遺物は出土していない。

土器溜り2、3から出土した甕のうち、344は発達した口縁部と薄い器壁をもち、外面および底面に縦のヘラミガキを施した、該期に一般的にみられる形態のものである。それに対して345・346・356は口縁部が上方に若干つまみ上げられる程度であり發達しておらず、器壁も344に比べてかなり厚くなっている。さらに、345・346では胴部下端に縦のハケメに先行するタタキが認められ、底面にはハケが施される。356では縦の荒いハケに先行するタタキが胴部上半と下端に認められ、底面の調整はミガキである。しかしながら胎土・色調の点ではこれらに大きな差異は認められず、あえていえば344・346が明灰褐色で砂粒が少なく、345・356が赤褐色で砂粒がやや多いとすることができる。こうした差異について、ここで評価を下すことは容易ではないが、今後、土器の生産と流通を考えるうえで良好な素材となると思われる。土器溜り1～3の形成は若干の時間差を考えることができるが、いずれも百・後・IIIに収まるものである。

(宇垣)



第86図 土壌117出土遺物(1)



第84図 土壌
116出土遺物

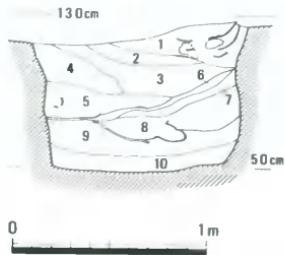
に含めざるをえなくなった。土壌115は長さ205cm、幅78cm、深さ36cmの細長い土壌で底面は狹くなる。埋土は上層が黒褐色、下層が灰黒色の砂質土である。無頬壺325および壺326~328、甕330~332・335~337が出土した。甕331・332は口縁部を外方に屈曲させ、胴部最大径部分に列点文を施すものである。また、甕底部片のうち335・337には焼成後に穿孔されている。土器以外にサヌカイト製の錐が出土している。

土壌116は115に切られる長さ推定230cm、幅58cm、深さ34cmの土壌で、底面は土壌115よりも若干高くなっている。埋土は上・下層とも灰黒色砂質土である。土器は甕329・333・334で、329は短かく斜め

上に屈曲する口縁部をもち、胴部上側に櫛描きの平行沈線文と波状文を施している。333は円形の列点文を施した破片、334は櫛描きの平行沈線文をあらく施し、その下側に列点文を施している。土壌115が百・中・Iの古い段階、土壌116が百・中・Iの新しい段階に位置付けられる。

(宇垣)

土壌117 (第85~87図、図版42・43)



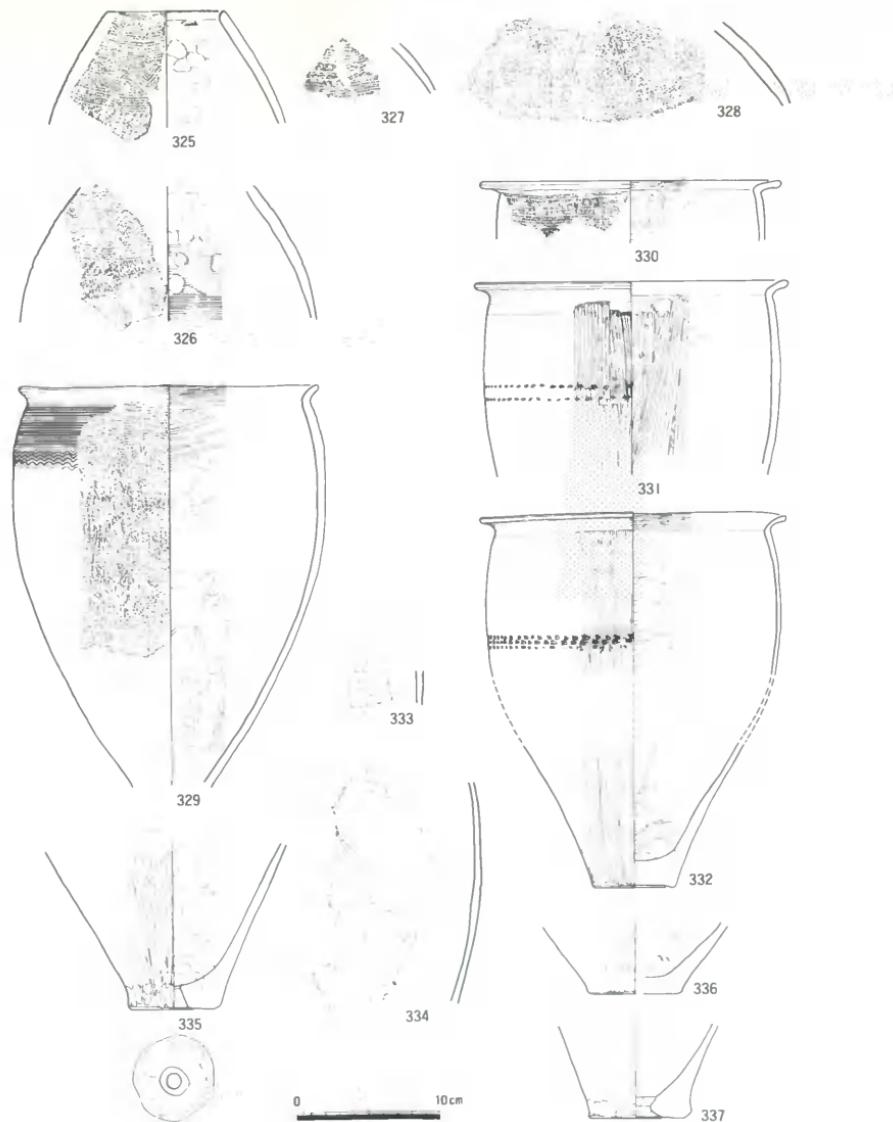
1. 黒褐色粘性砂質土 (焼土片多含)
2. 黒黒褐色粘性砂質土 (焼土片少含)
3. 暗黄色砂質土
4. 暗黄色砂質土 (白色粘土多含)
5. 暗黄色砂質土
6. 暗赤色焼土層
7. 黑褐色粘質土
8. 黑灰褐色粘質土 (淡白褐色土塊含)
9. 明黃灰色粘性砂質土 (白色粘質土塊含)
10. 暗灰色砂質土 (暗灰色粘質土塊含)

第85図 土壌117 (1/30)

13J区南端で検出した長径220cm、短径117cmの楕円形の土壌である。深さ155cmの円筒形をなし、平坦な底面とはほぼ垂直で部分的に袋状をなす壁面からなる。本来は貯蔵穴であったと考えてよいであろう。

埋土は上層1~5層、中層6~8層、下層9、10層に大別でき、上層はさらに1、2層とそれ以下に区分できる。埋土のうち1層には焼土が多量に含まれており、2層にも認められる。6層は焼土層であり、9層の上面には部分的に炭屑が認められた。また、8~10層には壁面の崩壊によると考えられる基盤層ブロックが含まれている。

埋土中の3箇所から土器溜りが検出された。土器溜り1は1層中に形成されたもので、338~343からなり、高杯を主体とする。340・341は完形、338・339も一部欠損している程度である。土器溜り2は5層の下面に形成さ



第83図 土壌115・116出土遺物

埋土は基本的に黒灰色土で、1、2、4層には炭片が含まれ、特に2層で顕著である。また、3～5層には基盤層のブロックが認められる。

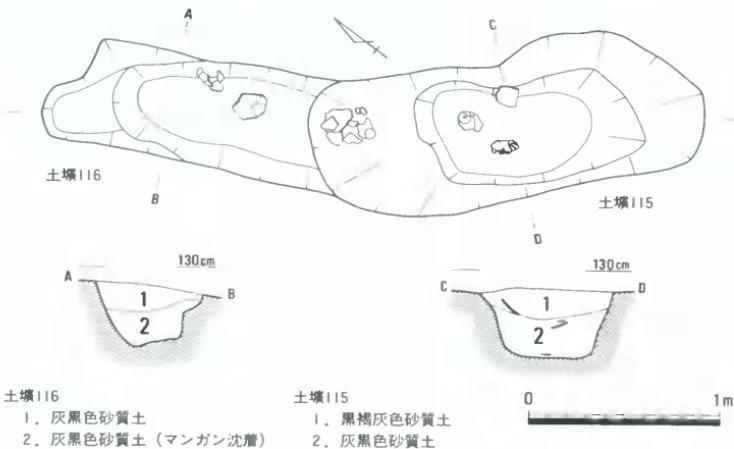
遺物は主に2、3層から出土しており、土器の他に石鎚2点、2層下面からは小骨片が出土している。土器はいずれも百・中・Iの古相で、壺、甕からなる。壺314には櫛描きの平行沈線文と波状文、列点文が認められる。甕は口縁部が強く屈曲して外反する316～319と、貼り付けによって逆L字形に仕上げられている320がある。口縁下には幅広く櫛描き平行沈線が施されており、その下には315では刺突列点文が、318では列点文、320では櫛描き波状文が施されている。内面調整はいずれもヘラミガキで部分的に指頭押圧が認められる。外面調整はタテハケで315、318ではさらにヘラミガキが施されている。暗黄褐色～淡橙褐色を呈し、石英、長石の砂粒を少量含んでいる。なお、2点の石鎚はいずれも基部の一部と先端部を欠損している。

こうした長方形の土壙として、これ以外に115・116がある。規模、形状からみて墓壙である可能性も考えられるが、かなりの量の土器片が含まれており、廃棄壙と考えるのが妥当であろう。

(宇垣)

土壙115・116 (第82～84図、図版41)

12J区から一部K区にかけて所在する2基の土壙である。縦に重なって切り合った状態であり、検出時に単一の遺構であると誤認して掘り下げたため、土壙116の土器の一部を土壙115



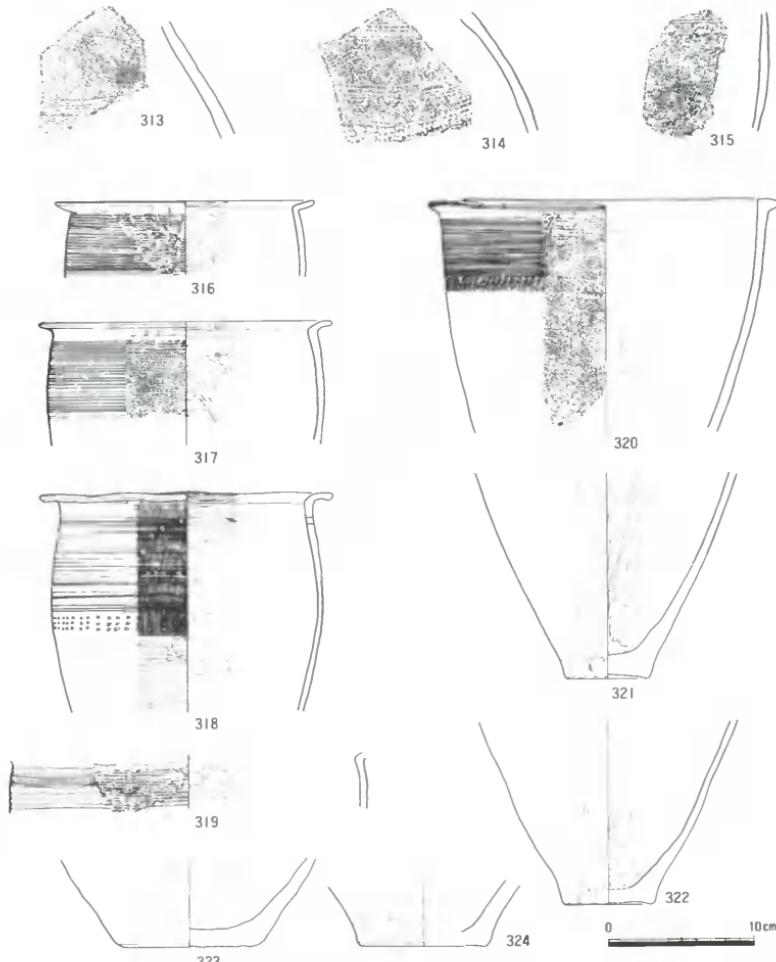
第82図 土壙115・116 (1/30)

じ百・中・Iに比定できる。

(字垣)

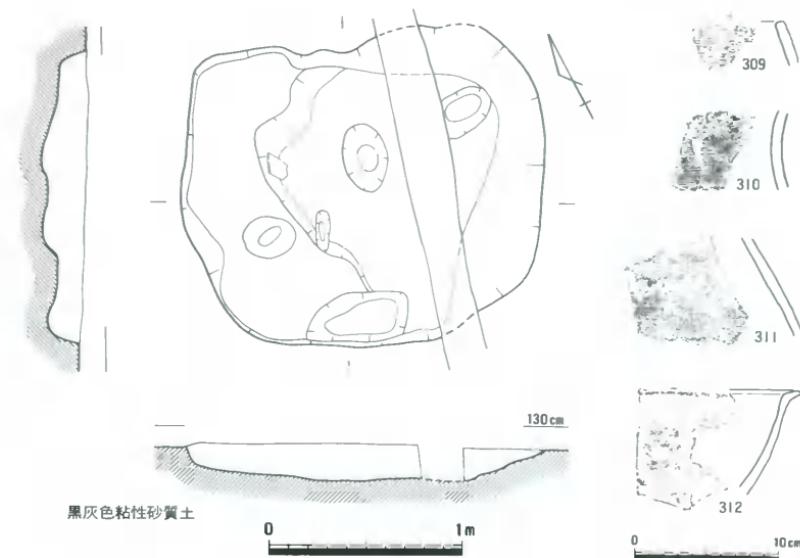
土壤114 (第80・81図、図版40)

12J区東側で検出した長方形の土壤である。長軸を北西—南東にとり、長さ230cm、幅85cm、深さ34cmを測る。底面は中央部が長方形に浅く下がっており、下端で長さ98cm、幅42cmを測る。

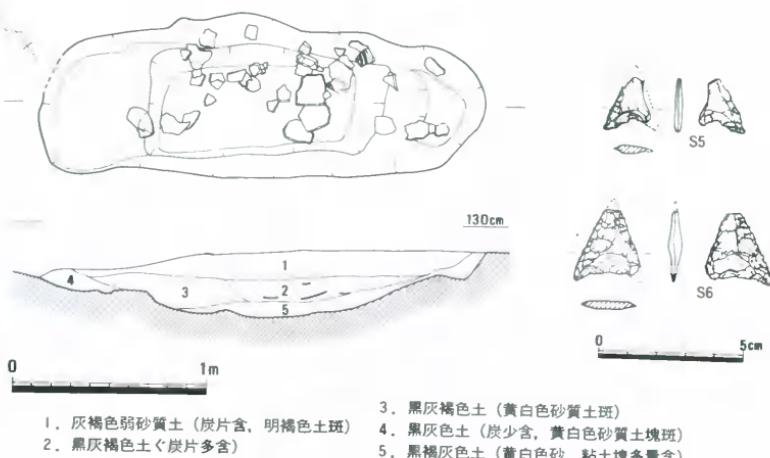


第81図 土壌114出土遺物[2]

1 弥生時代・古墳時代

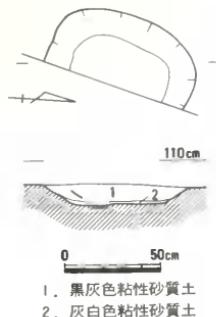


第79図 土壌113 (1/30)・出土遺物



- 1. 灰褐色弱砂質土（炭片含、明褐色土斑）
- 2. 黑灰褐色土（炭片多含）
- 3. 黑灰褐色土（黄白色砂質土斑）
- 4. 黑灰色土（炭少含、黄白色砂質土斑）
- 5. 黑褐灰色土（黄白色砂、粘土塊多量含）

第80図 土壌114 (1/30)・出土遺物[1]



第77図 土壌111 (1/30)

土壌111 (第77図)

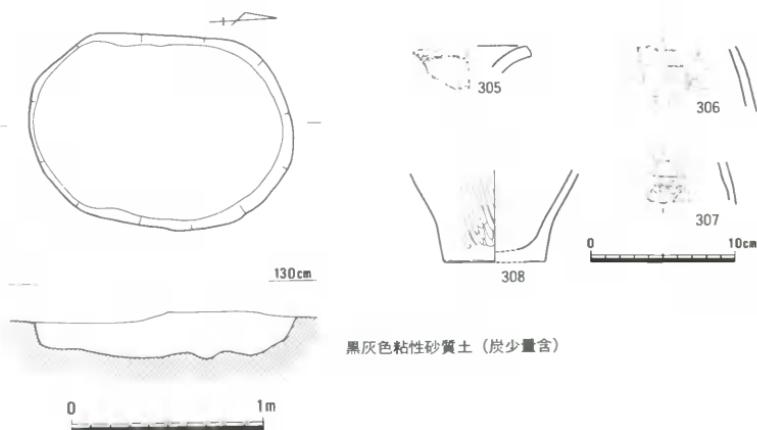
12 I 区東部で検出した。この付近は最も削平を受けている部分であり、周辺に遺存する遺構は少ない。土壌の東縁部は暗渠によって掘削されている。

長さ76cm、深さ11cmを測り、底面は平坦で皿状をなす。1層から土器小片が少量出土しており、それによれば百・後・III～IVと判断できる。
(宇垣)

土壌112 (第78図)

土壌111の東側に位置する。上面は小判形をなし、長径137cm、短径98cm、深さ22cmを測る。埋土は黒灰色粘性砂質土で炭片を少量含んでいる。出土した土器は少量で、図示した4片のうち壺肩部片306には櫛描き平行沈線が、同307には櫛描き平行沈線と細い櫛状工具によって施した鋸歯文が施されている。百・中・Iに比定できる。

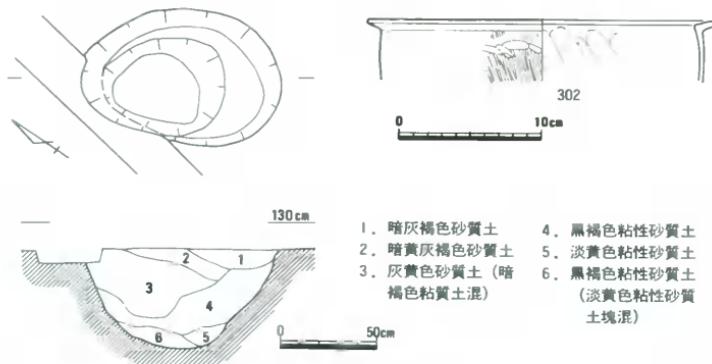
(宇垣)



第78図 土壌112 (1/30)・出土遺物

土壌113 (第79図、図版33)

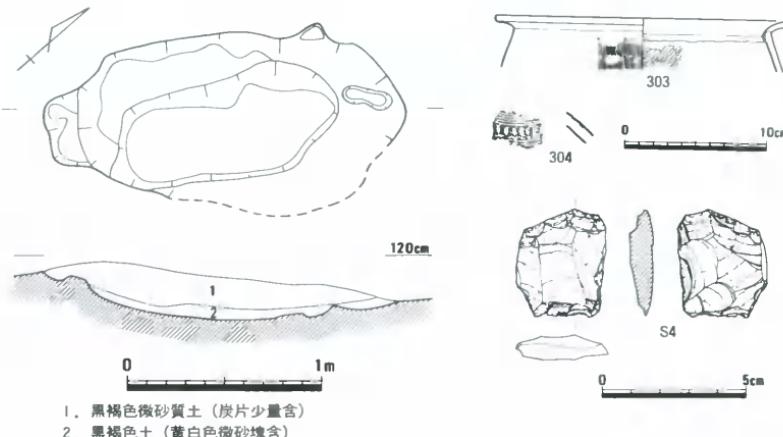
土壌112の東側で検出した隅丸方形の土壌で、東部を暗渠が横断している。長さ189cm、幅63cm、深さ22cmを測る。埋土は黒灰色粘性砂質土、底面は凹凸が顕著で小さなくぼみが認められる。無頸壺口縁部309、壺310、311、鉢312の破片が出土している。309～311には櫛描き平行沈線が施されており、309では端部に円形の刺突文が、311には波状文が認められる。土壌112と同



第75図 土壌109 (1/30)・出土遺物

土壌110 (第76図、図版39)

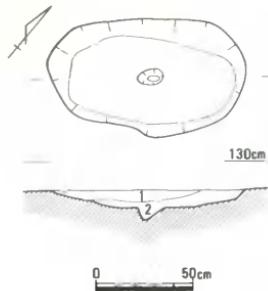
10 I 区に位置する不整長楕円形の土壌である。皿状の浅い土壌であるが、削平をかなり受けしており、現状で長さ184cm、幅約90cm、深さ28cmを測る。底面は2段に下がるが全体に凹凸が著しい。埋土1層と2層の間には薄い炭層が認められる。甕303、壺304とサヌカイト製スクレイバーS 4が出土しており、百・中・I の新相の時期と考えられる。
(宇垣)



第76図 土壌110 (1/30)・出土遺物

新しい時期の遺物は認められず、百・中・Iの時期の遺構と考えられる。

(字垣)



第73図 土壌107 (1/30)

土壌107 (第73図)

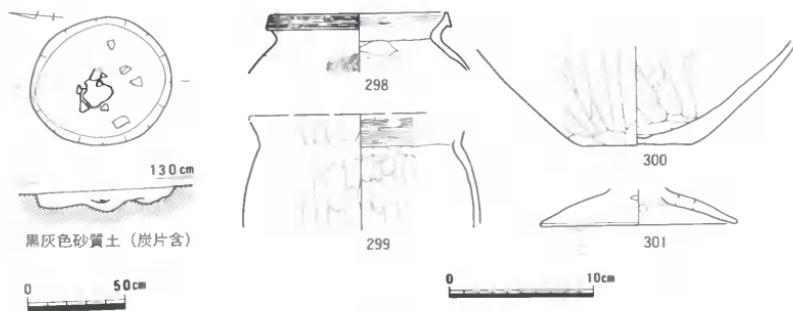
土壌106の東側に位置する長楕円形の浅い土壌である。長さ99cm、幅61cm、深さ9cmを測り、中央部には小さなくぼみがある。図示できる資料はないが、出土した土器細片から判断すれば、百・古の古い段階である可能性が強い。

(字垣)

土壌108 (第74図、図版39)

9 I 区に所在する、ほぼ円形の土壌である。径73cmを測り、他の土壌と同様、削平を受けており深さは11cmである。埋土は単層で黒灰色粘性砂質土である。遺物は底面付近から出土しており、299、300が比較的大きな破片である以外は、いずれも小破片である。これらの土器は、百・後・IIIの時期を示す。

(字垣)



第74図 土壌108 (1/30)・出土遺物

土壌109 (第75図)

土壌108とおなじ9 I 区に位置する楕円形の土壌である。長径106cm、短径72cm、深さ52cmを測る。埋土は上層1～3層と下層4～6層に大別でき、上層は砂質土、下層は粘質土である。上層はかなり急速に埋積した感じを受ける。

遺物は甕302のはか、小破片が少量出土した。逆L字形の口縁部をもち、外面はヘラミガキ、内面はナデである。時期は百・中・Iに比定できる。

(字垣)

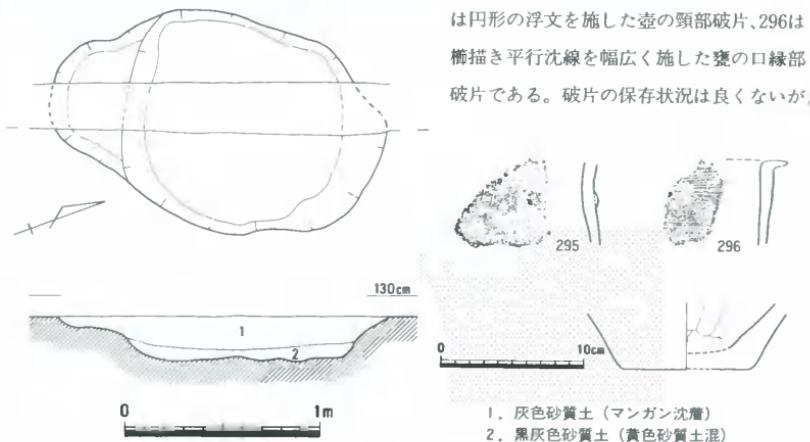
められない。ただ、各土器ごとに細かく観察すると、砂粒の大きさや配分にいくらかの違いのあることは看取される。壺でいえば、250～252のうち250は、黄色系の色調で粘土質の胎土に0.5～1mm前後の長石・石英粒が散在するのに対し、251・252は赤色系の色調で砂粒は0.5mm以下、そしてとくに252は0.2～0.3mmの長石が目立つなどである。また甕では、例えば形態的に多少の差が認められる267・273・275についていえば、267が白っぽい色調であり胎土に1mm前後の長石・石英粒が目立つのに対し、273は褐色（黄色系）を呈し0.3mm以下の長石・石英粒がほぼ均一に認められ、275は273と同色系ながら0.5mm前後の同砂粒を多量に包含するなど、三者三様である。これらのことから、近隣の狭い範囲での製作地域、あるいは製作年代の違いを表わす一つの指標になりえるかどうか興味深い。

形態的には、壺238～240の口縁部に古い特徴を残すが、これらの一括土器の示す時期の主体は百・後・III期の新しい様相であり、一部壺250～252、甕269などに百・後・IV期の古い様相がうかがえる。百間川米田遺跡の中で、ほぼ同時期の一括資料を出土した遺構に、本報告の竪穴住居103、井戸111や土塙117、前回調査報告（県埋文調報52）の4E～G区の溝7などがあり、この時期に盛行した当遺跡の性格を知る上で、この土塙は良好な資料となりうる。（柳瀬）

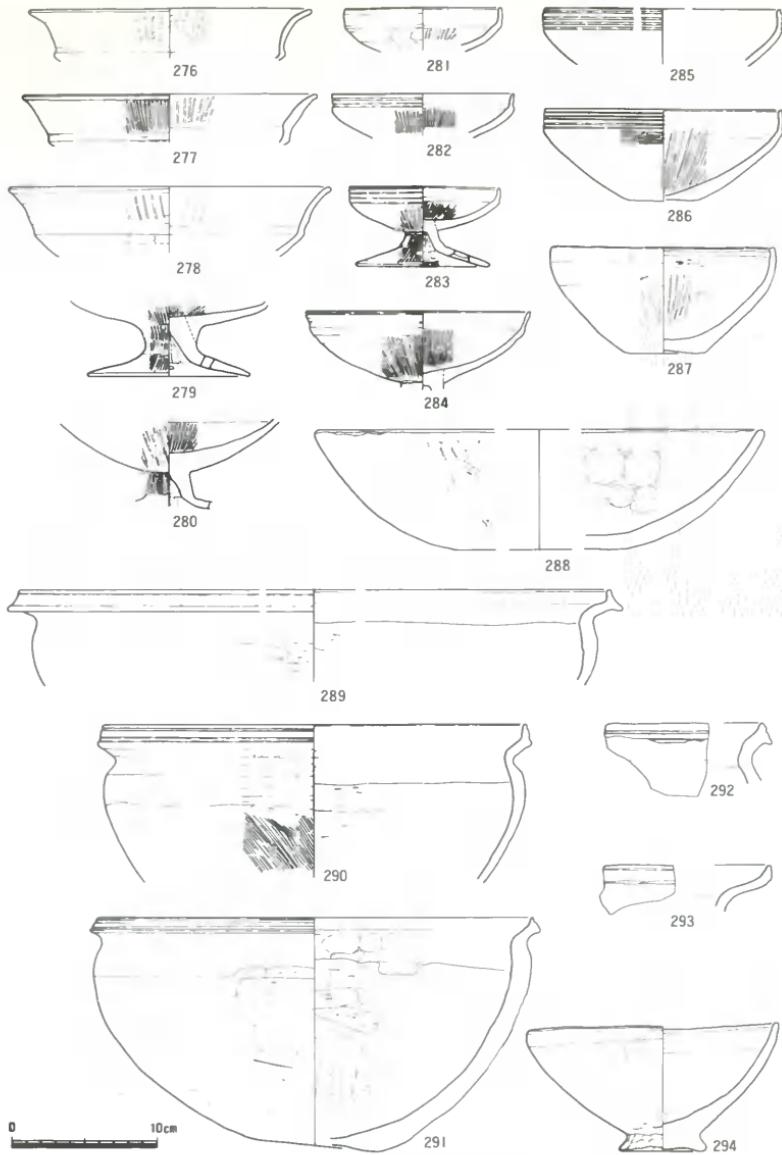
土塙106（第72図、図版39）

Iおよび14ラインの交点部分で検出した不整橢円形の土塙である。長さ172cm、幅109cm、深さ22cmを測るが、かなり削平を受けていると思われ、本来はより深いものであったと考えてよい。遺構の中央部は暗渠によって破壊されている。遺物は少なく、ここに図示した3点のほか

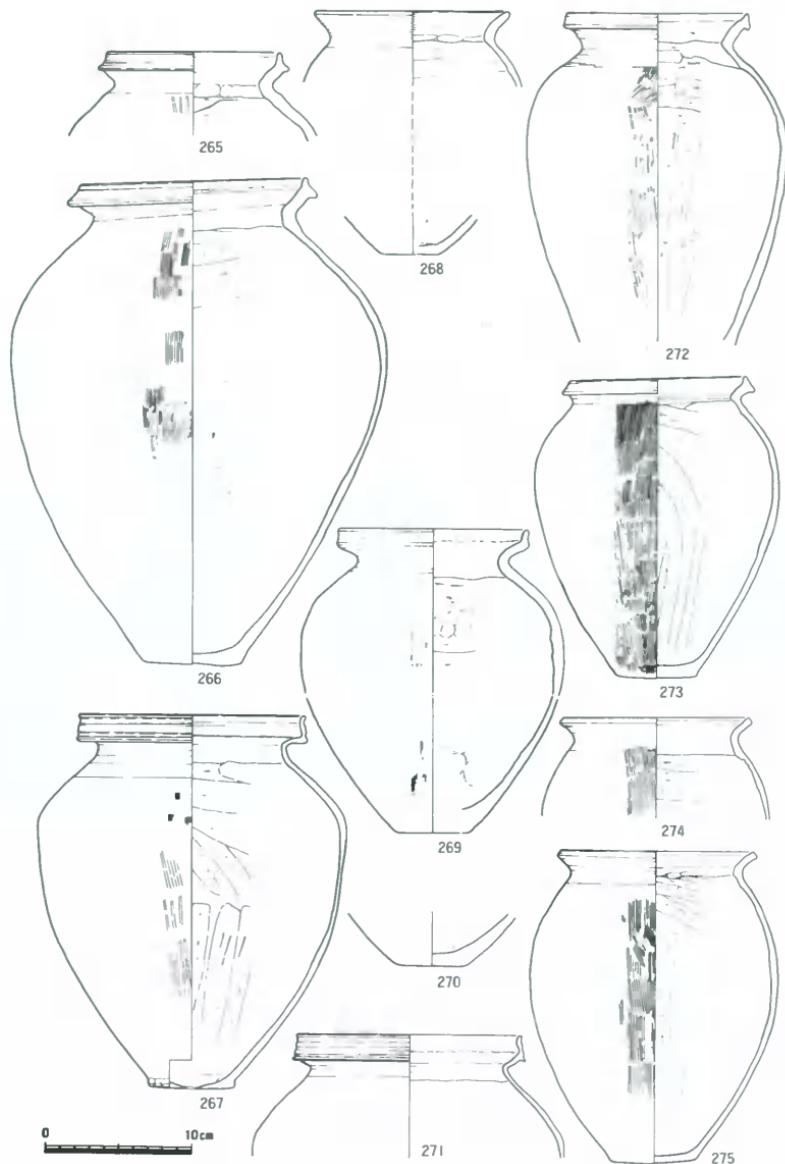
には小破片が出土しているにすぎない。295は円形の浮文を施した壺の頸部破片、296は椭描き平行沈線を幅広く施した甕の口縁部破片である。破片の保存状況は良くないが、



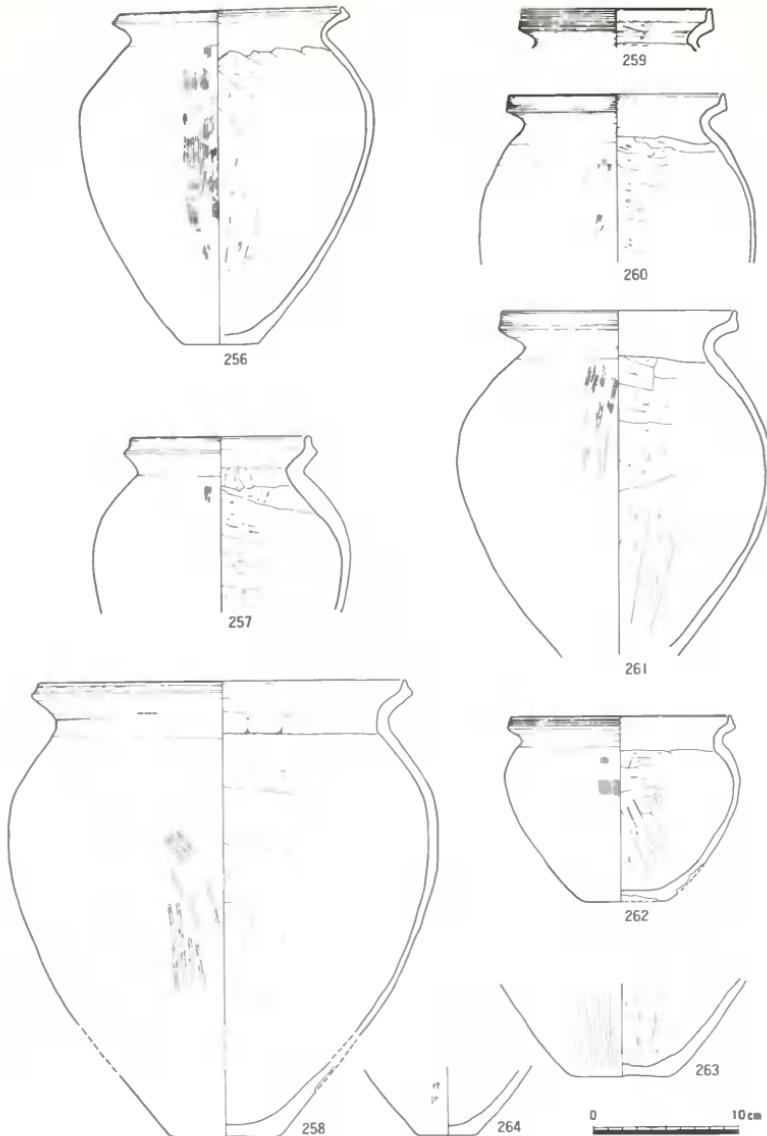
第72図 土塙106 (1/30)・出土遺物



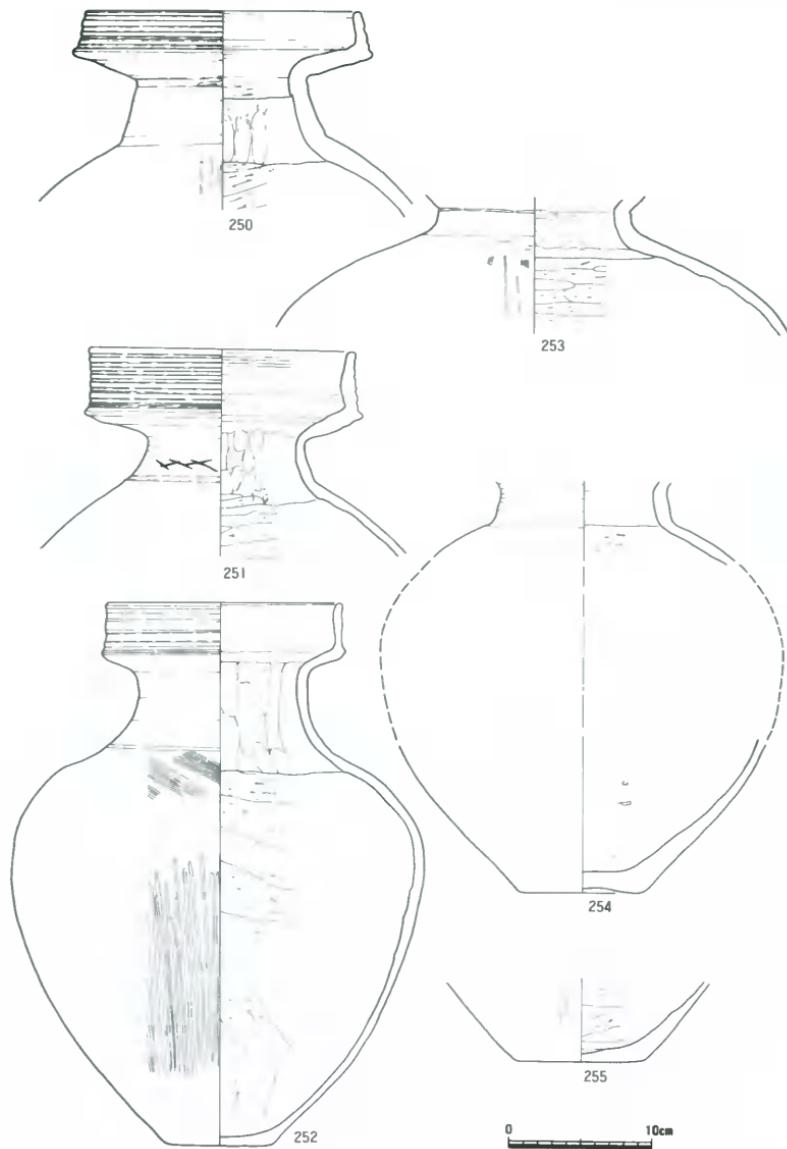
第71図 土壌105出土遺物〔6〕



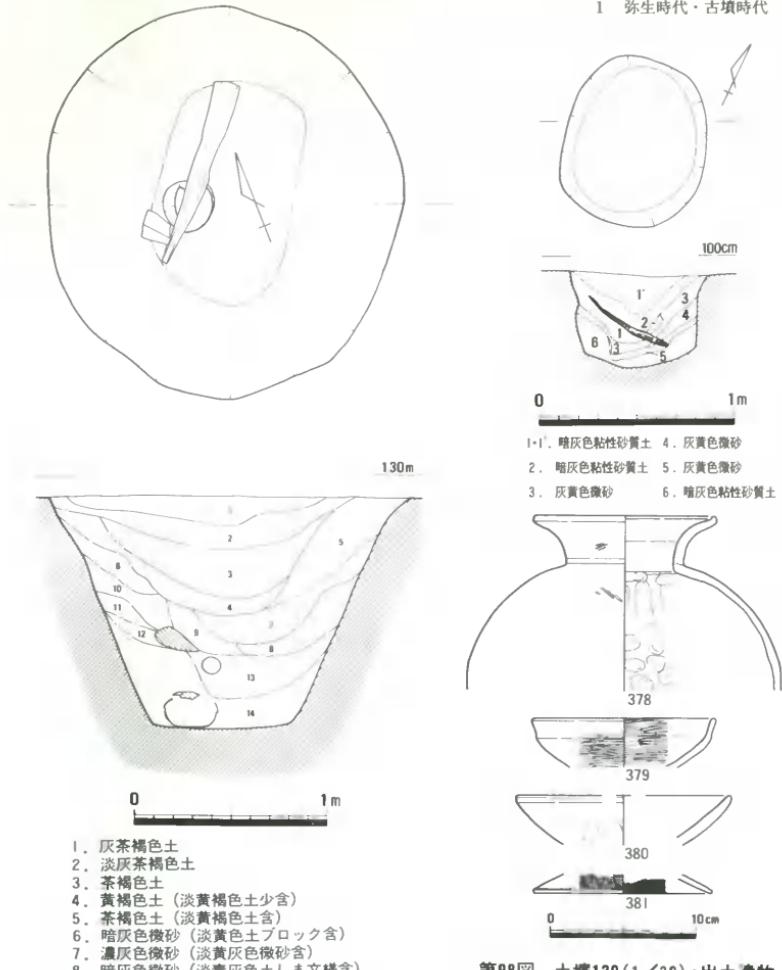
第70図 土壙105出土遺物(5)



第69図 土壇105出土遺物(4)



第68図 土壌105出土遺物(3)

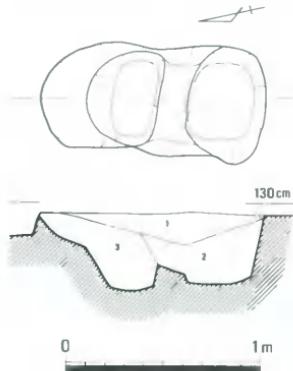


坦ではなく、中央部がかなり凹んでいる。

境内の堆積土は細かく分層ができ、6層に分けられた。第3～5層の上面では、暗灰色粘質土のブロックが薄い層をなして堆積していた。その堆積状態をみると、周辺からの土砂の

流入によって埋没したものと考えられる。断面の中央では木が斜めになって残存していた。第6層が堆積した後に、壙内に落ち込んで、肩にもたれかかった状態で、土砂がさらに堆積したものと想像される。

出土遺物は土器片のみで、土師器の壺・甕・鉢・高杯がある。それらの年代は百・古・二期と考えられることから、この土壙の年代も古墳時代前期である。
(岡本)



1. 灰茶褐色（淡灰褐色土のブロックを含む）
2. 淡灰茶褐色
3. 淡灰茶褐色（黄褐色土のブロックを含む）

時代後期と考えられる。

(井上)

土壙131 (第100・101図、図版45)

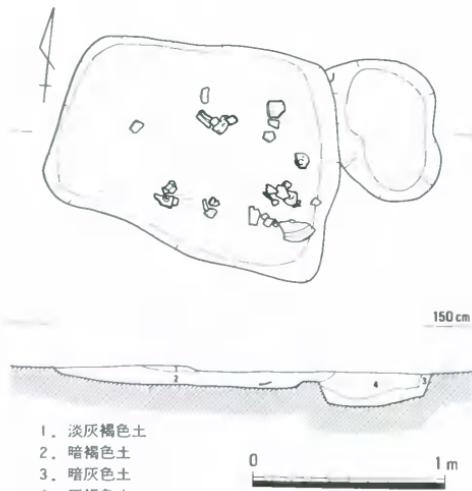
170区の北半に位置する。平面形が台形を呈するもので、長辺150、短辺90~112cmを測る。検出面からの深さは10cmを測る。底面は平坦で、底面の平面形も台形を呈する。底面の規模は、長辺138cm、短辺80~100cmを測る。383~385は、甕の口縁部である。口縁部は、大きく外反するもので、端部は上方へ折れ曲る。下端

土壙130 (第99図)

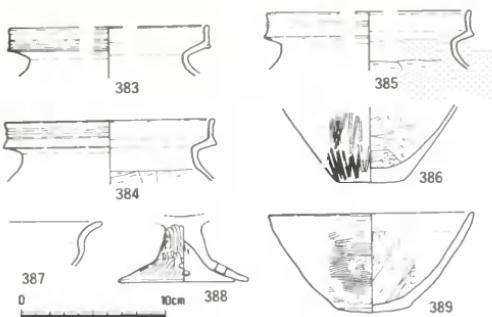
17M区の中央付近で検出された。平面形が精円形を呈するもので、長径116cm、短径56cmを測る。底面は二個所深く掘られている。土壙の長軸方向はほぼ南北を向く。検出面からの深さは36~38cmを測る。382は、埋土からの出土遺物で、口縁端部が上方に折れ曲げられるもので、外面には浅い凹

線文が施される。胸部内面は、口縁近くまでヘラケズリが施される。土壙の時期は、弥生

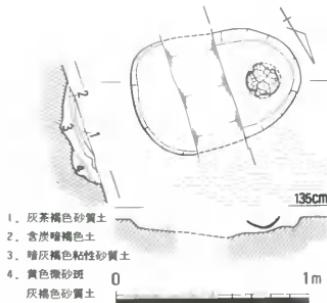
第99図 土壙130 (1/30)・出土遺物



第100図 土壙131・167 (1/30)



第101図 土壙131出土遺物



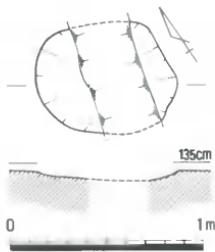
第102図 土壙132 (1/30)

れているため、土壙の規模や形状から、住居の中央ピットではないかと当初は考えたが、周辺からは住居の柱穴らしきものは検出されなかった。遺物としては、ほぼ完形の土師器の鉢が置かれた状態で出土し、他に土錐状の小形土製品がある。土壙の年代は、鉢の年代である古墳時代初頭の百・古・I期である。

(岡本)

土壙133 (第103図)

13Q区の北端に位置する、やや不整形な橢円形の土壙である。規模は長径73cm、短径57cm、深さ5cmを測る。肩口から底部にかけてなだらかに湾曲し、断面は皿形を呈する。埋土は灰色粘性砂質土である。出土遺物は少量の土器細片にすぎず、その年代は確定しがたいが、中世の土器ではない。この



第103図 土壙133 (1/30)

は、少し尖り、端部外面には、浅い凹線が施される。胴部外面はヘラケズリが施される。

387・388は高杯で、387は杯部の口縁部である。口縁部は、湾曲しながら外反するものである。388は脚部で、柱部は短かく、脚部は大きく「ハ」字状に開き端部は丸い。外面は入念なヘラミガキが施される。

389は鉢で、外面は、指頭圧後ハケ目が施される。内面は、縦方向のヘラケズリが施される。

(井上)

土壙132 (第102図)

13P区の南端に位置する。平面形は卵形で、長径88cm、短径62cm、深さ12cmを測る。底面はかなり凹凸があるが、中央部がもっとも深い。壇内堆積土は4層に分けられる。このうち第1層から第3層までは順序よい堆積を示すが、第3層と第4層の間には断絶があるようで、掘り直しがあったようにも考えられる。第2層には炭がかなり含ま

(岡本)

れています。

土壙133 (第103図)

13Q区の北端に位置する、やや不整形な橢円形の土壙である。規模は長径73cm、短径57cm、深さ5cmを測る。肩口から底部にかけてなだらかに湾曲し、断面は皿形を呈する。埋土は灰色粘性砂質土である。出土遺物は少量の土器細片にすぎず、その年代は確定しがたいが、中世の土器ではない。この

土壙の年代は弥生時代後期から古墳時代前期にかけてではないかと思われるが、埋土は中世の柱穴埋土と類似している。なお、位置的には建物151・152の屋内にある。

(岡本)

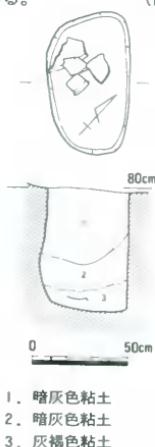
土壙134 (第104図、図版45)

14P区の中央付近に位置する。最近の工事に伴う搅乱部分の縁辺にあたり、いくらか変形している可能性があるが、隅丸の長方形の平面形をもつ。長軸73cm、短軸42cm、深さは65cmで、底面の海拔高度は15cmを測る。墻壁は垂直で、断面は縦長の箱形をなす。埋土は3層に分けられるが、いずれも粘土である。底面の高度が低いため、上部が削平されていることも考慮に入れれば、井戸として機能していた可能性も充分に考えられるが、規模と埋土の状況から、ここでは土壙としておく。

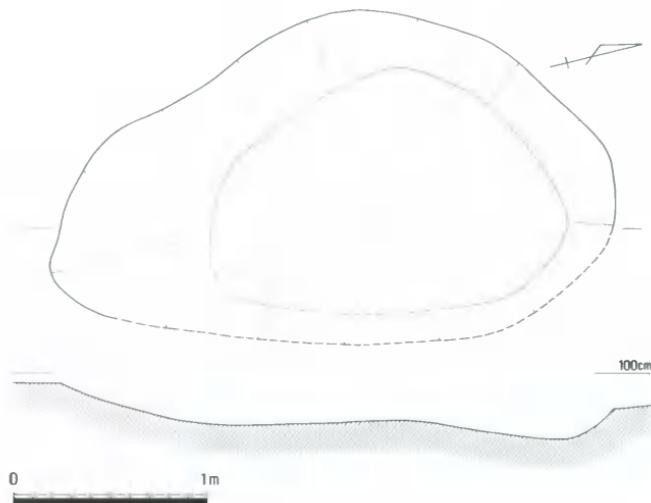
出土遺物は弥生土器の鉢である。2個体分の破片が第2層と第3層から出土している。遺物の年代は百・後・III期とみられることがから、この土壙の年代も弥生時代後期と考えられる。(岡本)

土壙135 (第105図)

16Qの南1.5mに位置するが、溝112の下から検出された。したがって、上部は溝112の掘削に



第104図 土壙134 (1/30)



第105図 土壙135 (1/30)

よって削平されている。また、東辺については、溝111・112の土層観察用の土手の下にあたっていたため、実測できなかった。平面形は、隅丸の三角形に近い。長径295cm、短径推定170cm、深さは37cmである。底面は平坦ではなく、かなり凹凸があり、中央よりは北端と西端が深い。出土遺物は弥生土器のみである。その年代は小片のため明確ではない。

(岡本)



土壤136 (第106図)

16P区に位置し、溝111の下から検出された。弥生土器が少し出土している。小片のため時期ははっきりしないが、後期の可能性がある。

(岡本)

第106図 土壌136出土遺物 土壌137

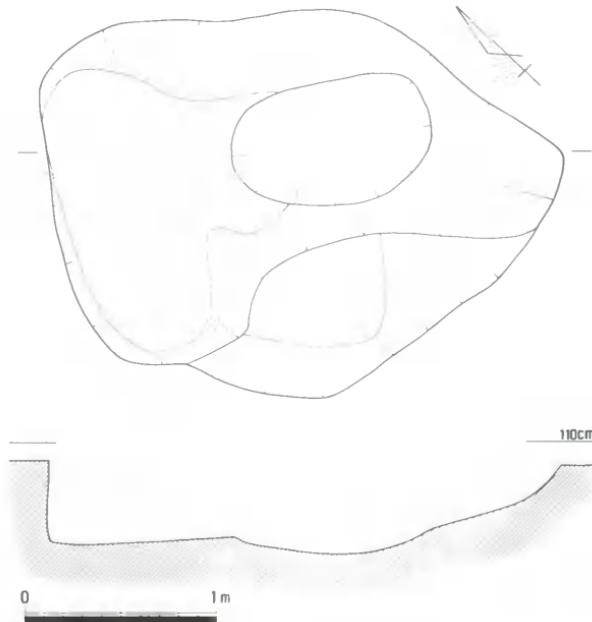
17Q区で、溝111の下から検出された。弥生土器がいくらか出土している。時期は後期と考えられる。

(岡本)

土壤138 (第107・108図)

16Q区と17Q区の境界に位置する大形の土壌である。溝111の下から検出されたため、上部は

20cm程度削平を受けている。平面形は不整形な橢円形を呈し、長径272cm、短径197cm、深さ45cmを測る。壇内にはかなり凹凸があり、南北側に一段高い平坦面と、底面の東半に浅い凹みをもつ。出土遺物はいくらかの土師器片のみである。その年代は古墳時代初頭と考えられる。

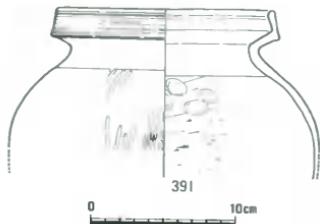


第107図 土壌138 (1/30)

(岡本)

土壤139 (第109図)

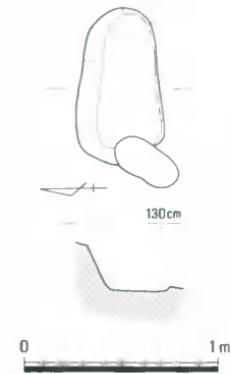
17Q区の北端で検出された。土壤の西端は中世の柱穴によって破壊され、さらに土壤の上部は溝111の掘穿によって削り取られている。平面形は細長い卵形で、長径83cm、短径45cm、深さ24cmを測る。底面は平坦で、塙壁はかなりの傾斜をもっていることから、断面は逆台形となる。出土遺物は少量の土器片のみである。土器の年代は百・後・



第108図 土壤138出土遺物

III期とみられることから、この土壤の年代は弥生時代後期後半と考えられる。

(岡本)



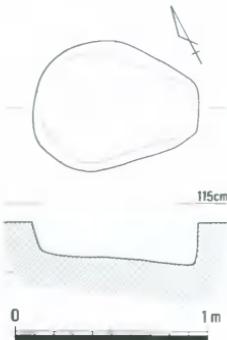
第109図 土壤139 (1/30)
・出土遺物

cmである。底面は平坦であるが、南に傾斜している。遺物は少量の土器片のみである。遺物から判断すると、この土壤の年代は古墳時代初頭と考えられる。

(岡本)

土壤140 (第110図)

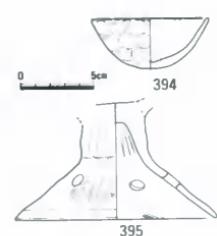
17Q区の東半に位置する。溝111によって上部を削平されている。平面形は不整形な卵形を呈し、規模は長径88cm、短径70cm、深さ28



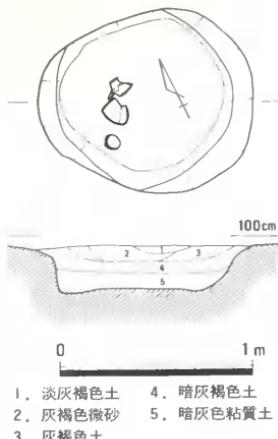
第110図 土壤140 (1/30)

土壤141 (第111-112図)

17Q区の東半に位置し、土壤140のすぐ南に接して検出された。やはり、溝111によって上部を削平されている。平面形は不整形な円形で、長径112cm、短径97cm、深さ27cmを測る。底面は、中央部よりも周縁部が2~3cm深くなっている。塙壁の傾斜は、肩部ではゆるやかであるが、途中から急に角度が大きくなる。この二番目の肩の線はより円形に近い。埋土は5層に分けられる。最下層の第5層は粘質土で、他の4層の土とは異なる。土壤が使用されていた時の堆積であろうか。



第111図 土壤141出土遺物



第112図 土壌141 (1/30)

器の年代は百・後・IV期とみられ、したがって、

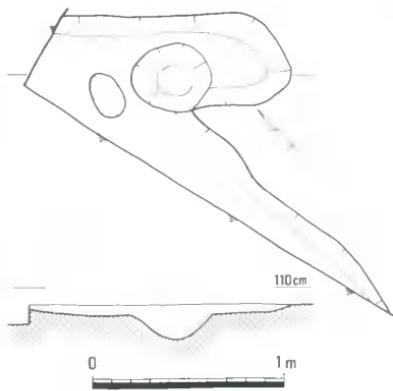
土壌の年代は弥生時代末期と考えられる。

(岡本)

土壌142 (第113図)

17Q区の南半で検出された土壌である。調査区の境の側溝によってかなり破壊され、全形は不明確なままに終わった。検出面での形状はきわめて不整形なものであった。出土遺物は土器片のみである。土

(岡本)

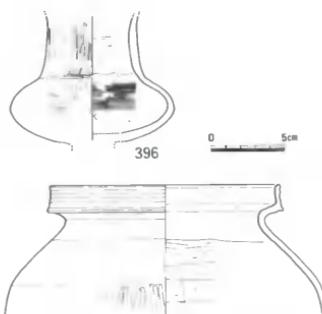


第114図 土壌143 (1/30)

褐色土層上面で、埋土は暗褐色土である。遺物は全く出土しなかった。

時期は、検出面が中世より古く、弥生時代の可能性が考えられる。

(平井勝)



第113図 土壌142出土遺物

土壌143 (第114図)

1983年度調査区の19R区で検出した不整形な土壌である。検出面は、中世の遺物を含む暗灰褐色砂質土層直下の暗黄灰

土壌144（第115図）

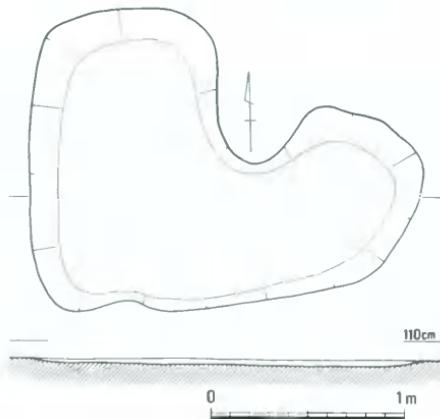
1983年度調査区の19R区で検出した円形の土壌である。暗黄灰褐色土層上面で検出したもので径102cmを測る。深さは8cmと浅く、埋土は暗灰褐色土である。遺物は全く出土しなかった。

時期は、検出面から弥生時代である可能性が強い。

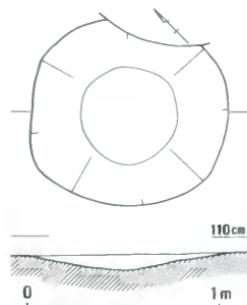
(平井勝)

土壌145（第116図）

1983年度調査区の20R区で検出した不整形な土壌である。暗黄灰褐色土層上面で検出し、規模は南北の最大長が158cm、東西の最大長204cm、深さ3cmを測る。壁の立ち上がり



第116図 土壌145 (1/30)



第115図 土壌144 (1/30)

は緩やかで、底部は平坦である。埋土は暗灰褐色土で、遺物は全く出土しなかった。

時期は、検出面および埋土から弥生時代と考えられる。

(平井勝)

e 溝

溝101（第139～142図、図版46）

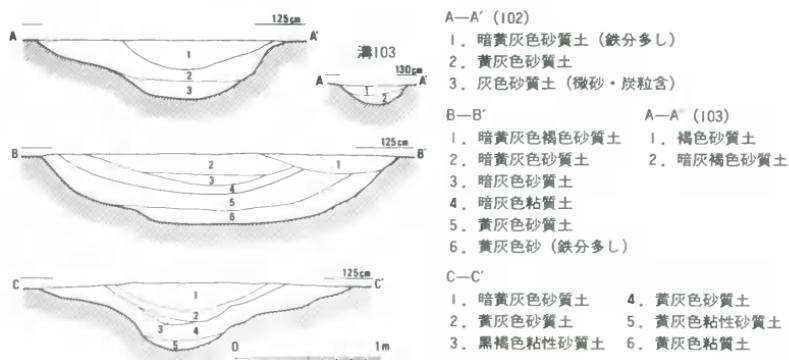
この溝は、調査区の北端に確認された微高地の肩部に添うように、約60mにわたって検出された。幅1～1.5m、深さ15～20cmを測る。溝内からの遺物は、土器の細片しか出土しておらず時期を捉えがたいが、溝の上部に緩斜面堆積の状態で土器溜りが形成されており、それらの土器形式からすれば、百・後・II期以前と思われる。細片の中には櫛描き沈線文がみられ百・中・I期の時期まで遡る可能性もある。

なお、上部の土器溜りは標高100～200cmのレベルで出土し、さらに位置的にも溝101の南または北側に振って存在する。そこで、土器溜りの遺物は溝101とは切り離して、別項の包含層で取り扱う。
(柳瀬)

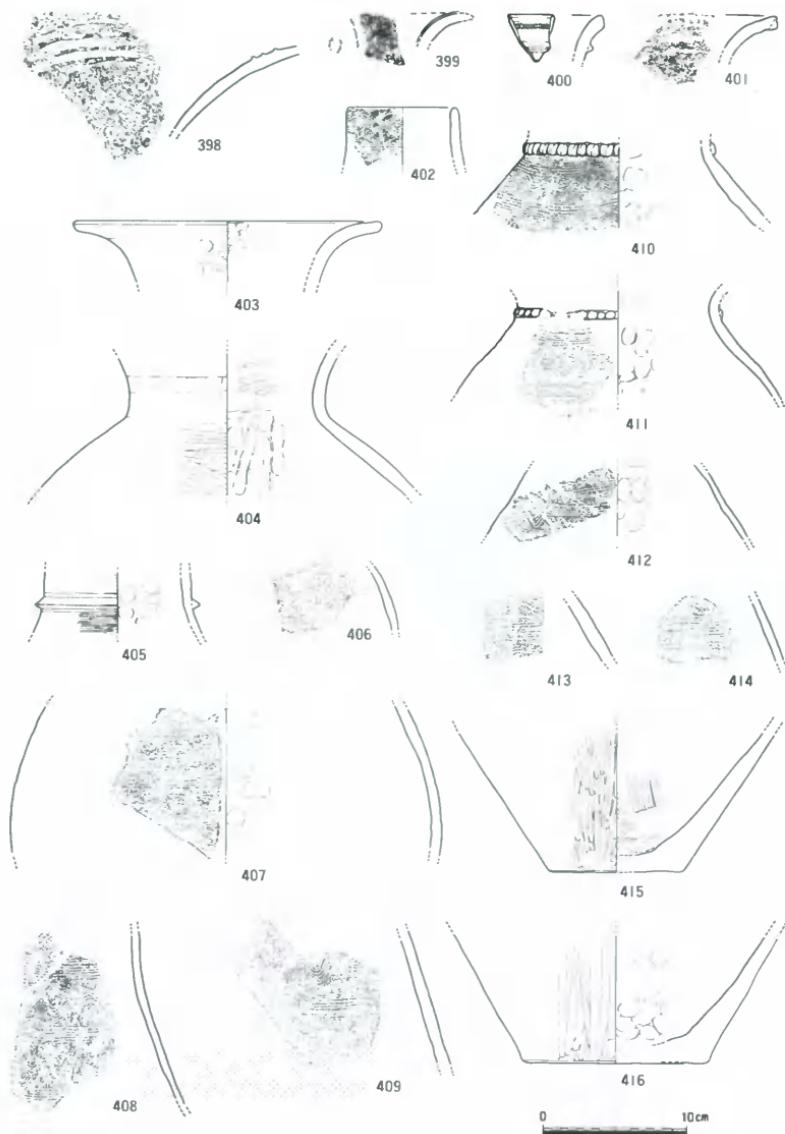
溝102（第117～119図、図版47・48）

調査区北寄りのG～H区に、長さ70mにわたって検出された。幅約1.7～2.5m、深さ40～50mを測る。溝底の断面形はU字を呈するが、約半分の深さのところから上部は、かなり緩やかな傾斜をもって肩口に至る。このように溝のほぼ中央部が、幅約80cm、深さ約20cmに一段深く掘り窪められた状態は、溝が使用されていた早い時期に何度も底ざらえを伴った結果であるのかもしれない。溝の堆積の状態は、断面図のように各地点によって様子が異なる。しかし基本的に底に近い2つの層に共通し、A断面では第1層、同じくBでは第4層、Cでは第2・3層のそれぞれ下面を底にする改修溝が存在していたと思われる。

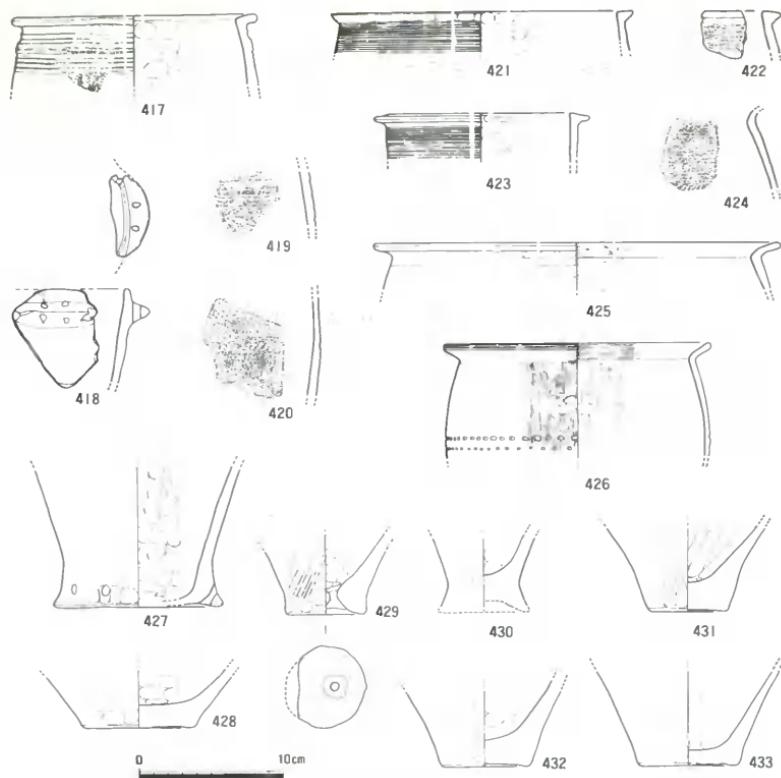
遺物は1000点を越す土器片と10数点の石器が出土している。遺物の取り上げは上・下層に分



第117図 溝102・103 (1/40)



第118図 溝102出土遺物〔1〕

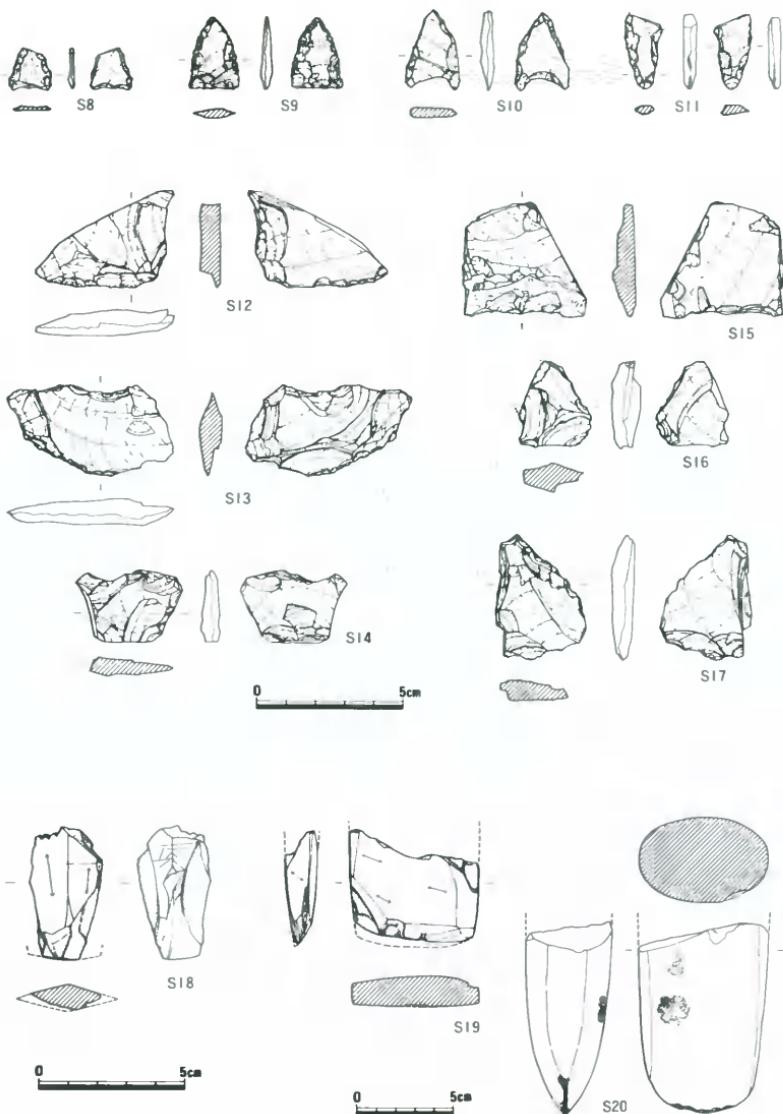


第119図 溝102出土遺物〔2〕

けて行い、上層が改修溝内堆積土、下層がそれ以前の溝内堆積土中の遺物にはば合致する。出土量は、下層が6:4の割合で多い。

土器は、口縁の内面に突帯文をもつ398・399のような前期に遡る可能性のある壺なども散見されるが、壺・甕とともに描書き沈線文を多用する百・中・I期の時期のものが多く、上層と中層にとくに差はない。そして、後出的な甕426は、溝を切って存在したと思われる方形の浅い落ち込みから出土しており、溝の廃絶の時期が百・中・II期を下ることはない。

石器のうち磨製石剣S18は、粘板岩製の基部の破片であるが県内では出土が少ないだけに貴重である。表面には縦方向の研磨痕を残し、一部に細かい傷のような線刻がある。(柳瀬)



第120図 溝102出土遺物〔3〕(1/2・1/3)

溝103（第117図）

9F区から10G区にかけて検出された、幅約45cm、深さ10~12cmの溝である。東端の溝102と重複または合流すると思われる部分は、ちょうど現代用水路に切斷されて不明瞭となっている。また、9F区においても溝の大半は削平を受けている。埋土の色調や質は、溝102と良く似ている。溝102の枝溝であるかどうかは不明ながら、ほぼ同時期に埋まった可能性はある。（柳瀬）

溝104

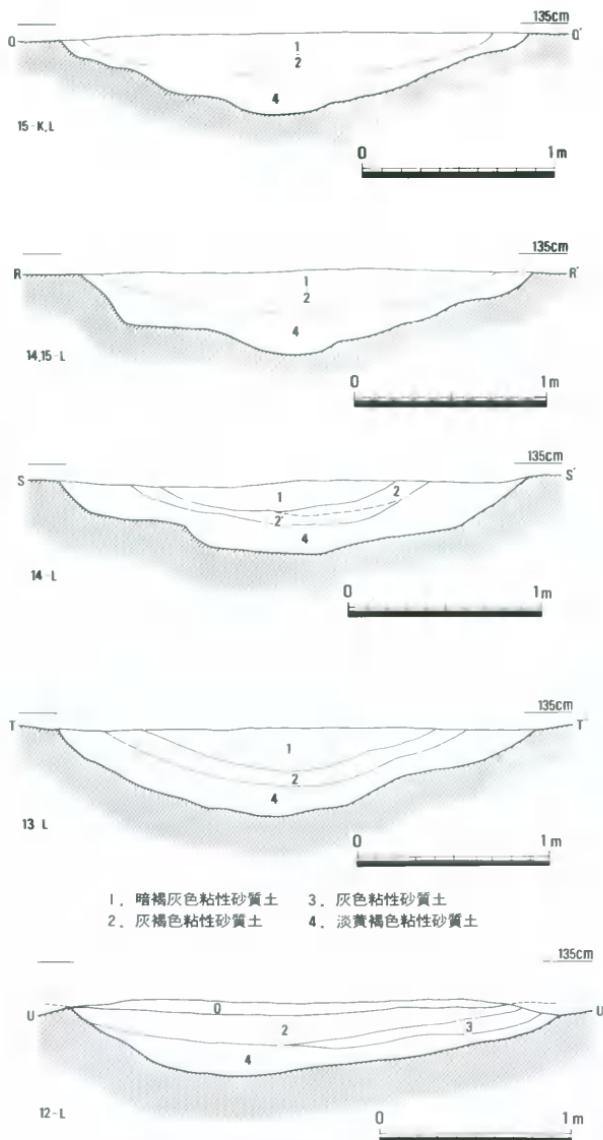
9G区に検出された幅約20cm、深さ2~5cmの浅い溝である。溝102の南肩部から約70cm離れて、ほぼ平行して走る。10ライン近くで消滅し、それより東には検出されていない。

遺物はなく、時期決定はできないが、埋土は溝102や溝103に似ていることやそれらとの位置関係からすれば、ほぼ同時期と考えていいだろう。（柳瀬）

溝105（第121~126図）

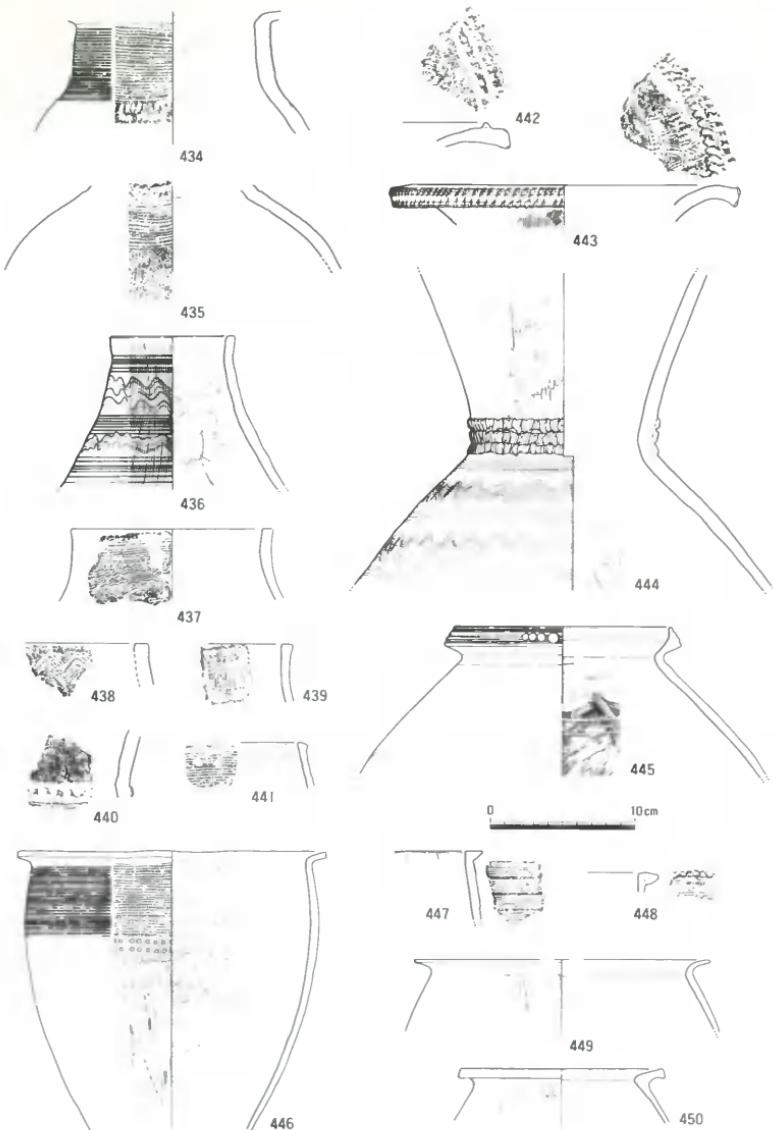
16K区から11L区まで、東北東から西南西へかけて調査区を横断するような形で検出された溝である。流路はわずかに蛇行していて、溝底の高度から判断する限り、水は東から西へ向かって流れていった可能性がある。検出面での肩幅は2.3~2.7mを測り、深さは0.4mである。溝底の海拔高度を測ると、東端の16K区では79cm、西端の11L区では71cmで、わずかその差は8cmにすぎない。検出された約60m分に対する8cmという値は、傾斜角がほとんど0に近いもので、実際のところ、水の流走方向を断定する資料とは言いにくい。むしろ、この溝と同様な形で調査区を横断している、溝102や溝111の流走方向を参考にすべきである。また、埋土の堆積状況も資料となる。

埋土についてみると、土層断面図第2層の底の高度が、西へ向かうほど低くなっていく。このことから判断すれば、やはりこの溝では東から西へ水が流れていたと考えられる。地形的には、むしろ、西から東へわずかに傾斜しているため、この溝105は、東に存在していたと思われる川から、集落へ水を引いたためのものであった可能性が高い。溝の断面をみると、肩部から底部への傾斜は滑らかではなく、途中に屈曲部が存在している。大きくみれば、溝の中央部が0.8~1mの幅で一段凹んでいる。溝内の堆積状況をみると、埋土は4層に分けられ、その分層線が溝の断面と平行する形で順序よく堆積している。なお、第3層は第2層と土はよく類似していて、色調が淡くなっている。土層断面図では4層が順序よく堆積しているようにみえたが、1984年度の調査者が第1層と第2層を1層と認めたことにみられるように、第2層と第4層との間には断絶が存在している。第2層・第4層ともに粘性砂質土であるが、第4層の上が均質なのに対して、第2層の溝中央部の下半では暗灰色粘性砂質土の薄層が幾層も挟まれ、なかには炭の薄層も含まれている。第4層が安定した流水ないしは滞水状態のなかで堆積したとみられるのに対し、第2層は変化する流水状態のなかで堆積したものと考えられる。このことから、

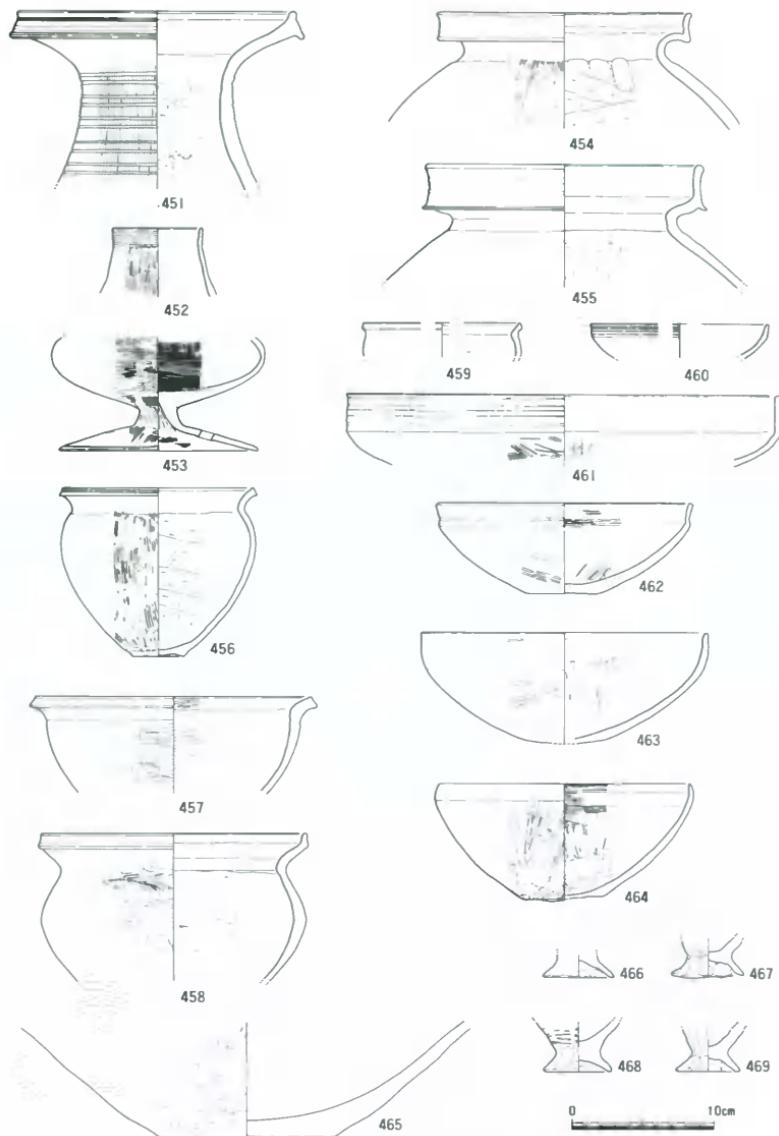


第121図 溝105 (1/30)

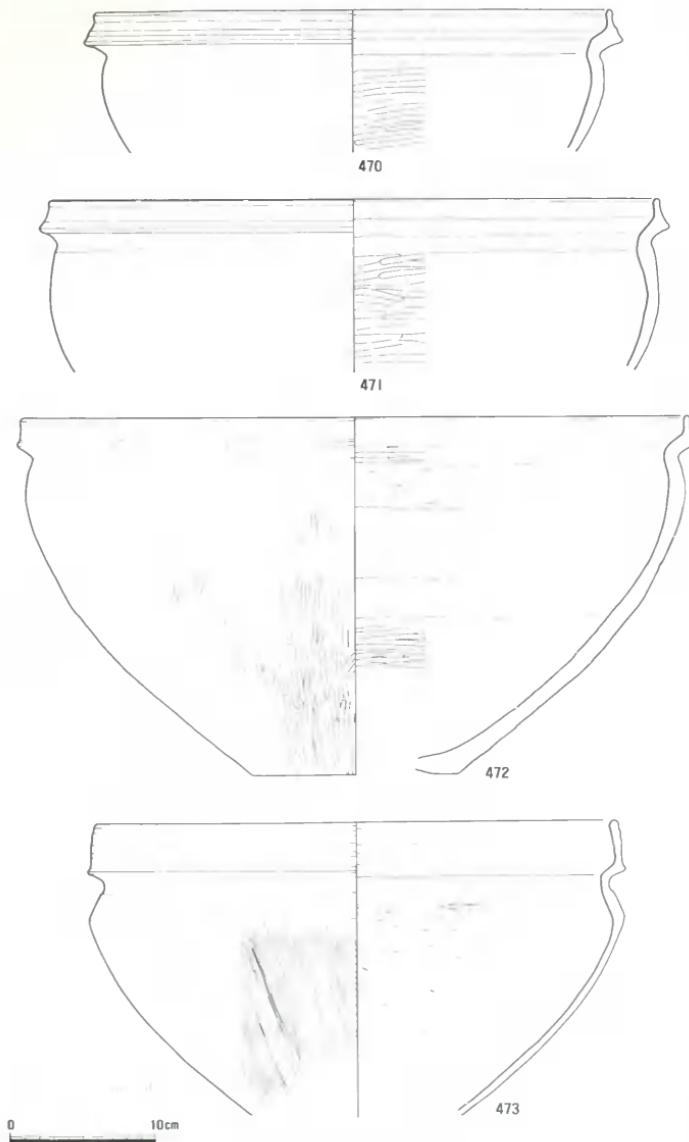
この溝105については一度改修がなされ、溝を掘り直したのではないかと考えられる。そこで溝内から出土した土器を検討してみると、第4層では弥生時代中期前葉（百・中・I）から中葉（百・中・II）の土器がほとんどであるのにに対し、第1・2層ではそれらと多数の弥生時代後期中葉（百・後・II）から後葉（百・後・III）の土器がみられ、やはり大きな相違を示している。しかし、中期中葉から後期中葉までは100年前後はあったと考えられるところから、溝105の最初の掘穿が弥生時代中期前葉とは考えにくい。第4層にはごく若干ではあるが後期の土器片もあることから、



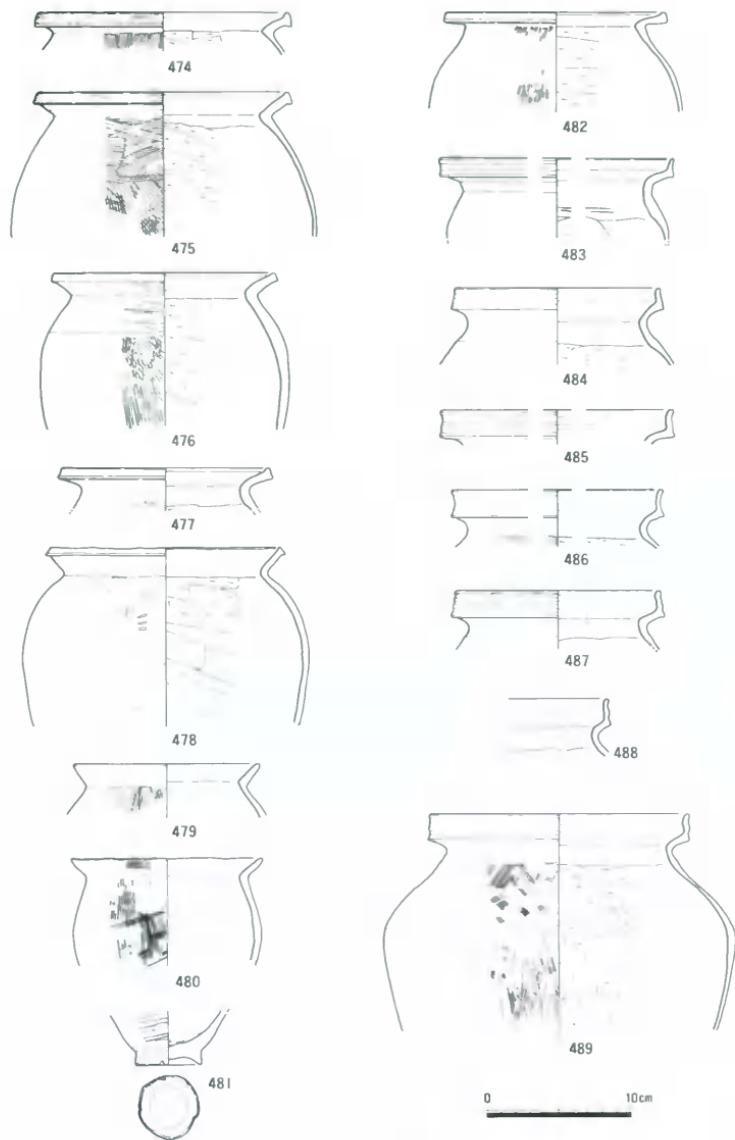
第122図 溝105出土遺物〔1〕



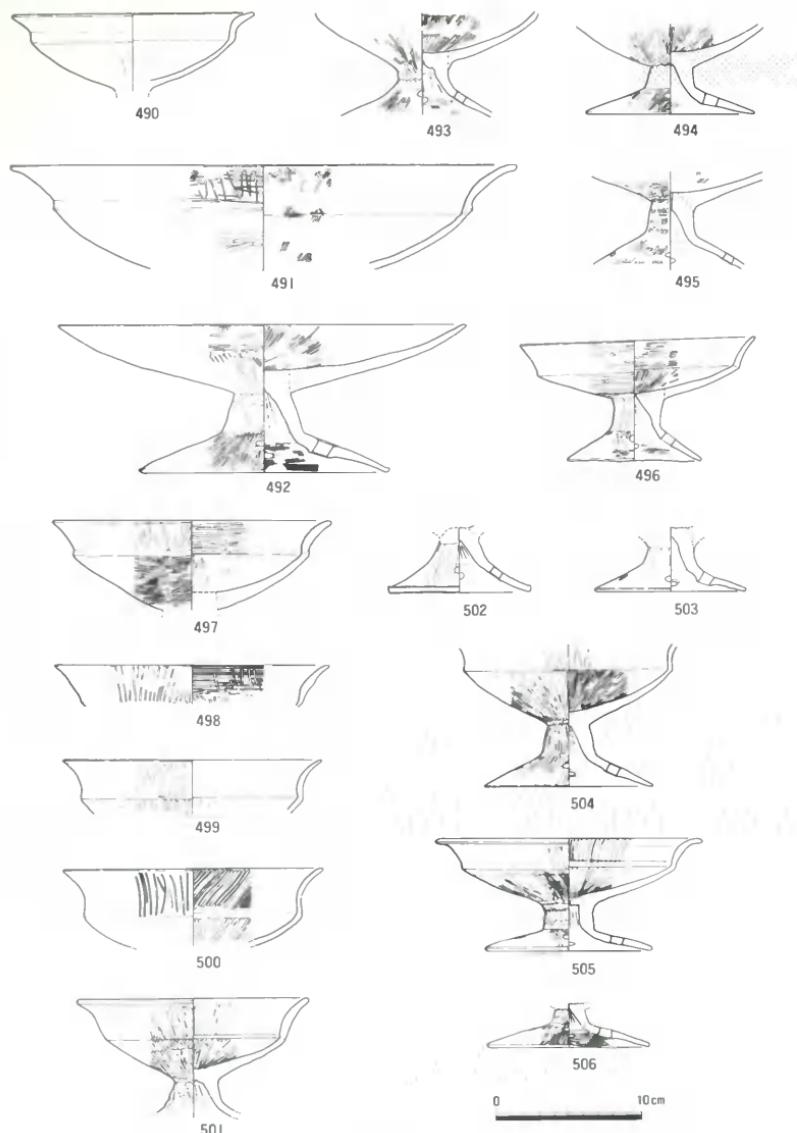
第123図 溝105出土遺物〔2〕



第124図 溝105出土遺物〔3〕



第125図 溝105出土遺物〔4〕



第126図 溝105出土遺物〔5〕

溝105の掘穿は弥生時代後期中葉頃と考え、溝としての機能が失われた段階で、多量の後期の土器類が廃棄されたと考えたい。

(岡本)

溝106（第127図）

11L区と11M区の境界付近から12M区にかけて検出された溝状の遺構である。幅は1~1.3m、深さは30cm前後で、検出部分の全長は12mになる。溝底の形状はやや複雑で、いくらくか凹凸をもっている。とくに、東端部分は10cm程度落ち込んでいる。単純に溝底の高度を測ると、西から東へ流れているように受け取られるが、そうすると検出部分で行き止まりになってしまい、溝という機能が疑問となる。この東端部分は最近の重機による搅乱を受けたところにあたっていて、とくにその影響が強かった部分である。このため、いくらか変形している可能性が強く、当然、高度についても考慮が必要である。ここでは、東端部分が溝111の真下に位置していることを指摘しておきたい。溝111は搅乱による削平で消滅している。なお、この溝106は溝105を切って造られている。出土遺物は弥生土器のみで、その年代は弥生時代後期である。しかし、先に述べた溝111の関係から考えれば、溝106の年代としては古墳時代前期の可能性がある。

(岡本)

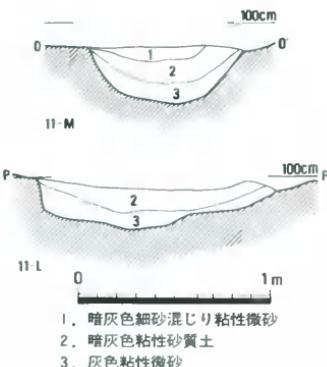
溝107（第128図）

12K区から13K区、13L区へと続いて検出された溝である。幅38~57cm、深さ10cm前後を測る。底面の傾斜から、水流は北から南へ向かっていたものと考えられる。13L区から南については最近の搅乱によって破壊されているため不明であるが、12O区や13P区でも、この溝の統一的な遺構が検出されていないことから、あるいは溝111に合流するかもしれない。検出全長は20mである。出土遺物としては弥生時代後期の土器片が若干みられるが、溝の年代は、この頃から、前述の溝111との関係から古墳時代の前期まで、幅をもって考えたい。

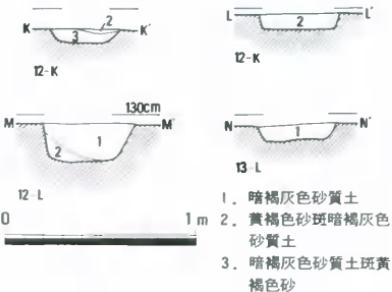
(岡本)

溝108

14K区の南端から14L区の北端にかけて



第127図 溝106 (1/30)



第128図 溝107 (1/30)

検出された、幅20~40cmの溝である。検出全長は4mにすぎず、溝105と合流する形で消える。合流部分では、溝105の北側肩部からすこし南まで溝108の肩の線が検出されたため、溝105がかなり埋没した段階で造られたものとみられる。弥生時代後期の土器片が若干出土したにすぎない。溝108の年代もこの時期と考えられる。

(岡本)

溝109

15M区から14M区、14L区と続き、溝105に合流する。14N区の東半で検出された溝も、規模や底面の高度から判断して、この溝109の一部と考えられる。この部分の底面の高度も北端が南端より低く、南から北への水流が想定される。幅26~34cm、深さ9cmを測り、検出全長は、搅乱によって破壊された部分も復元すると28mになる。出土遺物は若干の土器片にすぎないが、弥生時代後期の製塩土器片がみられ、この溝の年代も、溝105との関係も含め、この頃かと考えられる。

(岡本)

溝110（第129図）

12N区から20R区まで、94mにわたって続く溝である。溝底の高度は一方向に向かって変化せず、15cm程度の幅で凹凸をもち、16P区と17P区の境界付近では浅くなっている、途切れたようになっている。溝の幅は50~85cm、深さは10~25cmを測る。溝底は前述のように凹凸があり、西端の12N区では海拔100cm、14N区の南端では同112cm、17P区では同107cm、18Q区の東端では同104cm、19Q区では同107cmというようになっている。このため、水流の方向は確定できない。ほぼ平行して走る溝111や112の流水方向から判断すべきであろう。

溝110は溝111とはほぼ平行しているが、14O区から溝111と重複し、それから西へ向かって溝111を横断して、溝112の東肩付近で消えている。溝110が消えたあたりは最近の搅乱によって削平を受けた部分になっているため、この溝がさらに西へ伸びているかどうかは明確ではない。しかし、溝112の東肩よりわずかに中へ入ったところで消えていることから、ことによれば、溝112から分流、あるいは合流している可能性も考えられる。第129図の断面観察によれば、溝112は溝111より新しいと判断されている。

出土遺物は土器と土錐と貝である。土器には土師器と須恵器がみられる。土錐は4点で、すべて円筒状のA II②型式である。土器の年代から溝110は古墳時代後期に埋没したと考えられる。

(岡本)

溝111（第129~131・133図）

10L区から19Q区にわたって、調査区を斜めに横断して検出された溝である。検出全長は104mに及び、さらに西方の調査区外へ伸びているものと考えられる。途中に2カ所で最近の搅乱による破壊を受け、切られている。溝の幅は、10L区では4m、14O区では4.5m、16P・Q区では6m、18Q・R区では5.5mをそれぞれ測り、15P区以東ではいっそう広くなっている。

検出時には1条の溝と思われたが、発掘すると底面には2条、あるいは3条の溝状の凹みが現われ、複数の溝の重複したものである可能性が強くなった。10・11L区では1条の溝であるが、14Q区では2条の凹みがみられ、17Q区から東では3条の凹みがみられる。17Q区以東の3条の凹みのうち、1条は溝113の続きである可能性があるが、少なくとも2条の溝が重複して

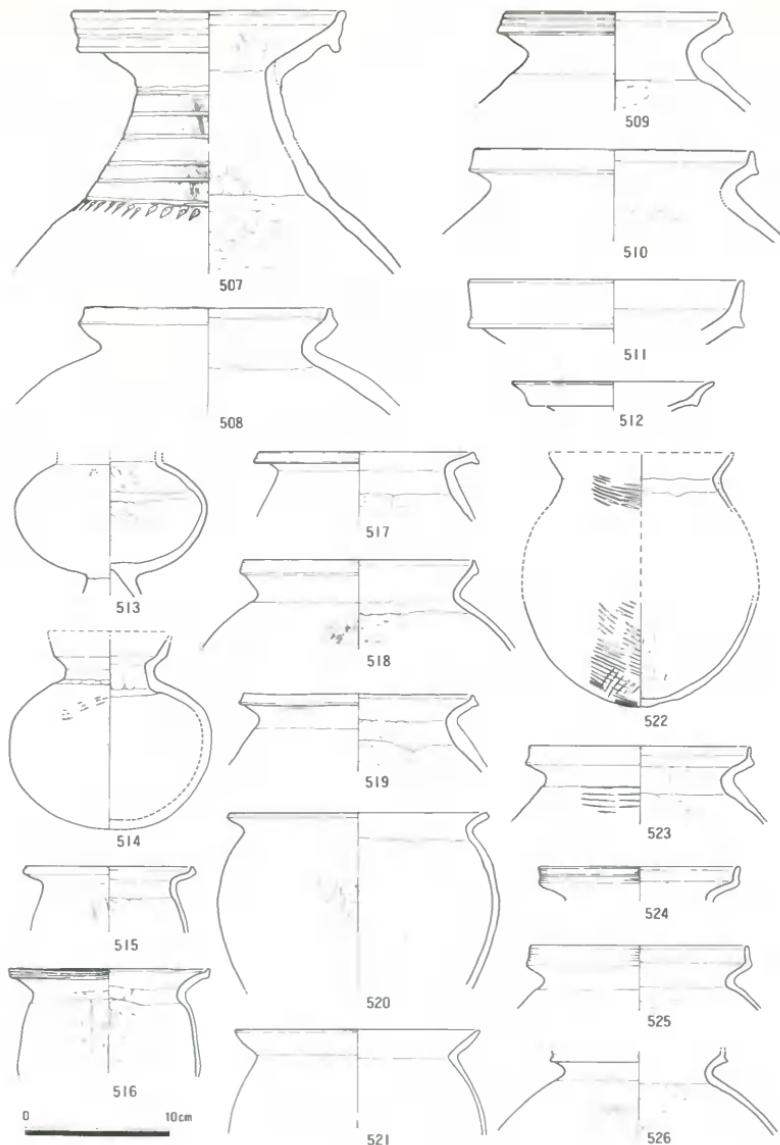
いることは、第129図の断面観察の結果からも考えられる。底ざらえのような、簡易な改修ではなく、既存の溝の北肩を壊すような形で、新しい溝の掘削が行われたのではなかろうか。このため、15P区以東では溝の幅が広くなったようみえたのである。10・11L区では1条の溝であるが、これについては、改修がここまで及ばなかったか、あるいは溝106が旧の溝111であったことも想定される。

溝の底面の高度を測っていくと、西へ向かって総体的に低くなっていくよう、東端と西端では10cm~15cmの差がある。全長104mのなかでの10cmは小さな数ではあるが、地形が西から東へ傾斜していることを考慮すれば、溝は西へ向かってより深くなっていることになる。11L区でこの溝が切断している溝105が、東から西へ流れていると想定されることから考えても、溝111はやはり東から西へ流れていた可能性が強い。そうすると、溝110の流水方向も同様であったことが考えられる。取水を目的とした水路とみられる。

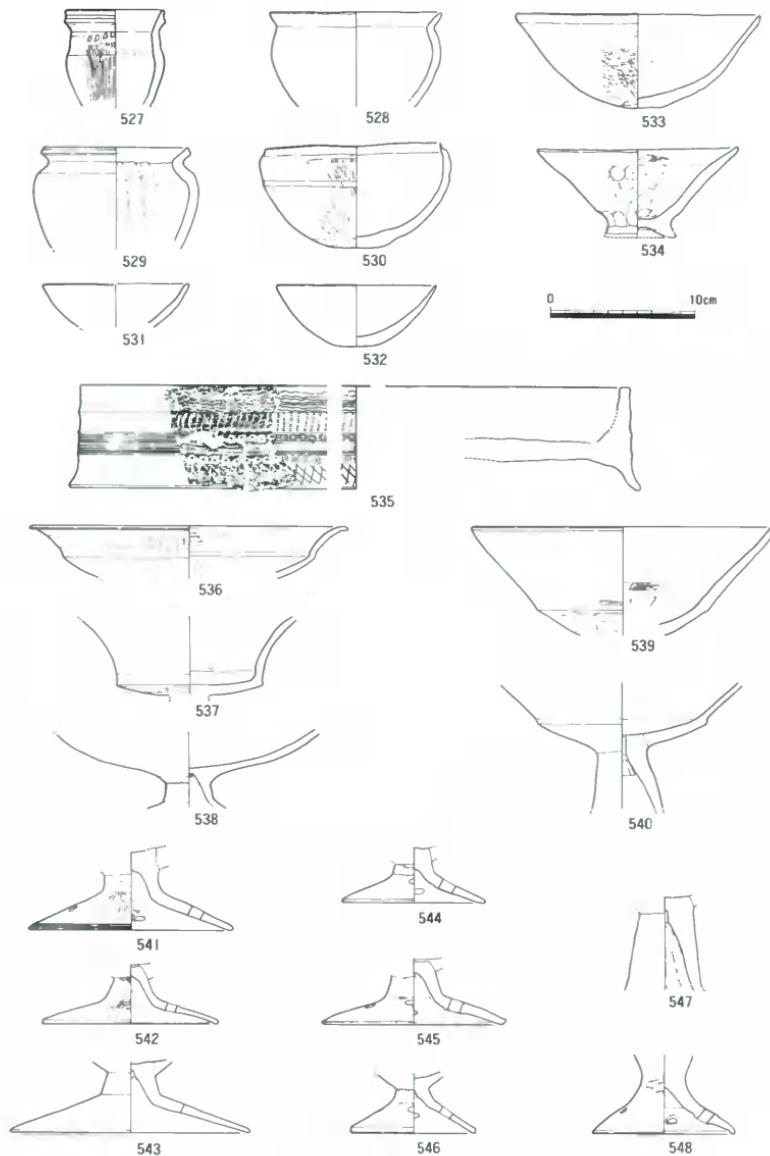
出土遺物は多量の土器片と鉄片、土鍤、石鍤、である。土器では弥生土器と土師器が混在していた。土鍤は12個



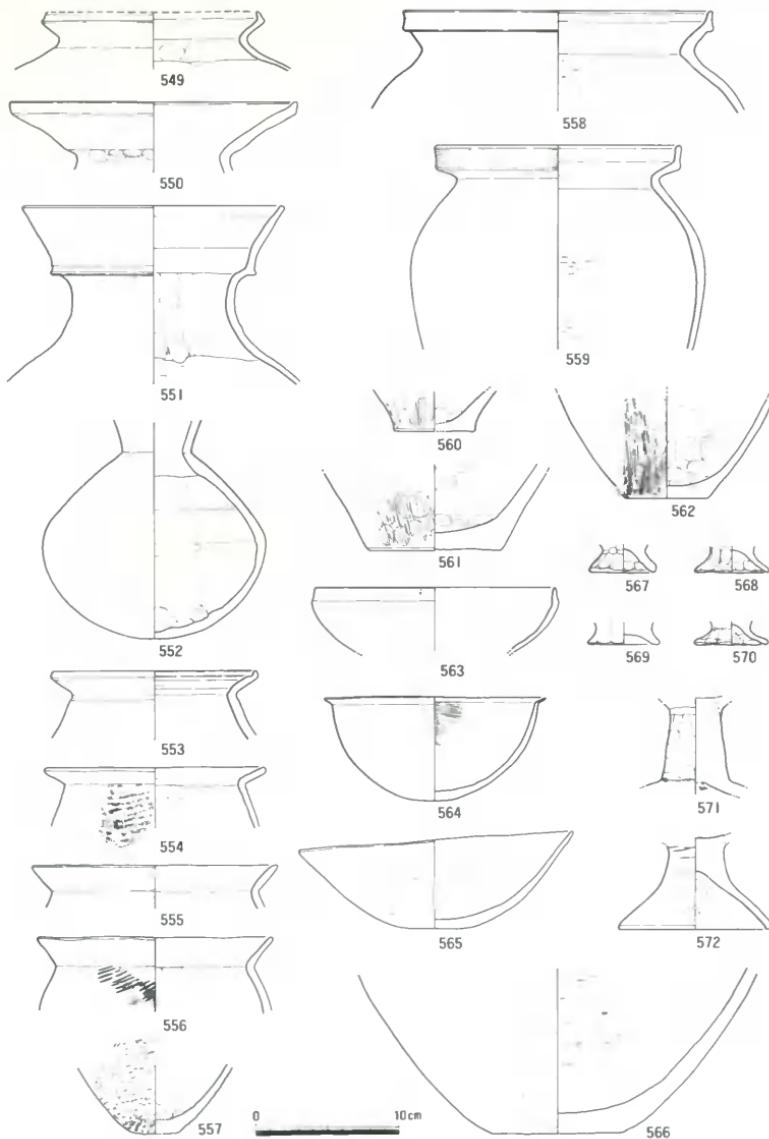
第129図 溝110・111・112 (1/100)



第130図 溝111出土遺物〔1〕



第131図 溝111出土遺物〔2〕



第132図 溝112出土遺物

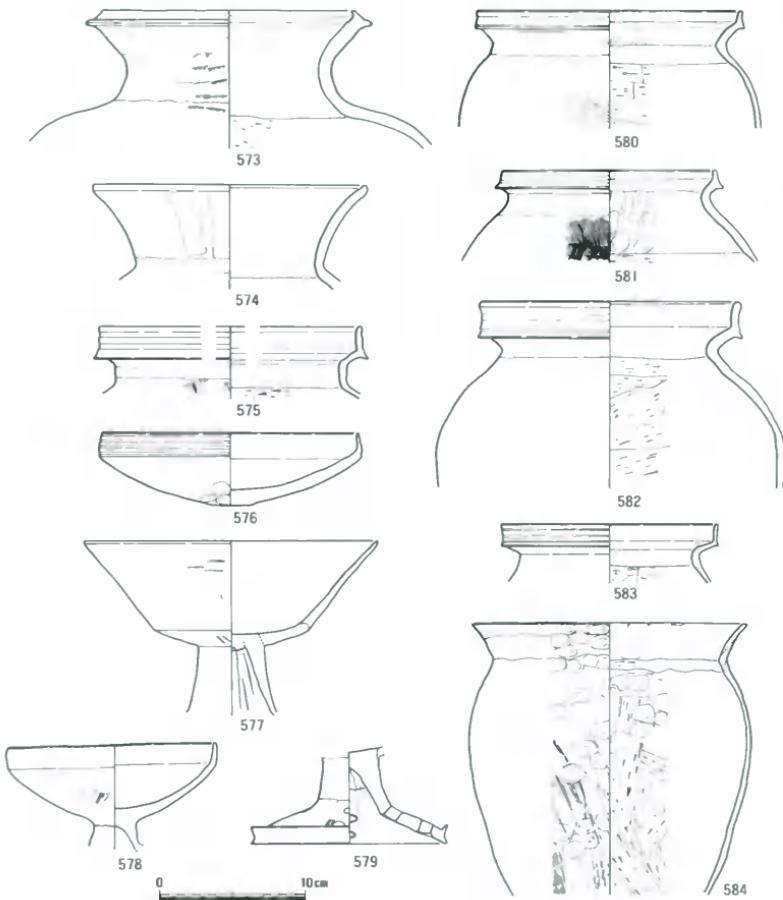
第3章 第2節 遺構・遺物

出土しているが、いずれも円筒状のAタイプのもので、II②型が11個、I型が1個である。石錐は両端を打ち欠いた型式のもので、閃綠岩を使用している。

土器の年代は百・後・III期から百・古・I期にわたると考えられるため、この溝の年代は古墳時代前期としておく。
(岡本)

溝112（第129・132・133図）

12N区から15P区、そして16Q区まで延びて検出された溝である。北端は最近の工事による



第133図 溝111・112出土遺物

搅乱、南端は中世の大溝によってそれぞれ破壊されているが、本来はさらに南北に延びていたとみられる。溝111とはほぼ平行するように流れているが、15P区から南では溝111と離れ、南寄りに流路が変わっている。検出時は12N区で幅8m、14O区で幅6mとかなり大きな溝であったが、掘り下げると東岸に沿って幅2mの溝が底面に現われ、この部分以外はわずかに西岸側へ傾斜する平坦な底面となった。この東岸沿いの溝を掘り下げると、底面は2条の溝状の凹みとなり、まるで溝の改修によって掘り直されたかのような印象を受けた。しかし、第129図の土層断面の結果、この東岸沿いの溝は一度に埋まっていた、改修が行われたような痕跡は認められず、むしろ、東岸沿いの溝とその西の広い平坦面を底面とする溝との重複が明らかになった。第129図の中段の断面図から判断すれば、西側（南側）の溝が新しいようで、従来あった溝の西側により広い、浅い溝を掘ったようである。なお、同じ土層断面図から、溝112が溝111より新しいことも判明した。

溝112から出土した遺物は土器と鉄器と石器、土錘、貝である。土器には弥生土器と土師器が混在している。鉄器は角釘らしきものであり、中世の遺物が上面に混ざり込んだ可能性がある。石器は周縁と中央部に打撃が加えられていて、錘ではないかと考えられる。土錘は4点で、いずれも円筒状で中型のA II②型式である。出土土器のうち、もっとも新しいと考えられるものは百・古・II期とみられ、このことから溝112は古墳時代前期に埋没したと考えられる。この年代観からすれば、前述の溝110との分流あるいは合流という仮説は困難となる。

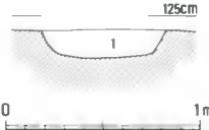
なお、底面の高度を測ると北端と南端ではほとんど変わらず、水流の方向は明確にしにくいが、平行する溝111の方向を参考にすると、南から北（西）へ流动していた可能性がある。

(岡本)

溝113（第134図）

12O区から13O区、そして14P区で検出された。途中、最近の搅乱によって破壊されているが、検出全長は22mになる。幅は70~80cm、深さは10~30cmを測る。底面は平坦に近く、溝壁は急傾斜で、断面形は逆台形をなす。検出部分については、西端の底面の高度が東端のそれよりも10cm低く、全体でもじょじょに西へ低くなるよう、水流は東から西へ向かっていた可能性が強い。

14P区以東の状況は、最近の搅乱や溝111・112との重複で明確ではないが、本来続いていたと推測される。検出部分の東端のわずかな重複部分では、溝113が溝112を破壊しているように観察されたが、15P区以東では溝113は検出できず、第129図の断面でも確認されていないため、溝113が溝111や112よりも古いことも考えられる。溝111と112の15P区以東の底



1. 暗褐色灰色粘質土

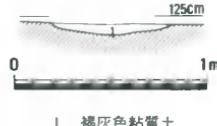
第134図 溝113 (1/30)

面で、溝113と同規模の溝状の凹みがそれぞれ検出されているが、それらの東端の底面の高度はいずれも溝113の西端のそれよりも低く、またその部分の流水方向も溝113とは逆と考えられるため、溝113の続きかどうかは不明確である。

溝113からは出土遺物がなかったため、その年代は確定できず、埋土や走行方向から、弥生時代後期から古墳時代前期の幅を考えざるをえない。 (岡本)

溝114 (第135図)

14P区から14Q区にかけて検出された溝状の遺構である。幅は70~80cm、深さは5cm程度にすぎない。検出全長は12mである。底面の高度を測ると、南が4cmほど低く、北から南へ流れていた可能性が強い。北側は最近の搅乱によって破壊され、南側も遺構検出面が南へ傾斜しているために消滅した可能性が強く、本来はもっと長かったものと考えられる。位置関係からみて、溝107か109の続きである可能性もあるが、溝107とは規模や底面の高度から、溝109とは規模や水流の方向から疑問視される。出土遺物はわずかの土器片にすぎず、その年代は明確ではないが、埋土なども合わせて判断すると、この溝の年代は弥生時代後期から古墳時代前期の間とみられる。 (岡本)



I. 褐灰色粘質土

第135図 溝114 (1/30)

f 落ち込み

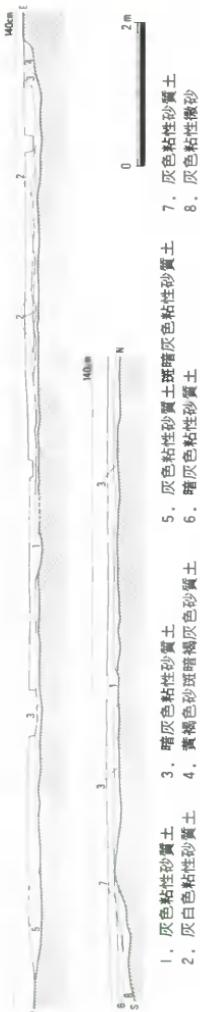
落ち込み101（第136・137図、図版71）

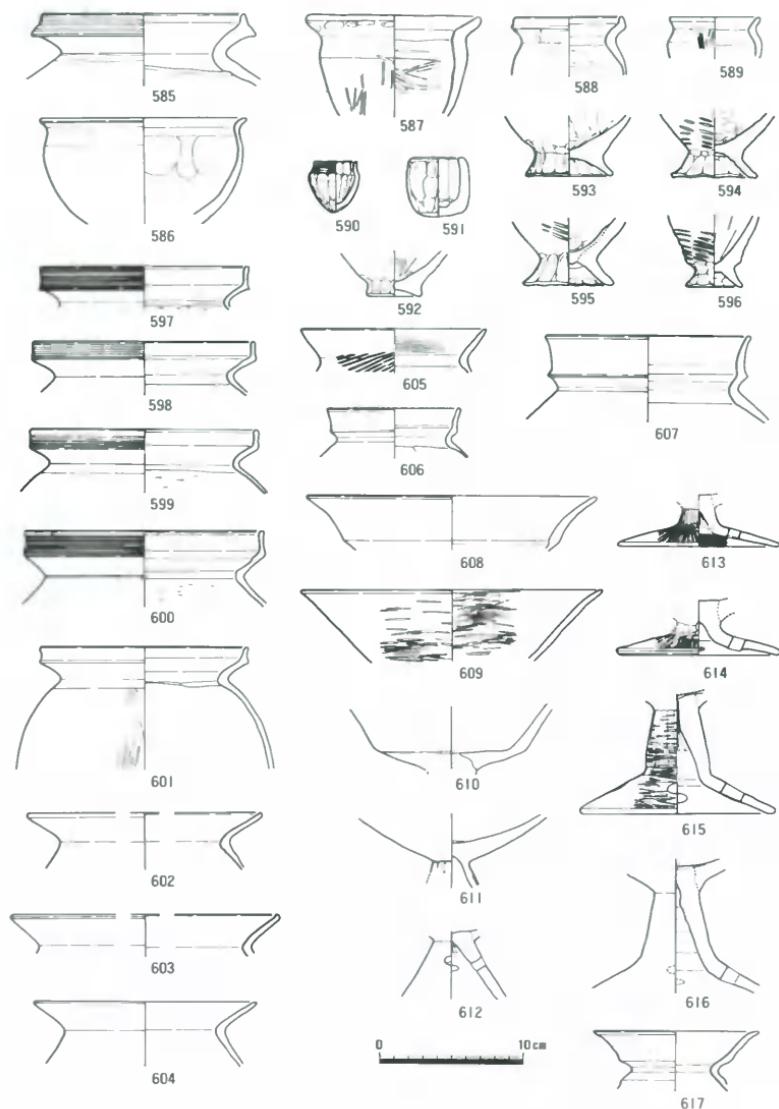
11K・12K・11L・12L区に拡がる大きな凹地が検出された。その規模は、東西13.5m、南北15m以上、深さは0.2~0.3mを測る。この落ち込みの北端と南部分は最近の削平を受けて消滅しているため、全体の形状は不明だが、残存部分は舌状の形で、南方へ少し開いていくようである。落ち込み内の堆積土は5層に分かれているが、おおまかには、縁辺部に堆積した土と、中心部の上下2層の合わせて3層と捉えることができる。土層断面図だけをみると、周縁からの自然な土砂の流入によって埋没したとみることも可能である。ところが、中心部の下層にあたる第3層は、黄白色粘土や淡灰色粘土の小さなブロックを多く含む暗灰色粘性砂質土からなり、このようなブロック状の土の混合は自然の堆積土としては疑問である。したがって、縁辺部に土がいくらか自然に堆積した時点で、人の手によって下半部が埋められ、その後また、自然に埋没が進んだと考えられる。

落ち込み内からは、コンテナ箱で7箱分もの大量の遺物が出土した。その大部分は土器であるが、他に土錘27点、石錘1点、石庖丁らしき石器1点、モモの種子1粒、石英の小蝶が出土している。土器は弥生土器と土師器が共にあり、器種では、壺・甕・鉢・高杯に製塩土器や手づくね土器もみられた。弥生時代後期と古墳時代前期との2時期の土器が出土しているわけだが、これが、前述の人為的な埋め立てと関わるかどうかは、細かい分層発掘を実施しなかったため、明確ではない。

以上のような事実から、この落ち込みの性格を考えてみると、規模の上からは、池のようなものが頭に浮かぶ。検出面からの深さはわずか20~30cmにすぎないが、豊穴住居102の残存状況などから判断すれば、弥生時代から古墳時代

第136図 落ち込み101 (1/80)





第137図 落ち込み101出土遺物

にかけては地表面が検出面より50cm以上高かったものと考えられるため、貯水の機能もかなりあったものとみられる。ただ、落ち込みの南端部分では溝105や111との重複があるため、これらとの関係が問題となる。溝105については、溝の埋没後に落ち込みが造られたようだが、溝111との関係は最近の削平のため明確ではない。また、池のような常時水を溜めていた施設とすれば、底に泥の堆積や水草の繁茂があったと考えられるが、土層断面の観察ではそのような痕跡は確認できていない。このようなことからすれば、たとえ、池であったとしても一時的な貯水施設にすぎなかつたのではないかと考えられる。この落ち込みは、造られた後、一度埋め立てられている。この埋め立ては、その層である第3層の上面が縁辺の傾斜面や底面とはほぼ平行していることから、落ち込みの埋没を意図したものではなく、底部の調整のためのものと考えられる。まだこの時点では、落ち込みの当初の機能は維持されていたとみてよい。その後、この機能が失われ、やがてゴミ捨て場として埋没していったのであろう。その埋没の時期は、出土土器から判断して、百・古・I期かII期の古墳時代前期と考えられる。なお、造られた時期は溝105との関係から、百・後・IV期かとみられる。

(岡本)

5. 包含層（土器溜り）

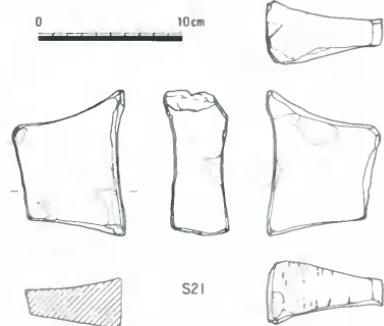
溝101上部土器溜り下層（第138～151図、図版50～56）

この土器溜りは、微高地の肩部に添って流走する溝101の上部付近に、幅50cm～3mの範囲で形成されている。土器の密度は場所によって多少の違いが認められ、西端に近い方が比較的粗である。遺物分布図の中で、土器溜りが形成されていない場所が、概して現代用水や搅乱壙などによって削平されている地点に符号するため、当初は溝101の上部全面に土器溜りが広がっていたと思われる。

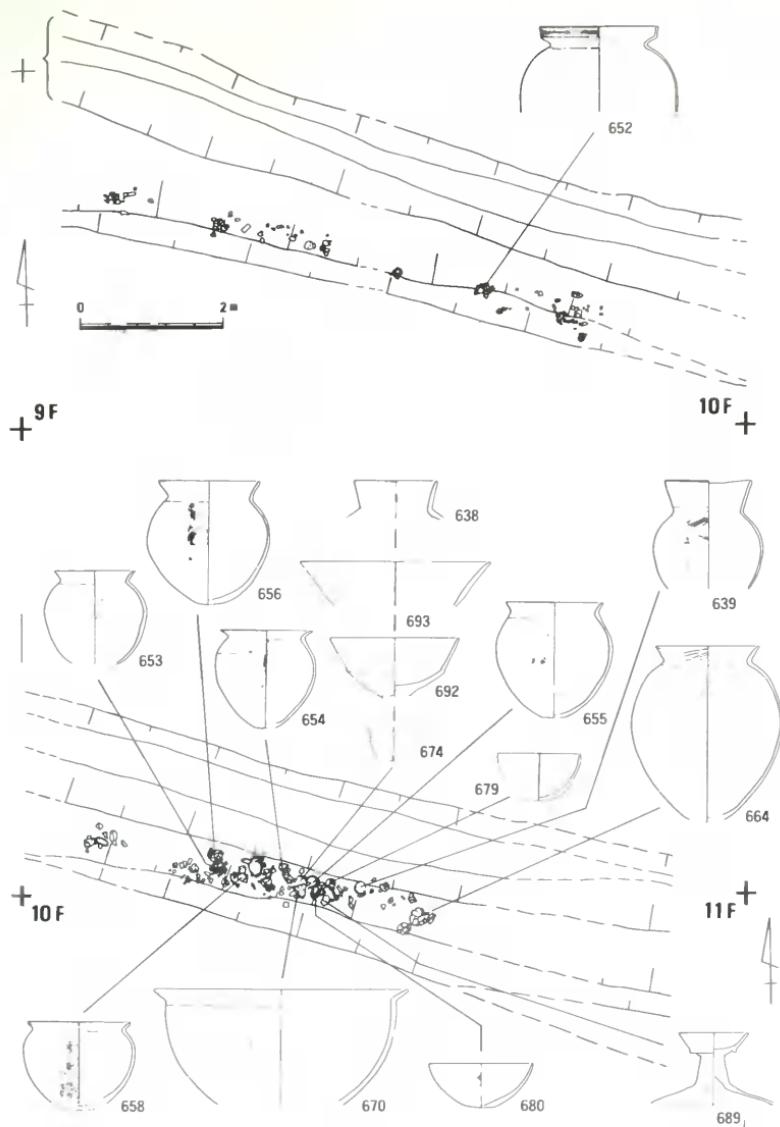
A-A'およびB-B'などの断面観察では、溝101や微高地の肩口が埋まっていく過程でのたわみに土器溜りが形成されていることが看取され、いわゆる微高地端部の斜面堆積土層中の土器包含層とはやや状況を異にしている。そして、弥生時代から古墳時代に対応する遺物の出土レベルは、第141図B-B'断面の第2層のように標高110～120cmに集中する。また、奈良時代ではかろうじて削平をまぬかれて遺存している第1層のように、同110～120cmのレベルに認められている。（奈良時代の遺物については、同土器溜り上層第167～170図を参照）

出土土器の保存状態は全体として良好とはいえないが、比較的完形に近いものも多い。土器618～630は土器溜りの中にあって弥生時代に遡るものであるが、その大勢は百・後・III～IVの時期を示す。それらの出土位置は、とくに一か所にまとまるうことなく、11ラインより東部分に点々と認められるにすぎない。そのほかの土器溜りの大半は百・古・Iの時期を示し、器種も多様で、壺、甕、高杯、鉢のほか小形器台、埴、手捏ね、手焙りなどがあり、セット関係を捉える格好の資料となっている。しかし、全体の遺物量は整理箱にして約50箱分もあり、さらに保存状態の悪いものが多い。十分に整理・復元ができるないのが、あえてその比率を示すと壺、甕、高杯、鉢については、1:5:1:1くらいと思われる。その他の器種は、図示した個数とほぼ一致する。

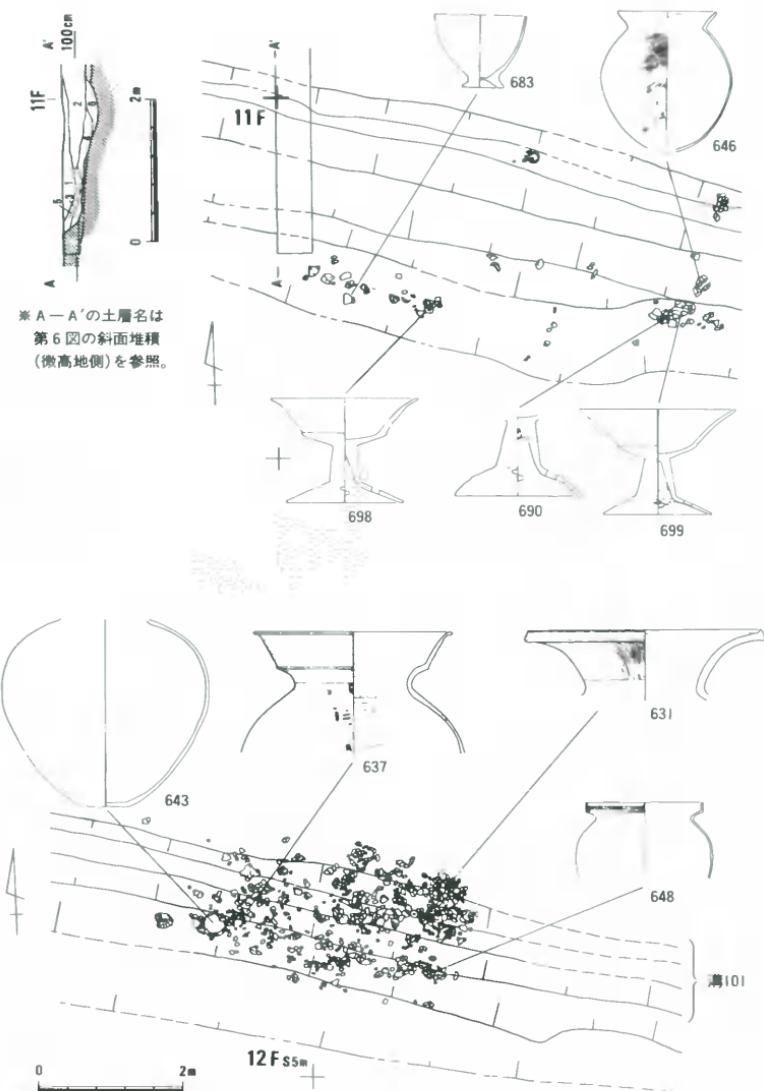
甕は二重口縁で口縁外面に数条の櫛描き沈線を繞らせる647～652と「く」の字口縁の646・653～664があるが、量的には前者の方が少ない。後者は約1/3に外面タタキが認められるが、646を除き660・662・664には比較的粗いタタキが施され、いわゆる畿内産タタキとは区別される。高杯は杯部



第138図 溝101上部土器溜り下層
出土遺物〔1〕(1/4)

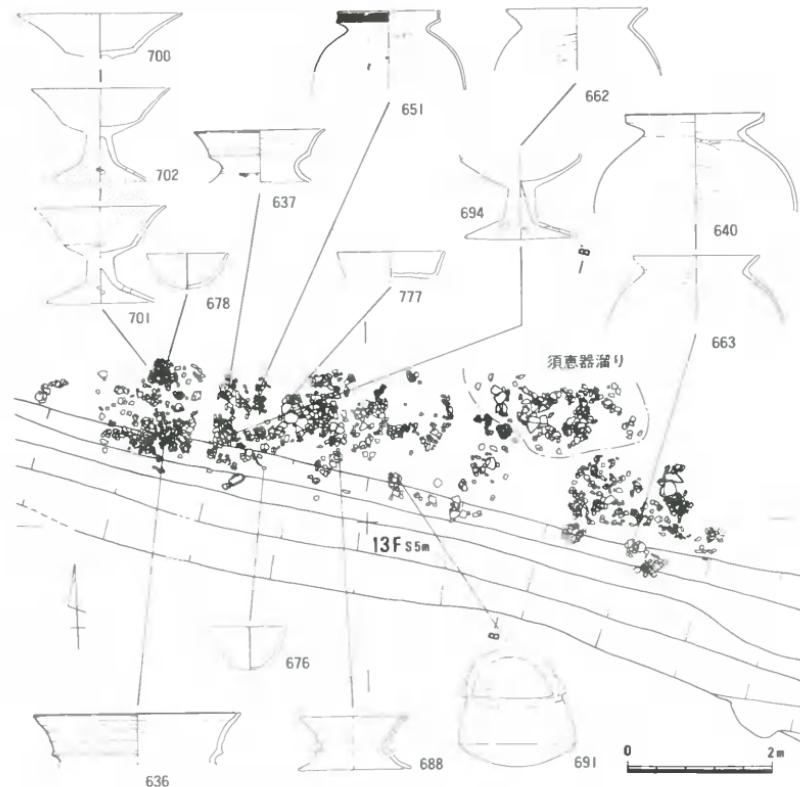
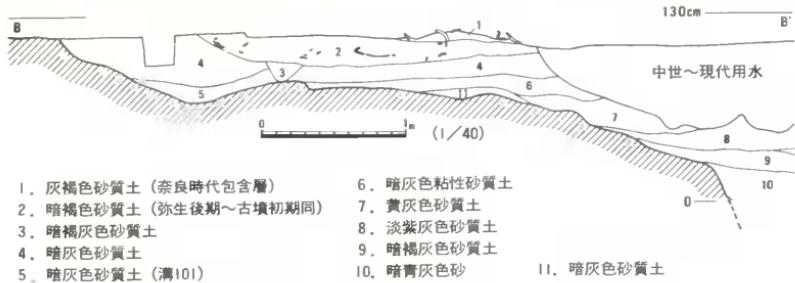


第139図 溝101上部土器灑り出土遺物分布 [9・10区] (1/80, 1/8)

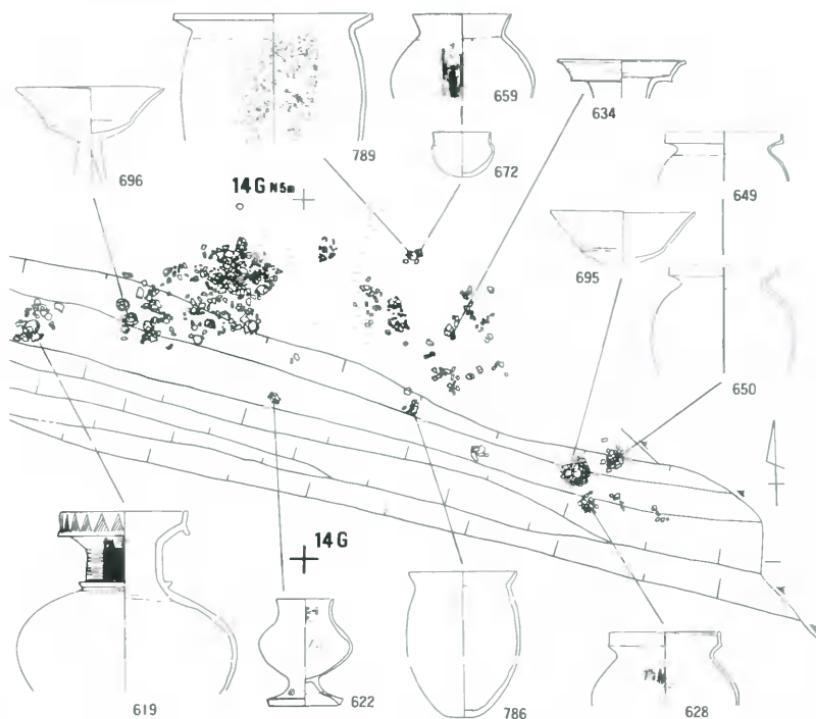


第140図 溝101上部土器溜り出土遺物分布・断面 (11・12区) (1/80, 1/8)

1 弥生時代・古墳時代



第141図 溝101上部土器溝り出土遺物分布・断面 [12・13区] (1/80, 1/8)

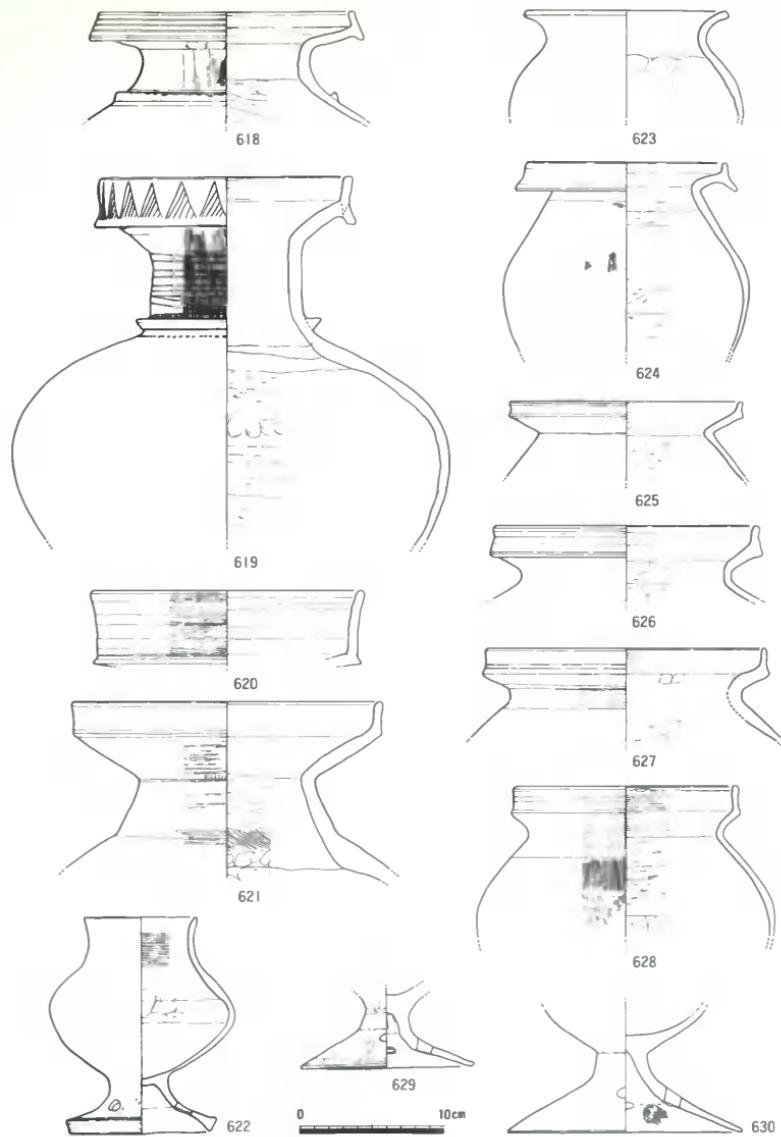


第142図 溝101上部土器溜り出土遺物分布 [13・14区] (1/80, 1/8)

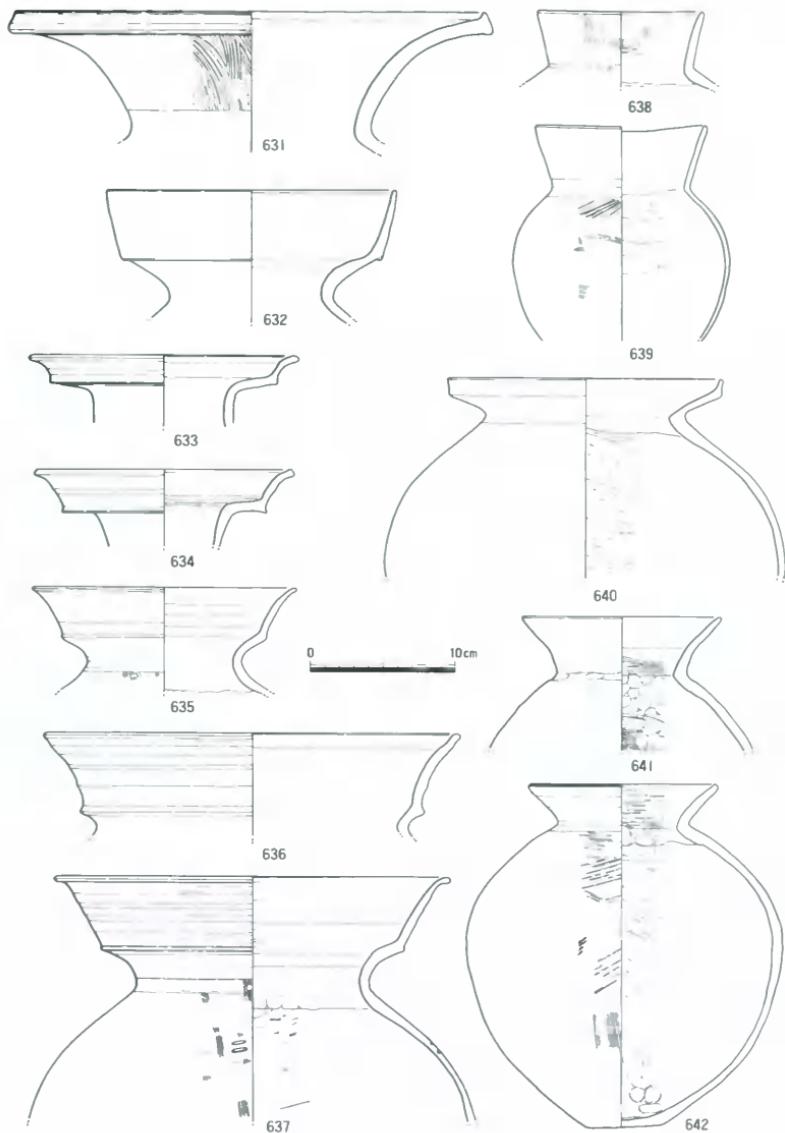
の基部と口縁部との長さの比率や、口縁部の外反する角度によって、692・694・695、699・701・702、700のように2～3のタイプに分けられる。そのうち、700は脚部が欠損しているため明確ではないが、口縁部が発達しさらに杯部が浅いという特徴からして、他よりも多少後出的な要素がうかがえる。

また、出土土器の中に形態・手法・胎土のいずれの点からも、確実に他の地方からの搬入品と考えられる633・634・646（畿内）、645（山陰）なども散見され、ほぼ百・古・Iの一群の中において、併行関係も捉えられる。

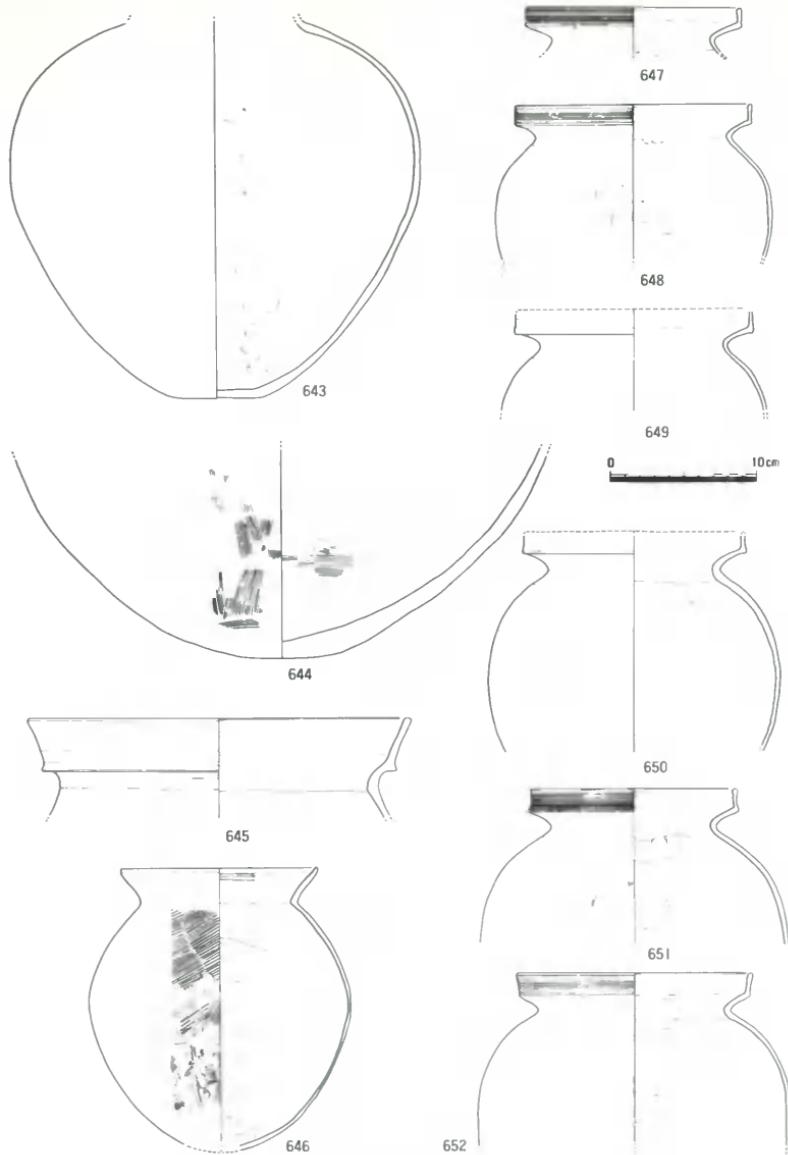
そのほかの遺物として、土製品や石器の出土をみているが、弥生時代後期と思われるサヌカイト製の石鎌やスクレイバー数点および砥石を除けば、そのほとんどは鍤である。土鍤は、いずれも円柱形の土塊の中心に縱方向の穿孔をもつ管状のもので、太さや長さなどの形状の違い



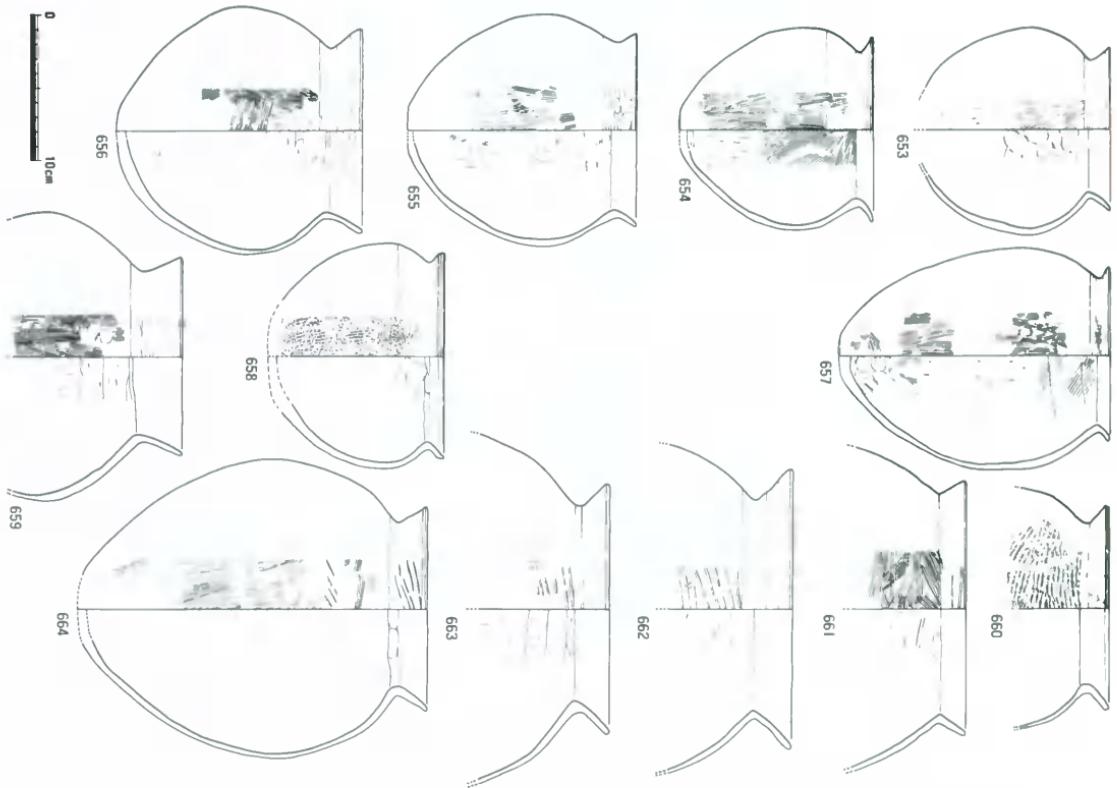
第143図 溝101上部土器溜り下層出土遺物〔2〕



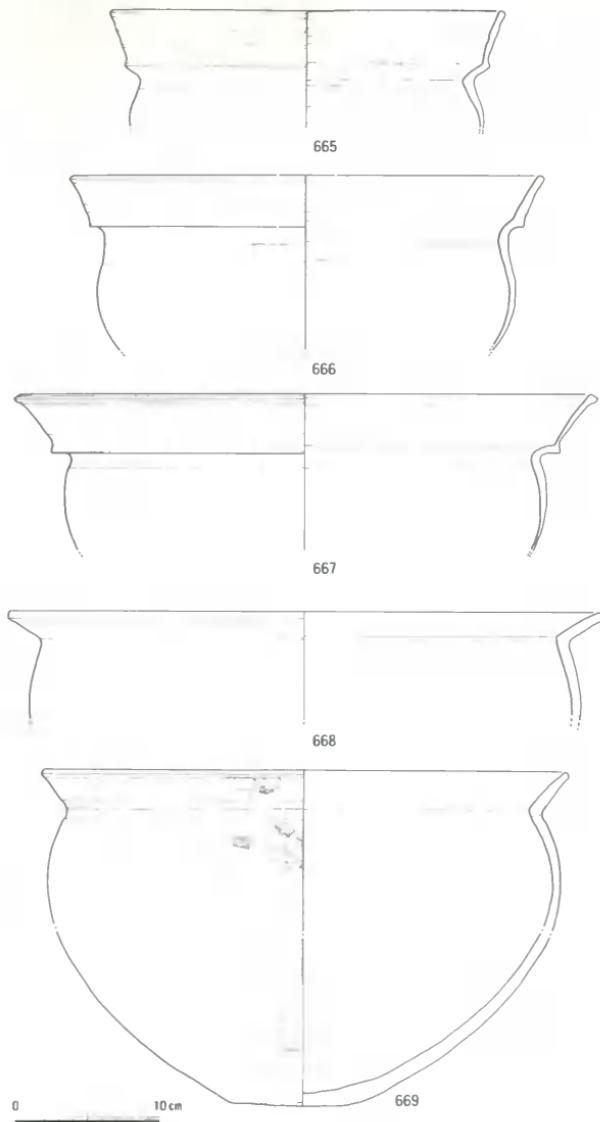
第144図 溝101上部土器溜り下層出土遺物〔3〕



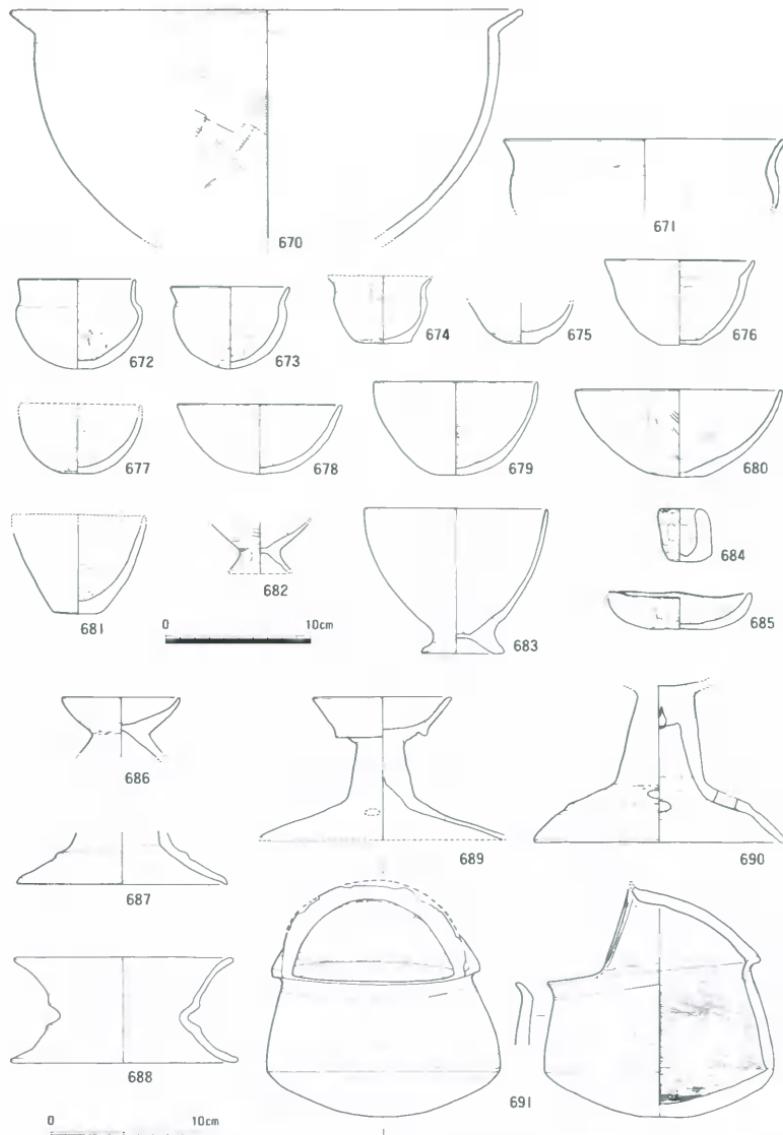
第145 溝101上部土器溜り下層出土遺物〔4〕



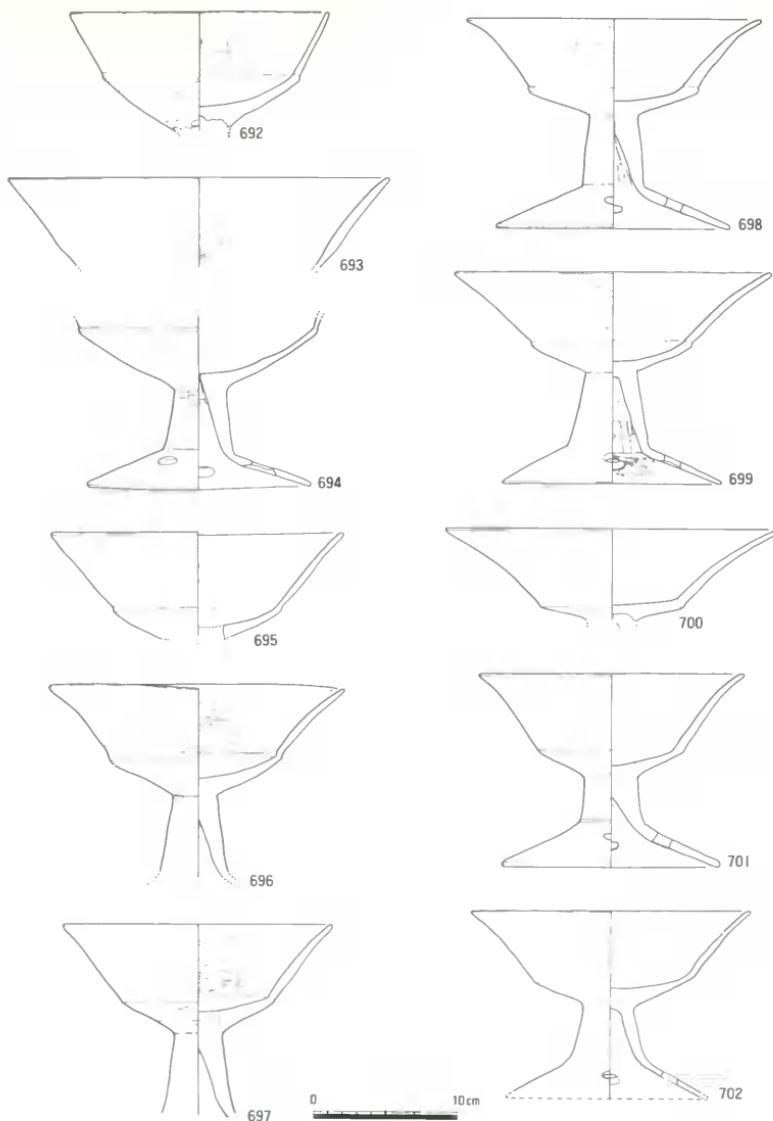
第146図 湯101上部土器層り下層出土遺物〔5〕



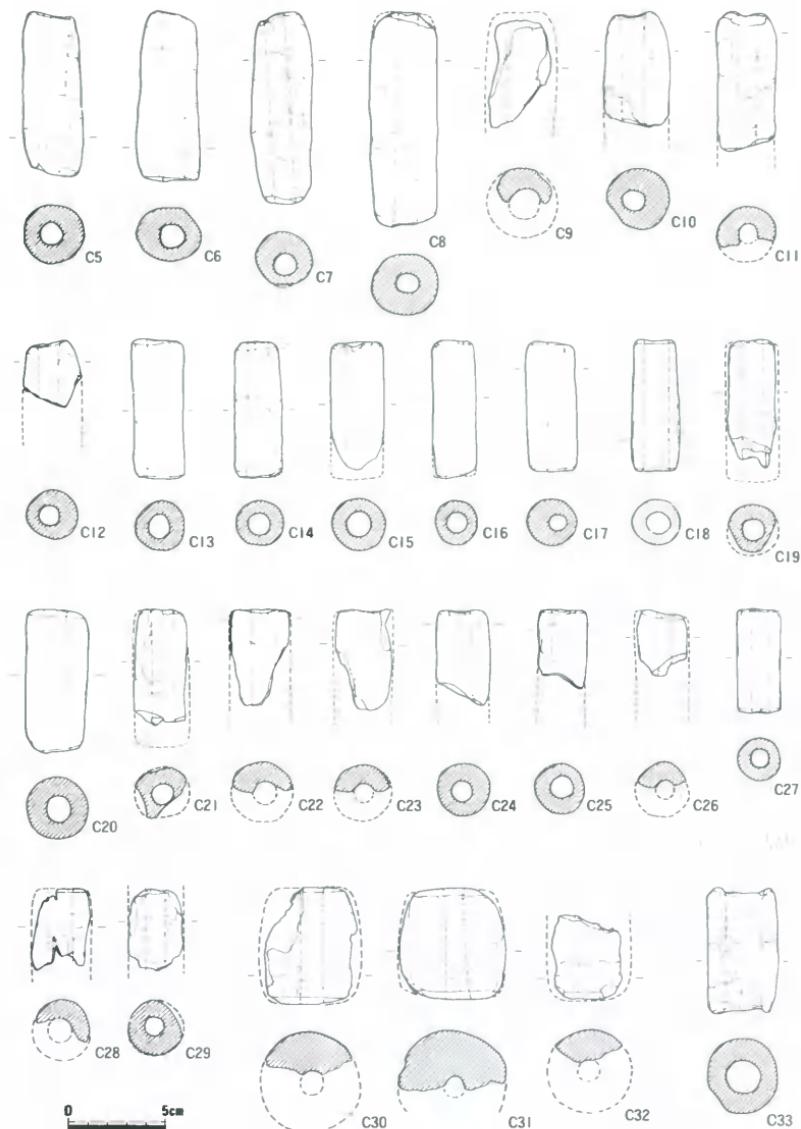
第147図 溝101上部土器層下層出土遺物〔6〕



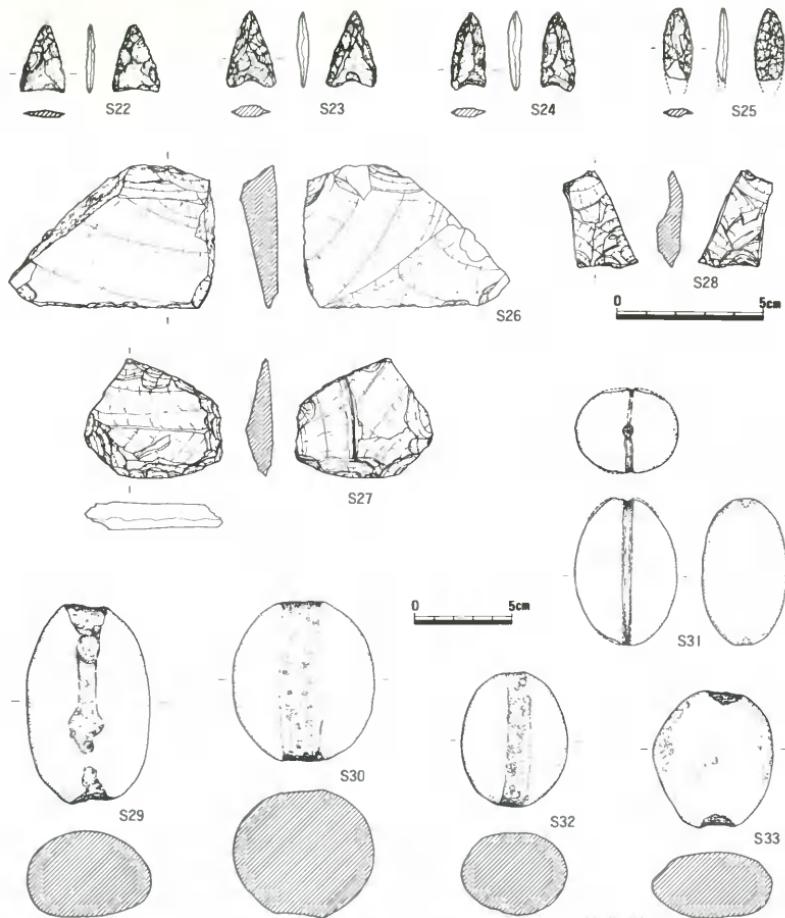
第148図 溝101上部土器溝り下層出土遺物〔7〕



第149図 溝101上部土器溜り下層出土遺物〔8〕



第150図 溝101上部土器窯下層出土遺物〔9〕

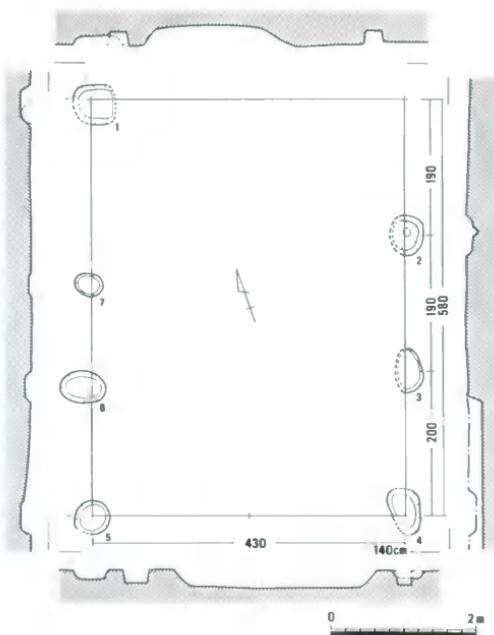


第151図 溝101上部土器溜り下層出土遺物 (10)

によって、2～3のタイプに分けうる(表21を参照)。これらの錘は、伴出土器からすれば百・後・III～百・古・Iに比定されるが、土器溜りの状況から細かな時期を特定することはできない。C30・C31は井戸118出土のC34・C35と類似するため、奈良時代に属すタイプの一つとみるほうがよいかもしれない。石錘は楕円状の河原石の表面を線状に打ち欠いて窪みをつけたり、頂端部をわずかに打ち欠いたもので、土錘と同様の時期幅の中で捉えられる。(柳瀬)

2 奈良時代～平安時代中期

a 建物



第152図 建物108 (1/80)

建物108 (第152図、図版64)

建物は10I区に位置する。柱列のほぼ中央部は後世に削平されており、それによって梁間の中央部の柱穴が削平されたよう、本来3間×2間の建物であった可能性が高い。桁行の主軸は2度弱東に振っている。柱穴の深さはいずれも10cm前後と浅く、柱穴7と北東隅の柱穴は不確実である。柱穴は隅丸方形あるいは梢円形の平面形態をもち、長径は60cm前後と大きい。

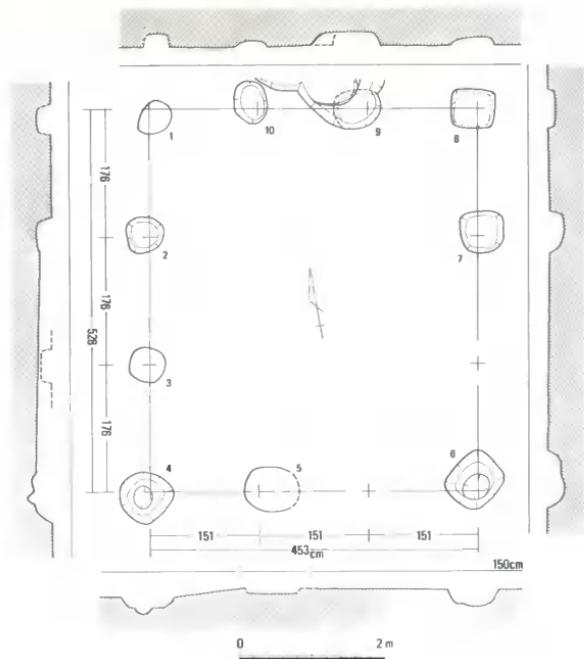
遺物は全体で15片ほどの土器片で、そのうち柱穴1・6などからは奈良

(柳瀬)

期と思われる須恵器片が出土している。

建物109 (第153図)

16M区と16N区にまたがって位置する、南北棟の掘立柱建物である。北辺部は竪穴住居103との重複関係があったため、発掘調査時点では、柱穴2・4・6・7で建物を復元していたが、その後の整理・検討の結果、桁行3間、梁間3間の建物であることが判明した。ただ、東桁行と南梁間では、それぞれ1基の柱穴は検出できていない。柱穴から出土した遺物は主に弥生土器片であり、一部に中世のものらしい土器片もわずかに認められたが、建物の規模や構造、ならびに柱穴の形状から判断して、奈良時代から平安時代前半にかけての古代の掘立柱建物と考



第153図 建物109 (1/80)

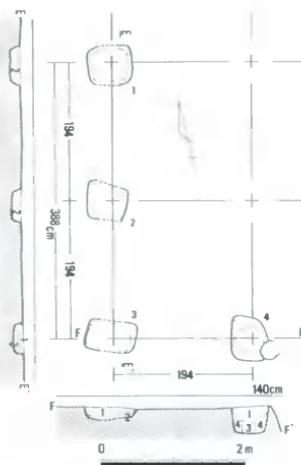
えている。

建物の規模は、梁間全長が453cm、桁行全長は528cmを測り、床面積23.9m²となる。柱間は梁間・桁行ともに等間で、梁間は151cm、桁行は176cmである。1尺を約30cmとすれば、梁間は5尺、桁行はほぼ6尺にあたる。柱穴の形状はもともと方形を意図していたものと思われるが、椭円形や円形に近いものも見られる。また、柱穴4や6のように、辺が桁の方向に削っていないうるものがある。柱穴の規模は、柱穴8が一辺60cm、柱穴6で76cmを測り、桁行中央の柱穴2・3は長径50cm前後である。深さは10~25cm程度で浅く、中世の大形掘立柱建物の柱穴とは大きな差がある。柱穴の埋土は淡灰茶褐色砂質土である。建物の構造であるが、梁間は3間であっても、柱はすべて側柱のみであり、梁間の中央に棟を置く切妻造りの建物と考えられる。建物の棟の方向はN-10° 30'-Eを測るが、この方向は、もう1棟の古代の掘立柱建物である建物110の棟方向とは2° 30'異なる。(岡本)

建物110（第154図）

18P区の南東部に位置する。建物の東側が、低水路掘削のため削平されており、全体の規模等不明である。検出したのは、柱穴4個で、L字状に並ぶものを調査した。柱穴の掘り方は、方形もしくは、長方形を呈するものである。柱穴の大きさは、柱穴1では、長辺60cm、短辺52cmを測る。検出した柱穴で最大のものは、柱穴3であり、長辺70cm、短辺42cmを測る。柱穴の検出面からの深さは、柱穴1～3が15～16cm、柱穴4が36cmを測る。柱穴4には、柱痕跡を確認した。柱穴1～3は、中央部分を暗渠により破壊されていることもあって確認されなかった。柱穴の中心間の距離は、各々194cmを測る。建物の時期としては、奈良時代が考えられる。

(井上)



1. 灰茶褐色土 2. 黄色土斑灰茶褐色土
3. 暗茶褐色土 4. 茶褐色土

第154図 建物110（1/80）

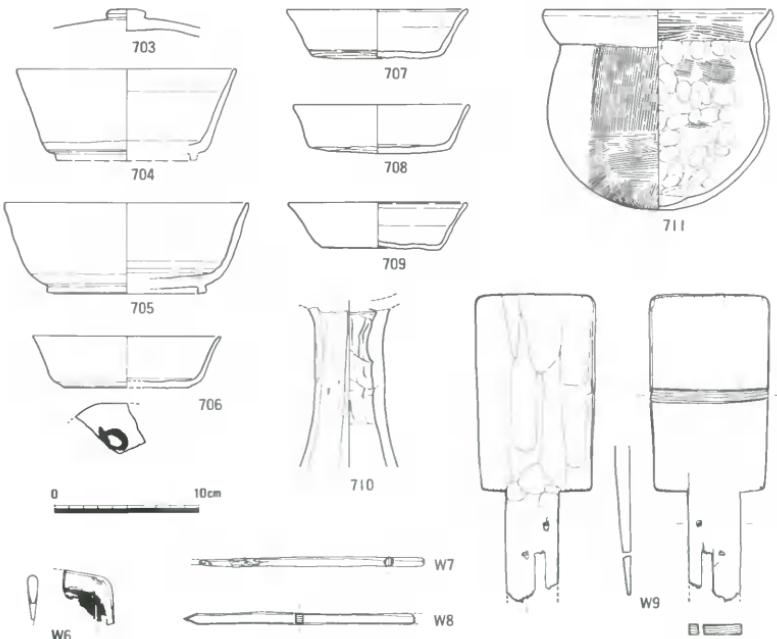
b 井 戸

井戸118（第115～157図、図版57～59）

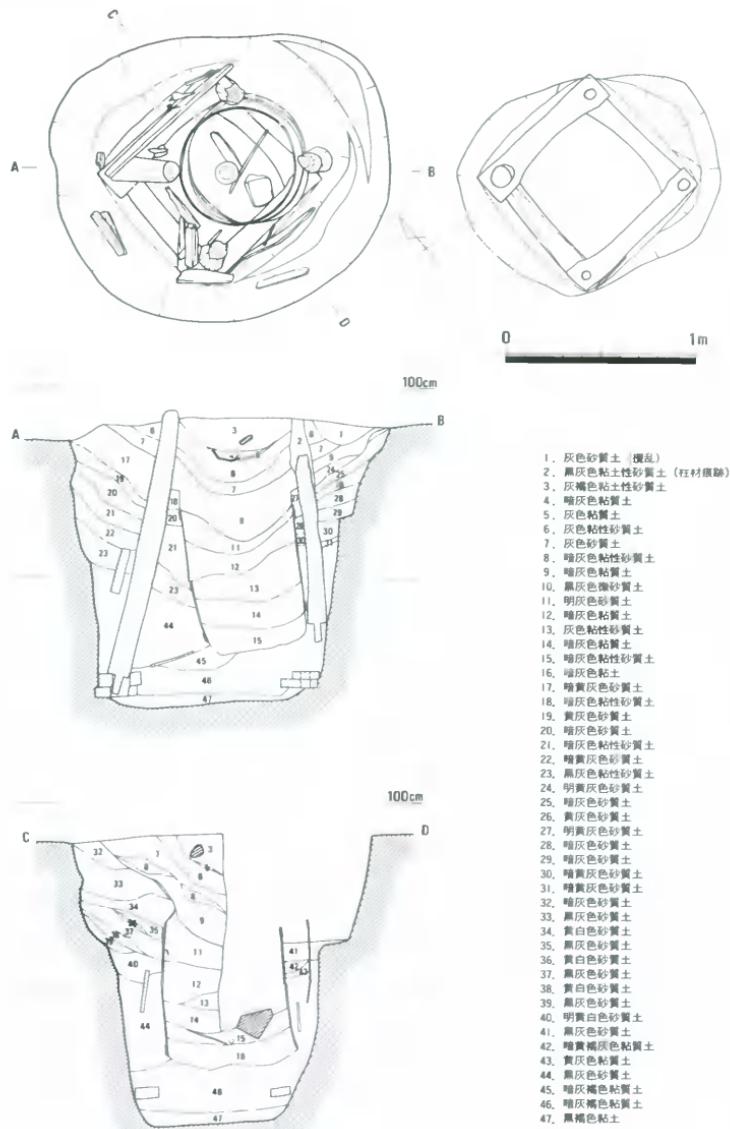
微高地中央部寄りの11J区に所在する。上面は円形で、長径178cm、深さは検出面から152cmを測るが、上部がかなり削られており、本来はさらに深いものであったと思われる。掘り方はほぼ垂直である。

井戸中央に二段の曲物を置き、四方に井戸の柱が立てられた状態で検出したが、柱は曲物の保護に関連をもっておらず、井戸の改変の最終的な状況であると考えられるため、以下、復元的に記載する。

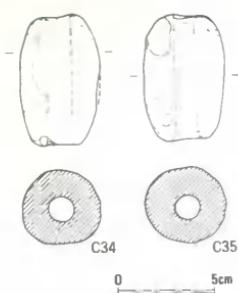
当初、この井戸は底に井桁形に組み合わせた礎板を置き、礎板を貫通する枘穴の上に隅柱を立て、横桟と板材によって形成された縦板組み隅柱横桟どめ井戸であったと思われる。礎板は内側を若干割り込んだ長方形の4枚の板で、長さ82cm、厚さ7～4cmを測り、円形の穴が穿たれている。穴は径11～5cmと、柱の枘の太さに較べてかなり大きなものである。隅柱は太さ



第155図 井戸118出土遺物〔1〕



第156図 井戸118 (1/30)



第157図 井戸118出土遺物〔2〕

11～7cmの丸太（北西）、角材（北東、南西）を用い、下側に長さ約10cm、長さ7～5cmの円形の枘が造り出されている。隅柱の横桟を固定する穴は、下端から70～75cmの位置に2個ずつほぼ直角をなすように穿たれており、幅4.9～3.5cm、上下の長さ4.4～3.5cmを測る。

その後、南東の隅柱が取り替えられるが、その隅柱には礎板を固定するための枘は造り出されているものの、横桟を固定するための枘穴が穿たれておらず、簡略な改修であったようである。

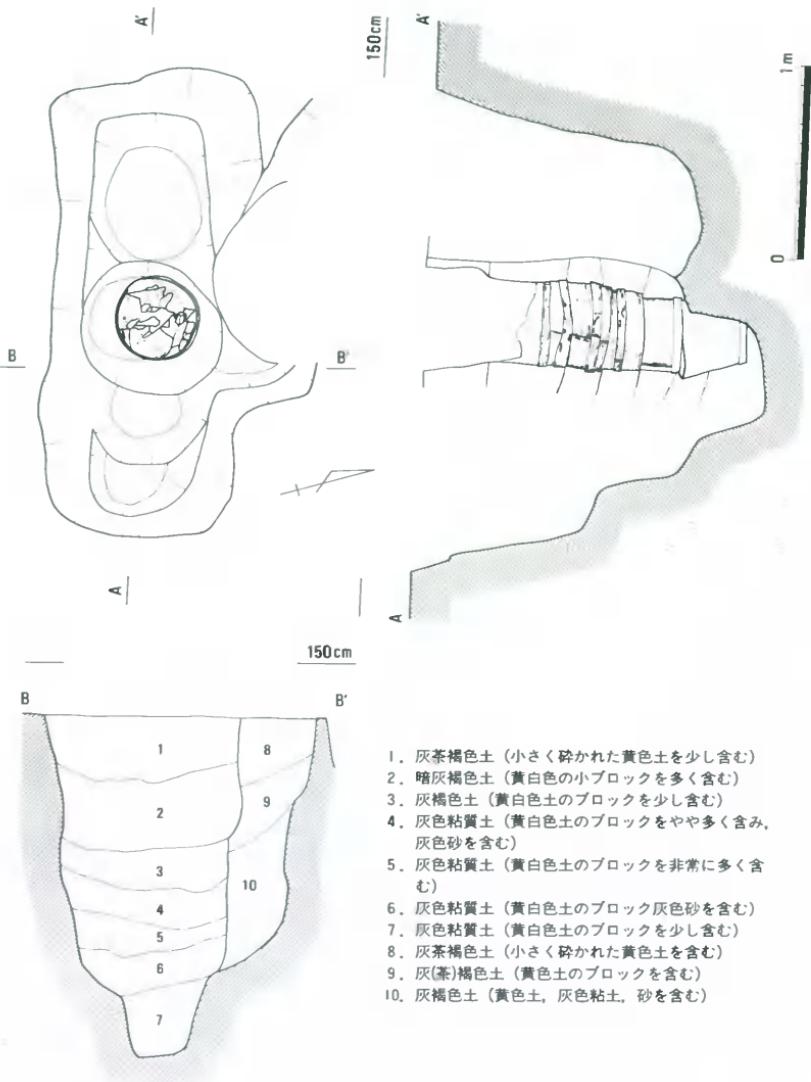
そして、最終的に柱や礎板を残したまま板材を取り去り、かわりに曲物を入れて使用したとみられる。横桟を

はずすためにいずれの隅柱も動かされており、南東の隅柱は上方に引き上げられている。残存していた曲物は2段であるが、埋土の断面からみて、少なくとももう一段は曲げ物があったと考えてよい。曲物はうまく取り上げることができなかったが、2個ともほぼ同大で径56cm、高さ38cmを測り、サクラの皮でとじあわせ、外面の上下端に幅4.5cmの帯材をめぐらせたものである。内面には幅8～5mmの間隔で縦方向、10～8mm間隔で斜格子状の切り目が施されている。

遺物は主に井戸廃絶後の埋土および井戸使用時の堆積層から出土している。須恵器杯703～706、土師器杯707～709、高杯710、甕711、櫛W6、箸状木製品W7・W8、不明木器W9、土錘C34・C35などであり、須恵器杯706には墨で文様ないし文字が書かれている。遺物からみて、この井戸は8世紀後半から9世紀にかけて使用されたと考えられる。（宇垣）

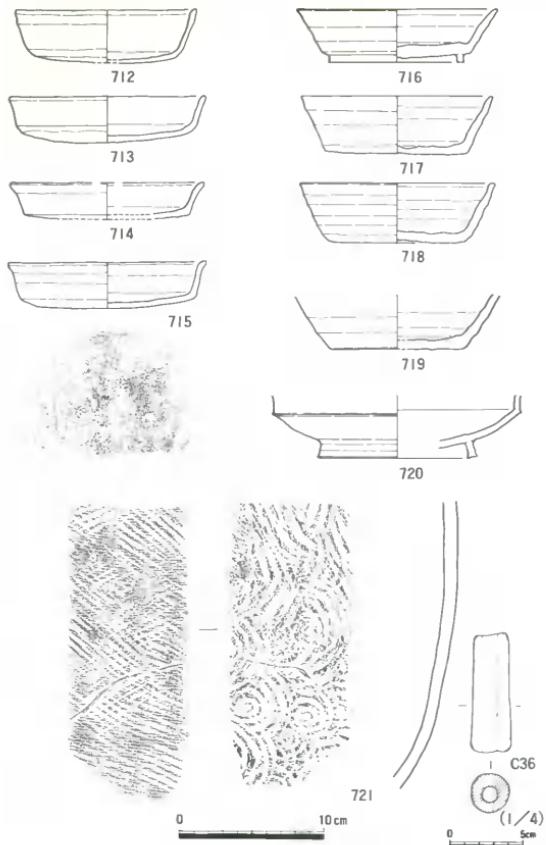
井戸119（第158・159図、図版60）

15L区に位置する。掘り方の平面形が長方形を呈するもので、長径164cm、短径96cmを測る。井側は、掘り方の西端に造られるものである。掘り方は、西側は2段に、東側は3段に掘られている。掘り方の西壁は、ほぼ垂直に掘られているが、東側は、少し開きながら掘られている。検出面からの深さは、176cmを測る。底面の海拔高は-50cmである。井戸は、調査の途中で崩壊したため、完成した土層断面図は作成できなかった。検出した井側は曲物のみを重ね上げるもので、下から5段までは残存していた。断面図から見ると、井側は、曲物を一段積むごとに土で埋めた状況を呈している。その状況からすれば、検出面までの間にさらに一段の曲物が存在したものと考えられる。井戸の掘り方が東西に長く、東側に段が造られるのは、井戸の構築に、その段を使用し、井側を積み上げたものと考えられる。井側の内法は、42cmを測る。井戸119と重複して同じ幅で西側に90cm広がる掘り方がある。検出面からの深さは140cmを測り。井戸119cmより約30cm深い。掘り方の西壁は、少し上方に開くもので、底部は少し窪む。掘り方内の埋



第158図 井戸119 (1/30)

2 奈良時代～平安時代中期

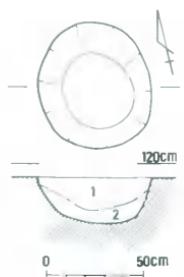


第159図 井戸119出土遺物

(井上)

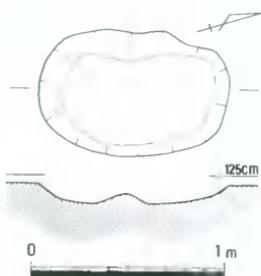
土から、井戸を示すようなものは出土していないが、これも井戸の廃棄されたものと考えられる。出土遺物としては、井戸の底部から数点まとめて出土した。712～715は、土師器の杯で、内外面に丹が塗られている。714・715は、口縁端部が少し外方へ曲がるものである。716～720は須恵器の杯で、716・720は高台が付く。720は、井側内の上層から出土した。721は、須恵器の甕の破片で、外面平行タタキ、内面は、同心円のタタキが施される。C36は、土錐である。井戸の時期としては、奈良時代と考えられる。

c 土 壤



1. 暗褐灰色粘性砂質土
2. 暗褐灰色砂質土斑
黄褐色粘性砂質土

第160図 土壌146 (1/30)



第161図 土壌147 (1/30)

土壤146 (第160図)

15Q区の北端に位置する長円形の土壌である。長径67cm、短径58cm、深さは24cmを測る。断面形は楕円形をなす。埋土は2層に分けられる。上層は暗褐灰色粘性砂質土、下層は暗褐灰色砂質土斑黄褐色粘性砂質土である。遺物は土師器片のみで、甕と高杯がある。埋土や遺物から判断すると、この土壌の年代は奈良時代と考えられる。

(岡本)

土壤147 (第161図)

15Q区と16Q区の境界の中央部で検出された。楕円形の平面形をもつが、少し乱れがある。長径98cm、短径64cm、深さは11cmを測る。底面は平坦ではなく、かなり凹凸がある。埋土は淡灰褐色細砂で、中世の柱穴の埋土とは異なる。土器片が少量出土している。土師器の楕・甕の他に丹塗りの皿があり、縁釉片もみられた。遺物と埋土とを考え合わせれば、奈良時代の土壌である可能性が強い。

(岡本)

土壤148

14Q区の東半に位置する。現代の暗渠によってかなり破壊されているが、平面形は隅丸の長方形と推定される。残存部分で長軸105cmを測る。深さは16cmである。底面はいくらか凹凸があるが、断面形は皿形となる。

出土遺物は土器片のみで、土師器と須恵器がある。それらの遺物の年代は平安時代と考えられる。

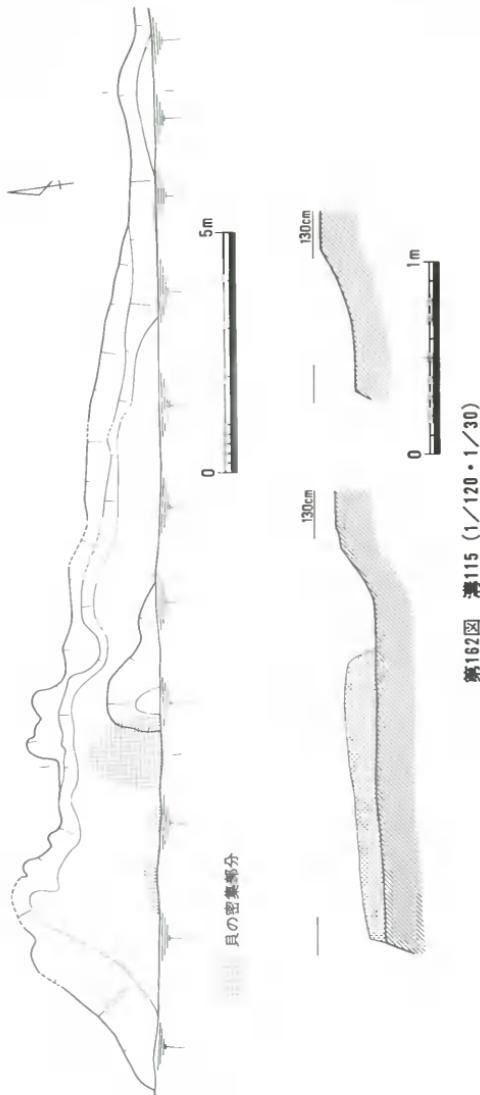
この土壌は溝120から西へ50cm程しか離れておらず、その延長上にある。出土した遺物も溝120の出土遺物と類似することから、溝120との関連が指摘される。土壌の深さが16cmとかなりあるため、溝の一部ではないとしても、その関連性は無視できない。溝120の年代は出土遺物から平安時代末期から鎌倉時代初期と考えられるため、この土壌の年代もそこまで降る可能性がある。

(岡本)

d 溝

溝115(第162～166図、図版61)
 14Q区から15Q・R区、さらに16Q・R区まで細長く続く傾斜面を検出した。肩部から少し下がったところで傾斜の変換点があり、大部分は現代用水路と溝122に破壊されているものの、溝状の遺構と考えられる。残存長は24m、最大で3mの残存幅をもつ。深さは最大で30cm程度を測る。溝内には3カ所の貝の密集部分があり、そのもっとも大きいものは舌状で、幅1.5m、長さ1.55m、厚さ12cmを測る。おそらくは廃棄物として投げ捨てられたもので、一種の貝塚と言えよう。残存部分の形状をみると山形をなしているため、南西から北東へ向かっていたものが、蛇行して南東へ流れていったようにみられる。

出土遺物は土器、鉄器、土錘、さらに骨や種子と多彩である。土器では土師器、須恵器、瓦器、白磁がみられる。鉄器は角釘らしきもの1点、土錘は楕円球で長軸にそって溝のあるものが1点ある。骨はウマらしい左上顎歯とイノシシではないかとみられる前腕骨の2点が出土している。



第3章 第2節 遺構・遺物

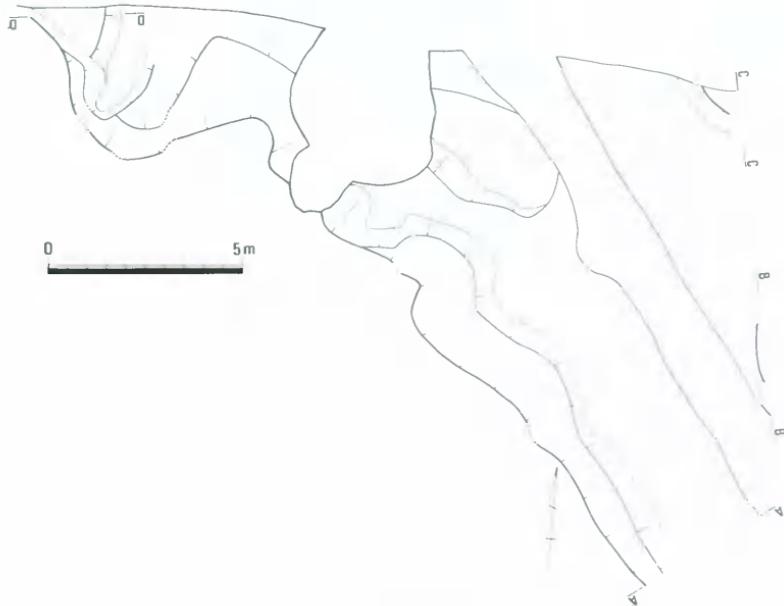
る。種子はモモのもので、もっとも大きい貝塚から出土している。

出土した土器の年代は奈良時代から平安時代にかけてのものであり、溝122に先行するような溝がすでに存在していた可能性がある。1983年度の調査区でも同時代の溝が検出されていて、走行方向から考えても、この溝の続きとみられる。その場合、流れは西から東へ向かっていたこととなる。以下、その部分の記述に移る。

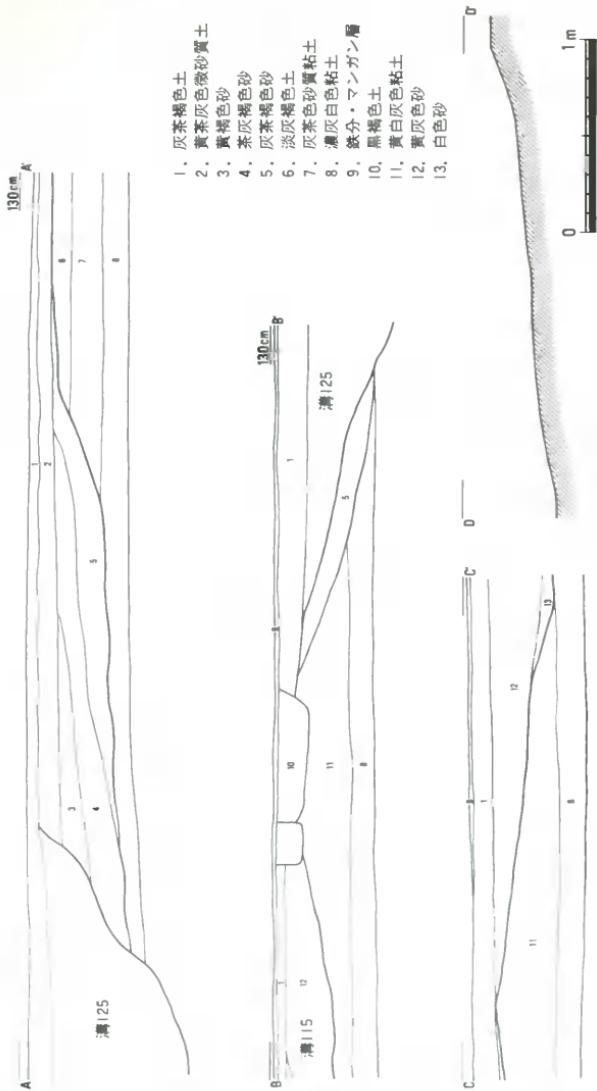
(岡本)

1983年度調査区の19~21S・T区で検出した溝で、溝125や井戸141に切られている。北西から南東に流走し、壁の立ち上がりは緩やかで、底部はほぼ平坦である。しかし溝の上端線は蛇行が著しく、特に北西部は掘削が粗雑である。

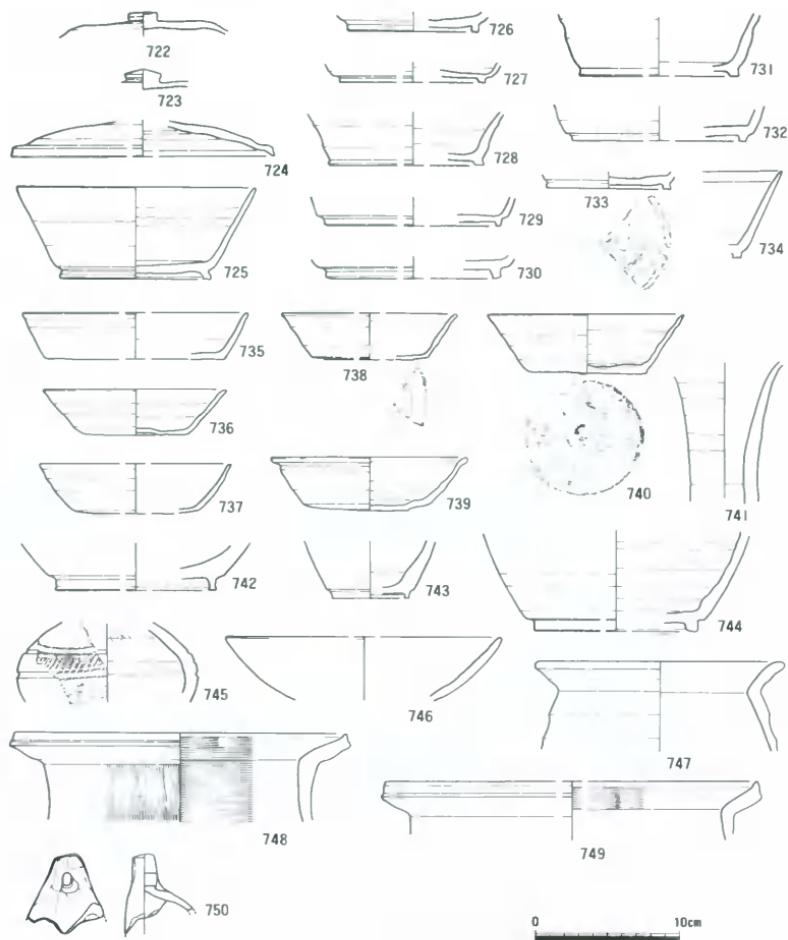
遺物は須恵器が最も多く、その他に土師器、飯蛸壺、土錘、土玉などが出土した。須恵器には杯蓋、杯、壺、がある。722~724は杯蓋で、碁石状（722）と宝珠形（723）のつまみをもつ。725~740は杯で、高台を有するもの（725~734）と無いもの（735~740）とがある。高台はいずれも短く断面が矩形を呈するが、外方にふんばるもの（725・728・730・731・733）とほぼ真直ぐなもの（726・727・729・732）とがある。高台を有する杯で、体部から口縁部まで残存する資料は少ないが、725は底部から外傾しながら真直ぐ立上り、器高は高い。



第163図 溝115 (1/150)

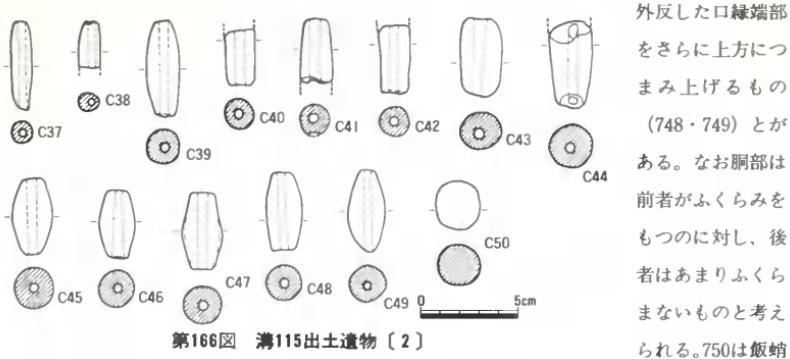


第164図 溝115断面 (1/30)



第165図 溝115出土遺物〔1〕

高台の無い杯は、739を除き底部から外傾しながら真直ぐ立上る器形を呈し、器高は低い。739は底部から外傾しながら立上るが、体部はやや内湾ぎみで、口縁部は強く外に開く。741～744は壺である。741は長頸壺の頸部である。742～744はいずれも高台が付くが、742・743は高台の厚みが薄い。745は聴で、胴部最大径に二本の沈線を施し、その間に刻目を入れている。746～749は土師器で、746は椀、747～749は甕である。甕は口縁部が「く」字状に外反するもの(747)と、



第166図 溝115出土遺物〔2〕

壺である。やや扁平に整えられた頭部には穴が穿たれ、この下に釣鐘状の胴部がつく。

C37～C49は土錘で、円柱状を呈し、中央に穴が貫通するもの（C37～C44）と、上下端より中央が太い紡錘形を呈するもの（C45～C49）がある。

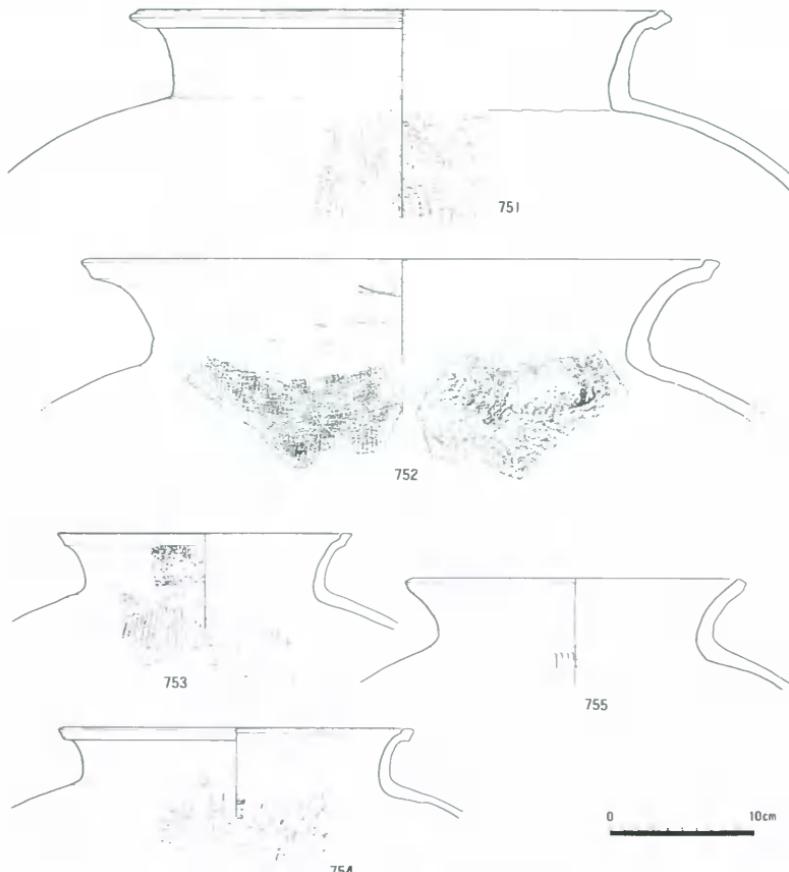
時期は、土器からみるとわずかに古墳時代のものを含むものの、奈良時代から平安時代にいたるものが埋土中に認められる。これらの土器が、かならずしも古いものから順次堆積していくといえるような状況ではないが、土器量の多くなる奈良時代から、溝内への土器の廃棄が始まり、平安時代まで続いたものと推定される。しかし溝が掘削された時期については明らかにし得ない。

(平井勝)

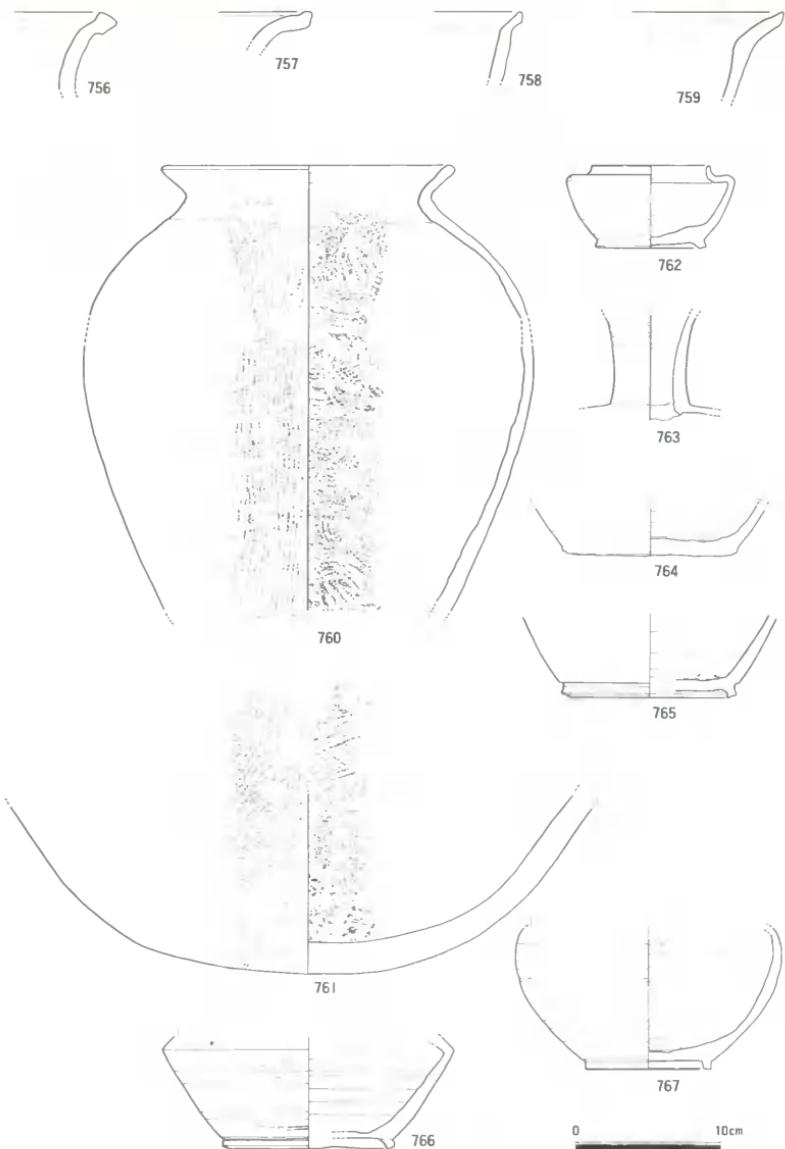
e 包含層（土器溜り）

溝101上部土器溜り上層（第167～170図、図版62・63）

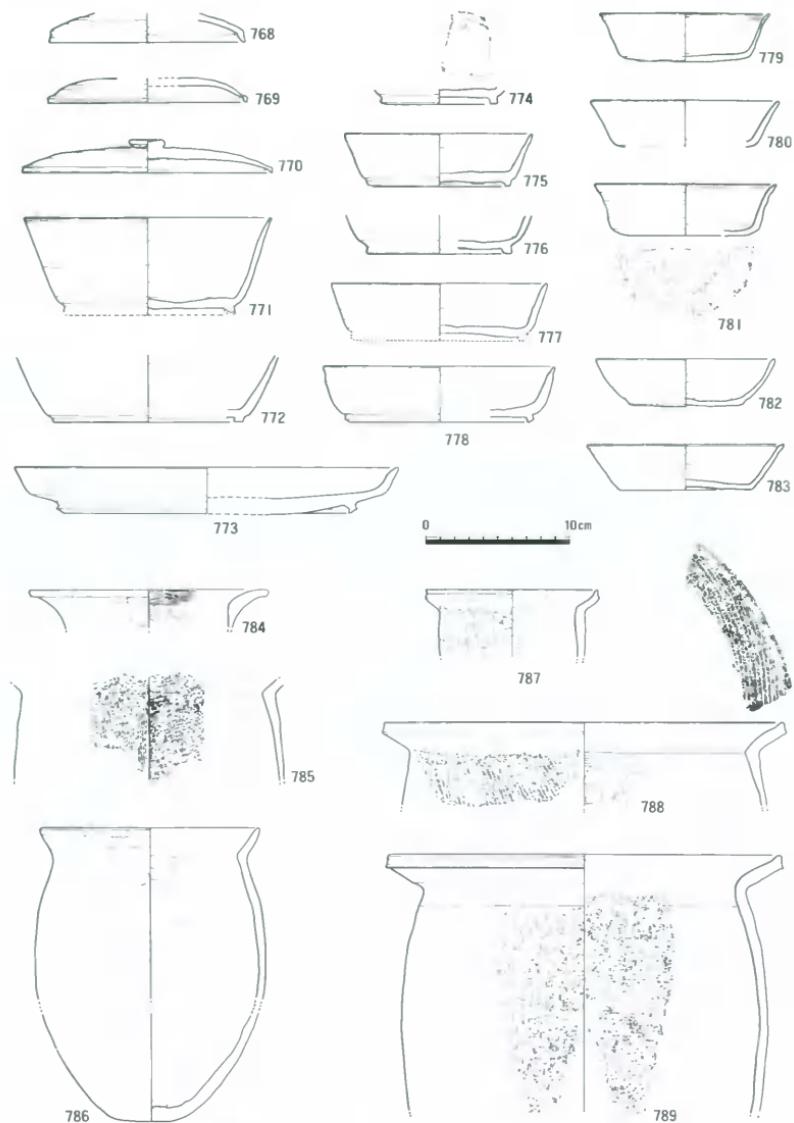
微高地北端部に形成された8世紀代の包含層および土器溜りである。上部を削平され、北側が水路によって削られているため遺存状況はよくない。古墳時代包含層土器溜りの直上に形成されており、一部の遺物はそれに入り込んだかたちで出土した。この部分の土層関係については、第3章第1節においてあわせて記載している。包含層は12F区から14F区にかけてひろが



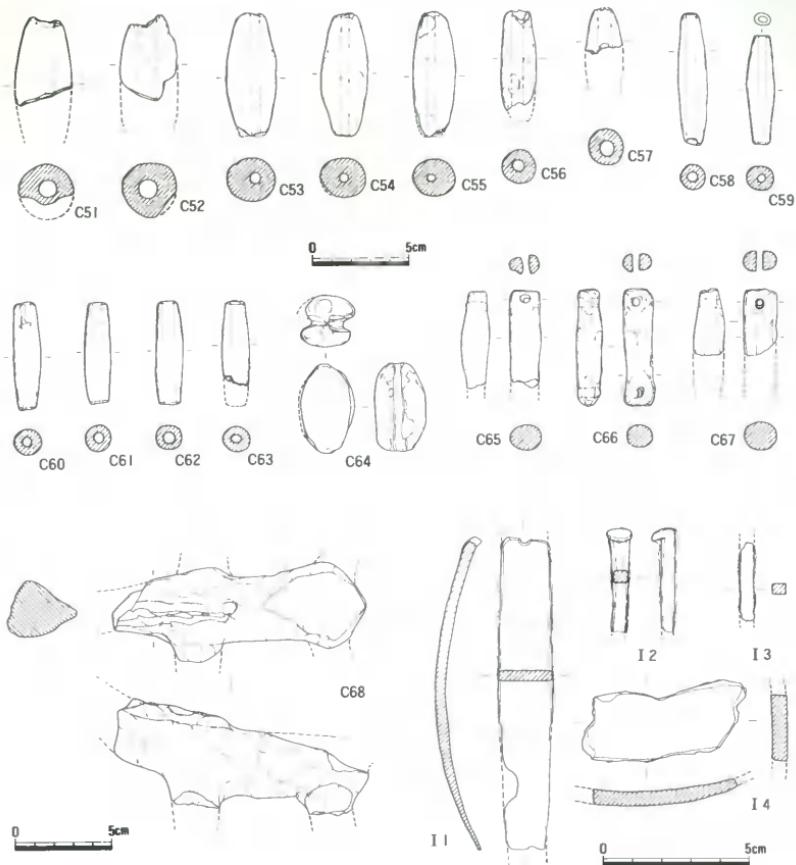
第167図 溝101上部土器溜り上層出土遺物〔1〕



第168図 溝101上部土器窯上層出土遺物〔2〕



第169図 溝101上部土器窪り上層出土遺物〔3〕



第170図 溝101上部土器溜り上層出土遺物〔4〕(1/3, 1/2)

っており、長さ3.3、幅1.5mの須恵器溜りは13F区西側に位置している。

出土遺物は須恵器甕、壺、長頸壺、杯、土師器杯、甕などからなる。このうち須恵器杯蓋770は転用硯である。注目すべき遺物としては土馬C68がある。頭部、脚部とも欠損しているが残存長13.2cmを測り、土質である。包含層中からは8点の馬歯が出土しており、土馬とともに水辺の祭祀に用いられた可能性が考えられる。なお、これ以外に土錘、鉄器破片が出土しているが、一部は北側の水路からの混入遺物と思われる。

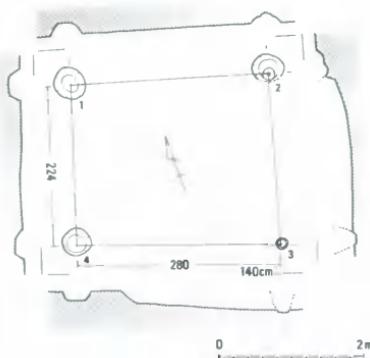
(宇垣)

3 平安時代後期～室町時代

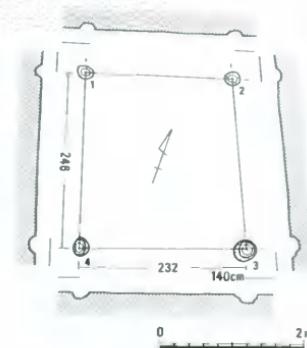
a 建 物

建物111（第171図、図版64）

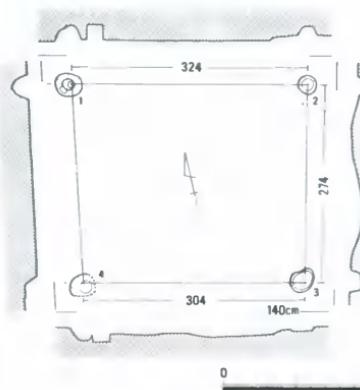
調査区北西隅の9F区に検出された。建物112～117と同様、微高地の肩口に位置する溝101から5～6mの距離を置いて存在する。柱穴は調査区外に延びている可能性もあるが、1間×1間の建物として認めた。柱穴の1つ（柱穴3）は、後世の搅乱土壌によって上部を削平されて



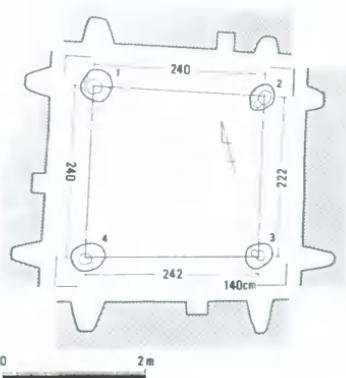
第171図 建物111 (1/80)



第172図 建物112 (1/80)



第173図 建物113 (1/80)



第174図 建物114 (1/80)

いて径は小さいが、それ以外はいずれも径が40数cmと大きめである。柱穴内の埋土は、いずれも黄灰色～灰褐色の砂質土であり、柱穴1・2・4には黒灰色砂質土の柱痕跡（径約18cm）が認められた。

遺物は出土していないので時期の判定はむずかしく、埋土の土質や色調また遺構の位置関係からは中世の可能性が強いが、床面を削平された竪穴住居の4本柱である可能性（その場合は井戸101～104との関係などから百・古・Iの時期）も捨てきれない。
(柳瀬)

建物112（第172図、図版65）

10F区に位置する1間×1間の建物である。微高地の北側肩部に沿って検出された一連の建物の中では、中軸の方位を異にしている。柱穴は10cm前後の深さしか残存しておらず、径も20～30cmと比較的小さい。柱穴1・4には柱痕跡（径約15cm）が認められた。

柱穴の埋土からは遺物の出土をみていないが、建物111などと同様に中世の時期の建物を考えているが、百・古・Iの竪穴住居の可能性もある。
(柳瀬)

建物113（第173図、図版65）

11F区に位置する1間×1間の建物である。後世の暗渠や地下げによる削平で、各柱穴の残存状態は必ずしも良好ではない。柱穴掘り方の径は25～38cmを測る。桁行の柱間は3mを越え、他の建物と比較して多少広い。

柱穴の埋土からの遺物は、柱穴2以外から百・後・IV～百・古・Iの時期の土器片が数片出土しているが、前記建物と同様に両者の可能性を考えている。
(柳瀬)

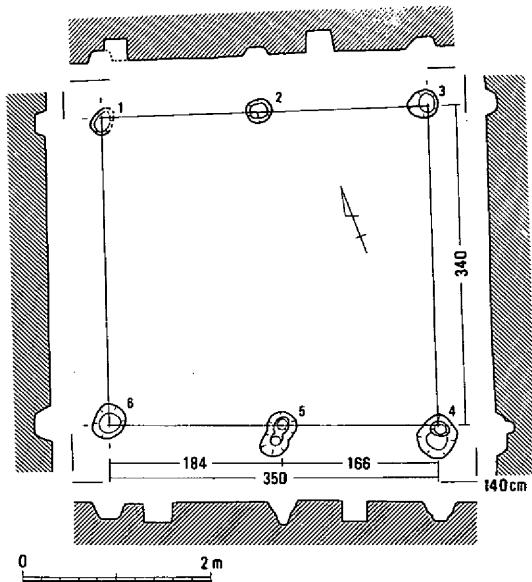
建物114（第174図、図版68）

13F区に建物115と重複して検出された1間×1間の建物である。柱間は222～242cmと、比較的小規模な建物であるが、柱穴掘り方の径は35～45cmと大きく深さも30～50cmと残存が良い。

遺物が出土していないので、時期は特定できないが、遺構の残存度や規模からすれば他の1間×1間の建物（111～113、120、123）の中では、竪穴住居の可能性が一番強い。
(柳瀬)

建物115（第175図、図版66）

13F区に建物114と重複して検出された2間×1間の建物である。柱間は桁行

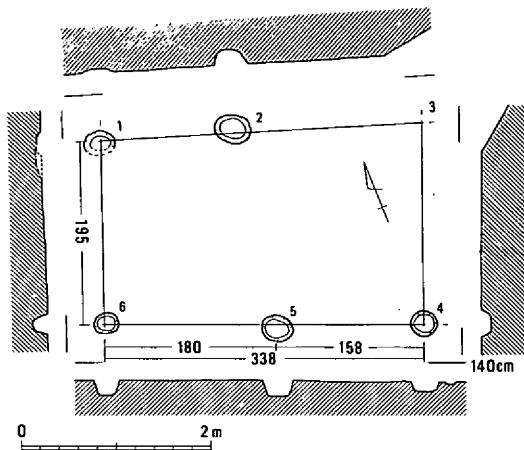


第175図 建物115 (1/80)

に比べ梁間が倍ほど長い。梁間の方向は磁北から約20度東に振っている。柱穴掘り方の径は25~45cm・深さは10~20cmを測る。埋土は建物111とほとんど変わらない。

土器は柱穴1・4~6に数片出土しているが図示できるほどではなく、百・後・III~百・古・Iくらいの時期と思われるが、建物の形態からいえば中世の可能性が強い。 (柳瀬)

建物116 (第176図、図版66)

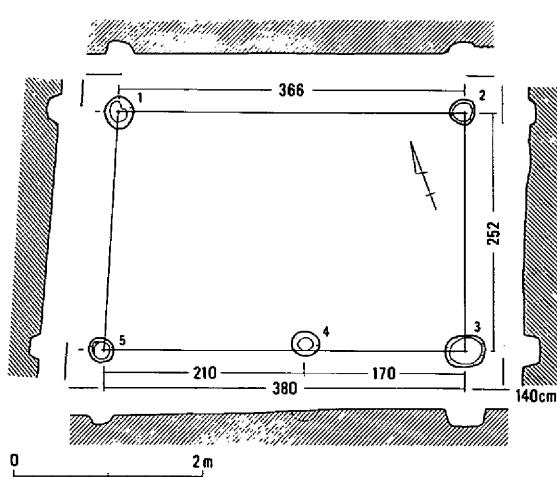


第176図 建物116 (1/80)

調査区の北東隅の14G区に検出された2間×1間の建物である。北東の隅にあたる柱穴は、低水路堀削時に削平されたためか検出されていない。柱穴は径25~40cmと不ぞろいであるが、柱穴1・2・5は比較的掘り方が大きい。

遺物は柱穴1から甕の細片（土師器か？）と柱穴5から須恵器の杯身片が出土しているのみで、とくに建物の時期の決め手にはならない。須恵器は図示できるほどではないが、7世紀末~8世紀と思われる。しかし、建物の時期は115と同様に中世の時期を考えている。 (柳瀬)

建物117 (第177図、図版66)



第177図 建物117 (1/80)

建物116の南隣り、14G区に位置する。2間×1間の建物である。桁行きの柱穴1・2の中間の柱穴は検出されていないが、周辺の削平頻度からすれば存在していたと考えられる。柱穴の径は26~40cm、深さは10~18cmと不ぞろいである。間方向の方位は約20度東に振っている。柱痕跡は確認されていない。

埋土からの土器は、柱穴1・3・5から3~4片ずつ出土しているがいずれも細片で図示に耐えない。土器の時期は百・後・III~IVと思われるが、建物は上記建物と同様中世を考えている。 (柳瀬)

建物118 (第178図、図版67)

9G区に位置する2間×1間の建物である。柱穴の配置は多少いびつながら、周辺に同類の

柱穴がほとんど存在せず、6本柱の建物として認めた。柱穴のうち柱穴3と柱穴6は径が50～55cmと大きく、桁行きの中間の柱穴2と柱穴5は約30cmと小さい。柱穴4以外は暗灰色砂質土の柱痕跡が認められ、径は14cm前後を測る。

土器は柱穴1・3・6から数片出土しているが、百・後・II～百・古・Iの時期までと幅がある。しかし、建物の時期としては他の建物と同様、中世の可能性が強い。

(柳瀬)

建物118（第179図、図版64）

10I区に位置する推定2間×1間の建物である。調査では、南北方向の近現代用水路の東肩口に、ほぼ等間隔に並んだ3本の柱を検出したが、東側の想定される桁行きの柱穴の位置には搅乱土壤があり、削平を受けたものと判断された。柱穴の径は25～30cm・深さは8～14cmを測る。

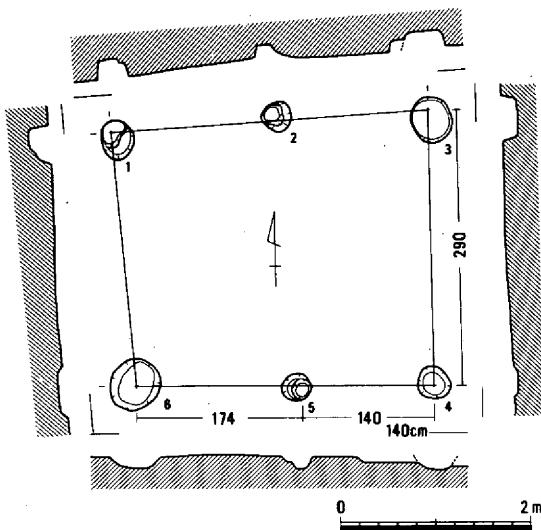
土器は柱穴3から1片（土師器か？）出土しているのみで、建物の時期は不明といわざるを得ないが、可能性として中世の中で取り扱った。

(柳瀬)

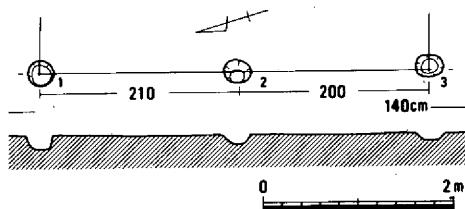
建物119（第180図、図版67）

12H区に位置する1間×1間の建物である。柱穴は、わずかにひずんだ菱形の位置に検出されたが、周辺に同程の柱穴はほとんどなく、建物の柱穴と考えた。ただ当地点の削平頻度によっては、竪穴式住居の4本柱の可能性もある。柱穴から遺物の出土はなく、時期は不明であるが、他の建物の関連から中世と考えられる。

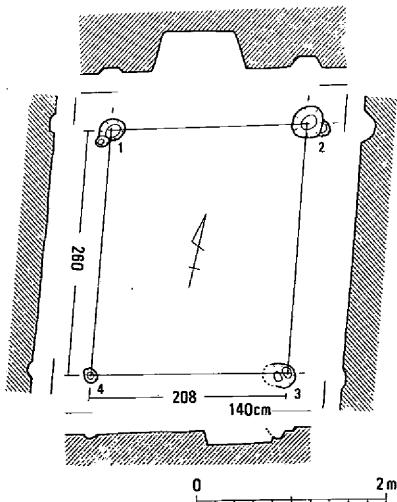
(柳瀬)



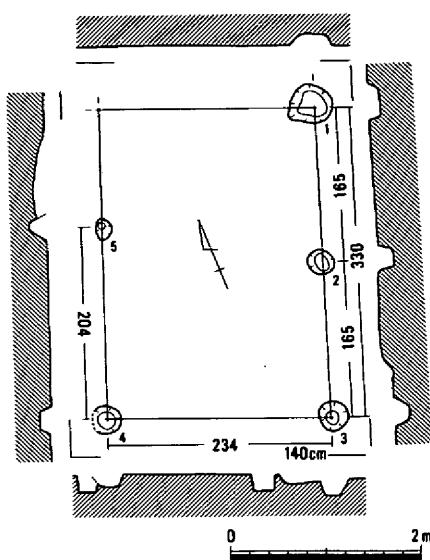
第178図 建物118 (1/80)



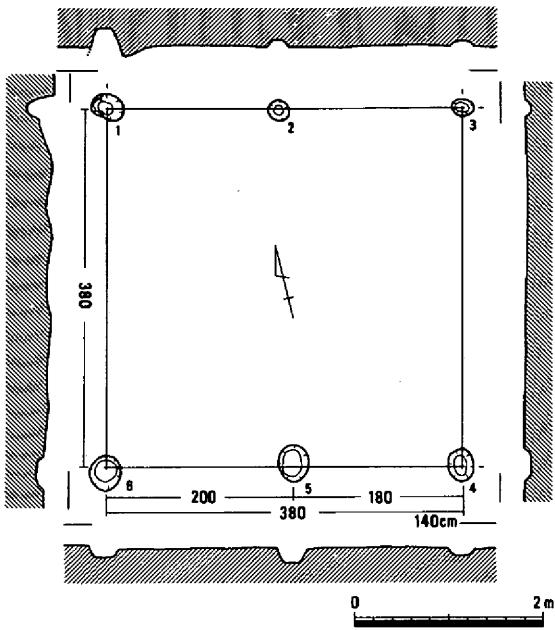
第179図 建物119 (1/80)



第180図 建物120 (1/80)



第181図 建物121 (1/80)



第182図 建物122 (1/80)

建物121（第181図、図版68）

12・13 I 区に位置する 2 間 × 1 間の建物である。北西隅に予想される柱穴は検出されていないが、他の柱穴 1～5 の配置などから建物と推定した。柱穴の径は柱穴 1 が約 45cm と比較的大きいほか、柱穴 2～4 が 30cm 前後、柱穴 5 は短径 17cm・長径 24cm とバラツキがある。柱穴の深さはいずれも 16cm 前後で、ほぼ一定している。柱穴内の埋土はいずれも暗灰色～灰褐色を呈す砂質土で、柱痕跡は確認されていない。また、桁行きの主軸の方位は、磁北から約 20 度東に振っている。

遺物としては、土器の細片が数片出土しているのみで、時期の推定できるものはない。他の建物配置などから、中世にあてている。

（柳瀬）

建物122（第182図、図版68）

建物121の南東部に接する位置の、13 I 区に検出された 2 間 × 1 間の建物である。6 本の柱穴で構成されるこの建物の平面形態は、一辺 380cm のほぼ正方形を呈す。桁行きの南列の柱穴は径 35～40cm、北列は径 23～30cm を測り、南列が比較的大きい。柱穴の深さは、柱穴 1・3 が 15cm 前後と比較的深いが、周辺は削平頻度が高いと思われる。また、柱穴 4・6 には径 15cm 前後で黒褐色砂質土のつまった柱痕跡が認められている。

遺物は、柱穴 4 から 3 片、柱穴 6 から 6 片の土師器らしき細片が出土しているが、他の建物と同様、中世建物の可能性が考えられる。

（柳瀬）

建物123（第183図、図版68）

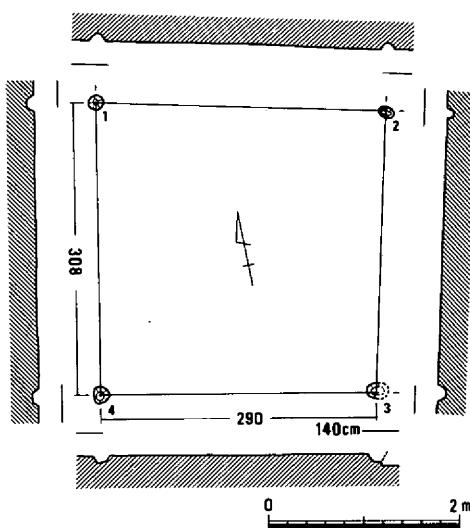
13・14H区に位置する1間×1間の建物である。柱穴は径12~18cm、深さ10cm前後を測る4柱穴で構成されるが、柱穴の規模や削平の頻度から考えて、竪穴式住居の可能性は少ない。

埋土中に土器などは認められておらず、時期は不明ながら、柱穴埋土の色調や、他の建物との位置関係などから中世の建物として捉えている。
(柳瀬)

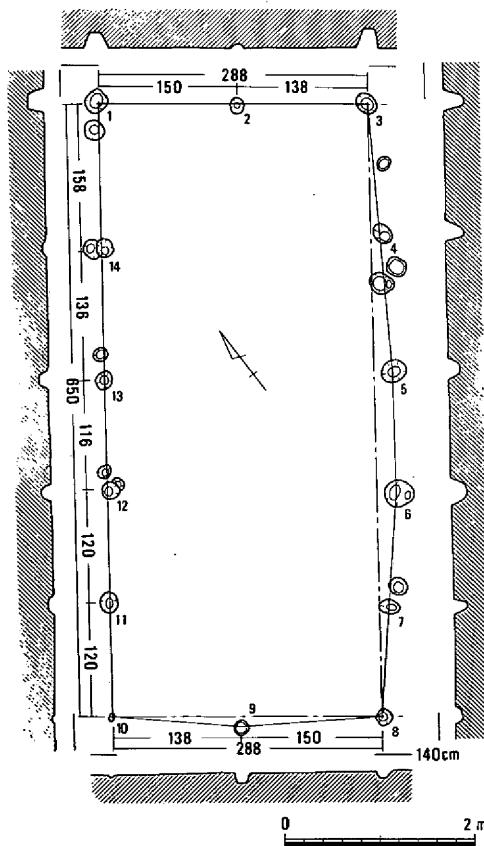
建物124（第184図、図版68）

14H・I区に位置する5間×2間の建物である。柱穴は径17cm前後が主で、14の柱穴で構成されるが、柱穴1・4・7・12~14は隣接して1~2個の柱穴を伴っている。これは、修復も含めて、建て替えられた可能性が強い。柱の間隔は120~158cmと一定しておらず、また桁行きの南東側の柱列は、柱穴4~7が中央で外にふくらむなど、整然とした建物とは思われない。さらに、この建物は桁行き方向の主軸が磁北から約36度も東に振っており、建物群の中では特異である。

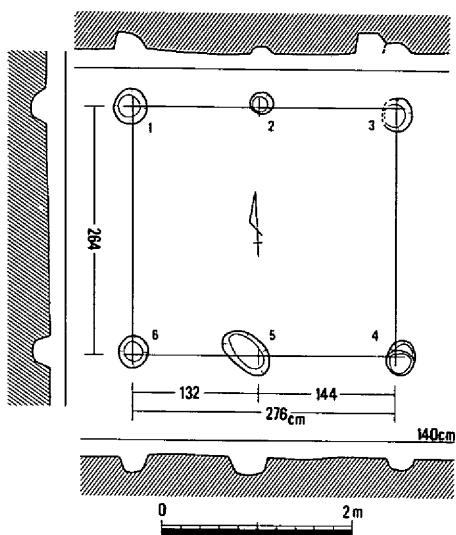
柱穴中の埋土からは、周辺も含めて遺物の出土をみていながら、建物の時期は一連の建物と同様、中世と考えている。調査区全体でいえば、建物131や建物144を中心とする比較的立派な、そして方位を北に揃えて整然とした建物の中にあって、この建物を同時期と考えるにはいかにも場違いな感じもある。しかし、集落の末端部にあたる地区においては掘立小屋同然の、これらの建物の存在を推定できなくもない。
(柳瀬)



第183図 建物123 (1/80)



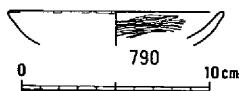
第184図 建物124 (1/80)



第185図 建物125 (1/80)・出土遺物

建物125 (第185図)

16H区と16I区にまたがる東西棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の構造をもつ。規模は、梁間264cm、桁行全長276cmで、床面積は7.3m²を測る。桁行の柱間は132cmと144cmで、等間ではない。四隅の柱穴は円形を呈し、長径は36cmではほぼ同規模であるが、桁行の中央柱穴は北側と南側で大きく異なっている。北側の柱穴2は円形で、長径26cmと小さく、また浅い。これに対して、南側の柱穴5は橢円形で、長径は60cm

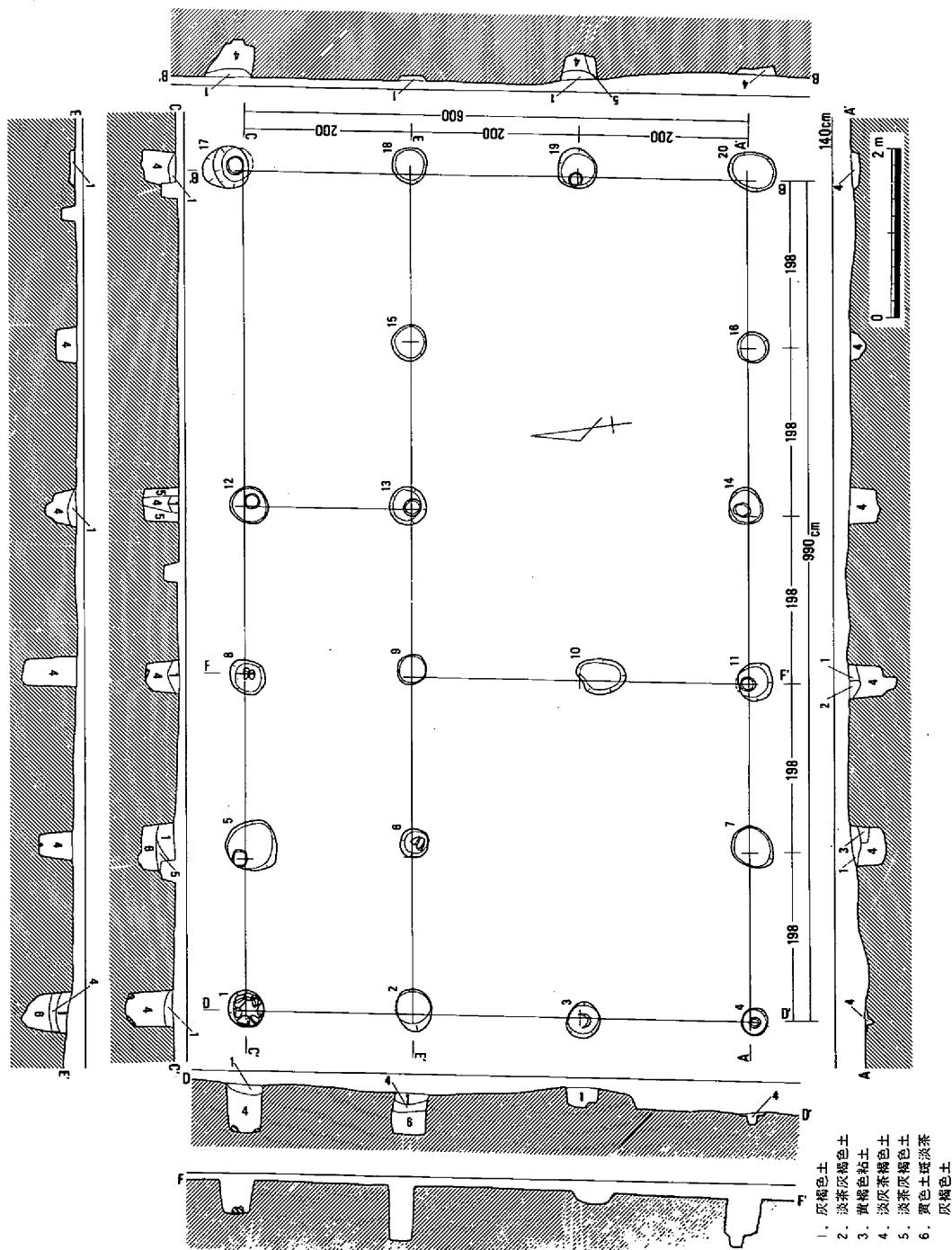


もあり、深さは四隅の柱穴と同じである。このような相違や桁行の柱間が等間でないことから、梁間・桁行ともに1間の建物ということも考えられる。しかし、柱穴の埋土はいずれも灰茶褐色土であり、また、この建物付近にはこの他にはほとんど柱穴がなくて、柱穴2や柱穴5に対応しそうな柱穴の存在がないことから、桁行は2間と考えている。棟の方向はE-3°30'-Sを測るが、当遺跡の建物の棟方向としては類例が少なく、建物152・165・166がこの値に近い。柱穴からは遺物の出土があまりなかったため、この建物の年代については不明確であるが、柱穴や建物全体の規模さらに棟の方向などから中世のものではないかと考えている。(岡本)

建物126 (第186図、図版71)

11K・12K・11L・12L区にまたがって位置する、桁行5間、梁間3間の建物である。柱穴は、20個を検出した。柱穴の掘り方の平面形は、ほぼ円形を呈するもので、最も大きいものの径は60cm、小さいもので32cmを測り、大きさは一様ではない。柱穴内に、柱痕跡を確認したものと、確認されなかったものがある。柱痕跡も、柱穴4、11のように、掘り方の底面より深くなるものと、そうでないものがある。柱穴1は、柱痕跡は見られなかったが、掘り方の底面に、中央部を空白にして石が並べられており、柱の根固めとも考えられる様相を呈していた。柱穴12と柱穴17の間は、入念に調査したにもかかわらず柱穴は確認できなかった。このことは、本来柱が無かったのか、あるいは、柱穴18の掘り方は非常に浅いように、それ以上浅かったものが削平された可能性もある。柱穴の掘り方の深さは、検出面から深いもので60cm、浅いもので4cmを測る。建物の柱穴間の距離は、梁間は、各々200cm、桁行は、各々198cmを測り、建物全

第186図 建物126 (1/80)



体の規模は梁間600cm、桁行990cm、床面積は59.4m²となる。この床面積は、当遺跡で検出された掘立柱建物の中では、2番目の広さである。

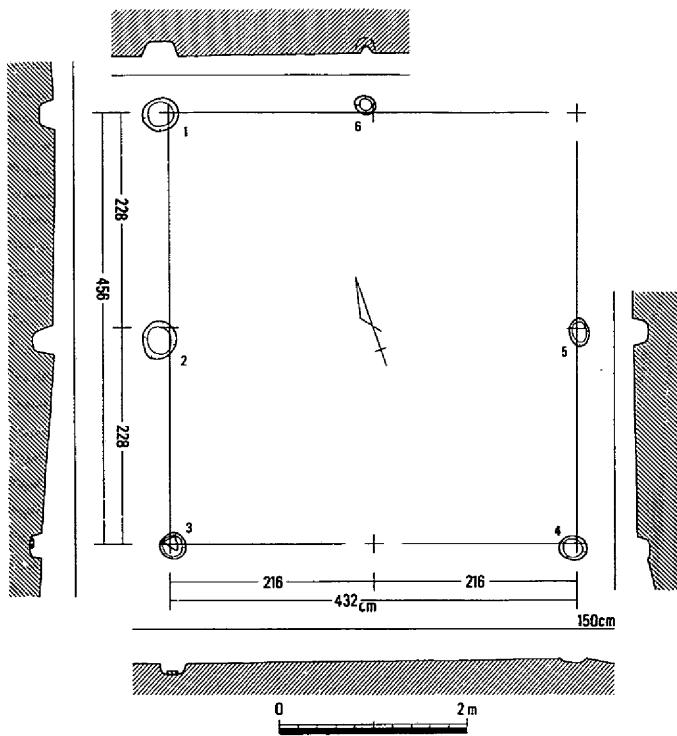
建物の柱穴の配列を見ると、北から2番目の桁行に柱列が見られ、南側に身舎を持ち、北に庇を付する建物が考えられる。南側の身舎は柱穴10で仕切られ、東側に3間×2間、西側に2間×2間の室屋に分けられる。庇部分の東側の柱穴の発見できない部分には、柱が無かったものとすれば、入口と想定することもできるが、今後の課題である。建物の棟の方向はE-7°-Sである。なお、図上での梁間と桁行のなす角度は直角ではなく、一つの内角が91°30'を測る。この角度は偶然かどうか、建物132の一つの内角の角度と等しい。

出土遺物には土器と金属器と土錘片がある。土器は柱穴20以外のすべての柱穴から出土し、土師器・須恵器・瓦器・白磁・備前焼と種類豊富である。金属器には、柱穴11から出土した鉄釘片と、柱穴18から出土した銅銭がある。銅銭は銹化が進んでいるが、両面共に文字のようなものは認められず、円形に方孔という形状から錢貨とみているにすぎず、やや通常の錢貨とは異質である。これらの遺物の年代から判断すれば、建物の年代は室町時代と考えられる。

(井上・岡本)

建物127（第187図）

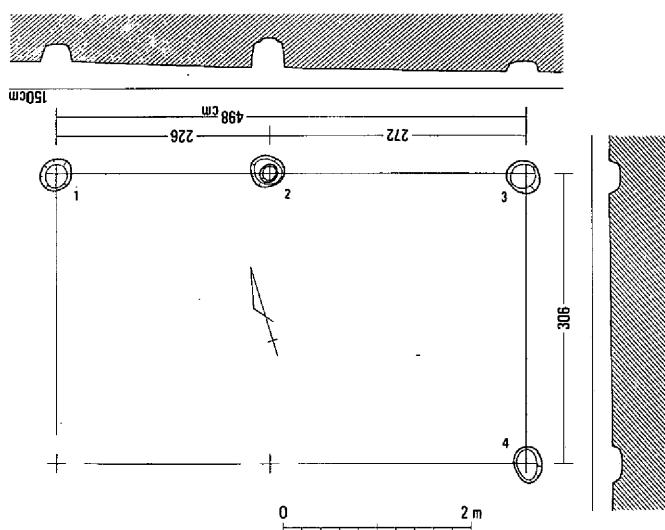
12L区の東半に位置する南北棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間2間の構造と考えられるが、北東隅の柱穴と、南側梁間の中央の柱穴は検出されなかった。規模は梁間全長432cm、桁行全長456cmであり、床面積は19.7m²となる。柱間は梁間、桁行ともにほぼ等間とみられるが、北側梁間では中央の柱穴がやや西に寄り、西側桁行では中央の柱穴が南に寄っている。柱穴はほぼ



第187図 建物127 (1/80)

円形であるが、長径は24~40cmとかなり変化があり、とくに柱穴6と柱穴1・2の差は大きい。同じ桁行の柱穴でも、柱穴1・2と柱穴3~5ではかなり違いがある。柱穴の深さについては大きな差ではなく、柱穴6も同様である。柱穴3には礎石が据えられていた。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で柱穴1・4・5では黄色微砂を斑点状に含んでいた。建物の棟の方向はN-19°-Eで、これは当遺跡における中世の建物としてはかなり特異である。遺物は柱穴6以外のすべての柱穴から出土している。とくに柱穴2では多く含まれていた。しかし、遺物の多くは細片であり、年代の確定は中世といえる以外困難である。ただ、鎌倉時代の後半ではないかと思われるものが若干みられた。

(岡本)



第188図 建物128 (1/80)

建物128 (第188図)

13K区の北半に位置する。桁行2間、梁間1間で、東西棟の掘立柱建物と考えられるが、南側桁行では2基の柱穴を検出することができなかった。この2基の柱穴が位置するとみられる付近は、とくに削平は受けていないため、ことによれば、北側桁行の柱穴列だけで塀になる可能性もある。建

物の規模は、梁間306cm、桁行全長498cmで、床面積は15.2m²となる。桁行の柱間は等間ではなく、226cmと272cmである。柱穴は円形で、規模は長径36~38cmと揃っている。柱穴の深さにはかなり差があるが、東梁間の柱穴3と4はほぼ同じである。柱穴の埋土はいずれも黄色微砂斑灰色粘性砂質土で、柱穴2と3では柱痕跡を認めた。柱穴2では柱のめりこみもあり、それらの直径は20cm程度であった。建物の棟の方向はE-17°-Sを測り、当遺跡の中世の建物としては、珍しく角度が大きい。これに近い角度のものとして、建物127や129があるが、この3棟が接近して位置していることは一つのまとまりを思わせる。遺物が柱穴1・3・4から少量出土している。1・3出土のものは弥生土器であるが、4のものは中世の土器である。(岡本)

建物129 (第189図)

13K区の南端に位置する掘立柱建物である。桁行、梁間ともに1間の小規模なもので、柱間から東西棟と考えられる。梁間188cm、桁行244cm、床面積は4.6m²を測る。当遺跡においては、

このような小規模建物は方形規格から歪むことが多く、この建物も柱穴1・2がかなりずれている。柱穴は円形で、長径24~28cm、埋土は灰色粘性砂質土である。棟の方向はE-15° 30'-Sで、近接する建物としては建物128のE-17° -Sが近い。遺物は柱穴4からのみ出土している。小片のため、中世のものとしか判断できない。

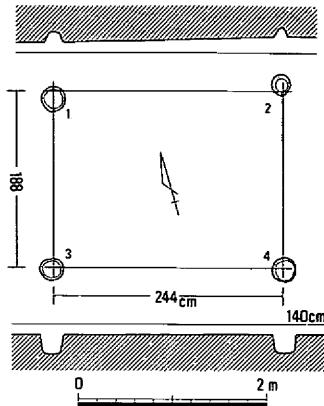
(岡本)

建物130（第190図、図版72）

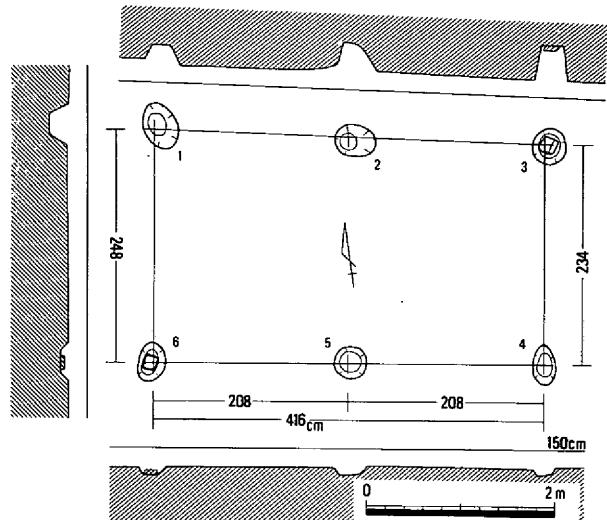
13K区の南半に位置し、建物129・131と重複している。桁行2間、梁間1間の構造で、東西棟の掘立柱建物である。当遺跡における、この構造の建物としては珍しく、東西の梁間の長さが異なるため、南北の桁行が平行していない。

規模は東梁間234cm、西梁間248cm、桁行全長416cmで、床面積は10.3m²を測る。桁行の柱間は208cm等間である。柱穴は円形か楕円形を呈し、長径も36~52cmとかなり幅がある。柱穴の埋土は黄色微砂斑灰色粘性砂質土で、柱穴3と6の底には礎石が置かれていた。柱穴の深さをみると、北桁行側が深く、南桁行側は一様に浅く、最小で10cm、最大で24cmの差がある。このような状況は建物131・151・160などでしばしば観察されている。建物の棟の方向はE-8° 30'-Sを測る。この角度と同じか、あるいはごく近い角度の棟方向をもつ建物はしばしば当遺跡では見られるが、もっとも近接したものでは建物134がある。遺物はどの柱穴からもごく少量出土しているが、いずれも小片であり、中世と判断する以外、時代を細かく確定できない。

(岡本)



第189図 建物129 (1/80)

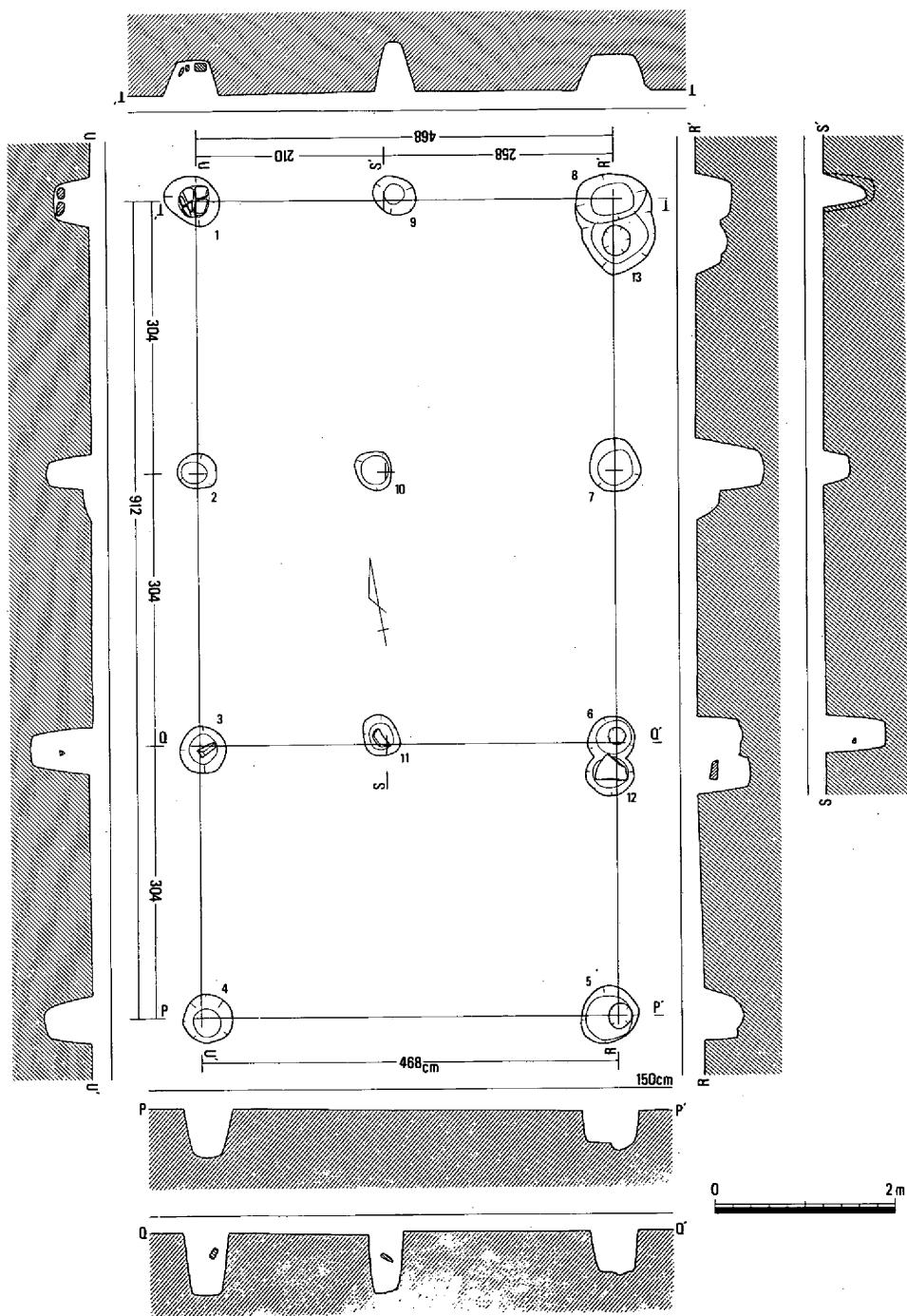


第190図 建物130 (1/80)

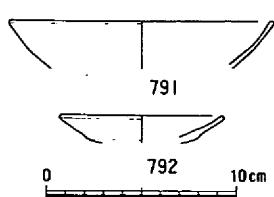
建物131（第191図、図版72）

13K区と14K区の境界付近に位置し、一部13L区にまでまたがる大形の掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間の南北棟の建物と考えられるが、南側の梁間では中央の柱穴は検出されな

(岡本)



第191図 建物131 (1/80)



第192図 建物131出土遺物

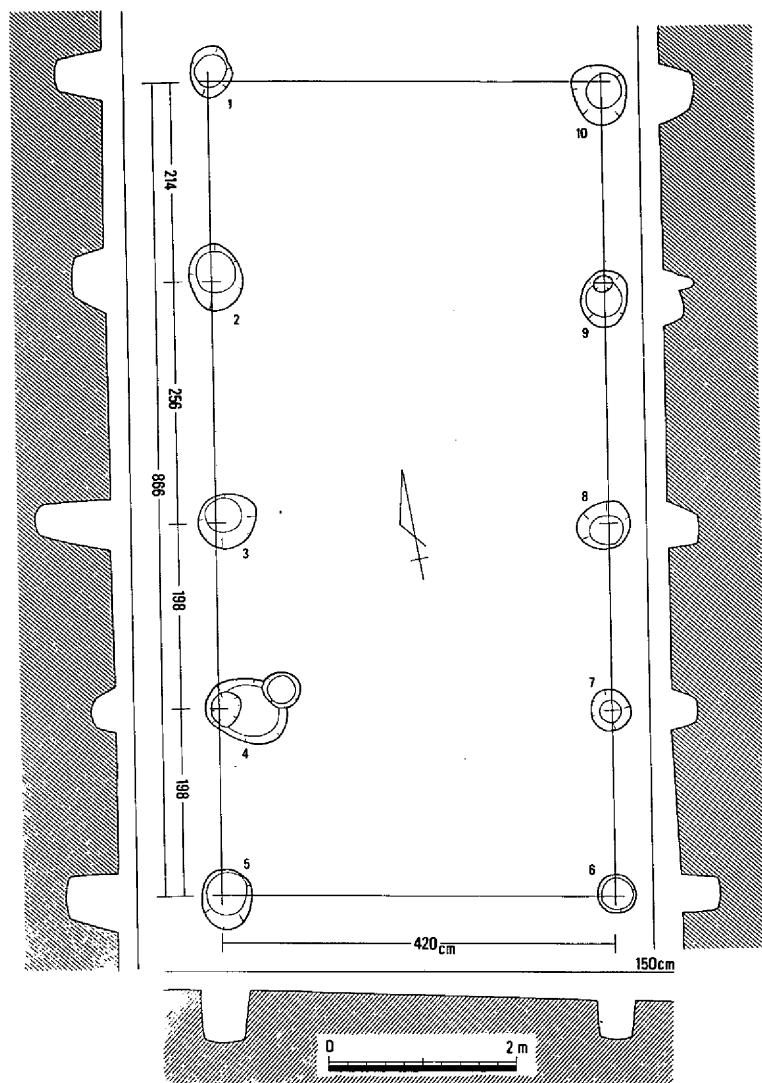
かった。規模は梁間全長468cm、桁行全長912cmを測り、床面積は42.7m²となる。当遺跡で検出された中世の掘立柱建物としては5番目の大きさである。柱間をみると、桁行は304cm等間であるが、梁間は中央柱穴が西に寄り、258cmと210cmになっている。柱穴の形状はほぼ円形を呈するが、大きさは一定せず、長径も44cmから84cmまで幅がある。もっとも長径50~60cmのものが多数を占める。柱穴の埋土は灰白色粘土斑灰色粘性砂質土である。柱穴3・11では柱穴内に割石が入っていたが、いずれも底面からはかなり遊離しているため、礎石とは考えられない。ただし、柱穴1では底面に扁平な石を敷きつめているため、礎石と考えられる。柱穴の深さをみると、柱穴10のみがかなり浅いため、この柱穴は東柱のためのものと考えられる。柱穴9と11については他の柱穴以上に深いため、東柱のものとすることは困難で、梁にまで伸びる柱のものであるとみられる。そうすると、柱穴4と5の間に柱穴がないことから、この桁行の南1間分については庇である可能性がでてくる。いずれにせよ、この建物131は柱穴3・11・6を結ぶ線で二つの空間に分けられていることは確実で、柱穴10が東柱のものとすれば、北側の空間は床を貼った構造であったと考えられる。なお、柱穴5と6では柱のめりこみが認められ、その直径は18cmと28cmを測る。建物の棟の方向はN-10°30'-Eを測り、東に隣接するやや大形の建物132の棟方向とほぼ平行する。

遺物はすべての柱穴から出土しているが、なかでも、柱穴3~11では多くの出土をみた。それらの年代は鎌倉時代と考えられる。

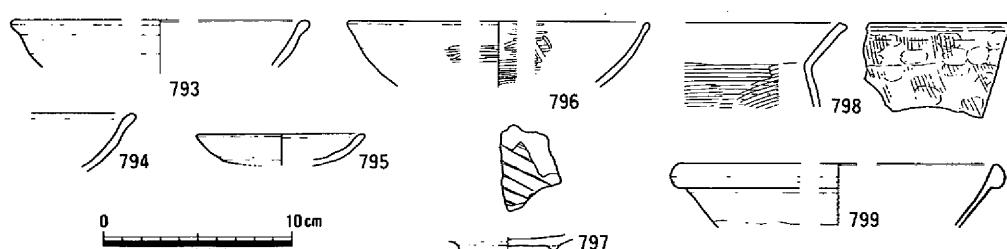
(岡本)

建物132（第193図、図版72）

14K区から一部14L区にまたがって位置するやや大形の掘立柱建物である。桁行4間、梁間1間で、南北棟の構造をもつ。規模は梁間420cm、桁行全長866cmを測り、床面積は36.4m²である。桁行の柱間は等間ではなく、南の2間は198cm、198cmで等しいが、その北は256cm、さらに北端は214cmとなっている。柱穴はほぼ円形をなすが、大小さまざままで、最小の柱穴7の長径は44cm、最大の柱穴2の長径は72cmもあり、その差は28cmにもなる。柱穴の埋土は灰茶褐色土か暗灰褐色土である。柱穴の深さをみると、柱穴2・4・7・9が浅くなっていることが注意される。すなわち、桁行の柱穴で言えば、両端と中央の柱穴が深く、その間の柱穴は浅いという規則性がみられる。前述のように、桁行の柱間は南半の2間は等間隔となっていることを考え合わせると、この建物132は、柱穴3と8を結ぶ線によって、二つの空間に仕切られていることが考えられる。南半の2間が等間隔であるのに対して、北半の2間が長さを異にするることは、この二つに仕切られた空間の利用方法を考えるうえで重要な事実と思われる。もう一点注意される事実として、この建物の場合、桁行と梁間が直角にはならず、一つの内角が91°30'を測



る。この角度はたまたまか、先の建物126の内角と等しい。なお、柱穴6では柱根が残っていたため、樹種同定を行ったが、その結果、柱材はケヤキであることが判明した。建物の棟の方向はN-10°-Eを測り、西に隣接する同規模の建物131とほぼ平行している。遺物は1以外の各柱穴から出土し、なかでも柱穴2・3・5・6・9では多かった。それらの



第193図 建物132 (1/80)・出土遺物

年代は鎌倉時代と考えられるが、その中でも後期ではないかとみられるものがあった。

(岡本)

建物133（第194図、図版73）

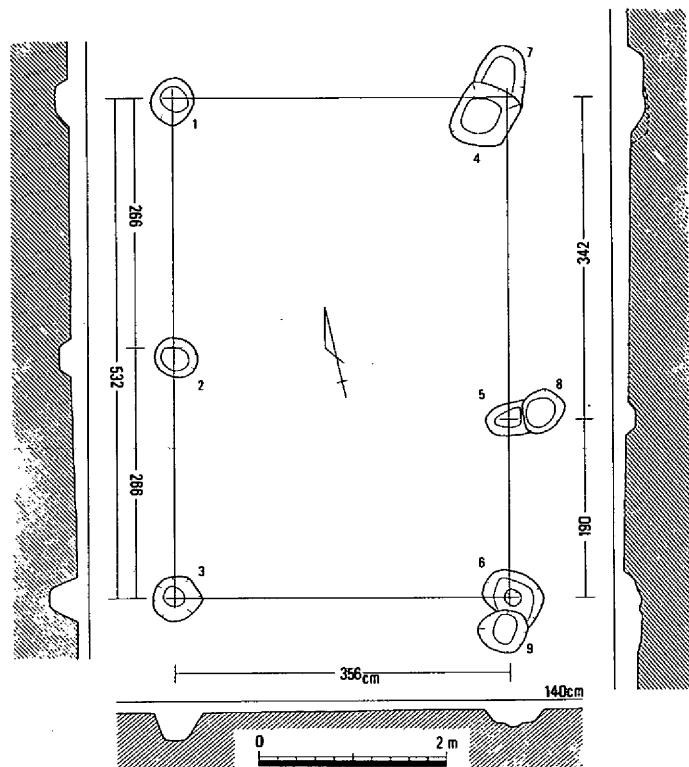
15K区付近に中心のある南北棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の構造をもつ。規模は梁間356cm、桁行532cmで、床面積は18.9m²を測る。桁行の柱間は、西側では266cm等間であるのに対し、東側は190cmと342cmで、中央の柱穴が南へ大きくずれている。柱穴の形状も、西側桁行のものは円形で揃っているが、東側桁行では方形ないしは楕円形と不整形である。柱穴の規模では、西側桁行の

ものは長径46～50cmであるが、東側桁行の柱穴4は長辺68cm、柱穴6で長径66cmとひとまわり大きい。柱穴の埋土はいずれも灰茶褐色砂質土である。建物の棟の方向はN-12°30' - Eを測り、建物144や建物148の棟方向と同じである。遺物は4以外のすべての柱穴から出土しているが、いずれも少量で小片である。それらの中には常滑焼の破片もあり、鎌倉時代のものと考えられる。（岡本）

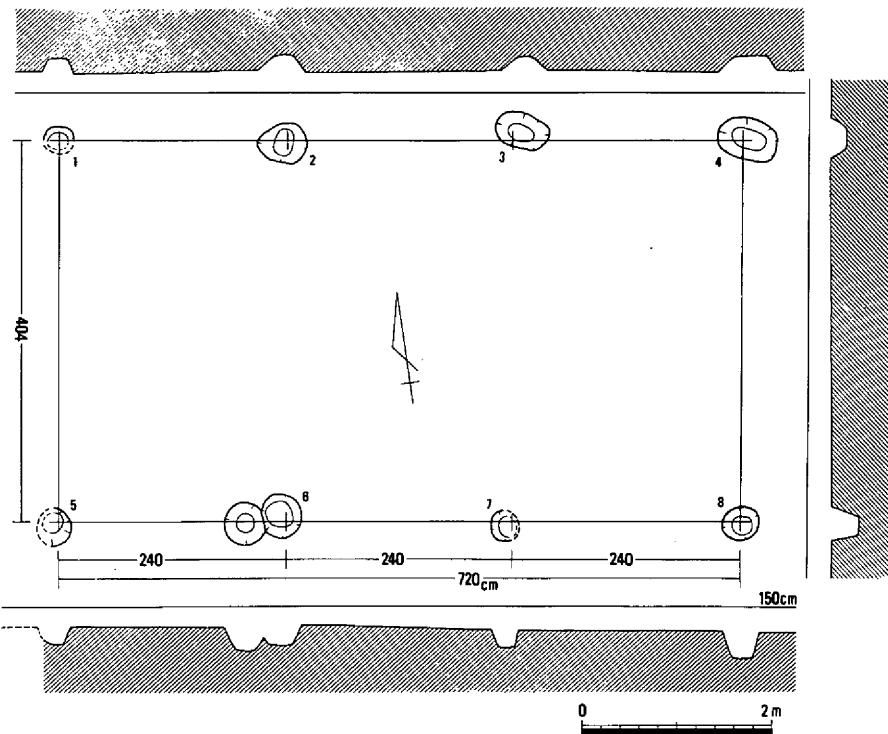
建物134（第195図、図版73）

14K区と15K区にまたがって位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間1間の構造で、規模は梁間404cm、桁行全長720cmを測り、床面積は29.1m²となる。桁行柱間は240cm等間である。柱穴の大きさはかなり不揃いで、形も円形と楕円形がある。大きいもので長径62cm、小さなものは32cmにすぎない。柱穴の深さはほぼ同じであるが、南東隅の柱穴8は他よりやや深い。柱穴の埋土は灰黄褐色砂質土である。柱痕跡はみられなかった。棟の方向はE-8° - Sで、西に隣接する建物132の棟方向とは2°程度の違いでほぼ直交する。遺物が柱穴4～6から出土している。いずれも少量にすぎないが、柱穴4出土の遺物の年代は鎌倉時代である。

（岡本）



第194図 建物133 (1/80)

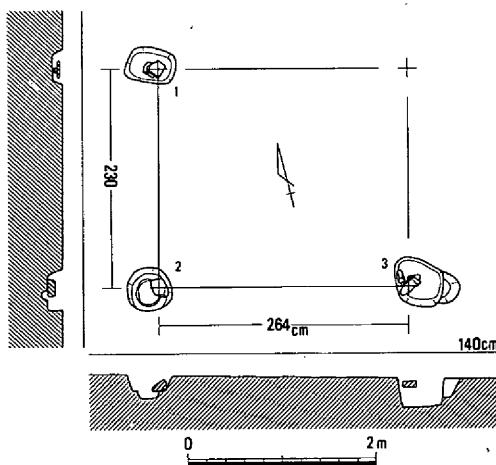


第195図 建物134 (1/80)

建物135（第196図）

14M区の北半に位置する。長辺48~56cmの方形に近い形状の柱穴が3基、かぎの手状に検出されたため、掘立柱建物の存在が想定された。北東隅の柱穴の位置では小さな円形の柱穴が検

出されたが、これがこの建物の柱穴かどうかは疑問で、あるいは塙のようなものの可能性もある。桁行1間、梁間1間の東西棟と考えている。規模は梁間230cm、桁行264cm、床面積6.1m²である。柱穴の中には長径20cm前後の石が入っていたが、柱穴3では底面からかなり上方にあり、また柱穴2では柱のめりこみらしい小穴があるため、礎石とは断定できない。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で、黄色微砂が斑点状に含まれている。棟の方向はE-14° 30'-Sを測る。遺物はそれぞれ



第196図 建物135 (1/80)

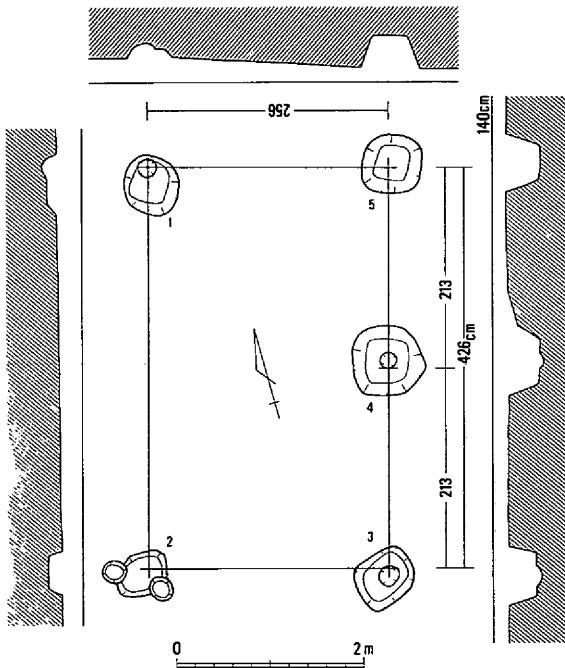
の柱穴から少量出土しているが、なかに室町時代のものではないかと考えられるものがある。

(岡本)

建物136 (第197図)

中心が16Mあたりに位置する掘立柱建物である。南北棟で、桁行2間、梁間1間の構造をもつ。西辺の中央の柱穴は検出されなかった。規模は梁間256cm、桁行全長426cmで、床面積は10.9m²となる。桁行の柱間は213cm等間である。柱穴の形状は隅丸方形で、一辺60~74cmと大形である。柱穴1・3・4では円形の柱のめりこみが認められ、その長径は20cm程度を測る。柱穴の深さをみると、西辺が東辺より8~16cm浅くなっている。柱穴の埋土は黄色微砂のブロックを含む灰色粘性砂質土か灰褐色砂質土である。建物の棟の方向はN-15°-Eを指す。遺物は柱穴3と4から少量が出土している。これらの遺物の年代は鎌倉時代と考えられるが、一部奈良時代のものも含まれている。方形の柱穴というと奈良時代と連想しがちであるが、当遺跡では建物135・143など方形柱穴からなる中世の建物が知られている。

(岡本)



第197図 建物136 (1/80)

建物137 (第198図、図版73・74)

12N区と12O区にまたがって位置する南北棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間1間の構造で、細長い平面形を呈している。柱間は梁間が368cm、桁行は268cm等間で、全長804cmを測る。床面積は約29.6m²である。北西隅の柱穴は後世の削平によって消滅している。柱穴は円形で、長径36~42cmとほぼ同規模である。柱穴の深さも40cm前後であり変化がないが、しいて言えば、柱穴1と4と5の三隅の柱穴が他よりも深く、どの柱穴でも柱痕跡は確認されなかつたが、柱穴1では柱のめりこみがみられ、その直径は22cmを測る。柱穴の埋土はほとんどが灰色粘性砂質土であるが、柱穴5は灰黒色粘性砂質土であった。また、柱穴1・4・7では地山の碎粒とみられる灰白色粘性微砂の小さなたまりが点々と包含されていた。棟の方向

3 平安時代後期～室町時代

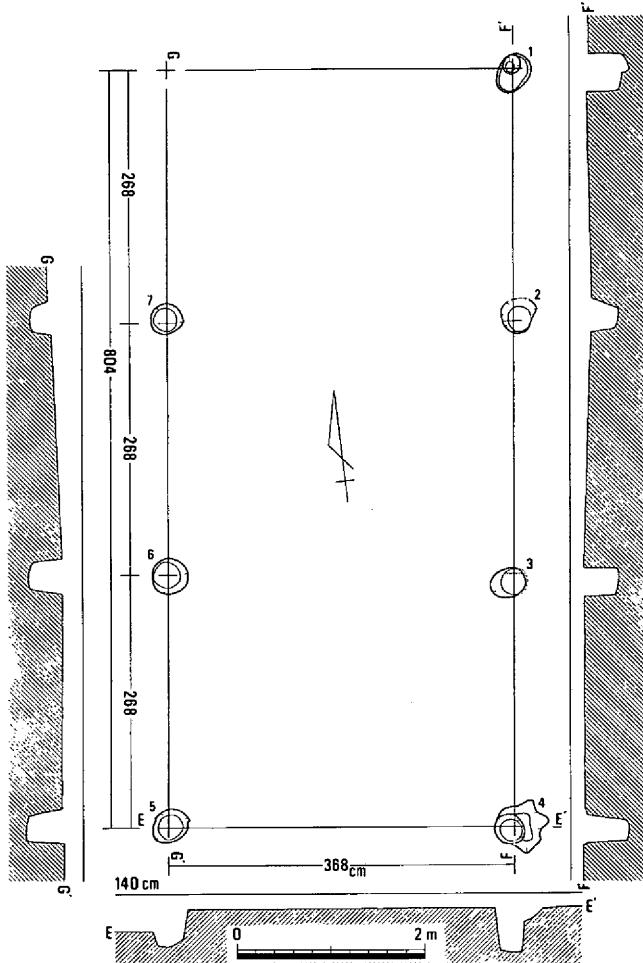
はN-6°30'-Eを測る。

柱穴3以外のすべての柱穴から多くの遺物が出土し、柱穴2では石錐と鉄器（釘？）が包含されていた。これらの遺物の年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

建物138 (第199図、図版74)

12N・12O・13N・13Oの4地区にまたがって位置する、東西棟の大形掘立柱建物である。桁行3間、梁間1間の身舎に、東西南北の四面ともに庇をもつ構造である。身舎の規模は、梁間が444cm、桁行は278cm等間で、全長834cmを測る。この身舎に、東・西・南面では幅100cm、北面では幅90cmの庇がつき、建物全体として



第198図 建物137 (1/80)

ては梁間634cm、桁行1034cmの規模となり、床面積は65.6m²を測る。この床面積は、当遺跡で検出された中世の掘立柱建物の面積としては最大である。柱穴の規模をみると、身舎と庇では明らかな相違が認められる。身舎の柱穴は長径が50~60cmのものがほとんどであり、最小でも40cmであるが、庇のそれは30~40cmのものが多く、隅の柱穴のみが身舎の柱穴に近似する。柱穴の深さについても、身舎と庇では30~40cm程度の差がみられるが、ここでも庇の隅の柱穴14と18は身舎の柱穴と匹敵する深さをもっている。南面庇の柱穴列では、身舎の桁行の柱間と対応する柱間の中点に柱穴がそれぞれ確認されたが、その柱穴の長径は24cmと、庇の他の柱穴よりは小さくなっている。この柱穴の柱は、身舎の柱間の中点付近の前面という位置や、その長径の規模から考えて、桁までは伸びず、床を支える束柱ではないかと推定される。東面と西面の庇の柱穴のうち、中央の2基も束柱のものではないかと考えられ、北面庇の柱穴17もその可能性

が強い。おそらく、庇部分については床が貼られていたのであろう。そうすると、庇の幅が90cm、または100cmと狭いため、縁と考えるのが自然であるが、前述のように、庇の隅の柱穴はしっかりしているため、この縁の上に庇がかけられていたことは確かである。身舎の柱穴の多くには柱のめりこみ穴が認められ、その直径は14~22cmである。柱穴4・5・14・19・21・23・29では柱根の一部が残存していたが、このうち、5と23についてはマツ属の一種、14と29は広葉樹であると樹種同定の結果がでている。このように1棟の柱材に複数種類のものがみられるることは注意されるが、これは身舎と庇との樹種の相違とも考えうる。柱穴の埋土はほとんど灰白色粘性微砂斑灰色粘性砂質土であるが、一部に灰色粘性砂質土のみがみられる。建物の棟の方向はE-12°-Sを測るが、この方向とほぼ平行または直交する棟方向をもつ建物は、建物133・144・145・148・156・157・159・161と多くある。また、塀101の方向も、この建物138の棟方向と直交している。

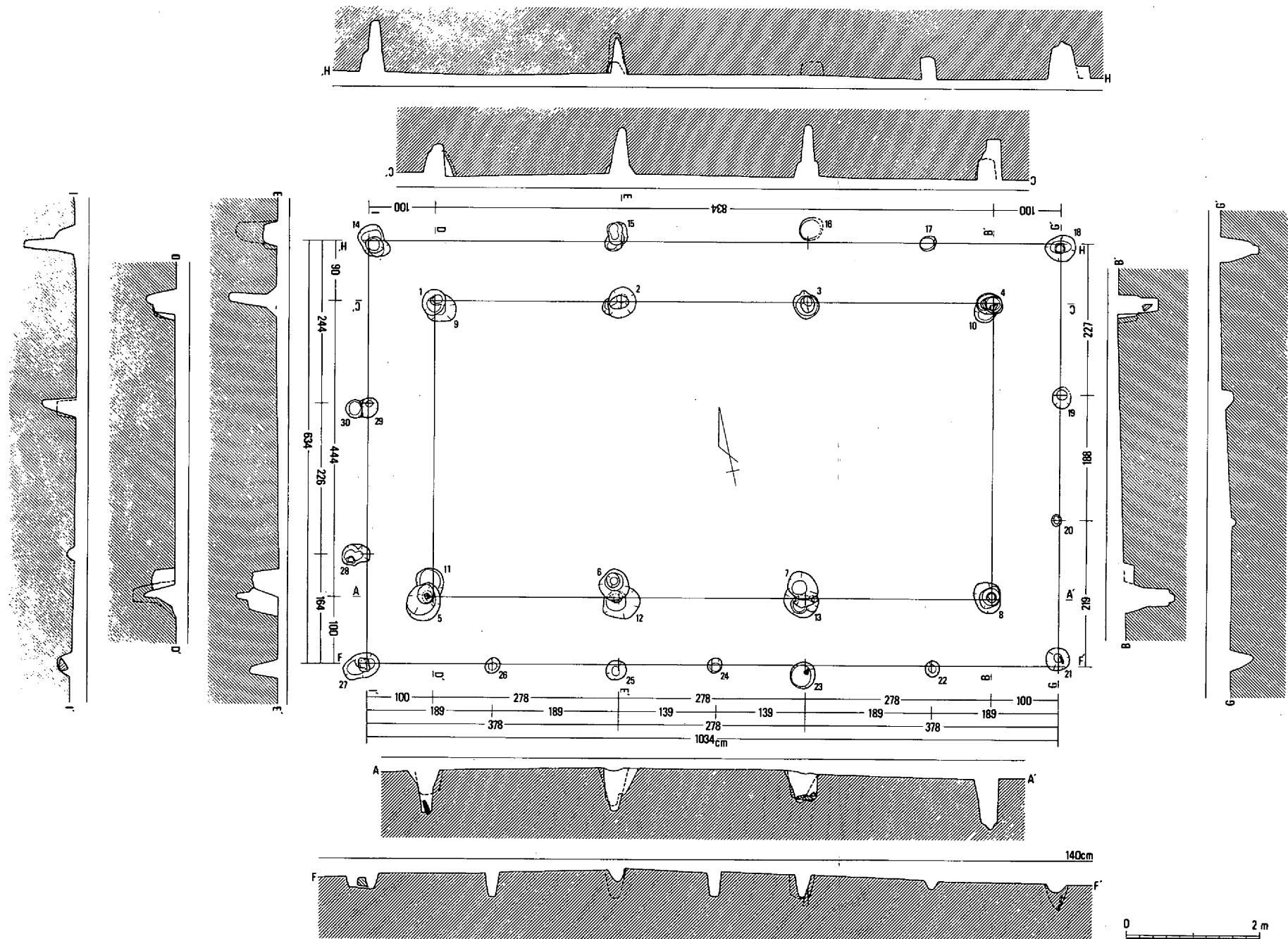
この建物138については、他の建物にはみられなかった二つの興味深い事実がある。一つは身舎の柱穴8基のうち、5基で掘り直しが認められていることである。いずれもほぼ同規模の柱穴が重複していて、補強のための添え柱の柱穴とは思われない。どうも、この建物138は一度建て替えられたようである。ところが、庇の柱穴には掘り直しがみられないため、四面に庇がつけられたのは、建て替え時ではなかったかと推測される。もう一つは身舎の中央北半部に検出された土壙159との関係である。この土壙からは多量の土器が出土したが、それらの器種は多彩で、各器種の点数を検討してみると、ちょうど一戸の家で日常使用されていた土器類を一括したものである可能性が強い。しかも、これらの土器の多くは火災にあってることが明瞭である。建物138は柱穴5から出土した柱根の焼けこげから火災にあったとみられるが、その際に破壊された土器類がなんらかの理由で、土壙に一括埋納されたのではないかと考えている。図上では、柱穴5は柱穴11を切っているが、柱穴6と12、7と13の関係からみれば、むしろ柱穴11が5を切っている方が自然であり、建て替えは火災による可能性が強い。

建物138のほとんどの柱穴から遺物の出土があったが、柱穴19・20・22では出土がみられなかった。出土した柱穴のうち、2・4~7・14・15・23では多くの遺物の包含がみられたが、これらの柱穴は身舎の建て替えられた柱穴と庇の柱穴である。また、土壙159から出土した土器類（第292~298図）には近畿地方で作られた瓦器や東海地方の常滑焼の大甕、さらには中国製の白磁碗などの品々があり、その所有者であったと推定される建物138の主の力を物語っている。出土した遺物の年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

建物139（第200図）

15N区の南端から15O区にかけて位置する、南北棟の掘立柱建物である。梁間の中央から少し西に小さな柱穴が1基あるが、これがこの建物の柱穴かどうかは疑問である。南の梁間は最



第199図 建物138 (1/80)

近の削平によって破壊されているため確認できないが、ここでは桁行1間、梁間2間の構造と考えておく。規模は梁間400cm、桁行468cmを測り、床面積は18.7m²となる。柱穴は円形で、長径36～50cm、柱穴2のみ小さく、長径24cmである。柱穴の埋土は黄色ないしは灰白色の微砂を含む灰色粘性砂質土である。柱穴の深さをみると柱穴4が一段深く、北側の梁間と南側の梁間で柱穴の深さに差があったものと思われる。棟の方向はN-11°-Eで、この方向は隣接する建物140や塀104の方向とほぼ直角をなす。遺物は柱穴1～3から出

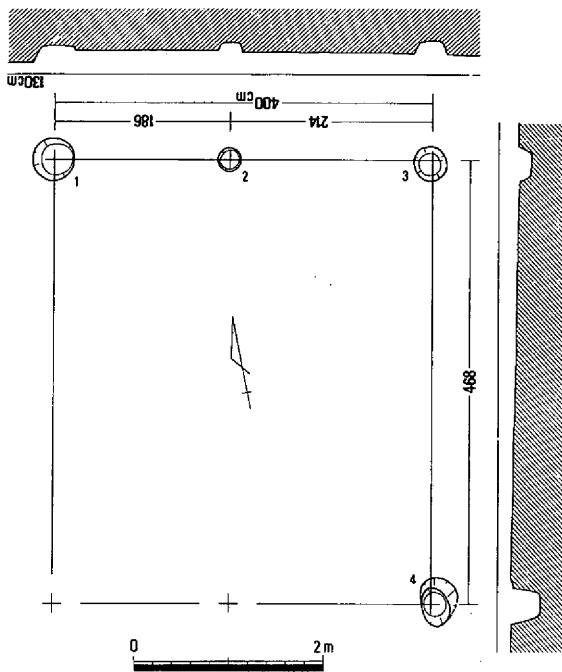
土しているが、柱穴3が多かった。それらの年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

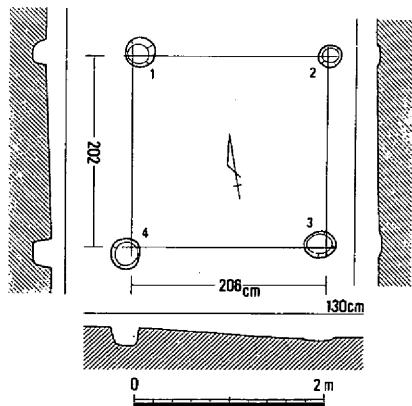
建物140（第201図）

150区の北東隅に位置する掘立柱建物である。桁行・梁間ともに1間で、柱間は梁間202cm、桁行206cmを測り、ほぼ方形に近い平面形をもつ。床面積は4.2m²で、当遺跡の建物の中でもっとも小さいものの一つである。柱穴の位置をみると、他の1間×1間の建物と同様、微妙な歪みがみられる。また柱穴の大きさでも、柱穴2のみが長径25cmとすこし小さく、他の柱穴は長径32cm程度である。柱穴の埋土は黄色微砂斑灰色粘性砂質土で、柱穴2のみ灰色粘性砂質土である。柱穴の深さでは、西辺と東辺で8cmの差がみられる。建物の棟の方向はE-10°-Sを測り、西側に隣接する建物139の棟の方向とほぼ直交する。遺物は各柱穴から少量出土している。ほとんど細片のため中世のものとしか判断できないが、一部に鎌倉時代のものではないかと考えられるものがある。

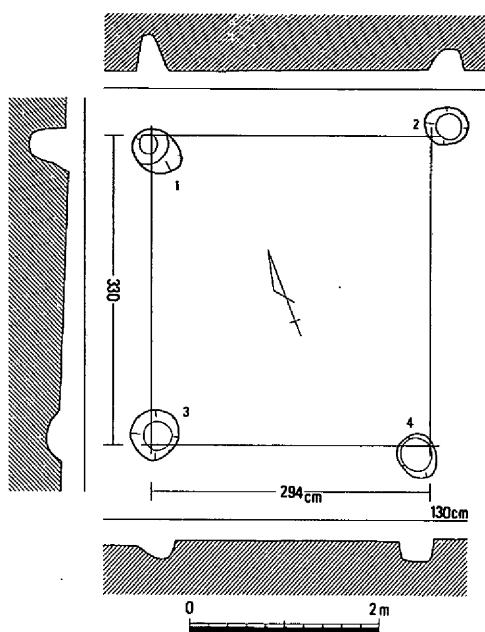
(岡本)



第200図 建物139 (1/80)



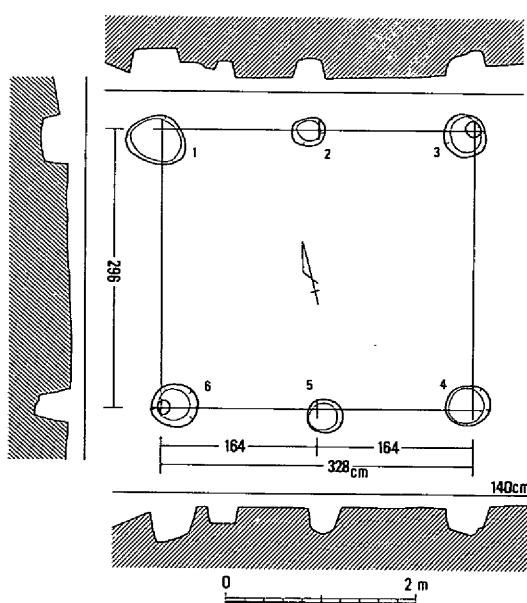
第201図 建物140 (1/80)



第202図 建物141 (1/80)

は12L区に位置する建物127で、角度はN-19°-Eである。遺物は柱穴1・2・4から出土している。柱穴2からは中世とみられる土器片が多く出土しているが、柱穴1・4出土のものは弥生土器と考えられる。

(岡本)



第203図 建物142 (1/80)

建物141 (第202図)

16O区の中央部に位置する南北棟の掘立柱建物である。桁行、梁間ともに1間の小形の建物だが、柱穴の位置は方形規格からみればかなり大幅にずれている。いちおう梁間294cm、桁行330cm、床面積9.7m²を測る。柱穴はほぼ円形で、長径は44~56cmと揃っているが、柱穴の深さでは柱穴1のみが他柱穴より14cm深くなっている。柱穴の埋土は1と2が褐灰色粘性砂質土、3と4は灰色粘性砂質土である。建物の棟の方向はN-20°30'-Eを測り、この建物が当遺跡で検出された中世の南北棟建物の中ではもっとも東偏している。この棟方向にもっとも近いもの

建物142 (第203図)

16M区の南半に位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の構造で、規模は、梁間が296cm、桁行は164cm等間で、全長は328cmを測る。床面積は9.7m²である。柱穴の規模をみると、桁行中央の柱穴がひとまわり小さくなっている。四隅の柱穴の長径は44~62cm、桁行中央の柱穴の長径は36cmと40cmである。柱穴の深さも、桁行中央の柱穴が四隅の柱穴より10cm程度浅くなっている。柱穴3と6では柱のめりこみが認められ、その直径は16cmを測る。柱穴の埋土は灰茶褐色砂質土

か暗灰茶褐色土である。建物の棟の方向はE-14°-Sで、隣接する建物としては、建物135や建物146がほぼ平行、または直交する。

遺物が柱穴1・3・6から少量出土しているが、いずれも弥生土器とみられる。しかし、建物の構造や規模等から判断して、中世の掘立柱建物と考えている。

(岡本)

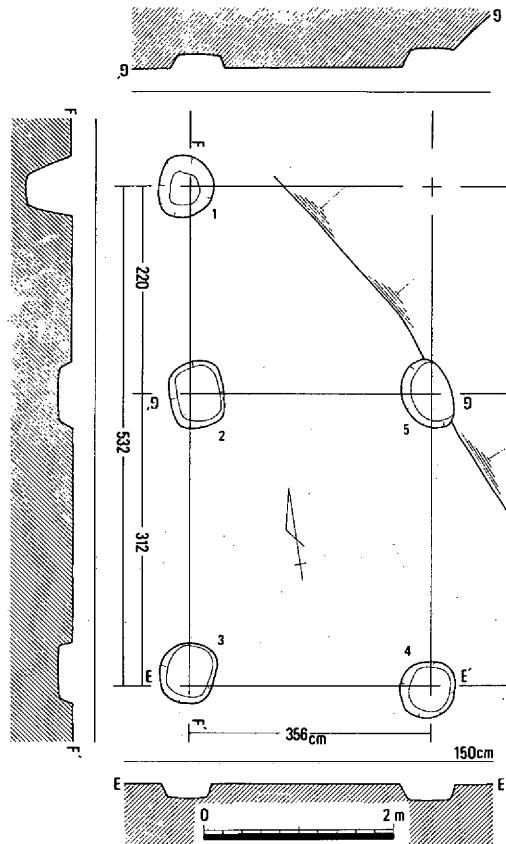
建物143（第204図、図版76）

17M区の南西隅から17N区の北東隅にかけて検出された掘立柱建物であるが、建物の東側は工事によってすでに削平されているため、全容はつかめなかった。柱穴の規模や柱間の長さから判断すれば、かなり大形の建物になる可能性があり、そうとすれば東西棟である確率が高い。ここでは東西棟と仮定し、桁行1間以上、梁間2間としておく。梁間は全長532cmで、柱間は220cmと312cmである。柱間に100cm近く差があることからすれば、北半は庇であることも考えられる。桁行の柱間は356cmを測る。柱穴の形状はすこし角張った円形で、長径は62~76cmと大きい。柱穴の埋土は淡灰茶褐色砂質土である。柱痕跡は認められなかった。棟の方向はE-8°30'-Sを測るが、これと平行する棟方向をもつ建物は多く、建物130・149・154がある。また近似した棟方向をもつものとして建物134・147などがある。5以外のすべての柱穴から遺物の出土をみたが、それらの年代は弥生時代と考えられる。しかし、前述のような建物の形状や棟の方向から判断して、弥生時代の掘立柱建物とはとうてい考えられない。むしろ、柱穴の大きさにもかかわらず、中世の遺物が含まれていないことから、当遺跡の中世集落の初期に存在したものである可能性も考えられる。なお、奈良時代の建物と考えられる建物110とは、棟の方向が5°ほど異なっている。また、建物144と重複しているが、この144の柱穴からは鎌倉時代らしい遺物が出土している。

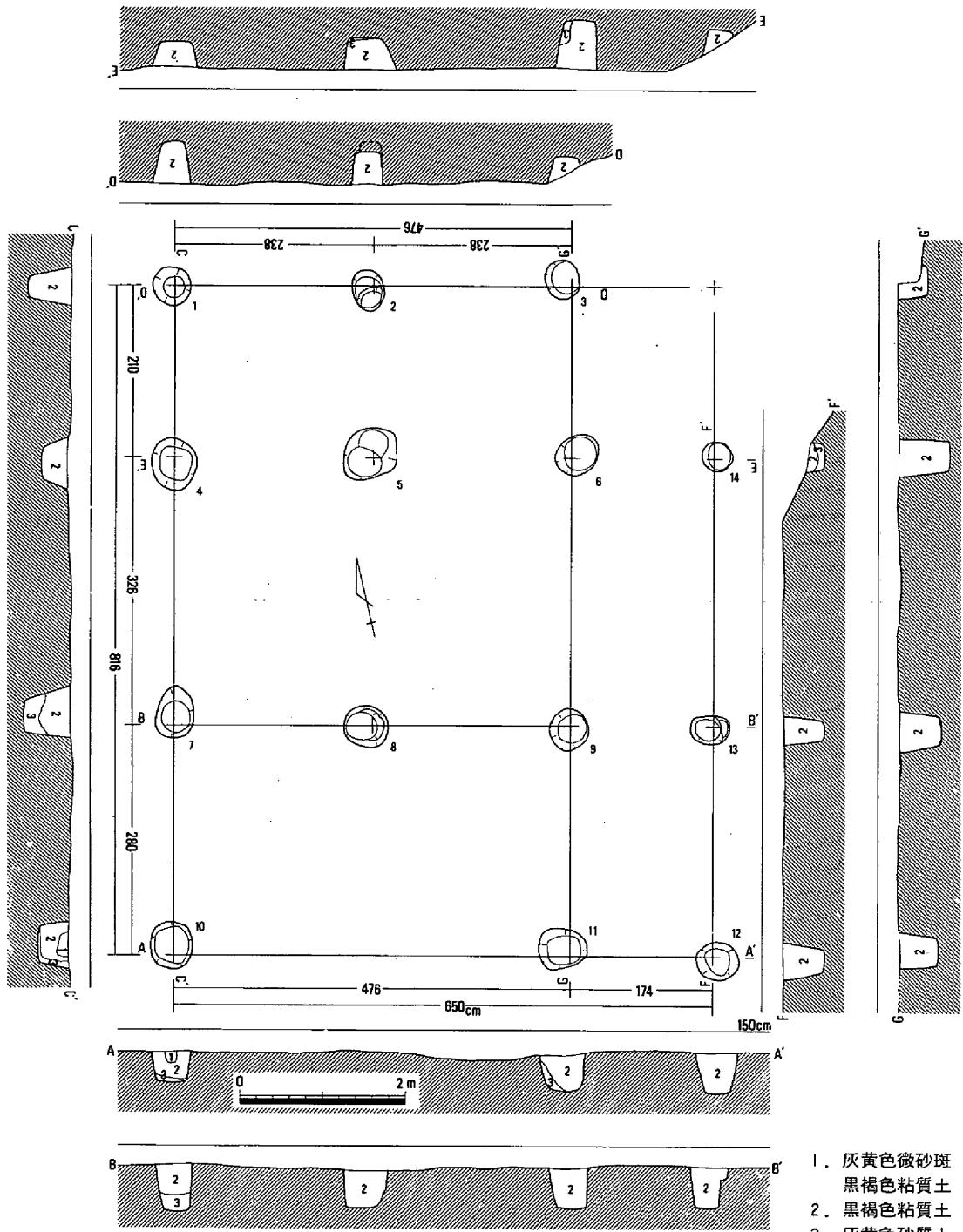
(岡本)

建物144（第205・206図、図版76）

17N区から18N区にかけて位置する、南北棟の大形掘立柱建物である。規模は、梁間全長が



第204図 建物143 (1/80)



第205図 建物144 (1/80)

650cm、桁行全長は816cmを測り、床面積53.0m²となる。この床面積は、当遺跡で検出された中世の掘立柱建物のなかでは、建物157の57.1m²に次いで四番目の広さである。この建物の構造は、当初、柱穴の規模からみて、桁行2間、梁間2間の身舎に、東と北に庇がつくものと考えていた。すなわ

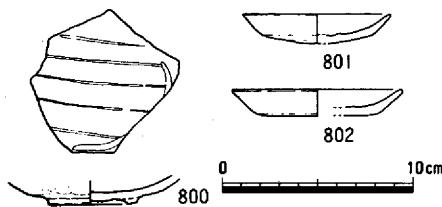
ち、身舎の柱穴の長径が52～76cmであるのに対して、庇の柱穴の長径は48～52cmで、平均で10cm程度の差がみられた。もっとも、柱穴の深さについては、身舎と庇で大きな差はみられなかった。これについて、当遺跡で検出された他の庇をもつ大形建物と比較すると、確かに、建物138や157では身舎と庇の柱穴の大きさに差が認められたが、同時に、柱穴の深さについても明瞭な差が存在している。一方、建物126では、身舎と庇の柱穴の間では、大きさ、深さともに明確な差はみられなかった。このようなことから、建物144の構造については、他に柱間なども参考にして、東と北の二面に庇をもつ可能性が強いと考えていた。ところが、掘立柱建物個々の整理・検討を進めるなかで、この建物144から東面の庇を取ってみると、これときわめてよく類似する柱穴配置をもつ建物が2棟あることがわかった。それは建物131と147である。これらの建物はいずれも一方の梁間の中央柱穴を欠き、建物内は、桁行1間分と2間分の二つの空間に分けられている。そして、2間分の空間の中央柱穴は浅くなっている。さらに、建物147では2間分の桁行柱間は、建物の中央側が長くなっている。建物144でも、南側の梁間の中央柱穴はなく、柱穴5は他の柱穴より浅く、桁行中央の柱間がもっとも長くなっている。したがって、建物144の構造としては、梁間2間、桁行3間の身舎に、東面庇がついたものとする考えが有力である。ただ、建物131・147とはいくらかの相違もある。一つは、それらの梁間の柱間が等間でないこと。いま一つは、桁行の柱間のうち、2間が同じ長さであることである。建物144の場合、身舎の梁間は238cm等間であり、桁行の柱間は、北から、210cm、326cm、280cmとすべて異なっている。なお、庇の柱間は174cmである。建物の棟の方向はN-12°30'-Eを測るが、この方向は、近接する建物としては、建物148の棟方向と等しく、大形建物のなかでは、建物138の棟方向とほぼ直交する。

遺物は柱穴12以外のすべての柱穴から出土しているが、そのうちでも、柱穴1・2・5～8では多くの出土があった。それらの年代については、中世としか判断できないものが多いが、なかに鎌倉時代と考えられるものがみられる。

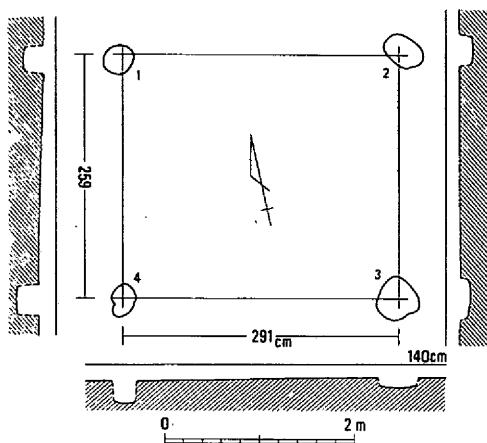
(岡本)

建物145（第207図）

17N区の東半に位置し、建物144の敷地内にすっぽり納まるように重複している。調査後の整理時に確認した建物である。桁行、梁間ともに1間の掘立柱建物で、柱間から東西棟の建物と



第206図 建物144出土遺物

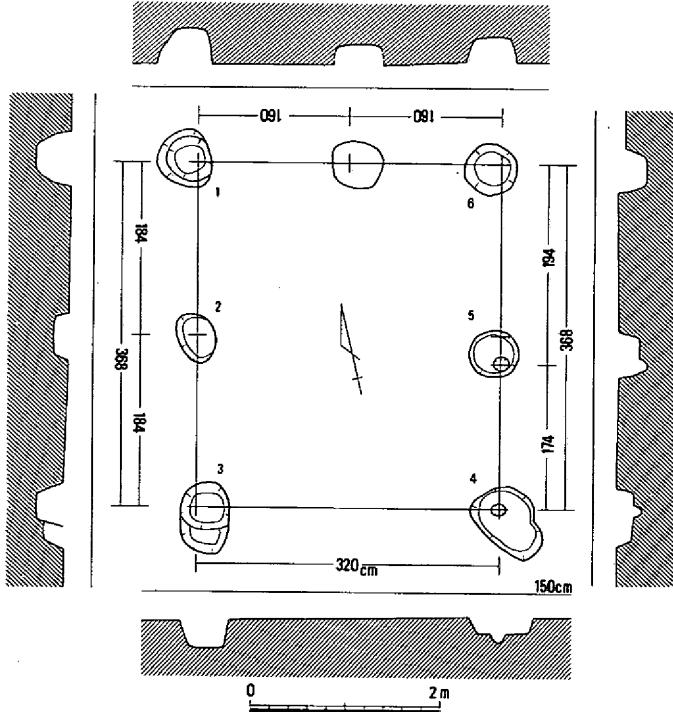


第207図 建物145 (1/80)

考えられる。規模は梁間259cm、桁行291cmを測り、床面積は7.5m²である。柱穴は長径で34~48cm、埋土は淡灰茶褐色砂質土で、柱穴1のみ黄色土斑暗灰褐色土である。柱穴の深さをみると、東辺と西辺で差が認められる。棟の方向はE-12°15'-Sで、隣接する建物146や建物148、そして重複する建物144の棟の方向とはほぼ直交する。遺物は柱穴4からのみ少量出土しているが、その年代については中世としか判断できない。(岡本)

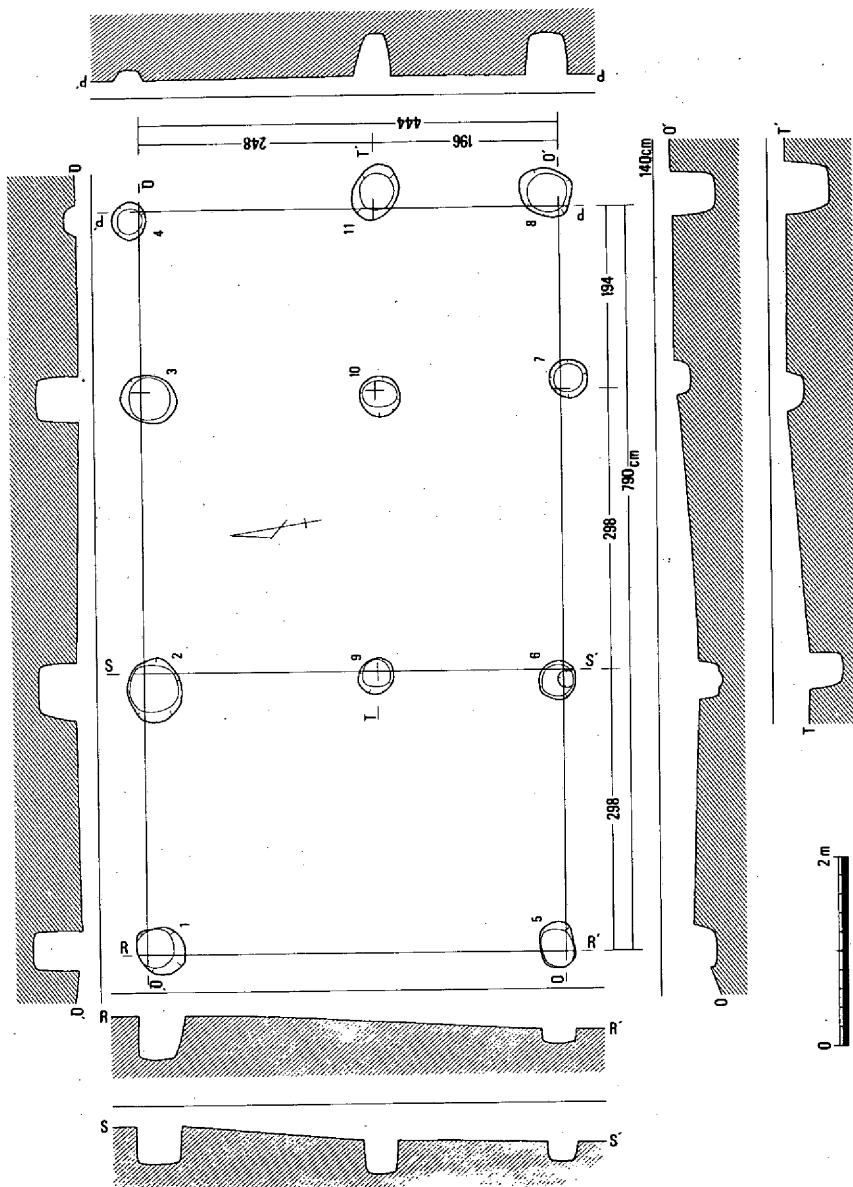
建物146 (第208図、図版76)

17N区と17O区の境界付近に位置する南北棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間2間の構造とみられるが、南梁間の中央柱穴は検出されなかった。規模は、梁間の全長が320cm、桁行全長は368cmであり、床面積は11.8m²を測る。柱間は、梁間が160cm等間、桁行も西辺は184cm等間



第208図 建物146 (1/80)

であるが、東側桁行は174cmと194cmで異なっている。柱穴はほぼ円形で、その長径は52~64cmである。柱穴の深さをみると、北梁間と西桁行で、中央の柱穴が10~15cm浅くなっている。柱穴4・5では柱のめりこみが認められ、その直径は16cmを測る。柱穴の埋土は淡灰茶褐色砂質土である。建物の棟の方向はN-13°-Eで、重複する建物144や近接する建物148の棟方向とはほぼ平行する。遺物は柱穴1~3・5・6か



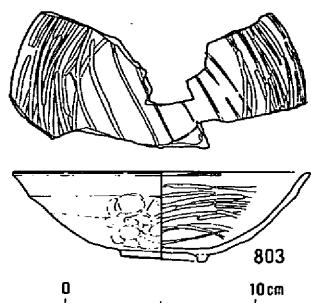
第209図 建物147 (1/80)

ら少量出土しているが、それらはほとんど弥生土器である。しかし、前述のような建物の規模と構造から、中世の掘立柱建物と考えている。

(岡本)

建物147 (第209・210図、図版77)

170区に位置し、一部160区にかかるやや大形の掘立柱建物である。東西棟で、桁行3間、梁間2間の構造をもつが、西側の梁間では中央の柱穴は検出されなかった。規模は梁間全長が444cm、桁行全長は790cmを測り、床面積は35.1m²となる。柱間は梁間、桁行ともに等間隔では



第210図 建物147出土遺物

なく、梁間は196cmと248cm、桁行は西から2間は298cmで等しいが、東端は194cmになっている。このような柱穴の配置は前述の建物131ときわめてよく類似していて、わずかに違うのは、棟の方向が東西棟であることと、桁行の柱間が等間ではないことぐらいである。柱穴の深さをみても、柱穴10はきわめて浅く、やはり東柱のものである可能性が強い。おそらく、この建物147も柱穴2・9・6を結ぶ線で二つの空間に分けられるものと考えられ、東の空間は床敷の構造であったとみられる。柱穴の形状はほぼ円形であるが、大きさについてはかなり変化があり、最大は長径68cm、最小は長径40cmにすぎない。柱穴6では柱のめりこみとみられる直径20cmの穴が底に残り、柱穴5では柱の痕跡が確認された。柱穴の深さをみると、柱穴10の他に、柱穴4・5・7も深い。4や5のような隅の柱穴が深いことは注意される。柱穴7についてでは10との関係で東柱の可能性も考えられる。その場合には、東の空間からの出入りのための構造とみることができる。柱穴の埋土は灰

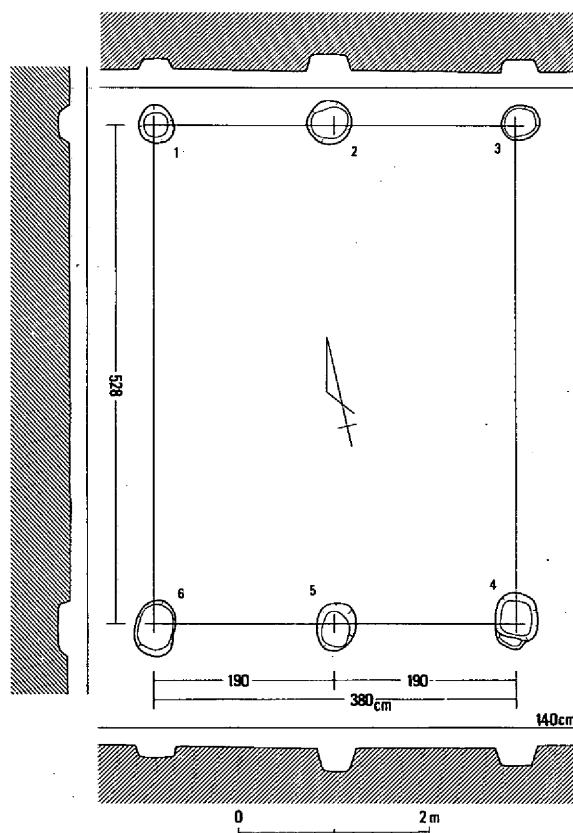
色粘性砂質土で、黄色や灰白色の微砂のブロックを含んでいる。建物の棟の方向はE-9°-Sを測り、南に隣接する建物149とほぼ平行する。

遺物は4以外のすべての柱穴から出土しているが、とくに1~3・5・6・8・11が多い。ほとんどの遺物の年代は平安時代の末期から鎌倉時代と考えられるが、室町時代ではないかとみられるものがわずかに存在するようである。

(岡本)

建物148(第211・212図、図版77)

170区と180区の境界に位置する南北棟の掘立柱建物である。短辺の中央には柱をもつが、長辺の中央には柱がなく、当遺跡における通有の建物とは構造を異にして



第211図 建物148 (1/80)

いるが、いちおう桁行1間、梁間2間と考えておく。規模は梁間が380cm、桁行が528cmで、床面積は20.1m²を測る。柱間は梁間では190cm等間になっている。柱穴の形状は北辺が円形であるのに対し、南辺は楕円形または方形を呈している。また、柱穴の規模も、北辺が長径40～48cmなのに、南辺は50～60cmを測り、若干の差異がある。つぎに柱穴の深さをみると、北辺・南辺とともに中央の柱穴がもっとも深く、両端の柱穴より6～14cmばかり下がる。この状況は、後述する建物150の梁間の様相とは逆であり、その相違は建築構造の違いによるものではないかと考える。柱穴の埋土は暗灰褐色土で、柱穴4・5では地山の黄色土のブロックが含まれていた。柱痕跡は認められなかった。棟の方向はN-12°30'-Eを測り、北西に隣接する大形の建物144と平行している。遺物には土器と錢貨がある。土器片は柱穴1・4～6からいずれも少量出土している。このうち柱穴1出土土器の年代は鎌倉時代後半と考えられる。錢貨は柱穴6から3枚出土し、注目される。いずれも北宋錢で、「景德元寶」(初鑄1005年)が2枚と「天聖元寶」(初鑄1023年)が1枚である。当遺跡内で、柱穴から錢貨の出土した掘立柱建物は3棟にすぎず、さらに、それ以外で錢貨の出土した柱穴も4基とごく少ない。このうち、建物164の柱穴3からも2枚の出土があり、偶然のなかでの複数出土は考えにくることから、人為的な埋納の可能性が強い。

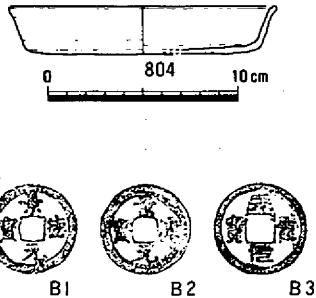
(岡本)

建物149 (第213・214図、図版77)

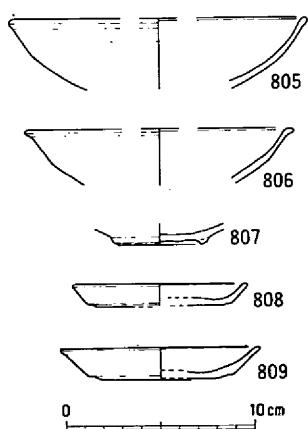
16P区から17P区にまたがって位置する、かなり大きな掘立柱建物である。桁行3間、梁間1間の東西棟の構造をもつ。規模は、梁間420cm、桁行は296cm等間で、全長888cmを測り、床面積は37.3m²である。柱穴はほぼ円形だが、大きさにはかなり変化があり、長径は最大で54cm、最小で34cmを測る。ただし、柱穴2は最近の削平の影響で変形している。柱穴の深さをみると、柱穴1・5・8と三隅の柱穴が浅くなっているのが注意される。柱穴の埋土は黄色ないしは灰白色微砂のブロックを含む灰色粘性砂質土である。柱穴6では直径32cmの柱痕跡を確認している。棟の方向はE-8°30'-Sを測るが、これは真北に隣接する建物147の棟の方向とほぼ平行する。遺物は1・8を除く各柱穴から出土しているが、柱穴2ではとくに多かった。それらの年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

第213図 建物149出土遺物



第212図 建物148出土遺物



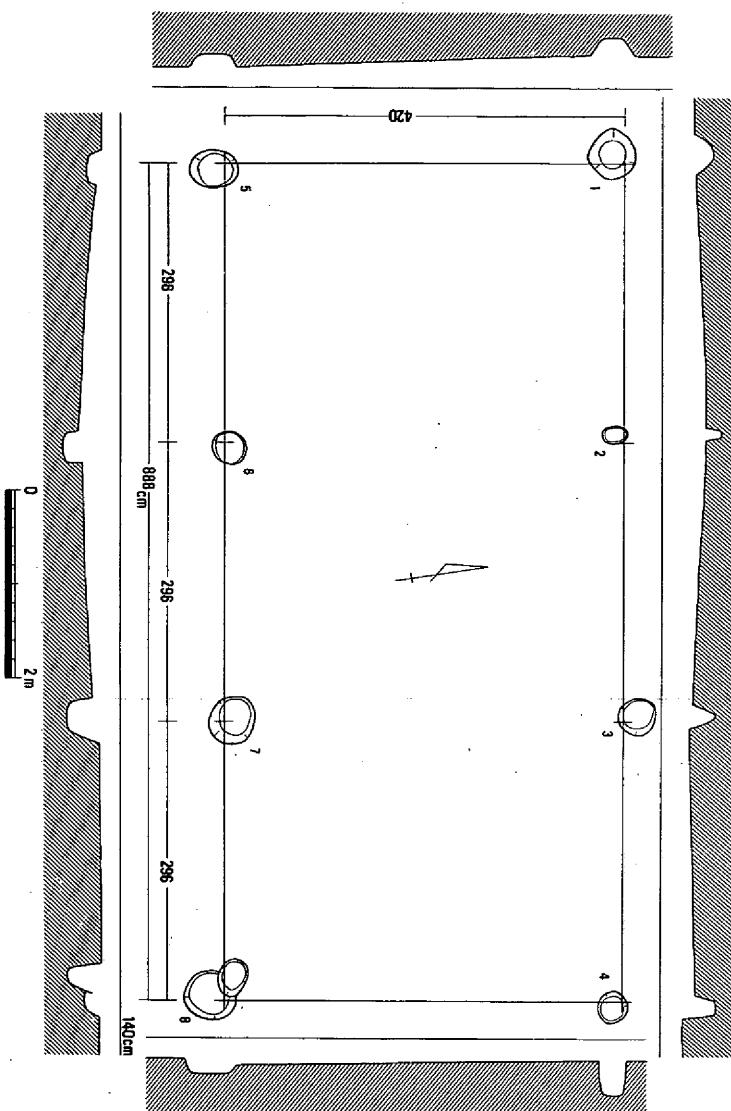
建物150（第215

図）

17P区と18P区

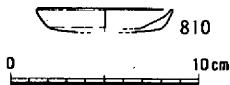
にまたがって位置する南北棟の掘立柱建物で、桁行2間、梁間2間の構造をもつ。規模は梁間全長384cm、桁行全長456cm、床面積 17.6m^2 を測る。柱間は梁間・桁行ともに等間で192cmと228cmになるが、東辺では中央柱穴が少し北へずれている。また、柱穴1と3の隅の柱も長方形規格からわずかにはずれている。柱穴はほぼ円形で、長径は32~40cmとわりありに揃っているが、柱穴8のみは長径

第214図 建物149(1/80)



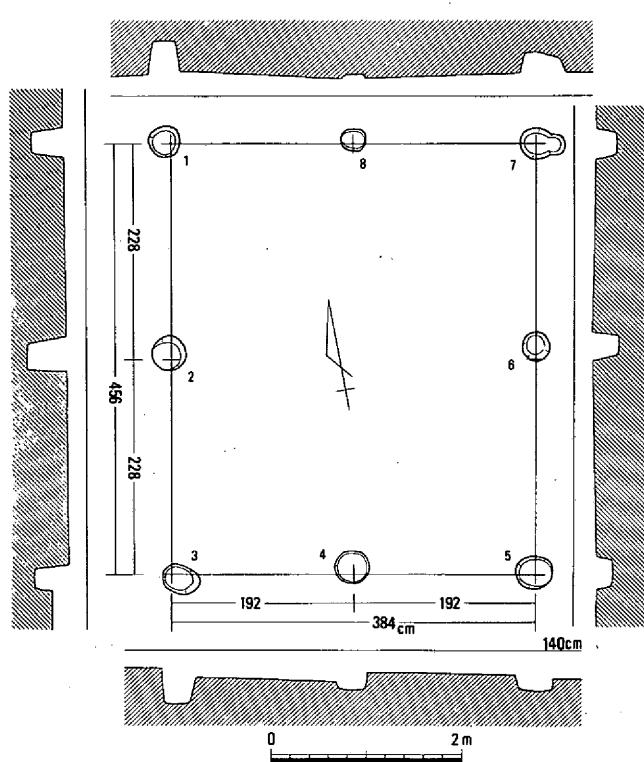
26cmと小さい。柱穴の深さをみると、梁間の中央柱穴が他の柱穴より浅くなっているのに気づく。とくに柱穴8は深い。これは建物148の説明文でも述べたように、建築構造と関係しているものと考えられる。柱穴5と8では柱痕跡が確認され、その直径は16cmである。柱穴の埋土は暗灰褐色土で黄色微砂を斑点状に含むものが多い。建物の棟の方向はN-11°-Eを測る。1以外のすべての柱穴から遺物の出土をみたが柱穴2・7・8ではとくに多かった。これらの遺物の年代は鎌倉時代と考えられるが、なかに鎌倉時代でも後半ではないかとみられるものもあった。

(岡本)

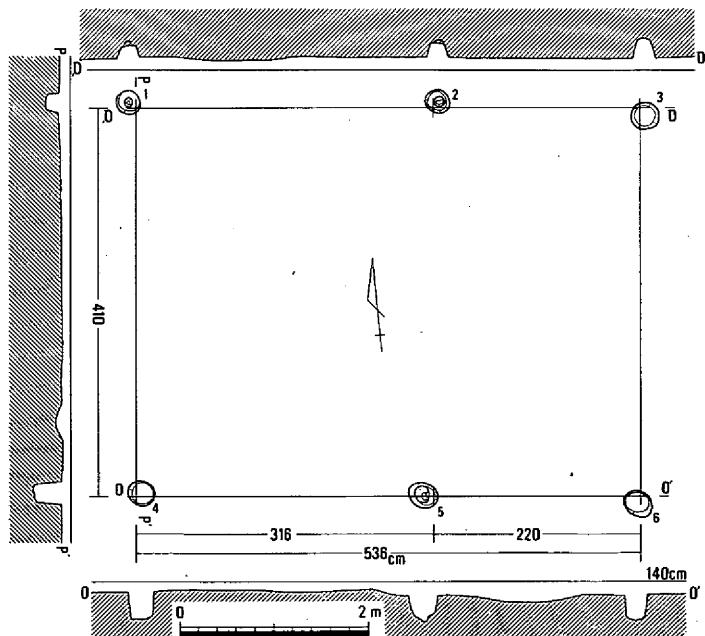


建物151(第216図、図版75)

13P区から13Q区にまたがって位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の構造であるが、桁行の中間の柱の位置は北辺と南辺でわずかにずれており、また、四隅の柱も長方形規格から微妙に歪んでいる。いちおう梁間410cm、桁行536cmを測り、桁行の柱間は316cmと220cmで等間ではない。床面積は約22m²である。柱穴はほぼ同規模で、直径27～32cmの円形を呈し、深さは14～30cmと差がある。南辺の柱穴に対して北辺の柱穴はいずれも浅い。柱痕跡は認められなかったが、柱穴底に柱のめり込みを認めるものがある。柱穴の埋土はいずれも灰色粘性砂質土で、黄色微砂を斑点状に含むものが多い。棟の方向はE-5° 30' - Sである。



第215図 建物150 (1/80)・出土遺物

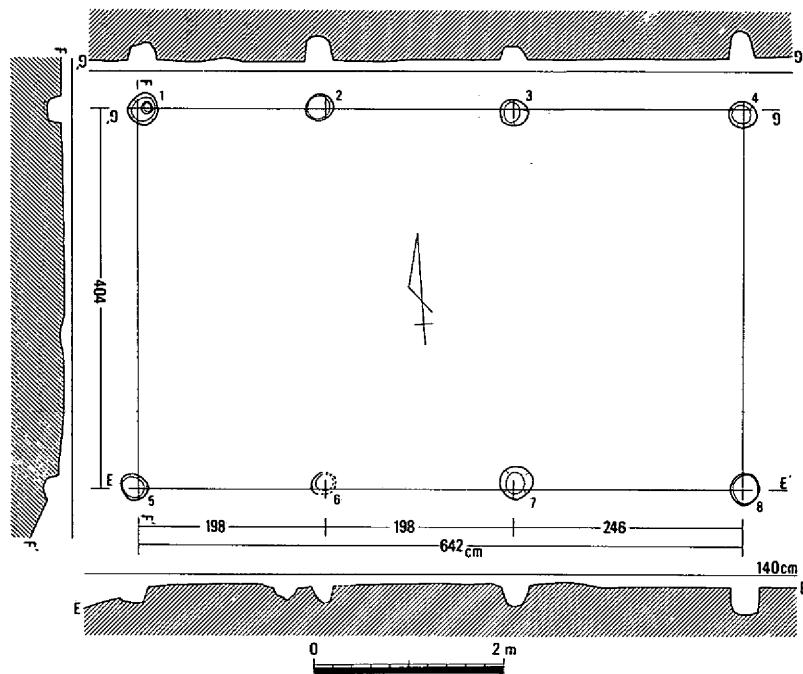


第216図 建物151 (1/80)

この建物は後述の建物152と重複した位置関係にあるが、すべての柱穴から少量ずつ出土した遺物は鎌倉時代のものと考えられ、建物152に先行して建てられたものと考える。 (岡本)

建物152 (第217図、図版75)

13P区から13Q区にかけて位置し、建物151と重複している。東西棟の掘立柱建物である。その構造は、建物151が桁行2間、梁間1間であったのに対し、桁行3間、梁間1間となり、規模も大きくなっている。柱間は梁間が404cmで、桁行は198cm、198cm、246cmとなって東側の柱間



第217図 建物152 (1/80)

が他より長くなっている。建物の規模は桁行全長が642cmを測り、床面積約25.9m²である。柱穴はいずれも円形の掘り方で、直径は30~36cmとほぼ揃っているが、深さにはやや乱れがあり、もっとも深いもので30

cmである。柱痕跡は認められないが、柱のめり込みを残す柱穴もある。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土か黄色微砂斑灰色粘性砂質土である。棟の方向はE-4°-Sを測り、重複する建物151と1°30'異なる。すべての柱穴から少量の遺物が出土しているが、それらの年代のうちもっとも新しいものは室町時代のものである。 (岡本)

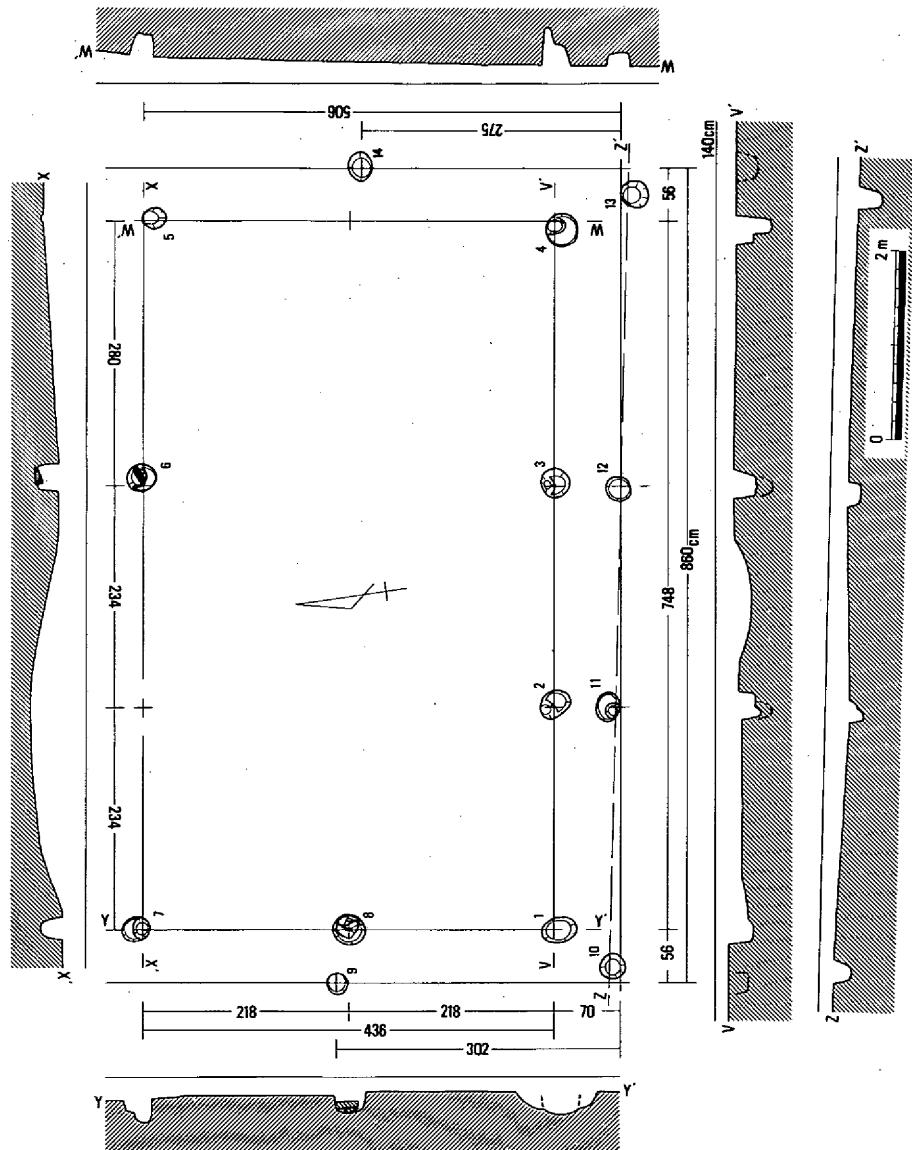
建物153 (第218図、図版78・79)

14P、14Q、15P、15Q区にまたがって位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間の構造であるが、東の梁間では中央の柱穴は検出されなかった。柱間は西の梁間では218cm等間、桁行は西から234cm、234cm、280cmを側り、東側の柱間がいくぶん長い。建物全体の規模は梁間436cm、桁行748cmであり、床面積32.6m²となる。各柱穴は円形の掘り方で、直径31~37cm、深さ25cm程度あり、柱穴の底面では直径15~20cm程度の柱のめり込みが確認されている。

3 平安時代後期～室町時代

柱穴 8 では柱穴底に礎石が据えられていた。また柱穴 6 では柱根がわずかに残存していた。この柱根の樹種は鑑定の結果シイノキ属の一種と判明している。柱穴埋土は灰白色粘性微砂斑灰色粘性砂質土である。棟の方向は E - 7° 30' - S を測る。

この建物については調査中から、柱穴 2 と 3 の南に、それよりは少し小さな柱穴が伴うような形で存在していることを注意していた。このような見方で、柱穴 1 と 4 の付近も調べてみると、1 では南西に、4 では南東にやはり小さめの柱穴があり、さらに柱穴 8 の西にも 1 基、東側の梁間の中点の東にも 1 基柱穴を見い出すことができた。この建物の周辺にはあまり柱穴



第218図 建物153(1/80)

の集中がみられないため、この対応関係はかなり目に付いた。当初、これらの小さめの柱穴だけで建物を考えようとしたが、歪みがひどくてできず、むしろ、この建物153に付属するものと考えることにした。これらの柱穴はほぼ円形で、長径は22~32cmを測り、建物153本体の柱穴よりは10cm前後小さい。また柱穴の深さも10~30cmも浅くなっている。柱穴10~13の中心を結ぶ線は桁行とは平行せず、 $1^{\circ} 30'$ ほどずれる。南側の桁行からの距離も平均で70cmと短いことから庇とは考えにくい。梁間の中点に対応する柱穴も梁間から56cm離れているにすぎない。以上のようなことから判断して、柱穴9~14は建物153の本体に取り付けられた縁の支柱と考えたい。この縁が北側にも存在したかどうかは後世の削平のため不明である。

遺物は縁の支柱穴を含めすべての柱穴から出土しているが、柱穴4~8ではかなり多く含まれていた。これらの遺物の年代は、小片のため明確には指摘しえないが、ほとんど鎌倉時代のものとみられ、一部、鎌倉時代の後半から室町時代のものではないかと考えられるものもみられた。

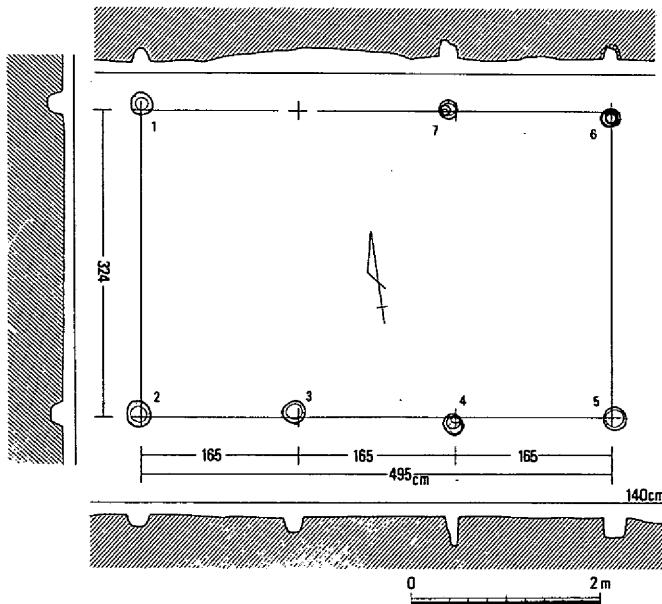
(岡本)

建物154（第219図、図版78）

14Q区から15Q区にまたがって位置する掘立柱建物である。東西棟で、桁行3間、梁間1間の構造をもつ。規模は梁間324cm、桁行全長495cmで、床面積は約16.0m²となる。桁行の柱間は165cm等間である。柱穴の位置は長方形規格の上からみれば微妙にずれているが、いちおう所定のポイントは柱穴の掘り方内にある。北辺の柱穴1と7の間は最近の削平を受けているため、

柱穴は確認されなかった。

柱穴は円形で、長径20~30cmとほぼ揃っている。柱穴4~6・7では柱のめりこみが確認され、その直径は16cm程度を測る。柱穴の埋土は地山の碎粒とみられる黄色または灰白色の微砂のブロックを含む灰色粘性砂質土である。棟の方向はE- $8^{\circ} 30'$ -Sで、隣接する建物では、建物153のE- $7^{\circ} 30'$ -Sがもっとも近い。7基の柱穴のうち、柱穴3をのぞく6基から中世



第219図 建物154 (1/80)

の遺物が出土しているが、柱穴 5 以外は少量にすぎない。柱穴 5 から出土した遺物の年代は鎌倉時代である。(岡本)

建物155 (第220図、図版

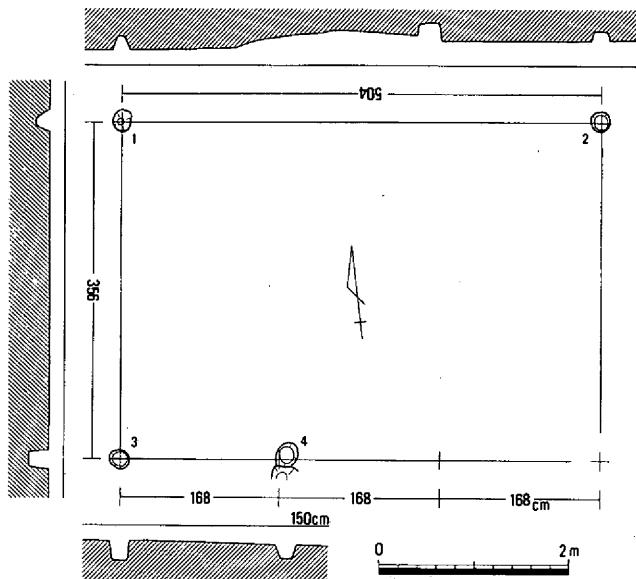
78)

14Q区から15Q区にかけて位置する東西棟の掘立柱建物と考えている。建物154とみごとに重なり合い、規模でも、建物154が梁間324cm、桁行495cmなのに対し、建物155は梁間356cm、桁行504cmとすこしだけ大きくなつたにすぎない。柱穴1～3の三隅の柱穴が検出されたが、桁行を三等分した

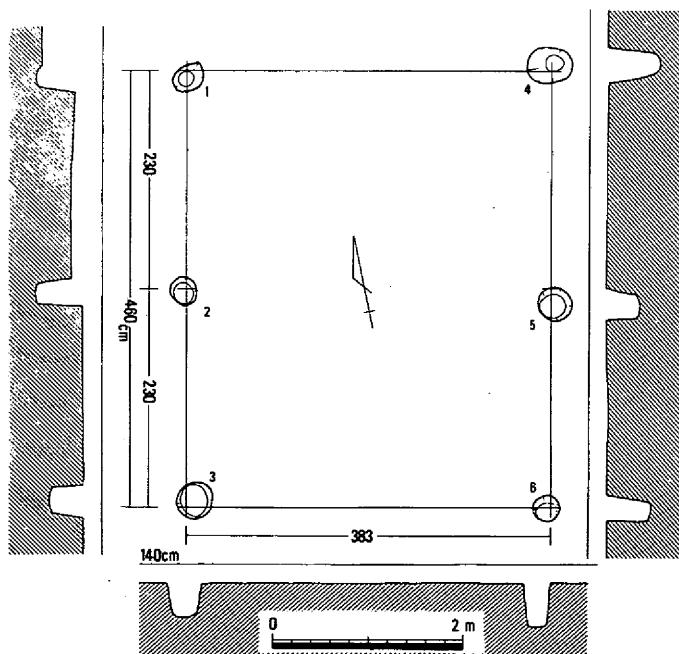
所に柱穴4が位置していることから、建物154と同じ構造の桁行3間、梁間1間の建物が想定される。桁行柱間は168cmである。床面積は19.1m²を測る。柱穴はほぼ円形で、1～3は長径20cm程度、4は長径28cmとす

こしだけ大きい。柱穴の埋土は黄色ないし灰白色の粘性微砂の斑点を含む灰色粘性砂質土である。柱痕跡は認められなかった。棟の方向はE-6°30'~Sを測り、北西にある塙108と平行し、北に接する建物153とは1°異なるにすぎない。遺物は柱穴1～3から出土しているが、少量にすぎず、中世のものとしか判断できない。

(岡本)



第220図 建物155 (1/80)



第221図 建物156 (1/80)

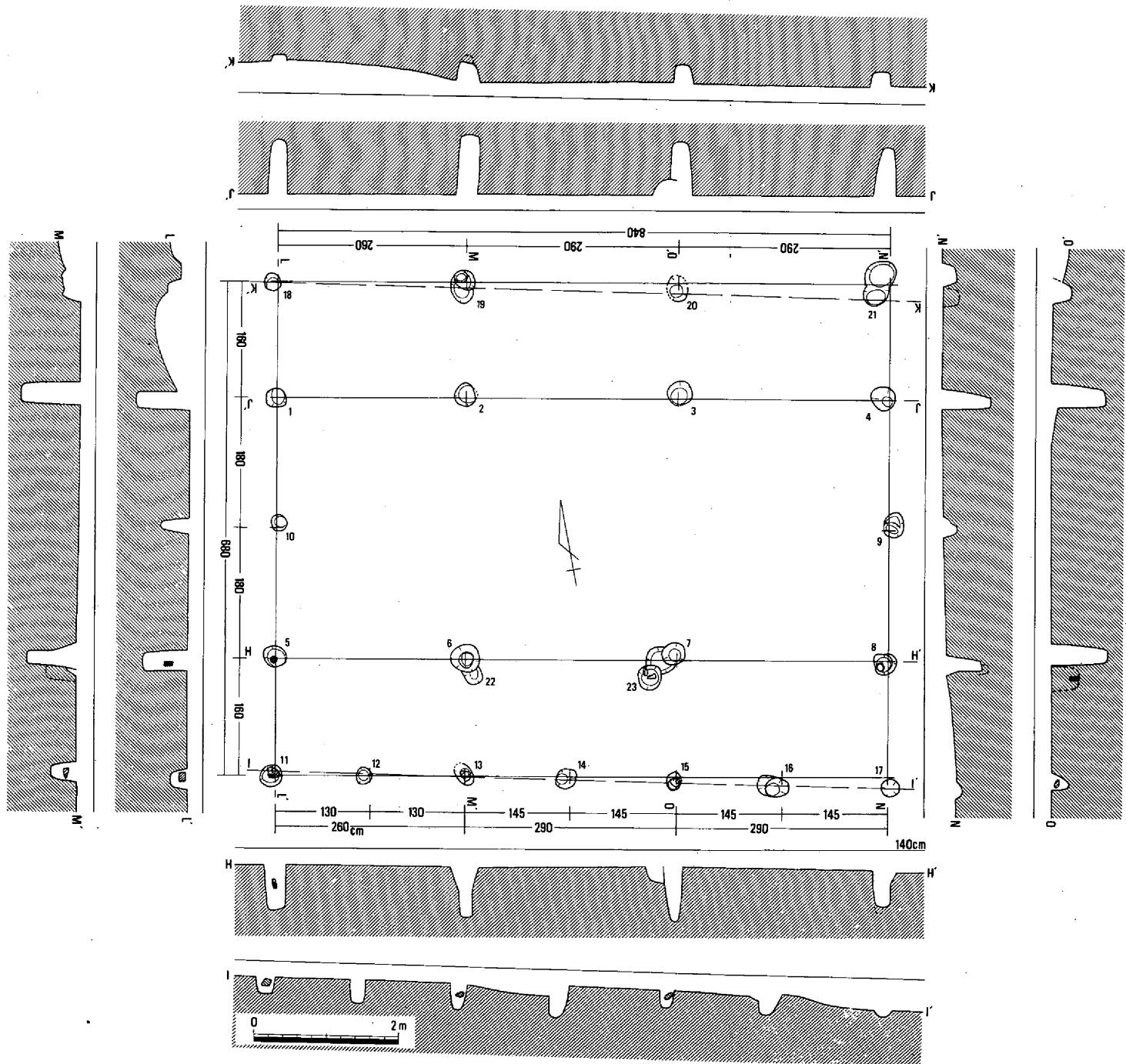
建物156 (第221図、図版78~80)

16P区の東半に位置する南北棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の構造をもつ。建物の規模は梁間383cm、桁行全長460cmをはかり、床面積は17.6m²となる。桁行の柱間は230cm等間であるが、東辺では中央の柱穴が南にずれている。柱穴はいずれも円形だが、直径は28~48cmとかなり変化がある。柱穴の深さについてはそう大きな差はみられない。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土であるが、黄色や灰白色の粘性微砂のブロックを含むものがある。建物の棟の方向はN-11°30'-Eを測り、重複する建物157の棟方向と直交する。遺物は5以外のすべての柱穴から出土しているが、柱穴2・4が多い。それらの遺物の年代は鎌倉時代である。(岡本)

建物157 (第222図、図版78~80)

15P・15Q・16P・16Qの4地区にまたがって位置する、東西棟の大形掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間の身舎に、南と北の2面に庇がつき、全体では桁行3間、梁間4間の構造となる。規模は、梁間全長が680cm、桁行全長は840cmを測り、床面積は57.1m²となる。この床面積は、当遺跡検出の掘立柱建物の中では、三番目の広さである。柱間についてみると、身舎では、梁間が180cm等間であるのに対し、桁行は西から260cm、290cm、290cmとなり、2間が等しく、1間は短くなっている。このような、2間が等しく1間が異なるという柱間のあり方は、建物147・152・153でも認められている。また、庇の幅は南北ともに160cmと、身舎の梁間の柱間よりは少し短くなっている。庇の桁行は、北面では身舎の桁行と同じだが、南面では、身舎の柱間と対応する柱間の中間点に柱穴があり、みかけ上は6間となっている。この庇の柱穴列については、細かく観察すると、各柱穴の中心点を結ぶ線(第222図の点線)が身舎の桁行とは平行していないことがわかる。南面・北面ともに同様であり、2本の庇の桁行は平行している。ちなみに、身舎の桁行と庇の桁行のなす角度は1°30'であるが、この角度は建物153における桁行と縁の柱穴の中点を結ぶ線とのなす角度に等しい。

このように、この建物は南北二面の庇をもつ構造であるが、このことは柱穴の規模にも表れている。柱穴はいずれもほぼ円形をなし、長径も30~40cm前後のものがほとんどだが、深さについては身舎と庇の柱穴で50cm程度もの差がみられる。この差がきわめて大きいために、庇ではなくて、縁ではないかという考え方もありうるが、幅が160cmと、他の縁の類例(建物138・153)にくらべて広く、身舎の梁間の柱間ともあまり差がないことから、庇と考えている。この庇の柱穴の深さも、建物152や154の柱穴などよりは深い。なお、身舎の梁間の中央柱穴の深さも庇の柱穴とほぼ同規模である。柱穴の埋土はほとんどが灰白色粘土斑灰色粘性砂質土であり、一部に灰色粘性砂質土のみがある。身舎の柱穴4と5では柱根の残存がみられ、その樹種は鑑定の結果、柱穴4がヒノキ属の一種、柱穴5がマツ属の一種と判明した。ともに針葉樹ではあるが、1棟の建物の柱材が複数種類みられることは注意される。前述の建物138でも複数種類の柱



第222図 建物157 (1/80)

材が知られるが、身舎の柱に限っては不明である。柱根の残存部分の直径は10cmと細いが、柱穴8で認められた柱のめりこみ痕の直径も14cmにすぎず、柱穴1や7の底径から考えても柱の直径は15cm前後であったと推定される。

南面底の桁行は、みかけ上6間あるとしたが、この柱穴列をよく観察すると、身舎の桁行柱穴と対応する柱穴11・13・15では、底面から10cm程度浮いてはいるものの、長径15cm前後の石が検出され、柱穴17も後世の削平で石が取られた可能性があり、これら礎石をもつ柱穴ともたない柱穴に二分されることが指摘される。また礎石をもたない柱穴は、その西隣の礎石をもつ柱穴よりは深くなっている。このような状態から推察すると、柱穴12・14・16は東柱であって、すくなくとも、南面底部分については床が貼られていたものとみられる。なお、柱穴22と23については、中軸線を挟んで対応するような位置関係にあったため、この建物に伴う何かの施設の痕跡かと考えたが、南面底部分が床貼りであれば、その可能性は少ない。

建物の棟の方向はE-11° 30' - Sを測るが、これは当遺跡で最大の掘立柱建物である建物138の棟の方向と近似し、北面底部分が重複している建物156とは直交する。

遺物は17以外のすべての柱穴から出土しているが、柱穴1～4・6～8・16・19・20では多く含まれていた。それらの遺物の年代は鎌倉時代と考えられる。

この建物の3m南には、建物の棟方向と平行する溝が2条存在している（溝120・121）。この2条の溝は建物157の中軸線に対してほぼ対称に位置していて、建物の中央正面で2m程度離れている。このような状況から判断すれば、これらの溝は建物157を含む屋敷地の南限を画する施設と考えられ、溝の離れている部分は建物157の玄関に通じる出入口と考えられる。建物157は規模の上からも当遺跡第三位を占めるが、さらに、前述のような南限施設を備えて、一定の屋敷地内に位置していることから、当集落における有力者の居宅として存在していたものと考えられる。

（岡本）

建物158（第223図、図版78～80）

中心が16Qあたりに位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の構造で、規模は梁間が332cm、桁行全長514cmを測り、床面積は17.1m²となる。桁行の柱間は257cm等間である。柱穴は円形だが、大きさには規格性がなく、柱穴1の長径22cmから柱穴3の長径48cmまで幅がある。もっとも柱穴2・4～6は長径32～38cm程度で揃っている。柱穴の深さはいずれもほぼ同じである。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で、1と6では灰白色微砂のブロックが含まれていた。柱痕跡は認められなかったが、柱穴4では柱のめりこみがみられ、その直径は16cmを測る。棟の方向はE-14° - Sで、隣接する建物160の棟方向と同じである。すべての柱穴から遺物が出土しているが、柱穴3には多くの遺物が含まれていて、その年代は鎌倉時代と考えられる。この建物は建物157をはじめ153・156・159と重複していて、建物157の敷地内にすっぽりと

入ってしまっている。

(岡本)

建物159 (第224図、図版78~80)

16P区と16Q区の境界付近に位置する南北棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の構造だが、西側の桁行では中央の柱穴を検出できなかつた。規模は、梁間が365cm、桁行は200cm等間で、全長が400cm、床面積は14.6m²を測る。柱穴は円形で、長径20~22cm程度

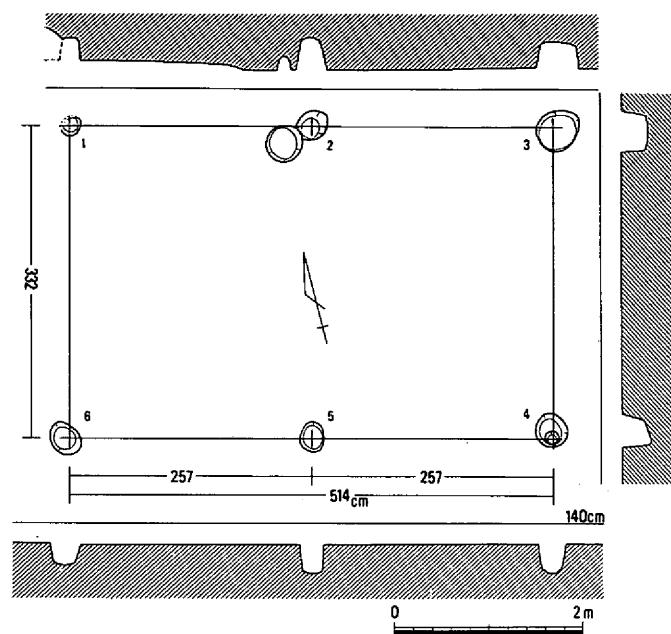
と小さいが、柱穴2のみ長径32cmとやや大きい。柱穴の深さをみると、東側桁行の中央柱穴の浅さが目につく。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で、黄色や灰白色の微砂のブロックを含んでいる。柱穴1では柱根の残存がみられたが、その樹種はモミ属の一種と同定された。建物の棟の方向はN-12° 30'-Eを測るが、こ

の方向は、重複している建物157や、北側に隣接する建物156の棟の方向とほぼ直交ないしは平行する。遺物が柱穴1・3・5から少量出土しているが、それらの年代は鎌倉時代後半から室町時代にかけてではないかとみられる。

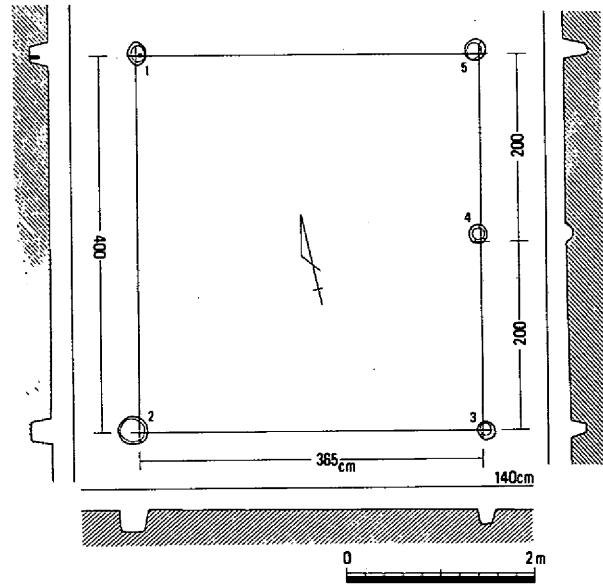
(岡本)

建物160 (第225図、図版78~80)

16P区から16Q区にかけて所在する東西棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の構造



第223図 建物158 (1/80)



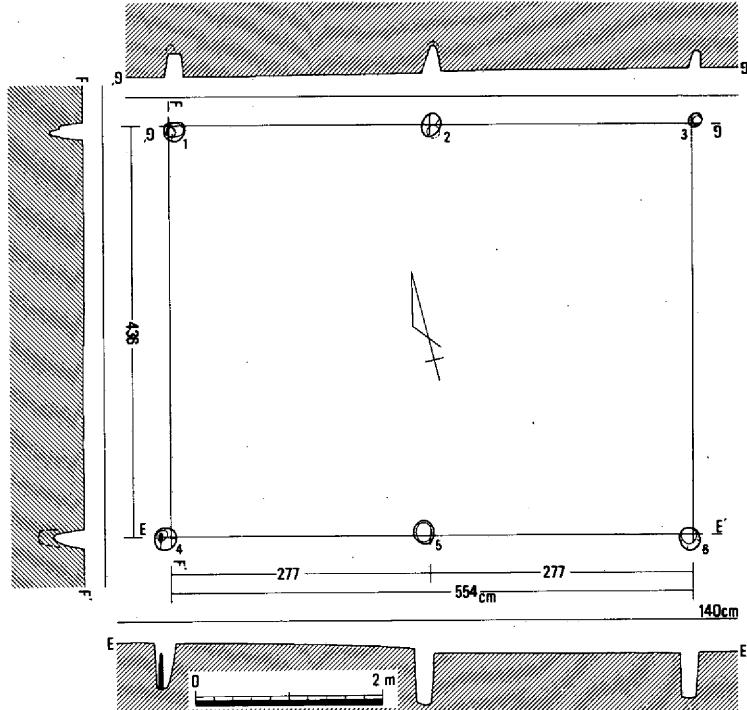
第224図 建物159 (1/80)

で、柱間は梁間436cm、桁行は277cm等間で、全長554cmを測る。床面積は約24.2m²である。建物規模のわりには柱穴は小さく、もっとも大きい柱穴5でも長径26cm、柱穴3は長径16cmにすぎない。柱穴の深さは桁行の北辺と南辺で差がみられ、これがこの建物の特徴の一つとなっている。北辺の柱穴の深さは20～36cmにすぎないが、南辺は44～60cmとかなり深い。このような傾向は建物151にも

認められている。

いずれの柱穴にも柱痕跡はなかったが、柱穴1では柱のめりこみがみられ、柱穴4では柱根が残存していた。この柱根は樹種同定によりクスノキであることが判明した。柱穴の埋土はどれも灰色粘性砂質土である。棟の方向はE—14°—Sを測る。

柱穴1以外のすべ

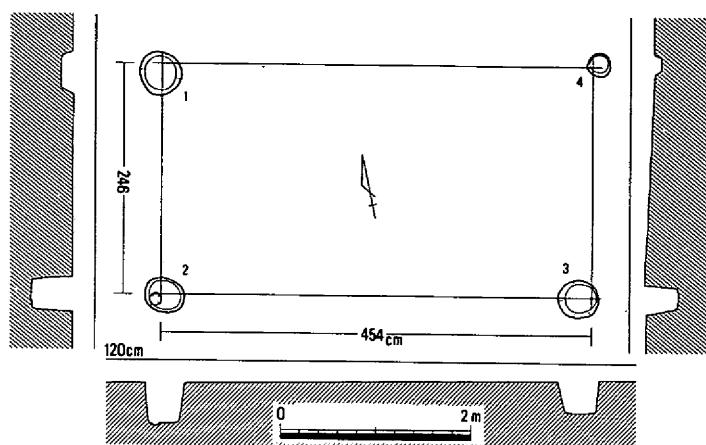


第225図 建物160 (1/80)

ての柱穴で遺物の出土をみたが、柱穴2・4～6からは多量に出土し、その年代は鎌倉時代である。この建物の付近は建物の密集地区で、建物157・159と重複している。(岡本)

建物161 (第226図、図版90)

17Q区の東半に位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行1間、梁間1間の構造であるが、梁間にくらべて桁行がきわめて長く、当遺跡内で検出された建物の中では特異である。梁間246cm、桁行454cm、床面積は11.2m²の規模をもつ。柱穴の状況をみると、柱穴1～3が長径44～48cmとやや大形であるのに対して、柱穴4は長径28cmと小さく、また、北辺の柱穴が南辺の柱穴より16～32cmも浅くなっている。このため、建物として認めることにいくらかの問題はあるが、この建物の周辺にはあまり柱穴の集中がみられず、対応関係がかなり視覚的に容易であることや、4基の柱穴とともに直径16～20cmの柱痕跡を残していること、また、建物160のように北辺と南辺の柱穴列で深さのかなり違う例があることから、ここでは建物として確認した。柱穴の埋



第226図 建物161 (1/80)・出土遺物

土は灰白色微砂のブロックを含む灰色粘性砂質土である。棟の方向は E-12°-S を測り、近接する建物としては、建物 156や建物157・159の棟の方向がこれに近

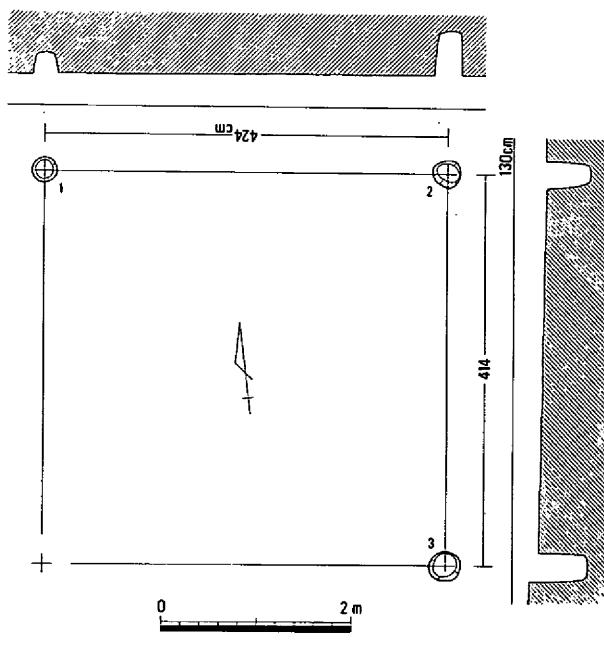
い。柱穴 1 ~ 3 から遺物が出土しているが、柱穴 2 ではとくに多かった。出土した遺物の年代は鎌倉時代である。

(岡本)

建物162 (第227図、図版90)

17Q区と18Q区の境界付近に位置する。桁行1間、梁間1間の掘立柱建物を想定しているが、南西隅の柱穴は検出されず、また、北西隅の柱穴1も柱穴2・3とくらべれば25cmも浅いため、

疑問もある。柱穴2と3は規模がよく類似しているため、対となるものとみてまちがいなく、この2基の柱穴で塀状の遺構となる可能性も考えられる。梁間414cm、桁行424cmと床面はほぼ正方形に近く、面積は 17.6m^2 を測る。柱穴は長径28~34cmあり、埋土は灰色粘性砂質土である。棟の方向は E-6° 30'-S で、隣接する建物163や建物155・塀108



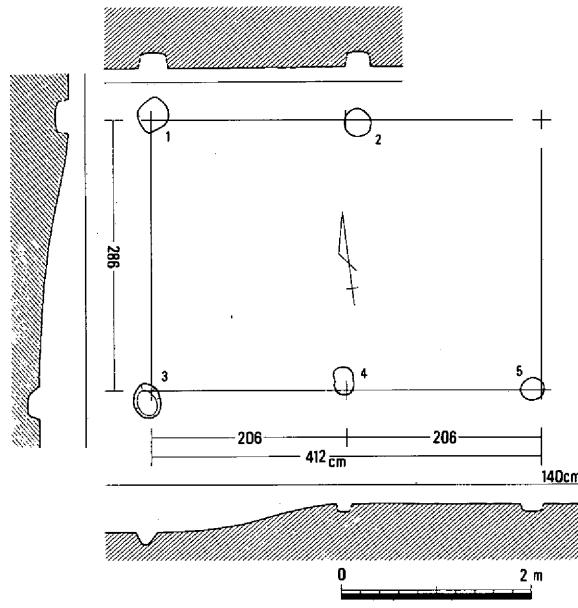
第227図 建物162 (1/80)・出土遺物

などとほぼ平行する。遺物は各柱穴から少量ずつ出土しているが、その年代は鎌倉時代である。

(岡本)

建物163（第228図）

18Q区の南半で検出した東西棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の構造と考えられるが、北東隅の柱穴は検出されず、また南西隅の柱穴3も他の柱穴にくらべて35cm程度も深いため、建物と想定することにいくらか問題はある。柱穴も規格上の位置からはいくらかずれているが、検出地付近は柱穴が少なかったため、調査中に建物として認識できた。建物の規模は、梁間が286cm、桁行は206cm等間で、全長が412cmあり、



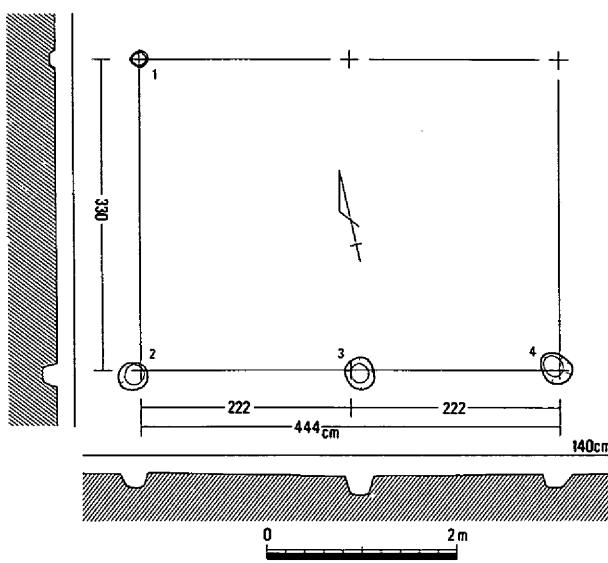
第228図 建物163(1/80)・出土遺物

床面積は11.8m²を測る。柱穴はほぼ円形で、長径26～38cm、埋土は暗灰褐色土である。棟の方向はE-7°-Sで、隣接する建物162や建物153などとほぼ平行する。遺物は柱穴3を除く各柱穴から出土し、柱穴2からはかなりの量が出土している。それらの多くは小片であるが、鎌倉時代前半のものと考えられるものがみられる。

(岡本)

建物164（第229図）

18Q区と19Q区にまたがる東西棟の掘立柱建物を想定しているが、建物とすることにはいくらかの疑問点がある。南辺の柱穴列は規模も柱間もほぼ等しく、一連のものとすることに問題はないが、これに対応する北辺の柱穴列がしっかりしない。柱穴1は南辺の柱穴にくらべると規模が小さく、また浅い。北辺の東端の柱穴は存在したとしてもすでに工事で削平されているが、中央の柱穴はいくら浅いとはいえ、検出されるはずだが、認められなかった。このため南辺の柱穴列だけで塙となる可能性もある。ここでは桁行2間、梁間1間の建物としておく。梁間は330cm、桁行は222cm等間で、全長444cm、床面積は14.6m²となる。南辺の柱穴の長径は32～38cm、柱穴1は長径18cmである。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で、柱痕跡は確認できなかった。棟の方向はE-13°-Sを測る。この建物は井戸140と重複しているが、ことによると、南辺の柱



第229図 建物164 (1/80)・出土遺物

穴列がこの井戸140に伴う塙であるかもしれない。遺物には土器と錢貨がある。土器片は柱穴1・3・4から少量出土しているが、その時代については、中世であることは確実だが、鎌倉時代らしいとしか言えない。錢貨が2枚柱穴3から出土し、人為的な埋納の可能性が強い。錢貨はいずれも北宋錢で、「皇宋



通寶」(初鑄1038年)と「聖宋元寶」(初鑄1101年)である。(岡本)

建物165 (第230・231図、図版81)

1985年度調査区の18T区で検出した2間×1間の東西棟の建物である。しかし、建物としては桁行の柱間が異なり、また梁間の柱間が長すぎるなどの問題もある。方位はほぼ真北である。

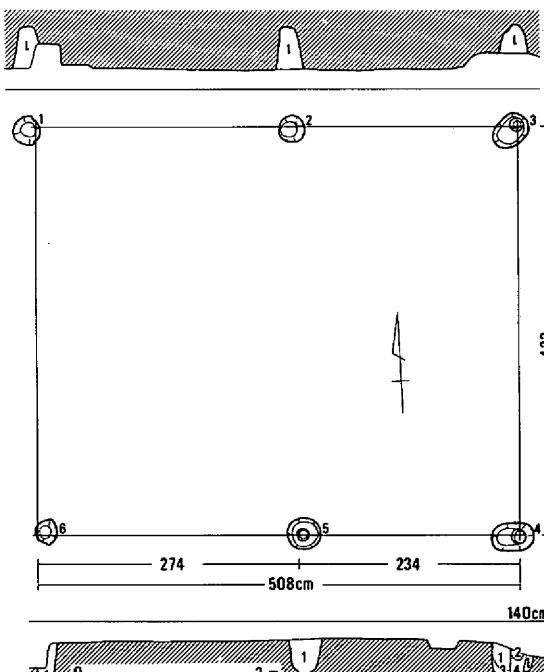
柱の掘り方は径30~40cmの円形で、柱穴4には柱痕跡が認められる。

遺物は柱穴2から土器の細片と、柱穴3から砥石が出土した。

時期は土器の細片および検出面などから中世と考えられる。(平井勝)

建物166 (第232図、図版81)

1983年度調査区の19S区で検出した、2間×1間の身舎の北面に庇が付く東棟の建物である。方位は重なり合う



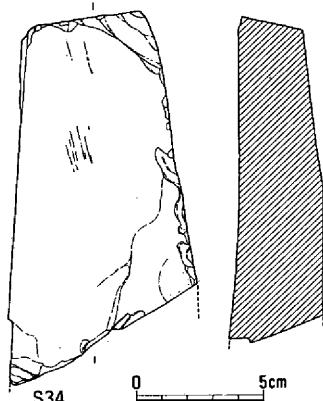
第230図 建物165 (1/80)

建物167とは異なり、真北となる。

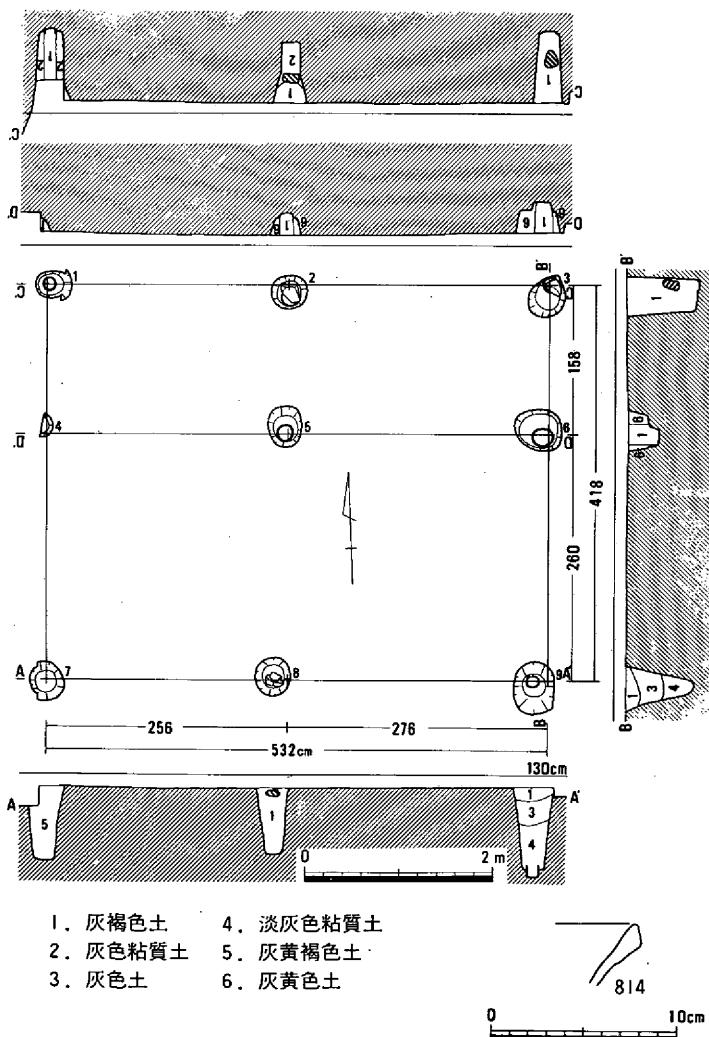
柱の掘り方は径40cm内外の円形で、深さは身舎の北辺柱列が30cm内外と浅いものの、その他は80cm内外である。柱穴2、柱穴3、柱穴8には石が置かれている。また柱穴9の底部には柱の皮が残存しており、その径は12cmを測る。

遺物は柱穴7などから土器片がわずかに出土した。図示した土器は、東播系の須恵器こね鉢である。

時期は、出土した土器の細片から13～15世紀と考えら



第231図 建物165出土遺物



第232図 建物166 (1/80)・出土遺物

れる。(平井勝)

建物167 (第233図、図版81)

1983年度調査区の19S区で検出した1間×1間の建物である。方位は真北となる大形建物と異なり少し東に振る。

柱の掘り方は柱穴1が繭状を呈する以外は円形で、径20cm内外を測る。柱の掘り方の底部には径10cm内外の小穴が認められ、上屋の重みで沈んだものか、あるいは打ち込んだものかは判断し難いが、柱穴2の状況では柱痕跡が垂直に小穴底部まで下がっていることから、当初からの掘り方

第3章 第2節 遺構・遺物

とは異なるものであろう。

遺物は柱穴2と柱穴3から土器片がわずかに出土した。

時期はわずかな土器から推定すれば、14～15世紀代と考えられる。

(平井勝)

建物168（第234図）

1983年度調査区の20S区で検出

した1間×1間の建物であるが、
柱の並びが悪いので建物とするにはやや躊躇するものである。建物
の方針は真北から少し東に振って
いる。溝127との関係は、北東角の

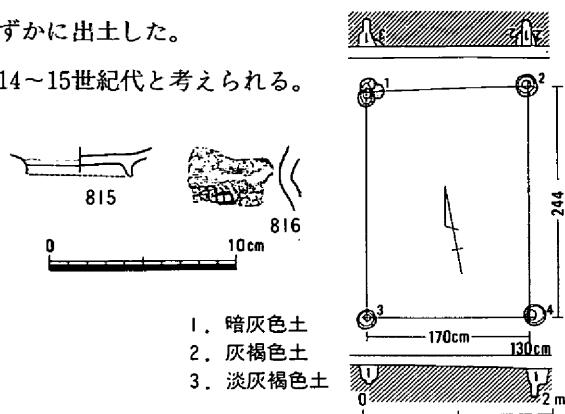
柱の掘り方との切り合いから、溝の方
が新しいと考えられた。

柱の掘り方は25cm内外の円形で、柱
痕跡は認められなかった。

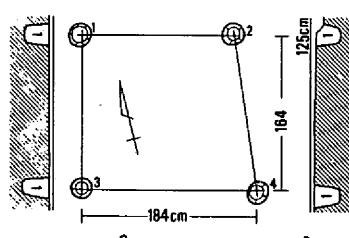
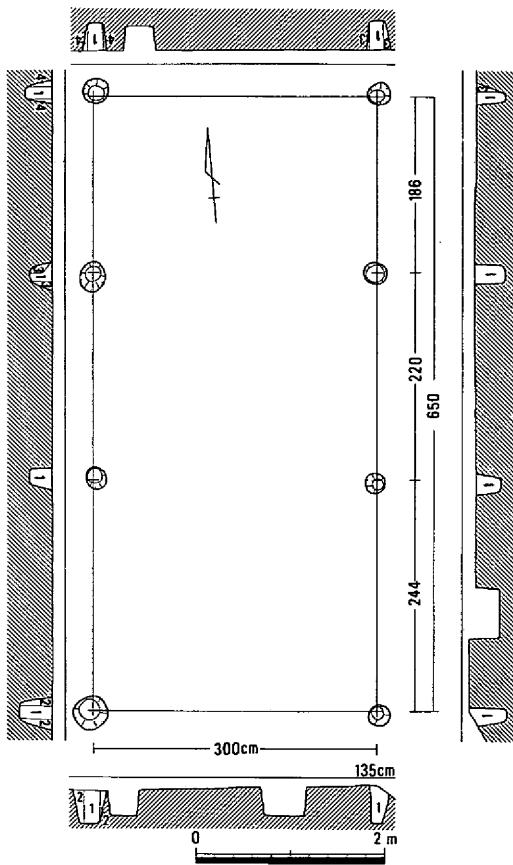
遺物は全く出土しなかった。時期に
ついては検出面や柱の掘り方の埋土か
ら中世と推定される。 (平井勝)

建物169（第235図）

1983年度調査区の20・21T区で検出
した3間×1間の南北棟建物である。
溝127との関係は明確でないが、北東角
の柱の掘り方のわずかな切り合いから、



第233図 建物167 (1/80)・出土遺物



1. 灰褐色土

第234図 建物168 (1/80)

1. 灰褐色土 2. 暗灰褐色土 3. 灰褐色土 4. 灰色土

第235図 建物169 (1/80)

溝127が新しいと判断された。

柱の掘り方は径20～30cmの円形で、柱痕跡よりやや大きめに掘られるが、下端は柱痕跡と同じである。柱痕跡は径15～20cmを測る。

遺物は全く認められなかった。したがって、時期については明確にしがたいが、検出面および柱の掘り方の埋土から中世と推定される。

(平井勝)

建物170（第236図）

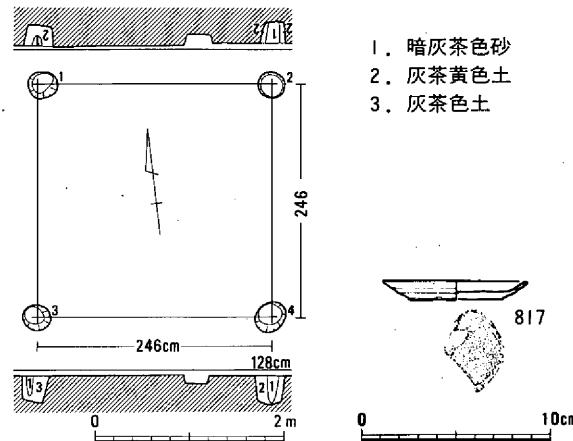
1983年度調査区の19U区で検出した1間×1間の建物である。方位は建物169などと同様で、ほぼ真北になる。

柱の掘り方は径30cm内外の円形で、いずれも柱痕跡をとどめ、その径は15cm内外を測る。

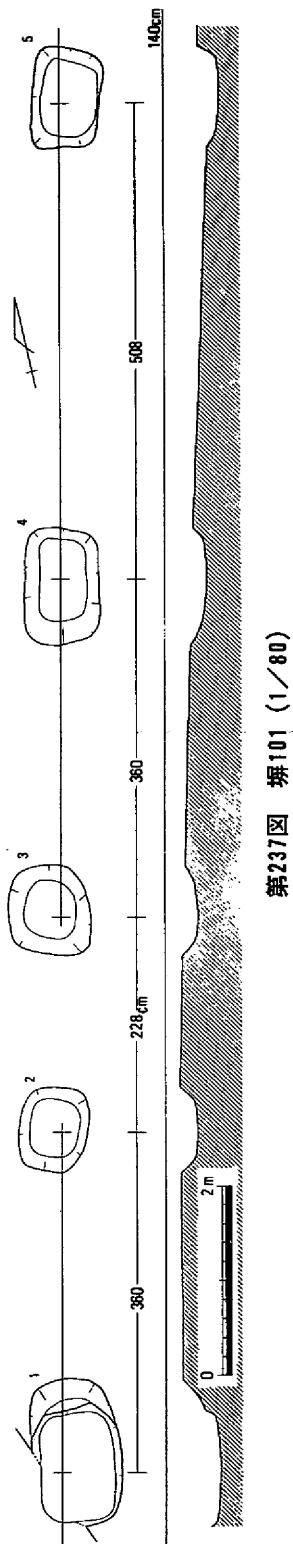
遺物は、柱穴1から土師器小皿と、柱穴3から土師器の細片がわずかに出土した。

時期は検出面および柱の掘り方の埋土から中世であることは間違いないが、わずかな出土遺物から限定するとすれば鎌倉時代と考えられる。

(平井勝)



第236図 建物170(1/80)・出土遺物

**b 塚****塚101 (第237図、図版71)**

10K区から10L区そして11J区へと続く掘立柱の塚である。塚は南北方向に走り、N-12°-Eを測る。5個の柱穴を検出したが、それより北については後世の削平があり、また南は調査区外になるため、さらに長く延びていた可能性が強い。柱穴はいずれも方形の掘り方をもち、一般の建物の柱穴にくらべるとはあるかに規模が大きい。柱穴1・4・5は長方形を呈し、それぞれの長さは154cm、124cm、108cmである。柱穴2と3は方形に近く、前の3個よりはひとまわり小さくて、長さは90cmと94cmを測る。なお、柱穴の幅は72cm~96cmである。柱痕跡や柱のめりこみは確認できなかった。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で地山の碎粒である黄色ないしは灰白色の微砂を点々と包含している。柱間をみると、柱穴2と3の間がもっとも短くて228cm、その両側にある柱穴1と2の間、3と4の間がいずれも360cm、さらに隣の柱穴4と5の間は508cmというように、柱間は一定していない。しかし、もっとも短い柱間の両端の柱穴2・3がひとまわり小さい方形のものであり、また、それに隣接する柱間が等距離であることは、柱穴2と3が対として位置していることを意識させる。柱穴の深さをみても、柱穴2・3は同規模で、他の3個よりはかなり浅い。このことから、柱穴2と3の間は開かれていて、出入口になっていたのではないかと考えられる。各柱穴から遺物が出土しているが、柱穴1・3・4では多量の遺物があった。遺物の年代のうちもっとも新しいものは室町時代と考えられる。

(岡本)

塚102 (第238図)

11J区で検出された一对の柱穴である。この地区は最近の削平を受けていたため、この一对の柱穴のみが残存していたにすぎず、その2個が長径24cmと16cmとほぼ同大で、深さも等しいため、対応する可能性が強く感じられた。柱間は366cmを測る。柱穴の埋土はともに灰色粘性砂質土である。方向はE-

6° - Sを測り、南に近接する建物126とは1°の差がある。遺物は両柱穴から出土しているが、小片のため、中世のものとしか判断できない。

わずか1間で塙と言えるかどうかいささか問題であり、当遺跡では、建物の北辺と南辺

で柱穴に深さに差のある例がみられるため、あるいは1間×1間の建物の南辺である可能性もないことはない。(岡本)

塙102(第238図、図版74)

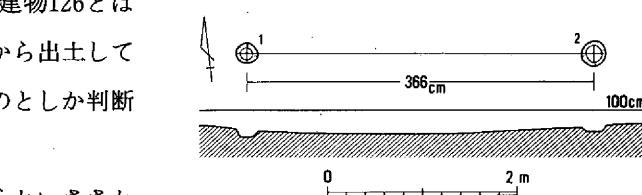
12N区と12O区にまたがって検出された南北方向の柱穴列である。わずか柱穴3個、2間にしかすぎないが、各柱穴ともに礎石を入れ

れ、ほぼ等距離に位置していることから、塙のような施設ではないかと考えている。全長592cmで、柱穴2は中点よりわずかに南に位置する。柱穴はほぼ円形で、長径28~34cmを測る。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で、黄色微砂や、灰白色粘性微砂のブロックを含んでいる。柱穴の深さをみると、1と2は同じだが、3は16cmも浅い。塙の方向はN-10°-Eである。なお、この塙は建物137・138と重複している。遺物は各柱穴から少量ずつ出土しているが、それらの年代は平安時代の末期から鎌倉時代にかけてではないかと考えられる。

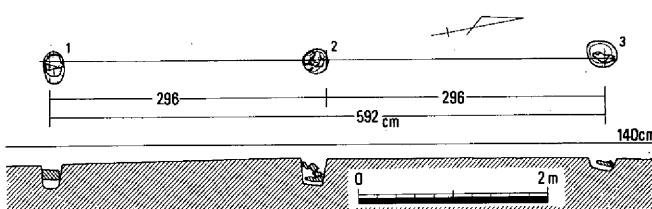
(岡本)

塙103(第239図、図版74)

15N区の南西隅で検出した柱穴列である。192cm等間で2間あり、さらにその西へ260cmの柱間で1個柱穴がみつかった。



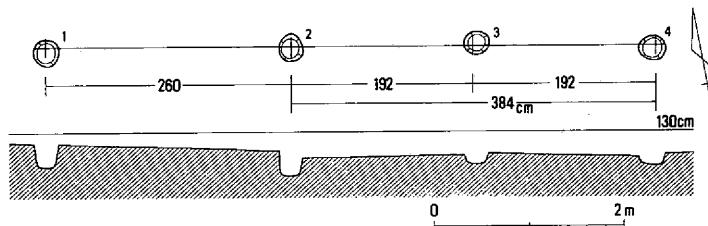
第238図 塙102 (1/80)



第239図 塙103 (1/80)

塙104(第240図)

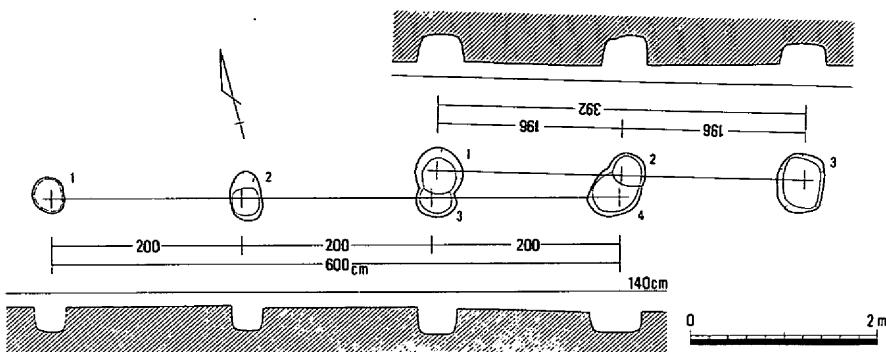
15N区の南西隅で検出した柱穴列である。192cm等間で2間あり、さらにその西へ260cmの柱間で1個柱穴がみつかった。



第240図 塙104 (1/80)

検出地区付近は柱穴

があまりなかったため、柱穴の形状や埋土から判断して、3間の柱穴列である可能性が強い。3間とすれば全長644cmを測ることとなる。柱穴はほぼ円形を呈し、長径は28~30cmで揃っているが、深さはばらつきがある。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で、灰白色微砂のブロックを含むものがある。柱穴列の方向はE-10°30'-Sであるが、これは隣接する建物139・140の棟の方



第241図 塙105(上)・106(下)(1/80)

向とほぼ平行、あるいは直交する。遺物は2を除く各柱穴から出土しているが、柱穴4で多かった。それらの遺物の年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

塙105(第241・242図、図版76)

170区で検出された2間の柱穴列である。長径60cm程度のやや大きな柱穴が、柱間196cm等間で3個直線上に並び、ひとつのまとまりを示している。おそらく塙状の遺構であろう。列の方向はE-16°-Sで、近接する建物の棟の方向とはかなり差があるが、50mほど離れて位置する建物128や建物129などの一群の建物の棟の方向とは近い。柱穴の埋土は暗灰褐色土である。

各柱穴から遺物が出土しているが、多くは小片のため中世としか年代を確定できないが、一部に鎌倉時代のものがみられる。

(岡本)

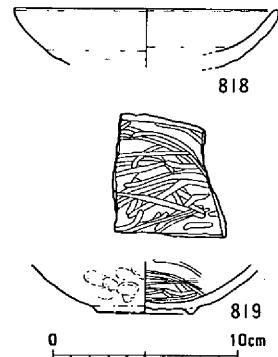
塙106(第241図、図版76)

170区に位置し、塙105と重複している。柱穴4個からなり、柱間は200cm等間で、全長600cmを測る。柱穴は楕円形に近く、長径は40~52cm、埋土は暗灰褐色土である。柱穴3・4は塙105の柱穴と重複しているが、切り合い関係を観察すると、塙106が塙105に先行して立てられている。塙106の方向はE-14°30'-Sであるが、当遺跡で、この方向とほぼ平行ないしは直交する棟の方向をもつ建物は6棟が知られる。各柱穴から遺物が出土しているが、少量ずつ小片のため、年代については中世としか確認できない。

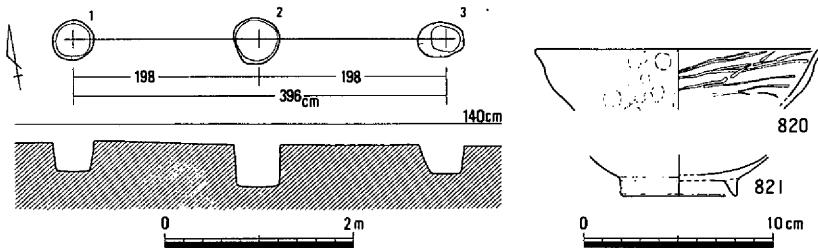
(岡本)

塙107(第243図、図版77)

170区から180区にかけて位置する掘立柱列である。長径42~44cmのやや大形の柱穴が3個等間隔で並んでいることから、一連のものとして考えている。目隠し塙のような施設であろう。全長396cmで、柱間は等間のため198cmとなる。中央の柱穴がもっとも大きくて深い。柱穴の埋



第242図 塙105出土遺物

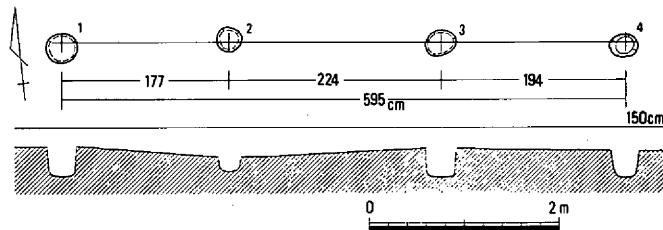


第243図 墳107 (1/80)・出土遺物

土は黄色微砂のブロックを含む暗灰褐色土である。柱痕跡は認められなかった。柱列の方向はE-10°-Sを測るが、これに近い棟方向をもつ隣接建物としては、E-9°-Sの建物147がある。なお、この塚は建物148と重複している。3基の柱穴とも遺物を包含していたが、1と2で多くの出土をみた。それらの遺物の年代は鎌倉時代と考えられる。
(岡本)

塚108 (第244図)

13P区から14P区にまたがる柱穴列である。4個の柱穴からなり、全長は595cmを測る。柱穴は長径28~34cmとほぼ同規模であるが、柱穴2の径が



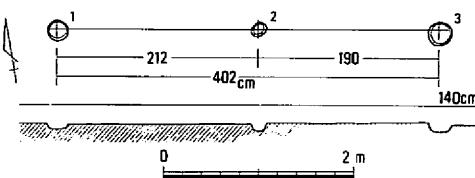
第244図 墳108 (1/80)

もっとも小さくて、また底も浅い。柱間をみると西から177cm、224cm、194cm、とまちまちで規格性に欠けるが、検出地区周辺では柱穴が少なかったため、容易に認識できた。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で、黄色微砂や灰白色微砂のブロックを含んでいた。列の方向はE-6°30'-Sを測るが、この方向と同じか、あるいは近似した棟の方向をもつ建物として、建物126・137・151・153・155・162・163など多くがある。各柱穴から若干の遺物が出土しているが、その中に室町時代のものと考えられるものがみられる。

(岡本)

塚109 (第245図)

15Q区の北半に位置する3個からなる柱穴列である。両端の柱穴は長径22cmと26cmを測り、中央の柱穴は長径17cmとやや小ぶりである。柱間は212cmと190cmで、等間ではない。列の方向はE-10°-Sを測るが、



第245図 墳109 (1/80)

この方向は、建物154の棟方向であるE-8°30'-Sとも、建物153の縁の柱穴列の方向である

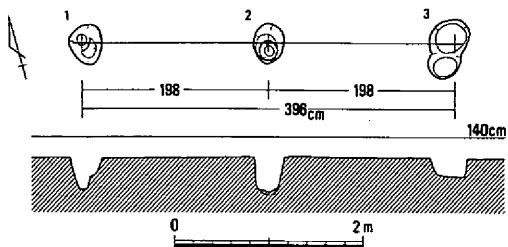
E-9°-Sともわずかに異なっているが、立地や柱穴から出土した遺物の年代から考えると、建物154に伴う可能性がある。ただ、この塙109と建物154との距離は約0.5mにすぎず、あるいは塙のみで独立していることもじゅうぶんにありうる。その場合には、建物157との関係もまた考えられる。遺物は柱穴3からのみ出土しているが、その年代は鎌倉時代のようである。

(岡本)

塙110（第246図）

16P区で検出された。長径44~48cmのほぼ同規模の柱穴が3個、等間隔で並んでいたが、これと対になる柱穴列は確認されず、掘立柱列と考えられる。柱間は198cmで、全長は396cmにすぎず、柵というよりは目隠し塙のようなもの

の可能性が高い。柱穴1と2では柱のめりこみがみられ、その直径は20cmを測る。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で、柱穴3では灰白色微砂のブロックがみられた。柱痕跡はなかったが、柱穴3には長さ15cm程の石が入っていた。塙の方向はE-14°30'-Sであるが、これは隣接する建物159と建物161のE-14°-Sにごく近い。なお、この塙は建物157とは重複し、建物158ともごく接近しているため、これらの建物とこの塙との共存はありえない。柱穴1と2からは多量の遺物の出土をみたが、柱穴3は遺物を含んでいなかった。柱穴出土遺物の年代は鎌倉時代である。



第246図 塙110 (1/80)

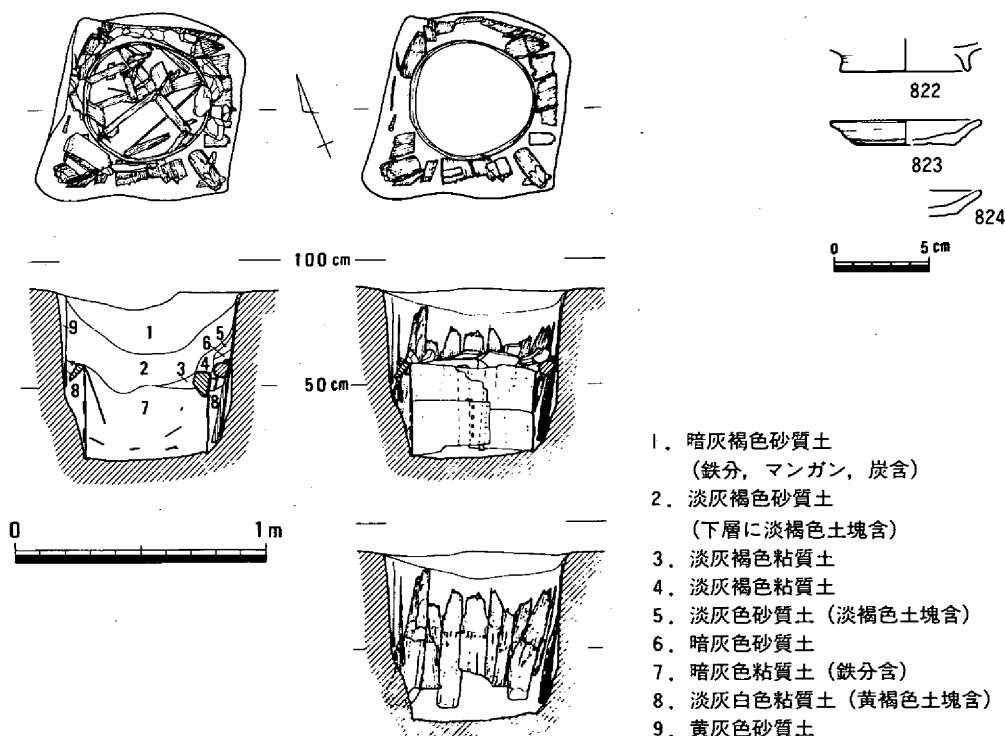
(岡本)

c 井 戸

井戸120 (第247図、図版82・83)

遺構の上部を約50cm以上削平された状態で、11I区に検出された。平面の掘り方は一辺70cm前後の不整方形、底近くでは円形を呈し、深さ65cm（海拔高20cm）を測る。底に接して、径約50cm・高さ37cmの曲物が置かれ、さらに、掘り方の四隅にはそれぞれ径6～10cmの丸太材（シロダモ属・マツ属）を立て、それらを繋ぐように、掘り方に接して一辺4～5枚の板材（厚さ1～3cm、スギ・ヒノキ）を貼りつけて補強している。板材の下端は、井戸の底までは達していない。板材と曲物との隙間には白っぽい粘土または粘質土が裹込めされ、さらに曲物の上縁部のレベルで3cm～握拳大の角礫が埋め込まれていた。その他の遺物としては、曲物の底に接して植物質・モモの種(完形7、半欠2)、さらに、落ち込んだ埋土中に2～5mm厚の板材片(約20片)・土器片(約50片)なども出土している。

曲物は調査時にかろうじて原形を保っていたが、保存状態は不良で取り上げ時に破損した。調査時の観察では、幅20cm前後・長さ約170cm・厚さ3mmのヒノキ板を折り曲げて輪をつくりその端が一部重なる部分をサクラの皮でとじて、ほぼ同じものを上下につなぎ、外周のほぼ等間



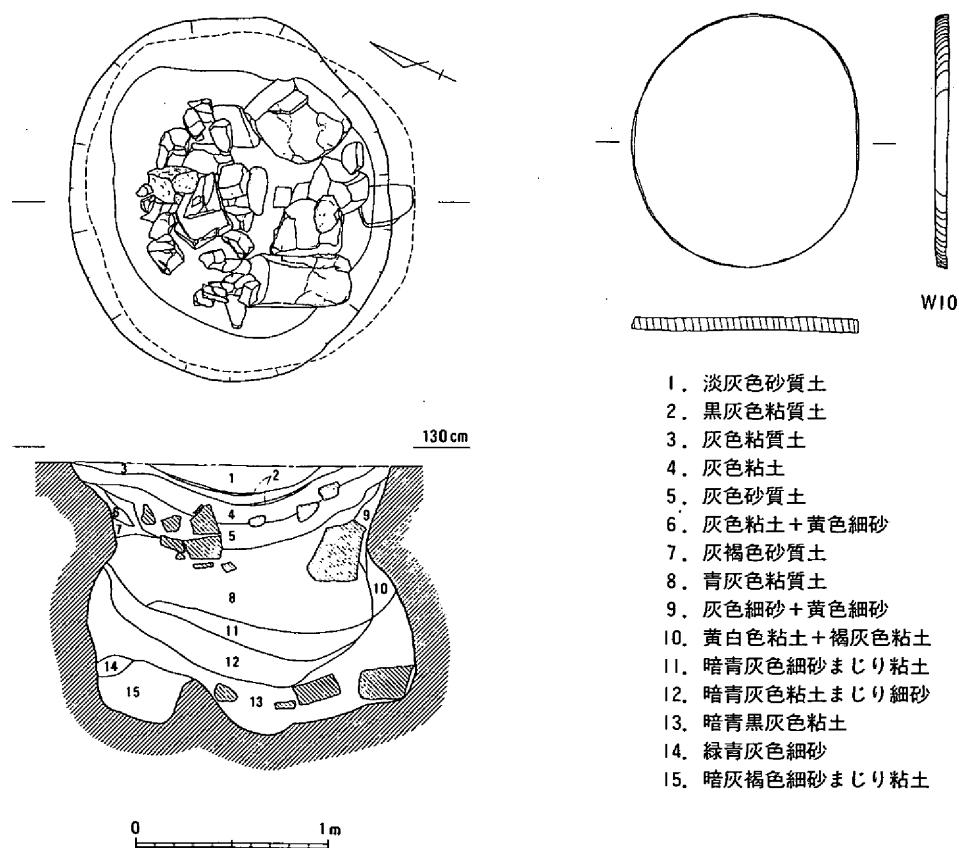
第247図 井戸120 (1/30)・出土遺物

隔の3か所に幅約4cm・長さ35cmの板材を縦方向に貼り付け、さらにその上から幅約4cmの板材を外周に沿って2か所に繞らせて補強してあった。井戸枠を構成する柱と板材の上部は、地下水位の関係でほとんど残存していない。土器のうち図示できるものはごくわずかで、椀・皿(822~824)くらいに限られる。他に奈良時代と思える須恵器片もあるが、椀・皿は赤っぽい胎土や椀の高台の特徴から、平安末~鎌倉初期くらいの時期が想定されるにすぎない。

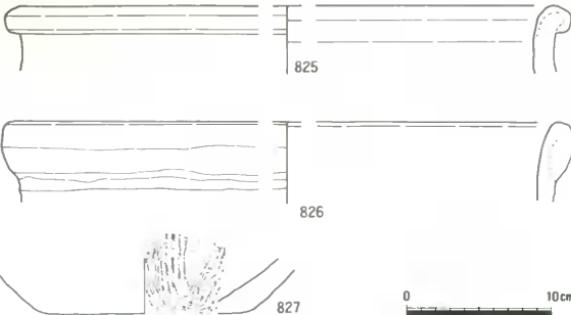
(柳瀬)

井戸121 (第248・249図、図版84・85)

13J区において検出された井戸である。検出面での平面形は約190×170cmの楕円形を呈する。深さは最大で約140cmを測り、底面には凹凸が認められた。断面形は図示したように、約1/3の深さから袋状に拡がっている。また、埋土中には数cmから50cm以上の様々な角礫が各層にあたかも投げ込まれたような状態で出土した。こうした断面の形状や埋土の堆積状態および角礫の出土状態から、この井戸は本来石組みをもつ井戸であったものを、取り壊したものと考えられる。



第248図 井戸121 (1/40)・出土遺物 (1/3)



第249図 井戸121出土遺物

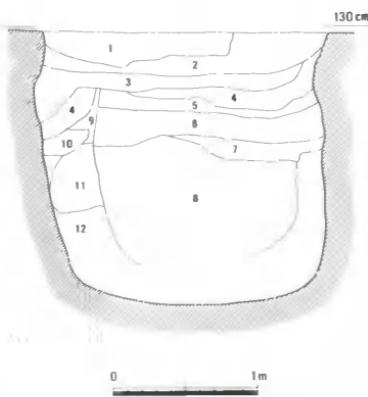
遺物は埋土中から、備前焼（825～827）、亀山焼、土師器椀、鍋、瓦および木製の円板（W10）、木片、種子（マツ）が少量出土した。

これらの遺物から時期は室町時代のものと考えられる。
（平井泰男）

井戸122（第250～254図、図版84）

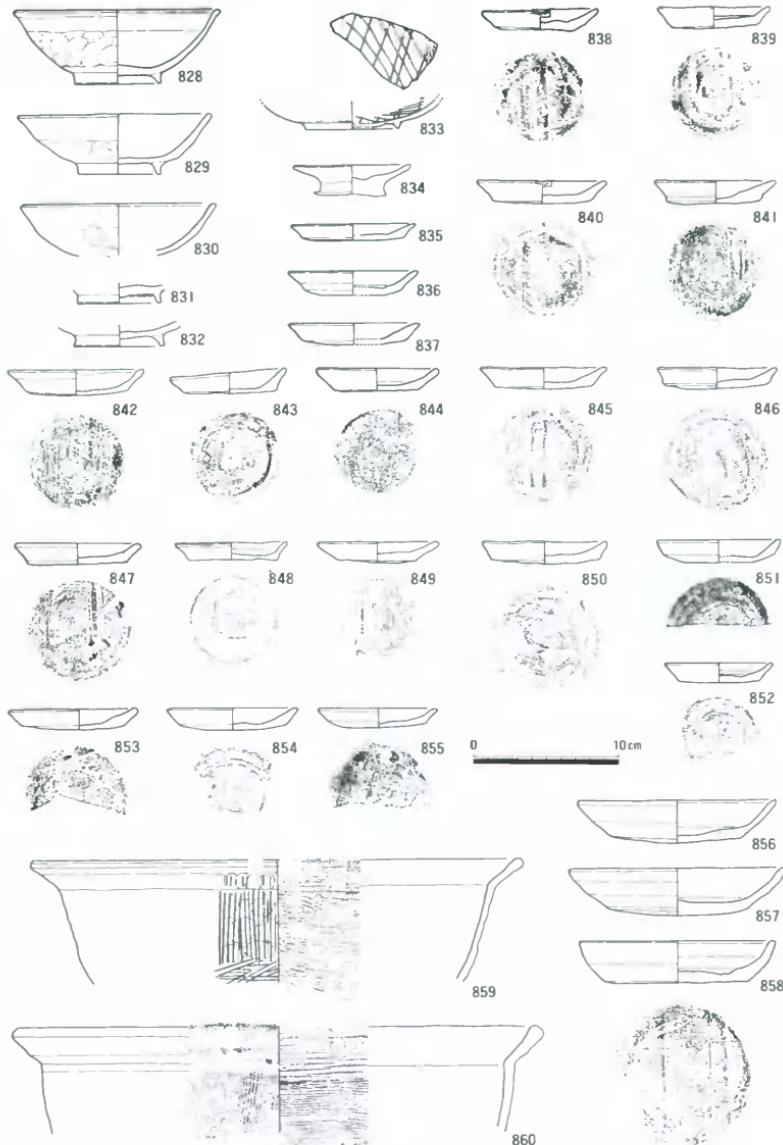
15K区の南端部において検出された井戸である。検出面での平面形は約190×200cmの隅丸方形を呈する。深さは最大で約190cmを測る。この井戸については、図の8層中から打ち込まれた板材が一部認められた。これらの板材は、約70～80cmの方形状を呈すると考えられる。他に径数cmの丸太杭の一部も少量出土している。また、埋土の堆積状況をみると、図示したように大きく1

- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 1. 灰色細砂+灰褐色
粘土+黄褐色粘土 | 7. 暗青灰色細砂まじ
り粘土 |
| 2. 淡褐灰色砂質土 | 8. 暗青灰色粘土 |
| 3. 暗灰色粘土 | 9. 暗灰色粘土 |
| 4. 暗褐灰色粘質土
(Fe多い) | 10. 灰白色粘土 |
| 5. 暗青灰褐色細砂ま
じり粘土 | 11. 暗灰色粘土（灰白
色粘土ブロック
含） |
| 6. 暗灰褐色粘土 | 12. 暗青灰色粘土（青
灰色粗砂混り） |

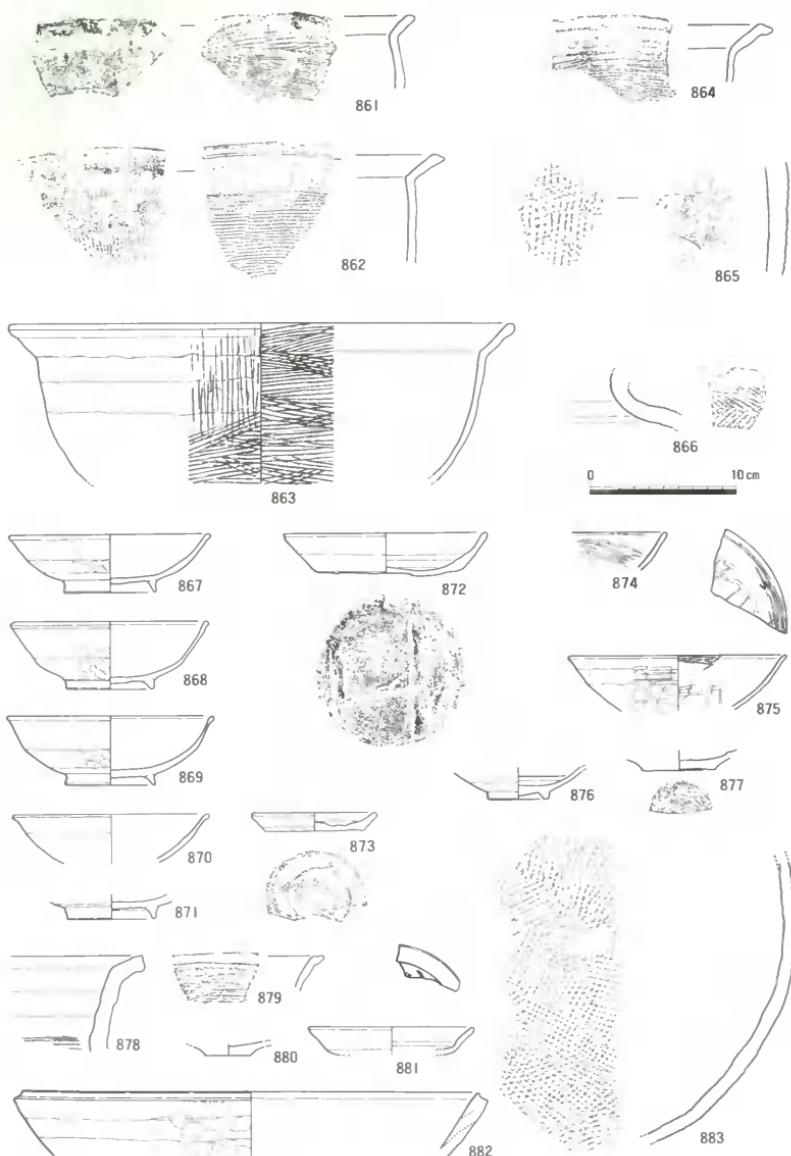


第250図 井戸122 (1/40)

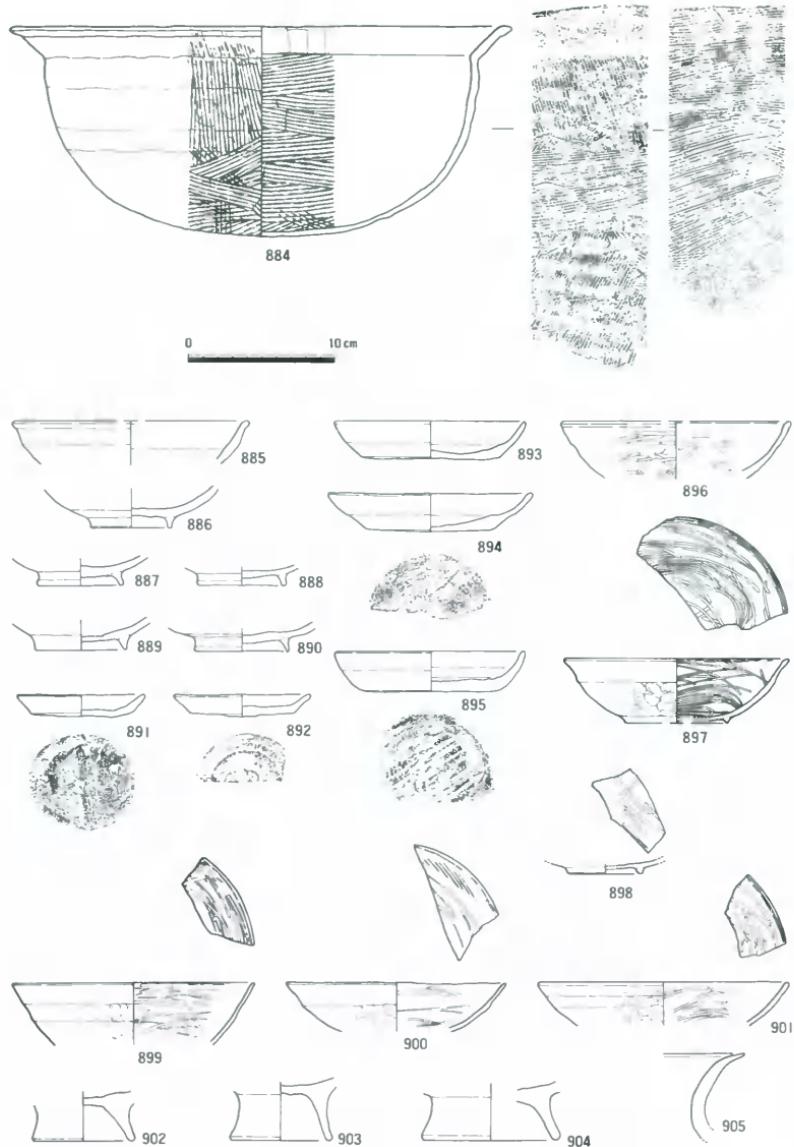
第3章 第2節 遺構・遺物



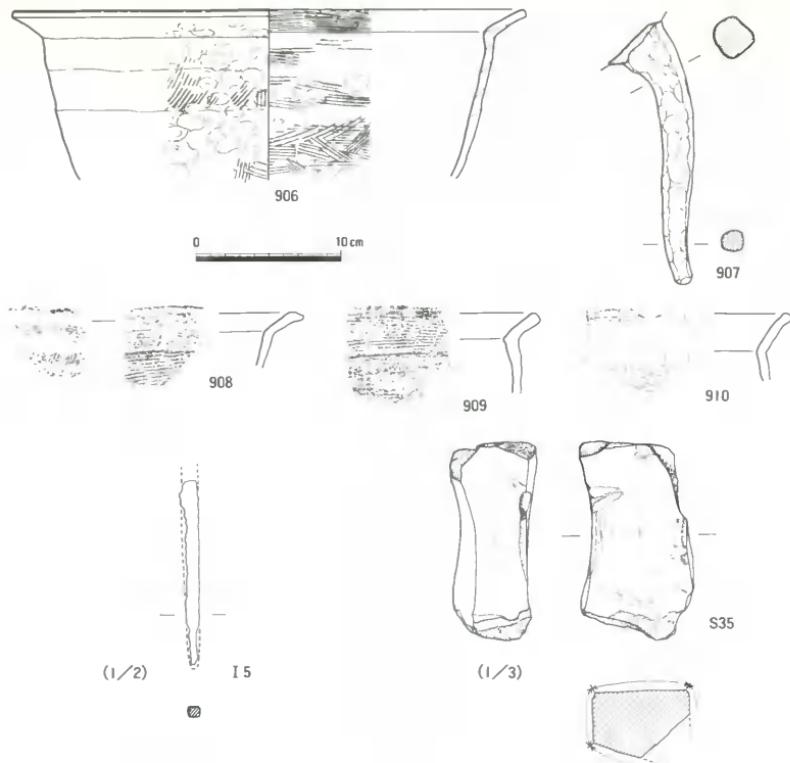
第251図 井戸122出土遺物(1)



第252図 井戸122出土遺物[2]



第253図 井戸122出土遺物[3]



第254図 井戸122出土遺物[4] (1/4・1/2・1/3)

～4層、9～12層、5～8層に区分できる。1～4層については井戸廃棄後の埋土、9～12層については裏込めの埋土、5～8層については井戸枠内の埋土と考えられる。こうしたことから、この井戸は本来、井戸123にみられるような板材を方形に打ち込んだ井戸枠を設けていたのを取り壊したものと考えられる。

出土遺物には、土師器椀、小皿、鍋、杯、カマド、瓦器椀、小皿、備前焼、常滑焼、東播系須恵器、青磁、白磁などの土器、陶器、磁器のほかに、石器（砥石）、鐵器（釘）、種子（モモ）などがある。これらの遺物については断面図の1～4層を上層とし、5～12層を下層として取り上げた。平面図に示した遺物は上層（2層下面）において出土したもので、土師器小皿の完形品が多くみられたのが特徴である。

図示した遺物のうち、828～866は上層、867～884は下層、885～910は上層および下層から出

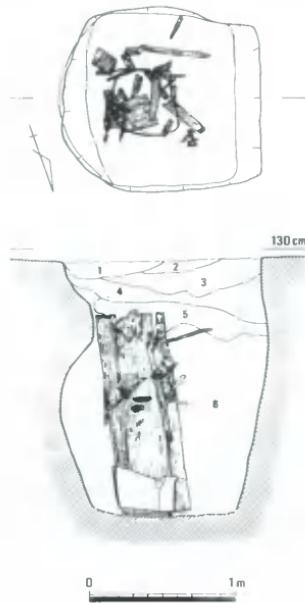
土したものである。これらの遺物から時期は13世紀前半頃と考えられる。(平井泰男)

井戸123 (第255図、図版86)

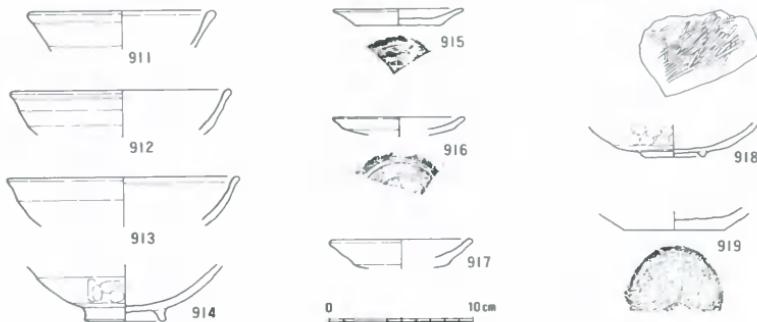
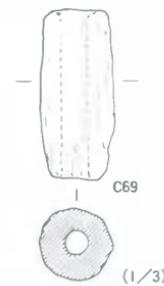
15L区において検出された井戸である。検出面での平面形は約130×130cmの東辺の膨れた方形を呈するが、本来は120×130cmの方形であったものと考えられる。深さは湧水のため底面を確認することができなかったが、曲物の底部まで約180cmを測る。この井戸には、図示した様に中心からやや東寄りに、板材を打ち込んで築かれた井戸枠が一部残存していた。この井戸枠は、推定約50×50cmの方形を呈するものと考えられる。そして、この井戸枠に囲まれた内部に曲物が据えられていた。曲物は、径約70cm、高さ約36cm、厚さ2cmを測る。

出土遺物には、土師器碗、小皿、鍋、瓦器碗、備前焼、白磁および土錘、種子（モモ、オニグルミ？）などがある。時期は13世紀前半頃と考えられる。

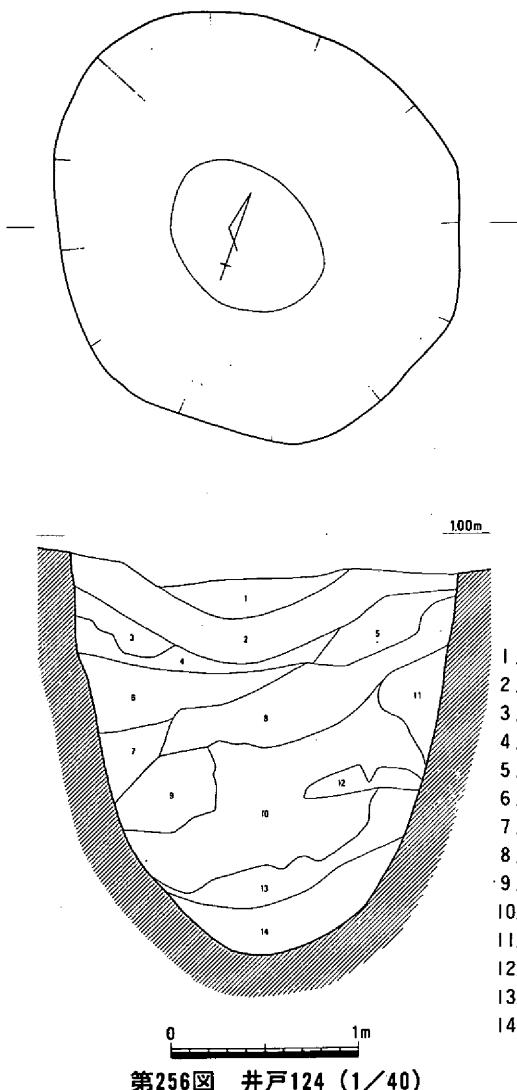
(平井泰男)



- 1. 黒灰色粘質微砂
- 2. 灰色細砂
- 3. 暗褐色粘土と灰色細砂
- 4. 暗褐色粘土
- 5. 暗灰色粘土
- 6. 青黒灰色微砂まじり粘土



第255図 井戸123 (1/40)・出土遺物



井戸124 (第256図、図版

87)

13M区に位置する。掘り方の平面形が円形を呈する井戸で、長径130cm、短径110cmを測る。断面形が、U字を呈するもので、検出面からの深さは2mを測る。底面の海拔高は-120cmである。埋土の状況を見ると、複雑な堆積を見せており、井戸内に構造物の存在した状況は呈していないことからすれば、井側等は完全に抜き取った後に埋められたものと推定される。井戸の時期は、平安時代末～鎌倉時代初頭と考えられる。

(井上)

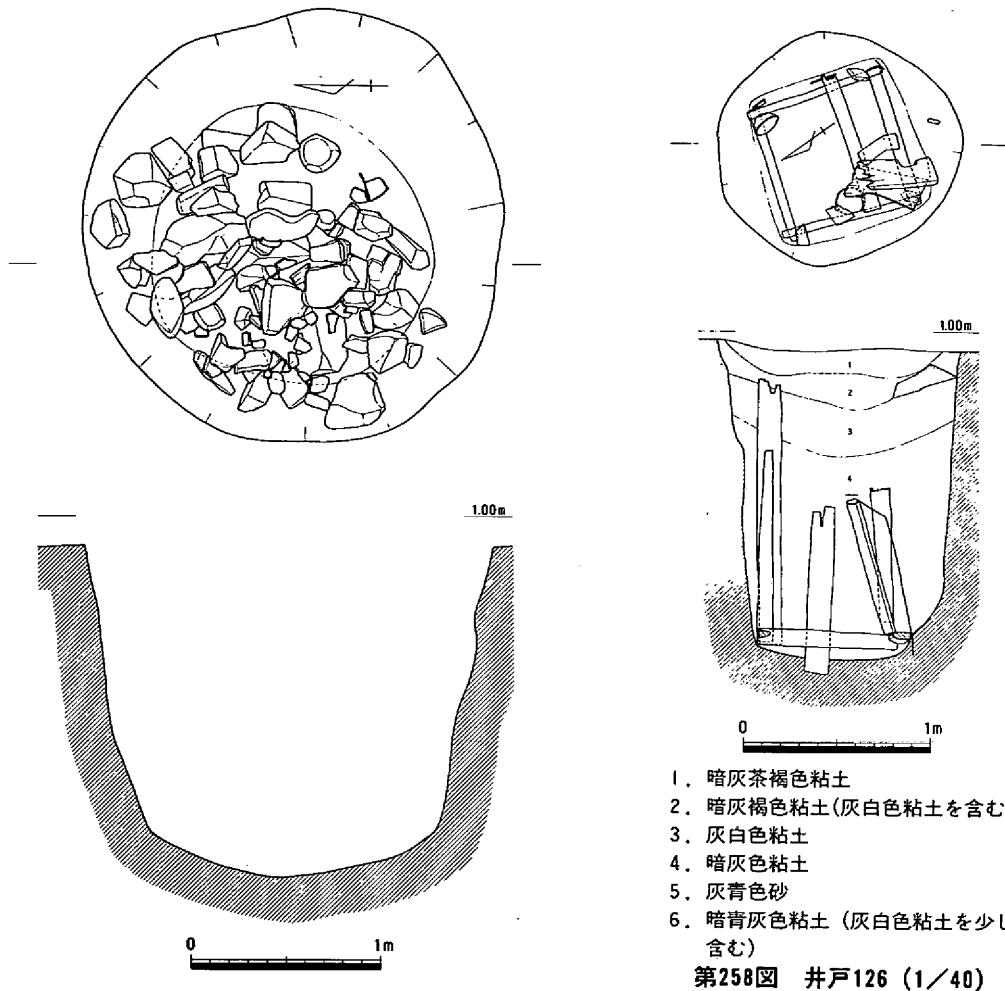
井戸125 (第257図、図版

88)

13M区に位置する。掘り

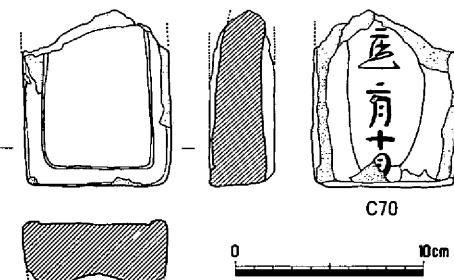
方の平面形が円形を呈する井戸で、長径130cm、短径120cmを測る。掘り方の断面形がU字を呈するもので、検出面からの深さは、175cmを測る。井戸の底面の海拔高は、-90cmである。井戸は、半断面を残して調査していたが、埋土が軟弱であったため、断面観察前に崩壊した。そのため、細部については不明である。井戸の埋土の最上層からは多量の石が出土した。それらの石は、二次的に火を受けたものが多く混じっていた。石の間からは、土器、備前焼等と共に陶硯1個(C70)が出土した。陶硯も二次的に火を受けており、淡赤褐色を呈している。陶硯は、方形を呈するもので、海の部分を欠く。裏面は、長軸方向に浅く窪んでおり、その部分にヘラ描による文字が見られる。文字は「二月十日」は読めるが、その上の文字が解読不明である。井戸の時期としては、鎌倉時代と考えられる。

(井上)



井戸126 (第258図、図版87)

13N区に位置する。掘り方の平面形が円形を呈するもので、長辺130cm、短辺120cmを測る。検出面からの深さは165cmを測る。掘り方の壁は、ほぼ垂直に掘られるもので、底面はほぼ平坦である。底面の海拔高は-70cmである。井側は、掘り方のほぼ中央に



第257図 井戸125 (1/40)・出土遺物 (1/4) 造られるものである。井戸の底面に、角材を方形に組んだものを置き、その外側に板を立て並べるものである。井戸の底に置かれた棧は完存するものである。完存する棧の大きさからして、井戸の内法は65cmを測る。井戸の時期は、平安時代と考えられる。

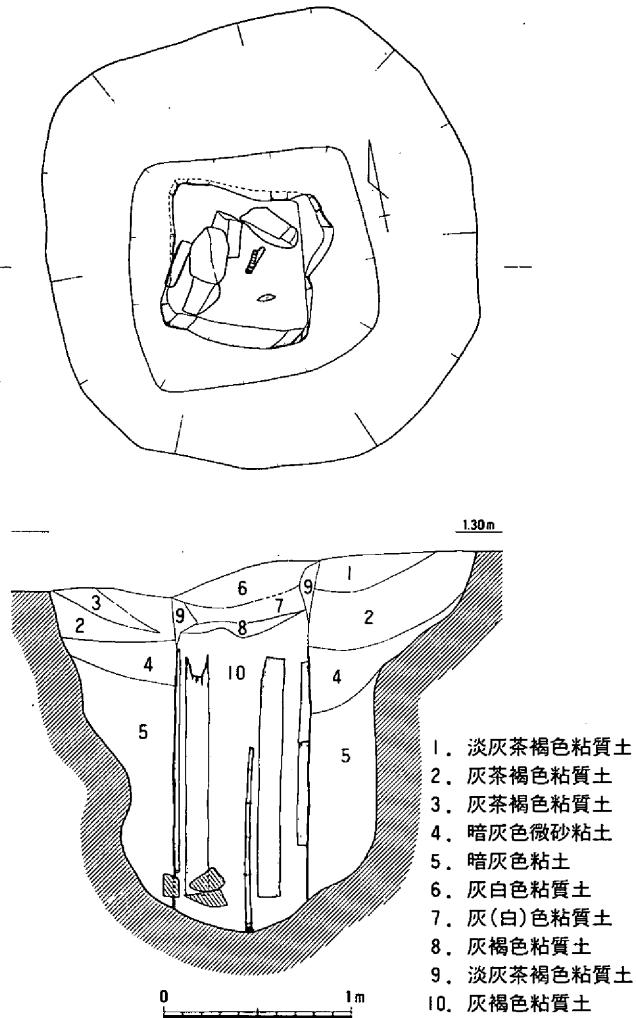
(井上)

3 平安時代後期～室町時代

井戸127 (第259図、図版89)

12N区に位置する。掘り方の平面形が隅丸方形状を呈するもので、長径250cm、短径230cmを測る。掘り方は、2段に掘られるもので、検出面からの深さは190cmを測る。底面は、中央部が浅く窪むもので、底面の海拔高は-75cmである。井側は、大きく掘られた掘り方の中央部に作られるもので、幅10~12cmの板を立て並びにするもので、内法は70cmを測る。井側内の周囲の板は、ほぼ残存するものの、横桟と考えられるような材木は出土しなかった。井戸の中央には、底に小さな丸木を置き、その上に竹を立てた状態のものを検出した。竹の遺存状態が良くないため、節の状態については観察できなかった。この竹は、井戸を埋納する時に、立てて埋めもどしたものである。井戸の時期

(井上)



第259図 井戸127 (1/40)

は、鎌倉時代と考えられる。

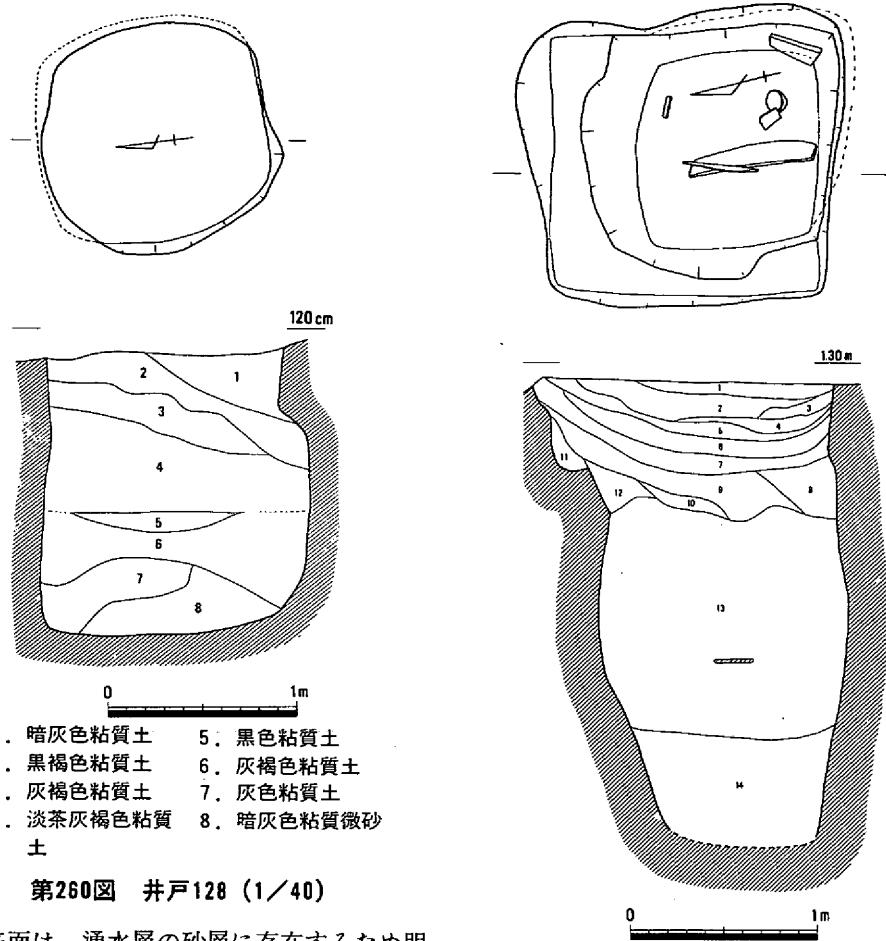
井戸128 (第260図、図版90)

13N区に位置する。掘り方の平面形がほぼ円形を呈するもので、長径130cm、短径120cmを測る。井戸の掘り方はほぼ垂直に掘られるもので、検出面からの深さは140cmを測る。底面は、ほぼ平坦であり、平面形は円形を呈する。底面の海拔高は-40cmである。井戸の時期としては、平安時代末頃が考えられる。

(井上)

井戸129 (第261図、図版90)

13N区に位置する。掘り方の平面形が方形を呈するもので、一辺約150cmを測る。井側は、掘り方の南東側に作られるものである。そのため、南側、東側の壁は、ほぼ垂直に掘られている。



第260図 井戸128 (1/40)

井戸の底面は、湧水層の砂層に存在するため明瞭には検出されなかったが、土層の違いから底面の深さは確認できた。井戸の検出面からの深度は240cmを測る。底面の海拔高は-125cmである。井側は、掘り方の南壁、東壁を利用して作られるもので、両壁に沿わして板を立て並べるものである。北側及び西側は、板を立て並べた裏側を土で埋めるものである。井戸からは、南東隅の壁に沿って板が一枚出土した。井側の規模は、底面の掘り方の大きさからして90cm前後と推定される。井戸の時期は、鎌倉時代と考えられる。

井戸130 (第262図、図版91・92)

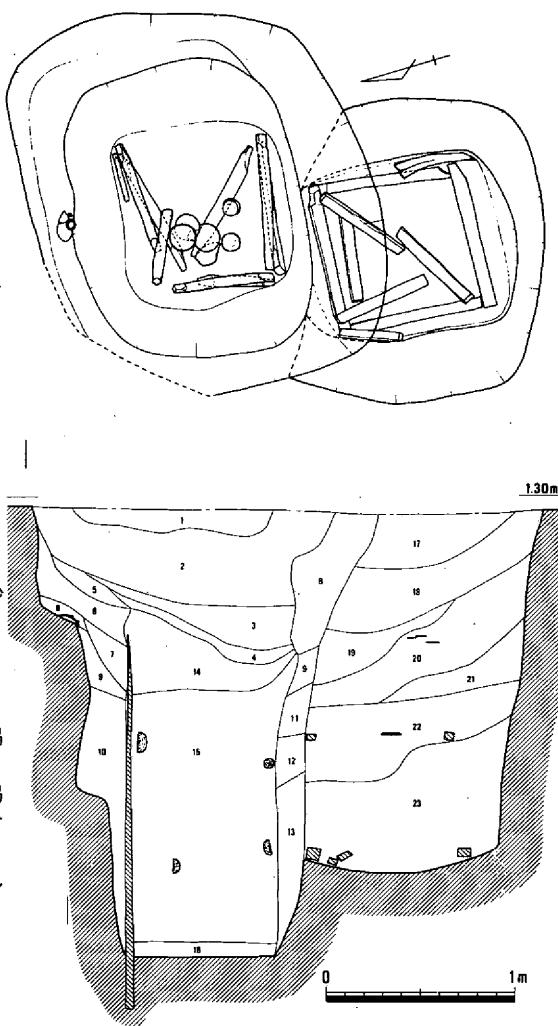
13N区に位置する。掘り方の平面形が隅丸方形を呈するもので、長径210cm、短径180cmを測る。井戸は、北側は三段に段をつけて掘られる。それに対し南側は中位から下はほぼ垂直に掘

- | | |
|-----------|------------|
| 1. 灰褐色粘質土 | 8. 淡茶灰褐色細砂 |
| 2. 灰色粘質土 | 9. 灰褐色粘質土 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 10. 暗灰色砂 |
| 4. 灰色粘質土 | 11. 灰色砂 |
| 5. 灰褐色粘質土 | 12. 暗灰色砂 |
| 6. 灰褐色粘質土 | 13. 暗灰色砂 |
| 7. 灰褐色粘土 | 14. 暗青灰色砂 |

第261図 井戸129 (1/40)

(井上)

1. 灰褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土（黃褐色、灰白色粘土を含む）
3. 暗灰褐色粘質土（灰白色粘土を少し含む）
4. 暗灰褐色粘土
5. 灰褐色粘質土
6. 淡灰褐色粘質土
7. 灰褐色粘土（灰白色粘土を含む）
8. 暗灰褐色粘土
9. 灰褐色粘土
10. 暗灰褐色粘土
11. 暗灰褐色粘土
12. 淡黄灰褐色粘土
13. 暗灰褐色粘土
14. 暗灰褐色粘土
15. 暗青灰色粘土
16. 暗青灰色粘土と砂の互層
17. 灰茶褐色土
18. 暗灰茶褐色土
19. 暗灰褐色土
20. 暗灰褐色土（黄褐色粘土を含む）
21. 暗灰褐色土（黄褐色粘土を多量に含む）
22. 青灰色砂（暗灰色粘土を含む）
23. 青灰色粘土



第262図 井戸130(左)・井戸131(右) (1/40)

れ込みを入れて組み合わせるものである。また、全長64cmを測る角材が数本出土している。これは、横桟と横桟の間に立てて、横桟がずれ落ちるのを防止したものと考えられる。この井戸の井側は、板を立て並べて、内側に数段の横桟を置くものである。横桟は底面近くとその上に二段、50～60cmの間を置いて検出した。井戸の時期は鎌倉時代と考えられる。

(井上)

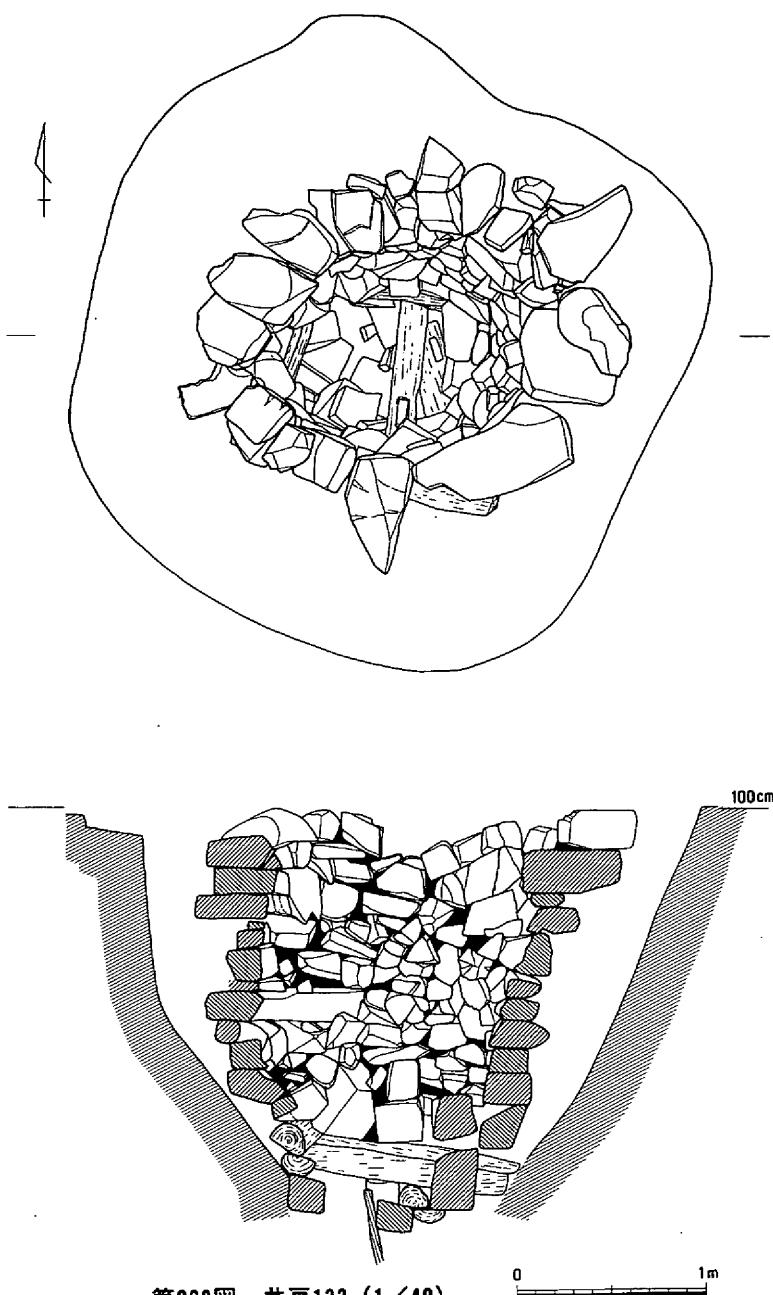
井戸131 (第262図、図版92・93)

13N区に位置する。井戸130と重複して検出したもので、井戸130より古い。井戸は、掘り方の平面形が隅丸方形を呈するもので、長径150～160cmを測る。井戸は、ほぼ垂直に掘られており、検出面からの深さは190cmを測る。底面は浅く窪むもので、底面の海拔高は-70cmである。

られ、上方は、外に向けて開く。井戸は、検出面からの深さは230cmを測る。底面は平坦で、海拔高は-110cmである。底面の平面形はほぼ方形を呈するもので、ほぼ井側の規模と一致する。北壁の東端からは、一枚の板を検出した。板の全長は195cmを測り、下端は井戸の底よりも深く打ち込まれていた。井戸内部からは、角材の両端を加工したものが出土した。出土状態から横桟と考えられる。

角材は、両端に切

井戸内からは、
井側を構成する
材が出土した。
この井戸は、板
を立て並べて、
内側に横桟を置
くものであり、
板が北西隅から
出土した。横桟
は約60cmの間を
置いて設置する
もので、井戸の
掘り下げ中も、
底面とその上層
約60cmの位置で
も出土した。井
戸底面の平面形
は、方形を呈す
るものである。
底面の規模は、
底に置かれた横
桟とほぼ同じで
あり、井側の大
きさに合わせて
掘られている。
井戸の底面から
は、横桟4本を
四角に組み合わ



第263図 井戸132 (1/40)

せたものが置かれており、南東を除く各角から、長さ53cm、幅6cm、厚さ5cmの角材が内側に倒れていた。また、先にも述べたが、横桟がほぼこの角材の長さの間隔を置いて出土していることから、この角材は、横桟と横桟の間に置いて、横桟がずれるのを防ぐものであることが判明した。井戸の時期は、平安時代末と考えられる。

(井上)

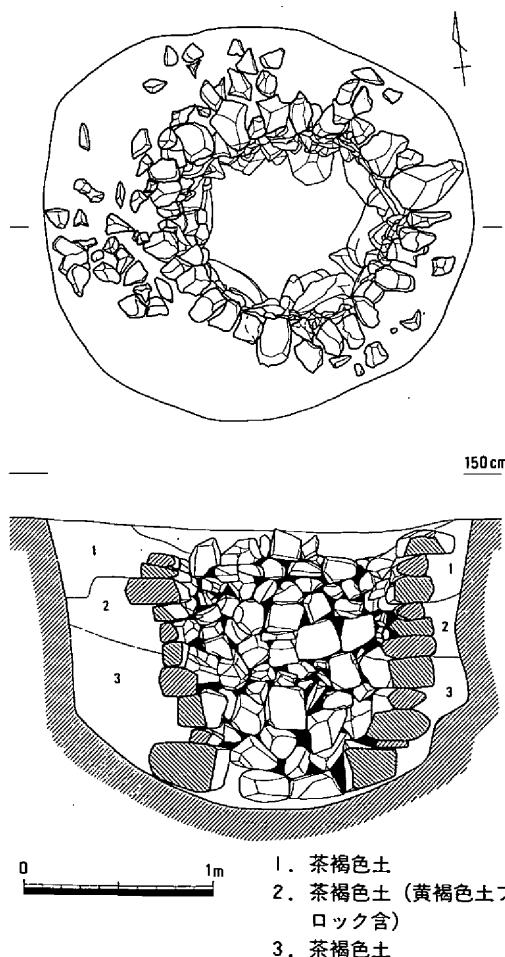
井戸132（第263図、図版94）

14N区に位置する。掘り方の平面形が隅丸方形を呈するもので、長径310cm、短径300cmを測る。掘り方は擂鉢状に掘られたもので、掘り方のほぼ中央に石組みの井側は作られている。検出面からの井戸の深さは220cmを測る。井戸の底面は湧水の砂層であり、明確に確認できなかつたが、底面の海拔高は-120cmである。石組みの井側の基部には、建築材の再利用と考えられる枘穴のあけられた木材が井桁に組み置かれていた。石組みは、その木材を基礎にして積み上げられるものであるため、底は方形に組まれるもの、上面においては、橢円形を呈している。石材は小口積にするもので、少し上方に開きながら積み上げられている。井筒の内法は長径130cm、短径100cmを測る。井戸の時期は室町時代と考えられる。

(井上)

井戸133（第264・265図、図版95）

16N区に位置する。掘り方の平面形がほぼ円形を呈するもので、長径230cm、短径210cmを測



第264図 井戸133 (1/40)

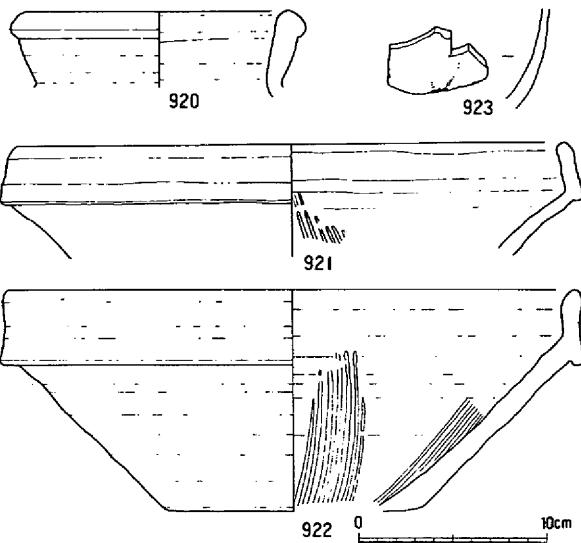
る。掘り方はU字形に掘られるもので、検出面からの深さは150cmを測る。底面は浅く窪むもので、底面の海拔高は-20cmである。井側は石を積み上げるものであり、掘り方の東よりに築かれている。石積みは、最下層のものは少し大きい石を使用し、基礎となるように配置し、少し外に開きながら積み上げられている。積み上げられる石は、ほとんどが小口積にされるもので、円形に積み上げられている。井戸の上端部の規模は、長径110cm、短径90cmを測る。出土遺物としては、920は備前焼の壺の口縁部である。921・922は備前焼の擂鉢である。外方に開く体部と、上方に大きく折れ曲がった口縁部は、下端が少し下方に拡張する。カキ目は7～8本単位のものが、数条施される。これ等出土遺物からして、井戸の時期は、室町時代と考えられる。

(井上)

井戸134（第266～268図、図版100）

16N区と16O区の境界に位置する。掘

り方の平面形が円形を呈するもので、長径210cm、短径200cmを測る。底面の平面形も円形を呈しており、長径170cm、短径150cmを測る。検出面からの深さは、130cmを測り、底面はほぼ平坦である。底面の海拔高は-20cmである。掘り方の壁面は、直線的であり、垂直に近い角度で掘られている。埋土の中層からは大きな石が出土したが、井側を形成するようなものは出土しなかった。出土遺物としては、924



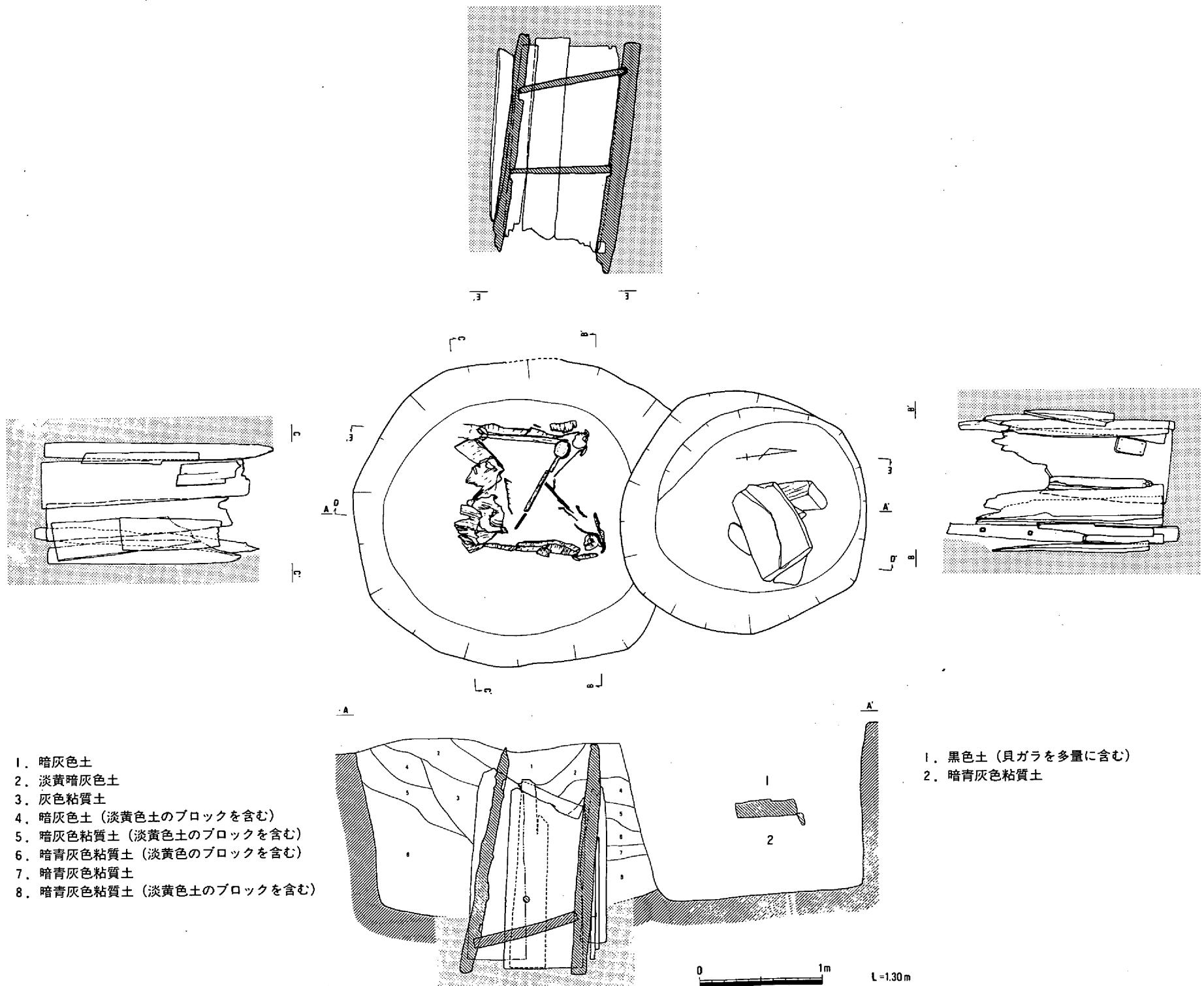
第265図 井戸133出土遺物

は、土師器の小皿、925~927は椀である。928~932は、備前焼擂鉢である。932は、口縁端部が、上方に大きく拡張するもので、下方にも少し下がる。937~940は備前焼壺であり、口縁部は折り返され玉縁になる。W11はくし状木器で、W12は板状の木器である。945は、一対の把手のつく土鍋である。941・950は瓦質のものである。951は凸面に格子のタタキの施される瓦で、S60は、砥石である。井戸の時期としては室町時代と考えられる。

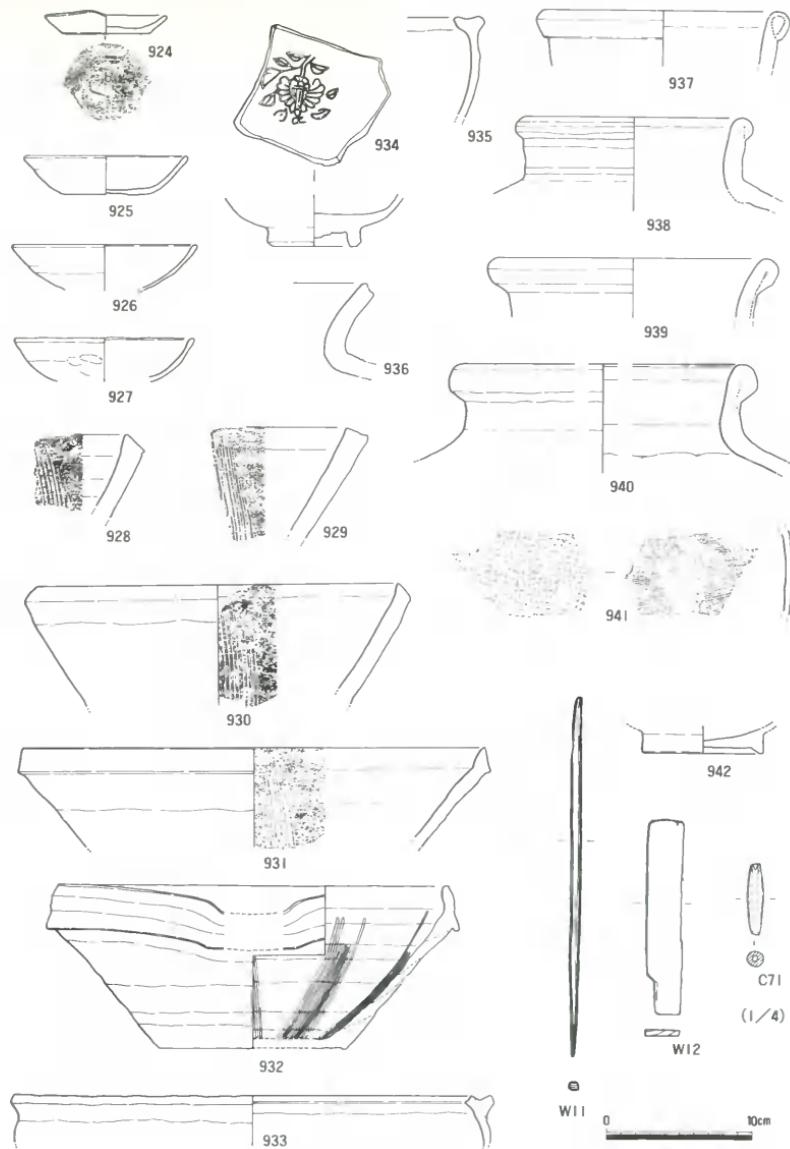
(井上)

井戸135（第266・269~271図、図版96）

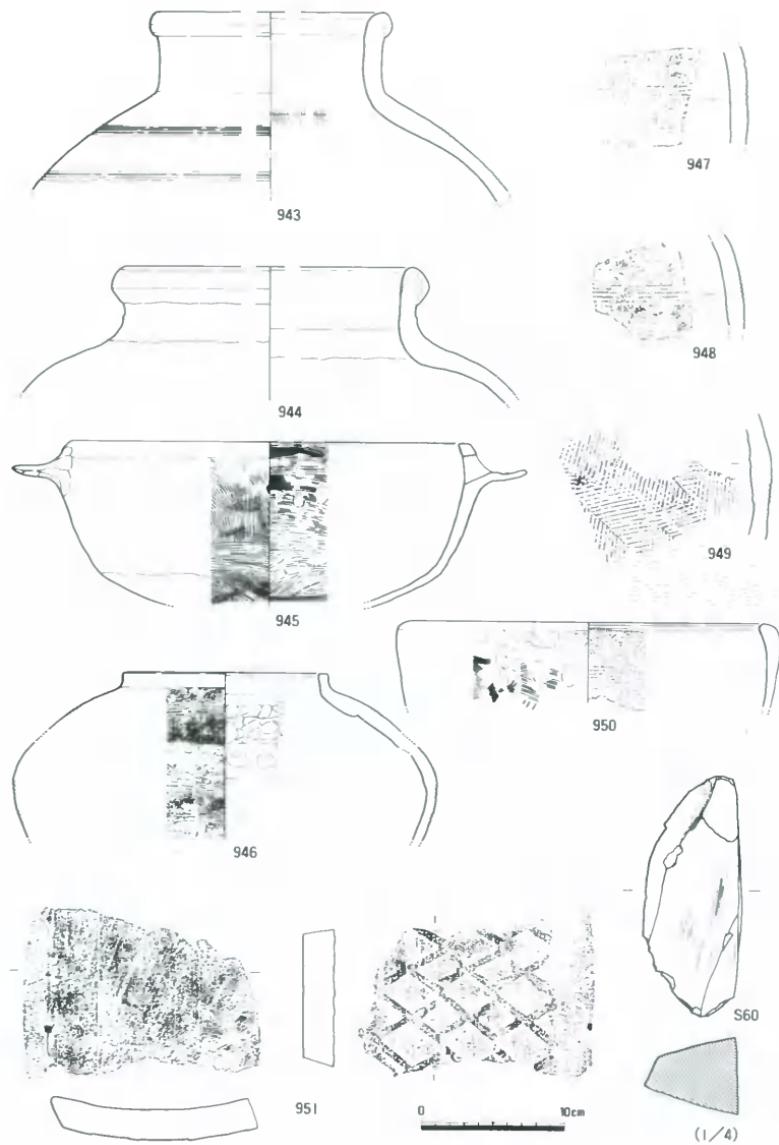
16N区と16O区の境界に位置する。掘り方の平面形が円形を呈するもので、長径270cm、短径250cmを測る。大きな掘り方の中央部やや西よりに井側は作られるものである。井側は四隅に径15cm程度の柱を立て、柱と柱の間には横桟をわたすものである。横桟の位置には、柱に穴をくり込むものである。検出した井側の一面における横桟の数は2段であるが、穴の位置からして、3段は存在していたと考えられる。横桟の外側には、板を重ねながら立て並べるものである。出土した柱の長さは、186cmを測る。検出した井側の最下端の海拔高は-80cmである。井側の内法は約90cmを測る。掘り方の底面もほぼ円形を呈するもので、径200cmを測る。井側の底部は、掘り方の底より深い位置にあることから、底部は二段に掘られていた可能性が強いが、湧水層の砂層であるため、明確なものは観察できなかった。出土遺物としては、952~955は、土師器の杯で、底部はヘラ切り後板目が施される。956~959は、須恵器の椀で、底部は糸切りが見られる。960~966は、皿で、底部にヘラ切りが見られる。967~997は、土師器の椀である。体部外面の上半はヨコナデ、下半に指頭圧の痕跡が見られる。998~999は、鍋の支脚で、998は土師器、999は瓦器である。1000~1001は須恵器の鉢で、東播系と考えられるものである。その他に



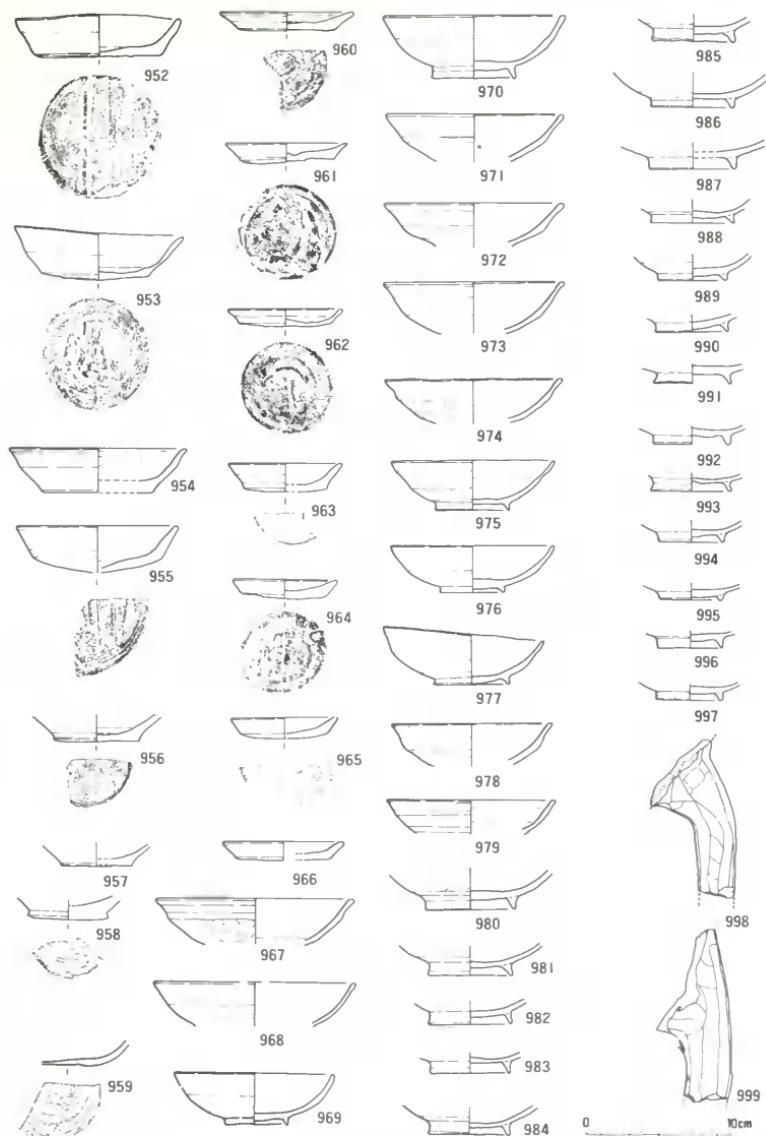
第266図 井戸134(右)・井戸135(左) (1/40)



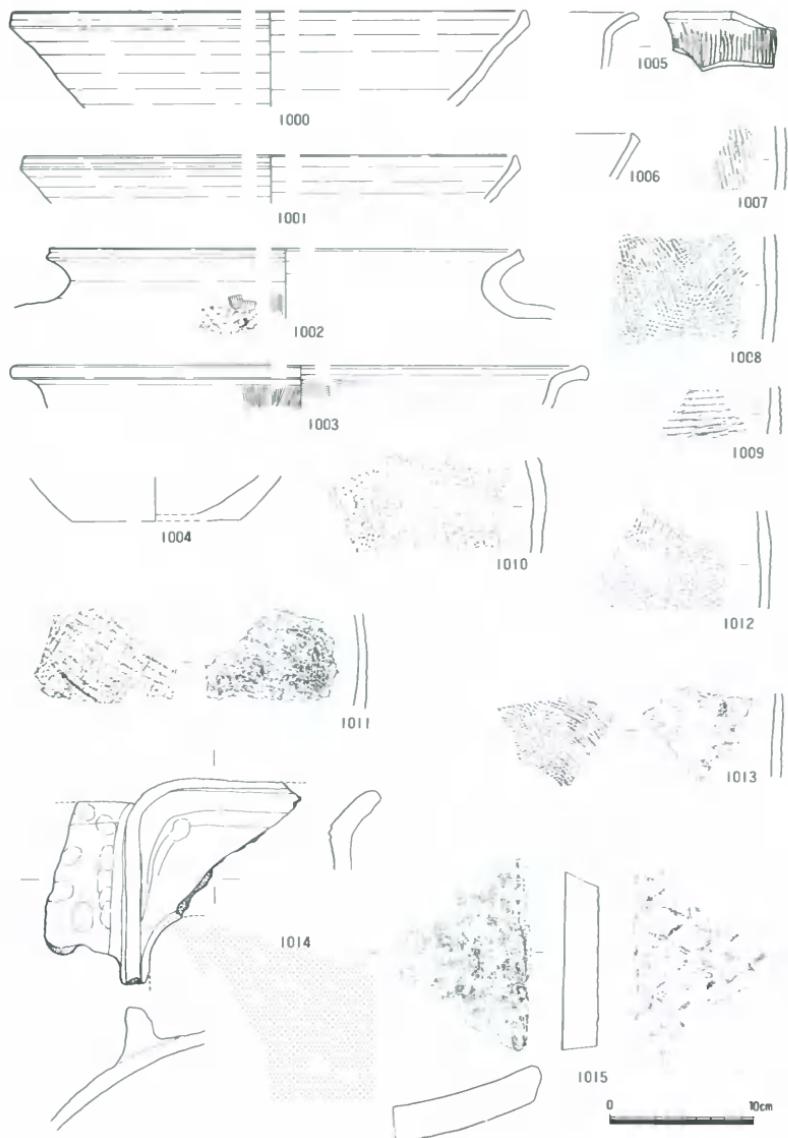
第267図 井戸134出土遺物(1)



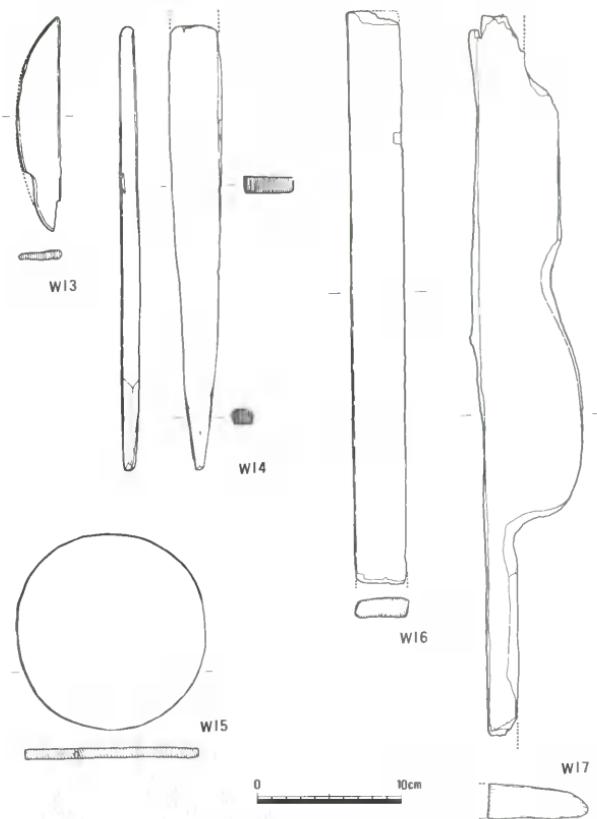
第268図 井戸134出土遺物[2]



第269図 井戸135出土遺物(1)



第270図 井戸135出土遺物[2]



第271図 井戸135出土遺物[3]

も、1006・1008・1012も東播系と考えられるものである。1007・1009は、亀山焼である。1014は、土師器のかまどで、1015は、凸面に格子のタタキの施される瓦である。木製品としては、曲物の底、板等が出土している。井戸の時期としては、鎌倉時代の後半と考えられる。

(井上)

井戸136 (第272図、図版97)

13P区に位置する。掘り方の平面形が円形を呈するもので、長径165cm、短径155cmを測る。掘り方は、上方に向けて少し開くもので、検出面からの深さは、210cmを測る。底面は、ほぼ平坦に掘られており、底面の海拔高は-90cmである。井側は石積みによるもので、ほぼ円形を呈

しており、掘り方のはば中央に作られている。最下層の石は、少し大きい石を用い、掘り方いっぱいに置いている。この最下段の石の内側には、同程度の石を内側全体に敷いている。このようにすることにより、最下層の石が内側にはみ出すことによる井戸の崩壊を防止することができる。積石は、人頭大程度のものを用い、小口積にするものである。積み上げられた石は、掘り方の壁に接するもので、掘り方の大きさに合わせて、井戸を構築している。石積は、17~18段まで確認した。井戸の内法は、長径90cm、短径80cmを測る。井戸の時期としては、室町時代と考えられる。

(井上)

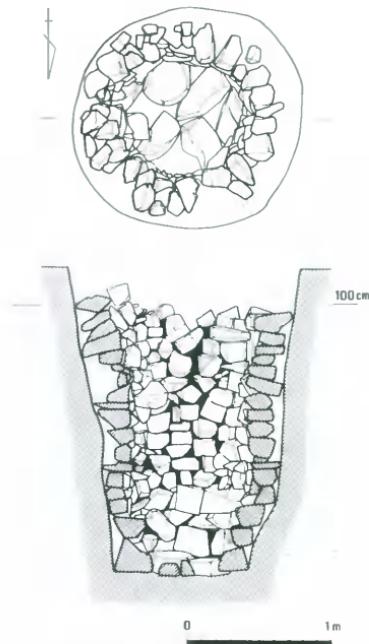
井戸137 (第273図、図版98)

15P区に位置する。掘り方の平面形が方形を呈するもので、長辺110cm、短辺100cmを測る。掘り方の底面は、二段に掘られており、北西側に一段深く掘り込まれている。井側は、この一段深い部分に造られるもので、北側、西側は、掘り方の壁を利用している。井側は、四隅に径7~8cmの支柱を立て、支柱の上端、下端に横桟を渡すものである。横桟は、40~50間隔で、二段まで確認した。横桟の外側には、板を立て並べるもので、北側、西側では、この板は掘り方の壁にはば密着している。井側の内法は、72~74cmを測る。井戸の検出面からの深さは90cmを測る。井戸の底面は、中央部が少し窪むもので、底面の海拔高は、-30cmである。井戸の内側からは、ほぼ完形の曲物が出土した。井戸の時期は、鎌倉時代と考えられる。

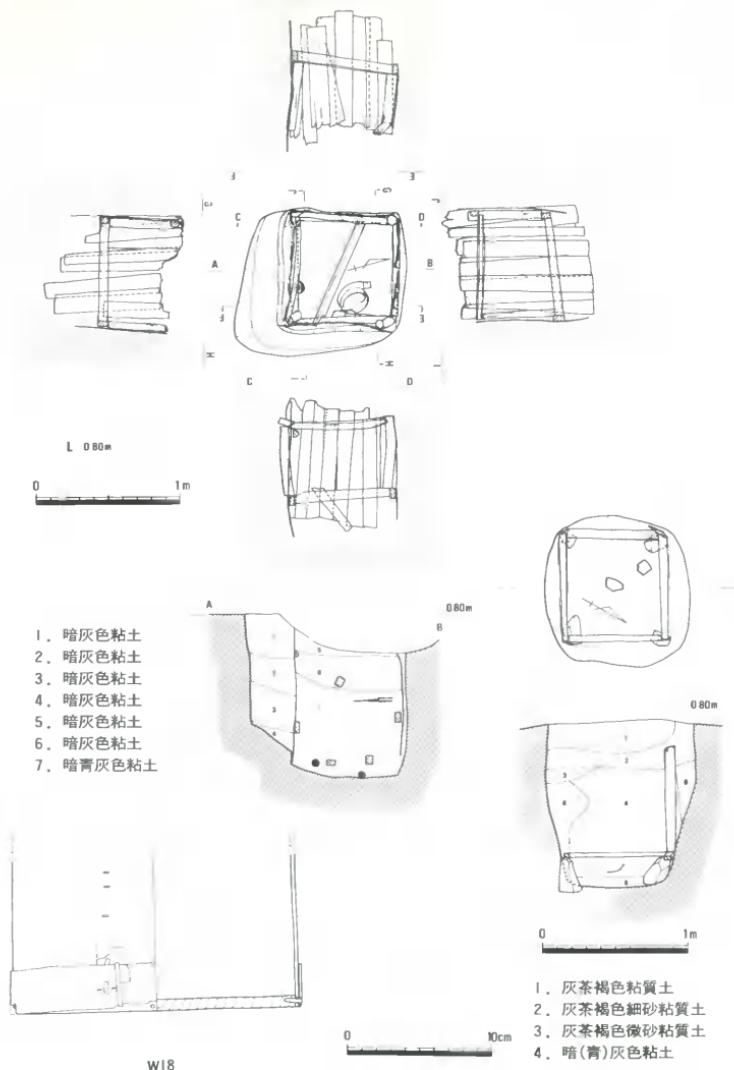
(井上)

井戸138 (第274図、図版98)

15P区に位置する。掘り方の平面形がほぼ円形を呈するもので、長径115cm、短径100cmを測る。底面は、井側の大きさに合わせて方形に掘るもので、一辺約76cmを測る。検出面から底面までの深さは114cmを測り、海拔高は-40cmである。底面は、ほぼ平坦で、掘り方の四隅に石を置き、井側の基礎としている。石の上には、5cm角程度の角材の両端を凸に切り込み、それを井桁状に組んだものを置くもので、その外側の周間に板を重ねながら立て並べて、裏側を埋

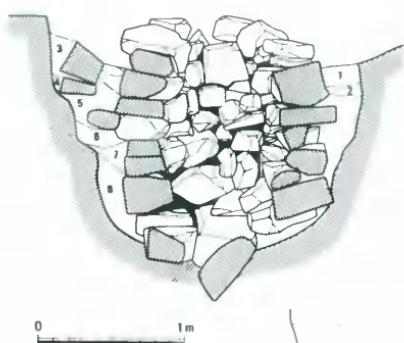


第272図 井戸136 (1/40)



第273図 井戸137 (1/40)・出土遺物

第274図 井戸138 (1/40)



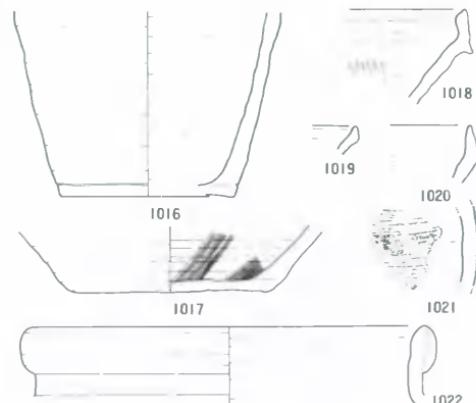
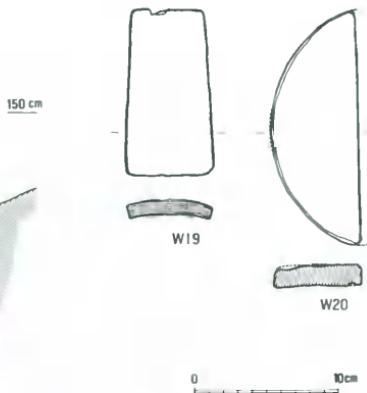
- 1. 灰色粘質土
- 2. 灰白色粘質土
- 3. 淡灰茶褐色土
- 4. 灰白色粘質土
- 5. 灰茶褐色粘質土
- 6. 淡灰茶褐色粘質土
- 7. 暗灰青色土（微砂を含む）
- 8. 暗灰青色粘質土

の深さは170cmを測る。底面の海拔高は-50cmを測る。井側は、掘り方のほぼ中央に造られるもので、底面には、積み上げられる石より少し大きな石を置く。積み上げる石は、人が一抱えできる程度の大きさがあり、一見

めるものである。井戸の時期としては、鎌倉時代が考えられる。(井上)

井戸139 (第275図、図版99)

19P区と19Q区の境に位置する。掘り方の平面形が橢円形を呈するもので、長辺220cm、短辺190cmを測る。掘り方は、ほぼ擂鉢状を呈するもので、検出面から



第275図 井戸139 (1/40)・出土遺物

して大きめな石の使用が見られる。石積みは、7～8段を確認した。出土遺物としては、壺、擂鉢等がある。1019は鉢で、東播系と考えられるものである。1016～1018、1020～1022は備前焼である。W19・W20は木器で、W20は曲物の底と考えられるものである。井戸の時期は、室町時代と考えられる。(井上)

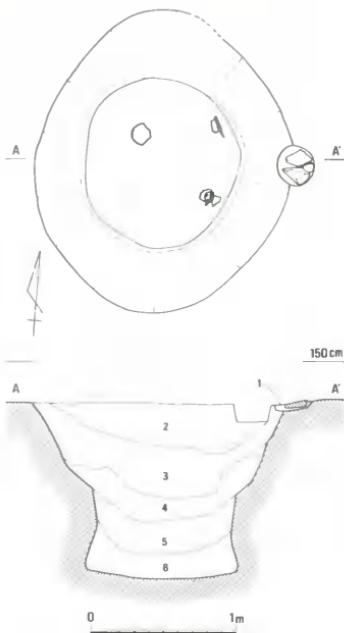
井戸140（第276・277図、図版100・101）

18Q区に位置する。掘り方の平面形が橢円形を呈するもので、長径210cm、短径170cmを測る。底面の平面形は、ほぼ円形を呈するもので、長径65cm、短径55cmを測る。掘り方は、下半は少し袋状を呈しており、上半は、外方に向けて大きく開く。検出面からの深さは120cmを測る。底面は、ほぼ平坦で、海拔高は0mである。出土遺物としては、土師器の高台付椀、底面ヘラ切りの椀、底面ヘラ切りの小皿、須恵器で、底面糸切りの椀等が出土している。木器としては、W21は、斎串が出土している。斎串は、全長16.4cm、幅1.6cmを測るものである。W22は、板状のものである。W

23は、むしろ編具状の木器である。井戸の時期としては、平安時代末と考えられる。(井上)

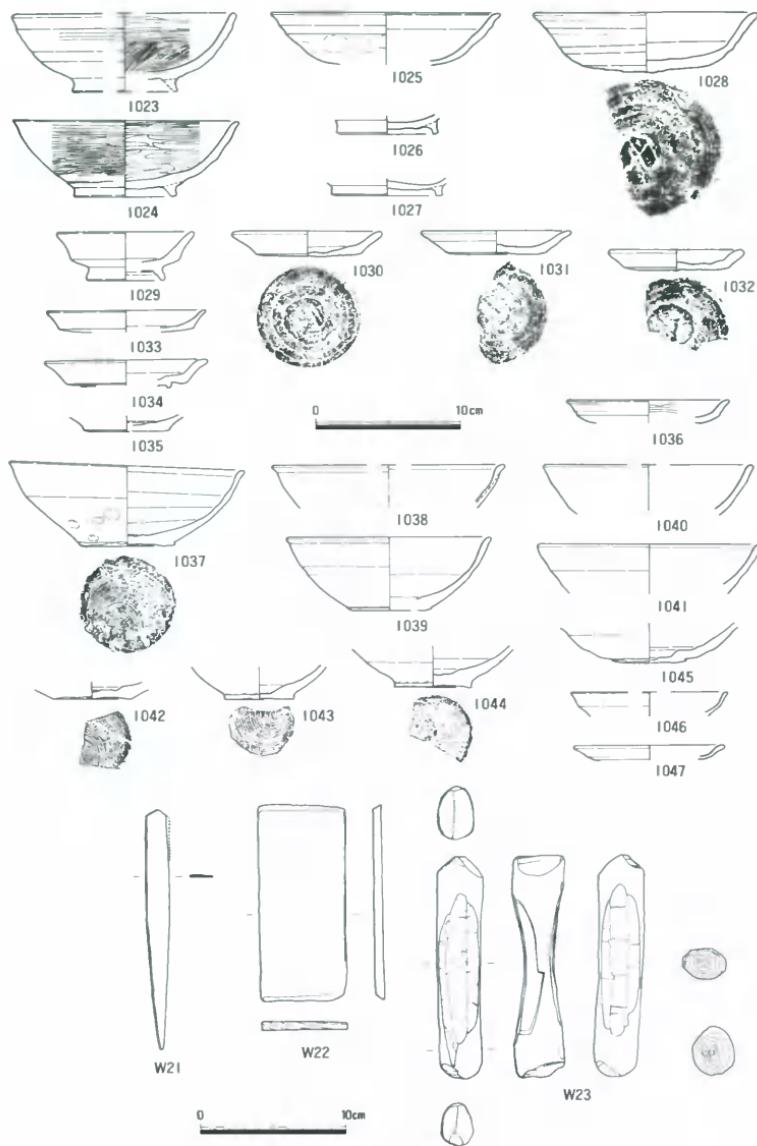
井戸141（第278～281図、図版102・103）

1983年度調査区の20S区で検出した石組みの井戸である。溝122との関係は、検出当初には明らかにすることことができなかったため、溝122の一部として掘り下げていたが、途中で石組みが見えたため井戸とした。この段階で溝122側に残していた土手で土層を検討したが、切合い関係は明瞭に認められなかった。さらにこの井戸の石組み上面には多くの石が廃棄された状態で検出され、それは明らかに溝122の壁の立ち上がり面より上にあり、しかも井戸の南側、すなわち溝122内へも連続するような状況であり、溝122との同時性をうかがわせた。しかし井戸の石組みは溝122の壁面より上にないことから、溝122掘削時に破壊され、たまたまその上部に石が廃棄されたと解せなくもない。出土土器を見ても、井戸内のものと井戸掘り方のものとは時期的な差はあまりなく、そのうえ溝122からも同じ時期のものが出土している。しいて言えば井戸関係の

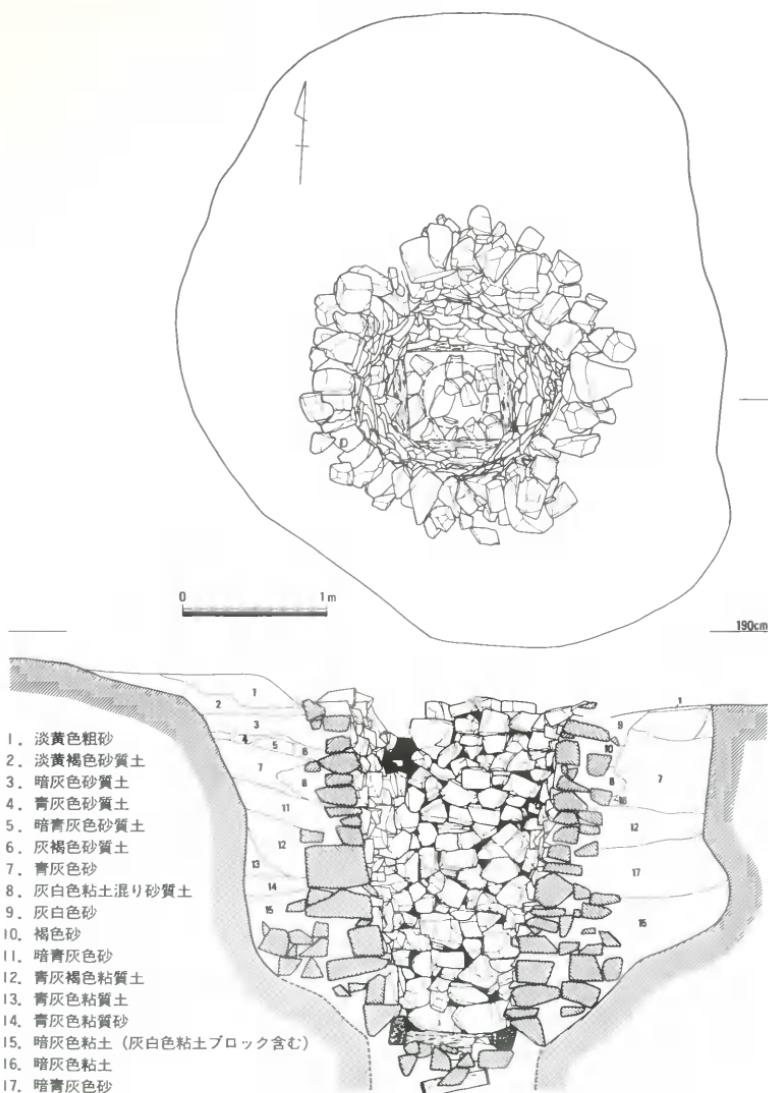


1. 暗灰色土 4. 灰茶褐色土
2. 灰茶褐色土 5. 暗灰褐色土
3. 灰茶褐色土 6. 青灰色砂質土

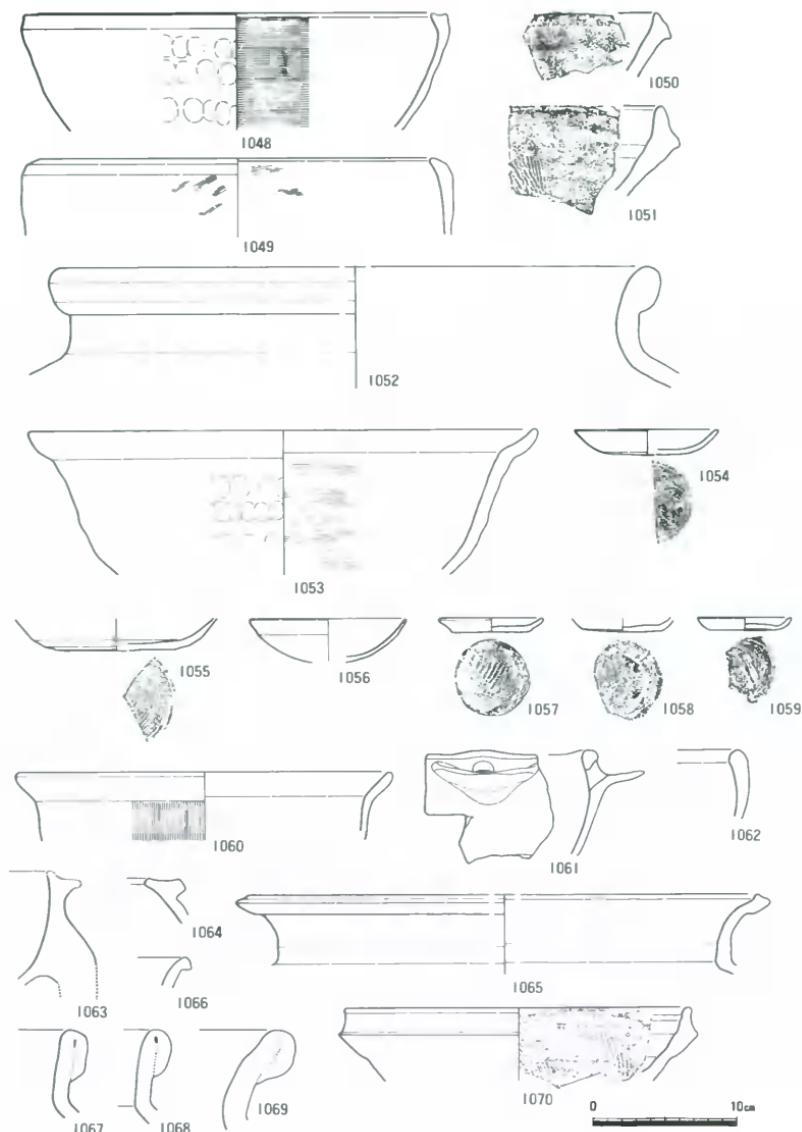
第276図 井戸140 (1/40)



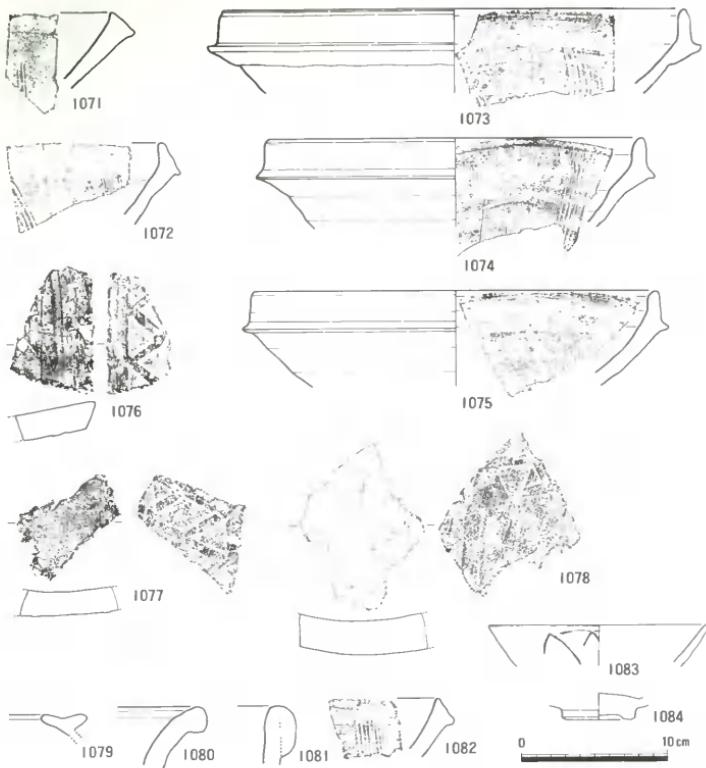
第277図 井戸140出土遺物



第278図 井戸141 (1/40)



第279図 井戸141出土遺物[1]

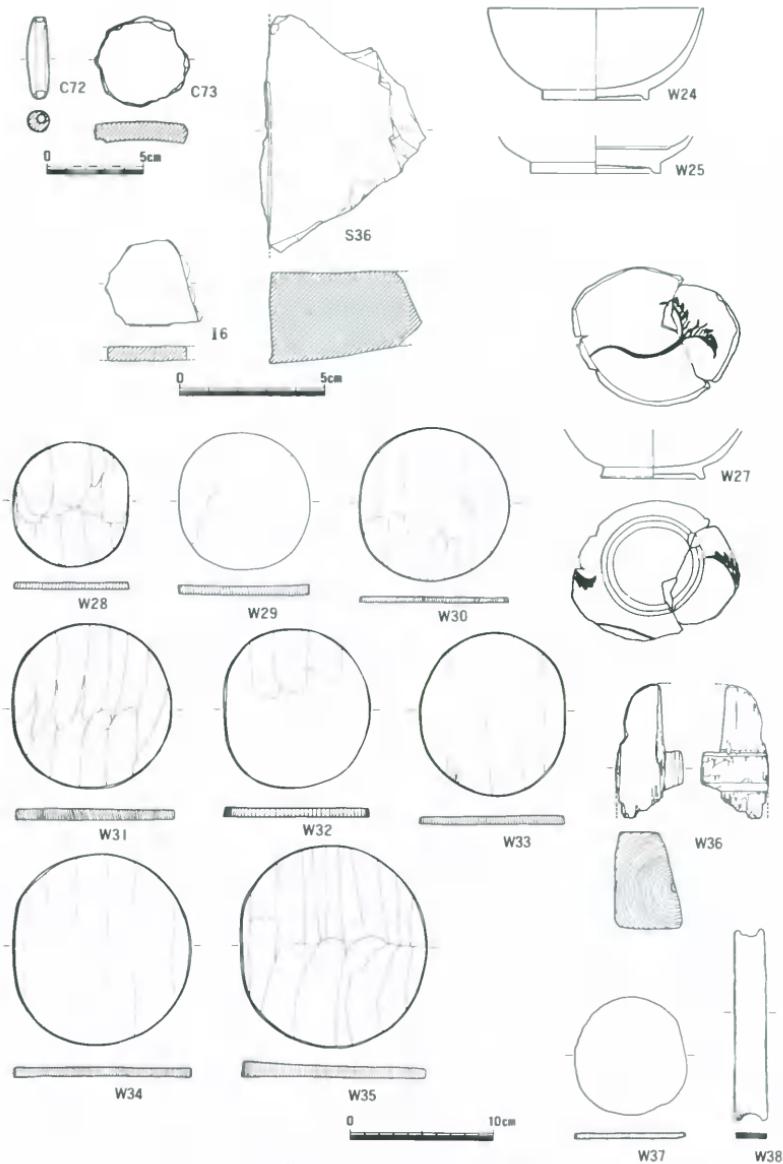


第280図 井戸141出土遺物(2)

土器は12世紀代から15世紀代が多いのに比べ、溝122の土器は古いものもあるが、15・16世紀を主体に中世末まで認められるという差が指摘される。以上のことから不十分ながら溝122との関係は、井戸の方が古い可能性が強いといえよう。

井戸は南北4.40m、東西3.80m、深さ約3mの掘り方内に石を積み上げ構築している。石組みは掘り方底部に石を置き、その上に角材を井桁状に組み、さらにその上に石を積み上げている。石の積み方は基本的に長方形形状の石を用い、小口を面にして積み上げている。石の大きさは比較的小さく、30cmを越えるものは底部に近い部分にわずかに認められるのみで、他は20cm内外のものを主体にしている。控え積みはあまり顕著でなく、下半部に集中している。

遺物は多くが井戸内から出土したが、井戸上面や掘り方内にも少量認められた。井戸上面の



第281図 井戸141出土遺物(3)

遺物（1048～1052）は、廃棄された石材などとともに出土したもので、土師器、瓦器、備前焼、木製品などがある。1048と1049は瓦器鍋である。1050と1051は備前焼の擂鉢で、1050は口縁端を上下に、1051は上方へ拡張している。W37は円形の薄板で、曲物の底板と考えられる。W38は薄い長方形の板で、上下端をU字状にえぐっている。

井戸内の遺物（1053～1078・1083・1084）としては土師器、瓦器、須恵器、備前焼、青磁、白磁、瓦、土錘、円板状土製品、砥石、鉄製品、木製品などが出土した。1053・1054は井戸内の上部から出土し、その他は下部である。1053は土師器の鍋、1054は土師器の皿である。1055～1059は土師器の杯（1055）、椀（1056）および小皿（1057～1059）である。1060は土師器鍋、1061・1062・1064は瓦器鍋である。1063は土師器鍋で、脚がつく。1065は須恵器の甕である。備前焼には甕（1067～1069）と擂鉢（1070～1075）がある。1076～1078は瓦で、いずれも凸面に格子目の叩きが見られる。

木製品は椀（W24～W27）と円板状薄板（W28～W35）、そして下駄（W36）などがある。円板状薄板は曲物の底板ないし蓋と考えられる。

掘り方内の遺物（1079～1082）としては土師器、瓦器、備前焼があるが、いずれも小片である。1079は瓦器鍋で、口縁部外面に鈎がめぐる。備前焼は甕（1080・1081）と擂鉢（1082）がある。1080は外反した口縁部の端を肥厚させ、1081はほぼ垂直に立ち上がった口縁の端を折り返し、幅の広い玉縁を作っている。

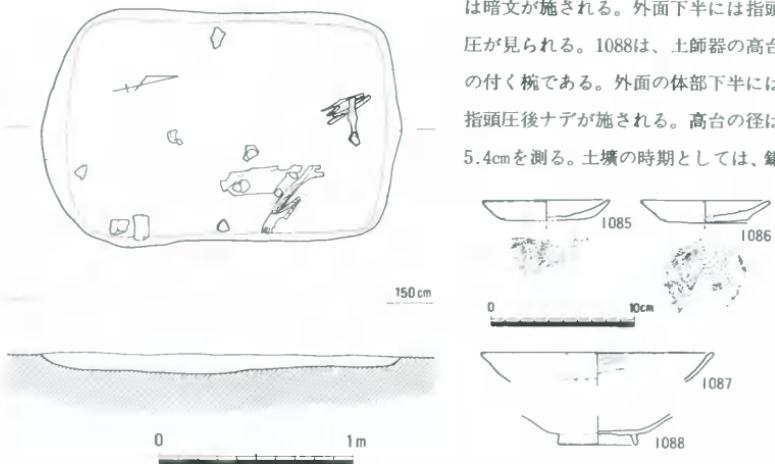
時期については、土器といえば少量であるが奈良時代の須恵器から認められるものの、多くは鎌倉時代から室町時代頃のものである。遺構との先後関係でいえば、前述の通り溝122より古くしかも溝122に近い時期と考えられる。以上のことを考え合わせば、13世紀から14世紀の中だとらえられよう。

(平井勝)

d 土 壤

土壤149（第282図、図版104）

15H区の中央付近で検出された。平面形が方形を呈するもので、長辺186cm、短辺118cmを測る。検出面からの深さは10cmを測る。底面はほぼ平坦で、底面の規模は、長辺164cm、短辺110cmを測る。土壤内からは、動物遺体が出土しており、歯牙の形状からウマと考えられる。動物遺体の出土状況からして、ウマの埋納のために掘られたものと考えられる。1085は、土師器の小皿である。1086も土師器の小皿で、底部にはヘラ切り痕が残る。1087は、瓦器椀で、内面には暗文が施される。外面下半には指頭圧が見られる。1088は、土師器の高台の付く椀である。外面の体部下半には指頭圧後ナデが施される。高台の径は、5.4cmを測る。土壤の時期としては、鎌



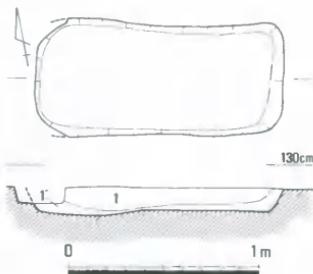
第282図 土壤149 (1/30)・出土遺物

倉時代と考えられる。

(井上)

土壤150（第283図）

11K区の南半で検出された。平面形は隅丸の長方形をなし、長さ130cm、幅60cm、深さ15cmである。底面は、西側がいくらか凹むものの、ほぼ平坦に近く、断面は箱形を呈する。埋土は1層とみられるが、底部付近を中心で暗灰色粘土のブロックが含まれる。遺物は土器片で、土師器と須恵器と瓦器がみられ、黒色土器片もあった。この土壤の時期については、遺物等から判断して、平安時



I. 暗灰褐色土 I'. 暗灰色粘土斑暗灰褐色土

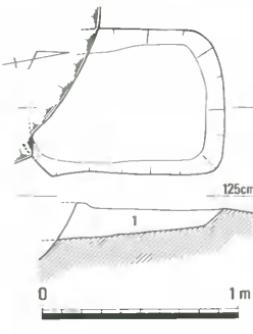
第283図 土壤150 (1/30)

代末期から鎌倉時代初期頃と考えられる。箱形の形態から木棺墓を連想するが、釘や副葬品等、そのことを裏付ける資料はない。なお、この土壙と建物126との距離はわずか60cmにすぎない。

(岡本)

土壙151（第284図）

11L区の北西部に位置し、土壙152によって一部が破壊されている。平面形は隅丸の長方形で、残存長99cm、幅76cm、深さ20cmを測る。底面は平坦であるが、南へ向かって低くなっている。埋土は灰色粘性砂質土である。遺物は多くの土器片である。土師器・須恵器・瓦器がある。これらの土器の年代と土壙152の年代から考えると、土壙

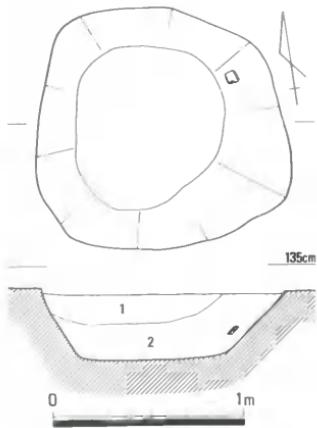


第284図 土壙151 (1/30)

151の年代は鎌倉時代前期とみられる。(岡本)

土壙152（第285図）

11L区の北西部に位置する。平面形はやや角張った円形で、長径147cm、短径138cm、深さ38cmを測る。断面は楕円形をなす。埋土は2層に分かれているが、きわめてよく類似した土であり、灰色粘性砂質土1層としてもよい。出土遺物には土器・石器・鉄器・骨片がある。土器には土師器・須恵器・瓦



1. 黄白色粘土斑灰色粘性砂質土
2. 黄白色・褐灰色粘土斑灰色粘性砂質土

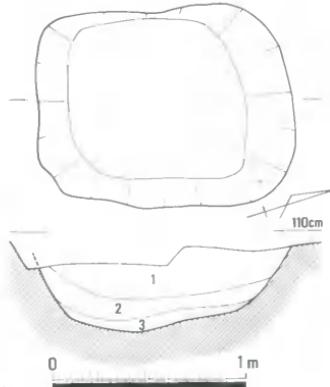
第285図 土壙152 (1/30)

器・白磁がみられる。石器は滑石製の石鍋ではないかと考えるが、穿孔があり、通有の形のものではない。鉄器は釘のようである。これらの遺物から判断すると、この土壙の年代は鎌倉時代前期と考えられる。

(岡本)

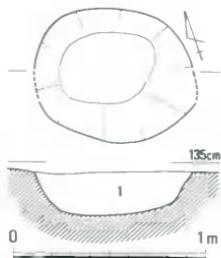
土壙153（第286図）

11L区の西半で検出された。平面形は隅丸の



1. 灰白色粘土斑灰色粘性砂質土
2. 灰白色粘土斑暗灰色粘性砂質土
3. 灰白色粘土斑灰色粘性砂質土

第286図 土壙153 (1/30)



1. 黄白色粘土斑暗灰色粘性砂質土

第287図 土壙154 (1/30)

断面は楕形を呈する。埋土は1層で炭粒を点々と含む。遺物には土器と鉄滓がある。土器はかなりあり、土師器・須恵器・瓦器がみられる。これらの土器の年代から土壙は鎌倉時代のものと考えられる。

(岡本)

土壙154 (第287図)

12K区の南半に位置する楕円形の土壙である。長径86cm、短径70cm、深さは23cmを測る。底面はゆるやかに湾曲し、

出土土器から判断すれば、この土壙の年代は鎌倉時代前期

と考えられる。

(岡本)

土壙155 (第288図)

13L区の北端で検出したほぼ円形の土壙である。長径93cm、短径83cmを測る。深さは29cmあり、断面は楕形となる。

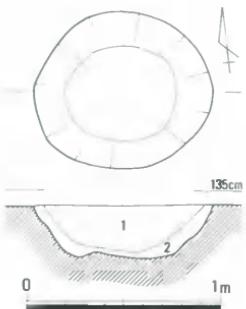
底面には小さな凹凸があり、壙壁も途中に小さな段をもつ。埋土は2層に分けられるが、ともに暗褐灰色砂質土からなり、第1層には地山の碎粒かと考える黄褐色砂質土が多く含まれている。遺物は土器片のみであるが、土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁と種類が多い。これらの土器の年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

土壙156 (第289図、図版105)

14L区の南東部で検出された。平面形はほぼ方形だが、

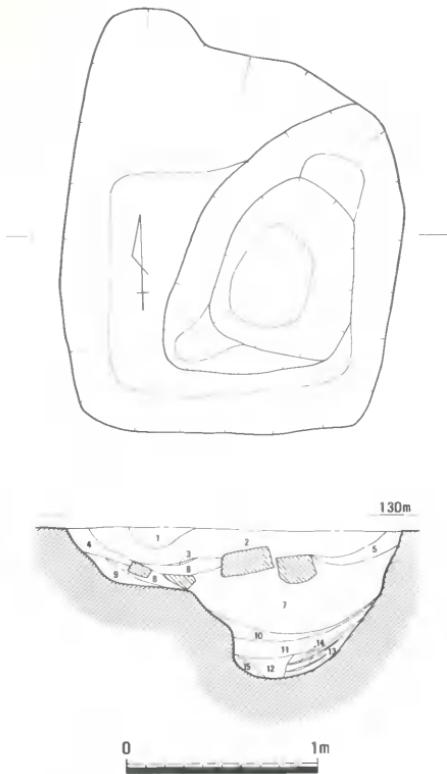
北西隅が突出している。北東隅は調査区の側溝の掘り下げにより一部破壊され、丸くなっている。長軸200cm、短軸175cm、深さは79cmの規模をもつ。壙内は二段構造になっている。まず、深さ30cm程度で、一段目の底面が現れる。この底面はほぼ平坦で、115cm×125cmの方形になっている。さらに、この底面の東側寄りに、長径120cm、短径95cm、深さ45cmの穴が掘られている。この穴が東側に寄っているため、一段目の底面の西側と南側がかなり残されている。壙内の堆積土は細かく分層できたが、大きくまとめると、上・中・下の3層になる。下層は第10層から第15層までで、いずれも粘質土である。この土壙が本来の機能を果たしていた時の堆積とみられる。中層は第4層から第9層までで、その上面付近に長径20~25cm程度の石が入っていることなどから、短期間に埋められた土と考えられる。上層は第1層から第3層までで、その

1. 暗褐灰色砂質土斑黄褐色砂質土
2. 暗褐灰色粘性砂質土**第288図 土壙155 (1/30)**

後の自然堆積層であろう。

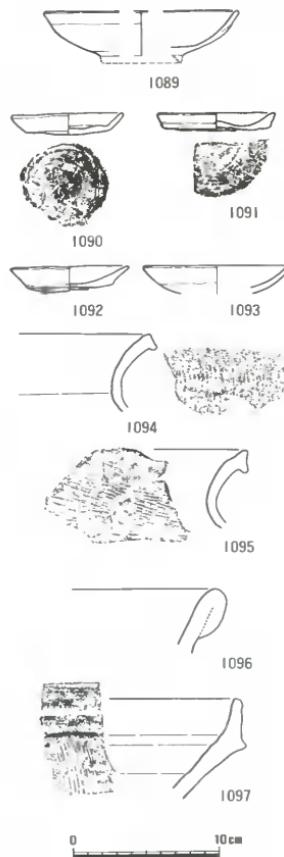
出土遺物は多く、コンテナ1箱分程あった。内容は土器と石器と鉄器である。土器には土師

器・瓦器・亀山焼の須恵器・備前焼の陶器・青磁・白磁それに瓦がある。石器は錘と臼らしいもの、鉄器は釘である。これらの遺物の示す年代は室町時代であり、この土壌の年代も



- 1 黄褐色砂
- 2 淡茶灰褐色砂質土
- 3 灰色粘土
- 4 灰茶褐色土
- 5 灰茶褐色砂質土
- 6 淡灰茶褐色土
- 7 灰茶褐色土
- 8 灰褐色土（黄褐色土・少量の砂を含む）
- 9 灰褐色土
- 10 暗灰色粘質土
- 11 淡黄灰褐色粘質土
- 12 淡茶褐色粘質土
- 13 黄褐色粘質土
- 14 灰色粘質土
- 15 淡茶灰褐色粘質土

第289図 土壌156 (1/30)・出土遺物



その頃か少し遡る程度であろう。

(岡本)

土壤157

12N区と12O区の境界に位置する。最近の搅乱によって一部を破壊されているが、長方形に近い平面形をもつようである。ただ、短辺は長辺と直角にはならない。残存長は170cm、幅が155cm、深さは7cmを測る。断面は皿形となる。埋土は褐灰色粘性砂質土である。遺物には土器と鉄片がある。土器は瓦器のみである。遺物から判断すれば、この土壤の年代は鎌倉時代前期である。

(岡本)

土壤158

12N区の南東隅で検出された。平面形は隅の丸い四辺形という感じである。対角線にあたる長径は125cm、深さは11cmを測る。塙103の柱穴で一部壊されている。位置的には建物137の屋内にある。底面はほぼ平坦で、断面は皿形を呈する。埋土は灰色粘性砂質土である。遺物は土器片のみである。土師器と須恵器と瓦器がある。遺物や埋土から判断して、この土壤の年代は鎌倉時代と考えられる。

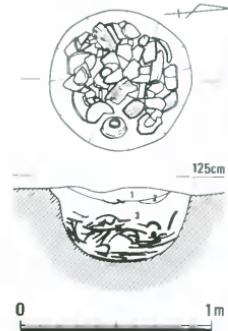
(岡本)

土壤159 (第290~298図、図版106~114)

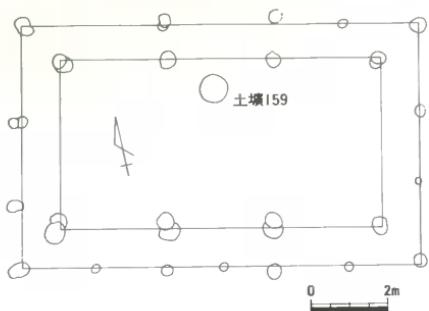
13O区の北西隅に位置する円形の土壤である。直径74cm、深さは39cmを測る。底面はゆるやかに湾曲し、塙壁の傾斜は急角度のため、断面は半円に近い椀形を呈する。塙内堆積土は3層に分けられるが、第2層の黒色土は灰や炭の層で、第3層に含まれた大きなブロックとみることも可能である。土壤に充填された土(第3層)と、埋没後の陥没部分に流れ込んだ土(第1層)と解釈できる。

塙内からは大量の土器片がぎっしり詰められた状態で出土した。しかし、完形のまま出土したものはほとんどなく、いずれも破碎された状態であったが、接合・復元をしてみると完形になるものが多く、故意に破碎して埋めたようである。

さらに、これらの土器の多くに火を受けた痕跡が顕著に認められ、色調が赤褐色や淡赤色に変化したり、復元できないほど大きく歪んだり、また瓦器では、吸着されていた炭素が燃えて、土師器と同様の色調を示すものが多くみられた。次に、出土した土器の種類や器種をみると、土師器の椀と皿がそれぞれ20~30個体と多く、次いで、瓦器の椀と皿が合わせて20個体あり、他に土鍋が2点、三足焗が2点、竈1点、東播系須恵器のこね鉢が大小各1点、備前焼の椀が1点、大形品としては、東播系の甕、亀山焼の甕、常滑焼の甕が各1点、最後に、舶載の白磁碗が1点含まれていた。このように他種類で器種も豊富な一括資料であるが、これに前述の点

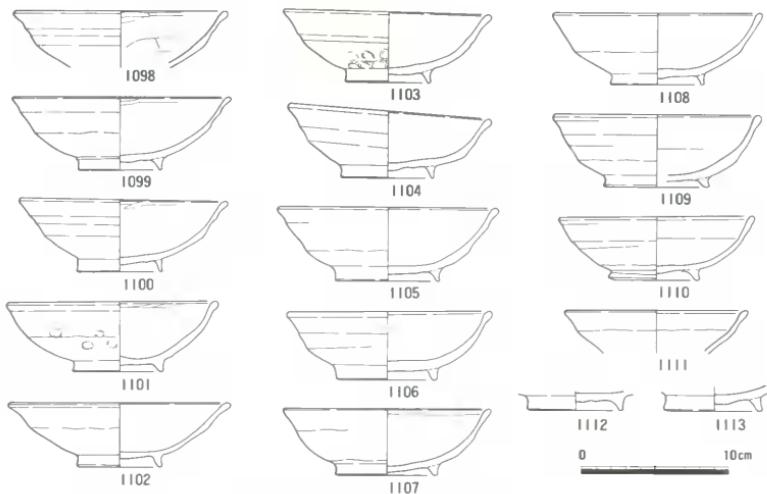


第290図 土壌159 (1/30)

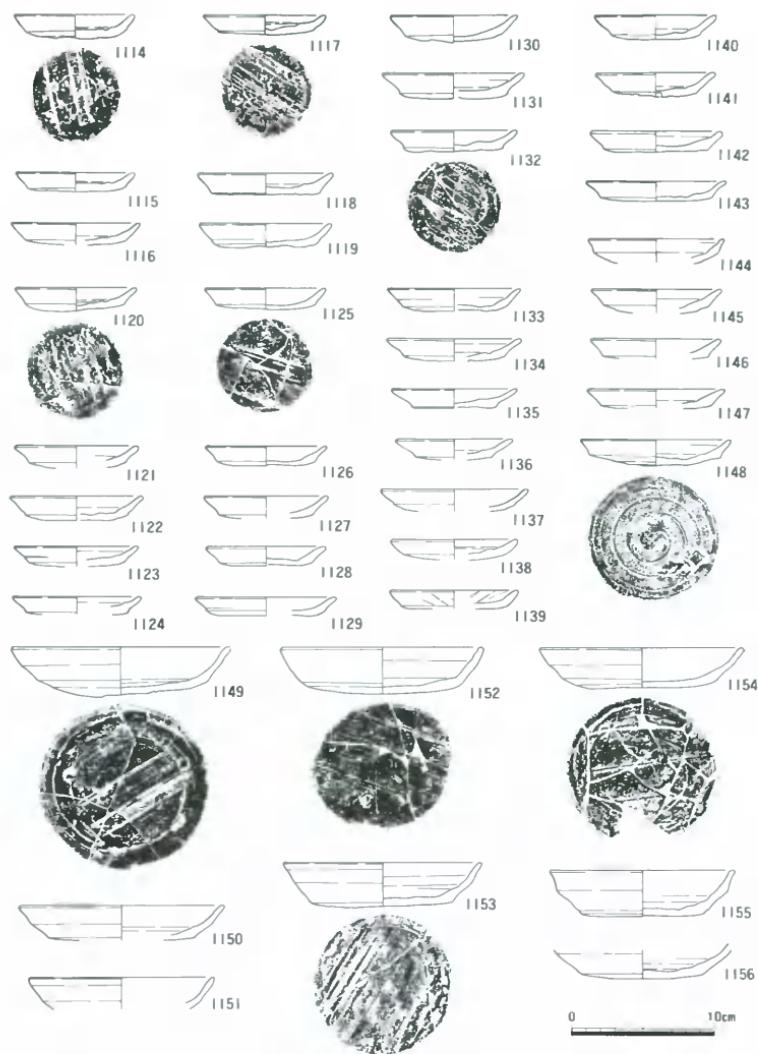


第291図 建物138・土壤159位置関係 (1/150)

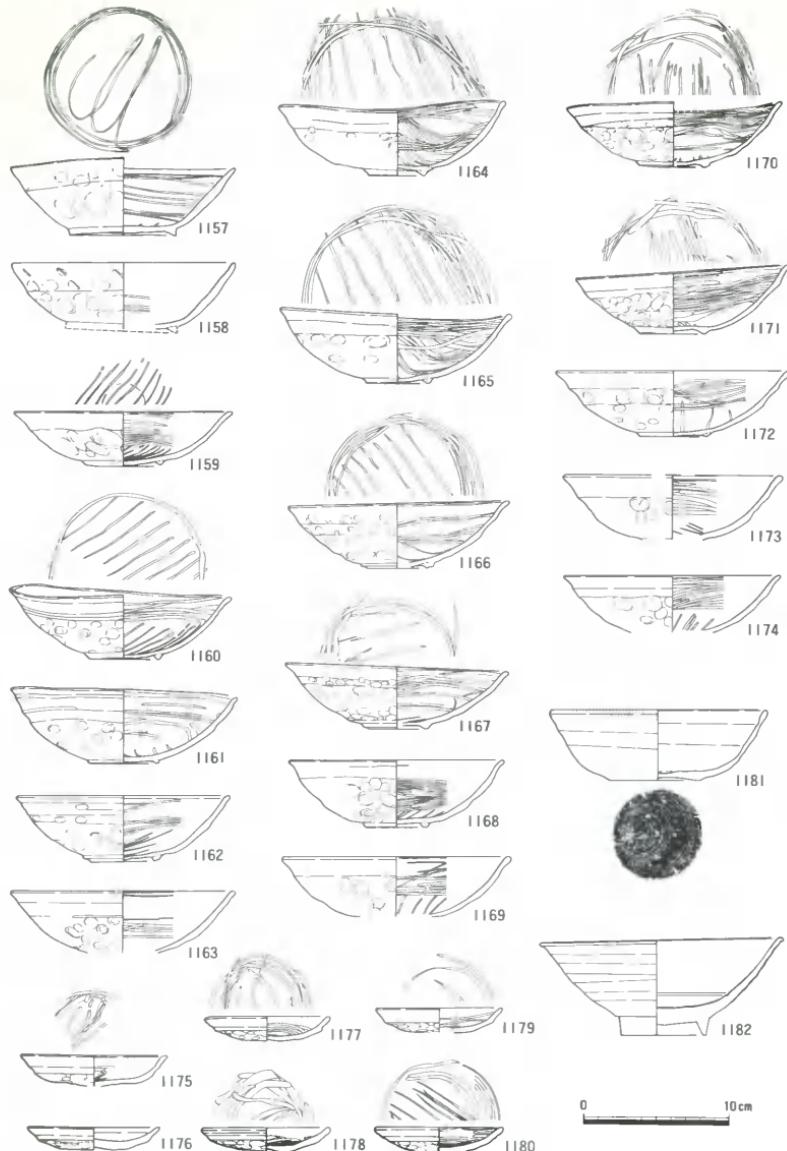
約70cm南に土壤の中心がある（第291図）。このような位置は、寺院等の大規模な建物では地鎮具の出土する場所であり、建物の中心という意識に関わる位置を占めている。さらに注意されることは、建物138の柱穴5から焼けた柱根が出土していることである。もしこの事実から、建物138が火災にあったことが言えるとすれば、土壤出土の土器が火を受けていることの説明を得る手掛かりになる。つまり、この土壤から一括して出土した土器群は建物138に居住していた世帯で日常使用されていたもので、建物138の火災によって破碎された後、なんらかの目的をもつ



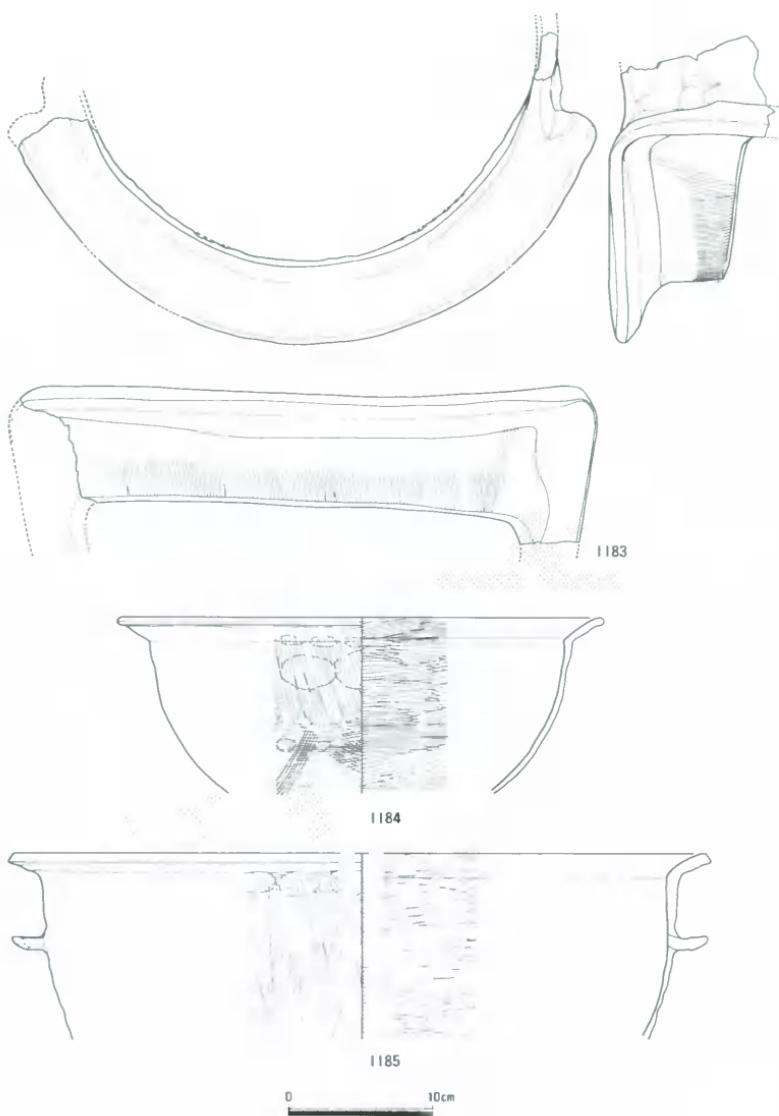
第292図 土壤159出土遺物[1]



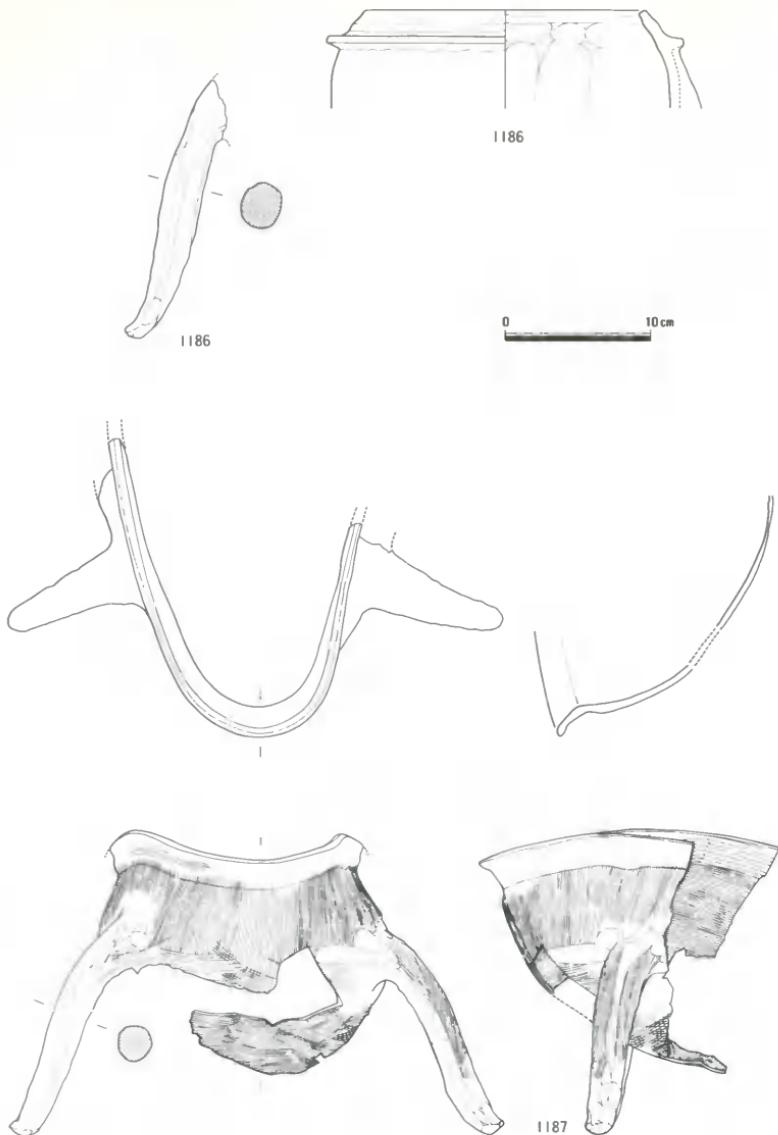
第293図 土壌159出土遺物(2)



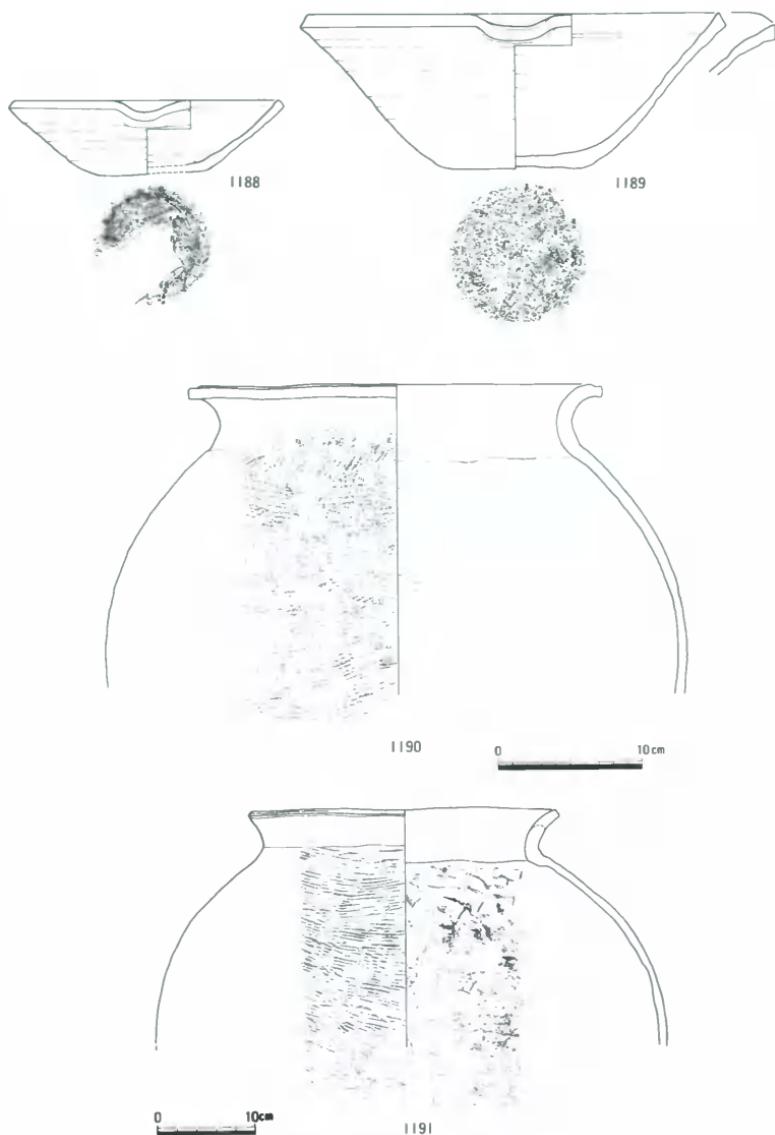
第294図 土壌159出土遺物[3]



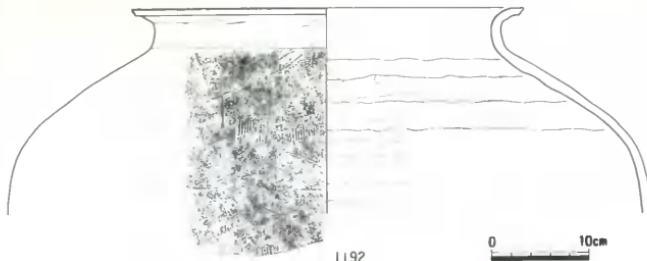
第295図 土壌159出土遺物〔4〕



第296図 土壌159出土遺物〔5〕



第297図 土壌159出土遺物〔6〕(1/4・1/6)



第298図 土壌159出土遺物〔7〕(1/6)

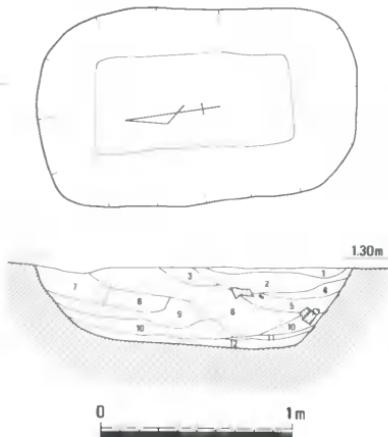
て集められ、一括して土壌に埋納されたものと考えるのである。建物138の身舎の柱穴は8基あるが、このうち5基では建て替えによるとみられる柱穴の重複があり、この建て替えが火災によるものとすれば、その再建にあたっての宗教的儀式の一つとして土器の埋納がなされたと考えられる。そこまでの宗教的儀式があったかどうかは別としても、この土壌159と建物138は深い関係にあることは確かである。

(岡本)

土壌160

13N区の南端に位置する。平面形は不整形な方形をなし、長径120cm、短径97cm、深さは10cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は皿状を呈する。建物138の柱穴16によって一部を壊されている。遺物は土器と木片があった。土器は土師器と須恵器である。土器の示す年代から考えると、この土壌の年代は平安時代末期から鎌倉時代前期であろう。

(岡本)



- | | |
|-----------|------------|
| 1. 淡灰色粘質土 | 7. 灰褐色粘質細砂 |
| 2. 淡灰色粘質土 | 8. 淡灰茶褐色土 |
| 3. 茶褐色細砂 | 9. 灰褐色粘質土 |
| 4. 淡灰茶褐色土 | 10. 灰褐色粘土 |
| 5. 灰褐色土 | 11. 灰色粘土 |
| 6. 灰茶褐色細砂 | 12. 灰色粘土 |

第299図 土壌161(1/30)

土壌161 (第299図、図版105)

13N区の中央付近に位置する。隅丸長方形を呈する土壌である。土壌の規模は、長辺が166cm、短辺が102cmを測る。底面の平面形も長方形を呈するもので、長辺102cm、短辺48cmを測る。底面は、南に向けて少し傾

第3章 第2節 遺構・遺物

斜するが、平坦である。残存する深さは、検出面から42cmを測る。この土壙は、井戸130の北西部分に重複して検出されたものであり、井戸より新しい。土壙の長軸方向は、ほぼ北を向く。土壙の時期は、室町時代と考えられる。

(井上)

土壙162

140区の中央部西寄りで検出された。平面形は不整形な椭円形である。規模は、長径が175cm、短径は137cm、深さはわずか8cmにすぎない。底面は平坦で、断面は皿形となる。埋土は炭化物の小片を少し含む灰褐色粘質土である。出土遺物は炭と土器片である。土器には土師器と須恵器がある。これらの遺物の年代等から判断すると、この土壙の年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

土壙163（第300図）

140区の南半に位置し、土壙164によって一部を削られている。平面形は残存部から判断すれば方形に近い。長径は86cm、深さは11cmである。底面はほぼ平坦で、断面は皿形となる。埋土は2層に分かれ、上層は淡灰褐色粘質土、下層は淡茶灰褐色粘質土である。遺物はごく少量の土師器片のみである。遺物の年代は平安時代末期と考えられる。

(岡本)

土壙164（第300図）

140区の南半に位置し、前述の土壙163を一部削っている。平面形は卵形で、長径109cm、

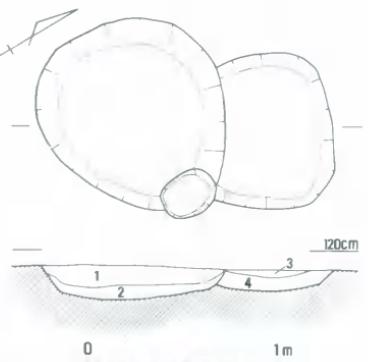
短径95cm、深さは18cmを測る。底面は平坦に近く、断面は皿形を呈する。埋土は2層に分けられ、上層は灰色粘土斑灰褐色粘質土、下層は灰褐色粘質土である。遺物としては、土器と石器が出土地した。土器は須恵器・土師器・瓦器で、石器は弥生時代の石庖丁である。出土した土器の年代は平安時代末期とみられるが、土壙163との切り合いの関係があるため、土壙の年代は鎌倉時代初期まで降るかもしれない。

(岡本)

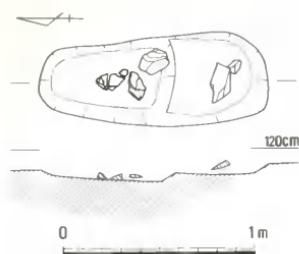
土壙165

140区の南半に位置する円形の土壙である。直径は56cm、深さは24cmを測る。底面は平坦に近く、円筒状を呈するため、柱穴の可能性があるが、埋土は灰白色粘土と灰色粘性砂質土とがブロック状になって混合していて、柱痕跡は確認されなかった。遺物は土器片のみである。土師器と須恵器と瓦器がある。遺物から考えると、この土壙の年代は鎌倉時代後期である。

(岡本)



1. 灰色粘土斑灰褐色粘質土 3. 淡灰褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土 4. 淡茶灰褐色粘質土
第300図 土壙163(右)・164(左) (1/30)

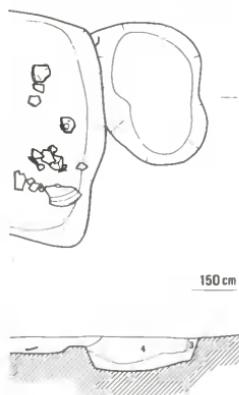


第301図 土壙166 (1/30)

土壙166 (第301図)

150区の北端中央付近で検出された。平面形は長楕円形を呈し、長径119cm、短径47cmを測る。底面は2段になっていて、最深で9cmである。壙内には、長径10～20cmの角礫の割石が数個散乱していた。この土壙は建物139と重複関係にあり、同時には存在しない。出土した遺物は土器片のみである。土器には土師器と須恵器と瓦器がある。この土壙の年代は、遺物から判断すれば、鎌倉時代であろう。

(岡本)



第302図 土壙167 (1/30)

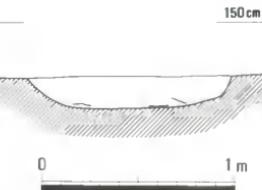
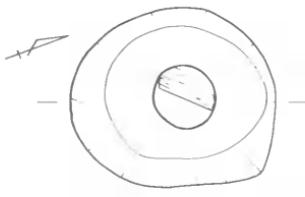
土壙167 (第302図、図版45)

170区の北半に位置する。土壙131と重複して検出したものである。埋土の色調、土質は両者ともによく似るものであったが、断面観察の結果としては、土壙131が新しい。土壙167は、平面形は、楕円形に近い形状を呈しており、長径78cm、短径54cmを測る。底面は、中央部が少し窪むも、ほぼ平坦で、底面の形態は、中間がくびれるも、長円形を呈する。検出面からの深さは18cmを測る。土壙内の出土遺物としては、中世の土器片が数片出土している。時期としては不明である。

(井上)

土壙168 (第303図、図版115)

170区の東半で検出された、円形を呈する土壙である。土壙の規模は、長径106cm、短径96cmを測る。底面の平面形も円形を呈するもので、長径84cm、短径68cmを測る。残存する深さは、検出面から17cmを測る。底面は、ほぼ平坦であり、その中央部分に半円形に板の残滓を検出した。板の外側には、板を埋むように、円形に浅い溝が巡るものである。溝に閉まれる円形の径は22cmを測る。溝の幅は0.5cm、深さ1cm程度のものであり、形状か



第303図 土壙168 (1/30)

らして、曲物が埋置されていたものと考えられる。時期は、明確なものは不明であるが、他の遺構の埋土等と比べて、中世のものと考えられる。

(井上)

土壤169 (第304図)

14P区の南西部で検出された。平面形は不整形な円形をなし、規模は長径153cm、短径144cm、深さ17cmを測る。底面はゆるやかに湾曲し、断面は皿形を呈する。埋土は2層に分けられる。出土遺物は土器片のみで、土師器・須恵器・瓦器がある。埋土やこれらの遺物から、この土壤の年代は鎌倉時代と考えられる。

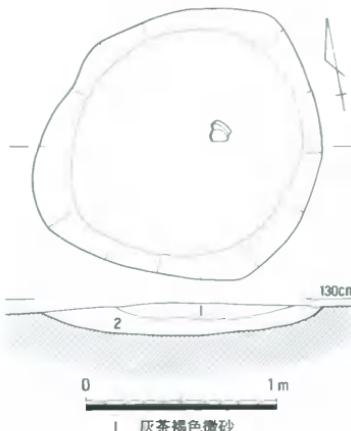
(岡本)

土壤170 (第305図)

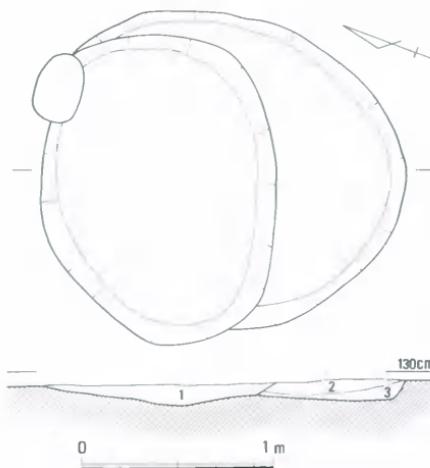
14Q区の東半に位置し、土壤171によって大きく破壊されている。検出当初は、土壤171と170を1基の土壤とみていたが、その後、重複した2基の土壤であることがわかった。平面形は橢円形と推定され、残存部分で長径190cm、深さ12cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は皿形をなす。埋土は2層に分けられる。遺物は土師器の楕の破片のみである。遺物と土壤171の年代から判断して、この土壤の年代も鎌倉時代ではないかと考えられる。(岡本)

土壤171 (第305図)

14Q区の東半に位置し、前述の土壤170を破壊して掘られている。平面形は橢円形を呈し、長径164cm、短径125cm、深さは12cmを測る。底面は平坦ではなく、中央部から縁辺へ向かってじょじょに高くなっている。埋土は灰色微砂のみである。出土遺物は土器片のみで、土師器と須恵器がある。遺物

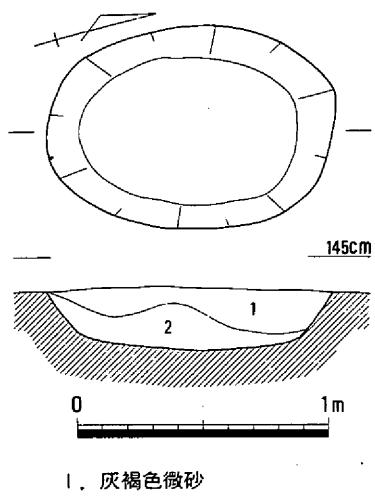


第304図 土壌169 (1/30)



1. 灰色微砂 2. 淡黄灰色微砂 3. 淡灰色微砂

第305図 土壌170(右)・171(左) (1/30)



第306図 土壙172 (1/30)

層に黄褐色土のブロックが多いという違いだけである。出土遺物には土器片と貝がある。土器は土師器と須恵器と瓦器があり、亀山焼とみられるこね鉢もみられる。これらの遺物から考えると、この土壙の年代は鎌倉時代とみられる。

(岡本)

土壙173

15Q区の南半に位置する。溝120によってかなり破壊されているため、規模や全形は不明確である。残存部分は隅丸の長方形に近く、長軸方向で60cmの残存である。短軸方向は55cmを測る。出土遺物には、土器片・鉄片・貝・種子・骨片がある。土器は土師器と須恵器と白磁、それに綠釉である。種子はモモ、骨はウマではないかとみられる。土器の年代は平安時代末期と考えられ、のことや、溝120との切り合い関係から、この土壙の年代もその頃であろう。(岡本)

土壙174 (第307図)

15Q区の南半に位置し、溝115を一部破壊して掘られている。平面形は長円形で、長径は49cm、短径が42cm、深さは8cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は皿形となる。埋土は3層に分けられるが、第2層は炭層で、第1層の淡褐灰色粘性砂質土と第3層の灰褐色粘性砂質土に挟まれ、サンドウイッチのようになっている。遺物は土器片のみで、土師器と須恵器がある。遺物から判断すれば、この土壙の年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

土壙175 (第308図)

16Q区の北端で検出された楕円形の土壙である。長径145cm、短径120cmを測り、深さはわずか8cmにすぎない。底面は平坦に近く、断面は

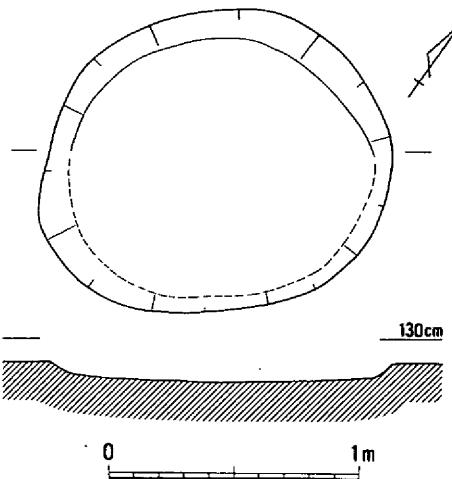
皿状をなす。位置的には建物157と160の屋内にある。壙内からは少量の土器片と貝が出土している。土師器・須恵器・瓦器・青磁があり、土鍋の脚もみられる。これらの遺物等から判断して、この土壙の年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

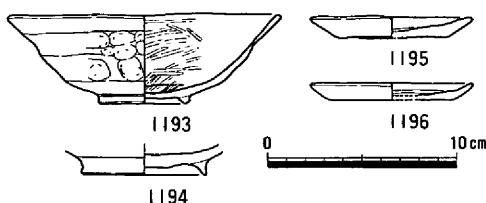
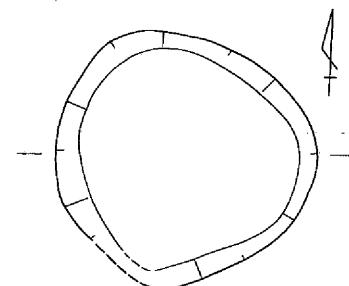
土壙176（第309図）

16Q区の中央部西寄りに位置する。建物157の柱穴によって一部破壊されている。平面形は不整円形で、長径105cm、短径100cmを測る。底面は平坦ではなく、凹凸がある。深さは最大でも14cmで浅く、断面は皿状に近い。埋土は黄褐色粘土斑灰色粘性砂質土で、中世の建物の柱穴埋土と等しい。位置的にはどの建物の屋内にも存しない。遺物には鉄器と土器と貝がある。鉄器は釘の頭のようである。土器には土師器と瓦器があり、それらの年代は鎌倉時代前期と考えられる。埋土からみても、この土壙の年代は鎌倉時代としてよい。

(岡本)



第308図 土壙175 (1/30)



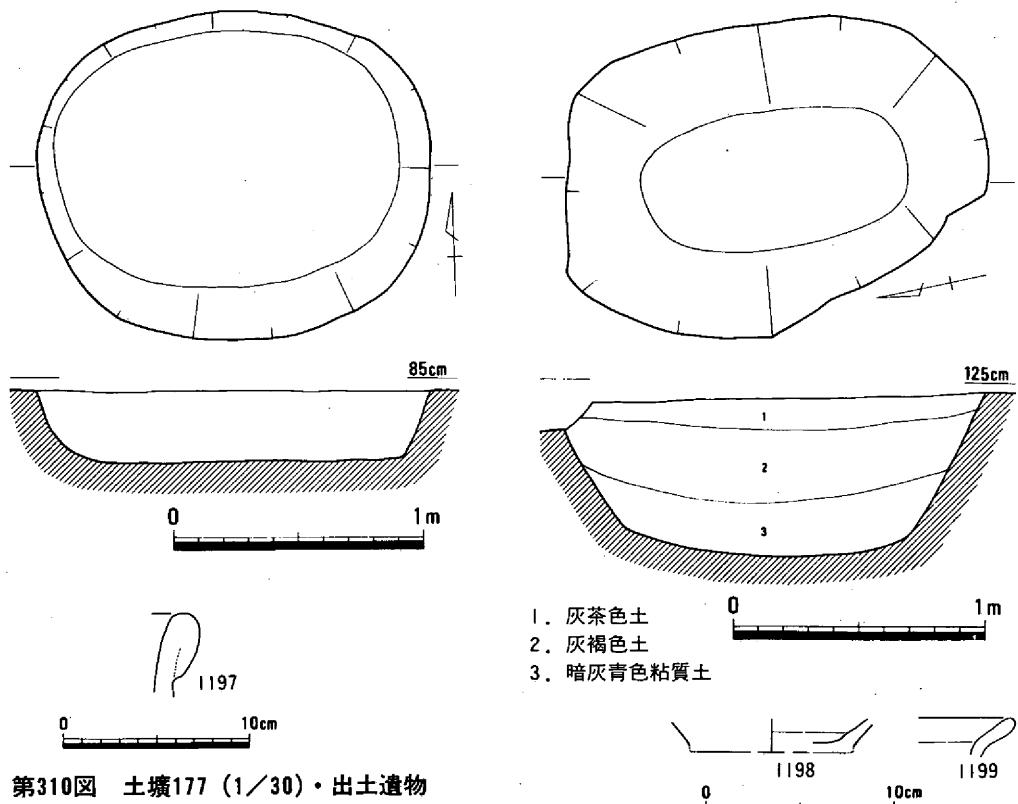
第309図 土壙176 (1/30)・出土遺物

土壙177（第310図、図版116）

1985年度調査区の13R区で検出した楕円形の土壙で、溝122の埋没後につくられている。規模は長さ137cm、幅131cm、深さ28cmを測る。

壁は急斜で、垂直に近い部分もある。底部は平坦である。埋土は白黄色や灰褐色粘土塊を含む灰白色粘質土で、一気に埋め戻された状況を呈している。遺物は土器の細片がわずかに出土した。時期は溝122より新しく、中世末～近世以後と考えられる。

(平井勝)



第310図 土壙177 (1/30)・出土遺物

土壙178 (第311図、図版116)

1985年度調査区の13R区で検出した楕円形を

呈する土壙である。規模は長さ166cm、幅125cm、深さ63cmを測る。

壁は急斜で、底部は中央がやや深くなる。遺物は、須恵器の杯や土師器の鍋など少量の土器片が出土した。

時期は中世と考えられる。

(平井勝)

土壙179 (第312図、図版117)

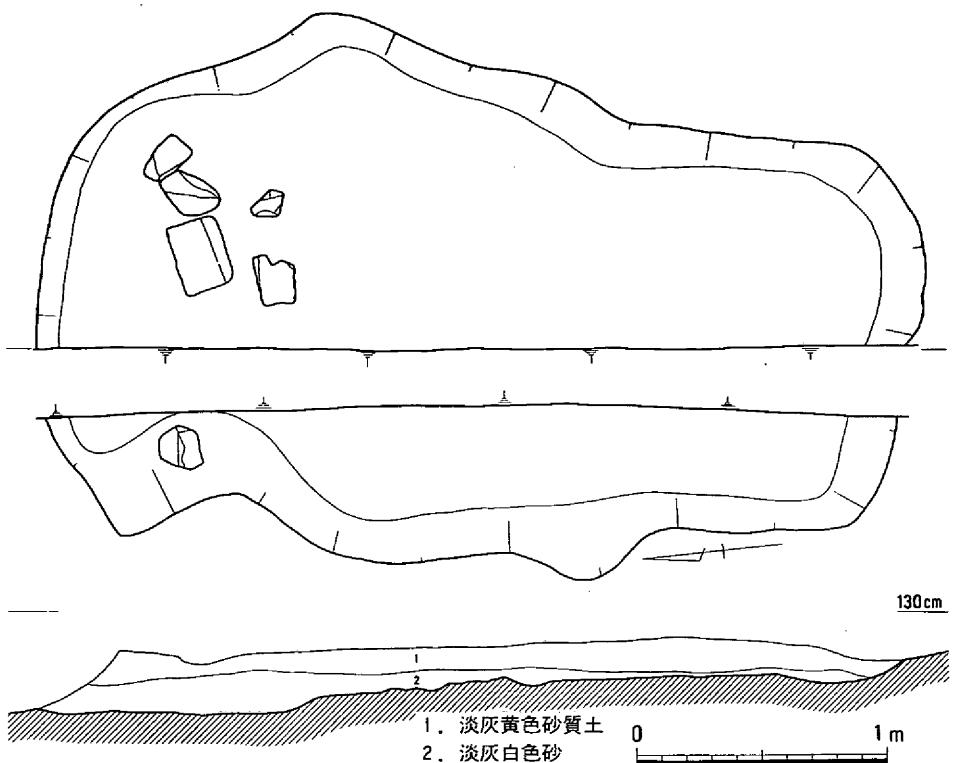
1985年度調査区の15R区で検出した長方形形状を呈する土壙で、北端をわずかに溝122に切られている。規模は長さ353cm、幅228cm、深さ24cmを測る。

壁は緩やかに立ち上がり、底部は凹凸があり、北側がやや深い。また北端近くの底部には石が置かれている。

遺物は土器片が少量出土した。図示し得たものはいずれも須恵器の杯であるが、中世の土師器片も認められる。

時期については、溝122との切りい関係から、それより古いものであり、土器は奈良時代から中世に比定されるものを含む。

(平井勝)



第312図 土壌179 (1/30)・出土遺物

土壤180 (第313図、図版117)

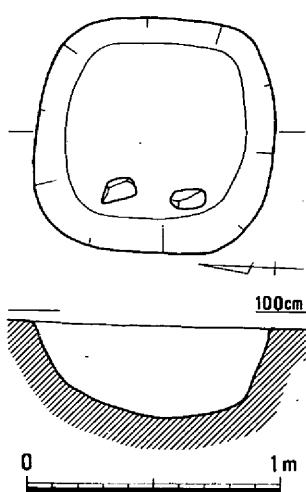
1985年度調査区の16R区で検出した隅丸方形を呈する土壌で、溝

122の埋没後につくられている。規模
は最大幅南北で95cm、東西94cm、深
さ37cmを測る。

壁は急斜で、垂直に近い部分もあ
る。底部は中心に向かって緩やかに深くなる。埋土は灰白色粘

土塊を含む暗灰褐色土で、一気に埋
め戻されたような状況を呈する。な
お底部西端には石が二個置かれて
いた。

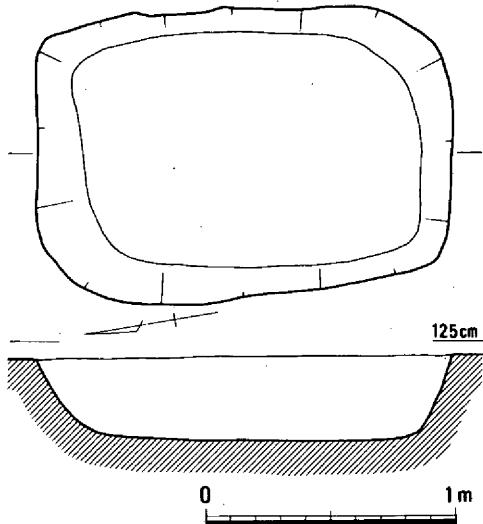
遺物はわずかに土器片が出土した。
1202は土師器椀の底部、1203は備前
焼の壺の胴部である。時期について



第313図 土壌180 (1/30)・出土遺物

は、溝122との関係から中世末～近世以後と考
えられる。

(平井勝)



第314図 土壌181 (1/30)

土壌181 (第314図、図版118)

1985年度調査区の16R区で検出した長方形状

を呈する土壌で、溝122の埋没後につくられている。規模は長さ165cm、幅117cm、深さ33cmを測
る。壁は急斜で、垂直に近い部分もある。底部は平坦である。埋土は灰褐色土で、少量の土器片
が出土した。

時期は中世末～近世以後と考えられる。

(平井勝)

土壌182 (第315図、図版118)1985年度調査区の16・17R区で検出した楕円形を呈する土壌で、溝122の埋没後掘られてい
る。長さ163cm、幅110cm、深さ39cmを測る。壁は急斜で、底は平坦である。

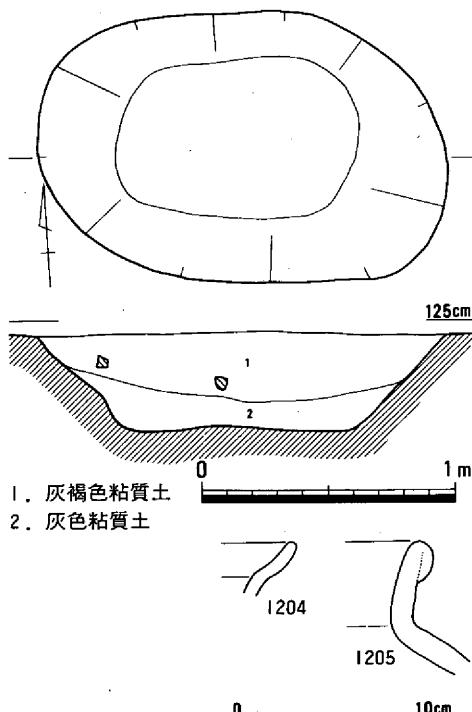
埋土には若干の礫を含む。遺物は、備前焼の甕と土師器の鍋が出土した。

時期については、出土した土器は15世紀代のものであるが、土壌掘削時の混入と考えられる
ことから、溝122との関係で中世末～近世以後に比定しておきたい。

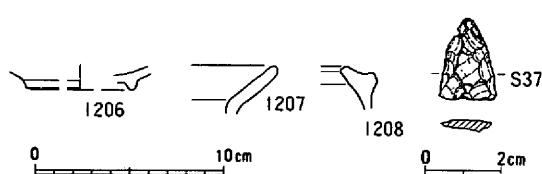
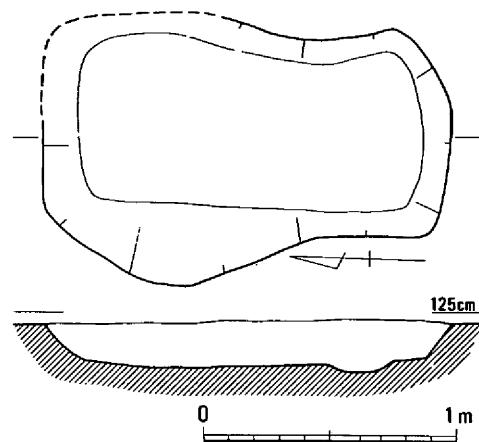
(平井勝)

土壌183 (第316図、図版119)1985年度調査区の17R区で検出した長方形を呈する土壌で、北東端は溝122に切られている。
長さ154cm、幅110cm、深さ19cmを測る。壁は急斜で、底部はほぼ平坦である。

埋土は灰色を呈する砂質土で、少量の土器片と石鎚が出土した。

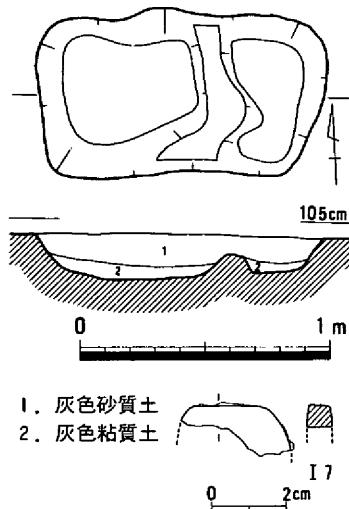


第315図 土壌182 (1/30)・出土遺物

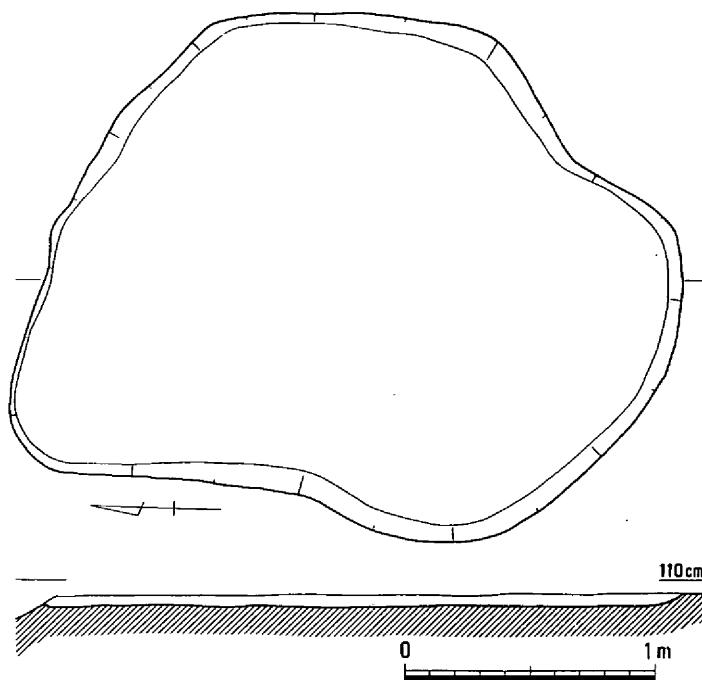


第316図 土壌183 (1/30)・出土遺物

時期については溝122との関係から鎌倉時代と考えられる。
(平井勝)



第317図 土壌184 (1/30)・出土遺物



第318図 土壌185 (1/30)

土壌184 (第317図、図版119)
1985年度調査区の17S

区で検出した長方形を呈する土壌で、長さ117cm、幅67cm、深さ18cmを測る。底部はほぼ平坦であるが、土壌を仕切るような低い土手が横方向に認められる。

遺物は土器の細片と用途不明の鉄片が出土した。

時期については遺物から判断できないが、溝123を切って掘られていることから、中世末から近世

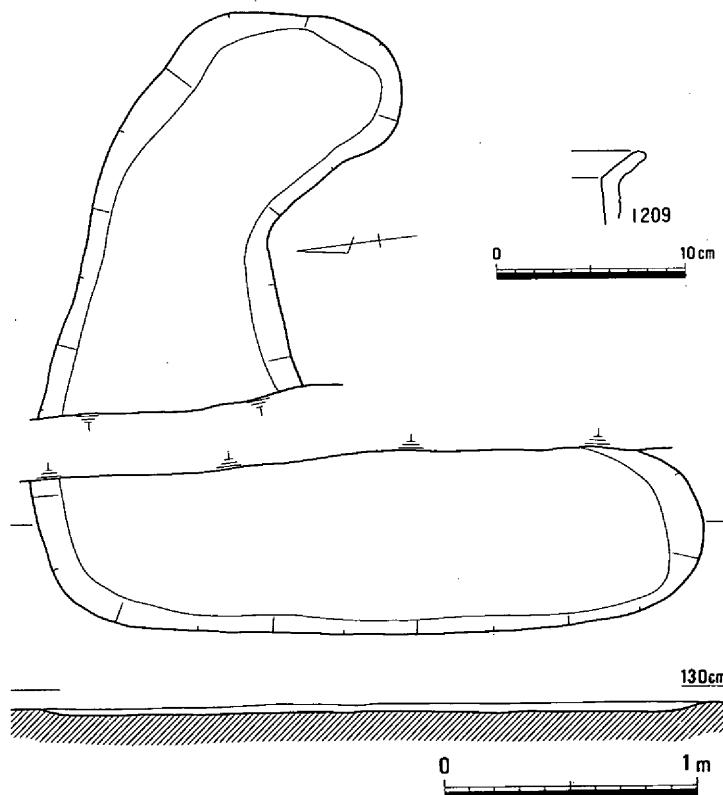
以後と考えられる。

(平井勝)

土壤185 (第318図)

1985年度調査区の18S区で検出した不整形な土壤で、北端を一部溝122に切られている。最大幅は南北で268cm、東西214cm、深さ5cmを測る。埋土は淡灰白色砂でわずかに土器の細片が出土した。時期は中世である。

(平井勝)



第319図 土壌186 (1/30)・出土遺物

土壤186 (第319図)

1985年度調査区の18S区で検出した不整形な土壤で、検出面からの深さは浅く、わずか4cmである。

壁の立ち上がりは緩やかで、底部はほぼ平坦である。埋土は炭や焼土粒を含む茶灰色粘質土で土器の細片がわずかに出土した。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。

(平井勝)

土壤187 (第320図、

図版120)

1983年度調査区の19S・T区で検出した不整形の土壤である。規模は南北の最大幅200cm、東西の最大幅150cm、深さ31cmを測る。

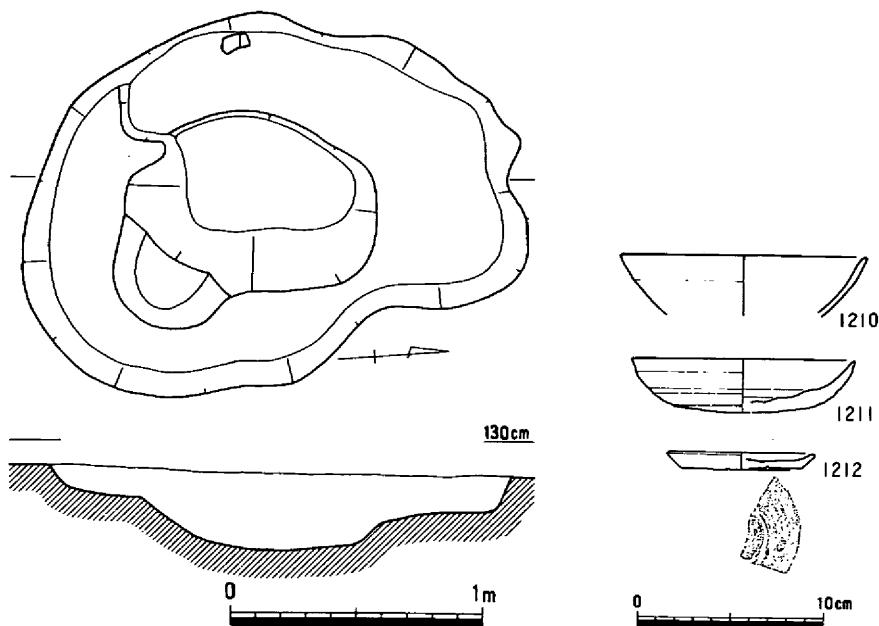
壁は急斜に立ち上がり、底部は中央部が一段深くなる。埋土は黄褐色土塊を含む淡灰褐色砂質土である。遺物は土師器碗や皿の破片が少量出土した。

時期は鎌倉時代と考えられる。

(平井勝)

土壤188 (第321図)

1983年度調査区の19S区で検出した土壤で、土壤189に南東角を切られている。規模は長さ95cm、幅66cm、深さ21cmを測る。

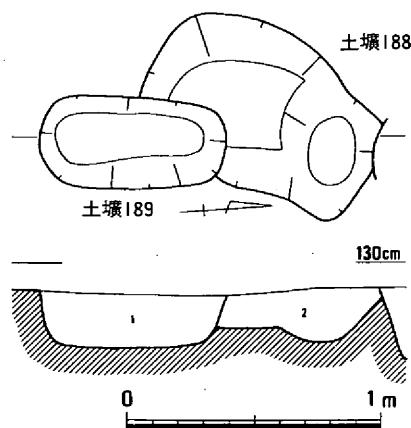


第320図 土壙187 (1/30)・出土遺物

壁の立ち上がりは急斜で、底部は北東部が一段深くなる。埋土は淡茶黄色土で、土器の細片がわずかに出土した。

時期は中世と考えられる。

(平井勝)



第321図 土壙188・189 (1/30)

土層上面で検出し、深さは16cmを測る。

埋土は灰褐色土で、遺物は全く出土しない。

時期は検出面から中世以前と考えられる。

(平井勝)

土壙189 (第321図)

1983年度調査区の19S区で検出した隅丸長方形の土壙で、土壙188を切ってつくられている。規模は長さ74cm、幅36cm、深さ21cmを測る。

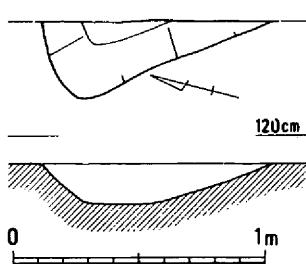
壁の立ち上がりは垂直に近く、底部はほぼ平坦である。埋土は茶黄灰色土で、土器の細片がわずかに出土した。

時期は中世と考えられる。

(平井勝)

土壙190 (第322図)

1983年度調査区の21R区で検出した土壙で、東側は低水路によって削平されている。暗黄灰褐色



第322図 土壙190 (1/30)

土壙191 (第323図、図版120)

1983年度調査区の21S区で検出した楕円形の土壙である。

規模は長さ267cm、幅170cm、深さ57cmを測る。

壁は緩やかに立ち上がり、底部は平坦である。埋土は黄灰褐色砂質土で、一気に埋め戻された状況を呈していた。

遺物は須恵器、土師器、備前焼等の細片と土錐が出土した。

時期は、奈良時代の土器を含むが、15世紀と考えられる。

(平井勝)

土壙192 (第324図)

図)

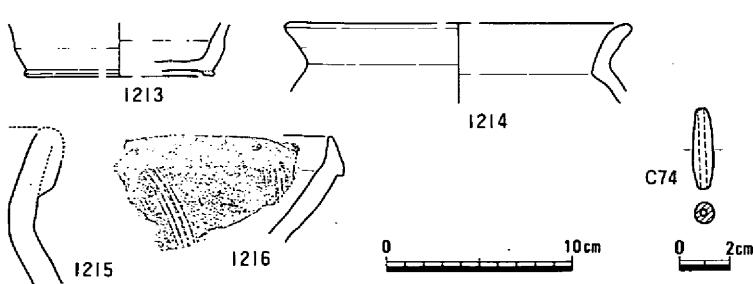
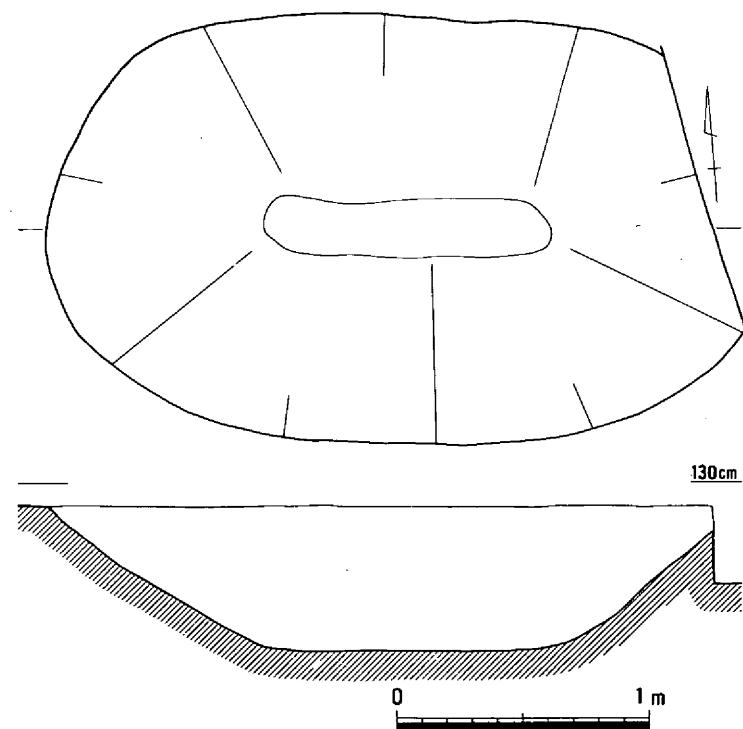
1983年度調査区の21T区で検出した楕円形の土壙で、南北95cm、東西75cm、深さ26cmを測る。

壁の立ち上がりは急斜で、底部は平坦である。埋土は茶黃灰色土で、遺物は出土しなかった。時期は検出面から中世と推定される。

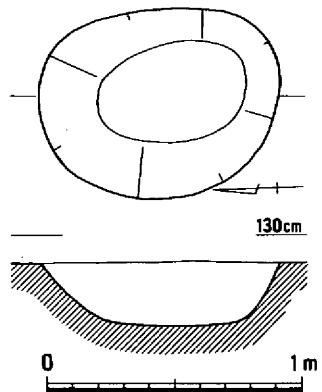
(平井勝)

土壙193 (第325図、図版121)

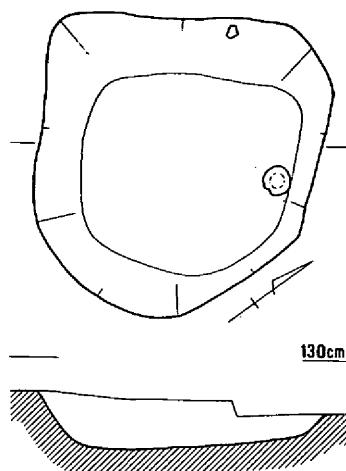
1985年度調査区の18T区で検出した隅丸方形状の土壙である。規模は最大幅120cm、深さ



第323図 土壙191 (1/30)・出土遺物



第324図 土壙192 (1/30)



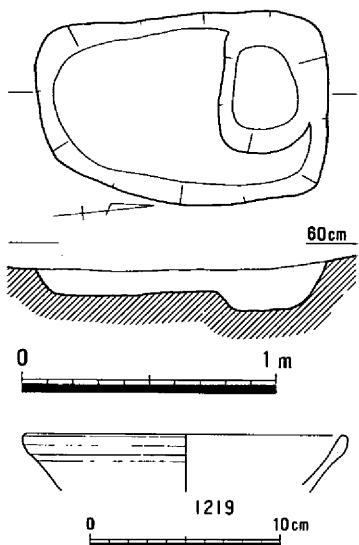
20cmを測る。

壁の立ち上りは急斜で、底部は平坦であるが、北東側がやや浅くなる。埋土は灰白色粘質土である。遺物は北東寄りの底部からほぼ完形の土師器碗1点と北西端から白磁片が1点出土した。

時期は出土土器から13世紀代と考えられる。(平井勝)

土壙194 (第326図、図版121)

1985年度調査区の16W区で検出した長方形の土壙である。



第325図 土壙193(1/30)・出土遺物 規模は長さ115cm、幅77cm、深さ16cmを測る。

壁の立ち上りは急斜で、底部は平坦であるが、北西隅は一段深くな

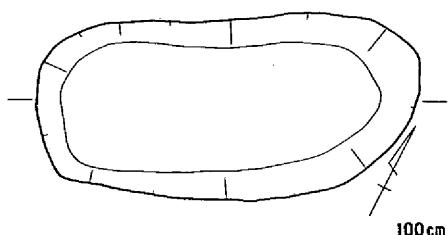
第326図 土壙194 (1/30)・出土遺物

っている。埋土は明灰色粘質土で、土器の細片がわずかに出土した。図示し得たのは白磁碗である。

時期は出土した土器の細片から中世と考えられる。(平井勝)

土壙195 (第327図)

1985年度調査区の17W区で検出した隅丸長方形に近い長楕円形状の土壙で、溝123が埋没後につくられている。規模は長さ152cm、幅74cm、深



第327図 土壙195 (1/30)

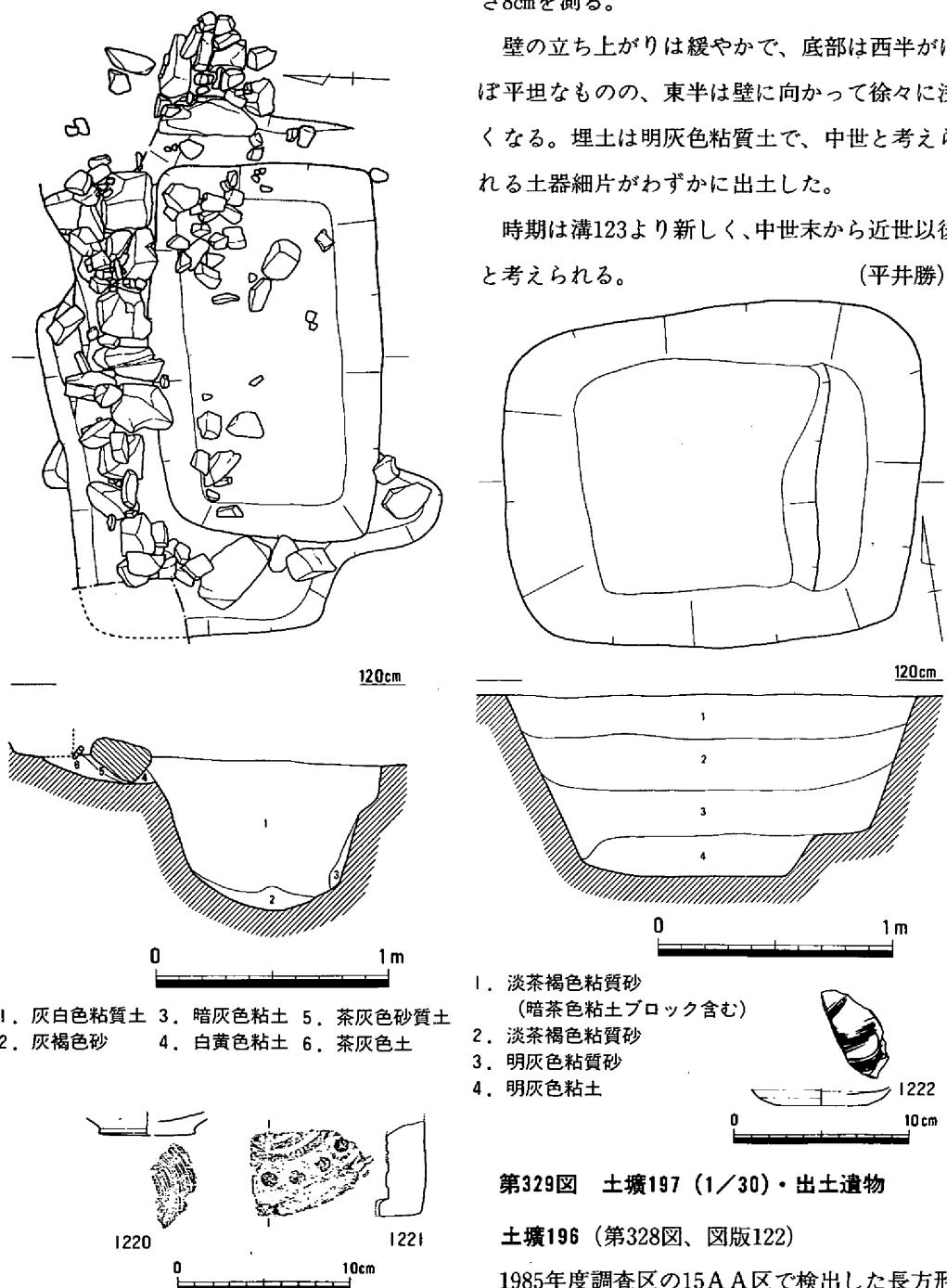
3 平安時代後期～室町時代

き8cmを測る。

壁の立ち上がりは緩やかで、底部は西半がほぼ平坦なもの、東半は壁に向かって徐々に浅くなる。埋土は明灰色粘質土で、中世と考えられる土器細片がわずかに出土した。

時期は溝123より新しく、中世末から近世以後と考えられる。

(平井勝)



第328図 土壙196 (1/30)・出土遺物

ものであるが、おそらく溝124の埋没後につくられたものと推定される。

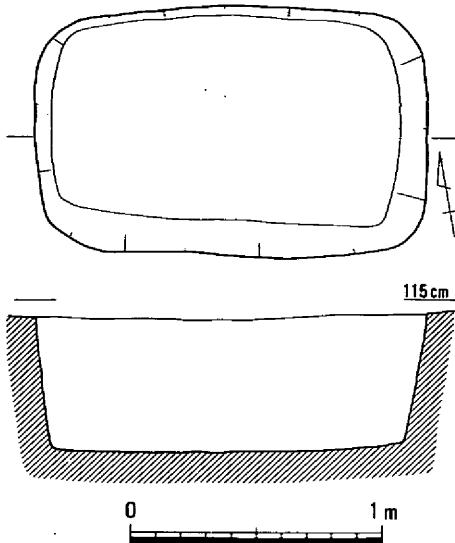
土壙上には、土壙を縁取るように石を配しているが、南側にはない。配石下の土壙は長さ162

第329図 土壙197 (1/30)・出土遺物

土壙196 (第328図、図版122)

1985年度調査区の15AA区で検出した長方形

の土壙である。溝124の掘り下げ途中で検出したものであるが、おそらく溝124の埋没後につくられたものと推定される。



第330図 土壙198 (1/30)

時期は検出面および土器の細片から中世と考えられる。

(平井勝)

土壙198 (第330図、図版123)

1985年度調査区の15・16AA区で検出した長方形の土壙で、溝123の埋没後につくられている。規模は長さ156cm、幅102cm、深さ54cmを測る。壁は垂直に近い立ち上がりで、底部は平坦である。埋土は灰黒色粘土塊を含む灰色土で、一気に埋め戻された状況が推定される。遺物は土器の細片がわずかに出土した。

時期は溝123より新しく、中世末から近世以後と考えられる。

(平井勝)

土壙199 (第331図、図版124)

1985年度調査区の15AA区で検出した上部に石を配する土壙で、溝124の埋没後につくられたものと考えられる。配石は土壙の上面全体を覆い、ほぼ方形を呈している。

配石下にある土壙は、配石除去後に検出することができず、溝124を掘り下げた段階で明確になった。このため土壙の南端については正確でないが、東西辺の南角の曲り具合から、配石の範囲を大きく越えないものと推定される。したがて土壙の規模は南北が106cm+40cm内外以内、東西97cm、深さ47cmとなる。

壁の立ち上がりは比較的緩やかで、底部は中央がやや低くなるものの、ほぼ平坦である。埋土は灰色粘質土で、土器の細片がわずかに出土した。

時期は溝124より新しく、中世末から近世以後と考えられる。

(平井勝)

土壙200 (第332図、図版124)

1985年度調査区の16AA区で検出した長楕円形を呈する土壙で、溝124によって上部は削平さ

cm、幅102cm、深さ64cmを測る。

遺物は土器片と瓦片がわずかに出土した。

1221は軒丸瓦で、外区に連珠文がめぐり、内区は巴文が配される。

時期は溝124より新しく、中世末から近世以後と考えられる。

(平井勝)

土壙197 (第329図、図版123)

1985年度調査区の15AA区で検出した長方形の土壙で、長さ180cm、幅148cm、深さ78cmを測る。

壁は急斜に立ち上がり、底部は平坦であるが東端は一段高くなる。

遺物は土器の細片がわずかに出土した。

時期は検出面および土器の細片から中世と考えられる。

(平井勝)

土壙198 (第330図、図版123)

1985年度調査区の15・16AA区で検出した長方形の土壙で、溝123の埋没後につくられている。規模は長さ156cm、幅102cm、深さ54cmを測る。壁は垂直に近い立ち上がりで、底部は平坦である。埋土は灰黒色粘土塊を含む灰色土で、一気に埋め戻された状況が推定される。遺物は土器の細片がわずかに出土した。

時期は溝123より新しく、中世末から近世以後と考えられる。

(平井勝)

土壙199 (第331図、図版124)

1985年度調査区の15AA区で検出した上部に石を配する土壙で、溝124の埋没後につくられたものと考えられる。配石は土壙の上面全体を覆い、ほぼ方形を呈している。

配石下にある土壙は、配石除去後に検出することができず、溝124を掘り下げた段階で明確になった。このため土壙の南端については正確でないが、東西辺の南角の曲り具合から、配石の範囲を大きく越えないものと推定される。したがて土壙の規模は南北が106cm+40cm内外以内、東西97cm、深さ47cmとなる。

壁の立ち上がりは比較的緩やかで、底部は中央がやや低くなるものの、ほぼ平坦である。埋土は灰色粘質土で、土器の細片がわずかに出土した。

時期は溝124より新しく、中世末から近世以後と考えられる。

(平井勝)

土壙200 (第332図、図版124)

1985年度調査区の16AA区で検出した長楕円形を呈する土壙で、溝124によって上部は削平さ

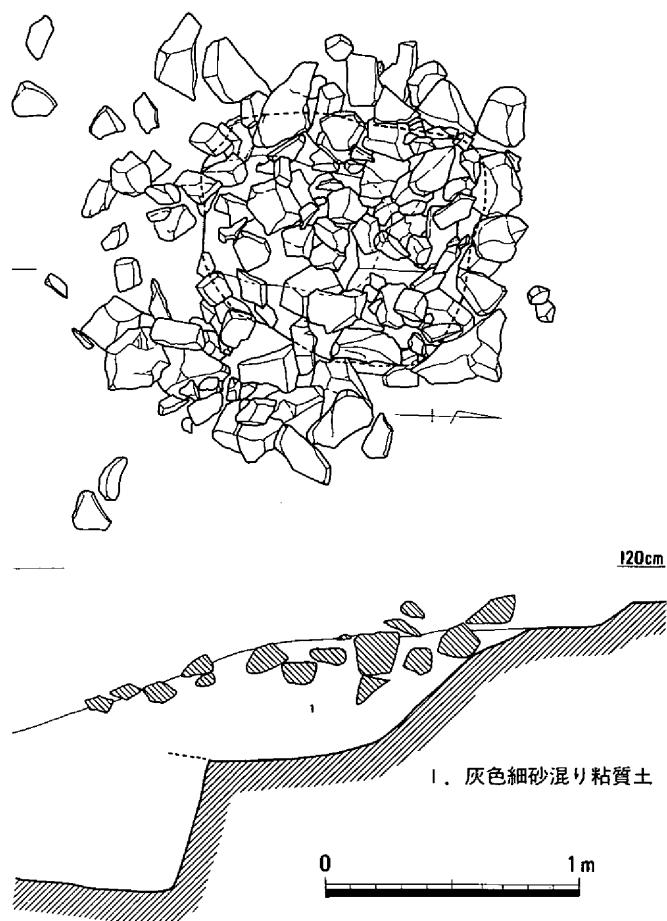
れている。規模は長さ153cm、幅92cm、深さ7cmを測る。

壁の立ち上がりは緩やかで、東端は明瞭でない。埋土は淡灰褐色砂で、土器片が少量出土した。時期は溝124より古く、土器からは鎌倉時代と考えられる。

(平井勝)

土壤201（第333図、図版125）

1985年度調査区の16AA区で検出した隅丸長方形状を呈する土壤で、溝124によって上部は削られている。規模は長さ226cm・幅117cm・深さ38cmを測る。



第331図 土壌199 (1/30)

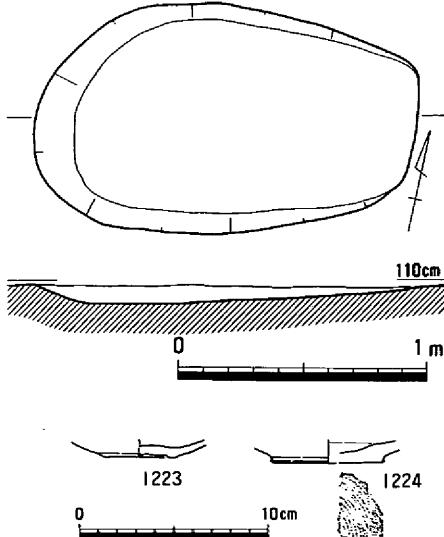
壁の立ち上がりは垂直に近く、底部はやや凹凸がある。遺物は土器の細片がわずかに出土した。時期については溝124より古く、土器の細片から中世と考えられる。

(平井勝)

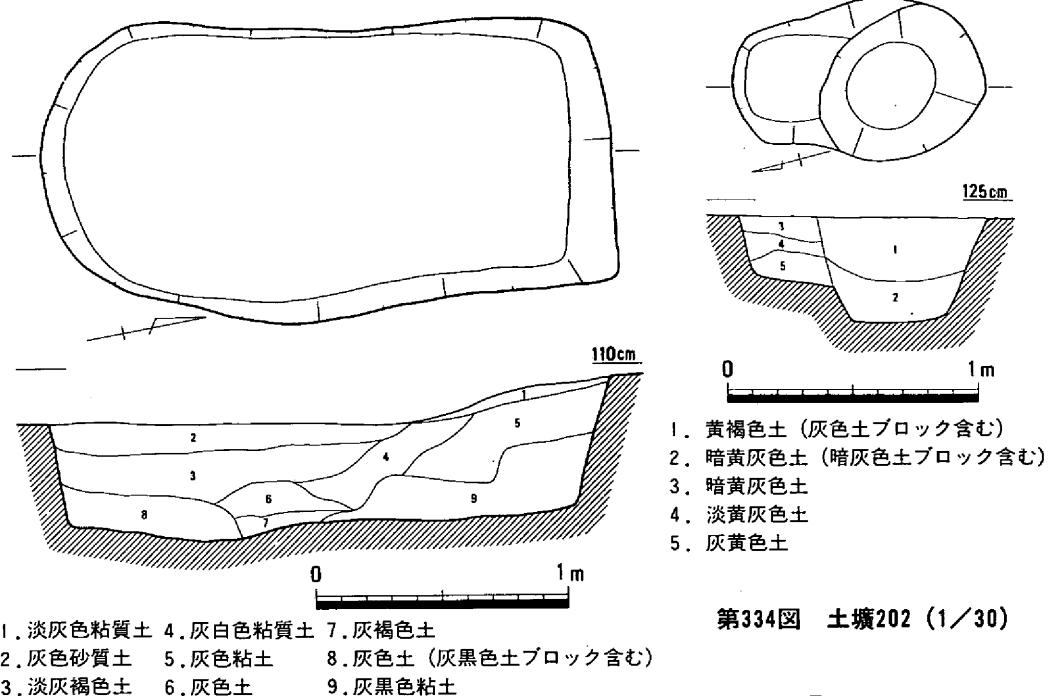
土壤202（第334図）

1985年度調査区の17Z区で検出した土壤であるが、隅丸長方形の土壤を長軸70cmを測る楕円形の土壤が切っている。切られている土壤は長さ80cm内外と推定される。深さは切られている方が27cm、切っている方が42cmである。

遺物はいずれの土壤からも土器の細片がわず



第332図 土壌200 (1/30)・出土遺物



第333図 土壌201 (1/30)

かに出土した。

時期は土器の細片から中世と考えられる。 (平井勝)

土壌203 (第335図、図版125)

1985年度調査区の16A A区で検出した長方形の土壌で、溝124に上部を削平されている。規模は長さ156cm、幅117cm、深さ25cmを測る。

壁は急斜に立ち上がり、底部は中央がやや深くなる。

時期は溝124より古いが、土器の細片は中世と考えられる。

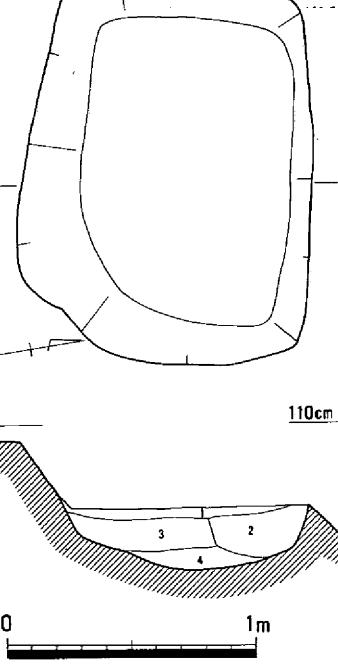
(平井勝)

土壌204 (第336図)

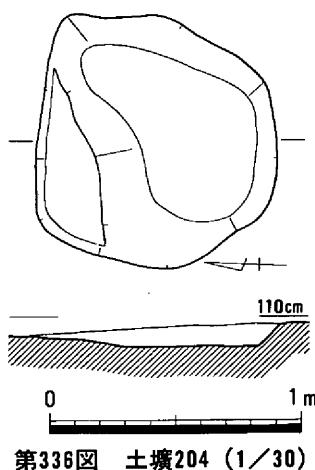
1985年度調査区の16A A・B B区で検出した略方形状を呈する土壌で、北端は溝124に切られている。

規模は南北96cm、東西100cm、深さ80cmを測る。

壁の立ち上がりは急斜で、底部は北西隅が1段高くなっている。埋土は灰色土で、土器の細片がわずかに出土し



第335図 土壌203 (1/30)



た。

時期については溝124より古いが、土器の細片は中世のものである。

(平井勝)

土壌205 (第337図)

1985年度調査区の17B B区で検出した隅丸方形状を呈する土壌で、溝124に北西端部を一部切られ、東側は低水路掘削時に削られていた。規模は南北で140cm、東西が130cm、深さ62cmを測る。

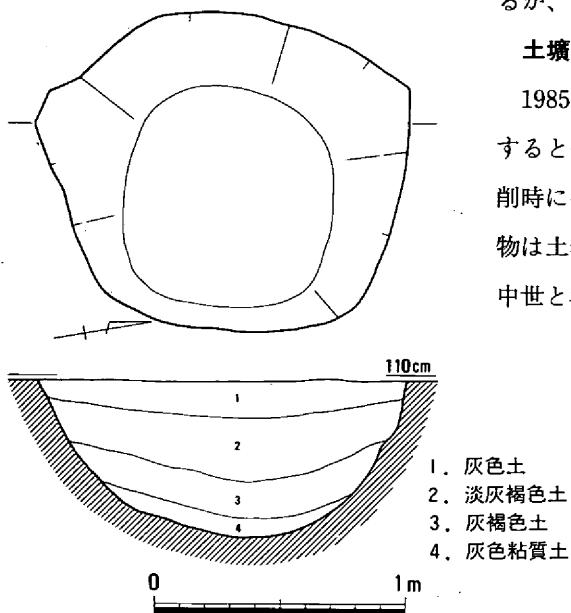
壁の立ち上がりは急斜で、底部は中央が深くなる。遺物は土器の細片がわずかに出土した。

時期は溝124との切合い関係から、それ以前であるが、土器の細片は中世と思われる。(平井勝)

土壌206

1985年度調査区の17B B区で検出した円形を呈すると推定される土壌であるが、東側の低水路掘削時に半分以上は削られたものと考えられる。遺物は土器の細片がわずかに出土しており、時期は中世と考えられる。

(平井勝)



e 溝

溝116（第338図）

第338図 溝116
(1/30)

15L区の東端に検出された。検出全長は5.4mで、幅は40cmを測る。きわめて浅く、検出部分から南については最近の搅乱によって消滅している。形状は直線的で、ほぼ南北方向に延び、N-11°-Eの方向を測る。この方向の40mほど南には溝119が位置し、溝116と119を通る線の方向は塀101や溝117・118とほぼ平行する。弥生土器らしい細片がわずかに出土しているが、この溝の年代は形態等から中世と考えたい。

(岡本)

溝117

18N区から17P区までほぼ直線的に延びる溝である。検出全長は19mを測り、さらに北方向へ続いている可能性が強い。幅は最大で27cmあり、埋土は暗灰褐色砂質土である。溝の方向はN-12°-Eを測り、平行関係は前述の溝116のとおりである。弥生時代後期と考えられる土器片がいくらくか出土しているが、溝の年代は、形態などから中世と考えられる。

(岡本)

溝118

18P区の東半で検出された南北方向に延びる溝である。直線的であるが、北へ向かうに従って幅を増す。最大幅は52cmである。検出全長は9mを測るが、北方へさらに延びていたものとみられる。埋土は灰色砂質土斑黄白色微砂である。溝の方向は約1mの間隔で近接する建物110の棟方向とほぼ平行するため、この建物の雨落ち溝の可能性もあるが、一方、溝117とも平行することから、埋土も考慮に入れて、溝の年代は中世と考えたい。

(岡本)

溝119

15P区の南西隅から14Q区の南東隅に位置する。直線的な溝で、ほぼ南北方向に延びている。6m分を検出したが、それより北は最近の搅乱によって消滅し、また、検出部分の南半も底が浅くなり、幅が減少している。最大幅は44cm、深さは7cmを測る。この溝を北へ延長すると、前述の溝116に達する。出土遺物としては土器がわずかにあるのみだが、青白磁の合子の身が完形で出土している。溝119の年代は鎌倉時代と考えられる。

(岡本)

溝120（第339・340図、図版78~80）

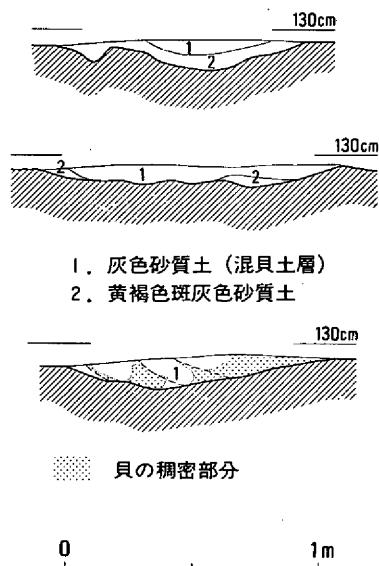
15Q区の中央よりやや南に位置し、ほぼ東西方向に伸びる溝である。後述するように、次に説明する溝121と対になり、建物157と関連する施設と考えられる。底面はきわめて凹凸に富み、肩部の線もかなり出入りがあり、溝全体としてもわずかに湾曲している。このように、大形の建物157に伴う溝としてはいささかふつり合いな複雑な様相を呈しているが、全長10m、幅は0.

5~1.2m、深さは3~16cmを測る。溝内の埋土は2層に分けられる。このうち上層は混貝土層になっていて、この溝が最終的には生活廃棄物の投棄によって埋没したことを見ている。

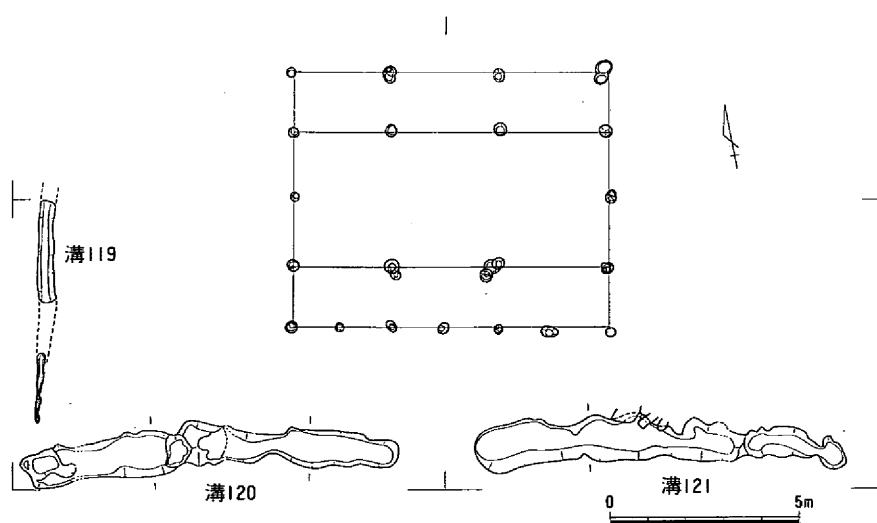
出土遺物は土器と貝である。土器では、土師器、須恵器、瓦器、白磁がみられる。これらの土器の年代は平安時代末期頃かと考えるが、建物157の柱穴から出土した遺物には鎌倉時代初期のものがあり、この溝の年代としては平安時代末期から鎌倉時代初期までの幅を考えるべきであろうか。
(岡本)

溝121（第339・340図、図版78~80）

16Q区の南半に位置する。前述の溝120と対になり、建物157に伴うと考えられる。底面・肩部の線とともに溝120と同様、複雑な形状を示している。溝全体もやはりわずかに湾曲していて、溝120とよく類似している。全長は9.5m、幅は0.6~1.2m、深さは6~13cmを測る。埋土はほとんど混貝土層の灰色砂質土であり、溝120と同じく、生活廃棄物の投棄によると思われる。この溝の断面では、貝の稠密部分がブロック状に認められ、その観察から、第339図の破線のような細分が可能であり、この溝が北から徐々に埋まっていたことがわかる。



第339図 溝120(上・中)・121(下)(1/30)



第340図 溝120・121・建物157位置関係 (1/200)

出土遺物は土器と鉄器と貝である。土器には土師器、須恵器、瓦器がみられる。鉄器は角釘が2本出土している。土器の年代は溝120と同じと考えられる。

以上のように、溝120と121は形態も年代もよく類似し、その間にある2mほどの空き地の真北に建物157の中心が位置することから、建物157の屋敷地を画する溝と考えている。ちなみに、建物157の底の柱穴列からこの溝までの距離は2.5mである。ただ、溝120から121までの走行方向は建物157の桁行方向よりわずかに北へ振るようであり、出土遺物の年代に若干の差があるようみられることも、溝の方が古いだけに、少し気になるところである。 (岡本)

溝122（第341～356・377～383、図版126～132）

調査区の南部で「工」字状に検出された大溝（溝122、123、124）および溝125は、同時に機能していたものであるが、便宜的に北側を東西に流走するものを溝122、南北に流走するものを溝123、そして南側を東西に流走するものを溝124として説明を加える。

溝122は1983年度と1985年度に調査を実施しており、まず1985年度調査区の13～19R・S区について述べる。

東西に流走する溝122は、その途中の17R区で南北に流走する溝123が取り付く。ここから西はやや溝幅を狭め、西端はさらに狭くなる。溝の検出面での幅は18ライン付近で6.7m、16ライン付近で5.2m、西端で2.8mを測る。

溝の壁の立ち上がりはやや緩やかで、途中に一担平坦面を形成している。底部はほぼ平坦であるが、16R区から19R区の中央は溝状に一段深くなっている。15R区の溝底部に穿たれた大きな土壙に続く。この土壙の南側には溝に突出部を付設したような抉り込みがあり、14R区にも底部に土壙はないが同じような施設が認められる。なお14R区から西の底部は平坦でなくなり中央が深くなっている。埋土は大きく3層に大別され、A-A'でいえば第1層が1層、第2層が2層、第3層以下が3層であり、西端の断面でいえば第1層が1層、第2層が2層、第3層が3層になる。

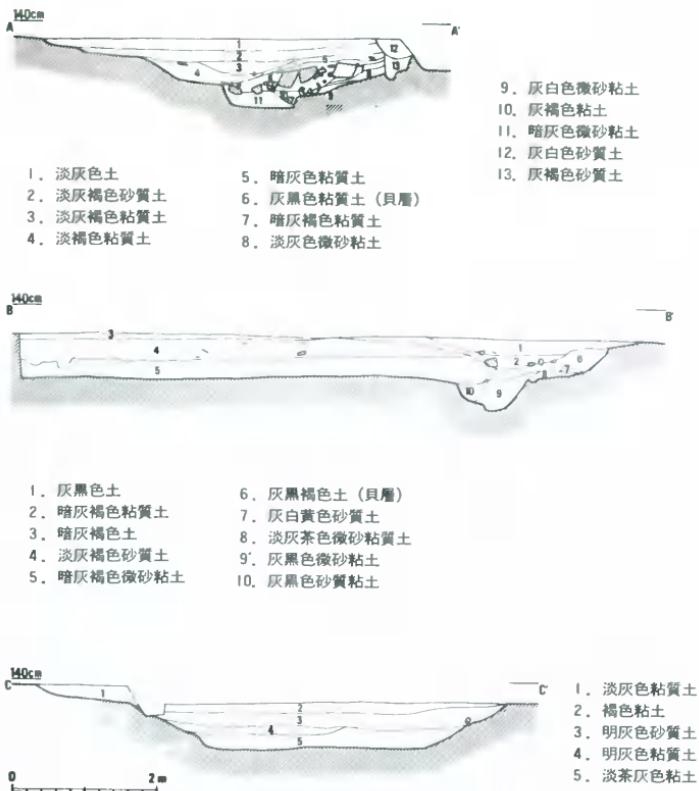
貝層が広範囲に認められるが、すべて北側から廃棄されたように、北側が高く、中央に向かって流れ込んでいる。貝はハイガイが多く、ついでヤマトシジミが認められる。また石も多く廃棄されており、1層には少ないものの、2・3層には多い。その状況は溝全体に広がっているが、貝層と同様、北側から廃棄されたものと考えられる。

遺物は1層中には少なく、2・3層と貝層に多く認められた。1層中の遺物としては土師器、瓦器、須恵器、備前焼、土錐、鉄製品などがある。1225と1226は土師器の皿と椀である。1227～1229は瓦器である。1230は小片であるが、小さな脚が付く円形の台になると見えられる。1231は火鉢である。1232・1234～1236は備前焼である。1233は東播系のこね鉢である。

C75～C85は土錐で、多少中央がふくらむものの円柱状の細いもの(C75～C82)とやや太



第341 溝122 (1/200・1/80) [1]

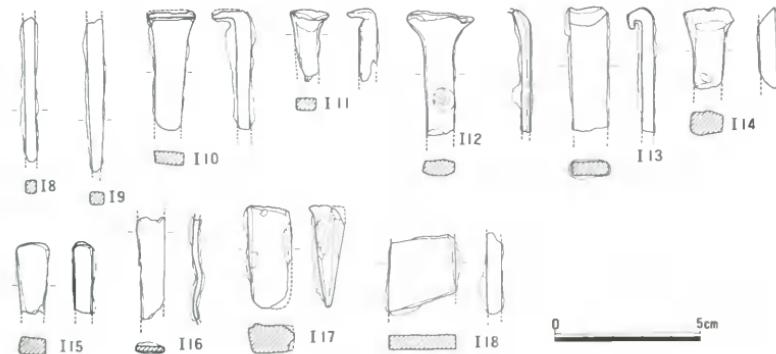
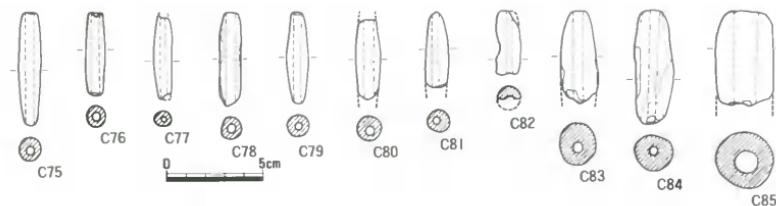
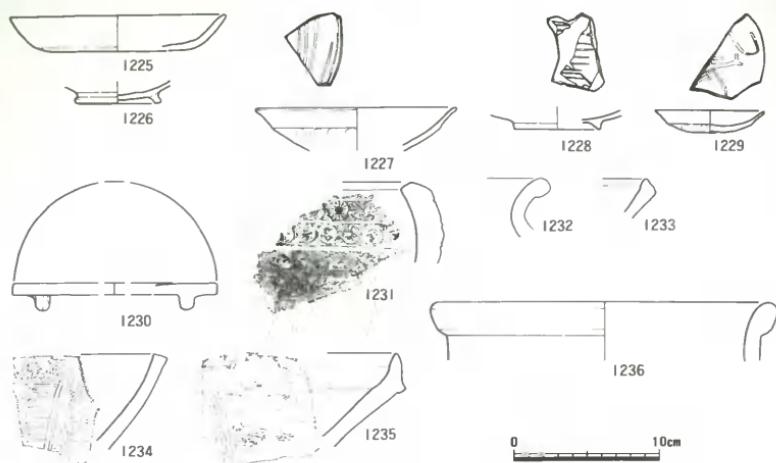


第342図 溝122 (1/80) [2]

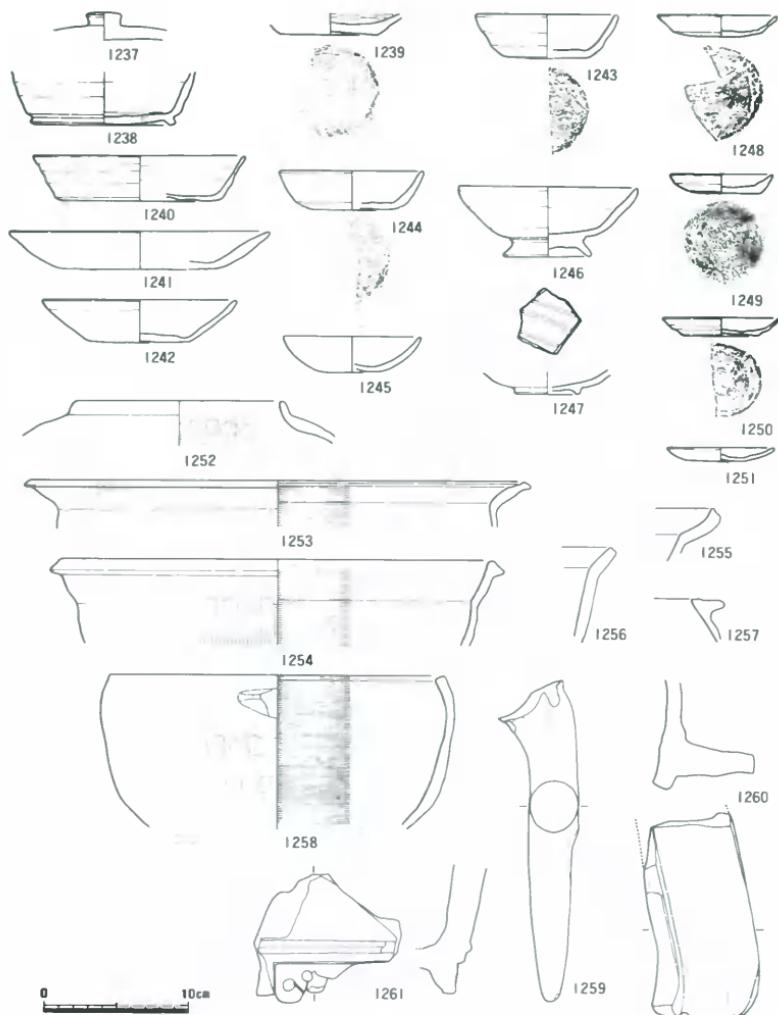
いもの (C83、C84)、そして太いもの (C85) の3種類がある。

鉄製品は、I 8と I 9が釘、I 17は楔、I 16と I 18は用途不明品である。I 10～I 15は断面が扁平な身にやや幅広で折れ曲った頭部をもつものであり、釘と考えられる。

2層出土の遺物には須恵器、土師器、瓦器、備前焼、青磁、白磁、瓦、土錘などがある。1237～1239は須恵器で、1237は碁石状のつまみをもつ杯蓋、1238は高台をもつ杯、1239は高台のない杯である。1240は土師器の杯で、内外面ともに丹塗りである。1241・1242は土師器の皿である。1243・1244は備前焼の皿で、底部には糸切り痕が認められる。1246は土師器のやや高い高台の付く碗である。1245は土師器の皿で、中央が少し凹んでいる。1247は瓦器碗である。1248～1251は土

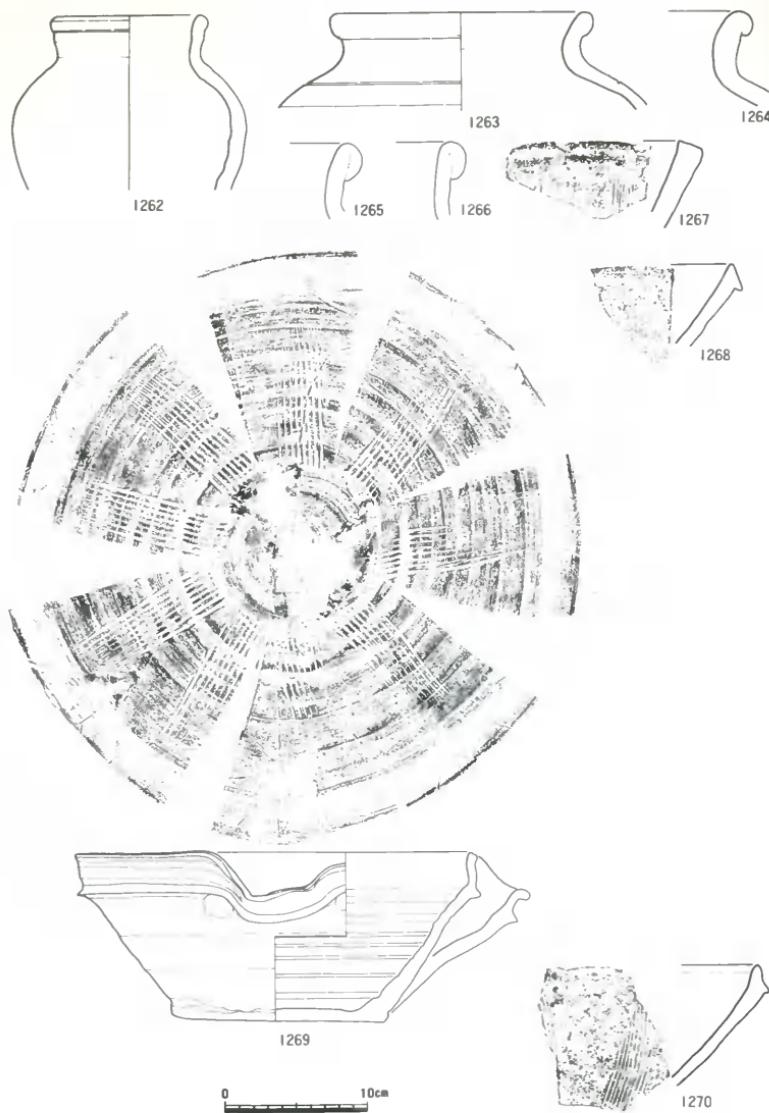


第343図 溝122 1層出土遺物

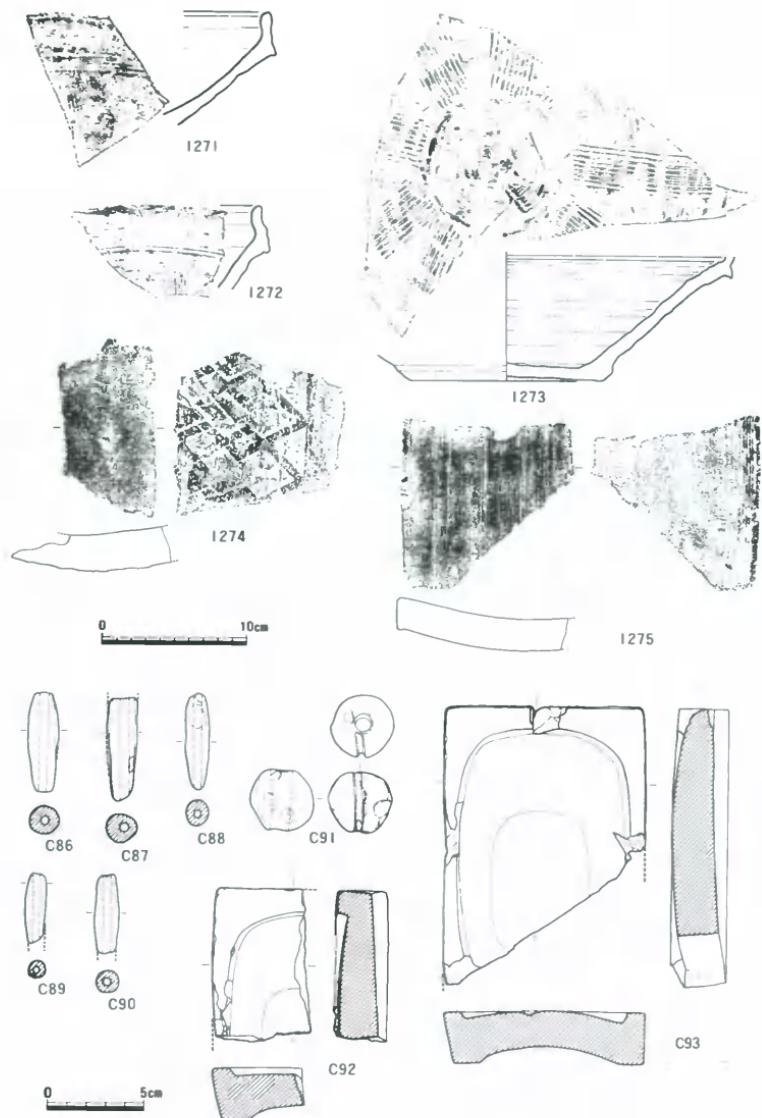


第344図 溝122 2層出土遺物〔1〕

師器の小皿である。1252は瓦器蓋である。1253は土師器鍋である。1254は口縁部が外反し、端部は外方へ拡張される。1258は内湾ぎみに立上る口縁部をもち、外面には把手がつく。1256は胴部からゆるく外反した短かい口縁部がつく。1255は「く」字状に外反した口縁部の端を上方



第345 溝122-2層出土遺物〔2〕



第346図 溝122 2層出土遺物〔3〕



第347図 溝122 2層出土遺物〔4〕

につまみ上げている。1257は瓦器の鍋である。1259は土師器鍋の脚である。1260は土師質のカマドである。

1261は瓦器の火鉢と考えられる。

1262～1273は備前焼である。1262は中形の壺で、口縁端部は少し厚みをもつ。1263は大形の壺で、外反した口縁端部は玉縁状になっている。1264～1266は甕で、1265と1266は口縁端部の折り返しが大きくなっている。1267～1273は擂鉢である。1267は口縁部に拡張は認められないが、1268は下方に少し拡張している。1270は口縁端部が上下に拡張される。1269はほぼ完形品で、口縁端部は上方へほぼ垂直に拡張されている。内面には8本を一単位とした条線が9単位垂下している。1271～1273も口縁端部の上方への拡張が著しい。

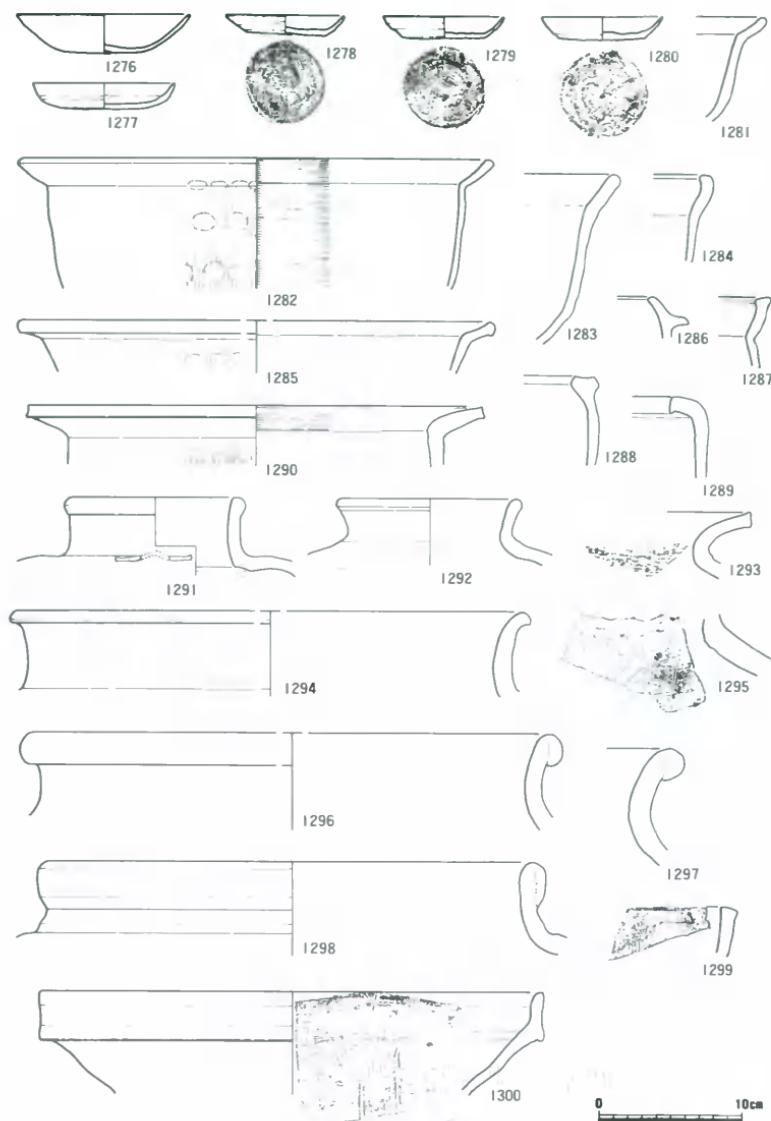
1274・1275はいずれも平瓦である。1275は両面ともにナデで仕上げられている。

C86～C91は土錘である。C86～C90は中央がやや太くなるが、ほぼ円柱状を呈する。C91は円形で、中央に穴が貫通し、その上下を結ぶように細い溝がえぐられている。

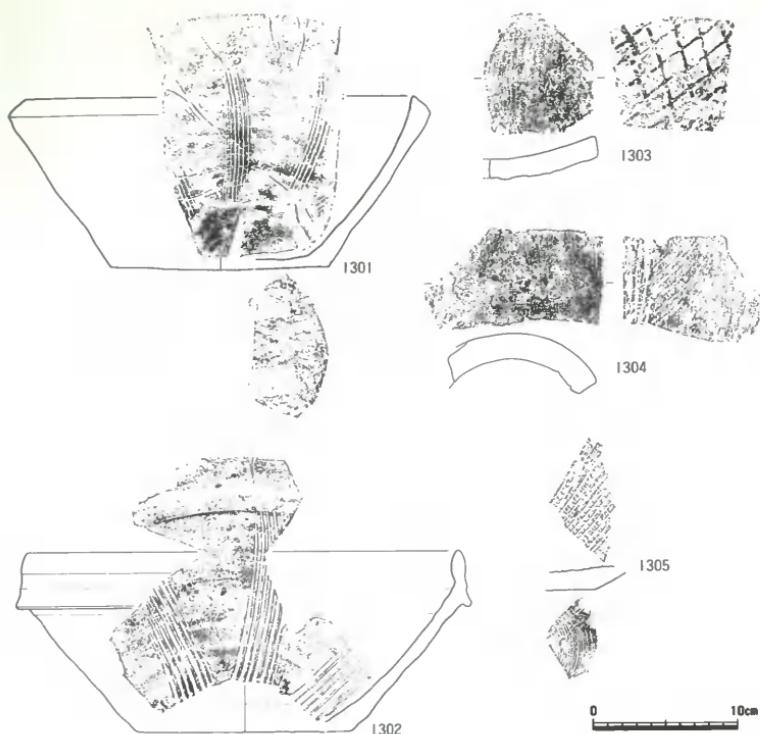
C92～C93は硯である。C93は中央に陸があり、その周囲が海となる。S38は有溝石錘、S39とS40は砥石である。

鉄製品には釘（I19～I23）と用途不明品（I24～I26）がある。B6はキセルである。

貝屑の遺物には土師器、瓦器、備前焼、青磁、白磁、瓦、土製品、石製品、鉄製品、木製品、



第348図 溝122貝層出土遺物〔1〕



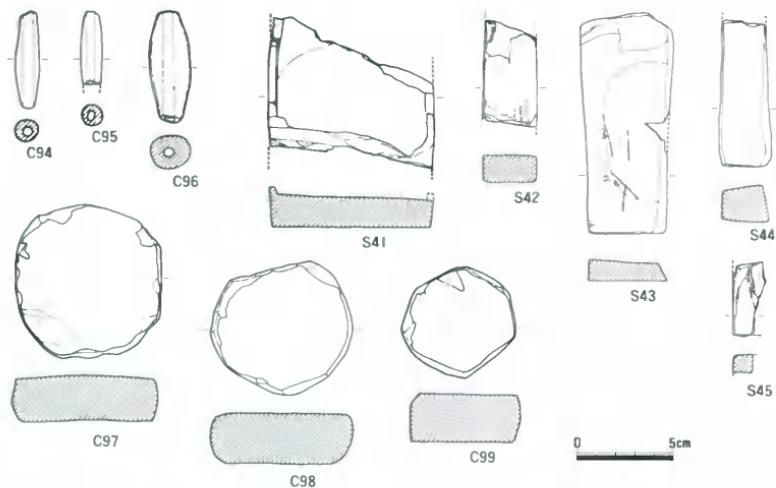
第349図 溝122貝層出土遺物 [2]

動物・植物遺体などがある。1276～1280は土師器の皿（1276）および小皿（1278～1280）である。1281～1283・1285・1286は土師器の鍋、1284・1287～1289は瓦器の鍋である。1290は土師器の甕である。

備前焼には壺（1291、1292）、甕（1294～1298）、擂鉢（1299～1302）がある。1301の底部にはゲタ印が明瞭に認められる。1293は亀山焼で、胴部外面には格子目のタタキがある。瓦は平瓦（1303）と丸瓦（1304）がある。

土製品には土錐（C94～C96）と円板形土製品（C97～C99）がある。石製品には硯（S41）と砥石（S42～S45）がある。鉄製品は釘（I27～I31）と鍬先（I32）および鍋（I33）がある。

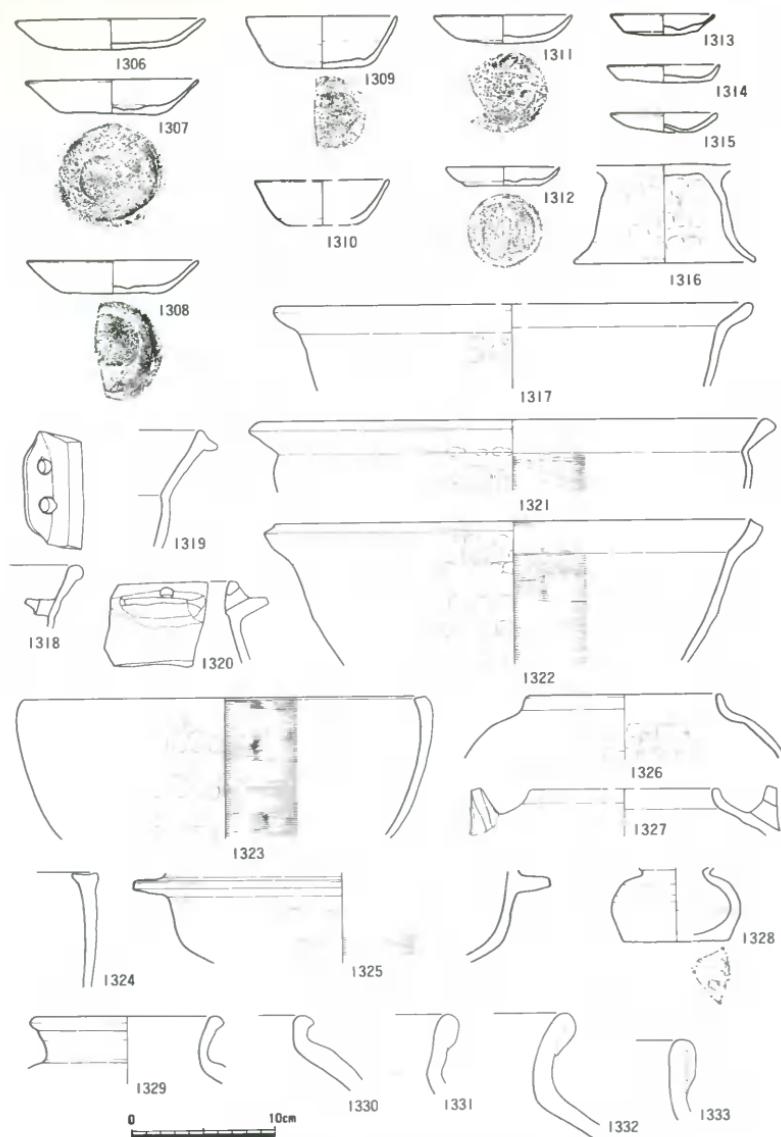
3層の遺物には土師器、瓦器、備前焼、須恵器、青磁、白磁、瓦、土錐、円板状土製品、石



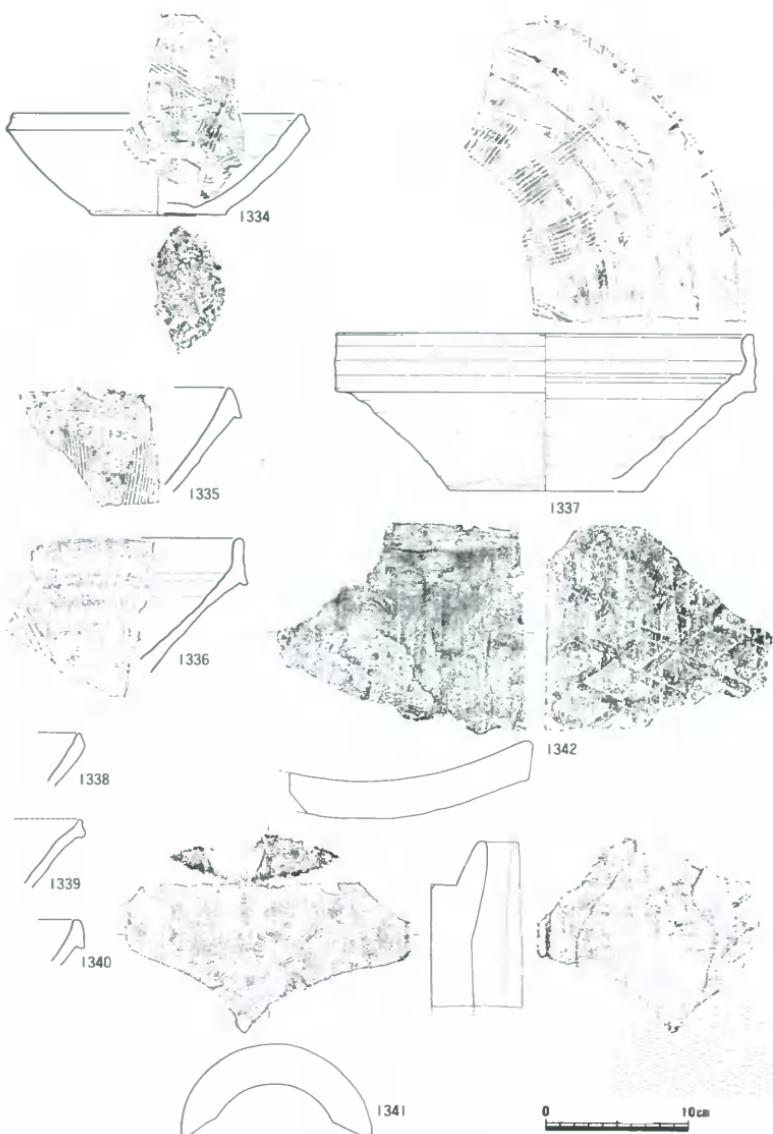
第350図 溝122貝層出土遺物〔3〕

製品、鉄製品、銅製品、木製品、動物遺体、植物遺体などがある。

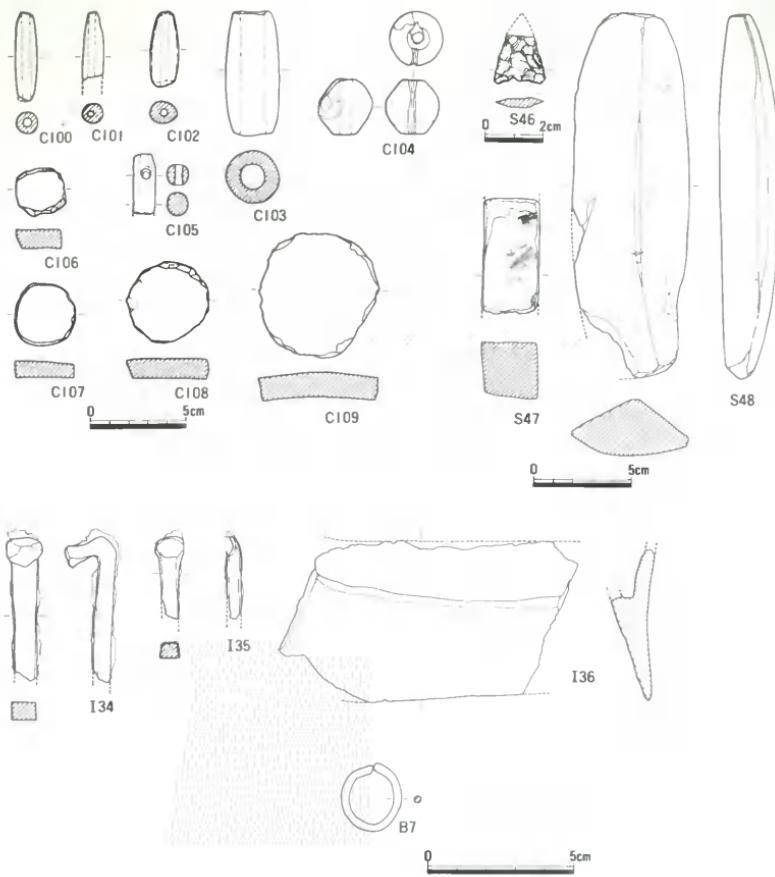
土師器には皿（1306～1308）と小皿（1311～1315）、そして鍋（1317・1318・1324）などがある。小皿の1315は底部が凹むものである。1316は杯か盤のようなものの脚と考えられる。土師器鍋は口縁部が「く」字状に開くもの（1317）と、「く」字状に開いた口縁部内面に一对の穴が穿たれた耳が付くもの（1318）、そしてほぼ垂直に立上る口縁部で、その端部を内外に拡張したもの（1324）とがある。



第351図 溝122 3層出土遺物 [1]



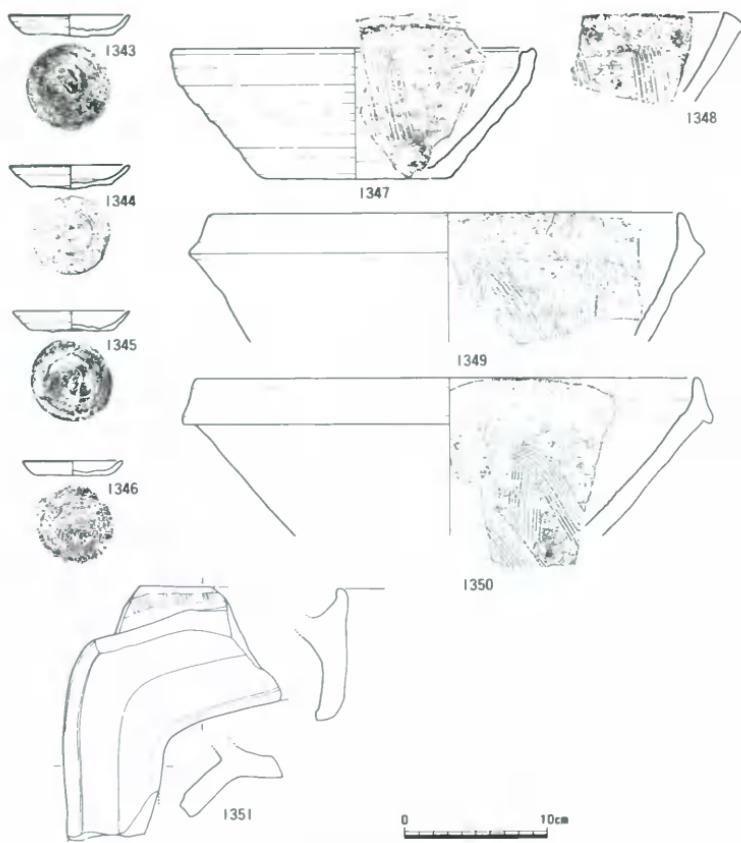
第352図 溝122 3層出土遺物 [2]



第353図 溝122 3層出土遺物〔3〕

瓦器には鍋（1319～1323）と釜（1325～1327）がある。鍋は口縁部が「く」字状に開くもの（1319・1321・1322）と、口縁部が内湾ぎみに立上るもの（1323）がある。釜は口縁部が短く立上り、胴部には鍔がめぐる。

備前焼には皿（1309・1310）、壺（1328・1329）、甕（1330～1333）、擂鉢（1334～1337）がある。1328は小壺で、胴部の径が大きい割に器高は低い。1329はやや外反する口縁部をもち端部は小さな玉縁状をなしている。1331～1333の甕は、いずれも口縁端部を幅広く折り曲げ、玉縁としている。1334は小形の擂鉢で、口縁端部は平坦面をもつだけである。1337は口縁端部を上

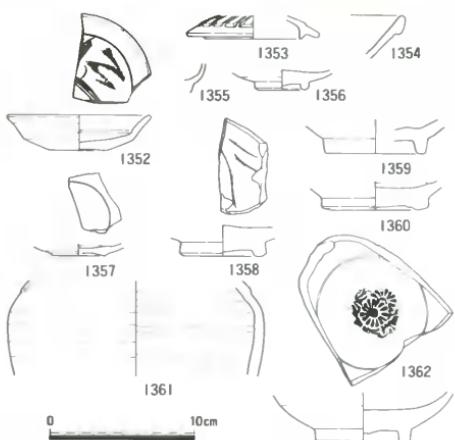


第354図 溝122出土遺物〔1〕

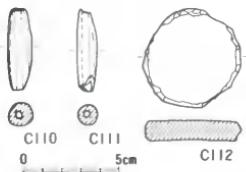
方へはば垂直に拡張しており、その外面には横ナデによる凹凸がめぐる。また体部の内外も横ナデによる凹凸が著しい。1338～1340は東播系須恵器のこね鉢である。1341・1342は瓦で、凸面に格子目のタタキをもつ平瓦（1342）と、凸面無文の丸瓦（1341）がある。

土錘は細長い円柱状のもの（C100～C102）と、太い円柱状のもの（C103）、そろばん玉状の中央に穴を穿ち、その上下端を結ぶ溝を施すもの（C104）、そして一端は欠けているが棒状の両端に穴を穿つもの（C105）がある。

円板状土製品（C106～C109）は、土器片を転用したもので、大きさは各種認められる。



第355図 溝122出土遺物〔2〕



第356図 溝122出土遺物〔3〕

上端部に凹線がめぐる。

青磁には皿（1352）と椀（1358・1359・1362）がある。白磁は皿（1357）、椀（1354、1356、1360）、小壺の蓋（1353）、四耳壺（1361）がある。1355は中国製の白磁の杯である。

土錐（C110・C111）は中央がややふくらむ円柱状を呈する。円板状土製品（C112）は土器片を転用したものである。

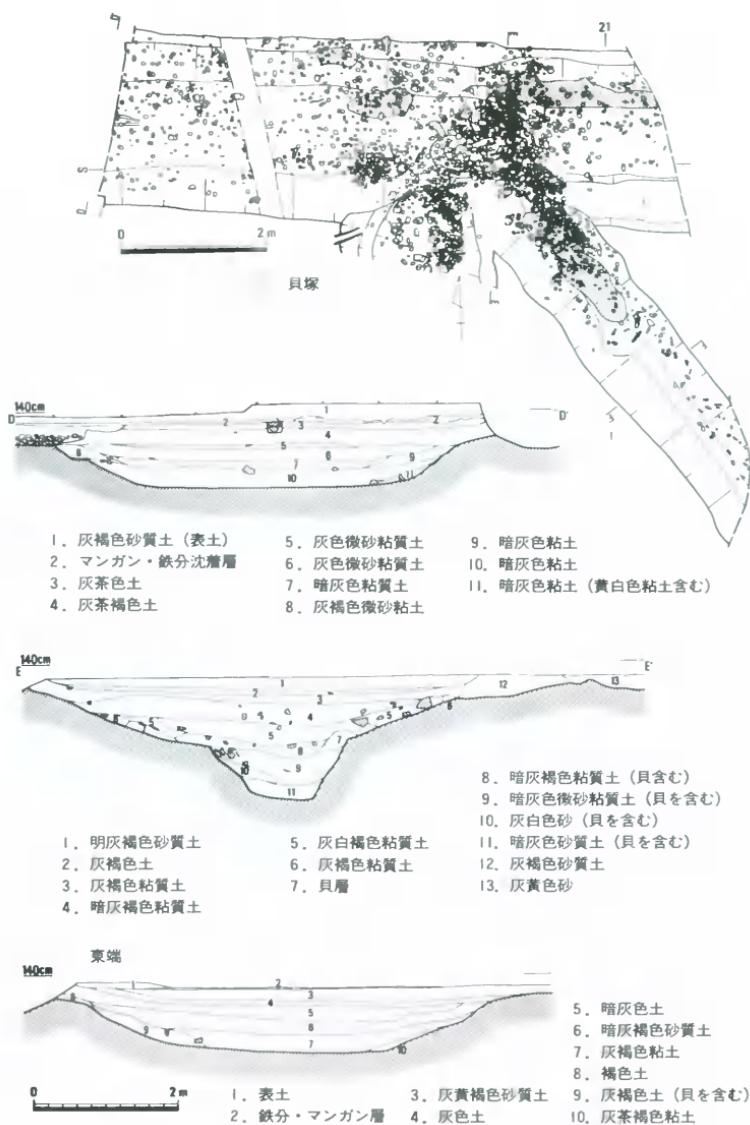
東西に流走する溝122は、1983年度調査区ではさらに東に延びていたことは確実であるが、すでに低水路工事によって掘削されていた。また北側も現代の用水路がほぼ溝122に沿って流れているため端は削られている。規模は現存幅が6m内外、深さ2.3m内外を測る。壁の立ち上がりはやや緩やかで、底から1mほど上で一担平坦部を形成する。底部はほぼ平坦であるが、溝125との合流地点には橢円形の土壙が穿たれている。この土壙は東西に長く、溝125側は侵食されて

石製品には石鎌（S46）と砥石（S47・S48）がある。S47は小形で方柱状を呈する。S48はやや大きく、断面三角形を呈する。

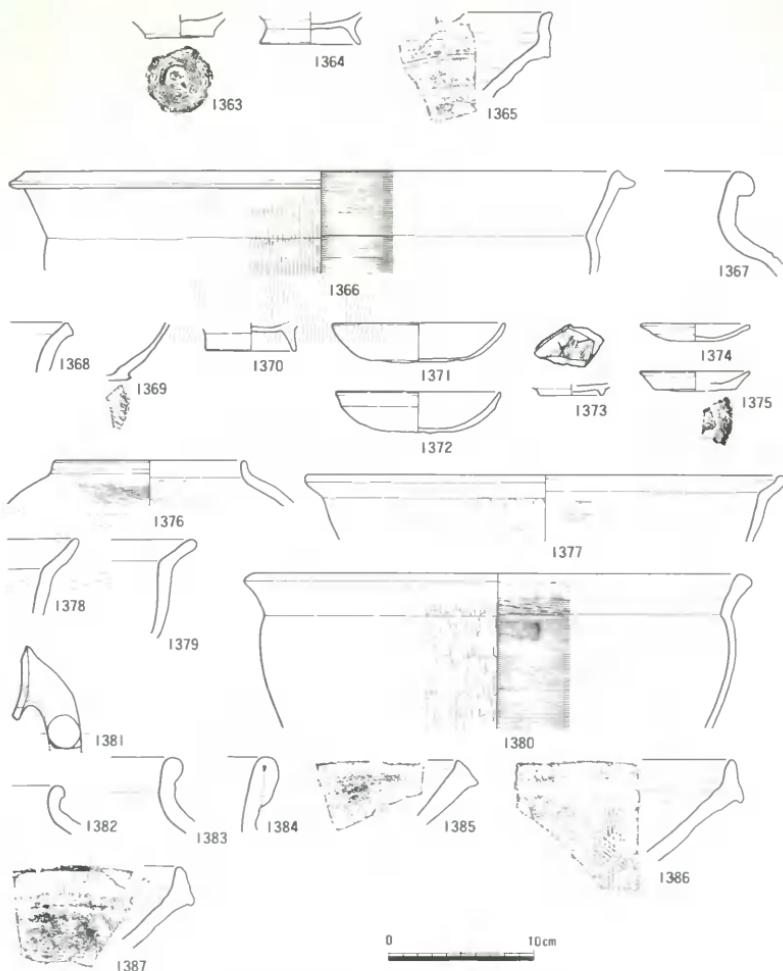
鉄製品には釘（I34・I35）と鍬先（I36）がある。銅製品（B7）は、細い銅線を輪にしたものであるが、用途は不明である。

木製品は下駄（W91）、草覆状木製品（W94・W95）、椀（W96・W98・W100・W101・W102・W105・W107・W109・W116）、箸状木製品（W117・W119）、円形板（W52・W54・W56・W58・W59）、杓子状

木製品（W120～W122）、刀形木製品（W124）、毬杖（W127）、毬（W128・W129）、柄（W69）、折敷の脚（W73）、ヘラ（W81）とともに札状木製品、加工材、建築材などが出土した。その他に、溝122内から出土した遺物を図示しておく。これは断面観察用の土手等から出土したもので、土師器、瓦器、青磁、白磁、土錐、円板状土製品などがある。1343～1346は土師器の小皿である。1351は甌である。1347～1350は備前焼の擂鉢で、1347は口縁

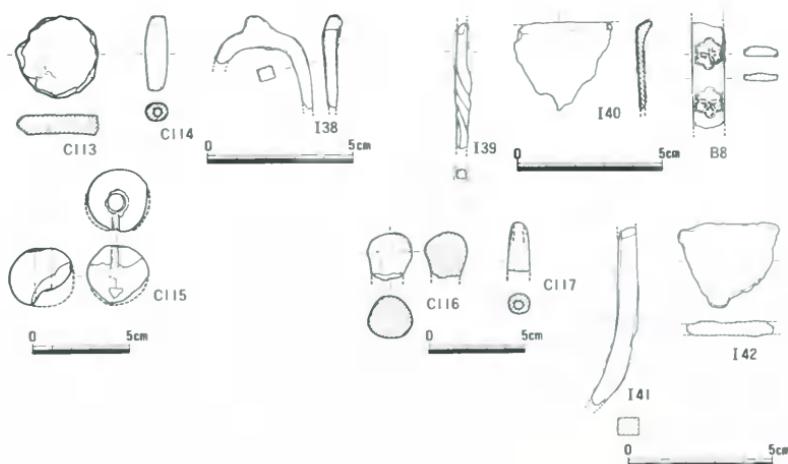


第357図 溝122 (1/200・1/80)



第358図 溝122上層・中層・貝層出土遺物

いたが、溝125の水が注ぎ込んだことによって出来上がったものではなく、溝を掘削した当初から、何らかの施設として作られていた可能性が強い。そして溝122底部に廃棄された貝殻も土壌内に連続して認められる場所があり、出土土器も差がないことから、埋没も同時に進行していたと推定される。なお土壌の周辺には杭が数本認められた。



第359図 溝122上層・中層出土遺物

1983年度調査区の19~21R・S区でも、溝内の埋土は大きく3層に区分することができる。D-D'の断面で言えば、第3層の上面で溝を検出しておらず、第3・4層が上層、第5~9層が中層、そして第10層が下層となる。さらにその中には北側から廃棄が進行したと考えられる状況で貝層が形成されている。貝層の貝はハイガイとヤマトシジミが主体をなす。埋土中には石が多く認められるが、上層には少なく、中・下層に多い。

遺物は上・中層には少なく、下層になると多くの土器や木器をはじめ獸骨、植物遺体などが出土した。

上層の遺物としては、土師器、備前焼、土製品、鉄製品、銅製品が認められる。土師器には椀（1363・1364）などがある。土製品には土製円板（C113）と土鍤（C114・C115）がある。土鍤は円柱状のもの（C114）と、円形の中央に穴を貫通させ、その両端を浅い溝で結んでいるもの（C115）がある。

鉄製品にはねじりのある釘（I39）と不明鉄製品（I38・I40）がある。銅製品（B8）は細長い板の上面に花弁模様が打ち出されており、飾り金具と考えられる。

中層の遺物には、土師器、瓦器、備前焼、土製品、鉄製品、木製品などがある。1366は土師器の鍋で、内面は細かなハケ目、外面は荒いハケ目が施される。1367は備前焼の壺で口縁端部は玉縁となる。

土製品には有頭状土製品（C116）と土鍤（C117）がある。

鉄製品は釘（I 41）と不明鉄製品（I 42）がある。

貝層出土の遺物には、須恵器、土師器、瓦器、備前焼などが出土している。須恵器には甕（1368）と椀（1369）がある。

土師器は椀（1370）、皿（1371・1372）、小皿（1374・1375）、鍋（1377～1379）がある。土師器の鍋はいずれも口縁が「く」字状になるもので、その端部は丸くおさめている。外面には煤の付着が著しい。

瓦器には鍋（1380・1381）と釜（1376）がある。1380は口縁部が「く」字状に外反し、端部はやや肥厚する。1376は肩から口縁部にむかって急激にすばまり、短く立上る口縁部がつく。1373は瓦器椀で、断面三角形の高台がつく。内面には不規則な暗文が施される。

備前焼には壺（1382）、甕（1383・1384）、擂鉢（1385～1387）がある。甕には口縁部の玉縁が丸いもの（1383）と幅の広いもの（1384）とがある。擂鉢も口縁端部がわずかに上下へ拡張されるもの（1385）と、上方への拡張が著しいもの（1386・1387）とがある。

下層からは須恵器、土師器、瓦器、須恵器、備前焼、常滑焼、青磁、白磁、瓦、土製品、鉄製品、木製品、動物遺体、植物遺体などが出土した。須恵器には碁石状のつまみをもつ杯蓋（1388）、椀（1392）、杯（1389・1390）、壺（1393）などがある。

土師器は椀（1391・1405・1406・1408～1410）、皿（1395・1396）、小皿（1399～1403）、鍋（1417・1430～1434）などがある。椀には高い高台をもつもの（1410）と断面三角形状の低いもの（1405・1406・1409）がある。

瓦器には釜（1411）、鍋（1412・1415・1416・1420～1429・1435）がある。1411は短く立上る口縁部がつくもので外面は細いハケ目、内面には指頭圧痕が見られる。1415と1416は口縁端部を外方へ拡張している。1412・1421は口縁部を「く」字状に外反させたもので、内外面にハケ目が残る。1422～1429は口縁部が内湾ぎみに立上り、端部は平坦に仕上げている。

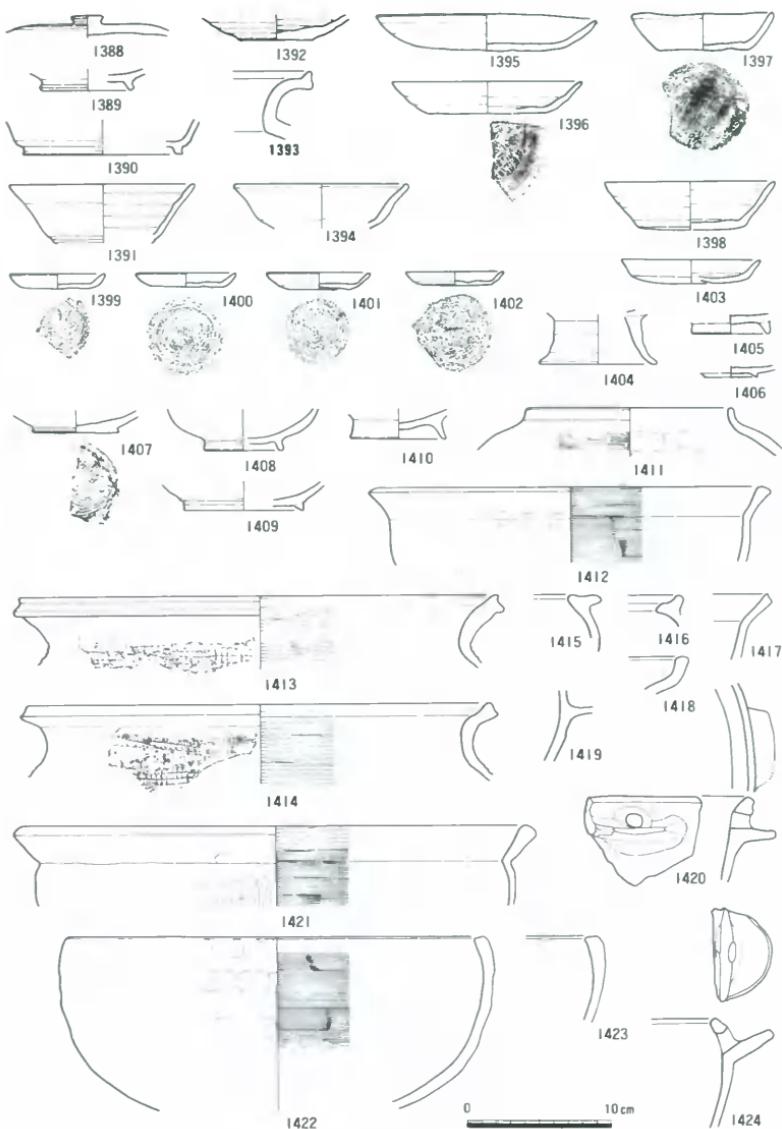
備前焼は壺（1437～1439）と甕（1440～1444）と擂鉢（1445～1454）がある。甕はいずれも口縁端を折り曲げて玉縁としている。擂鉢は口縁端部の形状に各種のものが見られる。1445～1447は口縁端部をわずかに上下につまみ出し、その端面は平坦に仕上げている。1448～1451は口縁部の上方への拡張が著しいが、端部は尖りぎみにおさめている。1452・1453・1454も同じく上方への拡張が著しいが、端部は面をもっている。

1455～1458は東播系須恵器のこね鉢である。

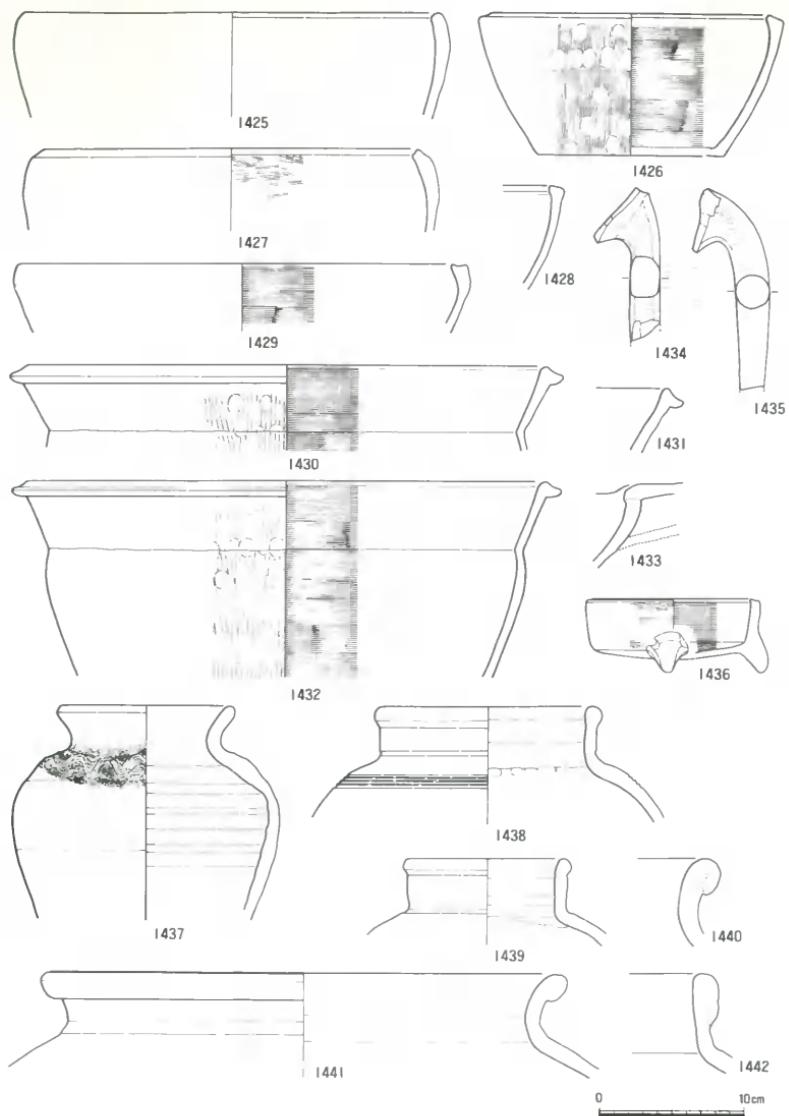
1459は常滑焼の甕である。

1460～1462は瓦である。1461は軒平瓦で、唐草文が見られる。1462は平瓦で、凹面は布目が、凸面には格子目が認められる。

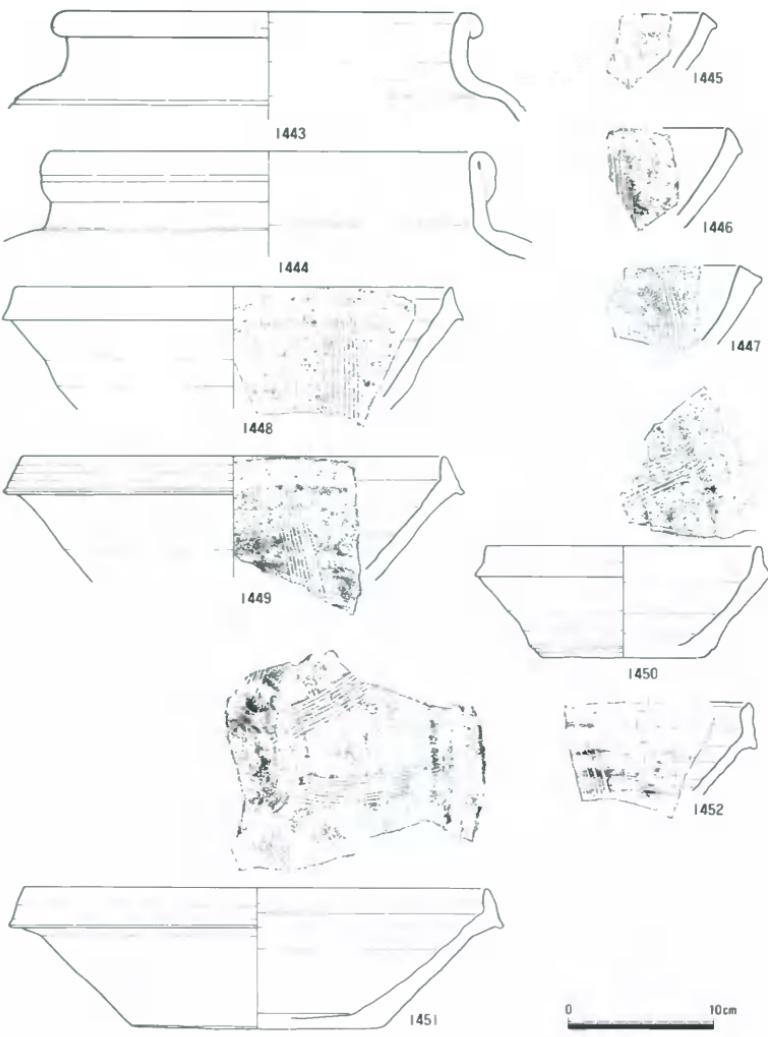
土製品には円板状土製品（C 118・C 119）と土錘（C 120～C 125）がある。円板状土製品は



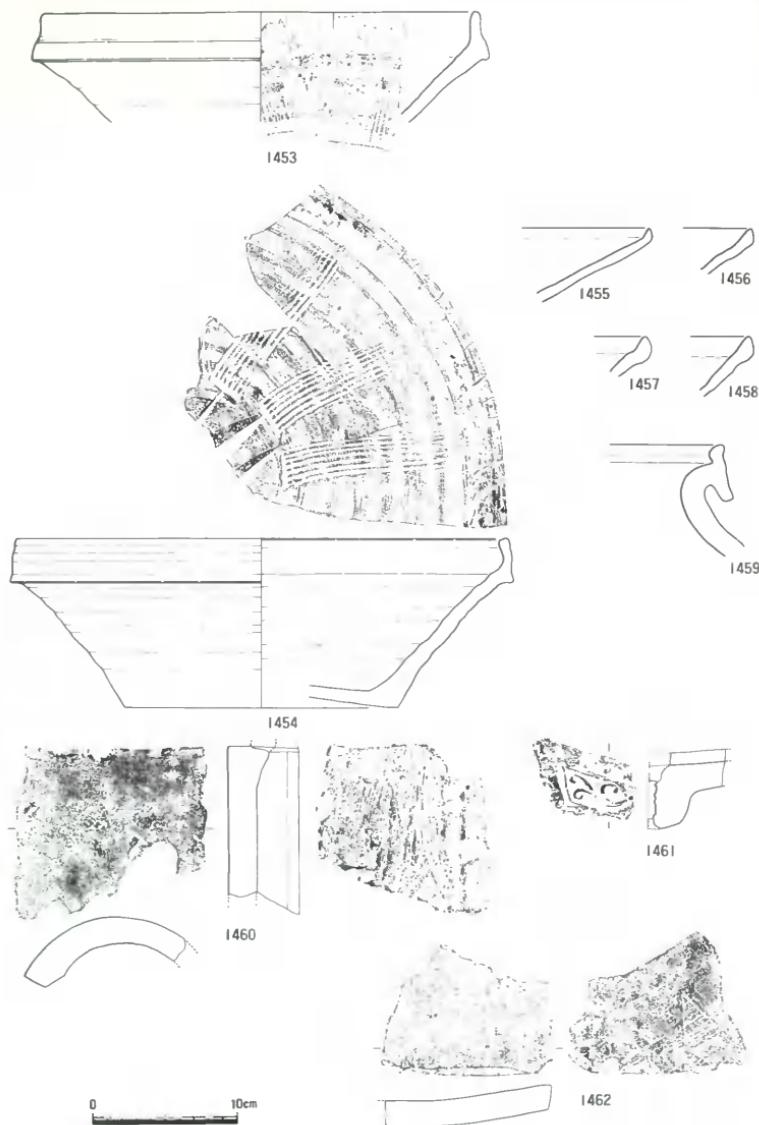
第360図 溝122下層出土遺物〔1〕



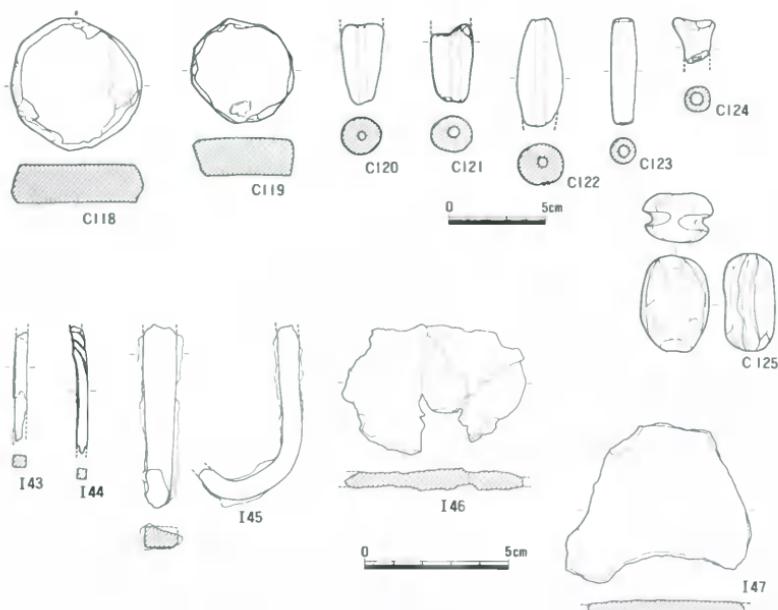
第361図 溝122下層出土遺物〔2〕



第362図 溝122下層出土遺物〔3〕



第363図 溝122下層出土遺物 [4]



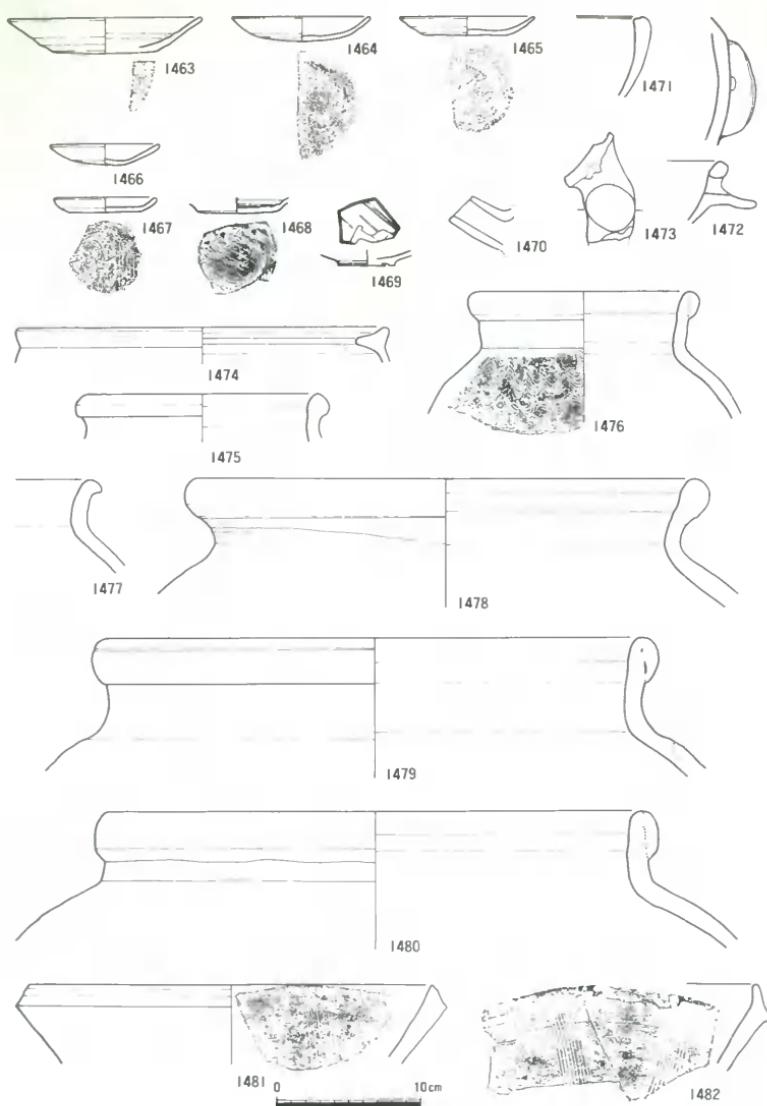
第364図 溝122下層出土遺物 [5]

いずれも土器片を利用したもので、大きさ、厚さともにバラエティがある。土錘は両端が少し細くなる円柱状のもの（C123）と、中央が太くなるもの（C120～C122）、そして楕円形状の周囲に溝が穿たれるもの（C125）などがある。鉄製品には釘（I43・I44）などがある。

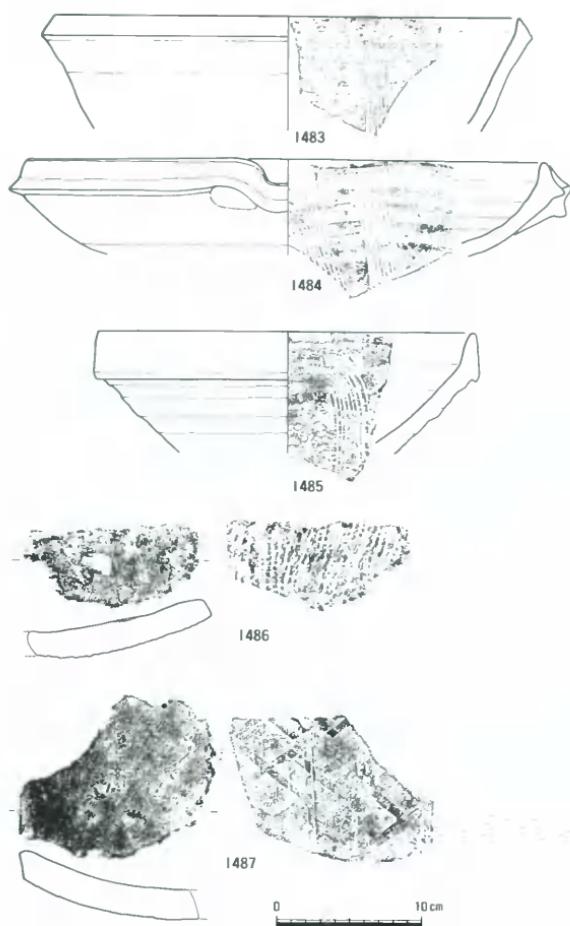
以上の遺物は7世紀代から16世紀代に属するものであるが、量的に多いのは15世紀代である。

溝122と溝125の合流地点の溝122底部にある凹地からも遺物が出土した。遺物は土師器、瓦器、備前焼、磁器、木製品、動物遺体、植物遺体などが認められた。土師器には皿（1463）、小皿（1464～1468）、鍋（1473・1474）がある。皿、小皿のうち1466は底部中央を凹ませているが、その他は平坦で、糸切りである。鍋は口縁端部を内外に拡張するものである。

備前焼には壺（1475・1476）と甕（1477～1480）そして擂鉢（1481～1485）がある。1476は口縁端部を折り曲げて玉縁としている。肩部にはクシ状工具による波状文が2段めぐる。甕には口縁部がやや外反ぎみに立ち上り、端部を少し外方へ折り曲げただけのもの（1477）と、口縁端部を折り曲げて玉縁としたもの（1478～1480）がある。擂鉢も口縁部の形態に各種のものが認められる。



第365図 溝122凹地出土遺物〔1〕



第366図 溝122凹地出土遺物（2）

は鍋や釜がある。1514は釜の胴部で、外面上半はハケ目、下半は指頭圧痕、内面にはハケ目が認められる。1515は火鉢と考えられる。1516は亀山焼の甕で、外面は格子目のタタキとハケ目、内面はハケ目で調整している。

備前焼には壺（1517～1519）、甕（1520・1521）、播鉢（1522～1526）がある。1517は肩部にクシ状工具による波状文がめぐる。

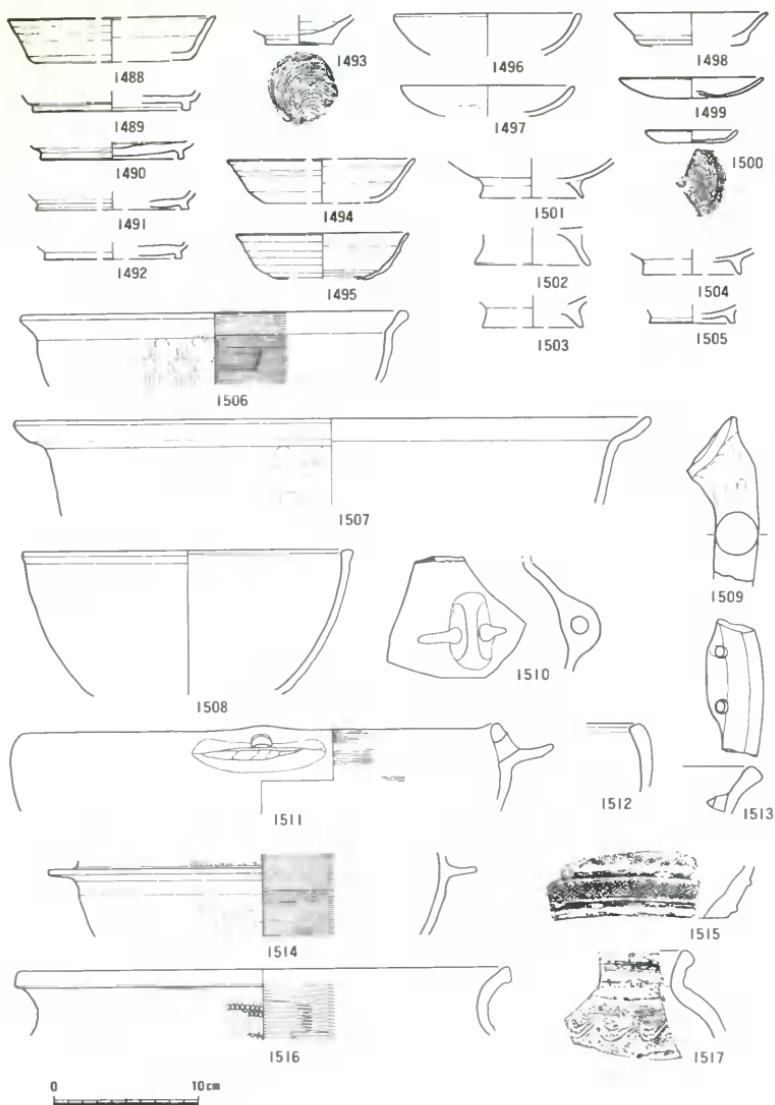
1481と1483は口縁端部をわずかに拡張し、1482・1484・1485は上方への拡張が著しい。

1486と1487は平瓦である。いずれも凹面は布目であるが、凸面は1486が繩目、1487は格子目である。

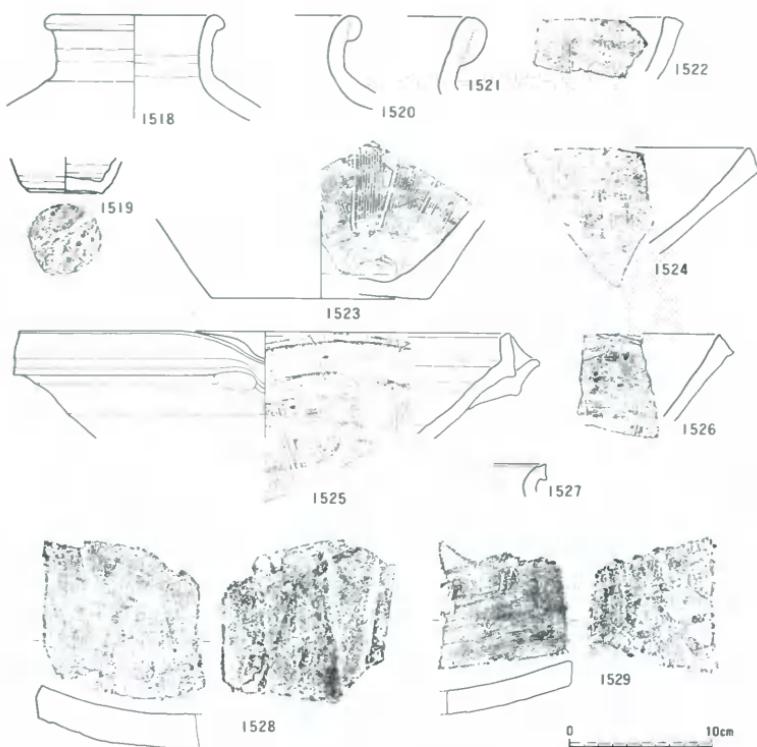
凹地内の遺物が示す時期は、12世紀代から15世紀代であるが、15世紀代のものが最も多い。合流点の溝122内から出土した遺物として須恵器、土師器、瓦器、備前焼、常滑焼、磁器、瓦、土製品、石製品、鐵製品、木製品などがある。

1488～1492は須恵器の杯で、1488以外は高台がつく。土師器には椀、皿、小皿、鍋などがある。瓦器

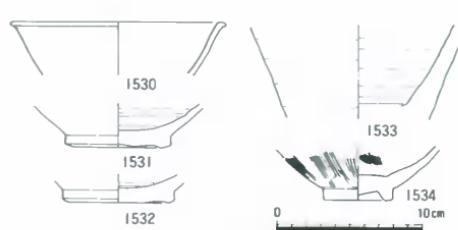
は、1481と1483は口縁端部をわずかに拡張し、1482・1484・1485は上方への拡張が著しい。



第367図 溝122出土遺物〔1〕



第368図 溝122出土遺物 [2]



第369図 溝122出土遺物 [3]

50)、砥石 (S 51) がある。

鉄製品は釘 (I 48~I 49) と用途不明品 (I 50) である。

(平井勝)

1528と1529は平瓦で、いずれも凹面は布目、凸面には格子目のタタキが認められる。

土製品には土器片利用の円板 (C 126~C 128) と土錐 (C 129~C 138)、そして用途不明品 (C 139) がある。

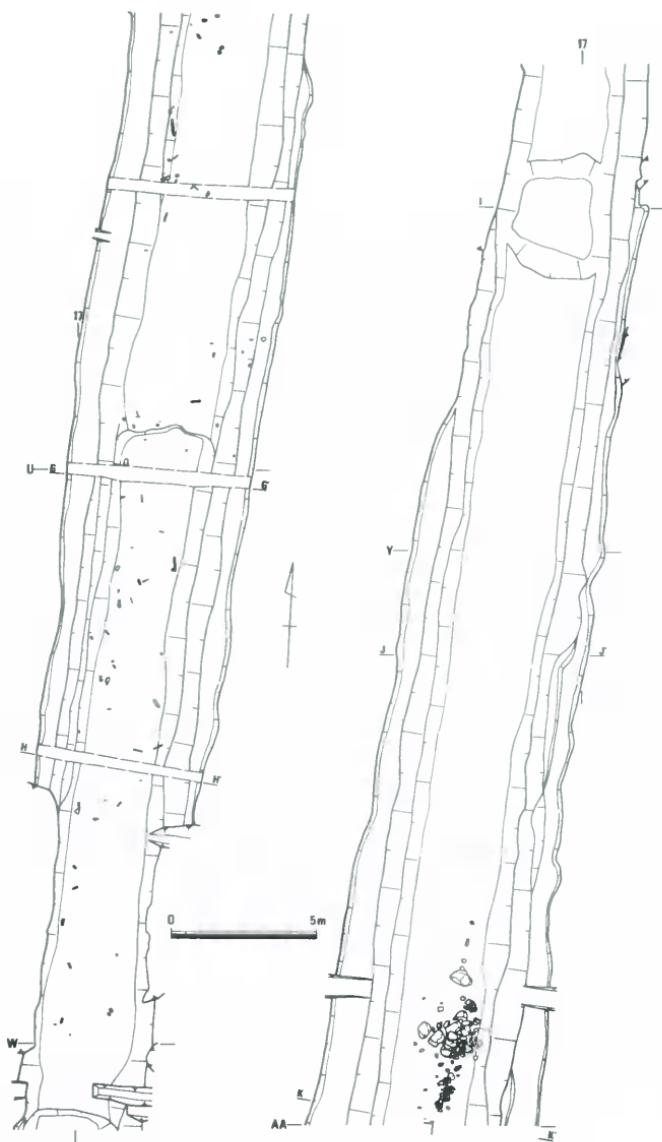
石製品は硯 (S 49)、石鎌 (S



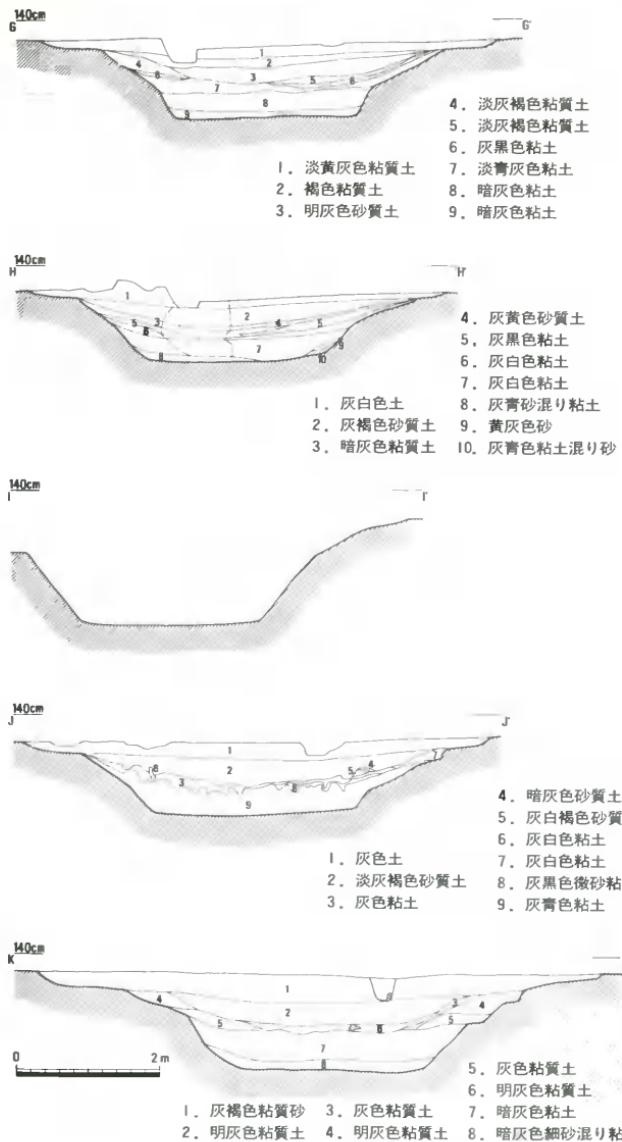
第370図 溝122出土遺物〔4〕

溝123（第371～374・377～382図、図版133・134）

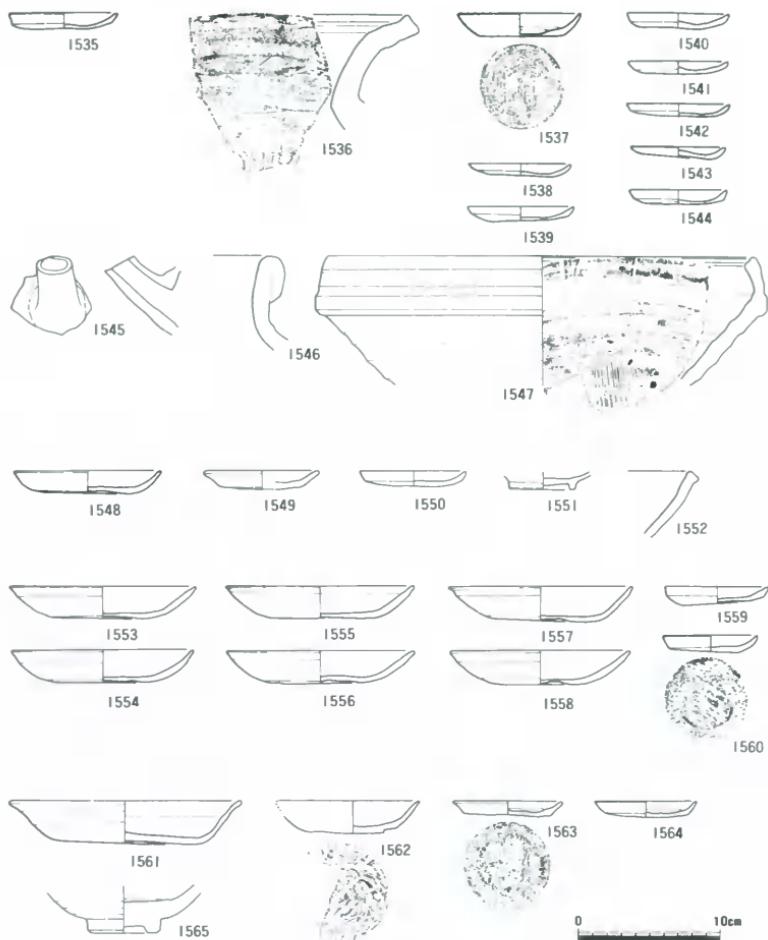
1985年度調査区の16・17S～A A区で検出された大溝で、溝122と溝124を直角に結び南北方向に流走する。溝の規模はG—G'間で幅6.35m・深さ1.15m、K—K'で幅7.8m・深さ1.3mを測る。



第371図 溝123 (1/200) [1]



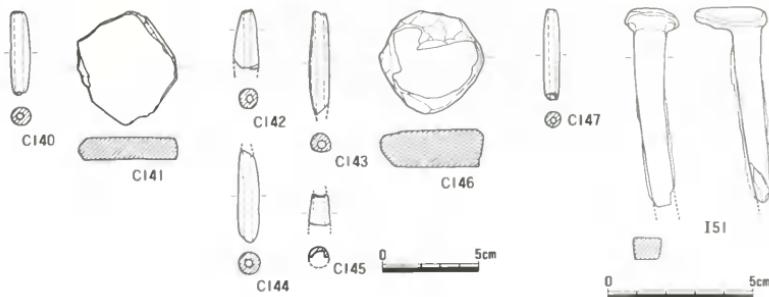
第372図 溝123 (1/80) (2)



第373図 溝123 1層・2層・3層出土遺物 [1]

溝は基本的に中央が深く、壁はやや緩やかに立ち上がり、途中で一帯広い平坦部を形成した後短く立ち上がる。底部は17T区で南側が一段低くなり、さらに16・17W区で一段低くなりすぐ南側で大きな土壤が穿たれるものの、断面の形状は平坦である。なお底部のレベルは南に向かって低くなっている。

埋土は大きく3層に分けられ、G—G'でいえば第1層が1層、第2～7層が2層、第8・9



第374図 溝123 1層・2層・3層出土遺物〔2〕

層が3層となり、K—K'でいえば第1層が1層、第2～6層が2層、第7・8層が3層となる。埋土中の遺物は溝122に比較して少なくなるが、遺物に占める木器の割合は高くなる。また16Z区で石の廃棄がわずかに認められるものの、その量は少なく、さらに貝塚にいたってはまったく認められなかった。

遺物は、1層では土器片がわずかであるが、2・3層でやや多くなり、特に木器は3層で多く出土した。

1層の遺物としては土師器、土製品がある。土師器は小皿（1535）以外にも鍋などの小片が認められる。土製品には土錐（C140）と土製円板（C141）がある。

2層では須恵器、土師器、瓦器、備前焼、土製品などが出土した。須恵器（1536）は甕の口縁部で、胴部内面にタタキが残る。土師器には小皿（1537～1544）などがある。小皿では1537がやや器高が高いものの、その他は低い。1545は瓦器の土瓶注口部である。1546は備前焼の甕、1547は同じく擂鉢である。

土製品は円柱状の土錐（C142～C145）と、土器片を転用した円板（C146）がある。

3層では土師器、須恵器、備前焼、磁器、土製品、木製品、動物遺体、植物遺体などが出土した。土師器には皿と小皿がある。そのうち1553～1560は一括で出土したもので、皿（1553～1558）はいずれも同じクセをもち、同一人物による製作を思わせる。

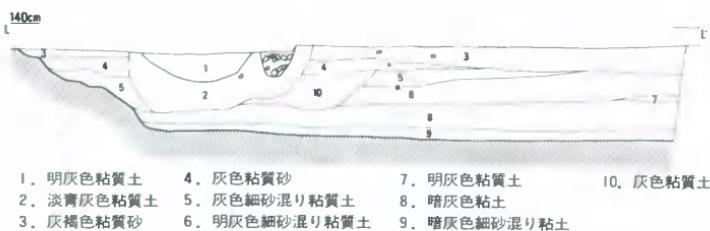
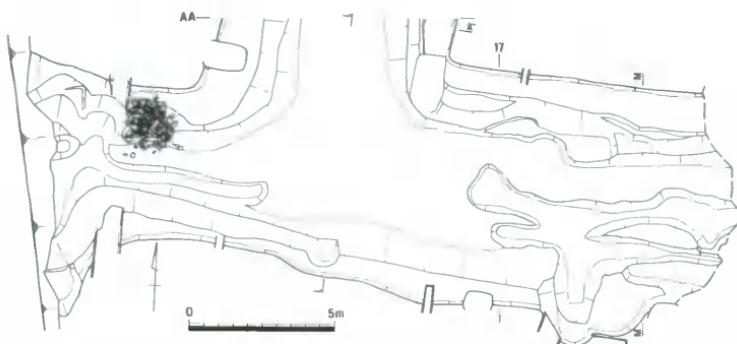
なお1561～1564は溝123内から出土した土師器である。

木製品は卒塔婆（W42・W47・W51）をはじめ、加工材などが多く出土した。 (平井勝)

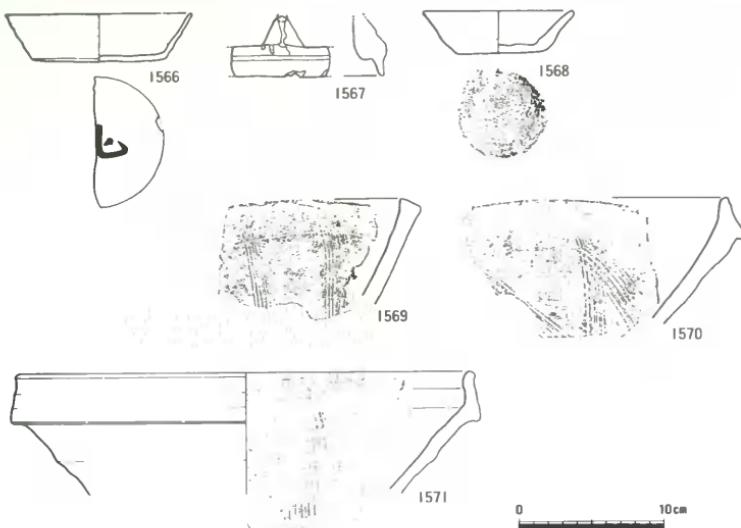
溝124 (第375・376・378～380・382図、図版135)

1985年度調査区の15～17AA・BB区で検出した大溝で、東西に流走し、16AA区で北側に溝123が取り付く。北側を平行して流走する溝122との距離は、溝の中心間で90mを測る。

溝124は溝123の取付部から東が幅8.3mと、広く掘削されているのに対し、西側が一坦やや狭



第375図 溝124 (1/200・1/80)



第376図 溝124 1層・2層・3層出土遺物

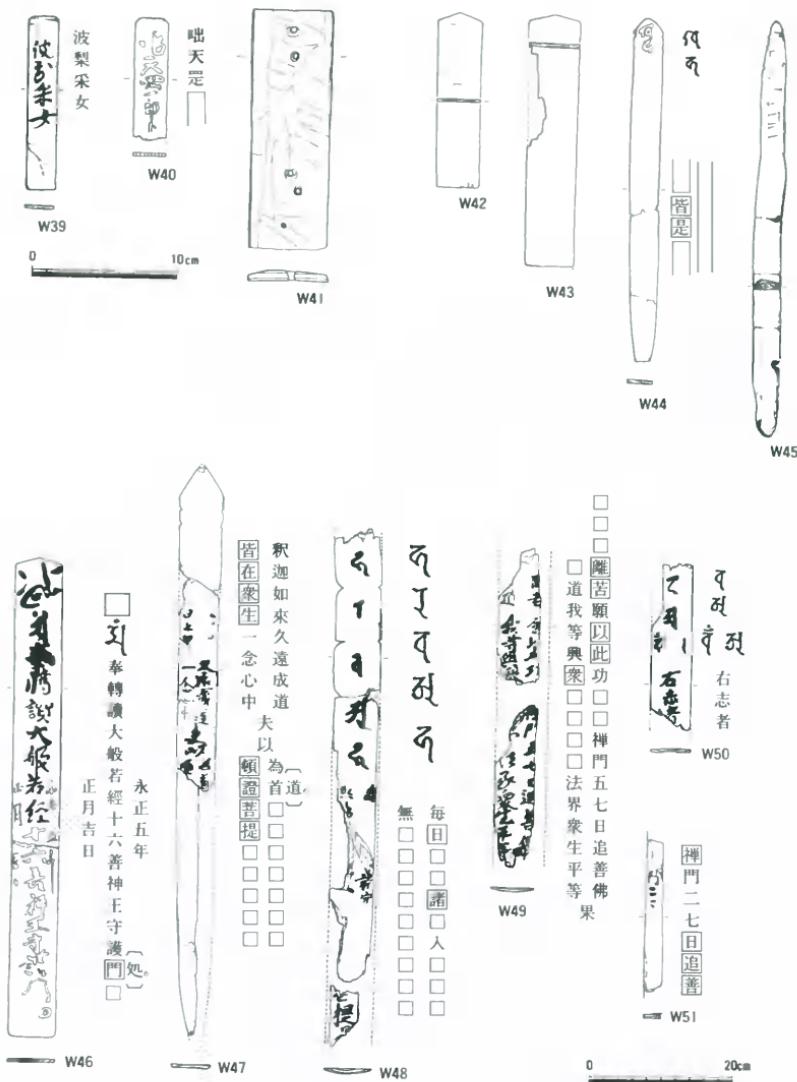
くなり、その幅は5.6mを測る。狭くなった場所から西側は、再び急激に幅を広げるが、これは17AA区南側に見られるような土壤状の突出部が南側に作られている可能性もあり、現状では判断がつき難い。

壁の立ち上がりはやや緩やかで、途中で一坦広い平坦部を形成する。底部は溝123の取り付き部付近は平坦であるが、東西両端は不整形な落ち込みが認められる。しかしこれが溝の構造と関わる何らかの施設として掘られたものであるか否かについては不明である。

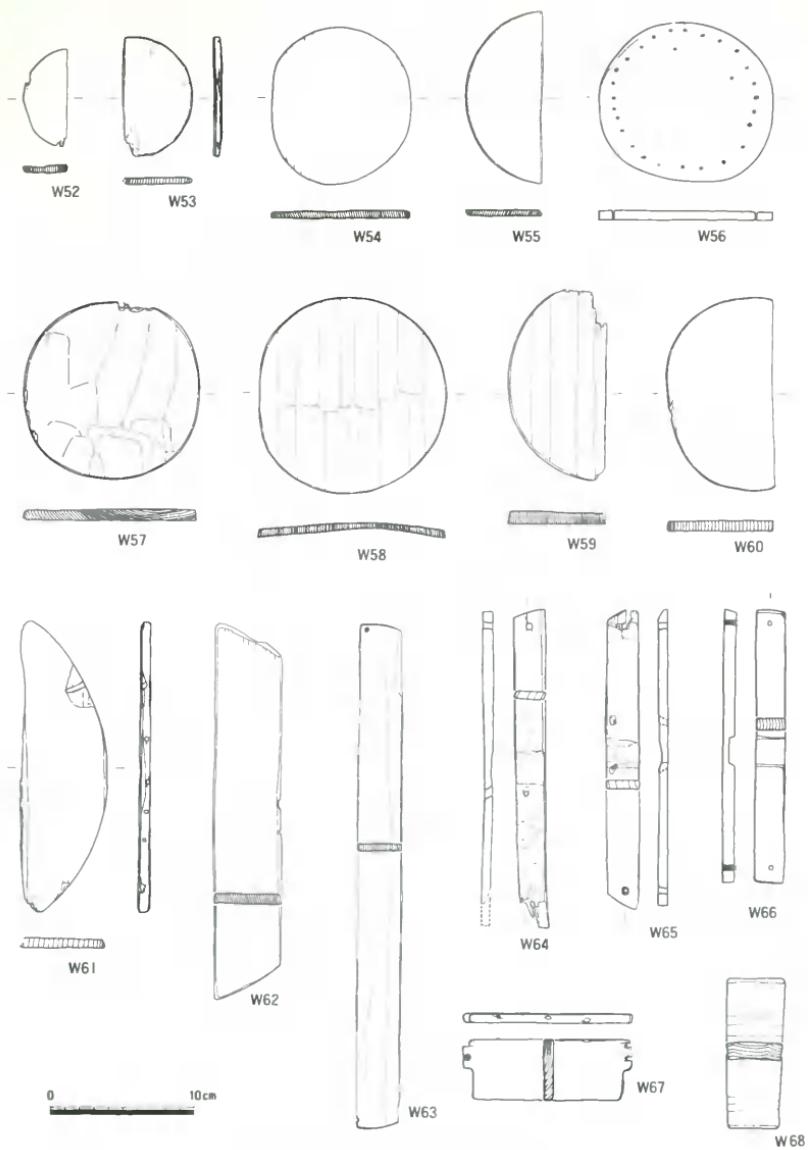
埋土は、溝124を踏襲して東西に流れていた近・現代溝の埋土である第1・2層を別にして、大きく3層に分けられる。1層は第3層が相当し、2層はL—L'でいえば第4～6層、西端断面では第7～9層が、3層はL—L'では第8・9層、西端断面では第10・11層となる。埋土中の遺物は少なく、また、石などの廃棄物もほとんど認められなかった。

遺物はどの層もわずかであった。1566は須恵器の杯で底部外面に墨書がある。半分を欠いているため判読は困難であるが、「北」の可能性が強い。1層から出土した1567は須恵器の硯脚部であろう。その他土器皿、備前焼擂鉢などがある。3層では備前焼擂鉢などが出土した。

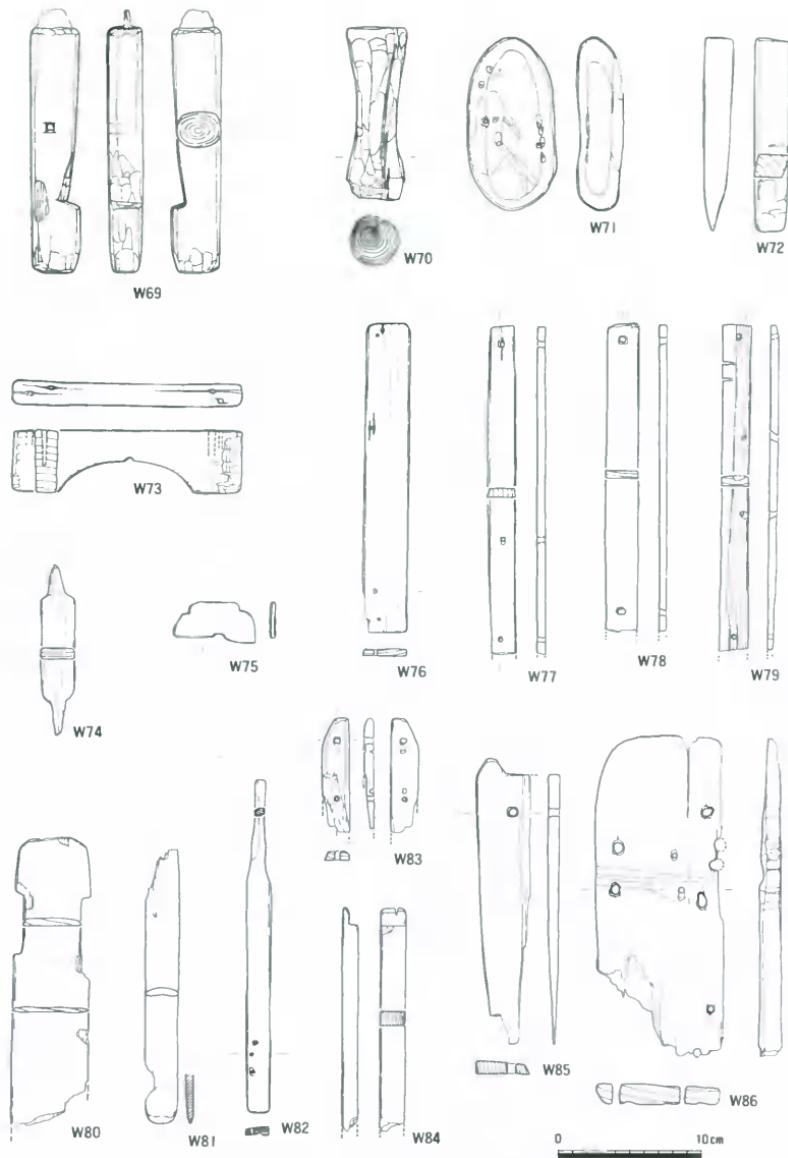
溝122・123・124は一体性をもって掘削されたものである。出土した土器は奈良時代から16世紀にいたる長い時間幅をもつものの、その多くは14～16世紀に属する。これらの遺物や石あるいは貝が大量に廃棄されるのは、少なくとも溝が機能していた時期ではないと考えられること



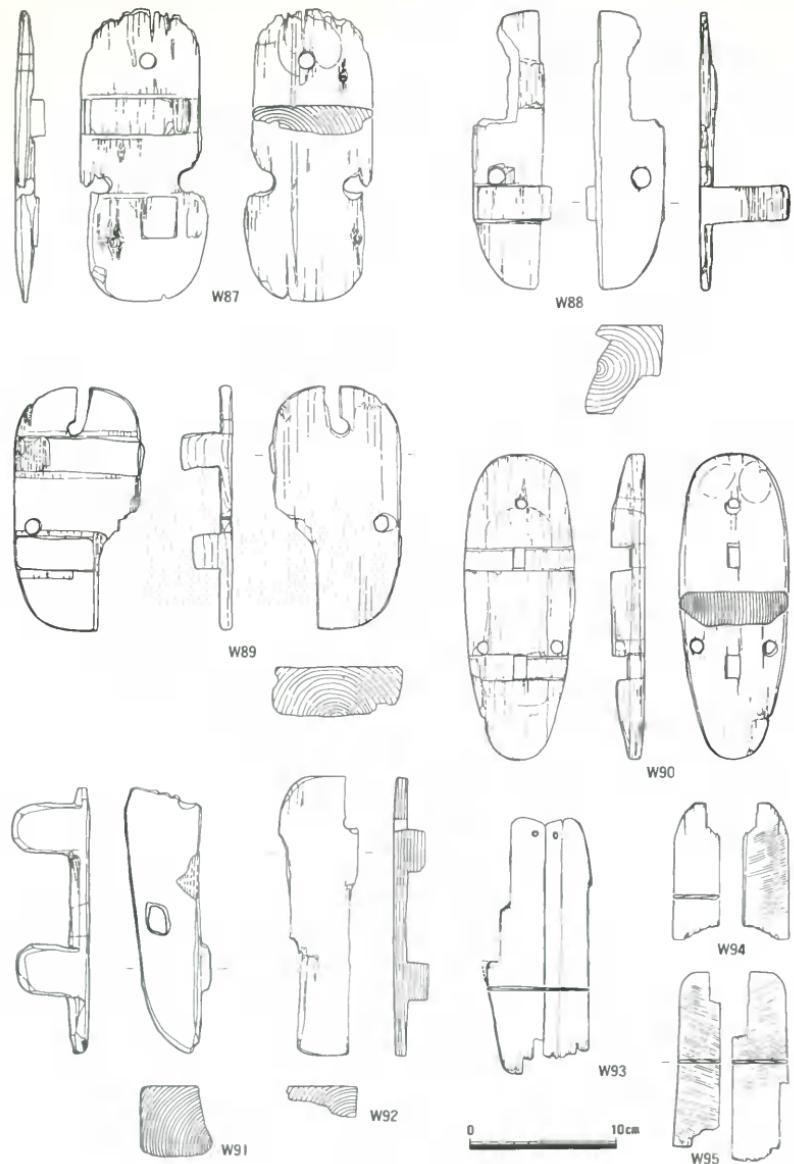
第377図 溝122・123出土遺物 [1] (1/4)・(1/8)



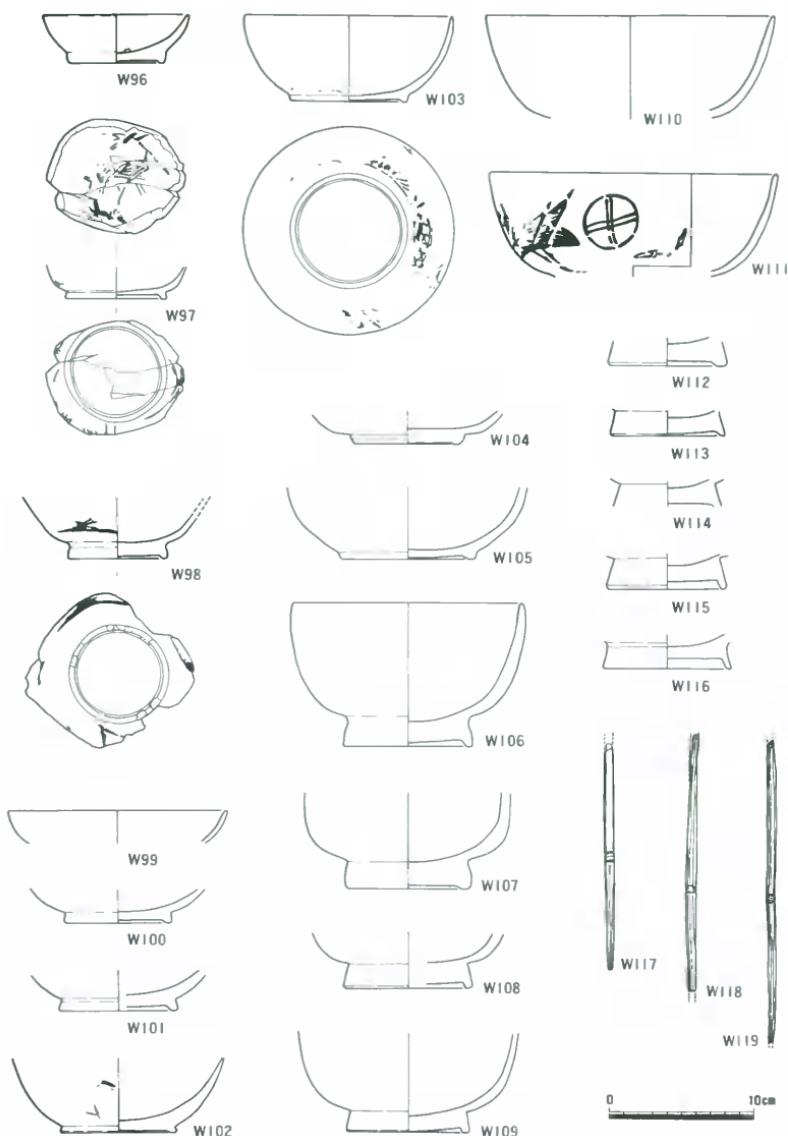
第378図 溝122・123出土遺物〔2〕



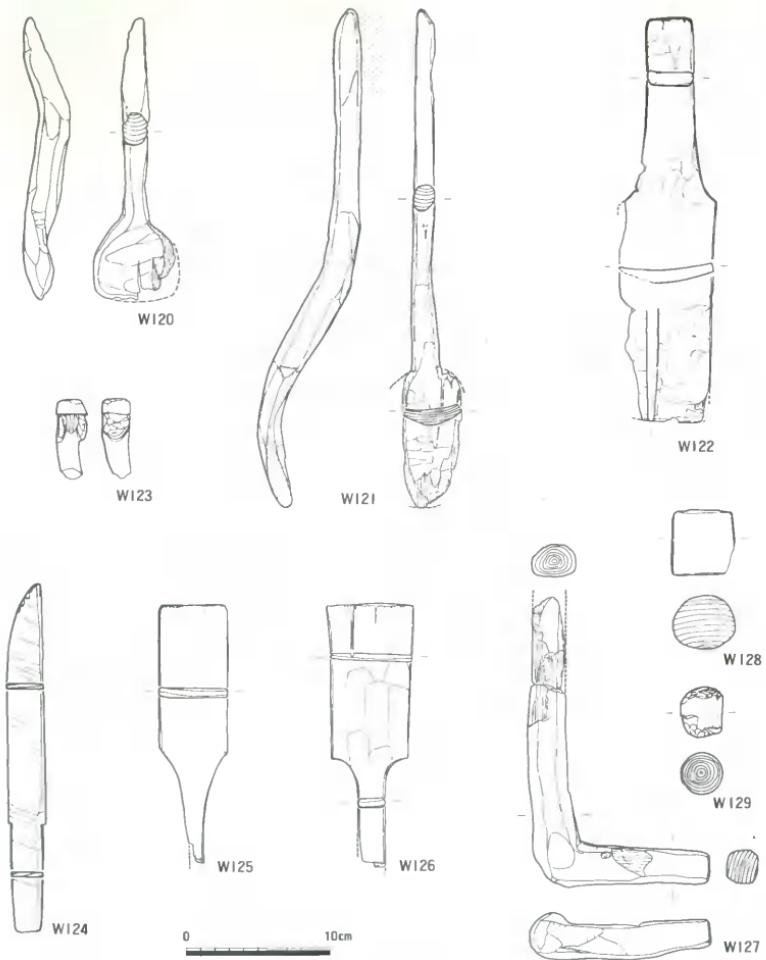
第379図 溝122・123出土遺物〔3〕



第380図 溝122・123出土遺物 [4]

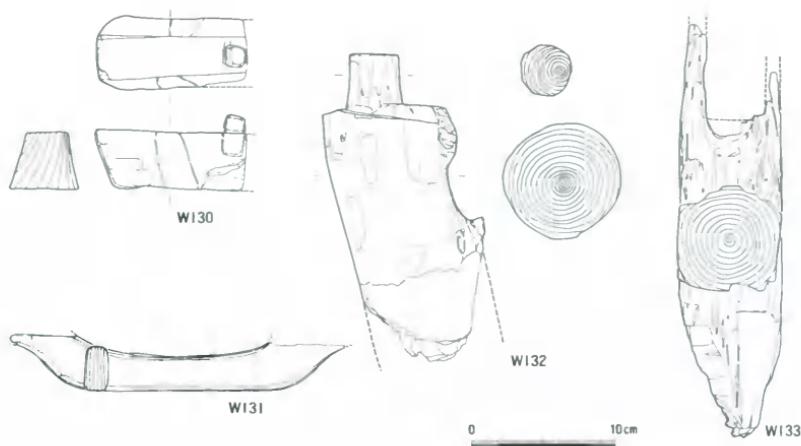


第381図 溝122・123出土遺物 [5]



第382図 溝122・123出土遺物〔6〕

から、溝を掘削し、機能していたのはもう少し古くなるであろう。しかし、その時期を求めるには、あまりにも遺物の示す時間幅が大きいことから明確にはし得ない。したがってここでは溝の埋没とそこへの遺物の廃棄が頻繁に行われた時期が室町時代から戦国時代にかけてのこととしておく。なお溝122では多少北側にずれているが、溝124では近世・現代まで踏襲している。



第383図 溝122・123出土遺物 (7)

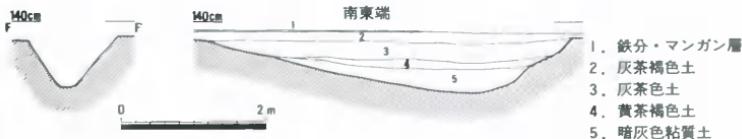
(平井勝)

溝125 (第384~388図、図版136・137)

1983年度調査区の20・21S・T区で検出した溝である。東西に流走する溝122の20S区付近の南側に取り付き、南東方向に流走する。溝122に取り付く場所には、溝に直行して杭列が認められ、堰があったものと考えられる。溝の規模はF—F'で幅1.3m、深さ0.7mを測る。埋土は3層に分けられ、遺物は下になるほど多く含まれていた。溝122に取り付く場所には貝塚が形成され、碟や土器も多く認められた。

遺物としては須恵器、土師器、瓦器、備前焼、亀山焼、青磁、白磁、瓦、土製品、木製品、石製品、鉄製品、動物遺体、植物遺体などが出土した。

須恵器 (1572~1576・1626) には杯 (1572~1574)、こね鉢 (1575)、椀 (1576)、東播系こね鉢 (1626) がある。杯は高台が付き、器高の高いもの (1572・1573) と、高台のない低いもの (1574) とがある。1576は底部が糸切りである。1575はこね鉢の底部で、底面には全面に刺突



第384図 溝125 (1/80)

が施されている。

土師器には椀（1577～1580）、皿（1581～1583・1585・1587・1588・1589）、小皿（1584・1586・1590・1591～1594）、鍋（1598・1599・1604）、甕（1597）がある。椀には高い高台が付くもの（1578）と低い高台のもの（1579・1580）、そして高台のないもの（1577）とがある。皿は底部に糸切り痕を残すものが多い。鍋は各種認められる。1604は口縁部を外方へ拡張し、上端面に幅広い凹部をつくる。外面は指頭圧痕が残り、内面はハケ目で調整している。

1598・1599は鍋の脚部である。1597は甕で、強く外反した口縁部の端をさらに上方へ拡張している。

1600はカマドの前面下端部である。

瓦器には鍋（1601・1605～1613）と釜（1602・1603）がある。1605は強く外反させた口縁部をさらに上方へ折り曲げた鍋である。1606と1608は釣手穴が穿たれ、いずれもその下に耳状の火よけが付されている。1601は浅い鍋の柄である。上面には差し込まれた木製の柄を固定する目釘穴がある。1607・1613は口縁部がやや内湾ぎみに立上る鍋で、上端面には凹部がめぐる。外面には指頭圧痕が、内面にはハケ目が顕著に残る。1609もやや内湾ぎみに立上る口縁部をもつ鍋であるが、口縁部が厚くつくられている。1610と1611は底部からほぼ垂直に立上る胴部をもち、口縁部がわずかに外反する。口縁部は少し肥厚させ、内面にやや幅広の面をもつ。

備前焼には壺（1614・1615）、甕（1616～1619）、擂鉢（1620～1625）がある。1614は小壺の口縁部である。1615は口縁部が少し肥厚するが、玉縁ではない。肩には沈線がめぐる。甕の口縁部はいずれも玉縁である。擂鉢は口縁端部がわずかに拡張されるもの（1620～1622）と、上下に拡張が著しいもの（1623～1625）とがある。

龜山焼（1595・1596）はいずれも甕の口縁部である。

瓦（1627）は平瓦で、四面には布目、凸面は格子目のタタキが認められる。

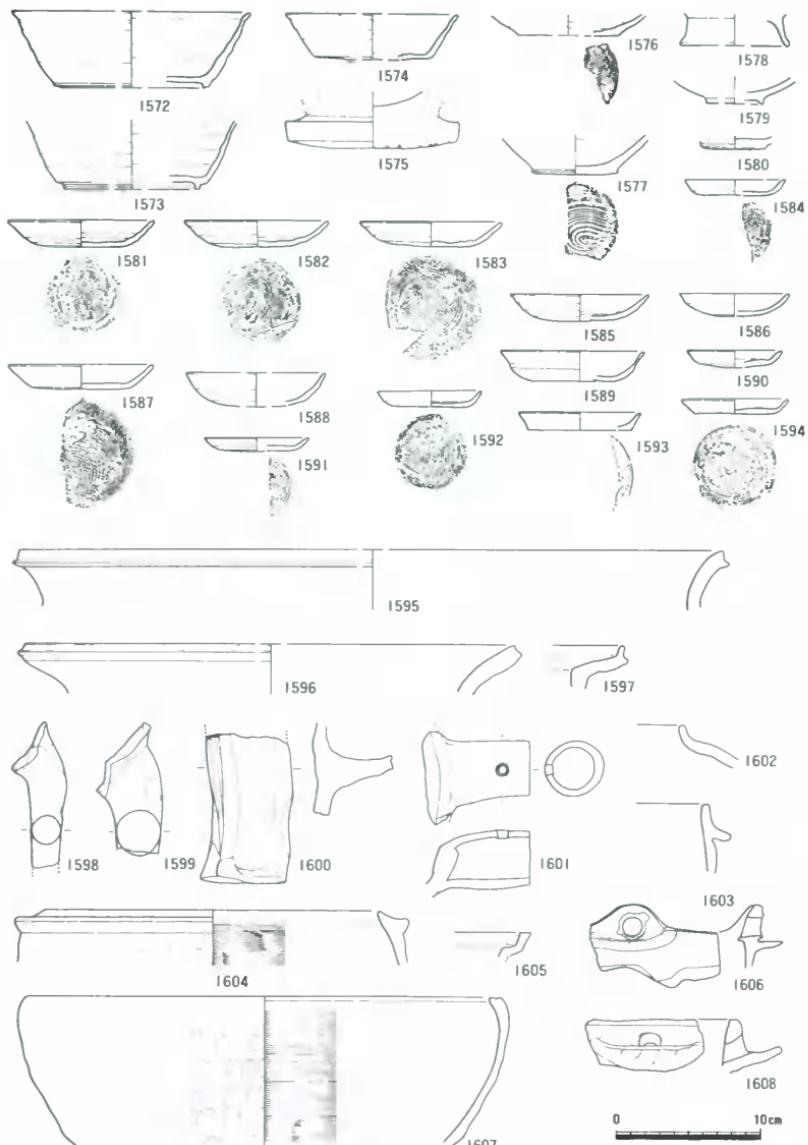
土製品には土鍤（C148～C156）がある。土鍤は円柱状のもの（C148～C151）と、棒状の両端に穴を穿つもの（C152～C154・C156）、そして梢円形の外周に溝をめぐらすもの（C155）とがある。

石製品には石鍋（S52）と石帶（S53）がある。石鍋は滑石製で、細い穴が穿たれている。石帶は裏面に2個が対になる穴が認められ、おそらく四隅に穿たれていたのであろう。

鉄製品には釘（I52～I63）と用途不明品（I64～I66）がある。

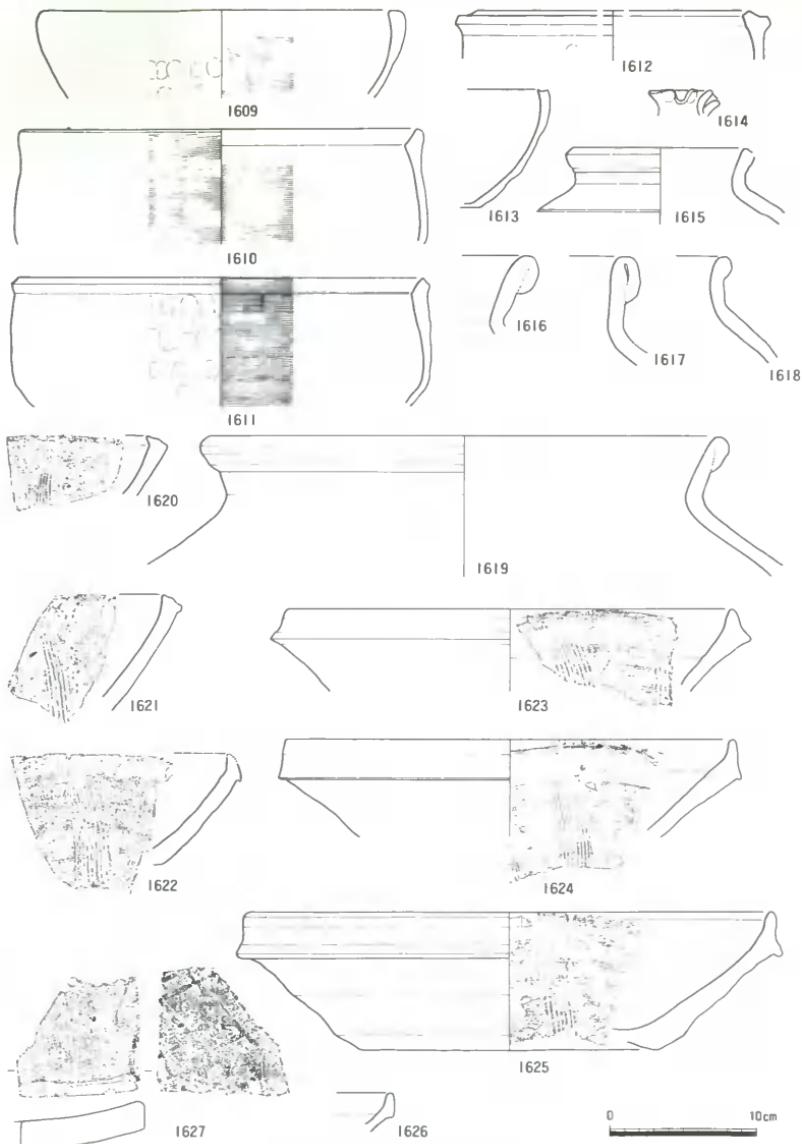
溝125の時期については、土器で見る限り奈良時代から16世紀まで混在しており、限定することは困難である。しかし溝122と同時に機能していたことは明らかであり、また15世紀代の土器が多いこともこのことを裏付けている。

(平井勝)



第385図 溝125出土遺物〔1〕

3 平安時代後期～室町時代

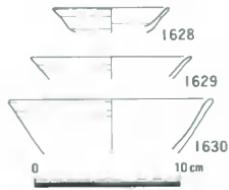


第386図 溝125出土遺物 [2]

溝126

1983年度調査区の20S区で検出した浅い溝である。北東から南西方面に流走する溝で、埋土は焼土や炭を含む灰茶黄色土である。

時期は溝125に切られ、溝115を切っているので中世と考えられる。
(平井勝)

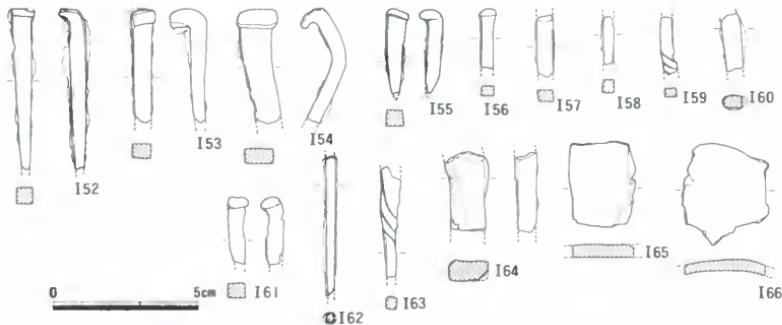
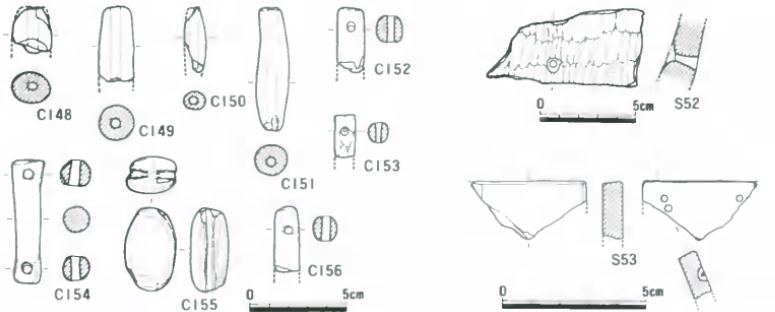


第387図 溝125出土遺物〔3〕

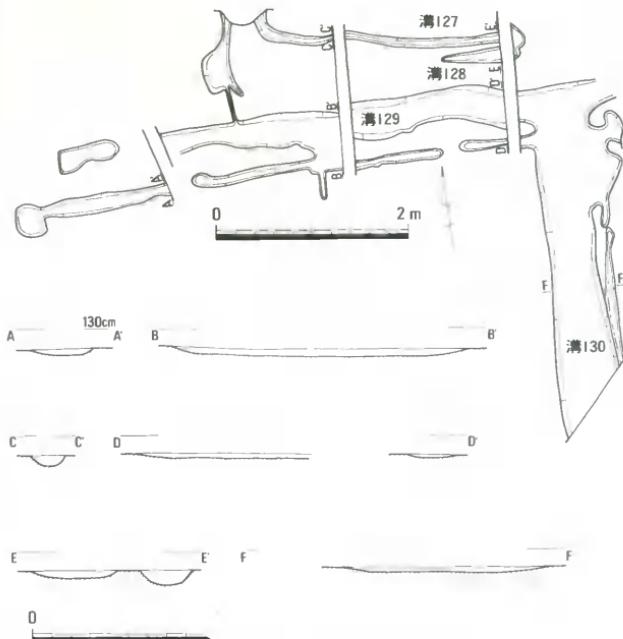
溝127・128 (第389図)

1983年度調査区の20S区で検出した細くて浅い東西方向の溝である。溝127は西端が北に折れ曲がり井戸141に切られ、東端は南側を平行して流走する溝128と接して終わる。埋土は焼土や炭を含む灰茶黄色土で、遺物は全く出土しなかった。

時期は検出面および埋土から中世と考えられる。(平井勝)



第388図 溝125出土遺物〔4〕



第389図 溝127・溝128・溝129・溝130 (1/60・1/30)

溝129・130 (第389・390図)

1983年度調査区の19~21S・T区で検出された「L」状に折れ曲がる浅い溝である。東西方向の溝129は西端が19S区で終り、東端は溝125に切られているため、全体が南に曲がるものか、さらに東へ延びる溝に南北方向の溝131が取り付くのかは明確にし得ない。

第390図
溝129
出土遺物

埋土は焼土や炭を含む灰茶黄色土である。遺物は土器の細片がわずかと、鉄釘が出土した。時期は中世であるが、溝125より古い。
(平井勝)

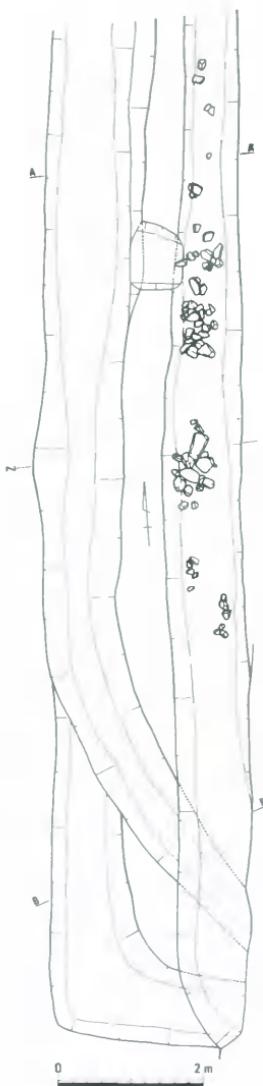
溝131 (第391図、図版138)

1985年度調査区の17~18X~Z区で検出した南北に流走する浅い溝で、溝129を切っている。幅37cm、深さ4cmを測る。

埋土は暗灰黄砂質土で、土器の細片をわずかに含む。

時期は土器の細片から中世と考えられる。

(平井勝)



第392図 溝132・溝133・溝134
(1/80) [1]



第391図 溝131 (1/30)

溝132 (第392~394図、図版138)

1985年度調査区の17・18W~Z区で検出した溝で、南北に流走し17Z区の南端で東に折れ曲がると推定される。溝133・134との関係は、溝134を切っているが、南端は溝133に切られている。規模は幅115cm・深さ21cmを測る。壁の立ち上がりは急斜で、底部は平坦である。

遺物は土師器皿 (1631)・備前焼の壺 (1632)・甕 (1633)などとともに石鎌 (S 54) が1点出土した。

時期は室町時代と考えられる。 (平井勝)

溝133 (第392・393・395図、図版138)

1985年度調査区の17・18W~Z区で検出した南北方向の溝で、南端は東に折れ曲がるものと考えられる。規模は幅110cm・深さ15cmを測る。壁は急斜に立ち上がり、底部は平坦である。埋土中には焼土を含み、また石も廃棄されていた。遺物は須恵器の甕 (1634)、鉄釘 (I 68) などが出土した。

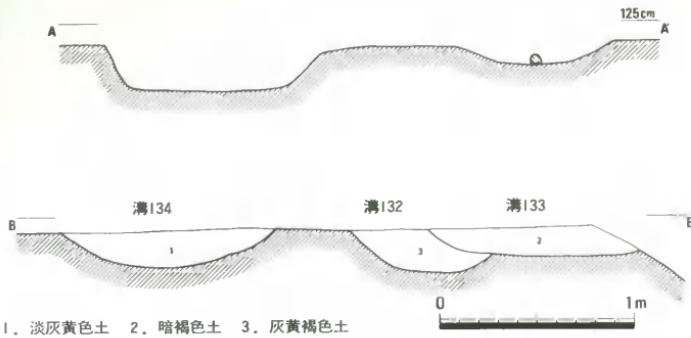
時期は中世と考えられるが、溝132より新しい。

(平井勝)

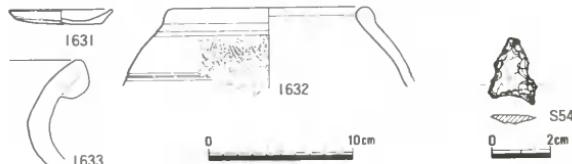
溝134 (第392・393図、図版138)

1985年度調査区の17Z区で検出した溝で、南北方向から東西方向にほぼ直角に折れ曲がるコーナー部である。規模は幅100cm・深さ19cmを測る。遺物は土器の細片がわずかに出土した。時期は中世と考えられるが、溝132・133に切られており、それらより古い。

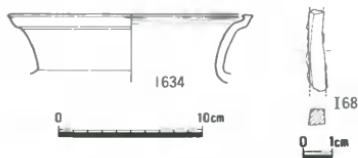
(平井勝)



第393図 溝132・溝133・溝134 (1/30) [2]



第394図 溝132出土遺物



第395図 溝133出土遺物

4 江戸時代

a 土 壤

土壤207 (第396図、図版115)

10K区の中央に位置する大形の土壤である。平面形は、長辺285cm、短辺210cm程度の方形に、190cmの舌状部分が付いた、かなり不整形な形をなす。深さは20cmを測り、壙壁は45°の傾斜をもつ。底面はほぼ平坦であるが、小さな凹凸が多くみられる。壙内堆積土は6層に分けられる。このうち、最下層の第6層は均質な厚さで底面一面に堆積していて、やはり上面には小さな凹凸が多くみられる。土は暗灰色粘質土で他の5層が砂質土であるとの対称的である。このようなことから、第6層はこの土壤の掘穿時か、土壤本来の機能が生きていた間に堆積したものと考えられる。第5層から第1層までは順序よい堆積をなし、最初は、土壤の南半側から土砂が壙内に流入していったことを想像させる。第3層と第4層には焼土塊や炭粒が含まれ、また第5層にも炭粒が点々とあり、集落の存続中に埋められていったことが知られる。その機能については明確ではないが、位置的には、北に隣接する池101との関係が意識される。やはり水を溜めていた可能性があるのではなかろうか。

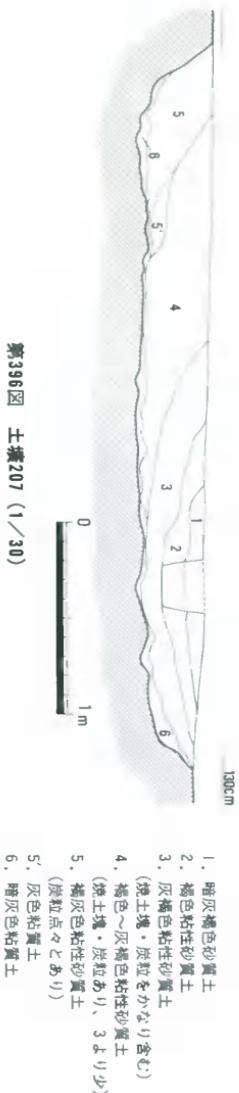
出土遺物は種類が豊富で、土器・鉄器・錢貨それに石英の小石がある。土器には土師器・須恵器・陶器・磁器・染付がみられ、鉄器は釘、錢貨は「洪武通寶」(初鑄1368年)である。これらの遺物の示す年代は江戸時代と考えられ、この土壤の年代はそれとほぼ同じかやや古い程度であろう。

(岡本)

土壤208 (第397図)

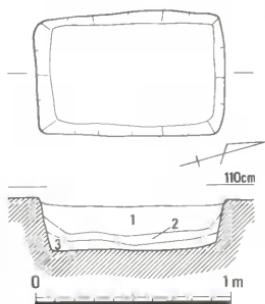
11L区の西半に位置する長方形の土壤である。長さ97cm、幅66cm、深さ28cmを測る。底面はほぼ平坦で、壙壁も垂直に近く、断面は箱形となる。埋土は3層に分けられる。第2層・

第396図 土壤207 (1/30)



第3層ともに水平に堆積し、土砂が自然に流入して堆積したものとは考えにくい。とくに第3層は黄色や暗灰色粘土のブロックが含まれ、人為的に敷かれたようである。出土遺物は土器と土錘である。土器片は多くあり、土師器・須恵器・瓦器・染付・陶器と種類豊富である。これらの遺物から判断して、この土壤の年代は江戸時代と考えられる。

(岡本)



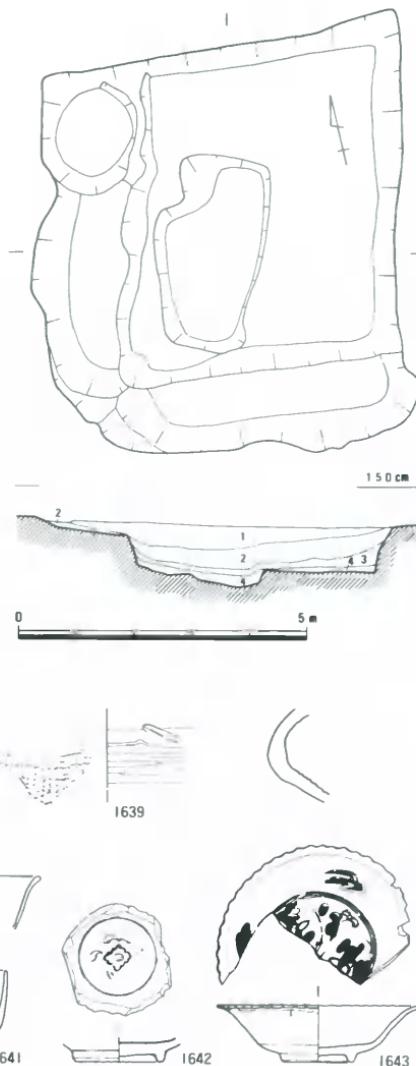
1. 灰色細砂
2. 灰色粘性微砂
3. 黄色・暗灰色粘土斑灰色粘性微砂

第397図 土壌208 (1/30)

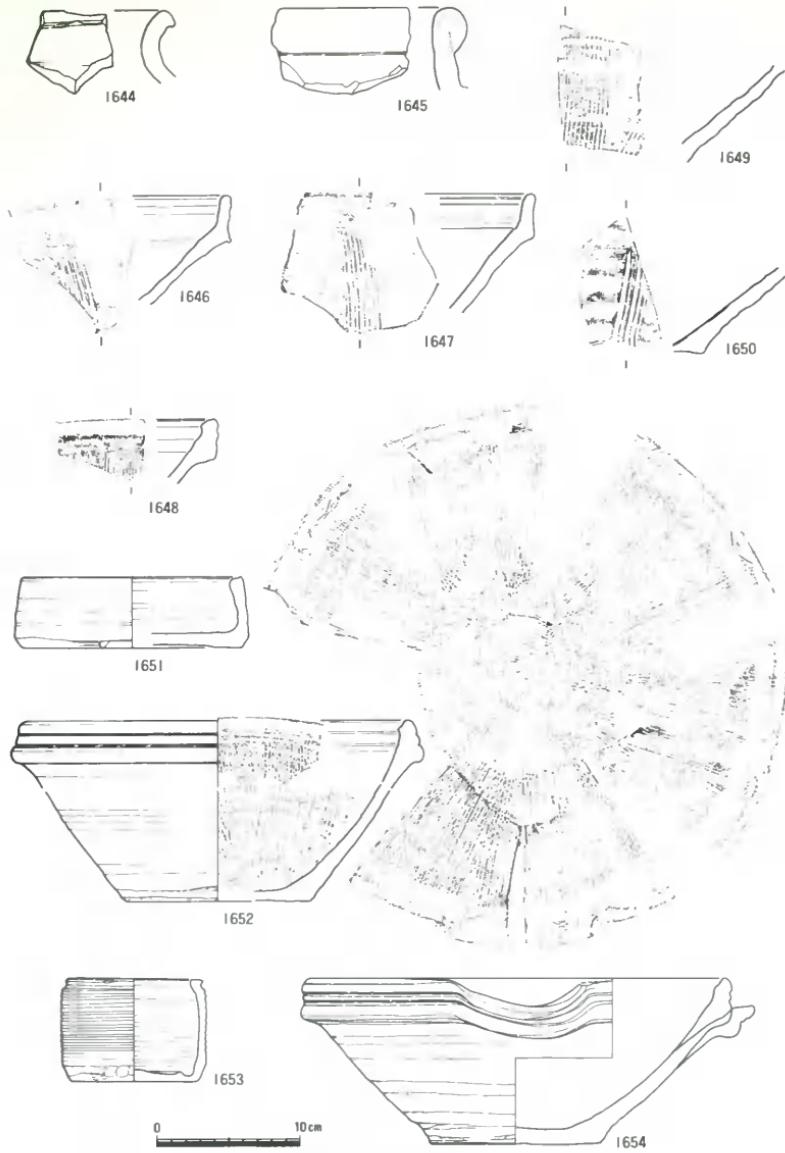
b 池

池101(第398~400図、図版139・140)

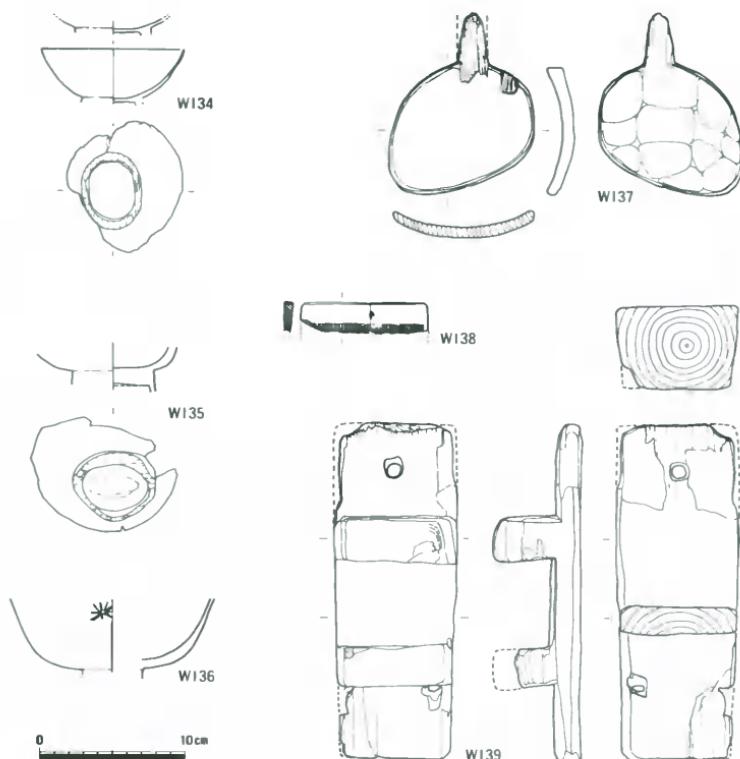
この遺構は、調査区10J~K区に位置する大形の土壙である。平面形態は不整形を呈し、長辺約7m、短辺約6.3mを測る。遺構の北東部の菱形を呈する長辺約5.7m、短辺約4.7mの部分は80cmほどの深さをもち、その底面の一部3.5×2mの範囲は、さらに20~25cm落ち込んでいる。菱形部分の南側と西側の肩部は、幅約1.5m、深さ約30cmのテラス状を呈している。また、北西の隅には径約1.7mではば円形の井戸状の窪み（深さ約80cm）があり、この部分の西肩部から落ち込むように、土壙



第398図 池101 (1/100)・出土遺物 [1]



第399図 池101出土遺物 [2]



第400図 池101出土遺物〔3〕

のほぼ中間レベルで小規模な貝（マガキ）の集積が認められている。埋土層が4層に大別されるが、その状況は中央に向かってゆるやかに低い自然堆積を示している。

遺物は、おもに第2層以下から、土師器、染付椀・皿などの磁器、亀山焼・備前焼などの陶器、そして椀・櫛・下駄などの木器が出土しているが、ほかにも弥生土器や土師器の細片や奈良時代の須恵器片（各50片以上）や青磁片・常滑焼片などもある。以上の土器のうち、染付や備前焼の擂鉢1652・1654などが廃絶に近い時期を示し、17世紀中頃～後半と思われる。

この遺構は、土の採取跡あるいは灌漑用の溜池などが考えられるが、壁面で観察される土は白灰色～暗灰色の砂質土であり、前者の場合は、とくにこの地点でしか採取できない土のようにも思えず、後者の可能性が強い。

（柳瀬）

5 遺構に伴わない遺物

埴輪（第401・402図）

輪の破片が出土しているのは、近現代の攪乱・暗渠、調査区北端の中世～現代溝等である。大形の破片は少なく、とくに中世～現代溝から出土した資料は全体に摩滅が著しい。これらの埴輪は本調査区の西120mに位置する丘陵の上にかつて所在していた古墳に伴うものと考えられ、丘陵斜面等に転落していた埴輪が暗渠に使用する石材とともに搬入されたり、下流側にあたる本調査区に流入したものと考えられる。

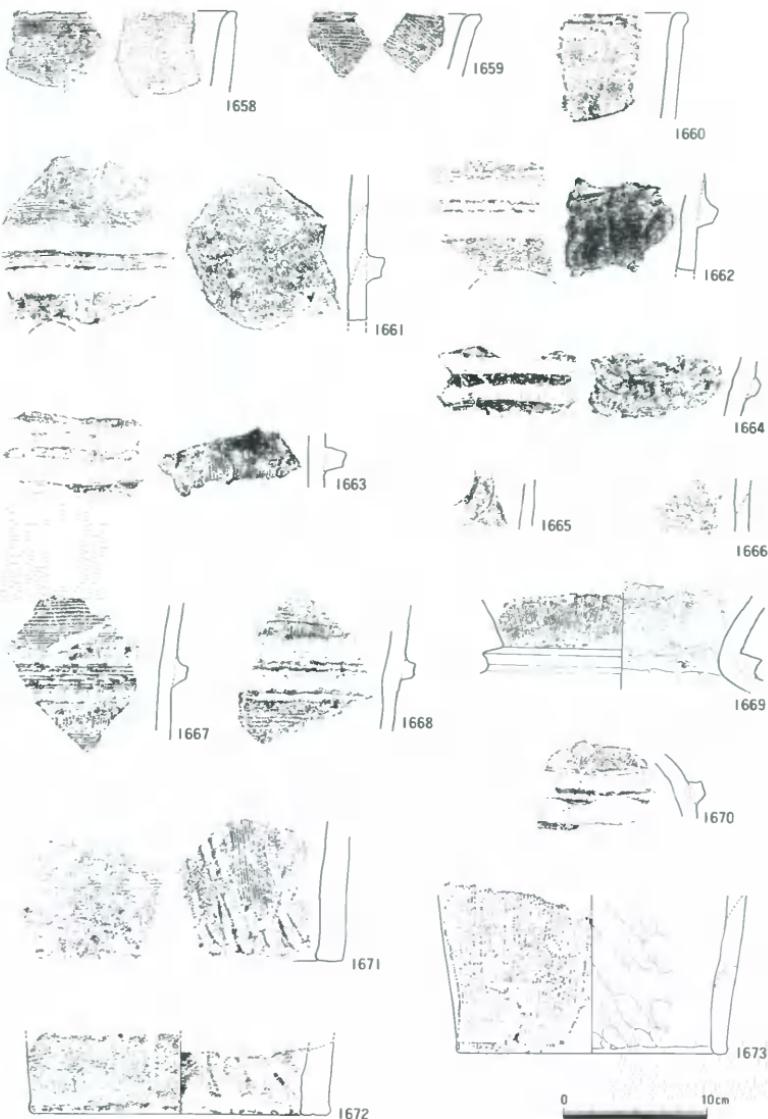
米田遺跡のこれまでの発掘調査においても、かなりの量の破片が出土しており、それぞれ報告がおこなわれている。今回の出土量は9~15、E~J区でコンテナ約1箱分である。

埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。円筒埴輪の外調整はB種ヨコハケで、基部はタテハケのみを施すものと、B種ヨコハケを施すものがある。内面調整はタテハケおよびナデである。突帯は突出が大きいものや低平なものがあり、かなりばらついている。透かし孔はいずれも円形である。基部の径は小さく19~21cmを測る。なお、円筒埴輪破片のうち1658、1665にはヘラ描きの文様が施されている。

朝顔形埴輪は破片点数が少ない。そのうち1670では肩部にもB種ヨコハケが施されている。1669や円筒埴輪1661などでは赤色顔料が塗布されている。

形象埴輪と判断できるのは1655~1657であり、1655は家形埴輪の破風部分と思われる。1657は円弧をなす本体部分に直線をなして粘土が貼り付けられており、なんらかの形象の基部と思われる。これ以外に図化できなかったが、家形埴輪の部分かと思われる扁平な破片が出土している。

埴輪片の大部分は黄褐色を呈し、焼成も良好であり窯窓焼成と判断してよい。しかしながら1664は焼成・色調が若干異なっており、赤褐色を呈し黒斑が認められる。1664と同様な焼成、色調を示すのは、1655~1657・1660・1673などであり。これらは野焼きによるものと思われる。このように焼成法から二者に区分できるものの、後者の突帯は低平で、基部の径も前者とほとんど差異がなく、前者よりも確實に古い様相を示すとは言い難い。吉備では野焼きと窯窓焼成の埴輪が共に用いられる例も認められるため、両者が同一の古墳に共存していた可能性を考える。

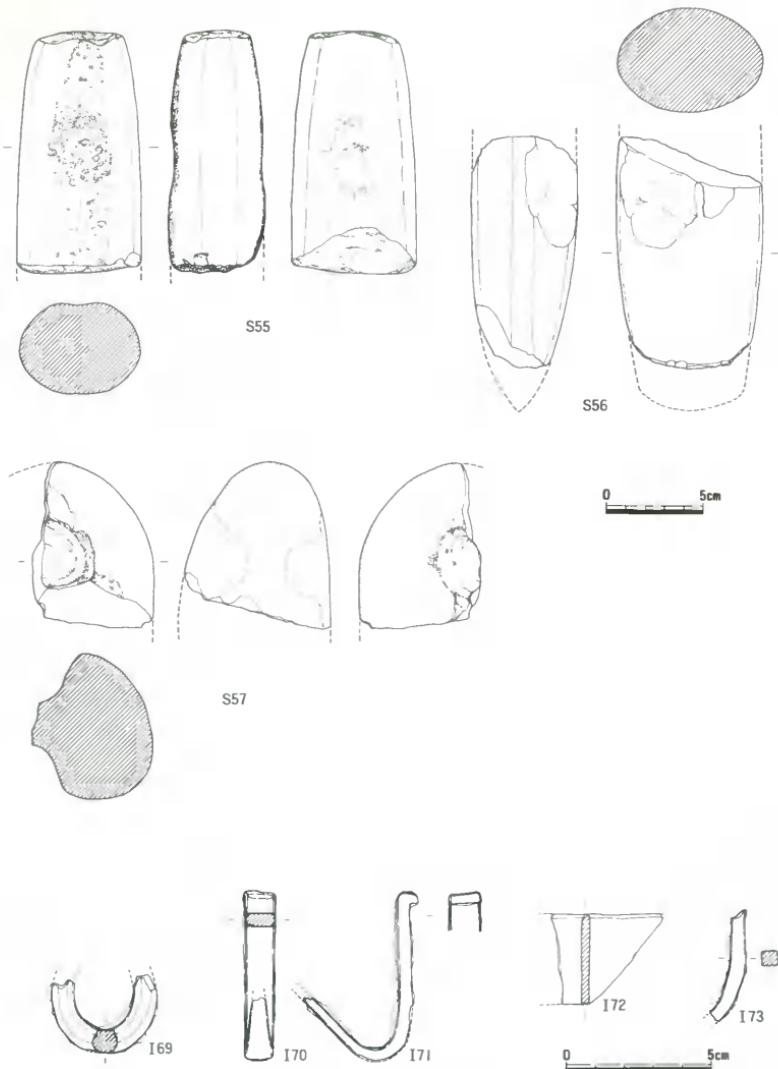


第402図 遺構に伴わない遺物〔2〕(埴輪)

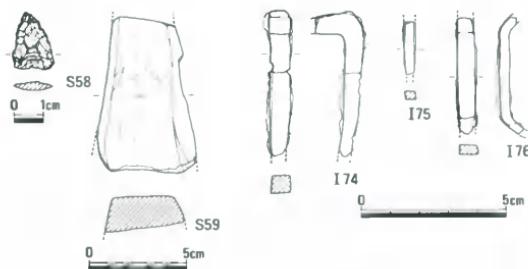
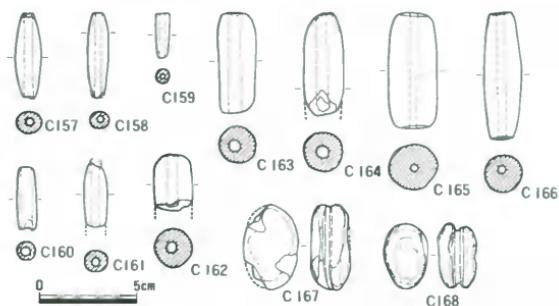
5 遺構に伴わない遺物

られる。別々の古墳に配列されていたものとしても、両者の時期差は小さく、共に川西編年IV期前半のなかに位置付けられると考えられる。

(字垣)



第403図 遺構に伴わない遺物〔3〕



第404図 遺構に伴わない遺物〔4〕

第4章 考察

第1節 中世の遺構について

1 井戸

米田遺跡で調査し、この報告書で報告される中世の井戸は22基を数える。それ等の井戸について、形態分類等を行って井戸のまとめに変えたい。井戸の形態分類を行う前に用語について説明しておきたい。『井戸』は、水を得るための施設全体を言うものであり、「井桁」は、その井戸の地上部分を示し、「井側」は、井戸の地下部分を示す（註1）。井戸についてこの様に定義すると、考古学的には、井桁部分の遺存することはまず考えられぬため、形態分類するすれば、井側の分類ということになる。

調査した井側は、木組みのものと、石組みのものがある。木組みの井戸は、いずれも四角形のもので、多角形のものは検出されていない。木組みの井戸は、四隅に柱を持つものと、持たないものがある。四隅に柱を持つものは、井戸135に代表されるもので、柱には穴をあけ、横桟を渡す。横桟は、井戸の深さに応じて、2～3段挿入される。横桟の外側には、縦板を一部重ね合わせながら並べるものである。井戸135の場合は、隅の柱は丸木を使用し、3個所に穴が見られる。板の大きさは、縦方向は、ほぼ同じであるが、幅は一定せず不揃いである。形態からすれば、方形隅柱横桟縦板型と呼ぶものである。

四隅に柱を持たない井戸は、横桟と縦板とで構築されるものがある。井戸131で代表されるものは、井戸の掘り方の底面に、方形に組合せた横桟を置くものである。横桟は、さらに50～60cm間隔で数段重ねる。横桟の両端は、凹凸、もしくは、直角に切り込まれたもので組み合わせている。この横桟の外側に縦長の板を、一部を重ね合わせながら並べるものである。横桟と横桟の間には、横桟がずり落ちないように、支柱を挿入する。形態からすれば、方形横桟支柱縦板型と呼ぶものである。

同じ様に方形横桟支柱縦板型であるが、井戸137に代表されるものは若干の違いを見せていく。相違点は、最下段の横桟の位置に見られる。つまり、井戸131では、最下段の横桟が井戸掘り方の底面に置かれていたのに対し、井戸137では、底面より20～30cm上ある。この一点を除けば、他はまったく同じである。

井戸126では、井戸の底面に横桟を置くものであるが、横桟と横桟の間には支柱の見られぬも

のである。形態的には、方形横桟縦板型と呼ばれるものである。

井戸127は、縦板のみで構築された井戸である。この井戸は、四周に板が完存しているものであるが、その内側において、柱、横桟と考えられる物はなにも出土しなかった。板が残存するものであることを思えば、横桟があれば、同じように残存する可能性は高い。にもかかわらず、それが存在しないことは、始めから存在していなかったと考えられる。または、埋納する時に、横桟のみを取り去ったことも考えられるが、それを取り去る意味が無いかぎり、その可能性もないものと考えられる。とすれば、この井戸127は、当初から縦板のみで構築されていたと考えるべきであろう。井戸は、ほぼ同じ幅の板を使用したもので、井戸の埋納に際しては、井戸の神に対する儀式（註2）を取り行っている。形態としては、方形縦板型と呼ぶものである。

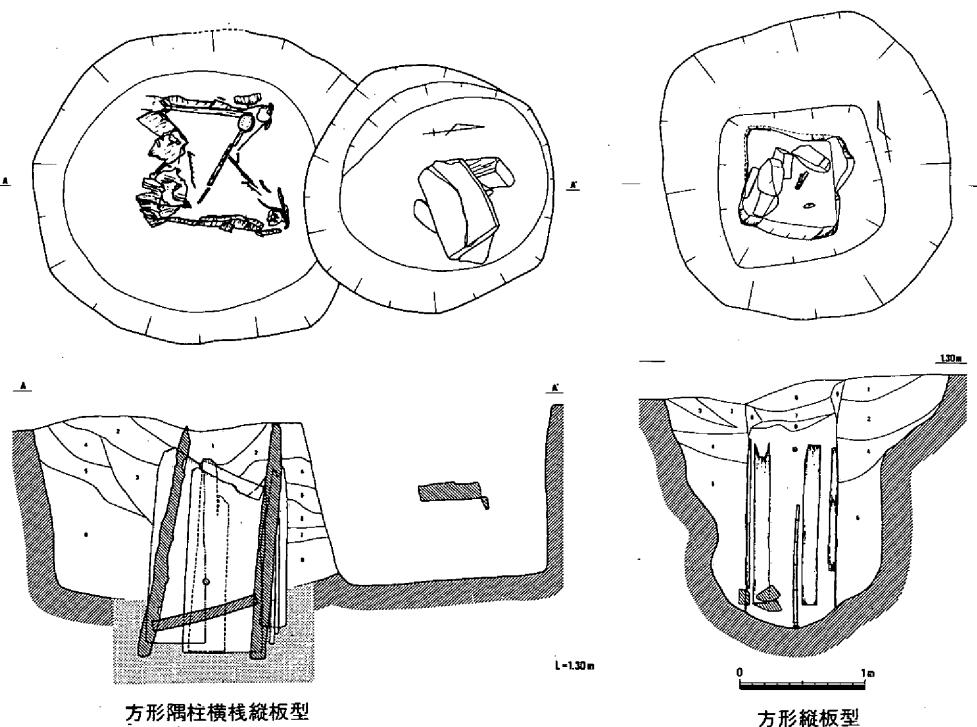
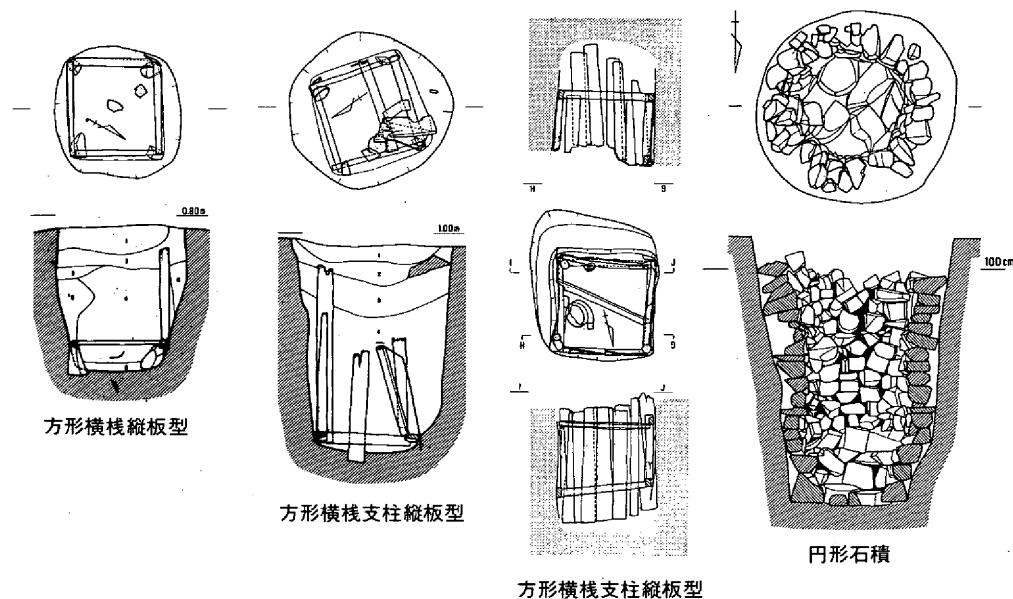
石組みの井戸には、掘り方の底面に陣木を組むものと、掘り方の底面から石を積むものの二種類ある。陣木を組むものは、陣木に規制され、底は方形であるが、上面は円形を呈する。陣木の無い井戸は、底から上面まで円形を呈している。井戸に用いられた石材は、自然石を利用した乱石積のもので、切り石により面取りをした井戸は検出されていない。石組みの井戸の場合、井戸の口径に比べて、掘り方の径が大きい。井戸136は、その中にあっても例外であり、掘り方いっぱいに石を積み上げている。他の石組みの井戸の掘り方が大きいのは、作業の安全性と仕事の易さからであろう。

木組みの井戸の場合は、井戸127・135は、井側に比べて掘り方が異常に大きい。他の木組みの井戸は、井側の大きさの倍程度である。しかも、底面は、ほぼ井側の大きさに近くなる傾向が認められる。特に、井戸137では、底面が2段に掘られており、深い部分は井側の外法とほぼ一致させて掘っており、側壁の二辺は、掘り方の壁にほぼ密着して作っており、非常に効率的で合理的な方法であると言えるであろう。

井戸の作られた年代をみると、方形横桟支柱縦板型で、横桟が底面に置かれる井戸131は、平安時代末頃と考えられる。方形横桟縦板型で、底面に横桟が置かれる井戸126は、平安時代と考えられる。同じ形態であるが、井戸138は鎌倉時代と考えられる。方形横桟支柱縦板型で、横桟が底面より上にある井戸130・137は、鎌倉時代と考えられる。方形縦板型の井戸127・129（？）も鎌倉時代と考えられる。方形隅柱横桟縦板型の井戸135は、鎌倉時代の後半と考えられる。石組みの井戸132・133・136・139・141は、いずれも室町時代と考えられる。

このように見てくると、方形横桟支柱縦板型で、井戸の底面に最下段の横桟を置くものが古く、新しくなるに従い最下段の横桟の位置が高くなる傾向を見ることができる。隅柱のものは、鎌倉時代の後半において初めて見られる型である。木組みの井戸の盛期は、鎌倉時代まで、室町時代の木組みの井戸は発見されていない。

石組みの井戸は、5基を調査したが、いずれも室町時代のものである。以上のように、米田



第405図 井戸形態分類図(1/60)

第4章 考 察

遺跡で見るかぎり、木組みの井戸が古く、石組みの井戸が新しくなり、室町時代頃にその変化が認められる。ただし、以上のこととは、井戸の埋没の時期から見たものであるため注意を要する。つまり、木組みの井戸は、材質が木であることにより耐用年限が短いことが考えられるのに対し、石組みの井戸は、それが長いことが当然考えられる。そのため、構築された年代は、石組み井戸の場合は少し古くなる可能性はあるが、全体的な傾向としては、木組みが古く、石組みが新しい。

(井上)

註

- (註1) 日色四郎 「日本上代井の研究」 1967年
山本 博 「井戸の研究」 総芸舎 1970年
小都 隆 「草戸千軒の井戸」『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会 1979年
井戸の形態の名称については、定まったものがないが、上記のものを参考にした。
(註2) 水野正好「竹筒をのこじた一井とその秘呪」『草戸千軒』No36 1976年
水野正好「三宝荒神符と天中の呪句」『草戸千軒』No47 1977年
水野正好「金貴大徳の呪句と埋井の呪儀」『草戸千軒』No58 1978年

2 大 溝

米田遺跡のRラインから南側で、「工」字状に流走する大溝が検出された。北側を東西方向に流走する溝122は、延長80mを確認し、東西方向へさらに延びるものと考えられる。溝122の南側を平行する溝124は、約28mを検出したが、これも調査区外へさらに延びることは確実である。この2本の東西方向の溝を連結するように南北方向に溝123が掘られており、溝122と溝124との距離は90mを測る。

検出面での幅約7mを測る大溝は、通常見られる断面がV字あるいはU字状を呈するものとは異なる。溝の上端から少し下がった場所に幅約1m前後の平坦部を両側に形成し、ここから底部に向かって掘削が行われているのである。この平坦部は、削平によって残っていない場所もあるが、基本的にすべて形成されていたと考えられる。

普通の通水施設には見られない平坦部は、何か特殊な機能、すなわちこの溝の性格の一端を物語っているように思われる。

米田遺跡の東約1kmたらずの所には芥子山があり、その南に大多羅町という地名がある。『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に記された「大邑良葦原」に比定されるところである。さらに米田遺跡のすぐ西側には岩間という地名があり、これも同じく「石間江」に比定される。これらの比定が正しいとすれば、米田遺跡と芥子山との間には海が北に向かって細長く入り込み、その周辺には葦原が広がっていたと考えられる。それに加え、調査区に近い場所に船着という字名があることや、大溝内の貝塚がハイガイで構成されることも根拠の一つになるであろう。

のことから米田遺跡は操山山塊の山裾に形成された海浜の集落であったものと考えられるが、普通の集落ではなく、港町として栄えたのではあるまいか。しかし、港の状況については明らかにされているわけではない。ただ、前面に広がる海は、大邑良葦原に見られるように、遠浅で湿地帯が発達していたものと考えられ、大きな船が集落の近くまで接岸することを困難にしていた可能性が考えられる。そこで、結論を先に言えば、米田遺跡の大溝は、物資を積んだ船を集落の近くまで通す、運河としての機能が考えられる。大溝の両岸に見られる平坦部は船曳き道ではなかろうか。

もし大溝を用水と考えると、海水を水田に引くような結果となってしまうし、ましてや、大切な用水に、底ざらえをすることはあっても、大量の貝殻、土器類、礫などの溝を埋めつくすゴミの廃棄は理解しがたいのである。

もちろん運河としても解決されなければならない問題は多くある。ただ運河の類例は少なくこれ以上の類推を重ねることはやめ、運河の可能性を指摘するにとどめておく。

最後に運河として利用された時期について述べておく。運河が掘削されたのは、溝115を切っ

第4章 考 察

ていることから、それ以後といえる。溝115は奈良から平安時代の遺物を含むが、最も新しい土器は10世紀である。

一方運河内に大量に廃棄された遺物は、奈良時代から最も新しいものは江戸時代にかかるものである。しかし多くは、溝122の北側集落から投げ込まれたと考えられる状況で出土した15・16世紀の遺物である。

したがってこの運河は、10世紀中頃以後掘削され、15・16世紀にはその役割を停止していたものと考えられる。 (平井勝)

第2節 中世米田遺跡の構造と変遷

1983年から1985年の3年間にわたって発掘調査された百間川米田遺跡からは、弥生時代から江戸時代までの数々の遺構・遺物が検出された。なかでも、中世の建物や井戸・土壙・溝がまとまって出土し、中世における集落の形態の一例をかいしませてくれた。ここでは、米田遺跡における中世集落の構造とその変遷をみるとこととしたい。

集落の構造と変遷を考えるための基礎作業として、個々の遺構の年代確定が不可欠である。第9～11図に示された全体図は長期間にわたる集積の結果であり、これをある時間単位に分解して考察しなければならない。中世米田遺跡では、集落の構造を考えるうえで、その方向性や地区割りをもっとも視覚的に明瞭にしてくれる、棚列や塀・溝のような施設があまり検出されなかった。このため、方向性は建物の棟方向から、地区割りは建物や井戸の分布状態から考察されることとなる。以下、建物の年代比定（編年）について考える。

建物のもつ諸要素のなかで、時代性を示す可能性のあるものとして、柱間の分割方法、棟方向、柱間の長さがあげられる。これらの諸要素について検討してみたい。

柱間の分割方法については二つの型がみられる。一つは柱間を均等に分割するもので、建物126や建物138がそうである。これに対して、桁行3間のうち2間が等しく、他の1間は長さの異なる分割をする場合が米田遺跡ではしばしば認められた。たとえば建物132・建物157がそうである。前者をA型、後者をB型として、米田遺跡で出土遺物から年代の推定可能な建物について検討してみると、A型は鎌倉時代とされたものに多く、B型は室町時代のものが少し多くみられた。そこで、岡山県内の類例を検討してみると、A型は鍛冶屋遺跡（註1）S B 42（鎌倉）、園井土井遺跡（註1）No.66建物（室町）、赤野遺跡（註2）建物I（室町）、田治部氏屋敷址（註3）建物1（室町）、樋本遺跡（註4）建物3（鎌倉）などの例がみられ、B型は鍛冶屋遺跡S B 07（鎌倉）、園井土井遺跡No.61建物・No.65建物（室町）、上竹西の坊遺跡（註5）建物2（室町）に類例があった。A型は室町時代のものも多くみられ、年代判定の材料にはならないと考えられるが、B型は鎌倉時代のものもみられるものの、全体的には室町時代に多いようと思われる。百間川米田遺跡の建物157はB型ではあるが、他の遺構との関係から鎌倉時代であることは確実とみられるので、B型の建物は鎌倉時代頃に始まり、室町時代には多くなるものと考えておきたい。

建物の棟方向について、それぞれの角度の頻度をみると、 $6^{\circ}30'$ 、 $8^{\circ}30'$ 、 10° 、 $12^{\circ}30'$ 、 14° の角度をもつ建物が多い。そこで、今かりに $5^{\circ} \sim 9^{\circ}$ をA型、 $10^{\circ} \sim 13^{\circ}$ をB型、 $14^{\circ} \sim 17^{\circ}$ をC型、 $19^{\circ} \sim 22^{\circ}$ をD型とする。桁行3間以上の建物について検討すると、出土遺物から室町時代と考えら

れる建物はほとんどA型で、建物152も4°とA型に近い。これに対して、B型の建物はすべて鎌倉時代のものであり、棟方向が時代を反映していることがわかる。すなわち、B型はA型に先行し、鎌倉時代までと考えられ、A型は鎌倉時代後半から室町時代にかけてとられた方向とみられる。ちなみに、奈良時代の建物109は10°30'、建物110は13°とB型の範囲にある。

柱間の長さについても頻度を調べると（註6）、165cm、200cm、210cmのものが多く、ついで、150cm、160cm、180cm、190cm、220cmがかなりみられる。そこで、これについても、130~175cmをA型、176~195cmをB型、196~225cmをC型、226~279cmをD型として、それを使用している建物の年代を検討した。室町時代と推定される建物ではA型とC型がともにみられるものの、少しC型が多かったが、棟方向B型の建物をみるとA型とC型がほぼ同数みられた。このことからすれば、百間川米田遺跡では柱間の長さによる年代判定は困難であると考えられる。しかし、岡山県内の例ではC型がA型より後出する傾向が認められるようである。園井土井遺跡No.61~66建物（室町）、上竹西の坊遺跡建物2、赤野遺跡建物I・II（室町）、田治部氏屋敷址建物1・5（室町）はすべてC型である。

以上の検討から、百間川米田遺跡では建物の棟方向がもっとも有力な年代判定の鍵となると考えられる。したがって、検出された建物はまず棟方向によって、すなわちB型が先行し、A型が後出するとして、2期に分けられる。後者については、出土遺物が室町時代と明瞭に判断できるものと、鎌倉時代の遺物がほとんどを占めるものを区別して、さらに2期に分ける。

以上3期を設定したが、棟方向を問題にした場合、A型・B型以外に、C型・D型の建物の存在が問題となる。そこで、C型・D型の建物を検討してみると、そのほとんどが1×1間か2×1間の小規模な建物であり、床面の形状では歪んだものが多く、柱間もA型かD型がほとんどであるなど、共通した要素が多く、ひとつのまとまりとして把握することが可能である。このことからC型・D型の建物も1時期の産物として考えることとする。C型・D型の建物は年代の不明瞭なものが多いが、なかに、鎌倉時代の後半、あるいは室町時代かとみられる遺物を含むものがある。

このように、百間川米田遺跡の建物を次のように4期に分けることとする。

1期（平安時代後期～鎌倉時代）

建物123・131・132・133・138・139・140・144・145・146・148・150・156・157・161・164

2期（鎌倉時代後半～室町時代前半頃）

建物130・134・137・143・149・151・154・155・162・166・169・170

3期（室町時代中頃～後半）

建物126・147・152・153・159・167

4期（室町時代末期？）

建物111・112・114・115・116・117・118・119・121・122・127・128・129・141・142・158・
160・168

なお、井戸については、ある地区に集中して作られる傾向が認められ、一地区の井戸の年代をみると、時間的に連続する場合が多い。たとえば、16N・O地区では井戸133・134・135の3基が検出されたが、井戸135は13世紀後半、井戸134は15世紀、井戸133は米田遺跡の井戸ではもっとも新しい型式の石組み井戸で、16世紀と考えられる。このような状況は、後述するように、屋敷地が中世を通じて大きく変動しなかったことによると考えられる。

次に、建物の編年をもとに、中世米田遺跡の構造とその変遷を追ってみたい。

1期の建物の分布をみると、まず気付くことは、床面積が33m²以上の大型の建物が適当な距離をもって配置されているという事実である。大型の建物とは建物131・132・138・144・157を指すが、それらの間の距離を測ると25~30mで近似している。ただし、建物131と132はほぼ同規模で近接し、131が柱間の分割方法がA型なのに132はB型であり、また柱間の長さも131がA型なのに132がC型、というような差をみせることから、建て替えられた可能性が強い。

この4棟の大型建物のうち3棟までは確実に井戸を伴っている。建物131・132には井戸123、建物157には井戸137・138、そして建物138では井戸126・131など平安時代後期から鎌倉時代までの井戸が集中している。このような建物と井戸との密接な関係はそれぞれの建物の独立性を示していると考えられ、それらの建物が一定の距離を保っていることは、土地についてもそれぞれに屋敷地として所有が確立しているものとみられる。したがって、調査区は大きくみれば4区画に分けられていたと考えられる。この1区画の中には、さらに1、2棟の中、小規模建物が建てられている。建物131には建物133が、建物144には建物148が、建物138では建物の東側に検出された多量の柱穴群内におそらく同期の建物があったと推測される。

このように、中世米田遺跡の初期の姿は、1棟の大型建物とそれに付属する1、2棟の中、小型建物、それに井戸が一つのセットとなり、一定の敷地の内に配置され、そのような屋敷地が連続して並んでいたものと考えられる。

2期に入っても屋敷地割りは大きく変化していないと考えられるが、建物の規模は小さくなっている。建物132の地区には建物134が、建物138の地区には建物137が位置している。また建物149は建物157の地区に属するかと考えられる。ただ、これらの建物は付属する小規模な建物をもっていない。

2期に入っての新しい変化として、建物151と154の出現がある。これらの建物の建てられた場所は1期には建物138か157の属する屋敷地であったとみられるが、それらの屋敷地が一部分割されたのであろう。また、溝122を南へ渡った場所に、建物166・169・170で構成される区画が新しく形成される。

第4章 考 察

3期になっても2期の地割りはかなり踏襲されている。かつて建物144があった地区には建物147が建ち、建物157があった地区には建物153が建つ。建物153には小規模な建物159が付属している。建物151の場所には、少し規模を大きくした建物152がほぼ同位置で建てられる。建物152には井戸136が伴うとみられ、一つの屋敷地として独立していると考えてよい。

3期になっての新しい動きとして建物126の出現がある。その位置はかつての建物131と138の境界付近にあるため、新しい地割りのうえに成立したと考えられる。なお、3期になると建物が再び大型化している。

4期になると米田遺跡の状況は大きく変化する。大型の建物は影を潜め、1×1間、あるいは2×1間の小規模な建物が点在するようになる。その分布をみると従来の地割りは消滅したかと思われる。これら的小規模建物の床面積は広くとも15m²程度で、多くは10m²に満たないものが多く、人が日常生活を送る住居とは考えられない。その床面の形状も長方形よりはかなり歪んだものが多く、小屋的な性格が強い。

ただ、このような状況のなかにあって、建物126が建っていた場所の近くには建物127・128・129の3棟が近接して建てられ、建物153の建っていた地区には建物158・160の2棟があり、なお、従来の地割りを守っている。しかし、全体的な傾向としてはすでに集落的な様相は失われていて、中世米田遺跡は3期で終末を迎えたと言えよう。

最後にこの集落の性格について少し述べたい。この集落は運河状の大溝を伴っていることから、「港町」的な海浜集落とみることもできる。確かに、奈良時代には官衙色の濃い倉庫が多く建てられ、国府に付属する倉院的な性格が強いことが指摘されていて(註7)、その性格をその後長く受け継いできたことも考えられる。しかし、今回調査した部分について検討すると、広い屋敷地をもつ大型建物が一定の距離を置いて位置し、それに1、2棟の中、小規模の建物が伴うという状況はとても「町」的な様相とはいはず、また倉と考えられそうな建物もほとんど認められない。このようなことから中世米田遺跡は農村集落の一類型と考えたい。(岡本)

註

- (註1)『山陽自動車道建設に伴う発掘調査4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告70 岡山県教育委員会 1988年
- (註2)『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3 岡山県教育委員会 1973年
- (註3)高畠知功『田治部氏屋敷址』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告67 岡山県教育委員会 1988年
- (註4)『樋本遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告65 岡山県教育委員会 1987年
- (註5)『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69 岡山県教育委員会 1988年
- (註6)5cm単位とし、二捨三入、七捨八入している。
- (註7)『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52 岡山県教育委員会 1982年

付載1 岡山市百間川米田遺跡(昭和60年度調査)出土の中世人骨

岡山理科大学理学部

教授 池田 次郎

岡山市の百間川の河川敷に拡がる百間川遺跡群の発掘調査は、昭和52年以来、岡山県教育委員会により続けられているが、昭和60年、そのひとつである百間川米田遺跡から中世人骨5点が検出された。人骨は脳頭蓋骨2点、下肢長骨3点で、いずれも溝122の中に散乱していたものであり、骨質は比較的堅牢である。

脳頭蓋骨は左の頭頂骨(図版141-1)と前頭骨(図版141-2)で、両者は別個体のものである。左頭頂骨は、乳突角付近および頭頂結節付近を欠損する。正中矢状弧長(123mm)、正中矢状弦長はやや小さいが、骨壁は厚い。冠状縫合、矢状縫合、人字縫合はすべて離開しており、矢状縫合の走行は比較的単純である。これらを総合すれば、若年もしくは壮年前半のものと推定されるが、性は判定できない。

前頭骨の残存部は、鼻部、眼窩部、さらに左頭頂縁の一部、眉間および左右眼窩上縁の正中よりを欠く前頭鱗である。側頭線は強く、最小前頭幅(97mm)、最大前頭幅(117mm)、上顎幅(114mm)は比較的大きいので、成人男性骨と推定される。眼窩上孔が左右とも存在する。

下肢長骨は、成人の大腿骨(図版141-3)と脛骨(図版141-4)、未成人の大腿骨(図版141-5)の3点で、いずれも近位および遠位の骨端を欠く左の骨体である。

成人の左大腿骨の中央部周径(82mm)は現代近畿男性の平均値に近いが、矢状径(25mm)はそれより小さく、横径(27mm)はそれより大きく、その結果、横断示数(92.6)はいちじるしく小さい。骨体上部の最大径(32mm)、最小径(22mm)から算出される骨体上部横断示数(68.8)も小さい。粗線、殿筋粗面の発達は男性としては弱い。

成人の左脛骨骨体は、脛骨粗面の直下から前縁が内側に方向を転じる付近までの破片であるが、栄養孔部一帯を欠損し、骨体表面の一部が剥離している。中央部の最大径(29mm)、横径(19mm)、周径(77mm)、栄養孔部最大径(35mm)、骨体最小周(74mm)は現代近畿男性の平均値に近いが、骨間縁は弱い。中央部の横断示数(65.5)は扁平性を示す。左大腿骨とともに男女の判定は困難で、両者は形態特徴からみて、同一個体に属す可能性もある。

未成人の左大腿骨骨体の破片から、その最大長は240~250mmと推定されるので、これは10歳前後の幼児骨とみられる。骨体中央の矢状径(16mm)、横径(18mm)、周径(57mm)が計測できた。

付載 2 百間川米田遺跡（中世）出土の獣骨

獨協医科大学第一解剖学教室

茂原信生・江藤盛治

桜井秀雄・芹澤雅夫

I) はじめに

百間川米田遺跡は岡山県岡山市米田にある遺跡で、時代は弥生時代から江戸時代までの長期にわたる複合遺跡である。本報告はこのうち、中世の集落遺跡から出土した脊椎動物についてのものである。これらの動物遺存体は、主に遺跡の南部の大溝（溝122～124）（幅4～7m）から出土したもので、時代は主として室町時代後半のものと考えられている。骨の保存状態はおむね良好である。出土したもののうち、種の同定を行った点数は187点である。中世の遺跡から多くの獣骨が出土する例は少なく、また種の同定結果が報告されているものも少ないので、この時代のものとしては貴重なものである。

II) 出土した脊椎動物の種名

同定できたものは156点であった。内訳は、魚類が1点、爬虫類が3点、鳥類が10点、そして哺乳類が142点である。哺乳類の点数には、ウシとウマの遊離歯が46点含まれている。構成種は9目10科11種である。出土脊椎動物の種類は以下のとおりである。それぞれの出土点数を()内に示した。

硬骨魚綱 Osteichthes

スズキ目 Perciformes

タイ科 Sparidae

マダイ Pagrus major (1)

爬虫綱 Reptilia

カメ目 Testudinata

スッポン科 Trionychidae

スッポン Trionyx sinensis (3)

鳥綱 Aves

コウノトリ目 Ciconiiformes

サギ科 (Ardeidae) の一種 (1)

スズメ目 Passeriformes

カラス科 Corvidae

ハシブトガラス Corvus levaillantii (1)

キジ目 Galliformes

キジ科 (Phasianidae) の一種 (8)

哺乳綱 Mammalia

偶蹄目 Artiodactyla

ウシ科 Bovidae

ウシ Bos taurus (65)

シカ科 Cervidae

ニホンジカ Cervus nippon (7)

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ Equus caballus (20)

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

オオカミ Canis lupus (1)

イヌ Canis familiaris (2)

ネコ科 Felidae

ネコ Felis catus (1)

同定された動物の出土種別および層位別のリストを表1、2に示した（資料番号は岡山県古代吉備文化財センターによるものを用いている）。

III) 出土資料について

①マダイ

一点が出土している。解体痕が認められた。食用に供されたものと思われる。

②スッポン

三点が出土している。出土部位が同一箇所ではないので個体数は不明である。スッポンについての出土報告は少なく、関西では滋賀県石山遺跡（縄文時代）で報告されている（酒詰：1961）。他に大阪吹田市五反島遺跡（弥生時代から鎌倉時代）からも出土が確認されている（茂原；未発表）。ただし、遺跡（例えば低湿地遺跡など）によっては自然に混入することも考えら

れる。

③鳥類

トリは、次の3種類が同定された。

a) サギ科の一種

一点が出土している。サギはサギ科の一種で、かなり大型のものである。アオサギ、あるいはムラサキサギの可能性がある。

b) ハシブトガラス

出土部位は中手骨1点である。カラスの肉には臭みがあると言われているので、食用に供されたかどうかは疑問が残る。

c) キジ科の一種

一点が出土している。若い個体のため、成鳥の骨に見られる筋の付着部位の特徴が未発達で種の確定ができない。ニワトリの可能性もある。骨端が未完成の若い個体であるにもかかわらず、現生のニワトリより大きく、成鳥はかなり大型であったと思われる。

ニワトリは縄文時代の貝塚や弥生時代の住居址からの出土も報告されており（直良；1972）中世には飼育されていたと考えられている。本遺跡から出土したこれらのキジ科の骨が、仮に家鶏としても形態的には現生種（たとえば白色レグホン）とは異なっている。日本各地に現存する地鶏の原形種や、ニワトリの原形と考えられる東南アジアの赤色野鶏を育種改良したものなどの古い形質を持つ種に近い（一戸・他；1973、渡邊・他；1980）。

④ウシ

ウシは65点が同定された。同定できた全点数のうち約60%を占めている（全出土点数の45%）。25点に解体痕や咬痕などの傷が見られた。骨髓食はなかったらしく、縄文時代の獸骨とちがって細片化していない。計測できたものは下記の通りである（単位はmm）。計測方法は、Driesch（1976）にしたがった。（ ）内はDrieschの項目番号である。

1) 頭蓋骨

左下顎骨最大長 (1)	: 356
(2)	: 360
下顎枝高 (12)	: 150.2
臼歯列長 (7)	: 139.3
大臼歯列長 (8)	: 78.8
下顎体長 (6)	: 319
体高 (15a)	: 72.1
体高 (15b)	: 54.9

表 1-1 岡山県百間川米田遺跡出土脊椎動物遺存体の種別リスト

区	Gr	層位	No.	種名	骨名	R,L	U,L	歯	状態	部位							独協No.	備考
										c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de	
15R	溝122	貝層	113	Ardeidae	m.t	r			f					1	1	1	179	
20S	井戸141 (内)		37	Bos	pelvis	r			f								28	咬痕
14, 15R	溝122	2層	145	Bos	atlas				c	1							122	解体痕
16R	溝122	2層	142-2	Bos	calcaneus	l			f								112	解体痕咬痕、小型 or 若年
13-15R	溝122	2層	166-3	Bos	femur	l			f								160	解体痕咬痕、小型 or 若年
14R	溝122	2層	144	Bos	mandible	l			f								114	118と同一個体
14R	溝122	2層	144	Bos	mandible	l			f								115	下顎体腹縫部
17-18R	溝122	2層	141-2	Bos	mandible	l			f								111	解体痕、下顎枝筋突起及び下顎頭
13-15R	溝122	2層	166-2	Bos	maxilla	r			f								158	口蓋骨水平板
13, 14, 15R	溝122	2層	166-2	Bos	skull	l	1		f								156	166-2と同一
16, 17R	溝122	2層	156-2	Bos	skull	l			f								142	
13-17R	溝122	2層	166-2	Bos	skull				c	1							106	
16, 17R	溝122	2層	136-2	Bos	talus	l			f								130	解体痕
19R	溝122	3層	132-1	Bos	costae	?			c	1							89	解体痕
14, 15R	溝122	3層	133-3	Bos	m.t3	l			f								98	解体痕、若年?
13-15R	溝122	3層	131-1	Bos	mandible	l			c	1							84	現生と同大
17R	溝122	3層	130-2	Bos	mandible	r			f								83	下顎体舌側P2-P3部
17R	溝122	3層	129	Bos	maxilla	l			f								178	口蓋骨水平板
14, 15R	溝122	3層	133	Bos	maxilla	r			f								167	頬骨
19R	溝122	3層	132-8	Bos	pelvis	r			f								96	解体痕
16, 17R	溝122	3層	127-2	Bos	radius	r			f								78	小型 or 若年
19R	溝122	3層	132-7	Bos	skull	rl			f								92	93-96を含む後頭部
18R	溝122	3層	121	Bos	tibia	l			f								74	
19R	溝122	3層	132-2	Bos	tibia	l			f								90	解体痕咬痕、小型 or 若年
13-15R	溝122	3層	131-5	Bos	tibia	r			f								88	解体痕咬痕、小型 or 若年?
14, 15R	溝122	3層	128	Bos	ulna	l			f								82	滑車切痕部
18R	溝122	右岸突出部	107	Bos	p.p	?			c	1							63	
20S	溝122	凹地上層	55	Bos	frontal	l			f								41	
20S	溝122	凹地上層	66-1	Bos	tarsi2+3	r			c	1							55	
19S	溝122	下層	52	Bos	carpi2+3	l			c	1							39	
19S	溝122	下層	61-1	Bos	maxilla	r			f								46	48 顔結節部+頬骨
20S	溝122	下層	29	Bos	tarsi2+3	l			c	1							14	
20S	溝122	下層	160	Bos	tarsiC+4	l			f								145	
14R	溝122	貝層	118-1	Bos	m.t3	l			f								68	解体痕咬痕
13, 14R	溝122	貝層	119	Bos	mandible	l			f								165	
13, 14R	溝122	貝層	119-3	Bos	pelvis	r			f								71	恥骨
21S	溝122	貝層中	41	Bos	mandible	r			f								32	
20S	溝122	最下層	31-5	Bos	calcaneus	l			f								19	咬痕
20S	溝122	最下層	12-1	Bos	femur	l			f								2	变形 or 傷?
20S	溝122	最下層	31-2	Bos	femur	r			f								16	
20S	溝122	最下層	31-4	Bos	femur	r			f								18	
20S	溝122	最下層	31-1	Bos	humerus	l			f								15	解体痕
20S	溝122	最下層	12-2	Bos	skull	r			f								168	側頭骨及び後頭頸
20S	溝122	最下層	31-3	Bos	tibia	l			f								17	解体痕
17S	溝122	上層	105	Bos	femur	l			f								60	
17S	溝122	上層	105	Bos	femur	r			f								62	外側面
17S	溝122	上層	105	Bos	humerus	l			f								61	
19S	溝122	中	165	Bos	humerus	l			f								149	解体痕
19S	溝122	中	62	Bos	m.c3	r			c	1							161	162-164解体痕
16AA	溝123	中央断面2層	103	Bos	m.t3	r			f								57	若年、解体痕
15R	溝122	土壤内	106	Bos	maxilla	l			f								170	
20S	溝122		15-1	Bos	calcaneus	r			f								7	咬痕

表 1-2 岡山県百間川米田遺跡出土脊椎動物遺存体の種別リスト

区	Gr	層位	No.	種名	骨名	R,L	U,L	歯	状態	部位						独協No.	備考	
										c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de	
20S	井戸141		35-1	Bos	femur	l			c	1			1	1	1			23
20S	溝122		11	Bos	femur	r			f									1
20S	溝122		14	Bos	femur	r			f									6
20S	井戸141		38	Bos	m.c3	r			f									29
20S	井戸141		35-5	Bos	m.t3	l			c	1			1	1	1			27
20S	溝122		13-2	Bos	m.t3	r			f				1	1	1			4
17S	溝122		111	Bos	p.d	?			f									64
20S	溝122		25	Bos	p.m	?			c	1								13
20S	溝122		13-3	Bos	p.p	?			f		1							5
20S	井戸141		35-3	Bos	talus	l			c	1								25
20S	井戸141		40	Bos	talus	r			f									31
20S	井戸141		35-4	Bos	tarsi C+4	l			c	1								26
20S	井戸141		35-2	Bos	tibia	l			c	1								24
20S	溝122		22	Bos ?	pelvis	l			f									11
13S	井戸131		148	C.familiaris	dent	r	l	c	f									175
16S	溝122	2層	139	C.lupus	dent	r	u	c	f									172
16S	溝122	2層	142-3	Cervus	cor				f									113
15, 16R	溝122	2層	138	Cervus	cor+frontal	r			f									132
15R	溝122	3層	120-1	Cervus	cor+frontal	r			f									72
20S	溝122	凹地下層	32	Cervus	cor+frontal				f									20
19S	溝122	下層	61-2	Cervus	cor+frontal				f									51
21S	溝122	張出溝125下層	34	Cervus	femur	l			c	1								22
21S	溝122		68	Cervus	femur	r			f		1							56
15R	溝122	3層	123	Corvus	m.c3・4	l			c	1								176
17R	溝122	2層	155	Equus	mandible	rl			f									140
13-15R	溝122	3層	131-4	Equus	humerus	r			f		1							87
14, 15R	溝122	3層	133-2	Equus	humerus	r			f		1							97
15R	溝122	3層	120-2	Equus	humerus	r			f								73	
17R	溝122	3層	122	Equus	mandible	l			f								169	
19R	溝122	3層	132-3	Equus	mandible	r			f								91	
18R	溝122	3層	124-1	Equus	talus	l			c	1							75	
20S	溝122	凹地内	33	Equus	ulna+radius	r			f				1	1	1		21	
20S	溝122	下層	43	Equus	mandible	r			f				1	1	1		33	
13, 14R	溝122	貝層	117	Equus	m.t3	l			f				1	1	1	1	67	
13, 14R	溝122	貝層	119	Equus	maxilla	r			f				1	1	1	1	166	
15R	溝122	貝層	104-3	Equus	scapula	r			f								59	
21S	溝122	張出	44	Equus	p.m	?			c	1							34	
21S	溝122	張出下層	163	Equus	femur	r			f			1					147	
21S	溝122	張出下層	39	Equus	talus	r			c	1							30	
19S	溝122		61-3	Equus	m.c3	l			c	1							52	
20S	溝122		16	Equus	m.t3	l			c	1							9	
20S	溝122		13-1	Equus	m.t3	l			f		1	1	1	1			3	
20S	溝122		15-2	Equus	p.d	?			c	1							8	
21S	溝122		57	Equus	p.p	?			c	1							42	
20S	溝122	凹地上層	64	Felis	humerus	r			f			1	1	1	1		177	
18, 19R	溝122	中央貝層	115	Pagrus	preopercle	l			c	1							178	
20S	井戸141		36	Phasianidae	clavicle	rl			c	1							182	
20S	井戸141		36	Phasianidae	coracoid	l			c	1							180	
20S	井戸141		36	Phasianidae	femur	r			f			1	1	1	1		183	
20S	井戸141		36	Phasianidae	humerus	r			c	1							187	
20S	井戸141		36	Phasianidae	sternum	l			f								181	
20S	井戸141		36	Phasianidae	tibia	l			f				1	1	1		184	
20S	井戸141		36	Phasianidae	tibia	r			c	1							186	
20S	井戸141		36	Phasianidae	ulna	r			c	1							185	
18R	溝122	3層	124	Trionyx	胸甲	?			f								171	
20S	溝122	張出下層	164	Trionyx	胸甲	r			f			1	1	1	1		148	
21S	溝122	張出部	48	Trionyx	humerus	r			f			1	1	1	1		174	

表 2-1 岡山県百間川米田遺跡出土脊椎動物遺存体の層別リスト

区	Gr	層位	No.	種名	骨名	R,L	U,L	歯	状態	部位								独協No.	備考
										c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de		
13N	井戸131		148	C.familiaris	dent	r	l	c	f									175	
20S	井戸141	(内)	37	Bos	pelvis	r			f									28	咬痕
14, 15R	溝122	2層	145	Bos	atlas				c	1								122	解体痕
16R	溝122	2層	142-2	Bos	calcaneus	l			f									112	解体痕咬痕、小型 or 若年
13-15R	溝122	2層	166-3	Bos	femur	l			f									160	解体痕咬痕、小型 or 若年
14R	溝122	2層	144	Bos	mandible	l			f									114	118と同一個体
14R	溝122	2層	144	Bos	mandible	l			f									115	下顎体腹縁部
17-18R	溝122	2層	141-2	Bos	mandible	l			f									111	解体痕、下顎枝筋突起及び下顎頭
13-15R	溝122	2層	166-2	Bos	maxilla	r			f									158	口蓋骨水平板
13, 14, 15R	溝122	2層	166-2	Bos	skull	l			f									156	166-2と同一
16, 17R	溝122	2層	156-2	Bos	skull	l			f									142	
13-17R	溝122	2層	166-2	Bos	skull				c	1								106	
16, 17R	溝122	2層	136-2	Bos	talus	l			f									130	解体痕
16R	溝122	2層	142-3	Cervus	cor				f									113	
15, 16R	溝122	2層	138	Cervus	cor+frontal	rl			f									132	解体痕
17R	溝122	2層	155	Equus	mandible	r	u	c	f									140	
16R	溝122	2層	139	C.lupus	dent	?			f									172	
19R	溝122	3層	132-1	Bos	costae				f									89	解体痕
14, 15R	溝122	3層	133-3	Bos	m.t3	l			f									98	解体痕、若年?
13-15R	溝122	3層	131-1	Bos	mandible	l			c	1								84	現生と同大
17R	溝122	3層	130-2	Bos	mandible	r			f									83	下顎体舌側P2-P3部
17R	溝122	3層	129	Bos	maxilla	l			f									178	口蓋骨水平板
14, 15R	溝122	3層	133	Bos	maxilla	r			f									167	頬骨
19R	溝122	3層	132-8	Bos	pelvis	r			f									96	解体痕
16, 17R	溝122	3層	127-2	Bos	radius	r			f		1	1						78	小型 or 若年
19R	溝122	3層	132-7	Bos	skull	rl			f		1	1						92	93-96を含む後頭部
18R	溝122	3層	121	Bos	tibia	l			f		1	1						74	
19R	溝122	3層	132-2	Bos	tibia	l			f		1	1	1	1	1			90	解体痕咬痕、小型 or 若年
13-15R	溝122	3層	131-5	Bos	tibia	r			f		1	1	1	1	1			88	解体痕咬痕、小型 or 若年?
14, 15R	溝122	3層	128	Bos	ulna	l			f		1	1	1	1	1			82	滑車切痕部
15R	溝122	3層	120-1	Cervus	cor+frontal	r			f		1	1						72	解体痕
15R	溝122	3層	123	Corvus	m.c3・4	l			c	1								176	
13-15R	溝122	3層	131-4	Equus	humerus	r			f		1	1						87	
14, 15R	溝122	3層	133-2	Equus	humerus	r			f		1	1						97	
15R	溝122	3層	120-2	Equus	humerus	r			f		1	1	1	1	1			73	解体痕
17R	溝122	3層	122	Equus	mandible	l			f		1	1						169	下顎角部一下顎枝後部
19R	溝122	3層	132-3	Equus	mandible	r			f		1	1						91	解体痕、下顎枝
18R	溝122	3層	124-1	Equus	talus	l			c	1							75		
18R	溝122	3層	124	Tritynx	胸甲	?			f		1							171	
18R	溝122	右岸突出部	107	Bos	p.p	?			c	1							63		
20S	溝122	凹地下層	32	Cervus	cor+frontal	l			f								20	解体痕	
20S	溝122	凹地上層	55	Bos	frontal				f								41		
20S	溝122	凹地上層	64	Felis	humerus	r			f								177	若年	
20S	溝122	凹地上層	66-1	Bos	tarsi2+3	r			c	1							55		
20S	溝122	凹地内	33	Equus	ulna+radius	r			f								21	解体痕咬痕	
19S	溝122	下層	52	Bos	carpi2+3	l			c	1							39		
19S	溝122	下層	61-1	Bos	maxilla	r			f								46	48 顔結節部+頬骨	
20S	溝122	下層	29	Bos	tarsi2+3	l			c	1							14		
20S	溝122	下層	160	Bos	tarsiC+4	l			f								145		
19S	溝122	下層	61-2	Cervus	cor+frontal	r			f								51	解体痕加工痕	
20S	溝122	下層	43	Equus	mandible	r			f								33	下顎体	
15R	溝122	貝層	113	Ardeidae	m.t	r			f								179		

表 2-2 岡山県百間川米田遺跡出土脊椎動物遺存体の層別リスト

区	Gr	層位	No.	種名	骨名	R,L	U,L	歯	状態	部位							独協No.	備考	
										c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de		
14R	溝122	貝層	118	Bos	m,t3	l			f				1	1	1	1		68	解体痕咬痕
13, 14R	溝122	貝層	119	Bos	mandible	l			f									165	
13, 14R	溝122	貝層	119-3	Bos	pelvis	r			f				1	1	1	1		71	恥骨
13, 14R	溝122	貝層	117	Equus	m.t3	l			f								67	解体痕咬痕	
13, 14R	溝122	貝層	119	Equus	maxilla	r			f								166	鼻骨	
15R	溝122	貝層	104-3	Equus	scapula	r			f								59		
21S	溝122	貝層中	41	Bos	mandible	r			f				1	1	1	1		32	
20S	溝122	最下層	31-5	Bos	calcaneus	l			f								19	咬痕	
20S	溝122	最下層	12-1	Bos	femur	l			f			1	1	1	1		2	変形 or 傷?	
20S	溝122	最下層	31-2	Bos	femur	r			f								16		
20S	溝122	最下層	31-4	Bos	femur	r			f								18		
20S	溝122	最下層	31-1	Bos	humerus	l			f								15	解体痕	
20S	溝122	最下層	12-2	Bos	skull	r			f								168	側頭骨及び後頭頸	
20S	溝122	最下層	31-3	Bos	tibia	l			f								17	解体痕	
17S	溝122	上層	105	Bos	femur	l			f				1				60		
17S	溝122	上層	105	Bos	femur	r			f								62	外側面	
17S	溝122	上層	105	Bos	humerus	l			f								61		
19S	溝122	中	165	Bos	humerus	l			f								149	解体痕	
19S	溝122	中	62	Bos	m.c3	r			c	1							161	162-164解体痕	
18, 19R	溝122	中央貝層	115	Pagrus	preopercle	l			c	1							173	マダイ	
16AA	溝123	中央断面2層	103	Bos	m.t3	r			f			1	1	1	1		57	若年、解体痕	
21S	溝122	張出	44	Equus	p.m	?			c	1							34		
21S	溝122	張出下層	163	Equus	femur	r			f			1					147	傷?	
21S	溝122	張出下層	39	Equus	talus	r			c	1							30		
21S	溝122	張出下層	164	Trionyx	胸甲	r			f								148		
21S	溝122	張出溝125下層	34	Cervus	femur	l			c	1		1	1	1	1		22	解体痕	
21S	溝122	張出部	48	Trionyx	humerus	r			f			1	1	1	1		174		
15R	溝122	土壙内	106	Bos	maxilla	l			f								170		
20S	溝122		15-1	Bos	calcaneus	r			f				1	1	1	1	7	咬痕	
20S	井戸141		35-1	Bos	femur	l			c	1							23		
20S	溝122		11	Bos	femur	r			f				1	1	1	1	1		
20S	溝122		14	Bos	femur	r			f					1			6		
20S	井戸141		38	Bos	m.c3	r			f								29	遠位に切断痕	
20S	井戸141		35-5	Bos	m.t3	l			c	1							27	解体痕	
20S	溝122		13-2	Bos	m.t3	r			f								4	解体痕	
17S	溝122		111	Bos	p.d	?			f				1				64		
20S	溝122		25	Bos	p.m	?			c	1							13		
20S	溝122		13-3	Bos	p.p	?			f				1				5		
20S	井戸141		35-3	Bos	talus	l			c	1							25	解体痕	
20S	井戸141		40	Bos	talus	r			f								31		
20S	井戸141		35-4	Bos	tarsiC+4	l			c	1							26		
20S	井戸141		35-2	Bos	tibia	l			c	1							24		
20S	溝122		22	Bos?	pelvis	l			f								11	寛骨臼部変形骨折or病変	
21S	溝122		68	Cervus	femur	r			f								56		
19S	溝122		61-3	Equus	m.c3	l			c	1							52		
20S	溝122		16	Equus	m.t3	l			c	1							9	解体痕、近位部後方に削痕	
20S	溝122		13-1	Equus	m.t3	l			f								3	若年、咬痕	
20S	溝122		15-2	Equus	p.d	?			c	1							8		
21S	溝122		57	Equus	p.p	?			c	1							42		
20S	井戸141		36	Phasianidae	clavicle	rl			c	1							182		
20S	井戸141		36	Phasianidae	coracoid	l			c	1							180	181-187まで同一	
20S	井戸141		36	Phasianidae	femur	r			f				1	1	1	1	183		
20S	井戸141		36	Phasianidae	humerus	r			c	1							187		
20S	井戸141		36	Phasianidae	sternum	l			f								181		
20S	井戸141		36	Phasianidae	tibia	r			f				1	1	1		184	両骨端欠 (若年)	
20S	井戸141		36	Phasianidae	tibia	r			c	1							186		
20S	井戸141		36	Phasianidae	ulna	r			c	1							185		

右中手骨最大長	: 177.7
遠位幅	: 59.2
骨幹最小幅	: 34.2
右中手骨近位幅	: 60.1
左大腿骨遠位幅	: 97.6
左大腿骨最大長（骨頭）	: 316
遠位幅	: 97.8
骨幹最小幅	: 34.1
左脛骨最大長	: 317
遠位幅	: 59.9
骨幹最小幅	: 35.2
左脛骨遠位幅	: 59.3
骨幹最小幅	: 35.2
左脛骨遠位幅	: 61.5
骨幹最小幅	: 34.4
右脛骨遠位幅	: 61.0
骨幹最小幅	: 32.3
左距骨最大高	: 65.8
右中足骨近位幅	: 40.5
左中足骨最大長	: 194.4
遠位幅	: 53.5

左脛骨が3本出土しているので、ウシの最小個体数は3である。同一個体と考えられるものも見られる。例えば頭蓋骨はやや細片化しているものの同一個体らしい左右が確認されている。角のあまり大きくなない品種である。

下顎骨がほぼ完形で出土している。この標本の性別は明らかではないが、これと現生のウシとを比較すると、米田遺跡のものに相当する大きさのものはロノ島牛のオス（下顎骨最大長363.8mm：林田；1964）、あるいは見島牛のメス（下顎骨最大長360mm前後：林田；1967）である。一方、現生の黒色和牛は、オスの下顎骨最大長が402.2mm、メスで379mm前後（西中川・他；1981）と米田遺跡のものより大きい。下顎体高などを比較すると、ロノ島牛の方が見島牛より米田遺跡の標本に近い大きさを示している。

歯は、27本が出土している。ウシの歯の大きさ、特に頬舌径は年齢とともに変化し年齢の異

なる個体との比較は出来ない。したがって、他の遺跡の資料との比較は行なわないが、計測値を参考までに示した（表3）。

歯根の近くまで磨耗した老齢のものが3本、若くほとんど磨耗のないものが第3大臼歯を含めて4本みられた。出土したウシは特に決まった年齢層のものではない。

⑤ウマ

ウマは、20点が同定された。全同定点数の18%である（全点数の14%）。ウンの3分の1である。このうち9点に解体痕や咬痕が認められた。小さな浅い切痕が主であり、皮を剥がれたかあるいは肉を取った時に出来たものであろう。計測可能な骨の各計測値は次の通りである（単位はmm）。計測方法は、Driesch (1976) にしたがった。なお、林田・他 (1957) の体高推定法III式にもとづいて算出した体高を（ ）内に示した。

左中手骨最大長	:	208.0
		(推定体高: 127cm)
近位幅	:	42.2
遠位幅	:	43.6
骨幹最小幅	:	29.3
右距骨最大高	:	49.5
左距骨最大高	:	54.6
右橈尺骨尺骨頭長	:	73.1
右上腕骨遠位骨端幅	:	67.6
左中足骨最大長	:	225.8
		(推定体高: 112.5cm)

中手骨の大きさは、中型馬の御崎馬（最大長210～280mm）や木曾馬（220mm前後）より小さく、小型馬のトカラ馬（200mm弱）よりは大きい（斎藤・他；1972・林田；1956）。また、中足骨は、御崎馬（最大長247～276mm）や木曾馬（260～270mm前後）より小さく、トカラ馬（225～236mm）とほぼ同大である。したがって、米田遺跡出土のウマは日本在来馬の分類でいえば中型馬のうちでも小さいもの、および小型馬の2つのタイプがいたことになる。

岡山県岡山市の百間川沢田遺跡や川入遺跡（6～8世紀）からは、中型馬が出土しており、（金子1985、林田・他1974）、また、同県倉敷市の上東遺跡（古墳時代；林田・他1974）からは小型馬が出土している。これらの遺跡より新しい本遺跡から小型馬と中型馬の両型が出土していても時代的にはなんらの矛盾はない。

参考までに、ウマの大きさを示すのによく用いられる体高（肩までの高さ）は、小型馬のト

表3 百間川米田遺跡出土の牛齒の計測値と比較資料（単位mm）
 (歯冠エナメル質を計測した)
 遊離歯を便宜的に記入したもので、同一個体とは限らない。

上顎歯

遺跡名・標本番号	時代	P3		P4		M1		M2		M3	
		m-d	b-1								
百間川米田遺跡	中世	17.8	17.3	17.5	21.8	28.5	23.0	29.5	21.0	31.6	19.0

下顎歯

遺跡名・標本番号	時代	P3		P4		M1		M2		M3	
		m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1
百間川米田遺跡	中世	21.4	-	26.3	-	-	-	12.9	28.9	12.0	39.0

百間川米田遺跡3

カラ馬が平均114.5cmで、中型馬の木曾馬は、平均133cm前後（岡部；1953）である。歯は、21点出土している。歯冠のエナメル質の保存はよいが、歯冠のセメント質は失われているものが多い。歯の大きさでも、下顎第2大臼歯には大きさの異なる2つのタイプのものがある。藤原京から出土した中世馬（土肥；1983）と大きさが変わらないものと、トカラ馬に近い小さな歯を持つ小型馬タイプのものの2型が見られる。中型馬としては、現生の御崎馬よりやや小さめの中型馬である（表4）。

ウマは、歯冠の長い「長冠歯」を持ち、年齢とともに少しづつ磨耗していく。そのために、もし歯冠の短くすり減ったものがあればその個体は老齢であることがわかる。出土した歯の中には、老齢で磨耗の著しいものが7本含まれていた。歯冠の長い若い個体の歯も見られる。上顎の切歯3本は、上顎第3切歯のガルヴェイン溝（Galvaynes groove）が咬合縁近くにまで来ているなど、どの歯も8～9歳前後の磨耗状態に相当している（Silver；1963, Bone；1982）

⑥イヌ

2点が出土している。1点は完形に近い頭蓋骨である。これらについては別稿で扱う。

⑦オオカミ

オオカミの上顎犬歯は、頬舌径6.4mm、近遠心径約11.5mmである。この計測値は、シベリアオオカミよりはるかに小さく、朝鮮オオカミや縄文時代の佐川オオカミ（高知県）に近い値である。ニホンオオカミのものと考えるのが妥当であろう。

オオカミ上顎犬歯

産地名	近遠心径	頬舌径
百間川米田遺跡	11.5mm	6.4mm
佐川	11.7mm	7.3mm
朝鮮	11.6mm	6.3mm
シベリア	15.4mm	9.6mm

⑧ネコ

右上腕骨片が1点出土している。若い個体で、近位部の骨端が欠けている。遠位部の骨端も骨幹との癒合がまだ終わっていない。解体痕は認められない。

IV) 解体痕について

解体痕あるいは動物の咬痕は、約40点の資料で観察された。

表4：百間川米田遺跡出土の馬歯の計測値と比較資料（単位 mm）

(歯冠エナメル質を計測した)

米田遺跡の計測値は、遊離歯の計測値を便宜的に記入したもので、同一個体とは限らない。

上顎歯

遺跡名・標本番号	時代	型	I1		I2		I3		C		P2		P3		P4		M1		M2		M3			
			m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1		
百間川米田遺跡	中世		-	-	-	-	-	-	-	-	-	21.2	28.1	-	27.9	26.7	-	-	20.8	22.0	24.9	20.2		
			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25.1	24.8	26.3	22.8		
百間川沢田遺跡		中型	19.0	10.0	-	-	-	-	-	-	34.0	23.1	26.2	26.9	25.0	25.0	23.2	24.0	22.9	24.2	24.5	20.6	金子(1985)	
下古館(栃木) 7-No.1	中世	中型	-	-	14.8	10.0	-	-	-	-	37.1	22.9	27.9	25.8	-	-	23.2	23.5	-	-	27.1	23.1	茂原(印刷中)	
7-No.4		中型	-	-	-	-	-	-	-	-	32.0	21.0	26.9	23.2	26.5	23.5	22.3	23.0	23.9	22.2	24.6	19.5		
11-No.1		中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25.0	24.6	23.9	24.8	25.1	24.7	23.1	23.9	-	-	-	-	
藤原京(第25次)	中世		17.9	10.0	18.4	10.0	-	-	-	-	36.0	23.2	28.0	25.0	27.4	24.8	24.6	25.6	26.6	23.8	24.0	21.2	土肥(1983)	
中里遺跡(群馬)	近世-近代	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27.9	26.5	27.7	25.9	23.5	24.4	-	-	-	-	-	宮崎・他(1987)	
池畠遺跡(長野)	奈良-平安	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	28.6	26.3	26.0	26.2	23.9	26.3	-	-	-	-	-	宮崎・他(1986)	

下顎歯

遺跡名・標本番号	時代	型	I1		I2		I3		C		P2		P3		P4		M1		M2		M3		
			m-d	b-1																			
百間川米田遺跡	中世		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27.3	14.3	28.9	12.8	28.5	9.9	
			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	23.5	14.3	-	-	
			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	23.5	13.1	-	-	
百間川沢田遺跡	中世	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	39.5	11.0	27.5	14.7	25.3	14.0	24.5	-	22.8	11.0	-	-	林田・他(1974)
上東遺跡	古墳	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	30.5	14.7	26.5	16.0	25.0	16.0	24.0	16.0	25.0	13.0	27.0	12.0	林田・他(1974)
川入遺跡(岡山市)	中世	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	31.0	13.0	28.0	15.0	28.0	-	27.0	14.0	27.0	13.5	28.0	12.0	
下古館(栃木) 7-No.1	中世	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27.3	15.6	26.0	15.2	24.0	14.0	24.3	13.4	31.2	12.3	茂原(印刷中)	
11-No.2	中世	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11.6		
谷館野北(栃木)	中世	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25.8	15.1	23.3	14.0	23.3	13.2	-
余山貝塚	縄文	小型	-	-	-	-	-	-	-	-	27	15	23	16	21	16	18	16	22	16	30	12	林田(1978)
出水貝塚(25歳?)	縄文後期	小型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	22.8	16	-	-	-	-	林田(1978)
埼玉県朝霞市根岸	土師期	中型	14.2	12.7	16.7	10.5	16.7	10.5	11.8	10.3	33.5	16.9	28.0	17.7	26.4	17.0	25.2	16.4	24.5	15.4	30.3	12.9	直良(1973)
大阪四条畷市古墳	古墳時代	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	35.0	14.9	29.4	15.4	29.4	15.0	26.8	14.3	29.3	13.8	28.8	11.4	直良(1984)
神奈川県秦野市今泉	江戸末期		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24.3	15.3	22.4	15.0	21.8	15.9	29.0
トカラ馬(5歳)	現生	小型	-	-	-	-	-	-	-	-	27	14.7	25	15.5	23.5	16	22	14	22	14	26	12	林田(1978)
御崎馬(25歳?)	現生	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	30	15	24	15	24	15	21	14	22	13	29.5	12	林田(1978)
御崎馬(3.5歳)	現生	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	33	16.4	30.8	19.3	29.5	19	27	16	31	16.8	-	-	

①ウシの解体痕あるいは咬痕

解体痕と思われるものはさほど多くはない。これらは主として大腿骨や脛骨に観察された。骨を破壊したときに出来た深い傷は大腿骨などで観察され、鋭利な刃物で切断されている様子が伺える。中手骨や中足骨は、遠位端に内外両面から骨軸に向かって鋭く切り込まれた傷によって切断されている。この傷は、肉を取るためというよりもかなり乱暴に足先を切断するためのものであろう。

頭蓋をはずしたときの傷らしいものが第1頸椎の前面にみられた。また、小さな、多分肉を取った時にできたであろう切痕がいくつかの骨で観察された。このような傷の一種と考えられる平面的に骨が削られた傷、すなわち「削痕」が脛骨で観察されている。削痕は剥皮のためとは考えられない。

食肉類、とくにイヌによると考えられる咬痕が、踵骨の踵骨隆起部など、骨端に多く観察されている。

②ウマの解体痕

ウマに見られる傷は、上腕骨、中足骨、中手骨が多い。上腕骨の傷は解体する際に出来たものであろう。中手骨と中足骨の傷は、ウシと同じ場所に見られる解体痕とはやや趣を異にしており、乱暴に解体されたものとは考えられない。どちらかと言えば、剥皮の際の傷のようである。

食肉類、とくにイヌによると考えられる咬痕が橈尺骨の遠位部、中足骨の遠位部などに見られる。

V) まとめ

中世の遺跡から出土した獸骨に関する研究は、あまり多くない。本遺跡の獸骨、特にウマ、ウシ、イヌは、それらの日本での歴史を知るうえで貴重なものである。出土した動物遺存体は9目10科11種である。出土量は少ない。その割りには種類は豊富である。

この遺跡の出土動物遺存体に特徴的なのは、古代遺跡の動物遺存体には必ずといっていいほど含まれるイノシシ、あるいはブタがまったく出土していないことである。

現在の岡山県にはイノシシが生息しているので、中世には当然みられたであろう。これらが食料として利用されていたことは、ウシやウマの骨に残された肉を取るための浅く小さな傷によって推測される。イノシシ、あるいはブタがまったく見られないということは、それらが利用されていなかったことを示すものではなく、今回の動物遺存体の出土した場所が生活に利用されていたものの主な廃棄場所（例えばゴミ捨て場など）ではなかつた可能性を示唆している。

出土動物遺存体の中ではウシがもっとも多く、次いでウマであった。シカやイノシシなどの

野生獣がごく少ないことは、遺跡の所在地が都市であることを割り引いても、食用の肉類は中世にはウシやウマなど家畜の肉が主となっており、野生のものへの依存度が低下していたことを示している。

参考文献

- Bone,J.F. (1982) : Animal Anatomy and Physiology. Reston Publishing Co.,Inc., Reston, PP. 521
- 土肥 孝 (1983) : 日本古代における犧牲馬。文化財論叢 ; 383-400
- Driesch, A.von den (1976) : A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Mus. Bull, 1 : 1-137
- 林田重幸 (1956) : 日本古代馬の研究。人類学雑誌、64 ; 197-211
- 林田重幸・山内忠平(1957) : 馬における骨長より体高の推定法。鹿児島大学農学部学術報告No. 6 ; 146-156
- 林田重幸(1964) : 口ノ島におけるいわゆる野生牛について。日本在来家畜調査団報告、第1号； 27-29
- 林田重幸 (1967) : 見島牛の体型。日本在来家畜調査団報告、第2号； 62-66
- 林田重幸・鈴木孝司 (1974) : 倉敷市上東遺跡出土の馬歯について。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集「山陽新幹線建設に伴う調査 II」; 364-367
- 一戸健司・宗近功 他 (1973) : 野鶴に関する研究 (第1報)、東京農大農学集報、17-3。
- 池田次郎・石田 克 (1979) : 土井2号古墳出土の獣骨。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 29「土井2号古墳」; 35-36
- 金子浩昌 (1985) : 百間川沢田遺跡高繩手A調査区溝-113出土の馬歯。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」、岡山県教育委員会； 454-457
- 加藤嘉太郎 (1974) : 家畜比較解剖図譜上巻、第7版、養賢堂。
- 直良信夫 (1972) : 古代遺跡発掘の脊椎動物遺体、校倉書房、P.95-102。
- 西中川駿・松元光春 (1981) : 出土した家牛の頭蓋および下顎骨の記載。「伊皿子貝塚遺跡」； 478-485
- 岡部利雄・松本久喜・三村一 (1953) : 日本在来馬に関する研究。日本学術振興会； pp. 209
- 斎藤勇夫・黒木正雄・村上隆之 (1972) : 御崎馬の死亡調査と遺骨の測定、第3報；骨の測定について。宮崎大学農学部研究報告、19 ; 295-304
- 酒詰仲男 (1961) : 日本縄文石器時代食料総説、土曜会。

表 5 参考資料 岡山県百間川米田遺跡出土のウシ、ウマの歯種別リスト

区	Gr	層位	No.	種名	骨名	R,L	U,L	歯	状態	独協No.	備考
14, 15R		溝122	3層	133-7	Bos	dent	l	l	I1	101	
14, 15R		溝122	3層	133-7	Bos	dent	l	l	I2	100	
14R		溝122	2層	144	Bos	dent	l	l	M1	118	
13, 14R		溝122	貝層	119-1, 2	Bos	dent	r	l	M1	70	
14, 15R		溝122	3層	133-6, 8, 9	Bos	dent	r	l	M1	103	
20S		井戸141		46	Bos	dent	l	u	M1	36	
15R		溝122	2層	154	Bos	dent	l	u	M1	139	
15, 16R		溝122	2層	157-1	Bos	dent	r	u	M1	144	
13-15R		溝122	3層	131-2	Bos	dent	r	l	M2	85	
20S		井戸141		45	Bos	dent	l	u	M2	35	
14R		溝122	2層	152	Bos	dent	l	u	M2	135	
14, 15R		溝122	3層	133-6, 8, 9	Bos	dent	l	u	M2	104	
14, 15R		溝122	3層	133-6, 8, 9	Bos	dent	l	u	M2	105	
13, 14, 15R		溝122	2層	166-1	Bos	dent	l	u	M2	150	
14R		溝122	2層	144	Bos	dent	r	l	M2	117	
16R		溝122	1層	134	Bos	dent	r	u	M2	124	
15R		溝122	2層	153	Bos	dent	r	u	M2	136	
14R		溝122	2層	144	Bos	dent	l	l	M3	116	
15R		溝122	2層	154	Bos	dent	l	u	M3	138	
15R		溝122	貝層	104-2	Bos	dent	l	u	M3	58	
13, 14, 15R		溝122	2層	166-1	Bos	dent	l	u	M3	151	
13, 14R		溝122	貝層	119-1, 2	Bos	dent	r	l	M3	69	
14R		溝122	2層	144	Bos	dent	l	l	P2	121	
14R		溝122	2層	144	Bos	dent	l	l	P3	120	
14, 15R		溝122	3層	133-6, 8, 9	Bos	dent	l	u	P3	102	
14R		溝122	2層	144	Bos	dent	l	l	P4	119	
15R		溝122	2層	153	Bos	dent	r	u	P4?	137	
16, 17R		溝122	中層	126	Equus	dent	l	u	I1	81	
16, 17R		溝122	貝層	114-1	Equus	dent	l	u	I2	65	
19S		溝122	上層	59	Equus	dent	r	u	I2	44	
19S		溝122	中層	63	Equus	dent	l	u	I3	54	
19S		溝122	中層	50	Equus	dent	r	u	M1	37	
19R		溝122	2層	135	Equus	mand+dent	r	l	M1M2M3	125	126-128までを含む
18R		溝122	下層中央貝層	116	Equus	dent	l	l	M2	66	
16, 17R		溝122	3層	126	Equus	dent	l	l	M2	80	
18, 19S		溝122	2層	150	Equus	dent	r	l	M2	133	
19S		溝122	中層	54	Equus	dent	r	u	M2	40	
16, 17R		溝122	2層	156-3	Equus	dent	r	u	M2	143	
16, 17R		溝122	3層	127-1	Equus	dent	l	u	M3	77	
19S		溝122	下層	162	Equus	dent	r	u	M3	146	
18, 19R		溝122	2層	136-1	Equus	dent	l	l	P2	129	
17R		溝122	2層	137	Equus	dent	l	u	P2	131	
18, 19R, S		溝122	2層	149	Equus	dent	r	l	P2	123	
19S		溝122	上層	59	Equus	dent	l	u	P3	43	45を含む
20S		溝122		23	Equus	dent	r	u	P3	12	
19S		溝122	中層	63	Equus	dent	r	u	P4	53	

- 茂原信生 (1986) : 東京大学総合研究資料館所蔵 長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ
(標本資料報告 第13号)、東京大学総合研究資料館。
- Silver, I.A. (1963) : The Ageing of Domestic Animals. in Science in Archaeology.
Basic Books Inc. New York, edit. by Brothwell & Higgs : 250-268
- 渡邊忠男・西脇充・渡辺誠喜・一戸健司 (1980) : 野鶏に関する研究；第3報—フィリピン・
パラワン島産の赤色野鶏の本邦に飼育されている家鶏との骨格の比較。東京農業大学農学集
報、25 : 135-144

(参考資料)

百間川米田遺跡出土獸骨の咬痕・切痕等の傷

(ウシ *Bos taurus*)

122：ウシ環椎

前面下部右にごく浅い切痕、前面上部に浅い切痕3カ所

25：ウシ左下顎骨

下顎枝前縁（筋突起下方外側面）に浅く短い切痕数本（前下方方向のもの）

84：ウシ左下顎骨

先端に浅い切断痕が上下方向に多数ありイヌの咬痕の可能性あり

15：ウシ左上腕骨遠位骨幹

後面、内側面に浅い切痕が無数にある。肉を取るためのものか？

78：ウシ右橈骨近位端

外側部にやや深い約1cmの切痕

28：ウシの右寛骨

恥骨部、腸骨部、坐骨部にイヌの咬痕、解体痕はなし

96：ウシの右寛骨

坐骨部に約2cmのごく浅い切痕→肉の取り外しの際のもの

6：ウシ右大腿骨骨体

遠位部は前面外側に約4cmの切痕（これを元に遠位部が切断されている）、近位部は内側に
鋭利な刃物で約4cmの切痕（骨がきれいに切断されている）

百間川米田遺跡 3

16：ウシ右大腿骨遠位半

後面に短くて浅い切痕 2 カ所

160：ウシ左大腿骨骨幹

遠位部のイヌの咬痕

2：ウシ左大腿骨遠位部

外側頸上方にやや深い 2 cm の切痕？、断端後面外側に切痕らしいもの（これが元になって
切断されたものらしい）

17：ウシ左脛骨遠位半

前面に浅い数 mm の切痕数本、外側の断端は鋭い刃物での切痕

88：ウシ右脛骨近位端欠

後面内側下方に約 2 cm のそぎ跡（削痕）、そのやや下方に浅くて短い切痕 2 カ所、近位端に
イヌの咬痕多数

90：ウシ左脛骨近位端欠

近位部にイヌの咬痕多数、前面遠位端に浅い約 3 cm の切痕

24：ウシ左脛骨

後面遠位部外側に小さな削痕（そぎ跡）→筋の取り外しの傷か？

74：ウシ左脛骨近位半

前面脛骨粗面に斜めに切痕 2 カ所、前縁付近に 3 カ所の短いがやや深い切痕、上端外側に
イヌの咬痕

7：ウシ右踵骨

近位部（踵骨隆起部）にイヌの咬痕多数

19：ウシ左踵骨

近位部（踵骨隆起部）にイヌの咬痕多数

112：ウシ左踵骨

近位部（踵骨隆起部）、および中央底部にイヌの咬痕が多数あり

29：ウシ右中手骨遠位部欠

遠位内側部に浅い 5 mm ぐらいの切痕があり、そのやや下で切断されている。遠位外側部は
鋭い刃物で切られ、その後破碎、切断されている。内側近位部にイヌの咬痕？

27：ウシ左第 3 中足骨

前面外側部浅い切痕、近位関節に病変

57：ウシ右第 3 中足骨

遠位部欠、遠位部外側面に切痕 2 カ所、遠位部は外側から鋭利な刃物で切断されている。

68：ウシ左第3中足骨

後面上部に嚙齒類の咬痕、内側面上部に浅いそぎ跡（削痕）4カ所、近位部にイヌの咬痕

98：ウシ左中足骨遠位部

外側面にやや深い約3cmの鈍な切痕、内側面に浅い約2cmの切痕

64：ウシ末節骨近位部

中央で切断されているものらしい

(シカ *Cervus nippon*)

72：シカ右前頭骨と角

落角ではない、内側角坐部にやや深い切痕2カ所

20：シカの角

落角したもの。側面に数本の浅い幅数mmの傷

51：シカ角

前頭骨角坐に多数の切痕(同一面に何回もつけている)、角は10cmぐらいのところで一部切断後、折られている。

132：シカ角

落角、基部に切痕、底部に切痕1カ所

22：シカ左大腿骨

前面中央に約3mmのそぎ跡(削痕)、内側やや上方に浅い数mmの切痕数本、後面小転子付近に浅い約1.5cmの切痕

(ウマ *Equus*)

59：ウマ右肩甲骨近位部

関節窩なし、近位上部にイヌの咬痕

73：ウマ右上腕骨近位部欠

上部外側に約3cmの切痕、遠位関節前面外側寄りに1.5cmの切痕、内側面上部に切痕？

87：ウマ右上腕骨近位半

外側面の断端に切痕（これを元に切断された）

97：ウマ右上腕骨近位部欠

後面上部に長い切痕（これを元に切断されている）

21：ウマ右橈・尺骨遠位端欠

遠位部にイヌの咬痕多数

百間川米田遺跡 3

3：ウマ左第3中足骨

遠位にイヌの咬痕、後面に齧歯類と思われる咬痕、前面にえぐったような跡

9：ウマ左第3中足骨

前面中央付近に1平方センチぐらいの浅い多くの切痕、後面近位部に削痕（約5cm）

67：ウマ左第3中足骨

後面にやや深い削痕（長さ7cm位）、中央付近に切り込み、遠位関節面に切断痕、解体用か？

42：ウマ基節骨

遠位部上面に小さな浅い切痕2カ所（平行している）

付載3 百間川米田遺跡出土の犬骨

獨協医科大学第一解剖学教室

茂原 信生

I) はじめに

百間川米田遺跡は岡山県岡山市米田にある遺跡で、昭和58年から60年にかけて、岡山県教育委員会によって発掘された。この遺跡の時代は弥生時代から江戸時代までの長期にわたるが、中心になるのは鎌倉時代から室町時代にかけての集落遺跡である。この中世集落の発掘の際、大溝の中から多くの獸骨に混じって、イヌの頭蓋骨が出土した（20S・溝122）。中世のイヌはごく小数しか発掘されておらず、日本犬の歴史を知る上で非常に貴重なものである。骨は比較的保存状態がよい。頭蓋骨の前端および左側面部が欠けており、第2小白歯より近心（前）の歯が消失している。解体された様子はない。発掘された獸骨の中には他にイヌの右下顎犬歯が1本出土している（13N・井戸131）。

II) 形態的特徴

前端部が欠けているので正確な大きさは不明である（図版151—1～4）。しかし、外後頭隆起から、犬歯の歯槽後縁までの長さ（正中部に投影した長さ）は160mmであり、かなり大型のイヌに属している。吻部の退縮した現生のシバイヌでも、犬歯の歯槽後縁から前端（プロスチオン）までの長さ（正中部に投影した長さ）は20mm以上であり、やや大型のイヌになると30mmを越える。したがって、このイヌでは、頭蓋最大長は180mmを越えることになる。長谷部の型区分（1952）にあてはめると中級犬に属している。

頬骨弓はさほど頑丈ではなく、やや外側にはり出している。頭蓋示数や横頭顎示数で示される頭蓋のプロポーションは現生シバイヌよりも縄文時代のイヌに近く、鎌倉時代のイヌよりはむしろ江戸時代のイヌに近い。矢状稜は発達があまりよくなく、左右の外前頭稜が合する部分から外後頭隆起にかけてごく僅かに突出しているにすぎない。外前頭稜下方の膨隆は顯著である。

前頭部から鼻先にかけての凹み、いわゆる額段（トップ）は小さい（鼻骨凹陥示数；9.6+ α ）。これが小さいのは古い時代のイヌの特徴で、オオカミなどでは0に近く直線的である。現生のシバイヌではかなり大きくくびれており（鼻骨凹陥示数；18.7）、米田遺跡のイヌの額段は鼻骨の先端がややかけていることを割り引いて考えても縄文時代の田柄犬骨（12.7）よりもむしろ小さい。

冠状縫合や頭頂後頭縫合が未だ融合していないし、歯の摩耗もごく少ないのでさほど高齢ではない。

歯は、上顎の遠心部の7本が残っている（右P3、P4、M2、左P3、P4、M1、M2）。イヌの特徴をよく示す上顎の裂肉歯（第4小白歯）は、舌側（内側）のプロトコーンがよく発達している。この結果、歯の大きさは、縄文時代犬よりも大きくなっている（表7）。左右の大臼歯の大きさは縄文時代犬と変わっていない。

この頭蓋の性別は、諸特徴からオスの可能性が高いと考えられる。

遊離して出土したイヌの下顎右犬歯（13N・井戸131、図版151-5）の頬舌径は6.2mmであり、鎌倉材木座から出土した中世のイヌとほぼ同大である（茂原・小野寺：1987）。これは頭蓋骨最大長で170mm程度のイヌに相当し、長谷部の型区分では中小級に属する大きさである。このイヌも、縄文時代犬よりは大きめのイヌである。

III) 他の中世犬骨との比較

日本の在来犬は、縄文時代に小型犬がおり、その大きさは頭蓋最大長で、オスで160mm前後、メスで150mm前後であった（茂原・小野寺：1984）。その後時代が進むにしたがってこそしづつ大型化し、鎌倉時代になると、オスの平均の頭蓋最大長は170mm前後、メスで160mm前後となつた（茂原・小野寺：1987）。その後はあまり大型化しておらず、江戸時代になると外来種、あるいはその影響を受けたと考えられるものの影響で頭蓋最大長が180mmから200mm以上に達するかなり大きなイヌが発掘されている。今回の、米田遺跡のイヌは、このような日本犬の大きさの変化に当てはまるものであり、縄文時代からの変化の範囲内にある大きさである。外来種の影響を考えねばならないような形質は認められなかった。

IV) まとめ

米田遺跡のイヌは、他の中世犬骨とはさほど異なっておらず、縄文時代犬の系統を引く日本の在来犬であろう。大きさは、長谷部の型区分では中級から中小級に属している。外来種の影響を考える必要のあるような形質はない。

参 考 文 献

長谷部言人(1952)：犬骨。埋蔵文化財発掘調査報告第一号「吉胡貝塚」、文化財保護委員会；146—150

小野寺覚・茂原信生(1987)：骨格による性の判別－シバイヌについて。解剖学雑誌、62(1)；19—32

茂原信生・小野寺覚(1984)：田柄貝塚出土の犬骨について。人類学雑誌、92(3)；187—210

茂原信生・小野寺覚(1987)：鎌倉材木座遺跡出土の中世犬骨。人類学雑誌、95(3)；361—379

表6 百間川米田遺跡出土犬骨の頭蓋計測値と比較資料（単位はmm）

() 内は、シバイヌをもとにして行ったごく大まかな推定値
計測値の推定は最小値で、実際はこれよりやや大きめであろう。

	米田遺跡 ♂	金杉遺跡 (江戸)	西新橋遺跡 (江戸) ♂	三の丸遺跡 (江戸) ♂	淡路町遺跡 (江戸) ♂	鎌倉材木座遺跡 ♂	♀	田柄貝塚(縄文後期)		現生シバイヌ	
								♂	♀	♂	♀
1：頭蓋最大長 (pr-i)	(180)	182.0	175.1	176.4	183.0	175.3	158.3	163.0	152.3	155.5	145.3
2：基底全長 (pr-)	(168)	170.9	162.9	169.4	170.8	165.6	151.1	152.6	141.9	147.9	137.9
3：頬骨弓幅 (zy-zy)	*104	104.0	101.1	105.5	108.6	96.1	90.2	88.3	85.2	94.8	88.1
4：脳頭蓋長 (na-i)	102.5	100.2	96.9	91.5	103.6	95.9	86.1	87.2	82.8	86.1	80.8
5：nasion-basion (na-ba)	96.9	97.2	91.0	-	-	-	-	-	-	84.2	79.1
6：頭蓋幅(1) (eu-eu)	*58	60.5	52.7	54.2	56.0	54.1	50.7	52.4	51.6	50.1	48.3
7：頭蓋高(1) (br-ho)	50	56	50	50	55	48.8	42	50	45	49	45
8：basion-bregma 高 (ba-br)	64.9	66.8	64.7	67.2	74.0	66.9	58.0	62.0	58.9	65.0	61.4
9：最小前頭幅 (ft-ft)	38.3	38.2	34.6	31.2	33.2	33.3	29.7	31.7	30.0	29.5	28.2
10：前頭骨頬骨突起端幅 (ect-ect)	49.5	46.4	49.2	46.9	52.0	44.2	40.5	42.8	41.1	43.5	39.3
11：後頭三角幅 (ot-ot)	64.8	70.1	61.6	65.7	69.8	63.7	57.4	59.5	57.7	55.2	51.6
12：両耳幅 (au-au)	63.6	69.3	60.0	-	-	-	-	59.1	56.7	54.2	50.7
13：最小眼窓間幅 (ent-ent)	36.6	30.5	32.4	29.9	33.4	31.6	27.7	28.7	27.6	28.7	25.4
14：額長 (pr-na)	(87)	89.3	83.8	88.5	84.5	84.2	73.4	79.4	74.7	74.6	69.4
15：吻長(1) (pr-o.a)	(73)	76.1	74.0	76.6	76.0	74.8	66.7	68.3	64.6	65.0	60.1
16：吻幅 (犬歯部)	*40	40.7	33.5	36.8	36.3	36.5	32.5	34.5	30.8	31.5	28.9
17：吻高 (na-)	*45	45	38	39	41	41	35.5	39	36	34	32
18：鼻骨凹陥深	4.6	-	5.2	6.4	5.8	4	3.7	5.0	3.4	6.4	5.5
19：硬口蓋長 (pr-sta)	(83)	88.5	82.8	87.3	84.6	86.2	-	78.5	72.9	74.9	70.3
20：硬口蓋最大幅	*62	69.5	60.0	63.5	65.5	60.2	56.6	57.4	53.7	59.2	55.2
21：下顎骨全長(1) (id-goc)	-	136.2	128.8	133.5	-	127.9	117.9	118.5	112.2	114.1	107.0
22：(2) (id-c.mid)	-	136.9	127.6	132.5	-	129.0	115.6	117.4	110.6	114.2	107.0
23：下顎枝高(1) (id-goc)	-	55.5	52.0	53.6	-	52.0	47.3	44.3	44.3	44.6	41.3
24：下顎枝幅 (最小値)	-	34.1	33.3	33.3	-	33.7	29.1	29.3	27.2	27.7	25.5
25：下顎体高 (M1の中央)	-	27.2	23.6	24.9	-	24.9	22.3	22.4	20.5	18.9	17.2
26：下顎体厚 (M1中央下方)	-	-	10.7	11.3	-	11.4	9.9	10.9	9.8	9.1	8.2
27：咬筋窓深 (下顎枝幅位)	-	8.6	7.2	8.5	-	8.3	7.0	7.1	6.5	5.8	5.3
頭蓋示数(1) (3/1)	(57.8)	57.1	57.7	59.8	59.3	54.8	57.0	55.1	58.0	61.0	60.7
脳頭蓋示数 (6/4)	(56.6)	60.4	54.4	59.2	54.1	56.4	58.9	59.0	62.5	58.2	59.8
長高示数 (8/1)	(36.7)	36.7	37.0	38.1	40.4	38.2	36.6	38.0	38.9	31.2	31.2
幅高示数 (8/6)	(111.9)	110.4	122.8	124.0	132.1	123.7	114.4	118.9	115.1	129.9	127.3
横頭顔示数 (3/6)	(179.3)	171.9	191.8	194.6	193.9	177.6	177.9	173.6	162.1	189.4	182.7
眼窓後示数 (9/6)	(66.0)	63.1	65.7	57.6	59.3	61.6	58.6	60.2	58.1	59.0	58.3
顔面示数 (14/3)	(83.7)	85.9	82.9	83.9	77.8	87.6	81.4	90.3	83.9	78.8	78.8
吻長示数 (15/1)	(40.6)	41.8	42.3	43.4	41.5	42.7	42.1	42.0	42.4	41.8	41.4
鼻骨凹陥示数 (18/17)	(10.2)	-	13.7	16.4	14.1	9.8	10.4	12.7	10.0	18.7	17.4
口蓋示数 (20/19)	(74.7)	78.5	72.5	72.7	77.4	69.8	-	71.1	71.8	79.2	78.6
下顎体厚高示数 (26/25)	-	-	45.3	45.4	-	45.8	44.4	48.6	47.7	48.3	47.7

表7 百間川米田遺跡出土犬骨の上顎歯と比較資料
(単位は mm)

上顎歯	I 1 m-d b-l		I 2 m-d b-l		I 3 m-d b-l		C m-d b-l		P 1 m-d b-l		P 2 m-d b-l		P 3 m-d b-l		P 4 max L. lat L. b-l			M 1 m-d max.b-l		M 2 m-d b-l	
米田遺跡 ♀	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11.3	5.1	18.9	17.3	10.1	11.2	15.2	5.5	9.4
材木座遺跡 (鎌倉) ♀	4.5	4.7	5.1	5.3	5.0	6.2	9.1	5.6	5.3	3.5	8.5	3.5	10.3	4.5	18.4	17.7	9.2	11.6	15.5	6.3	9.6
材木座遺跡 (鎌倉) ♂	-	-	-	-	4.1	5.8	8.2	5.3	4.7	3.2	7.8	3.3	9.2	3.9	16.1	15.8	8.0	10.3	14.3	5.5	8.2
西新橋遺跡 (江戸) ♀	4.2	4.9	4.8	5.1	4.8	6.0	8.5	5.5	5.1	3.3	8.1	3.4	9.5	4.4	16.0	15.6	8.9	10.4	14.4	6.3	8.9
金杉遺跡 (江戸) ♀	4.8	5.1	5.9	5.8	5.4	6.6	10.5	6.5	5.6	3.8	10.2	4.4	11.8	4.5	20.0	19.8	9.9	12.6	17.9	7.1	11.2
三の丸遺跡 (江戸) ♀	4.1	4.6	4.9	-	4.8	6.1	9.6	5.8	5.5	3.2	9.0	3.5	11.2	4.7	18.1	18.1	10.2	11.7	15.6	7.1	10.0
田柄貝塚 (縄文) ♀	4.3	4.1	5.0	4.6	4.5	6.0	9.3	5.3	5.0	3.5	8.2	3.5	10.5	4.3	17.6	17.4	9.0	11.1	15.3	6.0	9.5
田柄貝塚 (縄文) ♂	4.2	3.8	4.9	4.4	4.1	6.1	8.4	4.7	4.8	3.2	8.1	3.2	9.8	4.1	16.9	16.8	8.3	11.0	15.0	5.9	9.2
シバイス (現生) ♀	4.3	4.7	5.1	5.2	5.2	6.2	9.1	5.3	5.3	3.7	8.2	4.0	10.8	4.9	17.6	16.8	9.5	11.1	14.9	6.1	8.9
シバイス (現生) ♂	4.0	4.3	4.8	4.8	4.7	5.6	8.3	4.7	5.0	3.4	7.4	3.6	9.8	4.5	16.3	15.7	8.6	10.4	14.1	5.7	8.4

付載4 百間川遺跡 木器樹種同定、種子同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

○昭和62年度同定分

1. 百間川米田遺跡出土材同定

1-1 試料

試料はNo. 1 ~ 175の175点で、弥生時代後期~江戸時代初期のものとされる木製品である(表8)。

1-2 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール (Gum Chloral) で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版 (図版152~164) も作成した。

1-3 結果

採取された試料が1年に満たなかったり劣化が進んでいたため、確実な同定ができないものや種類不明のものもあったが、以下の26種類 (Taxa) が同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質はつぎのようなものである。

・モミ属の一種 (Abies sp.) マツ科 No. 70, 71, 92, 98, 99, 100, 105, 107, 108, 121, 123, 133, 135, 138, 141, 157, 158, 163, 170.

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型 (Taxodioide) で1~4個。放射組織は単列、1~30細胞高。

モミ属には、モミ (Abies firma)、ウラジロモミ (A. homolepis)、アオモリトドマツ (A. mariesii)、シラベ (A. veitchii)、アカトドマツ (A. sachalinensis) の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州(秋田・岩手県以南)・四国・九州の低地~山地に、ウラジロモミは本州中部(福島県以南)・紀伊半島・四国の山地~亜高山帯に、アオモリトドマツは本州(福島県以北)の亜高山~高山帯に、シラベは本州中部(福島県以南)・奈良県・四国に、アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地~高山・寒冷地に生育する。材の解剖学的特徴のみでは区別できないが、試料はモミである可能性が高い。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

- ・ツガ属の一種 (Tsuga sp.) マツ科

No.8, 9, 58, 117, 118, 119, 120, 122, 124, 128.

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞があり、樹脂道はない。放射組織は仮道管と柔細胞よりなり、柔細胞壁はじゅず状末端壁をもつ。分野壁孔はヒノキ型(Cupressoid)で1~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

ツガ属には、ツガ (Tsuga sieboldii) とコメツガ (T. diversifolia) の2種がある。ツガは、本州(福島県以南)・四国・九州に分布するが、日本海側には少なく、モミと混生し、尾根筋や傾斜地に生息することが多い。コメツガは本州・四国・九州に分布するが、西日本には少なく、亜高山帯の代表的樹種の1つである。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はツガである可能性が高い。ツガの材はやや重硬で、強度・割裂性は大きく、加工は容易ではなく、保存性は中程度である。建築・土木・装飾・建具・器具・家具材など各種の用途がある。また樹皮はタンニン原料となる。

- ・マツ属(複維管束亜属)の一種 [Pinus (subgen. Diploxylon) sp.] マツ科 No.11, 17, 29, 31, 36, 38, 41, 44, 72, 75, 77, 84, 85, 91, 95, 101, 102, 103, 129, 149, 151, 152, 164.

早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状、単列、1~15細胞高。

複維管束亜属(いわゆる二葉松類)には、アカマツ (Pinus densiflora)、クロマツ (P. thunbergii)、リュウキュウマツ (P. luchuensis)の3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生息し、また古くから砂防林として植栽してきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

- ・コウヤマキ (Sciadopitys verticillata) スギ科(コウヤマキ)科 No.130, 131.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1~5細胞高。

コウヤマキは、通常コウヤマキ科に独立させる(1科)1属1種の日本特産の常緑高木である。自生地は本州(福島県以南)・四国・九州に点在し、また植栽される。材はやや軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度であるが耐水性がある。各種樽桶類・土木・舟材・棺材などの用途がある。

- ・スギ (Cryptomeria japonica) スギ科 No.7, 10, 13, 14, 15, 22, 23, 33, 45, 46, 47, 48, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 67, 68, 76, 80, 97, 109, 110, 112, 145, 146, 147, 153, 154,

155, 156.

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 No.(12), 16, 18, (24), (25), 30, 34, 39, 40, 42, (49), (50), 66, 74, 87, 111, 113, 114, 115, 116, (125), 126, 127, 132, 134, 136, 137, 139, 142, 143, 144, 159, 160, 161, 162, 165, 166, 167, 168, 169, (171), 172, 173, 174, 175.

早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

なお、上記の形質のほとんどを供えているものの、細胞壁の劣化が進み分野壁孔の型が識別できないものを類似種とした。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州(福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州(岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・ヤナギ属の一種 (*Salix* sp.) ヤナギ科 No.35.

散孔材で、年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は横断面では楕円形~やや角張った楕円形、単独および2~3個が複合する。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性、単列、1~15細胞高。柔組織は随伴散在状およびターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

ヤナギ属は国内に約40種が知られ、種間雑種も多く、分類の困難な植物群である。属としては全国に分布し、時に植栽される落葉低木または高木である。ヤナギというと、水辺に生育するネコヤナギ (*Salix gracilistyla*) やシダレヤナギ (*S. babylonica*) を連想することが多いが、バッコヤナギ (*S. bakko*)、ノヤナギ (*S. subopposita*) などのように乾燥した立地に生

育するものや、シライヤナギ (*S. shiraii*)、コマイワヤナギ (*S. rupifraga*) のように岩場に生育するものもある。材は一般に軽軟で、割裂性が大きく、保存性は低い。大径木が少ないため小細工物にする程度で、特に重要な用途が知られていない。樹皮を各種の用途に用いるものもある。

- ・ノグルミ (*Ptatyarya strobilacea*) クルミ科 No.104, 106.

環孔材で孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じ、塊状に複合し斜方向～火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独、小道管は管壁は薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III～II型、1～6細胞幅、1～30細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

ノグルミは本州（伊豆半島・近畿地方以西）・四国・九州（北部）の陽向の肥沃地などに自生する落葉高木である。材はやや重硬で、建築・土木・器具材などの用途があり、樹皮はタンニン原料や魚毒としても用いられた。

- ・オニグルミ (*Juglans ailanthifolia*) クルミ科 No.2

散孔材で年輪界付近で管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は单穿孔を有する。放射組織は異性III型、1～3細胞幅、1～30細胞高。柔組織は短接線状、周囲および散在状。年輪界は明瞭。

オニグルミは、北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として広く用いられるほか、各種器具・家具材などの用途も知られている。種子は食用となり、栄養価に富む。

- ・コナラ属（アカガシ亜属）の一一種 [*Quercus* (subgen. *Cyclobalanopsis*) sp.] ブナ科 No.79.

放射孔材で、道管は横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は单接線状および散在状。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属（カシ類）には、アカガシ (*Quercus acuta*)、イチイガシ (*Q. gilva*)、アラカシ (*Q. glauca*) など7種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木～小高木のウバメガシ (*Q. Phyllyraeoides*) も、材構造上はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帶常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。材は重硬・強靭で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。また種子は食用となる。

- ・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No.4, (6), 19, (26), 37.

環孔材で孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列す

る。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および単接線状。年輪界は明瞭。

No. 6, 26は試料が1年に満たないため孔圈部の観察ができず類似種としたが、シイノキ属の可能性もある。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、榾木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

・シイノキ属の一種 (*Castanopsis* sp.) ブナ科 No.93, 140.

半環孔性の放射孔材で、管径を漸減しながら火炎状に配列する。道管は横断面では楕円形～多角形、単独および2～3個が斜（放射）方向に複合する。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。柔組織は周囲状、散在状および単接線状。年輪界は明瞭。

シイノキ属には、ツブラジイ（コジイ）（*Castanopsis cuspidata*）とその変種スダジイ（*C. cuspidata* var. *sieboldii*）がある。カシ類とともに、暖温帶常緑広葉樹林の主要構成種である。ツブラジイは本州（伊豆半島以西南）・四国・九州に、スダジイは本州（福島・新潟県以南）・四国・九州・琉球に分布し、また植栽される高木である。一般には、スダジイが沿海地、ツブラジイが内陸地に生育する。材はやや重硬で、割裂性は大きく、加工はやや容易、耐朽性は中程度～低い。材質的にはツブラジイはスダジイより劣るものとされている。薪炭材としての用途が最も多く、器具・家具・建築材などにも用いられる。種子は食用となり、樹皮はタンニン原料となる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 No.94.

環孔材で孔圈部が1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形～楕円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔を有し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～10細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きいが、加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹林の中で最良のものの一つに上げられる。

・エノキ属の一種 (*Celtis* sp.) ニレ科 No.73.

環孔材で孔圈部は1～3列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では楕円形、単独および2～3個が複合する。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III～II型、1～10細胞幅、1～50細胞高で、鞘細胞 (sheath cell) が認められる。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

エノキ属にはエゾエノキ (*Celtis jezoensis*)、エノキ (*C. sinensis* var. *japonica*)、コバノチョウセンエノキ (*C. leveillei*)、クワノハエノキ (*C. boninensis*) の4種がある。エゾエノキは北海道・本州・四国・九州に、エノキは本州・四国・九州に普通にみられる。コバノチョウセンエノキは本州（近畿地方以西）・四国・九州・琉球に、クワノハエノキは山口県・九州西部・琉球・小笠原に稀に分布する。エノキは東北地方にはやや少ないが、平地から丘陵地に普通にみられ、また神社や街道沿いに植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度はやや小さい。耐朽性も低く、材質的には劣るため、雑用材・薪炭材などの用途があるだけである。果実は食べられる。

・ムクノキ (*Aphananthe aspera*) エノキ科 No.82.

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～8細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

ムクノキは本州（関東地方以西）・四国・九州・琉球の平地～丘陵地に分布する落葉高木である。材はやや重硬・強靭で、割裂性は小さい。器具・家具・建築・薪炭材などに用いられる。果実は食べられ、葉は研磨材として用いられた。

・イチジク属類似種 (cf. *Ficus* sp.) クワ科 No.69.

散孔材で、横断面では楕円形、単独および2～4個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～6細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～独立帶状。年輪界は不明瞭。

イチジク属は、つる性のオオイタビ (*Ficus pumila*)、イタビカズラ (*F. sarmentosa* var. *nipponica*)、ヒメイタビ (*F. stipulata*) と、直立性のイヌビワ (*F. erecta*)、ガジュマル (*F. microcarpa*)、アコウ (*F. superba* var. *japonica*) が自生する。イヌビワ以外は常緑性であり、主として西南日本に分布する。イヌビワは、本州（関東地方以西）・四国・九州・琉球に分布する落葉低木～小高木である。材は比較的軽軟で、耐朽性は低い。木が小さいため薪炭材などのはかは特別な用途は知られていない。樹皮はロープに利用され、葉は飼料となる。また果のうは食用となる。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum*) カツラ科 No.3

散孔材で、管孔は単独または2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。横断面では多角形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し、段 (bar) 数は20以上、放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

カツラは北海道から九州に自生する落葉高木である。カツラ属にはこのほか、本州北中部の亜高山帯に分布するヒロハカツラ (*C. magnificum*) がある。カツラの材はやや軽軟で、割裂性は大きく、加工は容易、強度・保存性は低い。大径木が多く、欠点が少ないため、各種の道具・器具・木地・家具・建築・彫刻材などに用いられる有用材の一つである。

・モクレン属の一種 (*Magnolia* sp.) モクレン科 No.78.

散孔材で、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属は、ホオノキ (*Magnolia obovata*)、オオヤマレンゲ (*M. sieboldii*)、タムシバ (*M. salicifolia*)、コブシ (*M. kobus*)、シデコブシ (*M. stellata*) の5種が自生する。ホオノキ・コブシは北海道から九州の適潤～湿性地に生育するが、コブシは西日本にはやや少ない。タムシバなどは産地が限られたり、稀であったりする。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工は極めて容易で欠点が少ないとから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途が知られている。また木炭は金・銀・銅・漆器の研磨に用いられた。コブシの材は、ホオノキに似るがやや硬く、ホオノキより劣るものとされ、ホオノキに準じた使われ方をする。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora*) クスノキ科 No.83, 90.

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2～4個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III型、1～4細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。年輪界は明瞭。

クスノキは本州（関東地方以西）・四国・九州に分布し、また植栽される常緑高木である。材はやや軽軟～中程度で、加工は容易、耐朽・耐虫性は高い。建築・内装・建具・家具・器具材や船舶材に用いられる。材や葉からは樟脑が採られ、また葉はテグス蚕の飼料とされる。

・シロダモ属の一種 (*Neolitsea* sp.) クスノキ科 No.148, 150.

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界は明瞭。

シロダモ属には、シロダモ (*Neolitsea sericea*) とイヌガシ (*N. aciculata*) がある。イヌ

ガシは本州（房総半島南部、伊豆半島以西）・四国・九州・琉球に。シロダモは本州（宮城・新潟県以南）・四国・九州・琉球に分布する常緑高木～低木である。シロダモの材は中程度～重硬で、器具・建築・薪炭材などの用途があるが、あまり重要なものとはいえない。種子から油を搾って燈用・ロウソクとすることもある。

・サクラ属の一種 (Prunus sp.) バラ科 No.1.

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2～4個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III型、1～5細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや不明瞭。

サクラ属には、ヤマザクラ (Prunus jamasakura) やウワミズザクラ (P. grayana) など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ (P. Persica) やスモモ (P. salicina) など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木～低木であるが、バクチノキ (P. zippeliana)、リンボク (P. spinulosa) の常緑樹も含まれる。このうちヤマザクラは、本州（宮城・新潟県以南）・四国・九州の山野に分布する落葉高木で、材は中程度～やや重硬・強靭で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。また樹皮は樺皮細工に用いられる。

・トチノキ (Aesculus turbinata) トチノキ科 No.5.

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合する。道管が單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列する。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

トチノキは北海道（南西部）・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥が容易で、耐朽性は小さい。器具・家具材や旋作材・木地などに用いられる。種子は澱粉を多く含み食用となるほか、タンニン原料ともなる。

・ヤブツバキ類似種 (cf. Camellia japonica) ツバキ科 No.27.

散孔材で、横断面では多角形、単独および2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段数は10前後。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～15細胞高。柔組織は隨伴散在状。年輪界はやや不明瞭。

ヤブツバキは、本州・四国・九州・琉球の主として沿海地に自生する。ツバキ属には、ヤブツバキと四国・九州・琉球の山地に自生するサザンカ (C. sasanqua) があり、ともに多くの変・品種があり植栽される。ヤブツバキの材は重硬・強靭で割れにくく、加工はやや困難、耐朽性は高い。器具・旋作・機械・薪炭材などに用いられる。種子からは油が搾られ、頭髪・食用・機械・燈・薬などに利用される。またサポニン原料ともなり魚毒・農薬として用いられた。木

炭は媒染剤ともなる。

- ・ヒサカキ (Eurya japonica) ツバキ科 No.28.

散孔材で、横断面では多角形、単独または2~3個が複合する。道管は段階穿孔を有し、段数は30前後。放射組織は異性II型、1~4細胞幅、1~40細胞高。柔組織は散在状。年輪界は不明瞭。

ヒサカキは、本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州・琉球に自生する常緑小高木～低木で、暖温帯常緑広葉樹林の下木として普通である。多くの変・品種があり、各地で生け垣などに植栽される。薪炭材として一般的であり、小細工物・器具材としても用いられる。枝葉は玉串として用いられるほか、その灰汁は媒染剤となる。また果実は染料となる。

- ・カキノキ属の一種 (Diospyros sp.) カキノキ科 No.32.

散孔材で、横断面では橢円形、単独または2~4個が複合する。道管は單穿孔を有する。放射組織は異性III型、1~3細胞幅、10~20細胞高で階層状に配列する。柔組織は周囲状および接線状。年輪界は不明瞭。

カキノキ属には、トキワガキ (Diospyros morrisiana)、シナノガキ (D. japonica)、ヤマガキ (D. kaki var. sylvestris) の3種が自生する。トキワガキは本州（静岡県以西）・四国・九州・琉球に、シナノガキは本州（関東地方南部以西）・四国・九州・琉球に、ヤマガキは本州・四国・九州に分布する。ヤマガキの母種カキノキは、中国・楊子江流域原産で平安時代ごろ日本に伝えられたものと考えられ、本州・四国・九州で広く栽培されている。カキノキの材はやや重硬・強靭で、建築装飾・器具・家具材などに用いられる。果実は食用となるほか、タンニン原料となる。

- ・イネ科（タケ亜科）の一種 [Gramineae (subfam. Bambusoideae) sp.] No.43.

維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

各試料の推定される用途・時代とその樹種を一覧表にまとめた（表8）。

表8 百間川米田遺跡出土材の推定される用途・時代とその樹種

試料番号	用 途	時 代	種 名
1	椀	室町	サクラ属の一種
2	椀	中世	オニグルミ
3	椀	室町	カツラ
4	椀	中世	クリ

百間川米田遺跡 3

試料番号	用 途	時 代	種 名
5	椀	中世	トチノキ
6	椀	中世	クリ類似種
7	折敷	室町	スギ
8	盤?	中世	ツガ属の一種
9	盤?	中世	ツガ属の一種
10	円板	中世	スギ
11	円板	室町	マツ属 (複維管束亞属) の一種
12	円板?	中世	ヒノキ属類似種
13	円板	中世	スギ
14	桶枠板	室町	スギ
15	桶枠板	中世	スギ
16	曲物	鎌倉	ヒノキ属の一種
17	盤?	室町	マツ属 (複維管束亞属) の一種
18	杓子?	奈良	ヒノキ属の一種
19	杓子	江戸初期	クリ
20	杓子	中世	広葉樹 (散孔材)
21	杓子	中世	広葉樹 (散孔材)
22	箸	中世	スギ
23	箸	中世	スギ
24	箸	中世	ヒノキ属類似種
25	箸	奈良	ヒノキ属類似種
26	建築材?	中世	クリ類似種
27	櫛	江戸初期	ヤブツバキ類似種
28	編具	平安末期	ヒサカキ
29	柄	中世	マツ属 (複維管束亞属) の一種
30	柄	室町	ヒノキ属の一種
31	柄	室町	マツ属 (複維管束亞属) の一種
32	把手?	中世	カキノキ属の一種
33	把手	中世	スギ
34	有頭棒	中世	ヒノキ属の一種

付載4 樹種同定、種子同定

試料番号	用 途	時 代	種 名
35	有頭棒	中世	ヤナギ属の一種
36	小円柱	中世	マツ属（複維管束亜属）の一種
37	小角棒	中世	クリ
38	下駄	中世	マツ属（複維管束亜属）の一種
39	下駄	中世	ヒノキ属の一種
40	下駄	中世	ヒノキ属の一種
41	下駄	江戸初期	マツ属（複維管束亜属）の一種
42	羽子板	中世	ヒノキ属の一種
43	籠	中世	イネ科（タケ亜科）の一種
44	火付け木	中世	マツ属（複維管束亜属）の一種
45	刀形？	平安末期	スギ
46	塔婆？	中世	スギ
47	五輪塔婆	中世	スギ
48	塔婆	中世	スギ
49	塔婆	中世	ヒノキ属類似種
50	塔婆	中世	ヒノキ属類似種
51	塔婆	中世	スギ
52	塔婆	中世	スギ
53	塔婆	中世	スギ
54	呪符	中世	スギ
55	札	室町	スギ
56	杭状	鎌倉後期	スギ
57	札	中世	スギ
58	札	中世	ツガ属の一種
59	札	中世	スギ
60	草履状木製品	中世	スギ
61	草履状木製品	中世	スギ
62	札	中世	スギ
63	札	中世	スギ
64	札	中世	スギ

試料番号	用 途	時 代	種 名
65	札	室町	スギ
66	大形札	鎌倉	ヒノキ属の一種
67	有孔短冊形	中世	スギ
68	桶枠板	中世	スギ
69	梯子	弥生後期	イチジク属類似種
70	船材?	古墳初期	モミ属の一種
71	建築材	古墳初期	モミ属の一種
72	建築材	中世	マツ属 (複維管束亞属) の一種
73	塔婆	中世	エノキ属の一種
74	板材	平安末期	ヒノキ属の一種
75	板材	中世	マツ属 (複維管束亞属) の一種
76	板材	中世	スギ
77	脚部	中世	マツ属 (複維管束亞属) の一種
78	板材	中世	モクレン属の一種
79	角材	中世	コナラ属 (アカガシ亞属) の一種
80	角棒	中世	スギ
81	不明	中世	広葉樹 (散孔材?)
82	不明	中世	ムクノキ
83	不明	鎌倉	クスノキ
84	柱根	中世	マツ属 (複維管束亞属) の一種
85	柱根	中世	マツ属 (複維管束亞属) の一種
86	柱根	中世	樹皮
87	柱根	中世	ヒノキ属の一種
88	柱根	中世	広葉樹 (散孔材)
89	柱根	中世	広葉樹 (散孔材)
90	柱根	中世	クスノキ
91	柱根	中世	マツ属 (複維管束亞属) の一種
92	柱根	中世	モミ属の一種
93	柱根	中世	シイノキ属の一種
94	柱根	中世	ケヤキ

付載4 樹種同定、種子同定

試料番号	用 途	時 代	種 名
95	柱根	中世	マツ属（複維管束亞属）の一種
96	礎板	中世	広葉樹（散孔材）
97	井戸側板（東）	鎌倉	スギ
98	井戸側板（西）	鎌倉	モミ属の一種
99	井戸側板（南）	鎌倉	モミ属の一種
100	井戸側板（北）	鎌倉	モミ属の一種
101	井戸側柱1	鎌倉	マツ属（複維管束亞属）の一種
102	井戸側柱2	鎌倉	マツ属（複維管束亞属）の一種
103	井戸側柱3	鎌倉	マツ属（複維管束亞属）の一種
104	井戸側柱4	鎌倉	ノグロミ
105	井戸横桟1	鎌倉	モミ属の一種
106	井戸横桟2	鎌倉	ノグロミ
107	井戸横桟3	鎌倉	モミ属の一種
108	井戸横桟4	鎌倉	モミ属の一種
109	井戸側柱1	平安末期	スギ
110	井戸側柱2	平安末期	スギ
111	井戸側柱3	平安末期	ヒノキ属の一種
112	井戸側柱4	平安末期	スギ
113	井戸横桟7	平安末期	ヒノキ属の一種
114	井戸横桟8	平安末期	ヒノキ属の一種
115	井戸横桟9	平安末期	ヒノキ属の一種
116	井戸横桟10	平安末期	ヒノキ属の一種
117	井戸基礎組木	室町	ツガ属の一種
118	井戸基礎組木	室町	ツガ属の一種
119	井戸基礎組木	室町	ツガ属の一種
120	井戸基礎組木	室町	ツガ属の一種
121	井戸側板東2	室町	モミ属の一種
122	井戸側板	室町	ツガ属の一種
123	井戸側板	室町	モミ属の一種
124	井戸側板	室町	ツガ属の一種

百間川米田遺跡 3

試料番号	用 途	時 代	種 名
125	井戸側柱 1	室町	ヒノキ属類似種
126	井戸側柱 2	室町	ヒノキ属の一種
127	井戸側柱 3	室町	ヒノキ属の一種
128	井戸側柱 4	室町	ツガ属の一種
129	井戸横桟東 6	室町	マツ属（複維管束亜属）の一種
130	井戸横桟西 6	室町	コウヤマキ
131	井戸横桟西 7	室町	コウヤマキ
132	基礎組木（東）	奈良	ヒノキ属の一種
133	基礎組木（西）	奈良	モミ属の一種
134	基礎組木（南）	奈良	ヒノキ属の一種
135	基礎組木（北）	奈良	モミ属の一種
136	井戸曲物（上）	奈良	ヒノキ属の一種
137	井戸曲物（下）	奈良	ヒノキ属の一種
138	井戸側柱北東	奈良	モミ属の一種
139	井戸側柱北西	奈良	ヒノキ属の一種
140	井戸側柱南東	奈良	シイノキ属の一種
141	井戸側柱南西	奈良	モミ属の一種
142	井戸桟板	奈良	ヒノキ属の一種
143	井戸曲物	平安前期	ヒノキ属の一種
144	井戸側板 2	平安前期	ヒノキ属の一種
145	井戸側板 10	平安前期	スギ
146	井戸側板	平安前期	スギ
147	井戸側板	平安前期	スギ
148	井戸側柱北東	平安前期	シロダモ属の一種
149	井戸側柱北西	平安前期	マツ属（複維管束亜属）の一種
150	井戸側柱南西	平安前期	シロダモ属の一種
151	井戸側柱南東	平安前期	マツ属（複維管束亜属）の一種
152	基礎組木（西）	室町	マツ属（複維管束亜属）の一種
153	井戸横桟 1	鎌倉	スギ
154	井戸横桟 2	鎌倉	スギ

試料番号	用 途	時 代	種 名
155	井戸横桟 3	鎌倉	スギ
156	井戸横桟 4	鎌倉	スギ
157	井戸側板	鎌倉	モミ属の一種
158	井戸側板	鎌倉	モミ属の一種
159	井戸横桟	鎌倉	ヒノキ属の一種
160	井戸横桟	鎌倉	ヒノキ属の一種
161	井戸横桟	鎌倉	ヒノキ属の一種
162	井戸横桟	鎌倉	ヒノキ属の一種
163	井戸横桟	鎌倉	モミ属の一種
164	基礎組木（東）	平安末期	マツ属（複維管束亞属）の一種
165	井戸横桟 1	室町	ヒノキ属の一種
166	井戸横桟 2	平安末期	ヒノキ属の一種
167	井戸横桟 3	平安末期	ヒノキ属の一種
168	井戸横桟 4	平安末期	ヒノキ属の一種
169	井戸曲物	室町	ヒノキ属の一種
170	井戸側板南②	鎌倉	モミ属の一種
171	井戸曲物①	奈良	ヒノキ属類似種
172	井戸曲物	奈良	ヒノキ属の一種
173	井戸曲物④	奈良	ヒノキ属の一種
174	井戸曲物	奈良	ヒノキ属の一種
175	井戸曲物	奈良	ヒノキ属の一種

1 - 4 考察

木製遺物の樹種同定結果からみて、当時の人々が各樹種の材質を熟知した上で用材の選択を行っていたであろうことは前報でも指摘したが、今回の同定結果からも同様の推論が導かれる。以下にいくつかの用途ごとの使用樹種をみることにする。

・井戸材

今回の同定対象の中で最多の79点を占める。奈良時代から室町時代のものとされる13遺構から検出された材は9種類に同定されたが、ヒノキ属（類似種を含む）・モミ属・スギなどの針葉樹がほとんどで、広葉樹はノグルミなど3種類5点にすぎない（表9）。各試料の使用部位をみると、広葉樹は側柱と横桟で、井戸の本体ともいえる側板や曲物には使われていない。水周りということから、より水質に耐える針葉樹が選択されたものと思う。一方、同じ針葉樹であつ

表9 井戸材の部位別の使用樹種

時代	遺構	種名 部位	モミ 属	ツガ 属	マツ 属	コウヤ マキ	スギ	ヒノ キ属	ノグ ルミ	シイノ キ属	シロダ モ属	合計
奈良	井戸118	基礎組木	2					2				4
		曲物						2				2
		側柱	2					1		1		4
		桟板						1				1
	井戸119	曲物						5 **				5
平安前期	井戸120	曲物						1				1
		側板						1				4
		側柱			2		3	1			2	4
平安後期	井戸131	側柱					3	1				4
		横桟						4				4
	井戸126	横桟	1					4				5
鎌倉	井戸123	側板	1									1
	井戸138	横桟					4					4
	井戸137	側板	3				1					4
		側柱			3				1			4
		横桟	3						1			4
室町	井戸127	側柱	1									1
	井戸130	側板 横桟		1					4			1
町	井戸139	基礎組木 曲物			2			1				2
	井戸135	側板	2	2								4
		側柱		1			2		3 **			4
	井戸132	基礎組木		4								3
合計			16	7	8	2	11	30	2	1	2	79

* : 複維管束亜属

** : 類似種各1点を含む

てもヒノキ属・モミ属は多くの遺構で検出されているのに対して、ツガ属・コウヤマキなどは遺構が限られているようにみえる。また、ヒノキ属は基礎組木や側柱から曲物・側板まで使われているのに、複維管束亜属は側柱など強度を必要とする用途に限られているようにもみえる。このように、樹種によって使用されている時代や部位に違いが認められるが、ここで同定された試料は各遺構を構成する材の一部にすぎないため断定はできない。今後の課題として留意したい。

・塔婆

いずれも中世のものとされる。塔婆?を含め9点あり、スギ(6点)・ヒノキ属類似種(2点)・エノキ属(1点)と同定された。現在では、白木の美しさや材質からモミが使われることが多いが、針葉樹のスギ・ヒノキ属はともかく、広葉樹のエノキ属の用例は当時としても稀であろう。

・札

鎌倉時代とされるもの1点、室町時代とされるもの1点、中世とされるもの7点がある。ツガ属(1点)・スギ(7点)・ヒノキ属(1点)と同定された。本遺跡ではすでに、室町時代とされるものでスギ・ヒノキ各2点が同定されている。

・椀

室町時代とされるもの2点と中世とされるもの6点があり、オニグルミ・クリ・クリ類似種・カツラ・サクラ属・トチノキ各1点と同定された。いずれも現在でも用いられている樹種であるが、これまでの同定結果ではクリの用例が多かったのに対し、使用樹種が多いことが注目されよう。

・箸

奈良時代とされるもの1点と中世とされるもの3点があり、スギ・ヒノキ属類似種各2点と同定された。スギやサワラの箸は現在でも用いられている。

・下駄

中世とされるもの3点と江戸時代初期とされるもの1点があり、複維管束亜属・ヒノキ属各2点と同定された。本遺跡では鎌倉・室町時代とされるものでマツ・ヒノキのほかにモミやサカキの例も知られている。

2. 百間川米田遺跡出土種子同定

2-1 試料

試料はNo. 1~10の10点である。No. 7~9は古墳時代初期のものとされる井戸114から、No. 1~4は古墳時代前期のものとされる井戸103から、No. 5は鎌倉時代前期のものとされる井戸

百間川米田遺跡 3

129から、No. 6は室町時代のものとされる井戸139から、No.10は中世のものとされる土壙191からそれぞれ検出されたものである。

2-2 方法および結果

肉眼および双眼実体鏡により観察・同定した。同時に、写真図版（図版165）も作成した。以下の5種類（Taxa）が同定された。（表10）。

表10 百間川米田遺跡出土種子同定結果

試料番号	種名
1	種類不明
2	<u>Polygonum</u> sp. (タデ属の一種)
3	種類不明
4	樹皮？
5	<u>Torreya nucifera</u> (カヤ)
6	<u>Melia azedarach</u> (センダン)
7	<u>Prunus salicina</u> (スモモ)
8	<u>Aphananthe aspera</u> (ムクノキ)
9	種類不明
10	種類不明

同定された種類のうち、カヤ・ムクノキ・スモモは食用となる。スモモは中国揚子江流域から日本まで野生種があったとされるが、わが国での栽培の歴史は古く、「記紀」に記載があるという。カヤ・ムクノキは時に植栽されるが、果実をとるために栽培されることはない。No. 1は約半分の、No.10はほぼ完形の種子であったが現時点では同定できない。No. 9はイヌガヤにも似た大形の種子の一部であるが、残存部が小さすぎて同定できない。No. 3は乾燥した破片であるが、種子であるか否かも判断できない。

○昭和61年度種子同定分（抄）

1. 試料

試料はNo. 1 ~ 32の32点で、沢田・今谷・米田・原尾島の4遺跡から検出されたものである。

各試料は、弥生時代前期から室町時代のものとされている（表11）。

表11 百間川遺跡出土種子試料表（抜粋）

試料番号	遺 跡	地 区	遺 構	時 代
8	米田	20S	溝125（石組）	室町時代
9	米田	20S	溝122	室町時代
10	米田	20S	溝122	室町時代
24	米田	16N, O	井戸135	鎌倉時代後半
25	米田	16N, O	井戸135	鎌倉時代後半
26	米田	15 I	井戸114	古墳時代初期
28	米田	11G	井戸105	弥生時代後期
29	米田	13G	井戸107	古墳時代前期
30	米田	13N	井戸126	平安時代末期
31	米田	16P	井戸116	弥生時代後期

2. 方法及び結果

試料を肉眼及び双眼実体鏡で観察し同定した。同時に写真図版も作成した。同定結果を一覧表で示す（表12）。

表12 百間川遺跡出土種子同定結果（抜粋）

試料番号	種 名	部 位
8	<u>Prunus mume</u> (ウメ)	種子
9	材片？	
10	<u>Pinus</u> (subgen. <u>Diploxyylon</u>) sp. [マツ属（複維管東亞属）の一種]	毬果
24	<u>P. mume</u>	種子
25	<u>Pinus</u> (subgen. <u>Diploxyylon</u>) sp.	毬果
26	<u>Lagenaria siceraria</u> (ヒヨウタン)	果皮
28	<u>Lagenaria siceraria</u>	果皮
29	<u>Lagenaria siceraria</u>	果皮
30	<u>Lagenaria siceraria</u>	果皮
31	<u>Quercus</u> sp. (コナラ属の一種)	種子

○昭和60年度材同定分（抄）

1. 試料

試料は65点で、原尾島（39点）・沢田（16点）・米田（10点）3地区より出土した木製品と自然木である。試料の用途や推定される時代などを試料表にまとめた（表13）。なお、No.58は炭化部分を同定試料とした。

表13 試料表（抜粋）

試料番号	用 途	地 区	時 代
55	鋤柄	米田	古墳前期
56	臼	米田	古墳前期
57	?	米田	古墳前期
58	たいまつ？	米田	奈良
59	円座	米田	古墳前期
60	羽子板	米田	鎌倉室町
61	下駄	米田	鎌倉室町
62	椀	米田	鎌倉室町
63	椀	米田	鎌倉室町
64	椀	米田	鎌倉室町

2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。No.58は乾燥させたのち、木口・柾目・板目三断面を作成、走査形電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版 166・167）も作成した。

3. 結果

同定結果を一覧表で示す。（表14）。

表14 同定結果（抜粋）

試料番号	種 名
55	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Cyclobalanopsis</u>) sp. [コナラ属（アカガシ亜属）の一種]
56	<u>Pinus</u> (subgen. <u>Diploxylon</u>) sp. [マツ属（複維管束亜属）の一種]
57	<u>Cryptomeria japonica</u> (スギ)

試料番号	種名
58	<u>Pinus</u> (subgen. <u>Diploxyylon</u>) sp. [マツ属（複維管束亜属）の一種]
59	環孔材（7年枝）
60	cf. <u>Cladrastis</u> sp. (フジキ属類似種)
61	<u>Cleyera japonica</u> (サカキ)
62	<u>Juglans ailanthifolia</u> (オニグルミ)
63	<u>Castanea crenata</u> (クリ)
64	<u>C. crenata</u>

次に、各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などについて種類ごとに述べる。

・マツ属（複維管束亜属）の一種 [Pinus (subgen. Diploxyylon) sp.] マツ科 No.56, 58

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状、単列、1～15細胞高。

複維管束亜属いわゆる二葉松類には、アカマツ (Pinus densiflora)、クロマツ (P. thunbergii)、リュウキュウマツ (P. luchuensis) の3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

・スギ (Cryptomeria japonica) スギ科 No.57.

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型 (Taxodioid) で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは、本州・四国・九州の水湿・肥沃な谷間などに生育する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

・オニグルミ (Juglans ailanthifolia) クルミ科 No. 62.

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独まれに2～4個が複合、横断面では橢円形、管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列する。放射組織は同性～異性III型、1～4細胞幅、1～40細胞高。柔組織は短接線状、周囲状および散在状。年輪界は明瞭。

オニグルミは、北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として、洋の東西を通じて広く用いられ、現在では材積が少なくなっていると思われる。ほかに各種器具・家具材などの用途も知られている。種子は食用となり、栄養価に富む。

・コナラ属（アカガシ亜属）の一一種 [*Quercus* (subgen. *Cyclobalanopsis*) sp.] ブナ科No.55.

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は短接線状および散在状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属（カシ類）には、アカガシ (*Quercus acuta*)、イチイガシ (*Q. gilva*)、アラカシ (*Q. glauca*) など7種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木～小高木のウバメガシ (*Q. phyllyraeoides*) も、材構造上はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帶常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで、宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靭で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。また種子は食用となる。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No.63, 64.

環孔材で孔圈部は1～4列、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、楓木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

・フジキ属類似種 (cf. *Cladrastis* sp.) マメ科 No.60.

試料は一年輪分しか得られない。（小）道管は初め単独または数個が複合するが、のち接線方向に帯状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1～10細胞幅、1～50細胞高でさや状の細胞 (sheath-like cells) が認められる。柔組織は周囲状および帯状。

フジキ属にはフジキ (*Cladrastis platycarpa*)、ユクノキ (*C. sikokiana*) の2種がある。フジキは本州（福島県以南）・四国・対馬に、ユクノキは本州（群馬・富山県以西）・四国・九

州の山地に稀に分布する落葉高木である。材はやや重硬・強靭で、器具・家具・旋作・土木・薪炭材などに用いられることがある。

・サカキ (*Cleyera japonica*) ツバキ科 No.61.

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2~3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段の数は20前後。放射組織は異性II~I型、1~2細胞幅、1~20細胞高。柔組織は散在状。年輪界は不明瞭。

サカキは、本州（新潟・茨城県以西）・四国・九州・琉球に自生するとされる常緑高木で、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、神社などに植栽される。このため本来の自生北限は明らかではない。材は重硬・強靭で、割裂しにくく加工は困難。建築・器具材としても用いられるが、薪炭材として一般的である。枝葉を玉串として用いることでも知られる。

4. 考察

同定した65点のうち自然木は1点のみで残る64点は加工材である。使用樹種はアカガシ亜属（カシ類）が最も多く、次いでヤブツバキ（10点）、コナラ節（コナラと考える）（6点）、クスノキ科（5点）などとなっている。この結果から、これらの材料を供給したであろう森林は暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）であったと考える。ただし、木製品およびその原木は、時にかなりの遠方からも搬入されることがあり、出土地周辺に照葉樹林が成立していたとは断言できない。

次に主な用材をみてみよう。

・柄

石斧と鋤の柄各1点があるが、ともにカシ類を用いている。

・椀

3点があり、クリ（2点）・オニグルミ（1点）であった。容器とともにいずれも現在と同様の用材例である。

用途不明のものの中で、No.57はスギを用いている。針葉樹の使用例は、2点を含めて4種類（Taxa）6点しかなく、広葉樹では代用できないような特殊な用途に用いられたものかもしれない。

以上みてきたように、弥生～古墳時代を通じて、遺跡周辺には照葉樹林が成立していたことは、ほぼ確実と考える。（奈良時代以降は試料数が少なく判断できない）。試料の多くは、その森林から採取されたものであろう（ただし、弥生時代後期以降、ヤブツバキの使用例がほとんどなくなる点には、疑問が残る）。そして、それぞれの樹種の材質・特性を熟知した上で、用材を選択していることがうかがえる。

*：当遺跡の東約70kmに位置する姫路市長越遺跡（弥生時代後半～古墳時代前期中葉と推

百間川米田遺跡 3

定される)では、スギ・ヒノキ材の検出数が多く(鳴倉 1978)、花粉分析結果でもスギなど温帯性のものがかなり出現し、典型的な暖帯林の要素がやや少ないとから、現在よりやや冷涼な気候が推定され(中西・前田・松下 1978)、当遺跡での推定とはやや異なっている。この問題の解明には、今後のデータの蓄積が必要である。

5. 引用文献

- 中西 哲・前田 保夫・松下まり子 (1978) 総合的考察による古環境の復元, 兵庫県文化財調査報告書 第12冊 「姫路バイパス建設工事に伴う播磨・長越遺跡—昭和49・50年度調査報告書—(本文編)」, 兵庫県教育委員会, pp.378-382.
- 鳴倉 巳三郎 (1978) 長越遺跡から出土した木質物の樹種の説明, 兵庫県文化財調査報告書 第12冊 「姫路バイパス建設工事に伴う播磨・長越遺跡—昭和49・50年度調査報告書—(本文編)」, 兵庫県教育委員会, pp.357-371.

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
百間川米田遺跡（旧当麻遺跡）3
(本文)
1989年9月20日 印刷
1989年9月30日 発行
編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発行 建設省岡山河川工事事務所
岡山市鹿田町2-4-36
岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印刷 西日本法規出版株式会社
岡山市高柳西町1-23

百間川米田遺跡 3 (旧当麻遺跡)

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 VII
(表・図版)

1989

建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

百間川米田遺跡出土遺物一覽表

- 1 百間川米田遺跡出土土器觀察表
- 2 木器一覽表
- 3 石器一覽表
- 4 鉄器一覽表
- 5 銅器一覽表
- 6 骨角器一覽表
- 7 土錘一覽表
- 8 土器転用土製円盤一覽表
- 9 動物遺体同定資料一覽表
- 10 種子同定資料一覽表

凡例

- 1 土器の残存率は口縁部のそれを示す。
- 2 木器・石器・鉄器・銅器・土錘・土製円盤の各一覧表では、掲載図・遺物番号が本報告書での番号にあたる。
- 3 時代は遺構の年代を示し、遺物の年代ではない。
- 4 石器の型式は次のとおりである。

錘 I : 両端を打ち欠いたもの

II : 周囲に溝を穿ったもの

III : 周囲に打撃を行ったもの

鎌 『百間川沢田遺跡 2 長谷遺跡 2』 第6章第2節の分類による。

I : 平基式 II : 凹基式 III : 円基式 IV : 有茎鎌 V : 凹基抉入り

VI : 木葉形尖茎式

- 5 銅器のうち、錢貨の型式は『下右田遺跡 第4次調査概報・総括』の分類による。
- 6 土錘の型式分類は表末に記す。
- 7 動物遺体・種子の同定は一部（付載1～4）を除き、非専門家による推定である。

百間川米田遺跡出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器類	法量(cm)			特徴	備考
				口径	底径	器高		
1	竪穴住居 1 0 1	弥生土器					柳端による沈線と波状文。	
2	竪穴住居 1 0 1	弥生土器					柳端による沈線と波状文。	
3	竪穴住居 1 0 1	弥生土器					柳端による沈線と波状文。	
4	竪穴住居 1 0 1	弥生土器					柳端による沈線と波状文。	
5	竪穴住居 1 0 1	弥生土器		8.1			外面へラミガキ、内面ナデ。	1 / 4
6	竪穴住居 1 0 1	弥生土器					外面へラミガキ。	
7	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	甌	14.2	5.1	15.4	口縁部は外方に折れ曲がり、端部は丸い。脚部外側タタキ後ヘラミガキ。	1 / 3 排水溝
8	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	甌	16.5			口縁端部が上方へ折れ曲がる。	1 / 4 排水溝
9	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	甌	17.0			口縁端部が上方へ折れ曲がる。	1 / 4 排水溝
10	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	高杯					排水溝
11	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	高杯					排水溝
12	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	高杯					排水溝
13	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	高杯					排水溝
14	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	高杯					排水溝
15	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	甌?	5.5				排水溝
16	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	甌	6.2				排水溝
17	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	直口甌					排水溝
18	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	甌	5.3	2.5	7.0	外面へラミガキ、内面指頭後ナデ。	1 / 4 排水溝
19	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	高杯					中央穴
20	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	高杯					中央穴
21	竪穴住居 1 0 3	弥生土器	高杯	18.1			杯部は丸く、外反した口縁端部は丸い。	1 / 2 中央穴
22	魁物 1 0 6	弥生土器	甌	15.8				
23	井戸 1 0 1	土師器	甌	12.2			くの字口縁。脚部荒いハケでスス付着。内面ヘラケナデ。	1 / 8 完存
24	井戸 1 0 1	土師器	甌	13.0	4.6	21.8	くの字口縁。頭へ脚部タタキのちハケ。内面押圧ヘラケナデ。口縁内面ハケナデ。	

番号	遺構名	種別	器軸	法量(cm)		特徴	微	残存率	備考
				口径	底径				
25	井戸101	土師器	甕	15.2		口縁断面に8~9本の輪溝芯線。胸部ハケののちヘラミガキ。肩部に刺突文2個。内面押圧とヘラケズリ。		底部欠	1/2
26	井戸101	土師器	小鉢	17.0	4.2	8.8 外面は荒いハケと一部にタタキ→押圧→細いヘラミガキ(下半)。内面おもに押圧。底の一部は二段的な火を受けて剝離。肩部を除く外面にスス付着。			
27	井戸102	土師器	壺	5.8		頭部に暗文風ヘラミガキ。		1/4	
28	井戸102	土師器	甕	17.0		荒くて深いハケ。		1/8	
29	井戸102	土師器	鉢	40		内面に細かいハケ。		1/12	
30	井戸102	土師器	小鉢?	3.0		底完存			
31	井戸102	土師器	?	4.8		胎土は高杯に似る。		底完存	
32	井戸102	土師器	高杯						
33	井戸102	土師器	高杯	25.8					
34	井戸103	土師器	甕	19.5				1/5	
35	井戸103	土師器	甕	19.0		頸部外面はハケ状工具のミガキ効果。		1/5	
36	井戸103	土師器	甕	15.8		25.6 肩部に粗い窓方向のハケ 目。胎土は白っぽく、砂粒は目立たない。		頭部完	
37	井戸103	土師器	小甕	7.0	5.5	15.6 肩部に粗い窓方向のハケ 目。胎土は白っぽく、砂粒は目立たない。 胎土は大粒の砂粒は含まず、細かい雲母を含む。		復元完	
38	井戸103	弥生土器	甕	15.0				山絵系	
39	井戸103	土師器	甕			粗いタタキ。		口1/2欠	
40	井戸103	土師器	甕			粗いタタキ。肩部に線刻。		1/8	
41	井戸103	土師器	甕	16.0				1/10	
42	井戸103	土師器	甕					底完存	
43	井戸103	組製土器	台付鉢		3.8			台2/3	製造土器
44	井戸103	弥生土器	高杯		10.7			脚部完	
45	井戸103	弥生土器?	高杯	17.5		口縁部外面および杯立ち上がり部外面上に複数な輪溝波状文。		1/4	
46	井戸103	土師器	小甕	11.3	3.2	14.4 全体に雜なつくり。		1/2	
47	井戸103	土師器	壺			内外面粗いハケ。		3/4	

番号	遺 墓 名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
48	井戸1 0 3	土師器	壺	14.8				1/3	
49	井戸1 0 3	土師器?	壺	20.0				1/3	
50	井戸1 0 3	土師器?	壺	7.5				ほぼ完	
51	井戸1 0 3	土師器?	高杯	14.4				1/4	
52	井戸1 0 3	土師器?	小鉢	8.8	2.3	7.0		完存	
53	井戸1 0 3	土師器	甕	14.8	4.4	20.9	脣部中央タタキ、底部と肩部ハケ。	1/2	
54	井戸1 0 3	土師器	甕	4.2			脣部中央タタキ、底部部分的にハケ。	1/3	
55	井戸1 0 3	土師器?	甕	4.3					
56	井戸1 0 3	土師器	甕	15.5	5.2	22.3	脣部下半にタタキ。	ほぼ完	
57	井戸1 0 3	土師器	甕	4.4				2/3	
58	井戸1 0 3	土師器	甕	14.4			脣部から底部まで粗いハケ、内部にアワ状の炭化物。	ほぼ完	
59	井戸1 0 3	土師器	甕	5.6			脣部から底部まで粗いハケ、内部にアワ状の炭化物。	2/3	
60	井戸1 0 3	土師器	甕	13.5				1/6	
61	井戸1 0 3	土師器	甕	15.5				1/6	
62	井戸1 0 3	土師器	甕	15.4	4.5	24.7	内面わずかに米の炭化物付着。	ほぼ完	
63	井戸1 0 3	土師器	甕	15.4	4.6	25.0	内面わずかに米の炭化物付着(最大5.2×2.3 cm)。脣部に刺突文1個。	ほぼ完	
64	井戸1 0 3	土師器	甕	13.4	3.2	19.3	内面わずかに米の炭化物付着。頸部に繊維質のひも、2か所に結目。脣部下に穿孔。	完存	
65	井戸1 0 3	土師器	甕	15.2	4.0	22.4	内面わずかに米の炭化物付着。	2/3	
66	井戸1 0 3	土師器	甕	15.4	4.2	23.7	内面わずかに米の炭化物付着。	ほぼ完	
67	井戸1 0 4	土師器	甕	19.6				1/6	
68	井戸1 0 4	土師器	甕	21.2				1/15	
69	井戸1 0 5	弥生土器	鉢	20.2	5.3	9.5	内面に鹿と3本の弧線などが細い鋭利な工具で描かれている。	2/3	
70	井戸1 0 5	弥生土器	甕	10.8			ヨコナデ。	1/5	
71	井戸1 0 5	弥生土器	甕	7.0			ハケのうちヘラミガキ。	1/2	
72	井戸1 0 5	弥生土器	甕					1/3	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	微	残存率	備考
				口径	底径	器高				
73	井戸105	弥生土器	甕	13.0					1/5	
74	井戸105	弥生土器	甕	14.2					1/5	
75	井戸105	弥生土器	甕	11.7					1/6	
76	井戸105	弥生土器	甕	13.7					1/4	
77	井戸105	弥生土器	甕	16.0					1/5	
78	井戸105	弥生土器	甕	9.3			外面指頭圧痕と細かいハケ。		1/2	
79	井戸105	弥生土器	甕	11.0					1/6	
80	井戸105	弥生土器	甕	6.2						底部完
81	井戸105	弥生土器	甕	5.4						底部完
82	井戸105	弥生土器	直口壺	8.4						1/4
83	井戸105	弥生土器	小鉢	10.8	3.2	6.6	部わざかにヘラヶズり。			1/2
84	井戸105	弥生土器	高杯	17.0			小鉢の可能性もある。表面磨滅。			1/8
85	井戸105	弥生土器	高杯	18.8			内面細いヘラミガキ。			1/2
86	井戸105	弥生土器	高杯	20.2			内面細いヘラミガキ。			
87	井戸105	弥生土器	高杯	18.1						1/7
88	井戸105	弥生土器	高杯							2/3
89	井戸105	弥生土器	高杯			11.3				3/5
90	井戸105	弥生土器	器台?	18.0			口縁端面に鋸歯文。			1/6
91	井戸105	弥生土器	小鉢		2.5		胎土は高杯に似る。			底部完
92	井戸105	弥生土器	小鉢		4.4		胎土は高杯に似る。底面にもヘラミガキ。			2/5
93	井戸106	弥生土器	壺	15.0			口縁受け部に鋸歯文。			口部完
94	井戸106	弥生土器	甕	10.3						1/5
95	井戸106	弥生土器	高杯	16.4						1/5
96	井戸106	弥生土器	高杯	18.8						1/4
97	井戸107	土師器	壺	18.8						1/4

番号	遺構名	断別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
98	井戸1 0 7	土師器	壺	14.0			肩部に縦方向の深いハケ目。	1/5	山陰系
99	井戸1 0 7	土師器	壺	16.5				1/4	
100	井戸1 0 7	土師器	壺				肩部に長楕円の列点文とその下に細い沈線が続く。外面丹塗り。	1/4	
101	井戸1 0 7	土師器	壺				胎土は高杯に似る。	1/2	
102	井戸1 0 7	土師器	甕	15.4	42	22.3	頸部に織維状のひもが残存。	完存	
103	井戸1 0 7	土師器	甕	4.4			外面へラミガキか?	底部完	
104	井戸1 0 7	土師器	甕				粗いタタキ。		
105	井戸1 0 7	土師器	甕				粗いタタキ。	1/3	
106	井戸1 0 7	土師器	甕				底部はタタキのちへラで削り取っている。	底部完	
107	井戸1 0 7	土師器	鉢				外面タタキのちハケ。		
108	井戸1 0 7	土師器	鉢	10.6			外面タタキのちハケ。	1/3	
109	井戸1 0 7	土師器	壺	5.0				1/6	
110	井戸1 0 7	土師器	台付鉢	4.6			指頭圧痕が顯著。	口欠掘	
111	井戸1 0 7	土師器	高杯	5.5	7.0	5.4	ミニチュア。	1/2	
112	井戸1 0 7	土師器	小形器台	8.0			胎土は高杯に似る。	体部完	
113	井戸1 0 7	土師器	高杯	19.2				1/4	
114	井戸1 0 7	土師器	高杯						
115	井戸1 0 7	粗製土器	台付鉢	4.4					製埴土器
116	井戸1 0 7	土師器	鼓形器台	14.8			外面に縦方向の3本のヘラ引き沈線。	1/6	
117	井戸1 0 7	土師器	甕	14.0	4.3	22.6	頸部に細い網状織維。	ほぼ完	
118	井戸1 0 8	弥生土器	甕	15.4			外面に織なタタキ。	1/4	
119	井戸1 0 8	弥生土器	甕				胎土に1~3mmの長石・石英粒が目立つ。	1/8	
120	井戸1 0 8	弥生土器	甕	5.6			胎土に砂粒をほとんど含まない。内面および外部外面に粗いハケ。	1/2	
121	井戸1 0 8	弥生土器	小鉢	13.0	6.0	4.7	底部近くにタタキ?	1/4	
122	井戸1 0 8	粗製土器	台付鉢	4.0				2/3	製埴土器

番号	遺構名	類別	器種	法量(cm)		特徴	残存率	備考
				口径	底径			
123	井戸108	粗製土器	台付鉢	4.2			2/3	製造土器
124	井戸108	粗製土器	鉢	15.0		胎土は堅土器に似る。	1/8	
125	井戸109	土師器	土師器	10.7			1/4	
126	井戸109	土師器	甕	14.0			1/4	
127	井戸109	土師器	鉢	23.7			1/5	
128	井戸111	弥生土器	甕	13.2	5.4	22.2 腹部上半へケ目、下半へラミガキ、底面もヘラミガキ。	4/5	
129	井戸111	弥生土器	甕	17.8		肩部より上はハサ目、下はヘラミガキ。	1/4	
130	井戸111	弥生土器	甕	13.4			1/6	
131	井戸111	弥生土器	甕	15.8			1/6	
132	井戸111	弥生土器	甕	17.2		口縁部下端が突出する。	1/8	
133	井戸111	弥生土器	甕	17.2		口縁部下端が突出する。	1/2	
134	井戸111	弥生土器	鉢	31.0			1/16	
135	井戸111	弥生土器	高杯	14.5	9.8	7.8 口縁部は直立し外面上に沈線、脚端部は丸い。	2/3	
136	井戸111	弥生土器	高杯	13.2	8.3	6.9 口縁部は外反、杯部は外外面へラミガキ。	4/7	
137	井戸111	弥生土器	高杯					
138	井戸111	弥生土器	高杯					
139	井戸111	弥生土器	高杯					
140	井戸111	弥生土器	高杯	16.8		口縁部は直立し、外面上に浅い沈線、内外面へラミガキ。	4/5	
141	井戸111	弥生土器	高杯	15.6		内外面へラミガキ。	口径1/5	
142	井戸111	弥生土器	高杯			口縁部を欠くが直立するものである。		
143	井戸111	弥生土器	高杯	21.8		口縁部は外反し、内外面へラミガキ。		
144	井戸111	弥生土器	直口壺	8.7		口縁部に向けて細くなる。	2/3	
145	井戸111	弥生土器	直口壺	8.0		外面はタテ方向、内面はヨコ方向のヘラミガキ。	口径1/2	
146	井戸111	弥生土器	鉢	10.8		胴部外面へラゲズリ後へラミガキ。	1/4	
147	井戸111	弥生土器						

番号	遺 帯 名	種別	器類	法量 (cm)			特 徴			保存状	備 考
				口径	底径	器高					
148	井戸 1.1.1	弥生土器	鉢	4.1							製塗土器
149	井戸 1.1.1	弥生土器	甌								
150	井戸 1.1.1	弥生土器	鉢	17.9	5.6	5.4	口縁部はほぼ直立。				
151	井戸 1.1.1	弥生土器	甌				口縁端部が上方へ折れ曲がる。				1 / 6
152	井戸 1.1.1	弥生土器	甌	14.5			口縁端下端が突出する。				1 / 4
153	井戸 1.1.1	弥生土器	甌	14.5			口縁端下端が突出する。腹部外面ハケ目、内面へラヶズリ。				1 / 2
154	井戸 1.1.1	弥生土器	甌	15.5			口縁端部下端に段をもつた突出しない。				
155	井戸 1.1.1	弥生土器	甌	12.2	6.0	26.9	口縁端部は上方へ折り曲がり、下端に光線、下半はヘラミガキ。				1 / 4
156	井戸 1.1.1	弥生土器	甌	14.7	5.0	24.9	口縁端部が少し肥厚する。体部外面、底部はハケ目。				9 / 10
157	井戸 1.1.1	弥生土器	甌		4.3		外面、底面ハケ目。				1 / 2
158	井戸 1.1.1	弥生土器	甌		5.2		外面、底面ヘラミガキ。				2 / 5
159	井戸 1.1.1	弥生土器	甌		3.0		底部もヘラミガキ。				
160	井戸 1.1.1	弥生土器	甌		1.9		外面ハケ目、内面へラヶズリ。				
161	井戸 1.1.1	弥生土器	甌	6.2			内外面ヘラミガキ、外面下半にタタキの痕跡。				
162	井戸 1.1.1	弥生土器	鉢	5.0	3.0	4.7	外面ナデ、内面ハケ目。				1 / 5
163	井戸 1.1.1	弥生土器	鉢	8.7			上半はタタキ、下半はヘラヶズリ。				1 / 4
164	井戸 1.1.1	弥生土器	鉢	4.1			胴部外面ヘラヶズリ。				1 / 2
165	井戸 1.1.1	弥生土器	甌	17.0			口縁端部が上下に拡張。				1 / 8
166	井戸 1.1.1	弥生土器	甌	19.7			口縁端部が上下に拡張。				2 / 3
167	井戸 1.1.1	弥生土器	甌	20.0			口縁端部が上下に拡張、外面ハケ目後ヘラミガキ。				1 / 2
168	井戸 1.1.1	弥生土器	甌				外面上半はハケ目、下半はヘラミガキ、内面は丁寧なヘラヶズリ。				
169	井戸 1.1.1	弥生土器	高杯								
170	井戸 1.1.1	弥生土器	高杯	17.9	11.0	8.2	外面上こまかなくヘラミガキ。				
171	井戸 1.1.1	弥生土器	高杯	23.0							1 / 4
172	井戸 1.1.1	弥生土器	直口甌		2.5		外面上こまかいヘラミガキ。				

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	微	残存率	備考
				口径	底径	器高				
173	井戸1 1 1	弥生土器	直口壺				胴部は扁平。			
174	井戸1 1 1	弥生土器	直口壺	9.3			外面へラミガキ、胴部内面は指頭圧とハケ目。			脚付
175	井戸1 1 1	弥生土器		17.3						1/3
176	井戸1 1 1	弥生土器	甕	13.6	4.6	19.8	口縁部は外反し、端部は肥厚しない。外面ハケ目、内面へラケダリ。			3/4 内面炭化米付着
177	井戸1 1 1	弥生土器	甕	14.8	4.5	25.3	口縁部は外反し、端部が少し肥厚する。外面ハケ目、内面へラケダリ。			ふきこぼれ痕
178	井戸1 1 1	弥生土器	甕	15.2	4.8	23.7	口縁部は外反し、端部が少し肥厚する。外面タタキ後ハケ目。			完形
179	井戸1 1 1	弥生土器	甕	13.5	4.0	21.4	口縁端が上方に拡張。外面上半はハケ目、下半はヘラミガキ。			完
180	井戸1 1 1	弥生土器	甕	14.9	4.6	23.7	口縁端が上方に拡張。外面は板状工具によるナデ。			完
181	井戸1 1 1	弥生土器	甕	15.8	5.0	24.7	口縁端が上方に拡張。外面は板状工具によるナデ。			完形
182	井戸1 1 1	弥生土器	甕	14.0	5.3	21.1	口縁端が上方に拡張。外面は板状工具によるナデ。			3/4
183	井戸1 1 1	弥生土器	甕	13.7			口縁端が上方に拡張。外面ヘラミガキ。			1/3
184	井戸1 1 1	弥生土器	甕	13.6			口縁端が上方に折れ曲がる。外面ハケ目とヘラミガキ。			1/2
185	井戸1 1 1	弥生土器	甕	13.8	5.5	26.8	口縁端が上方に折れ曲がる。外面下半はヘラミガキ。			完形
186	井戸1 1 1	弥生土器	甕	12.4			胴部外面タタキ後ハケ目。			1/3
187	井戸1 1 1	弥生土器	甕	19.3	5.4	34.0	口縁部が上方に折れ曲がる。			完形
188	井戸1 1 1	弥生土器	甕		7.4					
189	井戸1 1 1	弥生土器	甕		7.2					
190	井戸1 1 1	弥生土器	鉢		6.2					
191	井戸1 1 1	弥生土器	甕		4.7					製陶土器
192	井戸1 1 1	弥生土器	甕	8.7	3.0	8.7	外面タタキ後ヘラミガキ、内面へラケダリ後ヘラミガキ。			完形
193	井戸1 1 1	弥生土器	鉢	51.4			外面ハケ目、内面ハケ目後ヘラミガキ。			1/8
194	井戸1 1 1	弥生土器	鉢				外面へラミガキ、内面へラケダリ後ヘラミガキ。			1/10以下
195	井戸1 1 2	土師器	甕		4.2		わずかに底部が認められる。			内面に炭化米付着
196	井戸1 1 2	土師器	甕	14.9	2.8	24.8	わずかに底部が認められる。口縁部縦描丸線。			完
197	井戸1 1 2	土師器	甕	17.6	3.7	24.6	底部へラミガキ、口縁部縦描丸線。			完

番号	遺構名	種別	器瓶	法量(cm)		特徴	残存率	備考
				口径	底径			
198	井戸1 1 2	土師器	甕	14.3	2.8	20.8 底部へラミガキ、口縁部輪描沈線。	完	外面媒付着
199	井戸1 1 2	土師器	甕	15.0	3.4	24.1 底部へラミガキ、口縁部輪描沈線。	完	外面媒付着
200	井戸1 1 2	土師器	甕	13.8	3.8	23.2 底部へラミガキ、口縁部輪描沈線。	9/10	外面媒付着
201	井戸1 1 2	土師器	甕	14.8	3.8	13.4 底部へラミガキ、口縁部輪描沈線。	完	外面媒付着
202	井戸1 1 3	土師器	甕	15.2		口縁部輪描沈線。	1/4	
203	井戸1 1 3	土師器	甕	14.1		外面上半はヘメ目、下半はヘラミガキ。	9/10	
204	井戸1 1 4	土師器	甕	20.7			1/7	
205	井戸1 1 4	土師器	甕	13.2		口縁部外面に輪描沈線文。	1/4	外面媒
206	井戸1 1 4	土師器	甕	13.2	18.8	口縁部外面に輪描沈線文。肩部に3個の刺突。	完	外面本体下部下半媒
207	井戸1 1 4	土師器	甕	13.3		口縁部外面に輪描沈線文。	3/4	外面媒
208	井戸1 1 4	土師器	甕			外面タキ。		
209	井戸1 1 4	土師器	甕			外面ハケメのらへラミガキ。底部内面指頭押さえのちへラカズリ。	3/4	外面媒
210	井戸1 1 4	土師器	甕	14.0		口縁部外面に輪描沈線文。	1/4	外面媒
211	井戸1 1 4	土師器	甕	15.2		口縁部外面に輪描沈線文。	1/3	外面媒
212	井戸1 1 4	土師器	甕	14.8		口縁部外面に輪描沈線文。	1/4	外面媒
213	井戸1 1 4	土師器	甕	15.6		口縁部外面に輪描沈線文。	1/5	外面媒
214	井戸1 1 4	土師器	甕	14.8		口縁部外面に輪描沈線文。	1/5	外面媒
215	井戸1 1 4	土師器	甕	15.2			1/4	
216	井戸1 1 4	土師器	甕	17.0			1/4	外面媒
217	井戸1 1 4	土師器	甕	15.1			1/10	外面媒
218	井戸1 1 4	土師器	甕			底部内面指頭押さえのちへラカズリ。	完	外面媒
219	井戸1 1 4	土師器	高杯				1/2	
220	井戸1 1 4	土師器	高杯	12.0			1/8	
221	井戸1 1 6	弥生土器	甕	15.9	4.6	22.5 口縁部は外方に折れ曲がり、端部はほとんど肥厚しない。	5/6	媒付着
222	井戸1 1 6	弥生土器	甕	17.6	5.6	25.6 口縁部は外方に折れ曲がり、端部はほとんど肥厚しない。		媒付着

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
223	井戸 1 1 6	弥生土器	甕	12.1			口縁部が上方に膨張。外面ハケ目後ヘラミガキ。	1 / 2	煤付着
224	井戸 1 1 6	弥生土器	甕	12.9	2.6	18.8	口縁部が上方に膨張。外面ハケ目。	完	煤付着
225	井戸 1 1 6	弥生土器	甕	14.7	4.7	24.4	口縁部が上方に膨張。口縁部端面に2条の浅い凹線。	完	煤付着
226	井戸 1 1 6	弥生土器	甕	14.2	4.7		口縁部に彌縫沈線。肩部下半はヘラミガキ。	2 / 3	煤付着
227	井戸 1 1 6	弥生土器	甕	14.2			口縁部が立ち上がる。口縁端部下端が突出する。	完	煤付着
228	井戸 1 1 6	弥生土器	甕	14.8	5.9	26.2	口縁部が立ち上がる。口縁端部下端が突出する。	1 / 2	煤付着
229	井戸 1 1 6	弥生土器	甕		5.9		底部ヘラミガキ。		煤付着
230	井戸 1 1 6	弥生土器	甕		5.2				煤付着
231	井戸 1 1 7	土師器	甕	15.6	3.5	24.7	口縁部外面は瘤描き沈線。外面のヘラミガキは密。	1 / 3	
232	井戸 1 1 7	土師器	壺		4.0		外面はタタキ成形の後、ハケを密に施す。内面はナデ。内面に接合痕顯著。	口縁欠	
233	土壇 1 0 1	弥生土器	高杯				水滲し粘土。	柱部完	
234	土壇 1 0 2	弥生土器	甕	14.4				1 / 5	
235	土壇 1 0 2	弥生土器	高杯		12.0			脚端欠	
236	土壇 1 0 3	弥生土器	高杯					1 / 2	
237	土壇 1 0 3	弥生土器	甕	15.7				1 / 3	
238	土壇 1 0 5	弥生土器	壺	15.4			外面の一部にタタキ、胎土に石英を多く含む。	1 / 4	
239	土壇 1 0 5	弥生土器	壺	15.2	8.8	27.0	胎土に大粒の長石・石英。	ほぼ完	
240	土壇 1 0 5	弥生土器	壺	17.6			外面の一部にタタキ、胎土に石英を多く含む。	1 / 2	
241	土壇 1 0 5	弥生土器	壺	10.0	4.8	18.0	口縁部に貼付浮文。胎土に1mm以上の砂粒を含まない。外面の一部にスス。	3 / 4	
242	土壇 1 0 5	弥生土器	壺	13.2	3.6	14.5	肩部に貼付浮文。胎土に1mm以上の砂粒を含まない。外面の一部にスス。	3 / 4	
243	土壇 1 0 5	弥生土器	壺	17.6			胎土から12と同一個体か。	1 / 2	
244	土壇 1 0 5	弥生土器	壺		8.4		胎土に砂粒分が少ない。	1 / 3	
245	土壇 1 0 5	弥生土器	壺	20.6			頸部に螺旋状の沈線。	頸部完	
246	土壇 1 0 5	弥生土器	壺	20.2			頸部に螺旋状の沈線。肩部に刺突文。	1 / 2	
247	土壇 1 0 5	弥生土器	壺	8.8			頸部に螺旋状の沈線。	2 / 3	

番号	遺構名	種別	器體	法量(cm)		特徵	残存率	備考
				口径	底径			
248	土壇105	弥生土器	壺	15.4		頸部に沙縁をもたない。	1/3	
249	土壇105	弥生土器	壺	7.4		頸部に沙縁をもたない。肩部に刺突文。	2/3	
250	土壇105	弥生土器	壺	18.6		胎土から255と同一個体か。	上部完	
251	土壇105	弥生土器	壺	17.8		頸部にヘラ描き線刻。	口縁完	
252	土壇105	弥生土器	壺	15.8	7.3	胎土に1mm以下の長石がとくに目立つ。	2/3	
253	土壇105	弥生土器	壺					
254	土壇105	弥生土器	壺	8.6		破片の盤は口縁部を除き、ほぼ一個体分有。胎土に大粒の長石・石英を多く含む。	各3/4	
255	土壇105	弥生土器	壺	9.0			底部完	
256	土壇105	弥生土器	甕	15.3	5.2	胎土に鉢分粒が多い。	ほぼ完	
257	土壇105	弥生土器	甕	12.0			口縁完	
258	土壇105	弥生土器	甕	25.2	7.3	31.5 良く使用され痛みが激しい。	ほぼ完 図上復元	
259	土壇105	弥生土器	甕	12.8			1/3	
260	土壇105	弥生土器	甕	14.6		胎土に大粒の長石が目立つ。	1/4	
261	土壇105	弥生土器	甕	15.7	6.0	25.0	底部欠	
262	土壇105	弥生土器	甕	15.0	5.6	12.8 外面の剝離面にもスス付着。胎土に3~4mmの石英を含むが数は少ない。	ほぼ完	
263	土壇105	弥生土器	甕	6.5			2/3	
264	土壇105	弥生土器	甕	4.0			2/3	
265	土壇105	弥生土器	甕	11.6			1/2	
266	土壇105	弥生土器	甕	15.3	6.6	33.0 外面ハケ目のみ。全体的に痛みが激しい。	ほぼ完	
267	土壇105	弥生土器	甕	15.2	6.0	26.0 底部穿孔。	ほぼ完	
268	土壇105	弥生土器	甕	13.2	4.0	17.0 241・242とよく似た胎土。	1/2	
269	土壇105	弥生土器	甕	12.8	21.1	4.8 底部部分的に赤変。	1/3 図上復元	
270	土壇105	弥生土器	甕	4.6		底部部分的に赤変。	1/2	
271	土壇105	弥生土器	甕	15.2			1/4	
272	土壇105	弥生土器	甕	12.4		全体に調整が粗い。	1/3	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
273	土壇1 0 5	弥生土器	甕	12.2	5.5	21.8	胎土の砂粒は0.3mm以下。	ほぼ完	
274	土壇1 0 5	弥生土器	甕	12.8			胎土に2mm前後の砂粒多い。	口縁完	
275	土壇1 0 5	弥生土器	甕	13.2	6.0	21.3	胎土に1～2mmの長石・石英が非常に多い。	ほぼ完	
276	土壇1 0 5	弥生土器	高杯	19.4				2/3	
277	土壇1 0 5	弥生土器	高杯	20.0			外面縦方向の暗風へラミガキ。	1/4	
278	土壇1 0 5	弥生土器	高杯	22.0			胎土の水漉度は上の2着より悪い。	1/8	
279	土壇1 0 5	弥生土器	高杯	11.0			二次的な火を受けている。	2/3	
280	土壇1 0 5	弥生土器	高杯				胎土に砂粒が比較的多く、表面のミガキが一部ケズリになっている。	端部欠	
281	土壇1 0 5	弥生土器	高杯	10.6				1/3	
282	土壇1 0 5	弥生土器	高杯	12.4				1/3	
283	土壇1 0 5	弥生土器	高杯	10.1	8.9	5.6		ほぼ完	
284	土壇1 0 5	弥生土器	高杯	15.2				2/3	
285	土壇1 0 5	弥生土器	小鉢	16.0				1/8	
286	土壇1 0 5	弥生土器	小鉢	16.0	4.6	6.3		1/2	
287	土壇1 0 5	弥生土器	小鉢	15.0	5.5	7.4		3/5	
288	土壇1 0 5	弥生土器	浅鉢	30.6	12.0	8.3	胎土は比較的均一な微砂粒を含み、黄褐色～暗茶色を呈す。241・242と似る。	2/5	
289	土壇1 0 5	弥生土器	鉢	40.5				1/15	
290	土壇1 0 5	弥生土器	鉢	29.0			胎土中の砂粒は細かい。	1/3	
291	土壇1 0 5	弥生土器	鉢	30.0	9.0	15.8	胎土に1～5mmの長石・石英が目立つ。外面にススと内面にこげ痕跡を有す。	ほぼ完	
292	土壇1 0 5	弥生土器	鉢					1/10	
293	土壇1 0 5	弥生土器	鉢					1/10	
294	土壇1 0 5	弥生土器	台付鉢	17.2	5.5	8.8	胎土は麁に似る。	ほぼ完	
295	土壇1 0 6	弥生土器	甕				口縁部近くに円形浮文。		
296	土壇1 0 6	弥生土器	甕				内面へラミガキ。		
297	土壇1 0 6	弥生土器	甕				胎土に1～4mm大の砂粒多し。	1/8	

番号	遺 器 名	種別	器類	法量 (cm)		特 徴	微	残存率	備 考
				口径	底径				
298	土壇 1 0 8	弥生土器	甌	12.1				1 / 3	
299	土壇 1 0 8	弥生土器	甌	15.4		胎土に 0.5mm 以下の砂粒を微量含む。		1 / 6	
300	土壇 1 0 8	弥生土器	甌		8.0			1 / 2	
301	土壇 1 0 8	弥生土器	高杯		13.4			1 / 4	
302	土壇 1 0 9	弥生土器	甌			胎土は細かく密。		1 / 9	
303	土壇 1 1 0	弥生土器	甌			内面へラミガキが顯著。		1 / 6	
304	土壇 1 1 0	弥生土器	甌					破片	
305	土壇 1 1 2	弥生土器	甌					破片	
306	土壇 1 1 2	弥生土器	甌					破片	
307	土壇 1 1 2	弥生土器	甌			上と同一個体か。		破片	
308	土壇 1 1 2	弥生土器	甌		6.8			2 / 3	
309	土壇 1 1 3	弥生土器	甌			列点文と柳描き沈線文。		破片	
310	土壇 1 1 3	弥生土器	甌			柳描き平行沈線文。		破片	
311	土壇 1 1 3	弥生土器	甌			柳描き平行沈線文+波状文。		破片	
312	土壇 1 1 3	弥生土器	甌					1 / 10	
313	土壇 1 1 4	弥生土器	甌					破片	
314	土壇 1 1 4	弥生土器	甌			柳描き沈線文+波状文+刺突文。		破片	
315	土壇 1 1 4	弥生土器	甌			柳描き沈線文+刺突文。		破片	
316	土壇 1 1 4	弥生土器	甌	17.6				1 / 5	
317	土壇 1 1 4	弥生土器	甌	19.6				1 / 3	
318	土壇 1 1 4	弥生土器	甌	19.0		頸部に穿孔。		1 / 4	
319	土壇 1 1 4	弥生土器	甌					破片	
320	土壇 1 1 4	弥生土器	甌	23.9		柳描き平行沈線文+波状文。		1 / 2	
321	土壇 1 1 4	弥生土器	甌	5.4				底部完	
322	土壇 1 1 4	弥生土器	甌	6.0				1 / 5	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)		特徴	残存率	備考
				口径	底径			
323	土壇1.4	弥生土器	壺	8.7		内外面ともに磨滅。	底部完	
324	土壇1.4	弥生土器	甕	8.6			1/3	
325	土壇1.5	弥生土器	甕	8.0		櫛描き沈線文+同波状文+列点文。	1/5	
326	土壇1.5	弥生土器	壺			櫛描き沈線文+同波状文+列点文。	1/6	
327	土壇1.5	弥生土器	壺			櫛描き沈線文+同波状文+竹管文。	破片	
328	土壇1.5	弥生土器	壺			櫛描き沈線文+同波状文。	破片	
329	土壇1.6	弥生土器	甕	20.4		櫛描き沈線文+同波状文、肩部にヘラ記号。	1/2	
330	土壇1.5	弥生土器	甕	20.3			1/4	
331	土壇1.5	弥生土器	甕	21.0		2条の列点文。	1/8	
332	土壇1.5	弥生土器	甕	21.0	5.3	3条の列点文。	1/5 完	図上復元
333	土壇1.6	弥生土器	甕			列点文。	破片	
334	土壇1.6	弥生土器	甕			列点文+櫛描き沈線文。	破片	
335	土壇1.5	弥生土器	甕	5.6		底部穿孔。	底部落完	
336	土壇1.5	弥生土器	甕	5.7			1/4	
337	土壇1.5	弥生土器	甕	6.5		底部穿孔。	底部落完	
338	土壇1.7	弥生土器	高杯	18.0		杯部が深い。	脚1/2欠	
339	土壇1.7	弥生土器	高杯	16.6			脚鉢欠	
340	土壇1.7	弥生土器	高杯	13.5	10.5	8.5		
341	土壇1.7	弥生土器	高杯	18.4	10.9	9.1	完存	
342	土壇1.7	弥生土器	甕	14.6			1/6	
343	土壇1.7	弥生土器	台	13.3			1/7	
344	土壇1.7	弥生土器	甕	13.1	5.7	25.6 底面にもヘラミガキ。	3/5	
345	土壇1.7	弥生土器	甕	13.6	5.7	21.0 底部近くにタタキを残す。底面にもハケ。	完存	
346	土壇1.7	弥生土器	甕	14.6	4.4	20.7 底部近くにタタキを残す。底面にもハケ。	ほぼ完	
347	土壇1.7	弥生土器	台付甕	8.5	12.7	18.7	脚端欠	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
348	土壇1.1.7	弥生土器	高杯	18.4					脚鋸歎
349	土壇1.1.7	弥生土器	高杯	18.2			波状にヘラミガキ。	1/8	
350	土壇1.1.7	弥生土器	台付甕	10.0				1/3	
351	土壇1.1.7	弥生土器	甕	11.6			接合面より上は砂粒をほとんど含まない。下は2mm以下の砂粒を含む。	1/6	
352	土壇1.1.7	粗製土器	台付鉢	3.6			被燃剥落がみられる。		脚部完 製埴土器
353	土壇1.1.7	粗製土器	台付鉢	4.0			被燃剥落がみられる。		脚部完 製埴土器
354	土壇1.1.7	弥生土器	鉢	7.7					
355	土壇1.1.7	弥生土器	鉢	41.2				1/3	
356	土壇1.1.7	弥生土器	甕	13.0	4.2	23.2	外面平行タキのち、下半粗いヘラミガキ。		完存
357	土壇1.1.7	弥生土器	甕	18.2				1/8	
358	土壇1.1.7	粗製土器	台付鉢	3.6				3/4	製埴土器
359	土壇1.1.9	弥生土器	甕				ヘラ形沈線に似る。倒L字口縁。		
360	土壇1.1.9	弥生土器	甕				柳描沈線、倒L字口縁。		
361	土壇1.1.9	弥生土器	甕				柳描沈線。		
362	土壇1.1.9	弥生土器	甕				柳描沈線、円形浮文を5個単位に貼付。		
363	土壇1.1.9	弥生土器	甕				内外面ともヘラミガキ、倒L字口縁。		
364	土壇1.2.2	弥生土器	甕				柳描沈線と刺突文。		
365	土壇1.2.2	弥生土器	甕				口縁部はく字状に外反する。		
366	土壇1.2.3	弥生土器	甕				柳描沈線。		
367	土壇1.2.3	弥生土器	甕		5.0		指頭圧ヒナデが見られる。	1/6	
368	土壇1.2.4	弥生土器	甕				柳描沈線、倒L字口縁。		
369	土壇1.2.4	弥生土器	甕				柳描沈線の間に刺突文。		
370	土壇1.2.4	弥生土器	甕				口縁部がく字状に外反する。		
371	土壇1.2.4	弥生土器	甕	5.7			柳描沈線の下端に刺突文、下半はヘラミガキ。		
372	土壇1.2.6	弥生土器	甕				柳描沈線、波状文、刺突文が施される。		

番号	遺 墓 名	種 別	器 鮐	法量 (cm)			特 徴	現存率	備 考
				口径	底径	器高			
373	土壙 1 2 6	弥生土器	甕				柳葉沿線。		
374	土壙 1 2 6	弥生土器	壺				柳葉波状文。		
375	土壙 1 2 6	弥生土器	甕	23.1			口縁部は外方へ折れ曲がり、胴部には柳葉沿線。	1 / 6	
376	土壙 1 2 6	弥生土器	甕				口縁部は外方へ折れ曲がり、柳葉沿線の下端に刺突文。		
377	土壙 1 2 7	土師器	甕	15.1		14.3	底部は丸底。外面に指頭压痕かなり残る。内面ハケ状工具による調整。	完形	
378	土壙 1 2 8	土師器	壺	12.2			外面はヘラミガキか。内面はナデ。	1 / 4	
379	土壙 1 2 8	土師器	高杯	12.0			胎土は粗製粘土。	1 / 5	
380	土壙 1 2 8	土師器	鉢	14.6			外面は縱方向のヘラケズリの後、ナデか。	1 / 8	
381	土壙 1 2 8	土師器	高杯	12.1			胎土は粗製粘土。外面はヘケの後ヘラミガキ。	1 / 7	
382	土壙 1 3 0	弥生土器	甕	14.3				1 / 8	
383	土壙 1 3 1	弥生土器	甕	14.0				1 / 8	
384	土壙 1 3 1	弥生土器	甕	14.4				1 / 8	
385	土壙 1 3 1	弥生土器	甕	13.7				1 / 8	
386	土壙 1 3 1	弥生土器		4.7					
387	土壙 1 3 1	弥生土器	高杯						
388	土壙 1 3 1	弥生土器	高杯	8.9			外面ヘラミガキ。	1 / 3	
389	土壙 1 3 1	弥生土器	鉢	14.0	5.0	6.9	内面ヘラケズリ、外面指頭圧後ヘケ目。		
390	土壙 1 3 6	弥生土器	高杯				胎土に細砂粒少量含む。		
391	土壙 1 3 8	土師器	甕	14.7			口縁部外面は柳葉沿線か。	1 / 4	
392	土壙 1 3 9	弥生土器	甕				口縁端が上方へ折れ曲がる。		
393	土壙 1 3 9	弥生土器	甕	16.0			口縁端が上方へ折れ曲がり、下端が少し突出する。	1 / 8	
394	土壙 1 4 1	土師器	鉢	8.0		3.5	外面に指頭圧痕。	完形	
395	土壙 1 4 1	土師器	高杯	13.8		6.7	脚部外面はヘケ目。	脚部 1 / 2	
396	土壙 1 4 2	弥生土器	直口壺						
397	土壙 1 4 2	弥生土器	甕	15.6			口縁端は上方に折れ曲がり、下端は少し突出する。	3 / 4	

番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
398	溝1 0 2	弥生土器	壺				内面に突帯が3条。	1/8	
399	溝1 0 2	弥生土器	壺				内面に突帯が2条。	1/10	
400	溝1 0 2	弥生土器	壺				口縁端部に刻み目、外面に貼り付け突帯。	1/10	
401	溝1 0 2	弥生土器	壺					1/10	
402	溝1 0 2	弥生土器	壺	7.1				1/4	
403	溝1 0 2	弥生土器	壺	20.8				1/4	
404	溝1 0 2	弥生土器	壺					1/3	
405	溝1 0 2	弥生土器	壺					破片	
406	溝1 0 2	弥生土器	壺					破片	
407	溝1 0 2	弥生土器	壺					破片	
408	溝1 0 2	弥生土器	壺					破片	
409	溝1 0 2	弥生土器	壺					破片	
410	溝1 0 2	弥生土器	壺				貼付付刻目突帯+櫛描沈線+波状文。	破片	
411	溝1 0 2	弥生土器	壺				貼付付刻目突帯+櫛描沈線+波状文。	破片	
412	溝1 0 2	弥生土器	壺					破片	
413	溝1 0 2	弥生土器	壺					破片	
414	溝1 0 2	弥生土器	壺					破片	
415	溝1 0 2	弥生土器	壺	8.8				1/3	
416	溝1 0 2	弥生土器	壺	12.2				1/5	
417	溝1 0 2	弥生土器	壺	16.4				1/8	
418	溝1 0 2	弥生土器	壺				把手状の突起をもつ。2か所に穿孔。	1/8	
419	溝1 0 2	弥生土器	甕					破片	
420	溝1 0 2	弥生土器	甕					破片	
421	溝1 0 2	弥生土器	甕	20.6				1/8	
422	溝1 0 2	弥生土器	甕					1/15	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)		特徴	残存率	備考
				口径	底径			
423	溝1 0 2	弥生土器	甕	12.4			1 / 8	
424	溝1 0 2	弥生土器	甕			3つ一単位の列点文。	破片	
425	溝1 0 2	弥生土器	甕	27.6			1 / 6	
426	溝1 0 2	弥生土器	甕	18.1		2条の列点文。	1 / 4	
427	溝1 0 2	弥生土器	甕		11.0	底端部3方向に一对をなす穿孔が認められる。	1 / 3	
428	溝1 0 2	弥生土器	甕	7.0			1 / 2	
429	溝1 0 2	弥生土器	甕	5.1		底部穿孔。	4 / 5	
430	溝1 0 2	弥生土器	甕	6.0			2 / 3	
431	溝1 0 2	弥生土器	甕	5.0			底部完	
432	溝1 0 2	弥生土器	甕	5.8			2 / 3	
433	溝1 0 2	弥生土器	甕	6.4			1 / 2	
434	溝1 0 5	弥生土器	壺					
435	溝1 0 5	弥生土器	壺					
436	溝1 0 5	弥生土器	壺	8.4		柳描き波状文はかなり乱れる。	1 / 4	
437	溝1 0 5	弥生土器	壺					
438	溝1 0 5	弥生土器	甕					
439	溝1 0 5	弥生土器	甕					
440	溝1 0 5	弥生土器	壺					
441	溝1 0 5	弥生土器	壺					
442	溝1 0 5	弥生土器	甕					
443	溝1 0 5	弥生土器	甕					
444	溝1 0 5	弥生土器	甕			頸部3条の刻目突帯文。外面はハケ調整の後、柳描き文を施す。	1 / 4	
445	溝1 0 5	弥生土器	甕	15.0		頸部内面はヘラミガキ。口縁部には4個1組の円形穿孔。	1 / 4	
446	溝1 0 5	弥生土器	甕					
447	溝1 0 5	弥生土器	甕			外面6条単位の柳描き波線。内面はナデか。	小片	

番号	遺 墓 名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
448	溝1 0 5	弥生土器	壺						
449	溝1 0 5	弥生土器	縫				内面はヘラミガキか。		1/8
450	溝1 0 5	弥生土器	甌						
451	溝1 0 5	弥生土器	壺	18.7			頸部内面はヘラケズリ後ナデる。		1/5
452	溝1 0 5	弥生土器	壺						
453	溝1 0 5	弥生土器	壺						
454	溝1 0 5	弥生土器	壺						
455	溝1 0 5	弥生土器	壺	18.7			外面はヘラミガキか。		1/5
456	溝1 0 5	弥生土器	鉢						
457	溝1 0 5	弥生土器	鉢						
458	溝1 0 5	弥生土器	鉢	18.0					
459	溝1 0 5	弥生土器	鉢				胎土は精良。外面調整不明。内面はヘラミガキか。		
460	溝1 0 5	弥生土器	鉢				口縁部外面糊引き沈線。		
461	溝1 0 5	弥生土器	鉢						
462	溝1 0 5	弥生土器	鉢						
463	溝1 0 5	弥生土器	鉢						
464	溝1 0 5	弥生土器	鉢	17.3	5.5	8.1	内面ハケの後ヘラミガキ。口縁部内面はハケの後ヨコナデ。		1/4
465	溝1 0 5	弥生土器	大型鉢						
466	溝1 0 5	弥生土器	台付鉢						
467	溝1 0 5	弥生土器	台付鉢						
468	溝1 0 5	弥生土器	台付鉢						
469	溝1 0 5	弥生土器	台付鉢						
470	溝1 0 5	弥生土器	大型鉢						
471	溝1 0 5	弥生土器	大型鉢						
472	溝1 0 5	弥生土器	大型鉢						

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	高			
473	溝105	弥生土器	大型鉢						
474	溝105	弥生土器	甕						
475	溝105	弥生土器	甕						
476	溝105	弥生土器	甕						
477	溝105	弥生土器	甕				外面へラミガキか。	1/8	
478	溝105	弥生土器	甕						
479	溝105	弥生土器	甕						
480	溝105	弥生土器	甕						
481	溝105	弥生土器	甕	4.4			外面はタカキの後ヘラミガキ。底部最辺に刻目。		底面完
482	溝105	弥生土器	甕						
483	溝105	弥生土器	甕						
484	溝105	弥生土器	甕						
485	溝105	弥生土器	甕						
486	溝105	弥生土器	甕						
487	溝105	弥生土器	甕						
488	溝105	弥生土器	甕						
489	溝105	弥生土器	甕						
490	溝105	弥生土器	高杯						
491	溝105	弥生土器	高杯						
492	溝105	弥生土器	高杯						
493	溝105	弥生土器	高杯						
494	溝105	弥生土器	高杯						
495	溝105	弥生土器	高杯						
496	溝105	弥生土器	高杯						
497	溝105	弥生土器	高杯						

番号	遺 墓 名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
498	溝 1 0 5	弥生土器	高杯						
499	溝 1 0 5	弥生土器	高杯						
500	溝 1 0 5	弥生土器	高杯						
501	溝 1 0 5	弥生土器	高杯	15.7			杯部と口縁部で胎土を異にする。杯部は水漉し粘土、口縁部は砂粒を含む。	5 / 8	
502	溝 1 0 5	弥生土器	高杯						
503	溝 1 0 5	弥生土器	高杯	10.2			透し孔は4個だが、割り付けは不均等。		
504	溝 1 0 5	弥生土器	高杯						
505	溝 1 0 5	弥生土器	高杯	17.6	11.1	7.8	柱状部内面にしぶり痕。杯部外面はケズリの後ヘラミガキ。	3 / 8	
506	溝 1 0 5	弥生土器	高杯	10.9			柱状部内面にしぶり痕。		
507	溝 1 1 1	弥生土器	壺	18.5			口縁部外面2条の凹線。口縁部内面へヶの後ヨコナデ。	1 / 2	
508	溝 1 1 1	弥生土器	壺	16.8					
509	溝 1 1 1	弥生土器	壺	15.0			口縁部外面は汎線があるようだが、磨滅のため不明瞭。		
510	溝 1 1 1	弥生土器	壺	19.0					
511	溝 1 1 1	弥生土器	壺	18.7			胎土2~3mmの砂粒が目立つ。		
512	溝 1 1 1	土師器	壺	14.0			口縁部ヨコナデ。		
513	溝 1 1 1	弥生土器	壺				胎土は精選粘土。内面に粘土帶の接合痕。	1 / 8	外面剝落
514	溝 1 1 1	土師器	壺				丸底。外面にタキ真。		
515	溝 1 1 1	弥生土器	甕	11.6			口縁部へラ拭き汎線。		
516	溝 1 1 1	弥生土器	甕	13.8					
517	溝 1 1 1	弥生土器	甕	14.8					
518	溝 1 1 1	弥生土器	甕	16.0					
519	溝 1 1 1	弥生土器	甕	16.0			頭部内外に指頭圧痕。	1 / 4	外面剝落
520	溝 1 1 1	土師器	甕	17.8			外面に指頭圧痕が残る。	1 / 4	
521	溝 1 1 1	土師器	甕	17.0			胎土は精選されている。	1 / 3	口縁部焼付着
522	溝 1 1 1	土師器	甕				外面タキ。底部内面は指頭圧痕多く、その上を縦方向にナデ上げる。	1 / 4	

番号	遺構名	新別	器類	法量(cm)			特徴	微存率	備考
				口径	底径	器高			
523	澁111	土師器	甕	15.2			外面タキ(水平)。口縁部ヨコナデ。	1/2	
524	澁111	土師器	甕	15.0			口縁部縦描き沈線。	1/8	
525	澁111	土師器	甕	13.8			口縁部縦描き沈線。	1/4	
526	澁111	土師器	甕				肩部に縦描き波状文か。口縁部外面縦描き沈線か。	1/8	
527	澁111	弥生土器	壺	6.6			口縁部沈線2条。頭部に刺突文。	1/8	壺のミニチュアか。
528	澁111	弥生土器	鉢	11.7			胎土は水漉し粘土。	1/8	内外面剝落
529	澁111	弥生土器	鉢	10.0			内面指頭によるナデ痕明顯。	1/4	
530	澁111	土師器	鉢	12.0	3.0	7.1	内外面に指痕圧痕残る。内面の一部にヘケ。胎土は水漉し粘土。	一部欠	
531	澁111	土師器	鉢	9.9			胎土は1mm以下の砂粒を含む。	1/4	内外面剝落
532	澁111	土師器	鉢	11.0	4.3		外面太いヘラミガキか。胎土は水漉し粘土。	1/8	内外面剝落
533	澁111	土師器	鉢	16.7	2.0	6.5	外面不定方向の細かいヘラミガキ。	一部欠	
534	澁111	土師器	鉢	13.8			胎土は水漉し粘土。内外面ともに指痕圧痕明顯。	1/4	
535	澁111	弥生土器	大型高杯	37.8			外面の装飾は、縦描き波状文、貝殻列点文、焼描き直轍文、円形削突文、斜格子文。	1/5	剝落
536	澁111	弥生土器	高杯	21.3			内面口縁部は横方向、杯部は縦方向のヘラミガキか。胎土0.5mm以下の砂粒。		
537	澁111	弥生土器	高杯				ヘラミガキか。胎土は0.5mm以下の砂粒含む。	1/4	内外面剝落
538	澁111	弥生土器	高杯				杯部内外面へラミガキか。胎土は0.5mm以下の砂粒含む。		
539	澁111	土師器	高杯	20.5			杯部外面へラミガキ痕跡。口縁部内面幅広くヨコナデ。胎土は水漉し粘土。	柱完存	
540	澁111	土師器	高杯				底部中心の穴貫通。柱状部内面しづり痕。胎土は水漉し粘土。	1/4	
541	澁111	弥生土器	高杯				脚部に沈線3本。柱状部外縫方向のミガキ。胎土は水漉し粘土。	1/2	
542	澁111	弥生土器	高杯				胎土は水漉し粘土。柱状部内面しづり痕。	1/8	
543	澁111	弥生土器	高杯	16.3			柱状部内面しづり痕。外面ヘラミガキか。胎土は1mm以下の砂粒含む。	1/8	内外面剝落
544	澁111	弥生土器	高杯	9.8			柱状部にハケ工具の押圧痕。胎土は水漉し粘土。	1/4	
545	澁111	弥生土器	高杯	12.3			外面ハケか。胎土は水漉し粘土。	一部欠	
546	澁111	弥生土器	高杯	8.5			外面ハケか。胎土は水漉し粘土。	一部欠	
547	澁111	土師器	高杯				外面幅広いヘラミガキ。胎土は0.5mm以下の砂粒含む。	柱完存	

番号	遺構名	種別	器體	法量(cm)		特徴	残存率	備考
				口径	底径			
548	溝1 1 1	弥生土器	高杯	9.8		外面幅広いラミガキ。胎土は0.5mm以下の砂粒を含む。	脚完存	
549	溝1 1 2	弥生土器	壺	14.6		外面ハケか。	1/8	
550	溝1 1 2	弥生土器	壺	19.6		胎土は2~3mmの砂粒を多く含む。	1/4	
551	溝1 1 2	土師器	壺	17.6		頸部にしぶり痕。頸部外間に擦痕。	1/4	
552	溝1 1 2	土師器	壺			内底面に円形の押圧痕。丸底。胎土に金雲母。	一部欠	
553	溝1 1 2	土師器	甕	14.0		口縁部内面に凹線状の凹み。胎土に金雲母多く含む。	1/6	
554	溝1 1 2	土師器	甕	15.2		粗いタッキ。内面指頭圧痕後ハケ状工具による調整。胎土粗い。		
555	溝1 1 2	土師器	甕	16.9		胎土に1~5mmの砂礫若干含む。	1/2	
556	溝1 1 2	土師器	甕	16.1		細いタッキの後ハケ。口縁端部がすかに被打ち。	1/6	
557	溝1 1 2	土師器	甕	3.2		かすかに平底を残すが、タキが底面まで及ぶ。胎土は1~4mmの砂粒含み粗い。	1/3	
558	溝1 1 2	弥生土器	甕	21.0			3/4	内外面剥落
559	溝1 1 2	土師器	甕	16.8		口縁部端描き沈線。体部外側ヘラミガキか。	1/8	外面剥落
560	溝1 1 2	弥生土器	壺?	5.4				
561	溝1 1 2	弥生土器	壺?	9.0		胎土は2mm程度の砂粒を多く含む。		
562	溝1 1 2	弥生土器	甕?	5.6				
563	溝1 1 2	土師器	鉢	16.6				
564	溝1 1 2	土師器	鉢	15.3	7.3	丸底。		
565	溝1 1 2	土師器	鉢	18.9	5.0	6.4		
566	溝1 1 2	弥生土器	壺?	9.0				
567	溝1 1 2	弥生土器	台付鉢	4.4		胎土は3mm以下の砂粒を含む。		
568	溝1 1 2	弥生土器	台付鉢	5.0		胎土は5mm以下の砂粒を多く含む。	1/2	
569	溝1 1 2	弥生土器	台付鉢	4.8		胎土に1~3mmの砂粒若干あり。	1/2	
570	溝1 1 2	弥生土器	台付鉢	4.7				
571	溝1 1 2	弥生土器	高杯			柱状部指頭圧痕多し。精製粘土。		
572	溝1 1 2	弥生土器	高杯	10.5		柱状部に工具の刺突痕。	柱半分	
							脚完存	

番号	遺構名	種別	器類	法量(cm)		特徴	備考
				口径	底径		
573	溝111 か112	弥生土器	壺	17.0		口縁部下半に沈線1条。	1/8
574	溝111 か112	土師器	壺	18.3		口縁部下半に沈線1条。	口縁完
575	溝111 か112	弥生土器	壺			口縁部に2条の凹線。	小片
576	溝111 か112	弥生土器	鉢	14.7	2.6	5.0 口縁部へラブリき沈線。胎土は水漉し粘土。	1/4
577	溝111 か112	土師器	高杯	19.9		柱状部内面しぼり痕。	杯小片 丹塗り
578	溝111 か112	弥生土器	高杯	13.9		胎土は水漉し粘土。外面ハナの後へラミガキか。	1/5 内外面刻落
579	溝111 か112	弥生土器	高杯	13.2		胎土は水漉し粘土。穿孔は4個が2段になる。	脚小火
580	溝111 か112	弥生土器	甕	18.0			1/4 口縁部に焼付着
581	溝111 か112	弥生土器	甕	14.4		胎土は3mm以下の砂粒を多く含み、8~10mmの石粒もある。	1/2
582	溝111 か112	弥生土器	甕	17.5		口縁部にごく浅く、幅の広い凹線状のくぼみあり。	1/4
583	溝111 か112	土師器	甕	14.6			1/4 外面に焼付着
584	溝111 か112	土師器	甕	18.4		胎土は1.5mm以下の砂粒を多く含む。	1/2 外面全体に焼厚い、
585	落ち込み 1 0 1	弥生土器	甕	13.6		口縁部4条の沈線。	1/4 丹塗り?
586	落ち込み 1 0 1	弥生土器	鉢	13.8		胎土は密。	1/8 内外面刻離
587	落ち込み 1 0 1	弥生土器	鉢	11.6			1/4
588	落ち込み 1 0 1	弥生土器	鉢	7.2			1/4
589	落ち込み 1 0 1	弥生土器	鉢	6.0			1/5
590	落ち込み 1 0 1	弥生土器	鉢	2.9		3.6 底底。口縁部擦描き光線。手づくねのミニチュア。	小欠損
591	落ち込み 1 0 1	弥生土器	鉢	3.3	2.7	4.2 内底面は轍について成形か。手づくねのミニチュア。	小欠損
592	落ち込み 1 0 1	弥生土器		3.5			底小火 表面刻離
593	落ち込み 1 0 1	弥生土器	台付鉢	5.8		内底面にヘラの圧痕。	底小火
594	落ち込み 1 0 1	弥生土器	台付鉢	5.7		粗いタタキ。	3/8
595	落ち込み 1 0 1	弥生土器	台付鉢	6.0		胎土は3mm以下の砂粒を含む。	1/8
596	落ち込み 1 0 1	弥生土器	台付鉢	3.8			
597	落ち込み 1 0 1	土師器	甕	14.0		口縁部擦描き沈線。	1/2

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
598	落ち込み101	土師器	甌	14.8		口縁部輪書き沈線か。		1/4	
599	落ち込み101	土師器	甌	15.2		口縁部輪書き沈線。		3/8	外面剝離
600	落ち込み101	土師器	甌	16.0		口縁部輪書き沈線。		1/4	
601	落ち込み101	土師器	甌	14.0				1/4	
602	落ち込み101	土師器	甌						
603	落ち込み101	土師器	甌					小片	外面剝離
604	落ち込み101	土師器	甌	15.2				1/8	外面剝離
605	落ち込み101	土師器	甌	12.6		外面タタキ。口縁内面粗いハケ。		1/8	
606	落ち込み101	土師器	甌	9.0				1/5	外面剝離
607	落ち込み101	土師器	甌	13.8				1/8	外面剝離
608	落ち込み101	弥生土器	高杯	19.8		胎土は0.5mm以下の砂粒を含む。		1/8	外面剝離
609	落ち込み101	土師器	高杯	20.6		胎土は1mm以下の砂粒を含む。		1/4	
610	落ち込み101	土師器	高杯			胎土は粗粒。		1/4	外面剝離
611	落ち込み101	土師器	高杯			胎土は0.5mm以下の砂粒を含む。			杯底完
612	落ち込み101	土師器	器台			透孔は2個。胎土は0.5mm以下の砂粒を含む。			外面剝離
613	落ち込み101	弥生土器	高杯	11.0		胎土は0.5mm以下の砂粒を含む。		1/8	
614	落ち込み101	弥生土器	高杯	10.8		胎土は0.5mm以下の砂粒を含む。		1/5	
615	落ち込み101	土師器	高杯	13.6		胎土は1mm以下の砂粒を含む。			脚端欠
616	落ち込み101	土師器	高杯			胎土は0.5mm以下の砂粒を含む。		1/8	外面剝離
617	落ち込み101	土師器	器台	11.2		胎土は1mm以下の砂粒を含む。		1/4	外面剝離
618	辯101上部包含層	弥生土器	蓋	17.4		口縁部に4条の退化凹線(?)がぬぐる。		1/4	
619	辯101上部包含層	弥生土器	蓋	16.5		胎土に4mm～2mmの石英をやや多く含む。口縁部鋸齒文、頸部10条のへラ書き沈線と竹管文。	口縁は ぼ完	1/10	
620	辯101上部包含層	弥生土器	蓋	18.5		外表面とも丹塗り。			
621	辯101上部包含層	弥生土器	瓶	21.0				1/6	
622	辯101上部包含層	弥生土器	蓋	7.6	9.6	15.0 三方に孔あり(台部)。	ほぼ完		

番号	遺構名	種別	器軸	法量(cm)		特徴	残存率	備考
				口径	底径			
623	溝101上部包含層	弥生土器	甕	13.4			1/4	内外面剥離
624	溝101上部包含層	弥生土器	甕	13.4			1/4	
625	溝101上部包含層	弥生土器	甕	15.7			1/6	
626	溝101上部包含層	弥生土器	甕	17.8			1/4	
627	溝101上部包含層	弥生土器	甕	18.9		口縁部に凹部(?)。	1/8	
628	溝101上部包含層	弥生土器	甕	14.8			1/5	
629	溝101上部包含層	弥生土器	高杯	11.7				脚部完
630	溝101上部包含層	弥生土器	高杯	15.9			1/2	
631	溝101上部包含層	土師器	壺	32.0		胎土に5~6mmの長石・石英を比較的多く含む。	1/2	
632	溝101上部包含層	土師器	壺	19.5			3/4	搬入土器か?
633	溝101上部包含層	土師器	壺	17.7			1/4	縫内系
634	溝101上部包含層	土師器	壺	17.3			1/4	縫内系
635	溝101上部包含層	土師器	壺	17.8				口継完
636	溝101上部包含層	土師器	壺	28.2			1/8	
637	溝101上部包含層	土師器	壺	26.7		肩部にヘラ状工具による削突が2箇ある。	1/5	
638	溝101上部包含層	土師器	壺	11.2			1/4	山陰からの搬入か?
639	溝101上部包含層	土師器	壺	11.6		肩部にタタキを残す。	3/4	
640	溝101上部包含層	土師器	壺	18.6			1/4	
641	溝101上部包含層	土師器	壺	13.6			1/5	
642	溝101上部包含層	土師器	壺	12.7	5.2	体部上半タタキ+ヘラミガキ、下半タタキ?+ハケか。	1/3	
643	溝101上部包含層	土師器	壺	6.0			2/3	
644	溝101上部包含層	土師器	壺	8.4				底部完
645	溝101上部包含層	土師器	甕	26.2			1/10	山陰からの搬入か
646	溝101上部包含層	土師器	甕	13.5	19.6	チョコレート色の胎土。	7/8	
647	溝101上部包含層	土師器	甕	14.5			1/4	

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
648	甌101上部包含層	土師器	甌	16.0				1/8	
649	甌101上部包含層	土師器	甌	16.0			口縁端面の柳描き沈線が輪廻。	1/4	
650	甌101上部包含層	土師器	甌	15.0			肩部以下はスヌ付着、口縁端面の柳描き沈線が輪廻。	1/6	
651	甌101上部包含層	土師器	甌	13.9				口縁完	
652	甌101上部包含層	土師器	甌	16.0				1/5	
653	甌101上部包含層	土師器	甌	11.0			肩部付近にもスヌ付着、底部近くの外面にヘラヶズリ。	3/5	
654	甌101上部包含層	土師器	甌	12.5	2.8	13.4	内面上半ハケ目。	3/5	
655	甌101上部包含層	土師器	甌	13.1	13.2	15.8		2/3	
656	甌101上部包含層	土師器	甌	13.9		17.1		2/3	
657	甌101上部包含層	土師器	甌	11.6	2.6	18.9	胎土が黄色っぽい。	ほぼ完	図上復元、焼入か
658	甌101上部包含層	土師器	甌	14.0	5.0	12.2	体部外面に粗いハケ。	1/3	
659	甌101上部包含層	土師器	甌	13.3				1/10	
660	甌101上部包含層	土師器	甌	13.9			体部外面に粗いタキ。	1/10	
661	甌101上部包含層	土師器	甌	17.3			肩部に粗いタキを部分的に残す。	1/6	
662	甌101上部包含層	土師器	甌	19.2			肩部に粗いタキを部分的に残す。(不明瞭)	1/5	
663	甌101上部包含層	土師器	甌	17.1			肩部に粗いタキを部分的に残す。(不明瞭)	1/5	
664	甌101上部包含層	土師器	甌	13.9	3.5	24.0	口縁部から肩部にかけて部分的にタキを残す。(不明瞭)	1/2	
665	甌101上部包含層	土師器	鉢	26.5				1/6	
666	甌101上部包含層	土師器	鉢	32.0				1/15	
667	甌101上部包含層	土師器	鉢	39.1				1/8	
668	甌101上部包含層	土師器	鉢	40.6			胎土は微少のみ。	1/8	
669	甌101上部包含層	土師器	鉢	36.0	9.0	23.0		1/9/7	図上復元
670	甌101上部包含層	土師器	鉢	34.9				1/5	
671	甌101上部包含層	土師器	鉢	17.2				1/4	
672	甌101上部包含層	土師器	小甌	7.9	6.0	6.3		2/3	

番号	遺構名	類別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
673	溝101上部包含層	土師器	小壺	7.9		5.8		1/2	
674	溝101上部包含層	土師器	小壺	7.1	3.8	4.8		ほぼ完	
675	溝101上部包含層	土師器	小壺		2.0			1/2	
676	溝101上部包含層	土師器	小壺	10.3	2.7	6.0	埴。	1/2	
677	溝101上部包含層	土師器	小鉢	8.1	2.3	4.9	おもに押圧調整。	1/2	
678	溝101上部包含層	土師器	小鉢	11.2		4.9		2/3	
679	溝101上部包含層	土師器	小鉢	11.2		6.6	口縁部がややひずんでいる。	ほぼ完	
680	溝101上部包含層	土師器	小鉢	14.3	4.0	6.1		ほぼ完	
681	溝101上部包含層	土師器	小鉢	9.0	3.5	6.9		1/2	
682	溝101上部包含層	粗製土器	台付鉢		4.0			脚部欠	製造土器
683	溝101上部包含層	土師器	台付鉢	12.5	5.5	10.0	内外面ともていねいなナデ(タタキ、ハケなどなし)。	1/2	
684	溝101上部包含層	土師器		2.6	2.9	3.7	手捏ね。	完存	
685	溝101上部包含層	土師器	皿	9.8	4.0	2.6	手捏ね。	1/2	
686	溝101上部包含層	土師器	器台	7.9				受部完	
687	溝101上部包含層	土師器	器台?		14.3		外面に部分的に丹塗り?	1/5	
688	溝101上部包含層	土師器	器台	14.7	15.1	7.4	鼓形、受部内面と外面に丹塗り。	7/8	
689	溝101上部包含層	土師器	器台	9.6	17.0	10.0		2/3	
690	溝101上部包含層	土師器	器台?		17.1			3/4	
691	溝101上部包含層	土師器	手焼?	14.4	4.6	16.4		ほぼ完	
692	溝101上部包含層	土師器	高杯	17.7			内外面丹塗り。	2/3	
693	溝101上部包含層	土師器	高杯	26.0				1/4	
694	溝101上部包含層	土師器	高杯		15.5			口縁欠	
695	溝101上部包含層	土師器	高杯	20.0				杯部完	
696	溝101上部包含層	土師器	高杯	20.3				脚器欠	
697	溝101上部包含層	土師器	高杯	18.5				1/5	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徵	焼成率	備考
				口径	底径	器高			
698	窓101上部包含層	土師器	高杯	20.0	15.8	14.5		1/2	
699	窓101上部包含層	土師器	高杯	21.4	14.8	14.6	脚部内面以外は丹塗り。	1/2	
700	窓101上部包含層	土師器	高杯	22.6				2/3	
701	窓101上部包含層	土師器	高杯	17.8	14.6	13.3		1/2	
702	窓101上部包含層	土師器	高杯	19.0	13.5	13.0		1/2	
703	井戸1 1 8	須恵器	蓋				内面に墨痕が残る。→転用罐。	1/4	
704	井戸1 1 8	須恵器	杯	15.1	9.1	6.4		1/4	
705	井戸1 1 8	須恵器	杯	16.8	9.9	6.3		1/6	
706	井戸1 1 8	須恵器	杯	12.9	8.7	3.6	口縁端部黒色。底部外面に墨書き。底部へラöz切り。板目底。		
707	井戸1 1 8	土師器	杯	12.5	8.9	3.5	底部内面赤色。底部外面の口縁下半以下黒色。	1/3	
708	井戸1 1 8	土師器	杯	12.1	9.7	3.4	内面口縁部上半～外面に黒色塗布。	4/5	
709	井戸1 1 8	土師器	杯	12.3	8.3	3.2	内外面とも赤色塗布。	4/5	
710	井戸1 1 8	土師器	高杯						
711	井戸1 1 8	土師器	甕	15.6		14.1	外面上半部ススが付着。	1/2	
712	井戸1 1 9	土師器	杯	12.4	9.7	3.7	内外面丹塗り。	2/3	
713	井戸1 1 9	土師器	杯	13.6	10.8	3.2	内外面丹塗り。底部はへラöz切り後ナデ。	完	
714	井戸1 1 9	土師器	杯	13.2	11.3	2.5	内外面丹塗り。底部はへラöz切り後ナデ。	1/4	
715	井戸1 1 9	土師器	杯	13.5	11.8	3.2	内外面丹塗り。底部はへラöz切り後ナデ。底部に×印。	1/2	
716	井戸1 1 9	須恵器	杯	13.8	9.3	3.7	底部へラöz切り後ナデ。	完	
717	井戸1 1 9	須恵器	杯	13.2	9.8	4.0	底部へラöz切り後ナデ。	完	
718	井戸1 1 9	須恵器	杯	13.4	9.2	4.1	底部へラöz切り後ナデ。	完	
719	井戸1 1 9	須恵器	杯		9.2		底部へラöz切り後ナデ。	1/3	
720	井戸1 1 9	須恵器	甕		11.0			1/8	
721	井戸1 1 9	須恵器	甕						
722	隅1 1 5	須恵器	杯蓋				基石状のつまみがつく。	1/3	

番号	遺 様 名	・種別	器種	法量 (cm)			特 徴	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
723	澗 1 1 5	須恵器	杯蓋				宝珠形のつまみがつく。	1 / 7	
724	澗 1 1 5	須恵器	杯蓋	17.8				1 / 4	
725	澗 1 1 5	須恵器	杯	16.4	10.4	6.4		1 / 3	
726	澗 1 1 5	須恵器	杯	9.0				1 / 6	
727	澗 1 1 5	須恵器	杯	10.0				1 / 6	
728	澗 1 1 5	須恵器	杯	10.5				1 / 5	
729	澗 1 1 5	須恵器	杯	12.0				1 / 5	
730	澗 1 1 5	須恵器	杯	12.0				1 / 6	
731	澗 1 1 5	須恵器	杯	10.8				1 / 6	
732	澗 1 1 5	須恵器	杯	12.0				1 / 5	
733	澗 1 1 5	須恵器	杯	8.6				1 / 3	
734	澗 1 1 5	須恵器	杯					1 / 7	
735	澗 1 1 5	須恵器	杯	15.2	12.2	3.3		1 / 4	
736	澗 1 1 5	須恵器	杯	12.2	7.2	3.2		1 / 3	
737	澗 1 1 5	須恵器	杯	12.6	8.6	3.4		1 / 5	
738	澗 1 1 5	須恵器	杯	11.5	8	3.2	底部はへら切り。	1 / 5	
739	澗 1 1 5	須恵器	杯	13	7.2	3.7		1 / 3	
740	澗 1 1 5	須恵器	杯	13.2	8.2	4.1	底部はへら切り。 底完存	1 / 5	
741	澗 1 1 5	須恵器	長頸壺						
742	澗 1 1 5	須恵器	壺	11					
743	澗 1 1 5	須恵器	壺	5.2				1 / 4	
744	澗 1 1 5	須恵器	壺	11.4				1 / 5	
745	澗 1 1 5	須恵器	壺						
746	澗 1 1 5	土師器	椀	18.6			精製粘土。	1 / 3	
747	澗 1 1 5	土師器	甕	16.2				1 / 2	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特 微	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
748	溝1.5	土師器	甕	22.8				1/3	
749	溝1.5	土師器	甕	25.5				1/5	
750	溝1.5	土師器	飯鍋甕					1/3	
751	溝10上部包含層	須恵器	壺	35.5			肩部にヘラ記号「×」印。	1/5	
752	溝10上部包含層	須恵器	壺	42.4			頭部にヘラ記号「川」印、青海波の中心が球根形。	1/4	
753	溝10上部包含層	須恵器	壺	20.0				1/4	
754	溝10上部包含層	須恵器	甕	23.5				1/3	
755	溝10上部包含層	須恵器	壺	22.7				1/5	
756	溝10上部包含層	須恵器	甕	39.2				1/10	
757	溝10上部包含層	須恵器	甕	39.0			自然釉付着。	3/5	
758	溝10上部包含層	須恵器	壺?	35.0				1/10	
759	溝10上部包含層	須恵器	甕?	45.0				1/10	
760	溝10上部包含層	須恵器	甕	19.4				1/4	
761	溝10上部包含層	須恵器	壺					2/3	
762	溝10上部包含層	須恵器	甕	7.9	6.5	5.8	瓶部に3条の沈線。		
763	溝10上部包含層	須恵器	瓶					頭部2/5	
764	溝10上部包含層	須恵器	瓶				底部内面と外面にはわざかに自然釉付着。		
765	溝10上部包含層	須恵器	瓶	11.2				1/6	
766	溝10上部包含層	須恵器	瓶	10.8					
767	溝10上部包含層	須恵器	瓶	11.0			底部内面にわざかに自然釉付着。		
768	溝10上部包含層	須恵器	蓋	8.6			外面と底部内面は自然釉付着。		
769	溝10上部包含層	須恵器	蓋	13.3				1/6	
770	溝10上部包含層	須恵器	蓋	13.4				1/3	
771	溝10上部包含層	須恵器	蓋	17.0	2.4		内面に墨付着。転用鉢。円盤状のつまりをもつ。	1/4	
772	溝10上部包含層	須恵器	杯	16.8	11.2	6.8		4/5	
			杯		11.9			1/8	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
773	溝101上部包含層	須恵器	盤	26.2	19.6	3.2		1/6	
774	溝101上部包含層	須恵器	杯		7.1		底部へラ切り。底部内面にヘラ記号「y」印。		
775	溝101上部包含層	須恵器	杯	12.9	9.0	3.8			
776	溝101上部包含層	須恵器	杯		9.0				
777	溝101上部包含層	須恵器	杯	14.8	11.1	4.0	底部外縁へラ切り。(また、つめ跡のようなものとハケ状工具によるナデ跡の筋が残存している)	1/2 高台欠落	
778	溝101上部包含層	須恵器	杯	15.9	12.3	3.9		1/7	
779	溝101上部包含層	土師器	杯	11.7	8.9	3.4	外面に火だすき状に黒灰色部分がはしる。? 底部へラ切りの後ナデ。	1/2	
780	溝101上部包含層	土師器	杯	12.9				1/5	
781	溝101上部包含層	土師器	杯	12.4	8.3	3.6	口縁部黒斑状。底部へラ切りの後ナデ。	1/5	
782	溝101上部包含層	土師器	杯	12.2	7.2	3.4	底部へラ切り。	1/4	
783	溝101上部包含層	土師器	甕	13.5	9.2	3.2	やや焼けひずみを受けている。底部へラ切り。	1/3	
784	溝101上部包含層	土師器	甕	16.4					
785	溝101上部包含層	土師器	甕						
786	溝101上部包含層	土師器	甕	14.8	4.0	24.0			
787	溝101上部包含層	土師器	甕	11.8				1/2 磨滅著しい。	
788	溝101上部包含層	土師器	甕	27.4				1/6	
789	溝101上部包含層	土師器	甕	27.0				1/7	
790	建物125	瓦器	皿	11.2			内面暗文。	1/5	
791	建物131	土師器	碗	13.8				1/10	
792	建物131	土師器	皿	8.5	5.6			1/10	
793	建物132	土師器	椀	13.7				1/8	
794	建物132	土師器	碗					1/8	早島
795	建物132	土師器	皿	8.6					
796	建物132	瓦器	碗	16.0			底部へラ切り。板目痕。		
797	建物132	瓦器	椀	5.0			内面暗文。		
							底部1/4		

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
798	建物 1 3 2	土師器	鍋						
799	建物 1 3 2	磁器	碗	16.8				1/8 白磁	
800	建物 1 4 4	瓦器	碗		4.0		内面暗文。かさね焼きの跡が残る。		
801	建物 1 4 4	土師器	皿	7.6	5.8			1/3	
802	建物 1 4 4	土師器	皿	9.0	6.4			1/4	
803	建物 1 4 7	瓦器	碗	15.4	4.5	4.8	内面暗文。	1/3	
804	建物 1 4 8	土師器	皿	13.9	12.2	2.5	内外面丹塗り。	1/4	
805	建物 1 4 9	土師器	碗	15.5				1/9	
806	建物 1 4 9	土師器	碗	13.7				1/8	
807	建物 1 4 9	土師器	碗		4.3		内面暗文。		
808	建物 1 4 9	土師器	皿	8.9	7.4				
809	建物 1 4 9	土師器	皿	10.4	7.6	1.7		1/10	
810	建物 1 5 0	土師器	皿	7.1	6.1				
811	建物 1 6 1	土師器	碗		5.6				
812	建物 1 6 2	土師器	碗		5.7		内面にかさね焼き痕あり。		
813	建物 1 6 3	土師器	碗		6.0				
814	建物 1 6 6								
815	建物 1 6 7	土師器	碗						
816	建物 1 6 7		甕						
817	建物 1 7 0	土師器	皿	7.6	5	1.1	洞部外面は格子目の叩き、口縁部内面は粗いハケ目。	1/30 鬼山塚	
818	甕 1 0 5	土師器	碗	14.0				1/4	
819	甕 1 0 5	瓦器	碗		5.0		内面暗文。	1/5	
820	甕 1 0 7	瓦器	碗	15.0			内面暗文。		
821	甕 1 0 7	土師器	碗		6.0				
822	井戸 1 2 0	土師器	碗		6.7			1/5	

番号	遺 墓 名	種 別	器 形	法量 (cm)			特 徴	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
823	井戸 1 2 0	土師器	皿	7.8	5.0	1.3	底部へラコシ。	1/6	
824	井戸 1 2 0	土師器	皿					1/10	
825	井戸 1 2 1	陶器	甕	36.4				1/20	備前焼
826	井戸 1 2 1	陶器	甕	37.4				1/12	備前焼
827	井戸 1 2 1	陶器	擂鉢		12.2			1/8	備前焼
828	井戸 1 2 2	土師器	碗	13.8	5.5	5.2	見込み部分に重ね焼痕。	2/3	
829	井戸 1 2 2	土師器	碗	13.1	5.5	4.3		1/2	
830	井戸 1 2 2	土師器	碗	13.2				1/2	
831	井戸 1 2 2	土師器	碗		5.6			4/5	
832	井戸 1 2 2	土師器	碗		6.0		見込み部分に重ね焼痕。	1/2	
833	井戸 1 2 2	瓦器	碗		6.3			1/4	
834	井戸 1 2 2	土師器		7.9	4.9	2.2		1/5	
835	井戸 1 2 2	土師器	小皿	8.3	7.0	1.1	底部へラ切り。	1/3	
836	井戸 1 2 2	土師器	小皿	8.7	6.6	1.7	底部へラ切り。	1/3	
837	井戸 1 2 2	土師器	小皿	8.5	7.1	1.5	底部へラ切り。	1/3	
838	井戸 1 2 2	土師器	小皿	8.0	5.2	1.5	底部へラ切り。板目痕。	完	片口
839	井戸 1 2 2	土師器	小皿	8.8	6.9	1.6	底部へラ切り。板目痕。	完	片口
840	井戸 1 2 2	土師器	小皿	7.8	5.9	1.5	底部へラ切り。板目痕。	完	
841	井戸 1 2 2	土師器	小皿	8.2	6.5	1.7	底部へラ切り。板目痕。	完	
842	井戸 1 2 2	土師器	小皿	9.2	6.8	1.8	底部へラ切り。板目痕。	完	
843	井戸 1 2 2	土師器	小皿	8.3	6.4	1.6	底部へラ切り。板目痕。	完	
844	井戸 1 2 2	土師器	小皿	8.6	7.0	1.4	底部へラ切り。板目痕。	2/3	
845	井戸 1 2 2	土師器	小皿	7.9	6.2	1.5	底部へラ切り。板目痕。	完	
846	井戸 1 2 2	土師器	小皿	7.5	6.0	1.3	底部へラ切り。	完	
847	井戸 1 2 2	土師器	小皿	8.2	7.5	1.5	底部へラ切り。	3/4	

番号	遺構名	種別	器類	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
848	井戸1 2 2.	土師器	小皿	8.0	6.0	1.8	底部へラ切り。	完	
849	井戸1 2 2	土師器	小皿	8.0	5.4	1.3	底部へラ切り。板目痕。	完	
850	井戸1 2 2	土師器	小皿	8.1	6.8	1.3	底部へラ切り。	2 / 3	口縁部一部焼
851	井戸1 2 2	土師器	小皿	8.6	6.5	1.5	底部へラ切り。板目痕。	完	
852	井戸1 2 2	土師器	小皿	8.6	5.9	1.5	底部へラ切り。	完	
853	井戸1 2 2.	土師器	小皿	8.2	7.2	1.5	底部へラ切り。	完	
854	井戸1 2 2	土師器	小皿	8.4	—	1.6	底部へラ切り。	1 / 2	
855	井戸1 2 2	土師器	小皿	7.5	3.6	1.4	底部へラ切り。板目痕。	2 / 3	
856	井戸1 2 2	土師器	杯	13.6	9.1	3.0	底部へラ切り、のち指ナデ。	1 / 2	
857	井戸1 2 2	土師器	杯	14.8	9.6	3.3	底部へラ切り。板目痕か。	4 / 5	
858	井戸1 2 2	土師器	杯	13.4	10.0	3.0	底部へラ切り。板目痕。	ほぼ完	
859	井戸1 2 2	土師器	鍋	33.4	—	—		1 / 6	外面焼
860	井戸1 2 2	土師器	鍋	35.4	—	—		1 / 6	外面焼
861	井戸1 2 2	土師器	鍋	—	—	—		1 / 8	
862	井戸1 2 2	土師器	鍋	—	—	—		1 / 8	
863	井戸1 2 2.	土師器	鍋	34.4	—	—		1 / 4	外面焼
864	井戸1 2 2	土師器	鍋	—	—	—		1 / 8	
865	井戸1 2 2	須恵器	甕	—	—	—	内面ヨコナデ。		
866	井戸1 2 2	須恵器	甕	—	—	—	外腹平行タタキ。		東播系か
867	井戸1 2 2	土師器	碗	13.6	6.2	4.0		1 / 3	
868	井戸1 2 2	土師器	碗	13.2	5.6	4.7	見込み部分に重ね焼痕。	2 / 3	
869	井戸1 2 2	土師器	碗	14.1	6.2	4.8	見込み部分に重ね焼痕。		底部完
870	井戸1 2 2	土師器	碗	13.4	—	—		1 / 5	
871	井戸1 2 2	土師器	碗	—	—	—	見込み部分に重ね焼痕。	1 / 3	
872	井戸1 2 2	土師器	杯	13.9	10.0	3.0	底部へラ切り。板目痕。	4 / 5	

番号	遺構名	種別	器軸	法量(cm)			特徴	微	残存率	備考
				口径	底径	器高				
873	井戸1 2 2	土師器	小皿	8.3	6.6	1.3	底部へラ切り。		2 / 3	
874	井戸1 2 2	瓦器	椀						1 / 8	
875	井戸1 2 2	瓦器	椀	14.8			外面にもヘラミガキあり。		1 / 6	
876	井戸1 2 2	磁器	碗				見込み部分は環状に釉をかき取る。		2 / 3	白磁
877	井戸1 2 2	陶器	碗						1 / 3	備前焼か
878	井戸1 2 2	陶器	鉢						1 / 10	備前焼か
879	井戸1 2 2	土師器	鍋						1 / 9	外面焼
880	井戸1 2 2	磁器	皿				内面のみ施釉。		完	白磁
881	井戸1 2 2	磁器	皿	11.2			見込み部分に柳描文。		1 / 5	青磁
882	井戸1 2 2	須恵器	鉢	31.3			内面ナデ。		1 / 8	龜山焼
883	井戸1 2 2	須恵器	甕				内面指顎押さえのちナデ。		1 / 3	東新系か
884	井戸1 2 2	土師器	鍋	33.9	14.5				3 / 4	外面焼
885	井戸1 2 2	土師器	椀	16.2					1 / 5	
886	井戸1 2 2	土師器	椀		5.4					底部完
887	井戸1 2 2	土師器	椀		5.9					底部完
888	井戸1 2 2	土師器	椀		6.2				1 / 2	
889	井戸1 2 2	土師器	椀		7.9				4 / 5	
890	井戸1 2 2	土師器	椀		6.4					底部完
891	井戸1 2 2	土師器	小皿	8.6	7.1	1.6	底部へラ切り。板目痕。		完	
892	井戸1 2 2	土師器	小皿	9.2	7.6	1.5	底部へラ切り。		1 / 3	
893	井戸1 2 2	土師器	杯	13.1	9.6	2.7	底部へラ切り。		1 / 2	
894	井戸1 2 2	土師器	杯	13.9	8.5	2.7	底部へラ切り。板目痕。		1 / 4	
895	井戸1 2 2	土師器	杯	12.8	8.6	2.8	底部へラ切り。板目痕。		1 / 3	
896	井戸1 2 2	瓦器	椀	15.6					1 / 4	
897	井戸1 2 2	瓦器	椀	15.5					1 / 4	高台径不詳

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
898	井戸1 2 2	瓦器	碗		4.8			1/4	
899	井戸1 2 2	瓦器	碗	16.5				1/8	
900	井戸1 2 2	瓦器	碗	15.2				1/6	
901	井戸1 2 2	瓦器	碗	17.2				1/8	
902	井戸1 2 2	土師器		7.0				1/3	
903	井戸1 2 2	土師器		6.8			完		
904	井戸1 2 2	土師器		9.2				1/3	
905	井戸1 2 2	陶器	甕				口縁端部内面に凹線。	1/10	常滑焼
906	井戸1 2 2	土師器	鍋	34.8				1/6	内外面焼
907	井戸1 2 2	土師器	鍋					完	焼
908	井戸1 2 2	土師器	鍋					1/10	
909	井戸1 2 2	土師器	鍋					1/8	内外面焼
910	井戸1 2 2	土師器	鍋					1/10	外直縁
911	井戸1 2 3	土師器	碗	12.4				1/6	
912	井戸1 2 3	土師器	碗	14.8				1/6	
913	井戸1 2 3	土師器	碗	15.8				1/6	
914	井戸1 2 3	土師器	碗		5.2			1/3	
915	井戸1 2 3	土師器	小皿	8.7	5.6	1.2	底部へラ切り。	1/4	
916	井戸1 2 3	土師器	小皿	9.0				1/4	
917	井戸1 2 3	土師器	小皿	9.5				1/6	
918	井戸1 2 3	土師器	碗		4.1			1/8	
919	井戸1 2 3	土師器	碗	7.0			底部糸切り。	2/3	備前焼
920	井戸1 3 3	陶器	壺	13.8			口縁部は少し開いて立ち上がる。		備前焼
921	井戸1 3 3	陶器	壺鉢	29.0			口縁部は上方に立ち上がり、下端は少し下方に拡張。	1/7	備前焼
922	井戸1 3 3	陶器	壺鉢	30.0	13.7		口縁部は上方に立ち上がり、下端は少し下方に拡張。	1/8	備前焼

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
923	井戸 1 3 3	磁器	碗						背磁
924	井戸 1 3 4	土師器	小皿	8.2	6.1	1.3	底部へラ切り後板目。		
925	井戸 1 3 4	土師器	椀	11.2		2.7	底部系切り。		
926	井戸 1 3 4	土師器	椀	12.6		3.2	体部外面の下半は指ナデ、上半はヨコナデ。		
927	井戸 1 3 4	土師器	椀	12.4		3.0	体部外面下半に指頭圧痕。		
928	井戸 1 3 4	陶器	擂鉢						備前焼
929	井戸 1 3 4	陶器	擂鉢				口縁部はほとんど肥厚せず、端部は平坦。	1 / 9	備前焼
930	井戸 1 3 4	陶器	擂鉢	25.0			カキ目は8本単位。	1 / 8	備前焼
931	井戸 1 3 4	陶器	擂鉢	32.0			カキ目は1本単位。	1 / 8	備前焼
932	井戸 1 3 4	陶器	擂鉢	26.8	12.8	11.4	口縁端部が少しだれ下がる。カキ目は7本単位。		備前焼
933	井戸 1 3 4	須恵器	碗	33.2					
934	井戸 1 3 4	磁器	碗		5.0			1 / 2	背磁
935	井戸 1 3 4	瓦器質	鍋						
936	井戸 1 3 4	須恵器	甕				口縁部外面平行タタキの痕跡が見られる。	1/8以下	龜山焼
937	井戸 1 3 4	陶器	甕	16.2					備前焼
938	井戸 1 3 4	陶器	甕	15.0				1 / 6	備前焼
939	井戸 1 3 4	陶器	甕	18.8					備前焼
940	井戸 1 3 4	須恵器	甕	19.4					龜山焼
941	井戸 1 3 4	須恵器	甕				外面格子タタキ、内面ヨコ方向のハケ目。		
942	井戸 1 3 4					1.8			
943	井戸 1 3 4		甕						
944	井戸 1 3 4		甕						
945	井戸 1 3 4	土師器	鍋	27.2	23.2		一对の把手がつく。	1 / 5	
946	井戸 1 3 4	瓦質	甕	13.0			内面は指頭圧後ナデ。	1 / 6	
947	井戸 1 3 4	陶器	甕						備前焼

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
948	井戸1 3 4	陶器	壺						備前焼
949	井戸1 3 4		壺				外面變形状のタタキ。		
950	井戸1 3 4	瓦質	碗	24.4					
951	井戸1 3 4								
952	井戸1 3 5	土師器	杯	11.4	8.7	3.0	底部へラ切り後板目。		口縁で 1/9
953	井戸1 3 5	土師器	杯	11.7	7.5	3.2	底部へラ切り。		
954	井戸1 3 5	土師器	杯	12.1	7.8	3.1		1/4	
955	井戸1 3 5	土師器	杯	11.2		3.2	底部へラ切り後板目。	1/4	
956	井戸1 3 5	須恵器	碗	5.6	1.7		底部糸切り。		
957	井戸1 3 5	須恵器	碗		5.0		底部糸切り。		
958	井戸1 3 5	須恵器	碗				底部糸切り。		
959	井戸1 3 5	須恵器	碗				底部糸切り。		
960	井戸1 3 5	土師器	皿	8.9		1.3	底部へラ切り後板目。	1/3	
961	井戸1 3 5	土師器	皿	8.3	6.3	1.3	底部へラ切り。	完	
962	井戸1 3 5	土師器	皿	7.9	6.2	1.2	底部へラ切り。		
963	井戸1 3 5	土師器	皿	7.8	2.8	2.0	底部へラ切り。	1/3	
964	井戸1 3 5	土師器	皿	7.2	5.5	1.3	底部へラ切り。	完	
965	井戸1 3 5	土師器	皿	7.2	1.8	1.5	底部へラ切り。	1/2	
966	井戸1 3 5	土師器	皿	8.2	6.4	1.3		1/4	
967	井戸1 3 5	土師器	碗	13.6			体部下半は指頭正。		
968	井戸1 3 5	土師器	碗	13.8			体部下半は指頭正。	1/8	
969	井戸1 3 5	土師器	碗	11.1	4.4	3.6	体部下半は指頭正。	2/3	煤付着
970	井戸1 3 5	土師器	碗	12.4	5.4	4.4	体部下半は指頭正。	1/5	
971	井戸1 3 5	土師器	碗	12.0		3.3	体部下半は指頭正。	1/4	火を受けている
972	井戸1 3 5	土師器	碗	12.0		3.0	体部下半は指頭正。	1/6	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	備考
				口径	底径	器高		
973	井戸1 3 5	土師器	碗	12.2	3.6	体部下半は指頭圧。		1/5
974	井戸1 3 5	土師器	碗	12.0		体部下半は指頭圧、他はヨコナデ。		1/3
975	井戸1 3 5	土師器	碗	11.2	5.0	3.5 体部下半は指頭圧、他はヨコナデ。		完
976	井戸1 3 5	土師器	碗	11.0	4.4	3.2 体部下半は指頭圧後指ナデ、他はヨコナデ。		1/2 一部火を受ける
977	井戸1 3 5	土師器	碗	11.1	5.1	4.1 外部外面指ナデ、口縁端部はヘラで調整。		
978	井戸1 3 5	土師器	碗	10.8		体部下半は指頭圧、他はヨコナデ。		3/8
979	井戸1 3 5	土師器	碗	11.4	2.3	全体にヨコナデ。		
980	井戸1 3 5	土師器	碗		5.9		内面に焼付音	
981	井戸1 3 5	土師器	碗		5.8			
982	井戸1 3 5	土師器	碗		5.5			底径2/3
983	井戸1 3 5	土師器	碗		5.5			
984	井戸1 3 5	土師器	碗		5.3			
985	井戸1 3 5	土師器	碗		5.6			
986	井戸1 3 5	土師器	碗		5.7			
987	井戸1 3 5	土師器	碗		6.0			1/3 須恵質に施成
988	井戸1 3 5	土師器	碗		5.7			
989	井戸1 3 5	土師器	碗		2.2			
990	井戸1 3 5	土師器	碗		4.9			
991	井戸1 3 5	土師器	碗		5.4			
992	井戸1 3 5	土師器	碗		5.2			
993	井戸1 3 5	土師器	碗		5.6			
994	井戸1 3 5	土師器	碗		5.5			1/2両台
995	井戸1 3 5	土師器	碗		4.2			
996	井戸1 3 5	土師器	碗		4.4			
997	井戸1 3 5		碗		4.6			須恵質に施成

番号	遺構名	種別	器瓶	法量(cm)			特 微	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
998	井戸 1.3.5	土師器	鍋						支脚
999	井戸 1.3.5	瓦器	鍋						支脚
1000	井戸 1.3.5	須恵器	鉢	35.2			口縁端部が少し上方に折がる。	1/20	東播系
1001	井戸 1.3.5	須恵器	鉢	34.0			口縁端部が少し上方に折がる。	1/20	東播系
1002	井戸 1.3.5	須恵器	甕	32.6			胴部外面格子タタキ、内面ナデ。	1/20	
1003	井戸 1.3.5	土師器	鍋	39.4				1/20	
1004	井戸 1.3.5	須恵器	甕				外面平行タタキ、内面ナデ。		亀山焼
1005	井戸 1.3.5	土師器	鍋				外面タテ方向、内面ヨコ方向のハケ目。		
1006	井戸 1.3.5	須恵器	鉢						東播系
1007	井戸 1.3.5	須恵器					平行タタキ。		亀山焼
1008.	井戸 1.3.5	須恵器					綾形状のタタキ。		東播系
1009	井戸 1.3.5	須恵器					平行タタキ。		亀山焼
1010	井戸 1.3.5	須恵器					斜格子タタキ。		
1011	井戸 1.3.5	須恵器					外面斜格子、内面同心円タタキ。		亀山焼
1012	井戸 1.3.5	須恵器							東播系
1013	井戸 1.3.5	須恵器					外面平行タタキ、内面円心タタキのちナデ。		
1014	井戸 1.3.5	土師器	かまと						
1015	井戸 1.3.5								
1016	井戸 1.3.9	陶器	壺		12.0				備前焼
1017	井戸 1.3.9	陶器	壺体		13.0		8本単位のカキ目。		備前焼
1018	井戸 1.3.9	陶器	壺鉢				口縁部が上方に立ち上がり、下端は下方に少し折張。		備前焼
1019	井戸 1.3.9	須恵器	鉢						東播系
1020	井戸 1.3.9	陶器	壺鉢						備前焼
1021	井戸 1.3.9	陶器	壺						備前焼
1022	井戸 1.3.9	陶器	壺	27.0			口縁部は玉縁。	1/7	備前焼

百間川米田遺跡3

番号	遺構名	種別	器新	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1023	井戸140	黒色土器	碗		5.5			1/8	
1024	井戸140	土師器	碗	15.4	6.3	5.4		1/2	
1025	井戸140	土師器	碗	15.6				1/6	
1026	井戸140	土師器	碗		6.3			高台完	
1027	井戸140	土師器	碗		6.8			1/2	
1028	井戸140	土師器	杯	15.2	8.8	4.2		1/4	
1029	井戸140	土師器	台付皿	9.1	5.0	3.4		1/6	
1030	井戸140	土師器	皿	10.0	7.4	1.8		はぼ完	
1031	井戸140	土師器	皿	10.2	6.8	1.7		1/3	
1032	井戸140	土師器	皿	9.1	7.2	1.5		1/4	
1033	井戸140	土師器	皿	10.7				1/3	
1034	井戸140	土師器	皿	10.9	8.2	1.9		1/6	
1035	井戸140	土師器	皿		5.9			1/2	
1036	井戸140	瓦器	皿	11.0				1/6	
1037	井戸140	須恵器	杯	15.9	6.5	5.9		一部欠	
1038	井戸140	須恵器	杯					1/8	
1039	井戸140	須恵器	杯	13.8	5.8	5.1		1/4	
1040	井戸140	須恵器	杯					1/8	
1041	井戸140	須恵器	杯	15.2				1/8	
1042	井戸140	須恵器	杯		5.3			1/4	
1043	井戸140	須恵器	杯		4.7			2/3	
1044	井戸140	須恵器	杯		5.3			1/3	
1045	井戸140	須恵器	杯		5.0			1/3	
1046	井戸140	須恵器	皿					1/8	
1047	井戸140	須恵器	皿	10.2				1/4	

番号	遺構名	断列	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1048	井戸1.4.1上面	瓦器	鍋	26.7				1/5	
1049	井戸1.4.1上面	瓦器	鍋					1/5	
1050	井戸1.4.1上面	陶器	擂鉢					1/10	
1051	井戸1.4.1上面	陶器	擂鉢					1/8	
1052	井戸1.4.1上面	陶器	甕	40				1/6	
1053	井戸1.4.1	土師器	鍋					1/6	
1054	井戸1.4.1	土師器	皿	9.8	5.6	1.7	糸切り底。	1/2	
1055	井戸1.4.1	土師器	杯		8.4		糸切り底。	1/5	
1056	井戸1.4.1	土師器	碗	10.6				1/4	
1057	井戸1.4.1	土師器	皿	6.9	5.3	0.9	糸切り底に板目底あり。	完存	
1058	井戸1.4.1	土師器	皿		5.4		糸切り底。	3/4	
1059	井戸1.4.1	土師器	皿	6.4	4.2	0.9	糸切り底に板目底あり。	1/3	
1060	井戸1.4.1	土師器	鍋	15.4				1/5	
1061	井戸1.4.1	瓦器	鍋				外耳がつく。	1/10	
1062	井戸1.4.1	瓦器	鍋					1/10	
1063	井戸1.4.1	土師器	鍋				脚がつく。	1/10	
1064	井戸1.4.1	瓦器	鍋					1/15	
1065	井戸1.4.1	漆器	甕	35				1/6	
1066	井戸1.4.1	陶器	壺					1/6	偏前焼
1067	井戸1.4.1	陶器	甕					1/7	偏前焼
1068	井戸1.4.1	陶器	甕					1/7	偏前焼
1069	井戸1.4.1	陶器	甕					1/7	偏前焼
1070	井戸1.4.1	陶器	擂鉢	23.1				1/5	偏前焼
1071	井戸1.4.1	陶器	擂鉢					1/10	偏前焼
1072	井戸1.4.1	陶器	擂鉢					1/9	偏前焼

番号	遺 帯 名	種 別	器類	法量 (cm)		特 徴	残存率	備 考
				口径	底径			
1073	井戸 1 4 1	陶器	擂鉢	31.6			1 / 6	備前焼
1074	井戸 1 4 1	陶器	擂鉢	25.4			1 / 5	備前焼
1075	井戸 1 4 1	陶器	擂鉢	27.2		凹面ナデ、凸面格子目叩き。	1 / 6	備前焼
1076	井戸 1 4 1	瓦	平瓦			凹面ナデ、凸面格子目叩き。		
1077	井戸 1 4 1	瓦	平瓦			凹面布目、凸面格子目叩き。		
1078	井戸 1 4 1	瓦	平瓦			凹面布目をナデ削す、凸面格子目叩き。		
1079	井戸 141 捣り方	瓦器	鍋				1 / 10	備前焼
1080	井戸 141 捣り方	陶器	甕				1 / 9	備前焼
1081	井戸 141 捣り方	陶器	甕				1 / 15	備前焼
1082	井戸 141 捣り方	陶器	擂鉢				1 / 10	備前焼
1083	井戸 1 4 1	磁器	碗	15.0		外面には蓮弁文が施される。	1 / 8	青磁
1084	井戸 1 4 1	磁器	碗	4.4				底完存
1085	土壇 1 4 9	土師器	小皿	8.8	6.6	1.4	1 / 3	
1086	土壇 1 4 9	土師器	小皿	8.6	7.5	1.6 底部へヲ切り。	3 / 4	
1087	土壇 1 4 9	瓦器	碗	16.0				
1088	土壇 1 4 9	土師器	碗	5.4		体部下半指頭押圧後ナデ。	1 / 6	
1089	土壇 1 5 6	土師器	碗					
1090	土壇 1 5 6	土師器	皿					
1091	土壇 1 5 6	土師器	皿					
1092	土壇 1 5 6	土師器	皿					
1093	土壇 1 5 6	土師器	皿					
1094	土壇 1 5 6	須恵器	甕					
1095	土壇 1 5 6	須恵器	甕					
1096	土壇 1 5 6	陶器	甕					
1097	土壇 1 5 6	陶器	擂鉢					

番号	遺構名	種別	器體	法量(cm)			備考
				口径	底径	器高	
1098	土壇159	土師器	碗	14.4			1/4
1099	土壇159	土師器	碗	14.8	5.5	5.1	1/4
1100	土壇159	土師器	碗	14.1	5.6	5.1	1/2
1101	土壇159	土師器	碗	14.3	5.7	4.9	は既完
1102	土壇159	土師器	碗	15.0	5.6	4.5	1/3
1103	土壇159	土師器	碗	14.0	5.5	5.0	は既完
1104	土壇159	土師器	碗	13.7	6.2	5.1	3/4
1105	土壇159	土師器	碗	14.8	7.0	5.1	1/6
1106	土壇159	土師器	碗	13.8	6.5	4.8	1/2
1107	土壇159	土師器	碗	14.1	6.6	4.6	1/6
1108	土壇159	土師器	碗	14.0	6.0	5.0	1/2
1109	土壇159	土師器	碗	13.8	6.7	5.0	1/3
1110	土壇159	土師器	碗	13.0	5.6	4.5	1/2
1111	土壇159	土師器	碗	12.1			1/6
1112	土壇159	土師器	碗	6.0			高台完
1113	土壇159	土師器	碗	6.1			3/4
1114	土壇159	土師器	皿	7.9	6.9	1.7	完形
1115	土壇159	土師器	皿	8.0	6.5	1.4	一部欠
1116	土壇159	土師器	皿	8.6	6.8		1/4
1117	土壇159	土師器	皿	8.1	6.6	1.4	は既完
1118	土壇159	土師器	皿	9.0	7.4	1.5	1/4
1119	土壇159	土師器	皿	8.8	7.1	1.7	2/3
1120	土壇159	土師器	皿	8.0	6.8	1.7	は既完
1121	土壇159	土師器	皿	8.2	6.7		は既完
1122	土壇159	土師器	皿	8.6	7.0	1.7	1/2

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)		特徴	参考	備考
				口径	底径			
1123	土壇159	土師器	皿	8.3	6.4			1/2
1124	土壇159	土師器	皿	8.6	7.0			1/6
1125	土壇159	土師器	皿	8.1	6.9	1.5		完形
1126	土壇159	土師器	皿	8.1	6.8	1.4		1/2
1127	土壇159	土師器	皿	8.3	6.4			1/6
1128	土壇159	土師器	皿	7.9	6.3	1.4		1/2
1129	土壇159	土師器	皿	9.4	8.1	1.3		1/6
1130	土壇159	土師器	皿	8.5	6.6	1.9		3/4
1131	土壇159	土師器	皿	9.6	7.5	1.8		1/8
1132	土壇159	土師器	皿	8.4	6.9	1.6		1/4
1133	土壇159	土師器	皿	9.0	7.1	1.6		1/4
1134	土壇159	土師器	皿	9.0	7.0	1.6		1/6
1135	土壇159	土師器	皿	8.5	5.8	1.4		1/4
1136	土壇159	土師器	皿	7.8	5.2			1/6
1137	土壇159	土師器	皿	9.9	8.4			1/8
1138	土壇159	土師器	皿	8.5	7.0			1/3
1139	土壇159	土師器	皿	8.7	7.4	1.3		1/4
1140	土壇159	土師器	皿	8.2	6.1	1.7		1/3
1141	土壇159	土師器	皿	8.0	5.7	1.7		3/4
1142	土壇159	土師器	皿	8.8	7.2	1.5		1/2
1143	土壇159	土師器	皿	9.4	7.7	1.4		1/3
1144	土壇159	土師器	皿	9.1	8.6			1/3
1145	土壇159	土師器	皿	8.7	7.3			1/3
1146	土壇159	土師器	皿	8.8	7.3			1/5
1147	土壇159	土師器	皿	9.3	7.6			

番号	遺 槽 名	新別	器類	法量 (cm)			特 徵	備 考
				口徑	底徑	器高		
1148	土壤 1 5 9	土師器	皿	10.2	9.1	1.9		完形
1149	土壤 1 5 9	土師器	杯	14.7	11.7	3.5		完形
1150	土壤 1 5 9	土師器	杯	13.7	10.0			1 / 8
1151	土壤 1 5 9	土師器	杯	12.5				1 / 6
1152	土壤 1 5 9	土師器	杯	13.6	11.0	3.3		1 / 2
1153	土壤 1 5 9	土師器	杯	13.5	9.7	3.2		一部欠
1154	土壤 1 5 9	土師器	杯	13.9	10.7	2.9		1 / 2
1155	土壤 1 5 9	土師器	杯	12.6	8.4	3.2		1 / 2
1156	土壤 1 5 9	土師器	杯					1 / 3
1157	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.5	7.3	5.4		保存完
1158	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.4				1 / 5
1159	土壤 1 5 9	瓦器	碗	14.9	5.2	3.8		高台完
1160	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.2	4.8	5.2		一部欠
1161	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.5	4.5	5.3		3 / 4
1162	土壤 1 5 9	瓦器	碗	14.6	4.3	4.6		1 / 2
1163	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.2				1 / 3
1164	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.4	3.7	5.2		保存完
1165	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.7	4.1	5.3		一部欠
1166	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.1	4.1	4.7		一部欠
1167	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.2	3.9	4.6		3 / 4
1168	土壤 1 5 9	瓦器	碗	14.7	4.0	4.7		1 / 2
1169	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.5				1 / 2
1170	土壤 1 5 9	瓦器	碗	14.5	4.3	4.6		一部欠
1171	土壤 1 5 9	瓦器	碗	14.4	4.4	4.8		一部欠
1172	土壤 1 5 9	瓦器	碗	15.9	4.6	4.6		1 / 3

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1173	土壇159	瓦器	椀	12.7				1/5	
1174	土壇159	瓦器	椀	14.7				1/4	
1175	土壇159	瓦器	皿	9.9	8.2			1/8	
1176	土壇159	瓦器	皿	8.9	7.7	1.6		1/4	
1177	土壇159	瓦器	皿	8.5	7.4	1.7		一部欠	
1178	土壇159	瓦器	皿	8.6	7.2	1.7		2/3	
1179	土壇159	瓦器	皿	8.6	7.5	1.7		1/2	
1180	土壇159	瓦器	皿	8.7	7.1	2.0		完形	
1181	土壇159	須恵器	杯	14.8	6.3	4.9		3/4	
1182	土壇159	磁器	椀	16.4	5.5	6.6		1/3	中国製白磁
1183	土壇159	土師器	カマド				燭のみ		
1184	土壇159	土師器	鍋	33.3				1/4	
1185	土壇159	土師器	鍋					小片	
1186	土壇159	瓦器?	三足鍋	19.2				1/3	
1187	土壇159	土師器	三足鍋		21.1			1/2	
1188	土壇159	須恵器	鉢	18.2	7.6	5.3		9/10	東精系
1189	土壇159	須恵器	鉢	28.5	9.6	10.9		1/2	東精系
1190	土壇159	須恵器	甕	27.0				9/10	東播系
1191	土壇159	須恵器	甕	31.5				3/5	龜山焼
1192	土壇159	陶器	甕	40.6				4/5	常滑焼
1193	土壇176	瓦器	椀	14.0	4.2	4.7	内底面の暗文は平行線か。	1/6	
1194	土壇176	土師器	椀		6.6		胎土には砂粒をほとんど含まない。		底部完
1195	土壇176	土師器	皿	8.1	5.8	1.1	底部はへら切り。内底面に仕上げナデか。	1/4	
1196	土壇176	土師器	皿	8.9	7.0	0.9	底部はへら切り。内底面に仕上げナデか。	1/8	
1197	土壇177	陶器	甕					1/10	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	保存率	備考
				口径	底径	器高			
1198	土壇1 7 8	須恵器	杯					1/5	
1199	土壇1 7 8	土師器	鍋					1/20	
1200	土壇1 7 9	土師器	杯	8.1				1/4	
1201	土壇1 7 9	土師器	碗		4.6			1/4	
1202	土壇1 8 0	土師器	碗		6.9			1/5	
1203	土壇1 8 0	陶器	壺				肩に波状文がめぐる。	1/5	
1204	土壇1 8 2	土師器	鍋					1/10	
1205	土壇1 8 2	陶器	甕					1/10	
1206	土壇1 8 3	土師器	碗	5.8				1/6	
1207	土壇1 8 3	土師器	鍋					1/10	
1208	土壇1 8 3	瓦器	鍋					1/15	
1209	土壇1 8 6	土師器	鍋					1/15	
1210	土壇1 8 7	須恵器	碗	13.2				1/5	
1211	土壇1 8 7	土師器	杯	12	7.7	2.9		1/2	
1212	土壇1 8 7	土師器	皿	8	6.4	0.9	糸切り底。	1/3	
1213	土壇1 9 1	須恵器	杯	10.2				1/5	
1214	土壇1 9 1	土師器	甕	18.6				1/5	
1215	土壇1 9 1	陶器	甕					1/8	
1216	土壇1 9 1	陶器	稻鉢					1/10	
1217	土壇1 9 3	土師器	碗	13.5	6.8	5.2		完存	
1218	土壇1 9 3	磁器	碗	15				1/8	白磁
1219	土壇1 9 4	磁器	碗	16.5			口縁部は玉縁。	1/7	白磁
1220	土壇1 9 6	須恵器	杯	5.6			糸切り底。	1/4	
1221	土壇1 9 6	瓦	軒丸瓦				内区には巴文、外区には連珠文が配される。	1/6	
1222	土壇1 9 7	磁器	皿	5.1				1/4	青磁

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1223	土壤200	土師器	椀		3.5			1/2	
1224	土壤200	須恵器	椀		6		糸切り底。	1/4	
1225	溝1221層	土師器	皿	14.8	9.8	2.5	精製粘土。	1/5	
1226	溝1221層	土師器	椀		5			2/3	
1227	溝1221層	瓦器	椀		13.5			1/5	
1228	溝1221層	瓦器	椀		5.6			1/4	
1229	溝1221層	瓦器	皿		7.3	5.9	1.6	1/3	
1230	溝1221層	土師器	台					1/4	
1231	溝1221層	土師器	火鉢					1/10	
1232	溝1221層	陶器	壺					1/8	備前焼
1233	溝1221層	須恵器	こね鉢					1/10	東播系
1234	溝1221層	陶器	擂鉢					1/8	備前焼
1235	溝1221層	陶器	擂鉢					1/7	備前焼
1236	溝1221層	陶器	甕		12.2			1/3	備前焼
1237	溝1222層	須恵器	杯蓋				磨石状のつまみがつく。	1/5	
1238	溝1222層	須恵器	杯		9			1/3	
1239	溝1222層	須恵器	杯				糸切り底。	2/3	
1240	溝1222層	土師器	杯	14.2	11			1/3	
1241	溝1222層	土師器	皿	17.8	10.5	2.7	精製粘土。	1/4	
1242	溝1222層	土師器	杯	13	7	3		2/3	
1243	溝1222層	陶器	皿	9.4	5.8	3.1	糸切り底。	1/2	
1244	溝1222層	陶器	皿	9.4	5.4	2.8	糸切り底。	1/2	
1245	溝1222層	土師器	皿	9.2	3.6	2.5		1/3	
1246	溝1222層	土師器	椀	12.2	5.8	4.9	精製粘土。	3/4	
1247	溝1222層	瓦器	椀		4.6			1/4	

番号	遺構名	新別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1248	窯1 2 2 2層	土師器	皿	7.5	6.1	1.5	ヘラ切り底。	2 / 3	
1249	窯1 2 2 2層	土師器	皿	7	5.1	1.4	底部に板目真あり。	完存	
1250	窯1 2 2 2層	土師器	皿	7.9	5.3	1.3	ヘラ切り底。	2 / 3	
1251	窯1 2 2 2層	土師器	皿	7.2	3.8	1		完存	
1252	窯1 2 2 2層	瓦器	釜	14				1 / 3	
1253	窯1 2 2 2層	土師器	鍋	33.8				1 / 5	
1254	窯1 2 2 2層	瓦器	鍋	28.8				1 / 5	
1255	窯1 2 2 2層	瓦器	鍋					1 / 15	
1256-	窯1 2 2 2層	瓦器	鍋					1 / 10	
1257	窯1 2 2 2層	瓦器	鍋					1 / 15	
1258	窯1 2 2 2層	瓦器	鍋	21.8			把手がつく。	1 / 4	
1259	窯1 2 2 2層	土師器	鍋					閥	
1260	窯1 2 2 2層	土師器	カマド						
1261	窯1 2 2 2層	瓦器	火鉢						
1262	窯1 2 2 2層	陶器	壺	9.7					
1263	窯1 2 2 2層	陶器	壺	16.5			肩部に沈線がぐる。	1 / 2	備前焼
1264	窯1 2 2 2層	陶器	甕					1 / 3	備前焼
1265	窯1 2 2 2層	陶器	甕					1 / 8	備前焼
1266	窯1 2 2 2層	陶器	甕					1 / 10	備前焼
1267	窯1 2 2 2層	陶器	搗鉢					1 / 7	備前焼
1268	窯1 2 2 2層	陶器	搗鉢					1 / 8	備前焼
1269	窯1 2 2 2層	陶器	搗鉢	26.5	14.8	11.7		一部欠	備前焼
1270	窯1 2 2 2層	陶器	搗鉢					1 / 7	備前焼
1271	窯1 2 2 2層	陶器	搗鉢					1 / 10	備前焼
1272	窯1 2 2 2層	陶器	搗鉢					1 / 9	備前焼

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1273	溝1 2 2 2層	閻器	擂鉢		13				底完存 備前焼
1274	溝1 2 2 2層	瓦	平瓦				凹面は布目、凸面は格子目叩き。		
1275	溝1 2 2 2層	瓦	平瓦				凹面、凸面ともにナデ。		
1276	溝1 2 2 2層	土師器	皿	11.7	5.4	2.7		3 / 4	
1277	溝1 2 2 2層	土師器	皿	9.7	6	1.9		完存	
1278	溝1 2 2 2層	土師器	皿	8	5.6	1.5	ヘラ切り底に板目真あり。		完存
1279	溝1 2 2 2層	土師器	皿	8.3	5.8	1.7	ヘラ切り底に板目真あり。		完存
1280	溝1 2 2 2層	土師器	皿	8.2	6	1.7	ヘラ切り底。		完存
1281	溝1 2 2 2層	土師器	鍋					1 / 8	
1282	溝1 2 2 2層	土師器	鍋	31.6				1 / 4	
1283	溝1 2 2 2層	土師器	鍋					1 / 8	
1284	溝1 2 2 2層	瓦器	瓦器					1 / 10	
1285	溝1 2 2 2層	土師器	鍋	32.4				1 / 6	
1286	溝1 2 2 2層	土師器	鍋					1 / 15	
1287	溝1 2 2 2層	瓦器	瓦器					1 / 10	
1288	溝1 2 2 2層	瓦器	瓦器					1 / 10	
1289	溝1 2 2 2層	瓦器	瓦器					1 / 10	
1290	溝1 2 2 2層	土師器	甕	31.2				1 / 4	
1291	溝1 2 2 2層	閻器	臺	10.7				1 / 4	備前焼
1292	溝1 2 2 2層	閻器	臺	12				1 / 3	備前焼
1293	溝1 2 2 2層	須恵器	甕				胴部外面に格子目に叩き。	1 / 7	龜山焼
1294	溝1 2 2 2層	閻器	甕	35				1 / 6	備前焼
1295	溝1 2 2 2層	閻器	甕				肩部に線刻あり。		備前焼
1296	溝1 2 2 2層	閻器	甕	36				1 / 6	備前焼
1297	溝1 2 2 2層	閻器	甕					1 / 8	備前焼

番号	遺構名	類別	器種	法量 (cm)			特徴	現存率	備考
				口径	底径	器高			
1298	溝1 2 2	貝層	陶器	甕	33.2			1 / 5	備前焼
1299	溝1 2 2	貝層	陶器	鉢				1 / 7	備前焼
1300	溝1 2 2	貝層	陶器	鉢	34			1 / 5	備前焼
1301	溝1 2 2	貝層	陶器	鉢	26.9	15	12 底部にメタ印あり。	1 / 4	備前焼
1302	溝1 2 2	貝層	陶器	鉢	19.5	15	12.5	1 / 5	備前焼
1303	溝1 2 2	貝層	瓦	平瓦			凹面布目、凸面格子目叩き。		
1304	溝1 2 2	貝層	瓦	丸瓦			上面は繩目をナデ消し、凹面は粘土板作成時の糸切り痕の上に布目が残る。		
1305	溝1 2 2	貝層	陶器	おろし皿			糸切り底。	1 / 4	
1306	溝1 2 2	3層	土師器	皿	12.8	8.8	2.3		完存
1307	溝1 2 2	3層	土師器	皿	11.8	6.6	2.5 ヘラ切り底に板目痕あり。		
1308	溝1 2 2	3層	土師器	皿	11.8	6.9	2.3 ヘラ切り底。	2 / 3	
1309	溝1 2 2	3層	陶器	皿	10.2	5.5	3.7 糸切り底。	2 / 3	備前焼
1310	溝1 2 2	3層	陶器	皿	9	5	3.1	1 / 5	備前焼
1311	溝1 2 2	3層	土師器	皿	9.3	5.4	2 糸切り底。	4 / 5	
1312	溝1 2 2	3層	土師器	皿	7.8	5.2	1.3 ヘラ切り底に板目痕あり。		完存
1313	溝1 2 2	3層	土師器	皿	6.9	5.1	1.6		完存
1314	溝1 2 2	3層	土師器	皿	7.6	6.2	1.4 ヘラ切り底。		完存
1315	溝1 2 2	3層	土師器	皿	7.2	3.6	1.5		完存
1316	溝1 2 2	3層	土師器	盤	12.2				脚完存
1317	溝1 2 2	3層	土師器	鍋	32.2			1 / 6	
1318	溝1 2 2	3層	土師器	鍋			内耳あり。	1 / 13	
1319	溝1 2 2	3層	瓦器	鍋				1 / 10	
1320	溝1 2 2	3層	瓦器	鍋			外耳あり。	1 / 13	
1321	溝1 2 2	3層	瓦器	鍋	34.8			1 / 5	
1322	溝1 2 2	3層	瓦器	鍋	32.5			1 / 4	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徵	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1323	溝1 2 2	3層	瓦器	鍋	26.2			1 / 3	
1324	溝1 2 2	3層	土師器	鍋				1 / 10	
1325	溝1 2 2	3層	瓦器	釜					
1326	溝1 2 2	3層	瓦器	釜	12.7			1 / 4	
1327	溝1 2 2	3層	瓦器	釜	12.2		外耳あり。	1 / 5	
1328	溝1 2 2	3層	陶器	壺		7.1	糸切り底。	1 / 3	備前焼
1329	溝1 2 2	3層	陶器	壺	11.6			1 / 3	備前焼
1330	溝1 2 2	3層	陶器	甕				1 / 10	備前焼
1331	溝1 2 2	3層	陶器	甕				1 / 13	備前焼
1332	溝1 2 2	3層	陶器	甕				1 / 11	備前焼
1333	溝1 2 2	3層	陶器	甕				1 / 13	備前焼
1334	溝1 2 2	3層	陶器	擂鉢	19.3	9.4	7.1	1 / 4	備前焼
1335	溝1 2 2	3層	陶器	擂鉢				1 / 9	備前焼
1336	溝1 2 2	3層	陶器	擂鉢				1 / 8	備前焼
1337	溝1 2 2	3層	陶器	擂鉢	27.8	13.5	10.9	1 / 4	備前焼
1338	溝1 2 2	3層	須恵器	こね鉢				1 / 10	東播系
1339	溝1 2 2	3層	須恵器	こね鉢				1 / 10	東播系
1340	溝1 2 2	3層	須恵器	こね鉢				1 / 10	東播系
1341	溝1 2 2	3層	瓦	平瓦			凸面布目、凹面布目。		
1342	溝1 2 2	3層	瓦	丸瓦					
1343	溝1 2 2		土師器	皿	8.2	6.2	1.6 ヘラ切り底、板目痕あり。	完存	
1344	溝1 2 2		土師器	皿	8	5.6	1.7 ヘラ切り底、板目痕あり。	完存	
1345	溝1 2 2		土師器	皿	8	5.8	1.6 ヘラ切り底。	完存	
1346	溝1 2 2		土師器	皿	6.7	5	1.1 糸切り底。	完存	
1347	溝1 2 2		陶器	擂鉢	23.2	12.7	9.2	1 / 4	備前焼

番号	遺構名	類別	器種	法量(cm)			特徵	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1348	溝1 2 2	陶器	鉢					1／9	備前燒
1349	溝1 2 2	陶器	鉢	32				1／4	備前燒
1350	溝1 2 2	陶器	鉢	34				1／5	
1351	溝1 2 2	土師器	カマド						
1352	溝1 2 2	磁器	皿	9.5	4	2.5		1／4	青磁
1353	溝1 2 2	磁器	蓋	6.4				1／2	青白磁
1354	溝1 2 2	磁器	碗					1／9	白磁
1355	溝1 2 2	磁器	杯					1／6	中國製
1356	溝1 2 2	磁器	碗						
1357	溝1 2 2	磁器	皿	3.6				1／4	白磁
1358	溝1 2 2	磁器	碗					1／4	青磁
1359	溝1 2 2	磁器	碗					1／5	青磁
1360	溝1 2 2	磁器	碗	6				1／2	白磁
1361	溝1 2 2	磁器	壺						
1362	溝1 2 2	磁器	碗						
1363	溝1 2 2	上層	土師器	碗	4.6		ヘラ切り底。		
1364	溝1 2 2	上層	土師器	碗	6.7			1／2	
1365	溝1 2 2	上層	陶器					1／12	備前燒
1366	溝1 2 2	中層	土師器	鍋	40.5			1／4	
1367	溝1 2 2	中層	陶器	壺			肩部に沈線がめぐる。	1／6	備前燒
1368	溝1 2 2	貝塚	須恵器	壺				1／7	
1369	溝1 2 2	貝塚	須恵器	碗			糸切り底。	1／6	
1370	溝1 2 2	貝塚	土師器	碗	5.9			1／5	
1371	溝1 2 2	貝塚	土師器	皿	11.6	6.2	底部は米調整。	3／4	
1372	溝1 2 2	貝塚	土師器	皿	11.2	5	2.9	3／4	

百間川米田遺跡3

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1373	溝1 2 2	貝層	瓦器	焼	4			1 / 3	
1374	溝1 2 2	貝層	土師器	皿	7.4	3.2	1.2	3 / 4	
1375	溝1 2 2	貝層	土師器	皿	7.2	5.6	1.5	1 / 5	
1376	溝1 2 2	貝層	瓦器	釜	12.9			1 / 4	
1377	溝1 2 2	貝層	土師器	鍋	32.2			1 / 5	
1378	溝1 2 2	貝層	土師器	鍋				1 / 10	
1379	溝1 2 2	貝層	土師器	鍋				1 / 10	
1380	溝1 2 2	貝層	瓦器	鍋	33			1 / 4	
1381	溝1 2 2	貝層	瓦器	鍋			脚部		
1382	溝1 2 2	貝層	陶器	壺				1 / 5	備前焼
1383	溝1 2 2	貝層	陶器	甌				1 / 9	備前焼
1384	溝1 2 2	貝層	陶器	甌				1 / 12	備前焼
1385	溝1 2 2	貝層	陶器	擂鉢				1 / 8	備前焼
1386	溝1 2 2	貝層	陶器	擂鉢				1 / 8	備前焼
1387	溝1 2 2	貝層	陶器	擂鉢				1 / 8	備前焼
1388	溝1 2 2	下層	須恵器	杯蓋			基石状のつまみがつく。	1 / 3	
1389	溝1 2 2	下層	瓦器	碗	5.8			1 / 5	
1390	溝1 2 2	下層	須恵器	杯	10.8			1 / 6	
1391	溝1 2 2	下層	土師器	碗	12.3			1 / 4	
1392	溝1 2 2	下層	須恵器	碗	5.1		糸切り底。	1 / 3	
1393	溝1 2 2	下層	須恵器	壺				1 / 6	
1394	溝1 2 2	下層	陶器	皿	11.6			1 / 3	備前焼
1395	溝1 2 2	下層	土師器	皿	15.2	9.1	2.6 精製粘土。	完存	
1396	溝1 2 2	下層	土師器	皿	12.8	8.1	2.2 糸切り底。	1 / 4	
1397	溝1 2 2	下層	陶器	皿	9.6	6.2	2.8 糸切り底に板目痕あり。	4 / 5	備前焼

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特 徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1398	溝1 2 2 下層	須恵器	杯	11.7	7.5	3.4		1/2	
1399	溝1 2 2 下層	土師器	皿	6.2	4.7	1.1	糸切り底。	1/2	
1400	溝1 2 2 下層	土師器	皿	6.6	5	1.1	糸切り底。	完存	
1401	溝1 2 2 下層	土師器	皿	6.8	4.2	1.2	糸切り底。	完存	
1402	溝1 2 2 下層	土師器	皿	6.5	5	1.1	糸切り底。	完存	
1403	溝1 2 2 下層	土師器	皿	9.2	8.2	1.7	内外面丹塗り。	1/3	
1404	溝1 2 2 下層	土師器	台		8			1/3	
1405	溝1 2 2 下層	土師器	碗		5			3/4	
1406	溝1 2 2 下層	土師器	碗		3.8			3/4	
1407	溝1 2 2 下層	須恵器	碗		6		糸切り底。	1/2	
1408	溝1 2 2 下層	土師器	碗		5			1/4	
1409	溝1 2 2 下層	土師器	碗		8			1/4	
1410	溝1 2 2 下層	土師器	釜		6.3			1/3	
1411	溝1 2 2 下層	瓦器	釜		13.0			1/4	
1412	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋		26			1/4	
1413	溝1 2 2 下層	須恵器	鏡		32.4		胸部外面は格子目の叩き、内面は刷毛目。	1/5	亀山焼
1414	溝1 2 2 下層	須恵器	鏡		31.6		胸部外面は格子目の叩き、内面は刷毛目。	1/5	亀山焼
1415	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋					1/10	
1416	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋					1/13	
1417	溝1 2 2 下層	土師器	鍋					1/13	
1418	溝1 2 2 下層								
1419	溝1 2 2 下層	瓦器	釜						
1420	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋				外耳がつく。	1/8	
1421	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋		34.2			1/4	
1422	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋		27.4			1/3	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	微	参考	残存率
				口径	底径	器高				
1423	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋							1/8
1424	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋				外耳がつく。			1/10
1425	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋	28.2						1/3
1426	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋	18.8	13	9.8				1/3
1427	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋	25.6						1/4
1428	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋							1/8
1429	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋	29						1/5
1430	溝1 2 2 下層	土師器	鍋	35.8						1/4
1431	溝1 2 2 下層	土師器	鍋						脚部	1/10
1432	溝1 2 2 下層	土師器	鍋	36					脚部	1/3
1433	溝1 2 2 下層	土師器	鍋				把手がつく。			1/8
1434	溝1 2 2 下層	土師器	鍋						脚部	
1435	溝1 2 2 下層	瓦器	鍋						脚部	
1436	溝1 2 2 下層	瓦器	香炉	10.8	10.9	5.1				1/4
1437	溝1 2 2 下層	陶器	壺	11.4			肩部に波状文があぐる。			1/3
1438	溝1 2 2 下層	陶器	壺	13.8			肩に4条の沈線があぐる。			1/4
1439	溝1 2 2 下層	陶器	壺	10.2						1/3
1440	溝1 2 2 下層	陶器	壺							1/10
1441	溝1 2 2 下層	陶器	壺	34.4						1/5
1442	溝1 2 2 下層	陶器	壺							1/5
1443	溝1 2 2 下層	陶器	壺	26.7						1/9
1444	溝1 2 2 下層	陶器	壺	28.6						1/10
1445	溝1 2 2 下層	陶器	壺鉢							1/10
1446	溝1 2 2 下層	陶器	壺鉢							1/9
1447	溝1 2 2 下層	陶器	壺鉢							1/9

番号	遺構名	種別	器體	法量(cm)			特 徵	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
1448	溝1 2 2 下層	陶器	擂鉢	29.8				1/6	備前焼
1449	溝1 2 2 下層	陶器	擂鉢	28.8				1/5	備前焼
1450	溝1 2 2 下層	陶器	擂鉢	18.6	11.4	7.8		1/5	備前焼
1451	溝1 2 2 下層	陶器	擂鉢	31.6				1/3	備前焼
1452	溝1 2 2 下層	陶器	擂鉢					1/8	備前焼
1453	溝1 2 2 下層	陶器	擂鉢	29.7				1/6	備前焼
1454	溝1 2 2 下層	陶器	擂鉢	32.8	19	11.7		1/4	備前焼
1455	溝1 2 2 下層	須恵器	こね鉢					1/10	東播系
1456	溝1 2 2 下層	須恵器	こね鉢					1/10	東播系
1457	溝1 2 2 下層	須恵器	こね鉢					1/13	東播系
1458	溝1 2 2 下層	須恵器	こね鉢					1/10	東播系
1459	溝1 2 2 下層	陶器	甕					1/8	常滑焼
1460	溝1 2 2 下層	瓦	丸瓦				凸面はナデ、凹面は布目。		
1461	溝1 2 2 下層	瓦	軒平瓦				瓦当面は唐草文。		
1462	溝1 2 2 下層	瓦	平瓦				凹面は布目、凸面は格子目叩き。		
1463	溝1 2 2 凹地	土師器	皿	13.2	7.4	2.6	糸切り底に板目痕あり。	1/3	
1464	溝1 2 2 凹地	土師器	皿	9.2	5.9	1.8	糸切り底。	1/2	
1465	溝1 2 2 凹地	土師器	皿	9	5.7	1.5	糸切り底に板目痕あり。	2/3	
1466	溝1 2 2 凹地	土師器	皿	7.4	3.8	1.6		完存	
1467	溝1 2 2 凹地	土師器	皿	3.9	5	1.1	糸切り底。	4/5	
1468	溝1 2 2 凹地	土師器	皿	5.5			糸切り底に板目痕あり。	2/3	
1469	溝1 2 2 凹地	瓦器	碗	3.9				1/3	
1470	溝1 2 2 凹地	瓦器	瓶						注口部
1471	溝1 2 2 凹地	瓦器	鍋					1/10	
1472	溝1 2 2 凹地	瓦器	鍋					1/9	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1473	溝1 2 2 凹地	土師器	鍋						脚部
1474	溝1 2 2 凹地	土師器	鍋	25.2				1 / 6	
1475	溝1 2 2 凹地	陶器	壺	15.8				1 / 5	備前焼
1476	溝1 2 2 凹地	陶器	壺	14.2			肩部に波状文が2段みぐる。	1 / 3	備前焼
1477	溝1 2 2 凹地	陶器	壺					1 / 8	備前焼
1478	溝1 2 2 凹地	陶器	甕	34				1 / 5	備前焼
1479	溝1 2 2 凹地	陶器	甕	36.4				1 / 6	備前焼
1480	溝1 2 2 凹地	陶器	甕	35.2				1 / 5	備前焼
1481	溝1 2 2 凹地	陶器	擂鉢	27.9				1 / 5	備前焼
1482	溝1 2 2 凹地	陶器	擂鉢					1 / 5	備前焼
1483	溝1 2 2 凹地	陶器	擂鉢	31.9				1 / 5	備前焼
1484	溝1 2 2 凹地	陶器	擂鉢	35				1 / 5	備前焼
1485	溝1 2 2 凹地	陶器	擂鉢	25.2				1 / 5	備前焼
1486	溝1 2 2 凹地	瓦	平瓦				凹面は布目、凸面は織目。		
1487	溝1 2 2 凹地	瓦	平瓦				凹面は布目、凸面は織目。		
1488	溝1 2 2	須恵器	杯	14.2	10.6	3.1		1 / 4	
1489	溝1 2 2	須恵器	杯		10.8			1 / 5	
1490	溝1 2 2	須恵器	杯		10.0			1 / 3	
1491	溝1 2 2	須恵器	杯		10.6			1 / 4	
1492	溝1 2 2	須恵器	杯		9.6			1 / 4	
1493	溝1 2 2	土師器	椀		4.6		ヘラ切り底。	4 / 5	
1494	溝1 2 2	土師器	杯	12.8	8	3		1 / 4	
1495	溝1 2 2	土師器	杯	11.8	6	3.3		1 / 3	
1496	溝1 2 2	土師器	皿	12.4				1 / 3	
1497	溝1 2 2	土師器	皿	11.4				1 / 3	

番号	遺 墓 名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
1498	溝1 2 2	土師器	皿	10.4	7	2.3			
1499	溝1 2 2	土師器	皿	9.7	4.6	1.5		1/3	
1500	溝1 2 2	土師器	皿	6.2	4.4	1	糸切り底。	1/3	
1501	溝1 2 2	土師器	碗		6.9			1/4	
1502	溝1 2 2	土師器	碗		7.7			1/5	
1503	溝1 2 2	土師器	碗		6.5			1/4	
1504	溝1 2 2	土師器	碗		6.4			1/3	
1505	溝1 2 2	土師器	碗		6.0			1/4	
1506	溝1 2 2	土師器	鍋		25.8			1/5	
1507	溝1 2 2	土師器	鍋		43.8			1/4	
1508	溝1 2 2	土師器	鍋		21.4			1/3	
1509	溝1 2 2	土師器	鍋						脚部
1510	溝1 2 2	瓦器	瓶						
1511	溝1 2 2	瓦器	鍋	32.5			外耳がつく。	1/4	
1512	溝1 2 2	瓦器	鍋					1/8	
1513	溝1 2 2	瓦器	鍋				内耳がつく。	1/10	
1514	溝1 2 2	瓦器	釜						
1515	溝1 2 2	瓦器	火鉢					1/8	
1516	溝1 2 2	須恵器	甕	33.7			脛部外面は格子目の叩き、内面は刷毛目。	1/5	
1517	溝1 2 2	陶器	壺				肩部に波状文があぐる。	1/5	備前焼
1518	溝1 2 2	陶器	壺	10.8				1/4	備前焼
1519	溝1 2 2	陶器	壺		5.1		糸切り底へラ抽あり。	底完存	備前焼
1520	溝1 2 2	陶器	甌					1/10	備前焼
1521	溝1 2 2	陶器	甌					1/10	備前焼
1522	溝1 2 2	陶器	壷鉢					1/8	備前焼

番号	遺構名	種別	器新	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1523	溝1 2 2	陶器	擂鉢	15				1 / 5	備前焼
1524	溝1 2 2	陶器	擂鉢					1 / 8	備前焼
1525	溝1 2 2	陶器	擂鉢	33.4				1 / 3	備前焼
1526	溝1 2 2	陶器	擂鉢					1 / 9	備前焼
1527	溝1 2 2	陶器	壺					1 / 10	常滑焼
1528	溝1 2 2	瓦	平瓦				凹面は布目、凸面は格子目の叩き。		
1529	溝1 2 2	瓦	平瓦				凹面はナデ、凸面は格子目の叩き。		
1530	溝1 2 2 下層	磁器	碗	14				1 / 6	白磁
1531	溝1 2 2 下層	磁器	碗	5.8				1 / 2	白磁
1532	溝1 2 2 下層	磁器	碗	7				1 / 2	白磁
1533	溝1 2 2 下層	磁器	壺						青磁
1534	溝1 2 2 下層	磁器	碗	3.7			削り出し高台。	3 / 4	青磁(同安窯)
1535	溝1 2 3 1層	土師器	皿	7.2	7	1.3		3 / 4	
1536	溝1 2 3 2層	須恵器	甕				脛部内面は青磁波の叩き。		
1537	溝1 2 3 2層	土師器	皿	8.2	5.9	1.7	糸切り底に板目真あり。	1 / 8	
1538	溝1 2 3 2層	土師器	皿	6.9	4.2	1			
1539	溝1 2 3 2層	土師器	皿	7.3	5.4	1.1			
1540	溝1 2 3 2層	土師器	皿	6.8	4.7	1.2			
1541	溝1 2 3 2層	土師器	皿	6.9	6.4	1			
1542	溝1 2 3 2層	土師器	皿	6.9	4.5	1			
1543	溝1 2 3 2層	土師器	皿	6.5	4.7	1			
1544	溝1 2 3 2層	土師器	皿	6.8	5.7	1			
1545	溝1 2 3 2層	瓦器	甕						注口部
1546	溝1 2 3 2層	陶器	甕					1 / 10	備前焼
1547	溝1 2 3 2層	陶器	擂鉢	29				1 / 3	備前焼

番号	遺 帯 名	種別	器種	法量 (cm)			微	残存率	備 考
				口径	底径	器高			
1548	溝1 2 3	3層	土師器	皿	9.8	6.7	1.7		1 / 3
1549	溝1 2 3	3層	瓦器	皿	7.6	5.4	1.3		1 / 4
1550	溝1 2 3	3層	土師器	皿	7.2	6.6	1.2	完存	
1551	溝1 2 3	3層	土師器	碗		4.4			3 / 4
1552	溝1 2 3	3層	須恵器	こね鉢				1 / 10 東播系	
1553	溝1 2 3	3層	土師器	皿	12.8	8.1	2.4	精製粘土。	
1554	溝1 2 3	3層	土師器	皿	12.2	8.2	2.3	精製粘土。	
1555	溝1 2 3	3層	土師器	皿	12.6	7.1	2.4	精製粘土。	
1556	溝1 2 3	3層	土師器	皿	12.8	7.3	2.4	精製粘土。	
1557	溝1 2 3	3層	土師器	皿	12.8	7.5	2.6	精製粘土。	
1558	溝1 2 3	3層	土師器	皿	12.2	6.3	2.4	精製粘土。	
1559	溝1 2 3	3層	土師器	皿	6.9	5.7	1.4		
1560	溝1 2 3	3層	土師器	皿	6.4	4.9	1.3	ヘラ切り底に板目痕あり。	
1561	溝1 2 3		土師器	杯	15.7	9.7	3.1		
1562	溝1 2 3		土師器	皿	9	5.4	2.3	糸切り底。	1 / 2
1563	溝1 2 3		土師器	皿	7.5	6	1.1	ヘラ切り底。	
1564	溝1 2 3		土師器	皿	6.9	5.8	1.2		完存
1565	溝1 2 3		磁器	碗	3.3			削り出し高台。	1 / 4 青磁
1566	溝1 2 4		須恵器	杯	12.8	9.3	3.4		1 / 2 墨書き
1567	溝1 2 4		須恵器	硯					1 / 7
1568	溝1 2 4		土師器	皿	10	5.9	3.2	糸切り底。	完存
1569	溝1 2 4		陶器	擂鉢					1 / 7 傷前焼
1570	溝1 2 4		陶器	擂鉢					1 / 8 傷前焼
1571	溝1 2 4		陶器	擂鉢	30.8				1 / 6 傷前焼
1572	溝1 2 5		須恵器	杯	16.2	9.8	5.3		1 / 4

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1573	溝1 2 5	須恵器	杯	9.4				1/4	
1574	溝1 2 5	須恵器	杯	11.7	7.9	3.3		1/3	
1575	溝1 2 5	須恵器	こね鉢	11.6			底部全面に削突あり。	底完存	
1576	溝1 2 5	須恵器	椀	7			糸切り底。	1/4	
1577	溝1 2 5	土師器	椀	6			糸切り底。	1/2	
1578	溝1 2 5	土師器	椀	7.2				1/2	
1579	溝1 2 5	土師器	椀	3.8				1/3	
1580	溝1 2 5	土師器	椀	2.9				3/4	
1581	溝1 2 5	土師器	皿	9.8	5.7	2	糸切り底。	4/5	
1582	溝1 2 5	土師器	皿	9.6	5.1	2	糸切り底。	3/4	
1583	溝1 2 5	土師器	皿	9.7	5.4	1.8	糸切り底。	3/4	
1584	溝1 2 5	土師器	皿	6.5	5	1.1	糸切り底。	1/3	
1585	溝1 2 5	土師器	皿	9.2	5	1.9		1/3	
1586	溝1 2 5	土師器	皿	7.2	3.7	1.7		1/2	
1587	溝1 2 5	土師器	皿	9.6	6.8	1.8	糸切り底。	2/3	
1588	溝1 2 5	土師器	皿	9.2	4.3	2.4		1/3	
1589	溝1 2 5	土師器	皿	8.5	5.7	2.1		1/3	
1590	溝1 2 5	土師器	皿	6.3	5	1.2		1/3	
1591	溝1 2 5	土師器	皿	6.8	5	1	糸切り底。	1/2	
1592	溝1 2 5	土師器	皿	6.8	5.2	1.2	糸切り底。	完存	
1593	溝1 2 5	土師器	皿	8.1	7	1.3		1/3	
1594	溝1 2 5	土師器	皿	7	5.4	1.1	糸切り底。	完存	
1595	溝1 2 5	須恵器	甌	48.4				1/6	龜山焼
1596	溝1 2 5	須恵器	甌	33.8				1/5	龜山焼
1597	溝1 2 5	土師器	甌					1/8	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特徵	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1598	溝1 2.5	土師器	鍋						脚部
1599	溝1 2.5	土師器	鍋						脚部
1600	溝1 2.5	土師器	ガマド						
1601	溝1 2.5	瓦器	鍋				把手がつく。	1/10	
1602	溝1 2.5	瓦器	釜					1/7	
1603	溝1 2.5	瓦器	釜				鷄がめぐる。	1/7	
1604	溝1 2.5	土師器	鍋	22.6				1/4	
1605	溝1 2.5	瓦器	鍋					1/10	
1606	溝1 2.5	瓦器	鍋				外耳がつく。	1/9	
1607	溝1 2.5	瓦器	鍋	31				1/4	
1608	溝1 2.5	瓦器	鍋				外耳がつく。	1/9	
1609	溝1 2.5	瓦器	鍋	22.8				1/4	
1610	溝1 2.5	瓦器	鍋	27				1/4	
1611	溝1 2.5	瓦器	鍋	27.8				1/4	
1612	溝1 2.5	瓦器	鍋	18.6				1/4	
1613	溝1 2.5	瓦器	鍋					1/7	
1614	溝1 2.5	陶器	壺	3.8				口完存 側面焼	
1615	溝1 2.5	陶器	壺	11.5			肩部に沈線がめぐる。	1/2	側面焼
1616	溝1 2.5	陶器	壺					1/10	側面焼
1617	溝1 2.5	陶器	壺					1/9	側面焼
1618	溝1 2.5	陶器	壺					1/9	側面焼
1619	溝1 2.5	陶器	壺	34.2				1/4	側面焼
1620	溝1 2.5	陶器	壺					1/9	側面焼
1621	溝1 2.5	陶器	壺					1/10	側面焼
1622	溝1 2.5	陶器	壺					1/9	側面焼

番号	遺構名	種別	器類	法量(cm)			特徴	参考
				口径	底径	器高		
1623	溝1 2 5	陶器	擂鉢	30.2				1／9 備前焼
1624	溝1 2 5	陶器	擂鉢	30				1／6 備前焼
1625	溝1 2 5	陶器	擂鉢	36	20.4	9.5		1／6 備前焼
1626	溝1 2 5	須恵器	こね鉢					1／10 東播系
1627	溝1 2 5	瓦	平瓦				凹面は布目、凸面は格子目の叩き。	
1628	溝1 2 5	磁器	皿	7.7				1／4 白磁
1629	溝1 2 5	磁器	皿	11				1／5 白磁
1630	溝1 2 5	磁器	碗	13				1／3 白磁
1631	溝1 3 2	土師器	皿	6.9	6.2	1.1		完存
1632	溝1 3 2	陶器	壺	13			肩部に波状文と沈線がめぐる。	1／4 備前焼
1633	溝1 3 2	陶器	壺					1／10 備前焼
1634	溝1 3 3	須恵器	壺	15.7				1／4
1635	池1 0 1	土師器	碗		4.4		見込み部分に高台重ね焼き痕。	2／3
1636	池1 0 1	土師器	碗		7.8		内面、黒色を呈す。	2／3
1637	池1 0 1	土師器	皿	9.8	7.3	1.6	底部糸切り。	ほぼ完
1638	池1 0 1	土師器	皿	10.2	7.2	2.0	底部糸切り。	1／2
1639	池1 0 1	須恵器	壺				タキは荒く、施成も良い。	勝田焼か
1640	池1 0 1	磁器	碗	13.6			外面染付け(群青色)。	1／5
1641	池1 0 1	磁器	碗	9.1	3.7	6.3	外面染付け(黒ずんだ青)、表面に灰釉。	ほぼ完
1642	池1 0 1	磁器	碗		5.8		内面染付け。見込み部分に印花文。裏面に青い釉。	底部完
1643	池1 0 1	磁器	皿	13.9	4.7	4.0	内面染付け。輪花。表面に少し青みがかった釉。	2／3
1644	池1 0 1	陶器	壺	21.0				1／12 初期備前焼
1645	池1 0 1	陶器	壺	26.0			玉縁。	1／10 備前焼
1646	池1 0 1	陶器	擂鉢	26.6				1／10 備前焼
1647	池1 0 1	陶器	擂鉢	31.0				1／10 備前焼

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特 徴	残存率	備考
				口径	底径	器高			
1648	池101	陶器	擂鉢	26.5				1/10	備前燒
1649	池101	陶器	擂鉢					破片	備前燒
1650	池101	陶器	擂鉢					破片	備前燒
1651	池101	陶器	浅鉢	15.0	15.2	4.9	口縁部に焼付け有り。	1/3	備前燒
1652	池101	陶器	擂鉢	26.4	12.8	12.4		1/81/5	備前燒、岡上復元
1653	池101	陶器	筒狀鉢	9.1	8.7	7.1	底部にヘラオコシ。	1/2	備前燒
1654	池101	陶器	擂鉢					4/5	備前燒
1655		埴輪	形像						
1656		埴輪	形象						
1657		埴輪	形象						
1658		埴輪	円筒						
1659		埴輪	円筒						
1660		埴輪	円筒						
1661		埴輪	円筒						
1662		埴輪	円筒						
1663		埴輪	円筒						
1664		埴輪	円筒						
1665		埴輪	円筒						
1666		埴輪	円筒						
1667		埴輪	円筒						
1668		埴輪	円筒						
1669		埴輪	朝顔						
1670		埴輪	朝顔						
1671		埴輪	円筒						
1672		埴輪	円筒						

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			特	徵	残存率	備考
				口徑	底径	高				
1673		埴輪	円筒							

木器一覧表

木器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測値(㎜)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
1		16N	井戸134	室町	椀	74		14		底部	17-	1
2		16N	井戸134	室町	椀	84	18		サクラ属の一種	底部	14-	2
3		16N	井戸134	室町	椀	66	15	2		底体部	17-	3
4		16N	井戸134	室町	札	189	25	5	スギ	一部欠	14-	4
5	267-W12	16N	井戸134	室町	札	146	23	3		小欠損	14-	5
6	267-W11	16N	井戸134	室町	箸	249	7			完形	14-	6
7		16N	井戸134	室町	杭	165	17	17		一部	17-	7
8		16N	井戸134	室町	丸棒	149	25	23		一部	14-	8
9		16N	井戸134	室町	円柱	69	42	40		一部	17-	9
10		16N	井戸134	室町	角柱	89	26	18		一部	17-	10
11		16N	井戸134	室町	火付木?	92	16	15		一部	17-	11
12		16N	井戸134	室町	角棒	79	20	12		一部	17-	12
13		16N	井戸134	室町	曲物	85	66	2		一部	17-	13
14		18R	溝122 第3層	中世	椀			8		底部	17-	14
15		18R	溝122 第3層	中世	札	67	30	2		一部	17-	15
16		18R	溝122 第3層	中世	札	82	18	2		一部	23-	16
17		151	井戸114 ワクの中	古墳	板材	102	82	17		一部	23-	17
18	55-W5	151	井戸114 ワクの中	古墳	加工板材				モミ属の一種		11-	18
19		150	井戸123	鎌倉	曲物	70	36	2			23-	19
20		18,19Q	井戸140	平安	蓋?	192	30	9		一部	23-	20
21	277-W23	18,19Q	井戸140	平安	編具	154	32	36	ヒサカキ	完形	11-	21
22	277-W22	18,19Q	井戸140	平安	板材	137	60	6	ヒノキ属の一種	完形	11-	22
23		18,19Q	井戸140	平安	札	137	17	6		一部	23-	23
24		18,19Q	井戸140	平安	札	96	22	5		一部	20-	24
25		18,19Q	井戸140	平安	札	127	9	4		一部	20-	25
26		18,19Q	井戸140	平安	札	77	19	10		一部	20-	26
27	380-W88	19-21R,S	溝122	中世	下駄	192	49	62	マツ属の一種	一部	4-	27
28		19-21R,S	溝122	中世	?	276	14	11			26-	28
29	378-W62	19-21R,S	溝122	中世	円板	258	48	65		一部	4-	29
30	380-W93	19-21R,S	溝122	中世	草履状	178	70	3		一部欠	4-	30
31		19-21R,S	溝122	中世	?	67	37	6			20-	31
32		19-21R,S	溝122	中世	?	35	38	7			20-	32
33		19-21R,S	溝122	中世	下駄	66	61	23		歯	26-	33
34		16R	溝122 2層	中世	札?						23-	34
35		17R	溝122 3層	中世	札?	288	50	5			23-	35
36	271-W15	160	井戸135	鎌倉	円板	134	132	8		完形	11-	36
37	271-W14	160	井戸135	鎌倉	塔婆?	306	36	13	スギ		11-	37
38	271-W16	160	井戸135	鎌倉	札?	346	37	16		完形	11-	38
39		160	井戸135	鎌倉	角棒	166	19	14		一部	23-	39

百間川米田遺跡 3

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
40	278-W59	16W-Y	溝123	中世	円板	131	67	10		半分	10- 40	測
41		16W-Y	溝123	中世	円板	132	64	8		1/4	23- 41	
42	377-W43	16W-Y	溝123	中世	塔婆	352	71	5	スギ	一部欠	10- 42	測
43	377-W41	16W-Y	溝123	中世	札?	168	55	8		一部欠	10- 43	穿孔あり 测
44		16W-Y	溝123	中世	板	203	74	3		2/3	23- 44	
45		16W-Y	溝123	中世	箸				スギ	1/2	10- 45	測
46		16W-Y	溝123	中世	底板?	126	38	7		一部	10- 46	測
47		16W-Y	溝123	中世	椀	83			オニグルミ	底部	10- 47	測
48	381-W101	16W-Y	溝123	中世	椀	80				底部	33- 48	測
49		16W-Y	溝123	中世	加工板材	100	54	23	マツ属の一種		10- 49	測
50		16W-Y	溝123	中世	円板	50	36	7		1/8	17- 50	
51		16W-Y	溝123	中世	札	99	36	2			22- 51	
52		16W-Y	溝123	中世	札	85	29	4			22- 51	
53		16W-Y	溝123	中世	札	83	17	2			22- 51	
54		16W-Y	溝123	中世	札	84	17	4			22- 51	
55		16W-Y	溝123	中世	?	82	99	26	広葉樹(微孔材)		14- 52	測
56	378-W54	16W-Y	溝123	中世	円板	109	95	6			14- 53	測
57		16W-Y	溝123	中世	小角材	60	21	12			17- 54	
58		13-15R	溝122 2. 3層	中世	五輪塔婆	101	24	4	スギ	1/2	14- 55	測
59		13-15R	溝122 2. 3層	中世	札	144	30	6		一部	22- 56	
60	377-W40	13-15R	溝122 2. 3層	中世	呪符	86	23	2	スギ	一部	14- 57	墨書き 測
61		13-15R	溝122 2. 3層	中世	?	146	70	50			22- 58	
62		13-15R	溝122 2. 3層	中世	札	159	21	13		一部	22- 59	
63		13-15R	溝122 2. 3層	中世	札	134	17	3		一部	22- 60	
64		13-15R	溝122 2. 3層	中世	角棒	271	11	8		一部	22- 61	
65	381-W117	13-15R	溝122 2. 3層	中世	箸	157	7	8	スギ	1/2	14- 62	測
66		13-15R	溝122 2. 3層	中世	小角棒	99	15	10		一部	22- 63	
67		13-15R	溝122 2. 3層	中世	札	110	7	3		一部	22- 64	
68		13-15R	溝122 2. 3層	中世	札	60	34	5		一部	25- 65	
69		13-15R	溝122 2. 3層	中世	小角材	76	22	12		一部	13- 66	測
70		13-15R	溝122 2. 3層	中世	札	187	17	5		一部	25- 67	
71		13-15R	溝122 2. 3層	中世	札	120	12	3		一部	25- 68	
72		13-15R	溝122 2. 3層	中世	札	84	23	3		一部	25- 69	
73		13-15R	溝122 2. 3層	中世	札					13片	25- 70	
74	18R	溝122	中世	盤?		168		25	ソガ属の一種	一部	13- 71	測
75	18R	溝122	中世	盤?					ソガ属の一種	一部	13- 72	測
76	381-W113	18R	溝122	中世	椀	80				高台完	13- 73	測
77	379-W86	18R	溝122	中世	板	222	90	15	スギ		15- 74	小孔あり 測
78	18R	溝122	中世	きぬた?		70	53	50	クリ類似種		15- 75	測
79	383-W130	18R	溝122	中世	加工角材	105	52	42	アカガシ亞属		14- 76	測

木器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺跡名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
80		18R	溝122	中世	札	192	66	6			22-	77
81		18R	溝122	中世	角材	16.1	1.7	1.9			22-	78
82		18R	溝122	中世	丸棒	73	31	24			22-	79
83	378-W65	18R	溝122	中世	札	156	23	7	スギ	完形	15-	80
84		18R	溝122	中世	小角材	152	24	11		一部	22-	81
85		18R	溝122	中世	札	172	23	6		一部	22-	82
86		18R	溝122	中世	札	209	140	2		一部	22-	83
87		18R	溝122	中世	札	121	47	4	シガ属の一種		15-	84
88	378-W52	18R	溝122	中世	円板	68	31	6	スギ	1/2	15-	85
89		18R	溝122	中世	曲物?	99	35	3			22-	86
90		18R	溝122	中世	札	313	21	5			21-	87
91	378-W64	18R	溝122	中世	加工板	220	19	7		小欠損	6-	88
92		18R	溝122	中世	札	195	16	2		一部	18-	89
93		18R	溝122	中世	札	89	15	2		一部	19-	90
94		18R	溝122	中世	箆?	118	28	11		一部	6-	91
95		18R	溝122	中世	札	116	26	2		一部	18-	92
96	381-W100	18R	溝122	中世	椀	74				底部	6-	93
97	381-W107	18R	溝122	中世	椀	87				底部	33-	94
98		18R	溝122	中世	椀	79				底1/4	6-	95
99		18R	溝122	中世	椀	68		8		底部	19-	96
100		18R	溝122	中世	椀	69	27	6		底部	18-	97
101		18R	溝122	中世	椀	12	71	5		底部	18-	98
102		18R	溝122	中世	椀	96		10		底部	19-	99
103		18R	溝122	中世	椀	71	12	11		底部	19-	100
104	381-W105	18R	溝122	中世	椀	96				底部	33-	101
105		18R	溝122	中世	?	57	28	16			23-	102
106		18R	溝122	中世	椀	48	41	5		3片	23-	103
107		18R	溝122	中世	椀			4		16片	18-	104
108	383-W133	17R	溝122 3層	中世	杭	237	73	77		一部	28-	105
109	377-W50		溝122?	中世	塔婆	231	56	6	スギ		10-	106
110	377-W44		溝123?	中世	塔婆	477	42	6	ヒノキ属類似種	小欠損	2-	107
111	381-W96	17U	溝123 3層	中世	椀	100	34			底部	33-	108
112	377-W47	17R	溝122	中世	塔婆	793	60	8	ヒノキ属類似種		12-	109a
113	377-W51	17R	溝122	中世	塔婆						12-	109b
114	26-W1	9G	井戸103 第8層	古墳?		366	47	28	スギ		12-	110
115		17AA	溝124	中世	杭	324	39	38		一部	25-	111
116	400-W138	10J	池101	江戸	櫛	88	22	8	ヤブツバキ類似種	一部	12-	112
117	400-W136	10J	池101	江戸	椀	136	49			底部	33-	113
118	400-W137	10J	池101	江戸	杓子	120	100	8	クリ	皿部完	4-	114
119	400-W135	10J	池101	江戸	椀					6片	33-	115

百間川米田遺跡3

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考	
						長(径)	幅(長)	厚					
120		13H	井戸121 下層	室町	小角材	85	39	2		一部	26-	116	
121	377-W49	16W	溝123	中世	塔婆	212	55	6	スギ		9-	117	
122	381-W111	16W	溝123	中世	椀	200				8片	33-	118	
123	379-W71		溝123 2層	中世	?	121	61	32	ムクノキ		2-	119	
124		17V	溝123 3層	中世	塔婆	53	27	5		一部	23-	120	
125		17V	溝123 3層	中世	塔婆	45	44	5		一部	23-	120	
126		17V	溝123 3層	中世	塔婆	35	17	2		一部	23-	120	
127	377-W42	15,16R	溝122 2層	中世	塔婆	245	61	4	スギ	完形	2-	121	
128	378-W56	15,16R	溝122 2層	中世	円板	119		8		完形	2-	122	
129		15,16R	溝122 2層	中世	札	177	16	7		一部	23-	123	
130		15,16R	溝122 2層	中世	札	91	36	5		一部	23-	124	
131		15,16R	溝122 2層	中世	曲物	86	29	3			23-	125	
132		15,16R	溝122 2層	中世	札	113	28	5		完形	2-	126	
133		15,16R	溝122 2層	中世	曲物	100	43	3			23-	127	
134		15,16R	溝122 2層	中世	曲物	115	61	3		一部	23-	128	
135		15,16R	溝122 2層	中世	札	129	61	8		一部	2-	129	
136	379-W69	15,16R	溝122 2層	中世	柄	171	34	24	マツ属の一種	完形	2-	130	
137		16,17R	溝122 3層	中世	椀					9片	33-	131	
138	381-W110	16,17R	溝122 3層	中世	椀	201				1/8	5-	132	
139	382-W120	16,17R	溝122 3層	中世	杓子	196	56	21	広葉樹(散孔材)		5-	133	
140	379-W85	16,17R	溝122 3層	中世	札	138	37	9	スギ		7-	134	
141		16,17R	溝122 3層	中世	小角材	84	20	11		一部	16-	135	
142		16,17R	溝122 3層	中世	札	131	29	3		頭部片	5-	136	
143	382-W128	16,17R	溝122 3層	中世	毬	45	43	37	マツ属の一種	一部欠	7-	137	
144	378-W58	18R	溝122 3層	中世	円板	137	129	5		完形	5-	138	
145		18R	溝122 3層	中世	札	198	26	3		一部	7-	139	
146		18R	溝122 3層	中世	曲物	39	35	2		碎板片	16-	140	
147		18R	溝122 3層	中世	札	129	39	3		一部	16-	141	
148		18R	溝122 3層	中世	杓子把手	130	23	20		一部	8-	142	
149	390-W94	16,17R	溝122 3	中世	草履状	87	32	3	スギ	頭部片	8-	143	
150		16,17R	溝122 3層	中世	札	120	26	2		一部	16-	144	
151		16,17R	溝122 3層	中世	札	103	37	4		頭部	1/2	8-	145
152	381-W112	16,17R	溝122 3層	中世	椀	84				底部	33-	146	
153	379-W81	16,17R	溝122 3層	中世	竹箆	189	23	5	タケ亞科の一種	1/2以上	8-	147	
154	380-W95	16,17R	溝122 3層	中世	草履状	131	38	2			8-	148	
155		16,17R	溝122 3層	中世	札	165	18	4		頭部片	5-	149	
156		16,17R	溝122 3層	中世	草履状	124	30	4		頭部片	8-	150	
157		19R	溝122 3層	中世	札	237	21	4		一部欠	8-	151	
158	382-W124	19R	溝122 3層	中世	刀形	241	26	4		完形	8-	152	
159	382-W129	19R	溝122 3層	中世	毬	34	27	28			26-	153	

木器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
160	382-W127	19R	溝122 3層	中世	杖	122	23	21	カキノキ属の一種		9- 154	測
161		14,15R	溝122 3層	中世	?	108	13	9			26- 155	
162		14,15R	溝122 3層	中世	加工板材	130	23	5		1/2	9- 156	小孔あり 測
163		14,15R	溝122 3層	中世	札	182	49	7			26- 157	
164		14,15R	溝122 3層	中世	加工板材	132	23	7		1/2	9- 158	小孔あり 測
165	279-W73	14,15R	溝122 3層	中世	折敷脚	158	44	16	マツ属の一種	完形	9- 159	測
166	377-W45	17S	溝123	中世	塔婆	579	38	15	エノキ属の一種	完形	9- 160	墨書き 測
167	377-W79	17S	溝123	中世	加工板材	227	20	7		一部欠	9- 161	小孔加工あり 測
168	379-W77	17S	溝123	中世	加工板材	228	20	6		完形	9- 162	小孔 測
169		17S	溝123	中世	加工板材	216	25	6	スギ	完形	3- 163	165と同大 測
170	382-W121	17S	溝123	中世	杓子	344	41		広葉樹(散孔材)	一部欠	3- 164	測
171	379-W78	17S	溝123	中世	?	213	23	6		完形	3- 165	小孔あり 測
172	379-W76	17S	溝123	中世	札	215	31	6		一部欠	3- 166	小孔あり 測
173	378-W57	15-17AA	溝124	中世	円板	123		8		小欠損	3- 167	測
174	380-W90	15-17AA	溝124	中世	下駄	210	75	23	ヒノキ属の一種	台部完	3- 168	測
175	380-W89	15-17AA	溝124	中世	下駄	168	89	35	ヒノキ属の一種	一部欠	3- 169	測
176	382-W125	15-17AA	溝124	中世	杓子状	179	48	7	ヒノキ属の一種		3- 170	測
177	378-W66	15-17AA	溝124	中世	?	189	21	8			1- 171	測
178	383-W131	15-17AA	溝124	中世	把手	230	17	17	スギ		1- 172	測
179	383-W132	15-17AA	溝124	中世	建築材	96	198		マツ属の一種		38- 173	測
180		15-17AA	溝124	中世	板	121	74	5		一部	18- 174	
181		15-17AA	溝124	中世	曲物	86	118	4			1- 175	小孔 縦毛引 測
182		15-17AA	溝124	中世	?	96	12	6			18- 176	棒状先尖る
183	379-W74	15-17AA	溝124	中世	?	118	24	8			1- 177	測
184		15-17AA	溝124	中世	椀	78	28	11		底部	18- 178	赤うるし
185		15-17AA	溝124	中世	札	170	28	5			18- 179	
186		17U	溝123	中世	板	314	86	5			20- 180	
187	381-W119	17U	溝123	中世	箸	210	6			小欠損	1- 181	測
188		17U	溝123	中世	札	14	38	2		一部	18- 182	
189		17U	溝123	中世	椀	84	36	10		底部	18- 183	1/2
190		17U	溝123	中世	曲物	200	34	3		一部	18- 184	縦平行ケビキ
191		17U	溝123	中世	札	103	22	4		一部	18- 185	
192	379-W80	17V	溝123	中世	札?	198	57	5	スギ	一部	1- 186	測
193		17V	溝123	中世	札	216	43	7		一部	26- 187	
194		17V	溝123	中世	板材	290	43	5	スギ		9- 188	小孔あり 測
195		17V	溝123	中世	札	145	61	5		一部	26- 189	
196		17V	溝123	中世	札	46	22	3			26- 190	小孔あり
197		17V	溝123	中世	板材	289	50	5			4- 191	小孔あり 測
198	377-W46	17T	溝123	中世	塔婆	645	65	5			2- 192	墨書き 測
199		17T	溝123	中世	札	109	30	5		小欠損	9- 193	小孔あり 測

百間川米田遺跡 3

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
200		17T	溝123	中世	椀	約70	34			底部	18-	194
201		17T	溝123	中世	札	164	16	3			26-	195
202		17T	溝123	中世	札	274	32	4			1-	196
203		17T	溝123	中世	椀		12			底部	21-	197
204		17T	溝123	中世	曲物	33	20	1		一部	18-	198
205		17T	溝123	中世	札	40	32	2		一部	18-	189
206	378-W68	17T	溝123	中世	小板材	104	40	12	スギ	一部	1-	200
207		17T	溝123	中世	小板材	56	43	4		一部	18-	201
208	378-W67	17R	溝122 第2層	中世	札?	117	42	7		一部	8-	202
209		17R	溝122 第2層	中世	札	83	7	5		一部	16-	203
210		17R	溝122 第2層	中世	有頭棒	37	17	18	ヒノキ属の一種	一部	8-	204
211		17R	溝122 第2層	中世	?	46	26	3			16-	205
212		17R	溝122 第2層	中世	加工板材	81	106	7	モクレン属の一種		8-	206
213	379-W72	17R	溝122 第2層	中世	小角棒	135	21	16	クリ	完形	8-	207
214		17R	溝122 第2層	中世	札	84	27	2		完形	8-	208
215		17R	溝122 第2層	中世	椀	67	27	9		一部	8-	209
216		17R	溝122 第2層	中世	曲物						21-	210
217		17R	溝122 第2層	中世	札	44	18	1		一部	16-	211
218		17R	溝122 第2層	中世	札	57	24	2		一部	16-	212
219		17R	溝122 第2層	中世	椀	45	49	6		一部	16-	213
220		18R	溝122 第3層	中世	札	102	22	3		一部	16-	214
221	382W123	18R	溝122 第3層	中世	有頭棒	56	19	21	ヤナギ属の一種	一部	8-	215
222		18R	溝122 第3層	中世	札	33	26	3		一部	8-	216
223		18R	溝122 第3層	中世	加工板材	107	37	11		一部	16-	217
224		18R	溝122 第3層	中世	札	165	11	2		一部	16-	218
225		18R	溝122 第3層	中世	札	123	15	2		一部	16-	219
226		16R	溝122 第2層	中世	加工板材	188	45	8		一部	16-	220
227		16R	溝122 第2層	中世	椀	67	34	6		一部	16-	221
228		16R	溝122 第2層	中世	札	104	38	4		頭部片	8-	222
229		16R	溝122 第2層	中世	火付木?	99	17	15	マツ属の一種	一部	8-	223
230		16R	溝122 第2層	中世	札	54	30	6		一部	3-	224
231		16R	溝122 第2層	中世	?	116	31	6			17-	225
232		16R	溝122 第2層	中世	札	99	17	1		一部	19-	226
233		16R	溝122 第2層	中世	札	46	20	5			25-	227
234		16R	溝122 第2層	中世	札	49	21	1		一部	3-	228
235		16R	溝122 第2層	中世	札	99	18	1		一部	19-	229
236		16R	溝122 第2層	中世	札	121	25	3		小欠損	13-	230
237	17SW	溝123	中世	札		119	14	6		一部	19-	231
238	17SW	溝123	中世	椀		78	20	8		一部	19-	232
239	12N	井戸130	鎌倉	板材		557	60	5			19-	233

木器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
240	377-W48	16W	溝123	中世	塔婆				スギ		14-	234 墓参測
241	275-W19	16P,Q	井戸139	室町	桶枠板	116	61	11	スギ		13-	236 測
242		16P,Q	井戸139	室町	札	104	17	4		一部	25-	237
243	271-W13	16Q	井戸135	鎌倉	円板?	149	29	7		一部	7-	238
244	277-W21	18Q	井戸140	平安	寄せ串	166	16	2		完形	13-	239 測
245	248-W10	13J	井戸121	室町	円板					完形	7-	240 測
246		20S	井戸141	室町	椀	43				底1/3	7-	241 赤うるし 測
247	281-W24	20S	井戸141	室町	椀	151	7		カツラ	底完存	33-	242 赤うるし 測
248	281-W28	20S	井戸141	室町	円板	88	80	5		完形	5-	243 測
249	281-W30	20S	井戸141	室町	円板	107	104	4		完形	5-	244 測
250	281-W33	20S	井戸141	室町	円板	114	111	7		完形	7-	245 測
251		20S	井戸141	室町	椀	39	13	4		一部	16-	246 赤うるし
252		20S	井戸141	室町	札	81	25	2		一部	16-	247
253		20S	井戸141	室町	札	65	21	1		一部	16-	248
254		20,21S	溝125	中世	円板	259	51	10	ヒノキ属類似種	一部	5-	249 小孔あり 測
255		20,21S	溝125	中世	札	171	19	7			17-	250
256		20,21S	溝125	中世	札	90	27	3			16-	251
257		20,21S	溝125	中世	曲物	14	61	3		枠板片	16-	252 縦平行ケビキ
258		20,21S	溝125	中世	小板材	139	22	9			16-	253
259		20,21S	溝125	中世	札	125	26	2			16-	254
260		20,21S	溝125	中世	札	33	21	4			16-	255
261		20,21S	溝125	中世	札	180	31	5			4-	256 3片小孔 測
262	378-W53	20S	井戸141(外)	室町	円板	126	103	8		小欠損	1-	257 溝122出土? 測
263		20R	溝122凹地	中世	?	57	41	4			4-	258 測
264		20R	溝122凹地	中世	?	101	55	10			20-	259
265		20R	溝122石組み	中世	角材	159	66	56			4-	260 先をとがらす 測
266		20R	溝122凹地	中世	札	68	22	2		一部	25-	261
267		20R	溝122凹地	中世	曲物	64	18	4			25-	262 縦平行ケビキ
268		20R	溝122凹地	中世	札	45	29	2		一部	20-	263
269		20R	溝122凹地	中世	札	93	15	2		一部	20-	264
270		20R	溝122凹地	中世	札	79	17	1		一部	20-	265
271		20R	溝122凹地	中世	?	174	36	18			4-	266 測
272		20S	井戸141	室町	札	148	56	5		一部	26-	267
273		20S	井戸141	室町	札	176	44	8			26-	268
274		20S	井戸141	室町	札	90	25	3			26-	269
275		20S	井戸141	室町	容器?	168		24	マツ属の一種		26-	270 測
276	19S	溝122下層	中世	札	122	29	7			9-	271 小孔あり 測	
277	19S	溝122下層	中世	椀					底部	9-	272 赤うるし 測	
278	19S	溝122下層	中世	札	100	18	5			26-	273	
279	378-W97	19S	溝122下層	中世	椀	71				1/2	33-	274 測

百間川米田遺跡 3

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考	
						長(径)	幅(長)	厚					
280	378-W60	19S	溝122 下層	中世	円板	134	73	8		1/2	9-	275	測
281		19S	溝122 下層	中世	札	125	33	4			21-	276	
282		19S	溝122 下層	中世	札	155	32	3			26-	277	小孔あり
283		19S	溝122 下層	中世	札	123	36	5			26-	278	
284		19S	溝122 下層	中世	椀	68		11		底半分	26-	279	
285		19S	溝122 下層	中世	曲物	123	30	4			21-	280	縦平行ケビキ
286		19S	溝122 下層	中世	椀		10				21-	281	3片赤うるし
287		19S	溝122 下層	中世	札	238	19	1			17-	282	
288	381-W99	20S	溝122 最下層凹地	中世	椀	75				口縁片	1-	283	赤・黒うるし 測
289		20S	溝122 最下層凹地	中世	札	101	22	3		一部	20-	284	
290		20S	溝122 最下層凹地	中世	札	84	12	4		一部	20-	285	
291		20S	溝122 最下層凹地	中世	椀	29	18	4		一部	20-	286	赤うるし
292		20S	溝122 最下層凹地	中世	札	106	18	3			25-	287	
293		20S	溝122 最下層凹地	中世	円板	80	40	5		1/4	20-	288	
294	379-W83	20S	溝122 凹地上層	中世	?	80	19	7			1-	289	小孔あり 測
295		20S	溝122 凹地上層	中世	札	111	10	3			20-	290	
296		20S	溝122 凹地上層	中世	札	102	11	4			20-	291	
297		20S	溝122 凹地上層	中世	札	42	19	1			20-	292	
298		21T	溝125	中世	札	102	46	3			20-	293	2片
299	281-W37	20S	井戸141(外)	室町	円板	83		4		完形	1-	294	測
300		20S	井戸141(外)	室町	?	111	13	7			25-	295	
301		20S	井戸141(外)	室町	札	33	14	2		一部	20-	296	
302		20S	井戸141(外)	室町	札	55	39	4		一部	20-	297	
303		20S	井戸141(外)	室町	曲物	66	21	3			20-	298	縦平行ケビキ
304		20S	井戸141(外)	室町	?	210	43	6			1-	299	小孔あり 測
305		19S	溝122 中層	中世	札	33	34	3			20-	300	
306	379-W75	19S	溝122 中層	中世	?	28	56	4			1-	301	測
307		19S	建物166 柱穴4	中世	札	52	35	7		頭部片	6-	302	小孔あり 測
308		20S	溝122 最下層	中世	札	131	29	3		一部	19-	303	
309		20S	溝122 最下層	中世	札	96	23	4		一部	19-	304	
310		20S	溝122 最下層	中世	箸	76	6	4		一部	19-	305	
311		21S	溝122 張出貝層中	中世	杓?	191	22	15			19-	306	
312	19-21R,S	溝122		中世	札先	111	23	5	スギ		6	307	先をとがらす 測
313	19-21R,S	溝122		中世	札	177	36	5		小欠損	6-	308	測
314	19-21R,S	溝122		中世	札	114	24	4			19-	309	
315	19-21R,S	溝122		中世	小角棒	172	25	12			17-	310	
316		20S	溝122	中世	火付木?	181	15	6			6-	311	測
317		20S	溝122	中世	小角棒	256	19	16			6-	312	
318		20S	溝122	中世	札	112	27	5			19-	313	
319		20S	溝122	中世	札	212	47	4			6-	314	2片 小孔 測

木器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
320	379-W82	20S	溝122	中世	?	231	17	6		完形	13- 315	小孔あり 測
321		20S	溝122	中世	札	111	30	3			25- 316	
322	381-W118	20S	溝122	中世	箸	178	8		ヒノキ属類似種		13- 317	測
323		20S	溝122	中世	札	69	35	2			25- 318	
324		20S	溝122	中世	札	59	27	1			25- 319	
325		20S	溝122	中世	札	137	16	1			25- 320	
326		20,21S	溝125	中世	碗			5			25- 321	赤うるし
327		20,21S	溝125	中世	碗			7			25- 322	赤うるし
328		20S	溝122 下層	中世	?	65	47	37			24- 323	
329		20S	溝122 下層	中世	札	142	25	6			25- 324	
330		20S	溝122	中世	碗	不明					24- 325	
331		20S	溝122	中世	碗			6			24- 326	
332	378-W55	20S	溝122	中世	円板	120	52	5	スギ	1/2	13- 327	測
333		20S	溝122	中世	札	67	31	6		1/4	17- 328	
334		20S	溝122	中世	円板	61	31	4		1/8	24- 329	
335		20S	溝122	中世	板	215	91	8			17- 330	
336		20S	溝122	中世	碗			16		底部	24- 331	
337		20S	溝122	中世	丸棒	83	16	16		一部	24- 332	小孔あり
338			溝122?	中世	板	314	18	12			4- 333	
339			溝122?	中世	?	191	76	28			21- 334	
340			溝122?	中世	丸棒	231	14	13			24- 335	2片
341	19-21R,S		溝122?	中世	棹板	88	41	12	スギ		15- 336	測
342			溝122?	中世	札	63	24	4		一部	21- 337	
343		20S	井戸141(外)	室町	曲物	81	41	4		一部	21- 338	綾平行ケビキ
344		20S	井戸141(外)	室町	札	105	21	7		一部	21- 339	
345		20S	井戸141(外)	室町	札	97	13	7		一部	21- 340	
346	281-W38	20S	井戸141(外)	室町	札?	134	23	4		一部	15- 341	測
347		20S	井戸141(外)	室町	札	93	21	2			21- 342	
348		20S	井戸141(外)	室町	曲物	93	27	3			21- 343	格子ケビキ
349		20S	井戸141(外)	室町	円板	129	31	5		1/2	21- 344	
350		20S	井戸141(外)	室町	札	67	22	3			21- 345	
351		20S	井戸141(外)	室町	札	62	14	6			21- 346	
352		20S	井戸141(外)	室町	曲物	79	23	4			21- 347	綾平行ケビキ
353		20S	井戸141(外)	室町	札	67	11	3			21- 348	
354		20S	井戸141(外)	室町	札	127	12	4			24- 349	
355		20S	井戸141(外)	室町	円板	127	30	4		1/4	24- 350	
356		20S	溝122	中世	円板	121	52	9		1/2	24- 351	
357		20S	溝122	中世	碗	76	17	12		底部	24- 352	
358		20S	溝122	中世	下駄?	60	54	22		歯か	24- 353	
359		20S	溝122	中世	角棒	295	27	16	スギ		11- 354	小孔あり 測

百間川米田遺跡 3

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(cm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
360		20S	溝122	中世	札	189	42	3			16-	355
361		20S	溝122	中世	札	129	50	7	スギ	一部	11-	356 小孔あり 測
362		20S	溝122	中世	札	59	21	6		一部	16-	357
363	379-W84	20S	溝122	中世	角棒	145	12	10			11-	358 測
364		20S	溝122	中世	札	69	16	1			16-	359
365			溝122?	中世	札	71	14	1		一部	16-	360
366			溝122?	中世	角材						-	361 建築材
367		20S	井戸141(外)	室町	札	75	55	3			24-	362
368		20S	井戸141(外)	室町	札	40	39	4			24-	362
369		20S	井戸141(外)	室町	札	32	44	4			24-	362
370		20S	溝122 凹地	中世	札	72	16	2			16-	363
371		20S	溝122 中央土手下肩	中世	札	108	44	3			16-	364
372		20S	溝122 中央土手下肩	中世	?	132	47	13			25-	385
373	382-W122	18R	溝122 3層	中世	杓子状	280	64	9	フジキ属類似種		12-	366 6片 測
374	381-W109	13-15R	溝122 2, 3層	中世	椀	84			クリ		12-	367 4片 測
375	380-W91	17R	溝122 中央土壙	中世	下駄	184	53	50	サカキ	2/3	13-	368 測
376	381-W98	17R	溝122 中央土壙	中世	椀	67			オニグルミ	底完存	33-	369 赤うるし 測
377	381-W115	13-15R	溝122 2, 3層	中世	椀	80			クリ	底完存	33-	370 赤うるし 測
378		11J	井戸118 挖り方	奈良	曲物	46	35	3			19-	371 格子ケビキ
379	155-W7	11J	井戸118 井筒内	奈良	箸	156	6		ヒノキ属類似種	4/5	6-	372 測
380	155-W8	11J	井戸118 井筒内	奈良	?	162	8	6		小欠損	6-	373 測
381		11J	井戸118 井筒内	奈良	曲物						-	374
382		11J	井戸118 井筒内	奈良	曲物	81	18	3			19-	375
383		11J	井戸118 井筒内	奈良	曲物	58	19	3			19-	376
384		11J	井戸118 井筒内	奈良	円板	39	18	4			19-	377 一部分
385	155-W9	11J	井戸118 井筒内	奈良	杓子状	212	84	10	ヒノキ属の一種	小欠損	6-	378 測
386		11J	井戸118 井筒内	奈良	曲物	64	25	3		小片	19-	379 縦平行ケビキ
387	381-W102	19-21R,S	溝122	中世	椀	78			クリ	4/5	38-	380 赤うるし 測
388	400-W139	10J	池101	江戸	下駄	237	84	22	マツ属の一種	小欠損	28-	381 測
389	381-W116	16R	溝122 2層	中世	椀	90			ドチノキ	1/2	37-	382a 黒うるし 測
390	381-W106	19-21R,S	溝122 3層	中世	椀	156	100		クリ類似種	完形	37-	383 測
391		13P	井戸136 挖り方	室町	柄	289	14	13	ヒノキ属の一種	身部欠	29-	384 丸棒状 測
392		13P	井戸136 挖り方	室町	円板?	138	22	9		小片	29-	385 穿孔あり 測
393		13P	井戸136 挖り方	室町	小板材	147	22	6		1/2	32-	386
394		13P	井戸136 挖り方	室町	板材	91	77	11		小片	32-	387
395		12N	井戸130	鎌倉	建築材	379	61	39		部分	29-	388 測
396		14N	井戸132 挖り方	室町	円板	166	78	9		1/2	29-	389 測
397		14N	井戸132 挖り方	室町	柄	15	32	32	マツ属の一種	1/2	29-	390 測
398		14N	井戸132 挖り方	室町	札	141	22	4		小欠損	30-	391
399		14N	井戸132 挖り方	室町	札	65	18	5		頭部	31-	392

木器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺物名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
400		14N	井戸132 挖り方	室町	梓木	199	19	17		小欠損	29- 393	両端を削る測
401		14N	井戸132 挖り方	室町	板材	244	54	6		部分	31- 394	
402		14N	井戸132 挖り方	室町	角材	178	28	30		部分	30- 395	
403		14N	井戸132 挖り方	室町	建築材	218	74	44		部分	30- 396	
404		14N	井戸132 挖り方	室町	大形札	220	46	6		部分	30- 397	
405		14N	井戸132 挖り方	室町	杓子	120	34	18		部分	31- 398	柄付根
406		14N	井戸132 挖り方	室町	折敷	188	92	4	スギ	1/2	29- 399	釘穴あり測
407		14N	井戸132 挖り方	室町	板材	269	56	15		部分	31- 400	
408		14N	井戸132 挖り方	室町	?	120	46	14		部分	29- 401	鎌形側面穿孔測
409		14N	井戸132 挖り方	室町	札	173	38	3	スギ	一部欠	29- 402	頭三角測
410		13N	井戸129	鎌倉	板材	276	244	42		一部	30- 403	
411		13N	井戸129	鎌倉	?	135	86	36		一部	30- 404	穿孔あり
412		13N	井戸129	鎌倉	札	106	42	4		一部	31- 405	
413		13N	井戸129	鎌倉	札	163	19	5		一部	29- 406	測
414		13N	井戸129	鎌倉	板材	264	46	5		一部	31- 407	
415		13N	井戸129	鎌倉	板材	426	36	7		一部	31- 408	
416		13N	井戸129	鎌倉	板材	331	38	5		一部	31- 409	
417		13N	井戸129	鎌倉	板材	431	50	7		一部	31- 410	
418		13N	井戸129	鎌倉	板材	479	107	11		一部	30- 411	
419		13N	井戸129	鎌倉	?	366	194	26	クスノキ	完形	29- 412	方形穿孔測
420		13N	井戸129	鎌倉	小角材	131	27	19		一部	30- 413	切傷あり
421		13N	井戸129	鎌倉	板材	358	70	15		一部	31- 414	穿孔あり
422		13N	井戸129	平安	箸	223	6	5		完形	29- 415	測
423		13N	井戸126	平安	箸	119	8	8		1/2	29- 416	
424		13N	井戸126	平安	箸?	57	6	3		1/4	30- 417	先端部
425		160	井戸135 北-2	鎌倉	角材	146	65	32		部分	30- 418	
426		13N	井戸131	平安	刀形?	202	19	6	スギ	一部欠	29- 419	測
427		14L,M	土壤128	弥生	梯	761	169	54	イチジク属類似種	二段分	- 420	
428	273-W18	15P	井戸137	鎌倉	曲物	203	106	3	ヒノキ属の一種	完形	- 421	壊れている
429		13N	井戸127	鎌倉	板材	236	126	25		一部	29- 422	方形穿孔測
430		13N	井戸127	鎌倉	小角棒	284	26	13		一部欠	32- 423	両端を薄く削る
431		13M	井戸125	鎌倉	箆?	150	11	4		先端部	32- 424	先を尖らせる
432		13M	井戸125	鎌倉	札	98	19	4		一部	32- 425	
433		13N	井戸130	鎌倉	板材	82	31	17		一部	32- 426	
434		13N	井戸130	鎌倉	角材	163	39	48		一部	32- 427	
435		13N	井戸130	鎌倉	角材	96	47	27		一部	32- 428	
436		13N	井戸130	鎌倉	小角棒	289	16	10		一部	29- 429	不整な削り測
437		13N	井戸130	鎌倉	小角棒	155	9	6		一部	32- 430	
438		13N	井戸130	鎌倉	曲物	181	32	3		一部	32- 431	縦平行ケビキ
439		13N	井戸130	鎌倉	曲物	252	38	4		一部	32- 432	一部格子目毛引

百間川米田遺跡 3

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
440		13N	井戸130	鎌倉	角材	28	40	29		一部	32-	433
441		13N	井戸130	鎌倉	板材	326	51	3		一部	32-	434
442		13N	井戸130	鎌倉	札	113	40	6		一部	32-	435
443		13N	井戸130	鎌倉	大形札				ヒノキ属の一種	一部	29-	436
444		13N	井戸130	鎌倉	薄板	134	43	2		一部	32-	437
445		13N	井戸130	鎌倉	板材	131	31	20		一部	29-	438
446		13N	井戸130	鎌倉	折敷?	126	58	3		一部	29-	439
447		13N	井戸130	鎌倉	板材	164	45	19		一部	32-	440
448		13N	井戸130	鎌倉	板材	115	45	14		一部	32-	441
449		13N	井戸130	鎌倉	板材	245	42	3		一部	32-	442
450		15I	井戸114 掘り方	古墳	鋤?					一部	-	443
451	53-W4	15I	井戸114	古墳	側板	1205	585	52	モミ属の一種		-	444
452		15I	井戸114	古墳	側板						-	445
453	271-W17	16N.0	井戸135 東	鎌倉	?	497	71	30			33-	446
454	30-W2	9G	井戸103	古墳	臼	490	393		マツ属		-	447
455	400-W134	10J	池101	江戸	椀	108	39				-	448
456	155-W6	11J	井戸118 井筒内	奈良	櫛	38	35	7			-	449
457	281-W36	20S	井戸141	室町	下駄	137	47	67	モミ	歯一部	28-	450
458	381-W104	20S	溝122	中世	椀	70			クリ	一部	35-	451
459	381-W108	20S	溝122	中世	椀	89			クリ	1/2	36-	452
460		20S	溝122 凹地内	中世	札	102	33	2	スギ	頭部片	-	453
461	281-W31	20S	井戸141	室町	円板	117	109	9	スギ	完存	35-	454
462	281-W32	20S	井戸141	室町	円板	111	101	7	スギ	完存	36-	455
463		20S	井戸141	室町	建築材	151	58	35	モミ	一部	-	456
464	379-W70	20S	溝122 凹地最下層	中世	編具	121	42	26	サワタギ	一部欠	36-	457
465		20S	井戸141	室町	円板	130		7	スギ	完存	-	458
466	281-W35	20S	井戸141	室町	円板	142	129	11	スギ	完存	-	459
467	281-W34	20S	井戸141	室町	円板	122	133	7	スギ	完存	36-	460
468	380-W87		溝122 下層	中世	下駄	202	83	20	ヒノキ	一部欠	35-	461
469	380-W92	20S	溝122	中世	下駄	192	54	24	マツ	1/4	36-	462
470	281-W25	20S	井戸141	室町	椀	91			シイノキ	一部欠	35-	463
471	281-W103	20S	溝122 凹地最下層	中世	椀	144	60		クリ	2/3	28-	464
472		20S	溝122	中世	椀	85			広葉樹	底部半	-	465
473		20S	溝122 下層	中世	椀				クリ	底部片	-	466
474		20S	溝125 貝層中	中世	札	179	43	5	スギ	一部	-	467
475	20,21S		溝125	中世	椀	74			クリ	破片	34-	468
476		20S	溝122 下層	中世	札	53	29	4	ヒノキ	頭部片	-	469
477	382-W126	20S	溝122	中世	杓子状	182	61	7	モミ	一部欠	35-	470
478		20S	溝122 凹地上層	中世	曲物	220	88	3	スギ	一部	-	471
479	378-W61	20S	溝122	中世	円板	199	60	7	スギ	1/5	35-	472

石器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			樹種	残存率	整理 番号	備考
						長(径)	幅(長)	厚				
480		20S	溝122	中世	加工材	183	48	10	ヒノキ	一部	- 473	測
481	281-W29	20S	井戸141	室町	円板	95	90	7	スギ	完存	36- 474	測
482	281-W27	20S	井戸141	室町	椀	72			クリ	2 / 3	28- 475	測
483	378-W63	20S	溝122	中世	加工板材	347	30	5	ヒノキ	一部	34- 476	両端小孔測
484	38-W3	14G	井戸107 第7層	古墳	鋤柄	706	56	25	アカガシ亜属	3 / 4	34- 477	測
485	377-W39	20R	溝122 凹地内	室町	呪符	122	21	3		完存	- 478	墨書き測
486		160	P 4 5 5	中世	柱根	196	290					先が尖がる測
488		130	P 2 7 0	鎌倉	柱根	87	253		マツ属の一種			先が尖がる測
489		16Q	P 6 7	中世	柱根	117	172		マツ属の一種			先が尖がる測
490	381-W114	16R	溝122 2層	中世	椀					1 / 2		測
491	275-W20	19P,Q	井戸139	室町	円板	163	61	16	マツ属の一種	1 / 3		

石器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	型式	計測最大値(mm)			重量 (g)	材質	残存率	備考
							長	幅	厚				
1		16 P,Q	溝111, 112 ?	古墳	錐?	I	44	37.5	23	54.8	(花崗岩)	完形	両端打球
2	151-S33	12F,G	用水路(溝101上部)	不明	錐	I	70	62	34	205.1	巨晶花崗岩	完形	
3	151-S30	13 F	溝101 上部土器溜り下層	古墳	錐	II	83	74	66	644.4	斑頬岩	完形	
4	151-S31	13 F	溝101 中央トレンチ	古墳	錐	II	75.5	52.5	43.5	184.8 ?		完形	表面剝離
5	37-S3	13 G	井戸107 上層	古墳	錐	II	39	33	23	39.8	安山岩	完形	
6	151-S29	11 F	溝101 上部土器溜り下層	古墳	錐	I	103	63.5	44.5	326.7	安山岩	小欠損	片面中央部に打撃
7	151-S32	12 F	用水路(溝101 上部)	不明	錐	II	68.5	54.5	42.5	236.0	石英斑岩	完形	
8	347-S38	17, 18 R	溝122 2層	中世	錐	II	62.5	56	39.5	182.1	流紋岩	完形	
9		14 L	土壤156	室町	錐	I	64.5	52	38	177.8	(花崗岩)	完形	
10		11, 12 L	落ち込み101	古墳	錐	I	79.5	82.5	56.5	532.4	(花崗岩)	完形	
11		10, 11 L	溝111	古墳	錐	I	94	87.5	42	495.8	閃綠岩	完形	周縁に敲打
12		15, 16 Q	溝112	古墳	錐	III	77.5	56.5	39	250.0	花崗斑岩	完形	周囲と中央部敲打
13		15, 16 K,L	溝105 下層	弥生	鎌		36.5	14.5	4.5	2.5	サヌカイト	小欠損	
14			包含層	不明	鎌		21.5	17	3.5	1.0	サヌカイト	小欠損	
15		15 H	P 5 4 9	不明	鎌		15.5	14.5	2.5	0.6	サヌカイト	先端欠	
16	151-S23	13 F	溝101 上部土器溜り下層	弥生	鎌	II	26.5	12	4	1.1	サヌカイト	小欠損	
17	120-S10	15 G,H	溝102 下層	弥生	鎌	II	28	18.5	4	2.1	サヌカイト	完形	
18	120-S9	14 G	溝102 上層	弥生	鎌	I	24.5	17	3.5	1.3	サヌカイト	完形	
19	151-S24	13 F	溝101 上部土器溜り下層	弥生	鎌	II	25	15.5	4.5	1.2	サヌカイト	完形	
20	151-S25	9 E	溝101 上部土器溜り下層	弥生	鎌	II	24.5	10	3.5	0.9	サヌカイト	基部欠	
21	80-S5	12 J	土壤114	弥生	鎌	II	14.5	15	2.9	0.7	サヌカイト	3 / 4	
22	80-S6	12 J	土壤114	弥生	鎌	II	25.5	22	3.5	1.7	サヌカイト	小欠損	
23	151-S22	11 F	溝101 上部土器溜り下層	弥生	鎌	II	22.5	15.8	2.5	0.8	サヌカイト	先端欠	

百間川米田遺跡 3

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	型式	計測最大値(mm)			重量 (g)	材質	残存率	備考
							長	幅	厚				
24		15 H	P 5 3 6	弥生	鐵		30.5	22.5	5	3.6	サヌカイト	完形	
25	316-S37	17 R	土壤183	中世	鐵	I	21	14.5	3	0.9	サヌカイト	小欠損	
26	353-S46	17,18 R	溝122 第3層	中世	鐵	I?	16	17.5	4.5	1.3	サヌカイト	2/3	
27		15,16K,L	溝105 上層	弥生	鐵	III	24.5	11	3.5	1.0	サヌカイト	先端欠	
28	11-S1	15 H	堅穴住居101 中央ピット	弥生	鐵	II	15.5	16	2.5	4.5	サヌカイト	完形?	
29	394-S54	17,18W,X	溝132	中世	鐵	V	20	16	2.5	0.8	サヌカイト	小欠損	
30		14 L	P 7 9 7	弥生	鐵	II	21.5	19	3	1.4	サヌカイト	小欠損	
31		14-16K,L	溝105	弥生	鐵		17	11.5	3	0.8	サヌカイト	基部欠	
32		15 K	P 4 2 0	弥生	鐵		16.5	12	3	0.6	サヌカイト	完形	
33		14-16K,L	溝105	弥生	鐵	I	34	23	5	3.6	サヌカイト	完形?	左右非対称
34		13 N	溝111	古墳	鐵	I	35	16.5	3	1.2	サヌカイト	完形	
35		14-16K,L	溝105	弥生	鐵	II	15.5	15	2.5	0.8	サヌカイト	2/3	
36	404-S58	20 R	包含層 暗褐色土	不明	鐵	I	19.5	14.5	3	0.7	サヌカイト	小欠損	
37	370-S50	20 S	溝122	中世	鐵	II	17	13.5	3.5	0.8	サヌカイト	小欠損	
38		13 L	溝105	弥生	鐵	II?	13	12	2.5	0.4	サヌカイト	先端欠	I型式かも
39			土壤156	室町	鐵?	III	26.5	12.5	3	1.4	サヌカイト	一部欠	
40	120-S11	14,15G	溝102 上層	弥生	錐		23.5	12.5	4	1.7	サヌカイト	1/2	
41	120-S8	14,15G	溝102 上層	弥生	鐵	II	14	14	2	0.5	サヌカイト	1/2	先端欠損
42		11,12K,L	落ち込み101	古墳	スクリーパー		52	68	9	33.6	サヌカイト	1/2	石庖丁か
43		19,20T,U	表土剥ぎ中	不明	スクリーパー?		23	27	5	3.3	サヌカイト	小欠損	
44		15,16K,L	溝105 下層	弥生	スクリーパー		42	63	5	16.2	サヌカイト	完形	
45		15 H	P 5 3 3	不明	スクリーパー?		20.5	19.5	4	1.8	サヌカイト	完形?	
46		15 K	井戸122	鍛倉	スクリーパー		48.5	25	7	7.7	サヌカイト	2/3	石包丁転用
47		15 G,H	溝102 上層	弥生	スクリーパー?		25.2	36	6.5	6.5	サヌカイト	破片	
48		12,13 L	溝105	弥生	石庖丁?		48	74.5	7	22.6	サヌカイト	1/2?	
49		15 G,H	溝102 上層	弥生	スクリーパー		48.2	41	8.5	15.3	サヌカイト	1/2?	
50		11,12K,L	落ち込み101	古墳	スクリーパー		55	52	6.5	18.6	サヌカイト	1/3?	
51		14 L	P 7 9 0	弥生	スクリーパー		42	26	8	8.5	サヌカイト	1/3?	
52		11,12K,L	落ち込み101 土肩断面壁	古墳	スクリーパー?		21	24	3	2.1	サヌカイト	?	
53	151-S26	11D,E	第2トレ 黄灰色粘土層	不明	スクリーパー?		59.5	79.5	12.5	44.4	サヌカイト	完形	
54	76-S4	10I	土壤110	弥生	スクリーパー		37	29.5	8.5	11.3	サヌカイト	小欠損	
55	151-S28	13,14F	溝101 上部土器溜り下層	弥生	スクリーパー		33	20.5	8	6.0	サヌカイト	1/5	
56	151-S27	12F	溝101 上部土器溜り下層	弥生	スクリーパー		41	47	10	17.7	サヌカイト	一部欠	
57		13G	溝102 下層	弥生	スクリーパー?		42	31	8	10.3	サヌカイト	2/3?	
58		14,15G,H	溝102 下層	弥生	スクリーパー		30	42	7.5	11.1	サヌカイト	1/2	
59		14,15G,H	溝102 下層	弥生	スクリーパー		29.5	50.5	8	14.5	サヌカイト	完形	
60	403-S55	11H	現代攪乱	不明	斧		127	65	51.5	761.5	ヒン岩	2/3	
61	120-S19	15 G,H	溝102 下層	弥生	斧		50	68	15	89.0	蛇紋岩	1/4	扁平片刃
62	120-S20	12 G	溝102 下層	弥生	斧		95	67	44	432.5	細粒閃綠岩	1/2	大型蛤刃

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	型式	計測最大値(mm)			重量 (g)	材質	残存率	備考
							長	幅	厚				
63		13,14 Q		不明	敲石?		66.5	62.5	42.5	296.0	(花崗岩)	1/2	頂部に打撃
64	403-S56	13 F	溝101 上方 撥乱	不明	斧		116	75.5	55	770.0	ヒン岩	1/2?	基部
65		13 M	井戸124	平安	砥石		35	40	21	27.8	安山岩(石英・長石)?		
66		14 N	井戸132	室町	砥石		106	80.5	24	356.1	(砂岩)	2/3?	2面使用
67	231-S34	18 T	建物165 柱穴3	中世	砥石		141	74	37	594.5	粘板岩	3/4?	
68		16 R	溝122 2層	中世	砥石		52	21	3	2.9	ギョウ灰岩質 流紋岩	破片	3面使用
69		14 L	P 8 4 8	中世	砥石		150	75	27	453.8	安山岩	3/4	3面使用
70		N-Q	表採	不明	砥石		223	211	85		砂岩	完形	4面使用
71		13,14 Q	表土	不明	砥石		210	70.5	74.5		安山岩	1/2	3面使用
72		16 Q	表土	不明	砥石		103	76	60		流紋岩	完形?	2面使用
73		13 M	井戸125	鎌倉	砥石		219	200	112		砂岩	1/4	1面使用
74	138-S21	13 F	溝101 中央トレンチ	古墳	砥石		101	79	43	265.2	砂岩	小欠損	
75	31-S2	9 G	井戸103 4層	古墳	砥石		119	83	75	1190	砂岩	小欠損	3面使用
76	281-S36	20 S	井戸141	室町	砥石		123	82.5	65	624.0	粘板岩	?	2面使用
77		排水中		不明	敲石磨石		99.5	70.5	37		流紋岩	完形	
78	388-S52	20 S	溝122 張り出し	中世	石鍋		40.5	72.5	17.5	88.3	蛇紋岩		穿孔あり
79		11 L	土壙152	鎌倉	鍋?		61.5	64.5	23	170.8	蛇紋岩(一部 は滑石)?	?	中央に穿孔
80		14 L	土壙156	室町	臼?				28	250.5	(砂岩)	口1/10	半径18.1cm
81		14 O	土壙164	平安	石庖丁	II A	38	77.5	9	30.5	サヌカイト	1/2?	光沢あり
82	84-S7	12 J	土壙116	弥生	錐		27.5	10	4.5	1.0	サヌカイト	完形	
83	120-S18	15 G, II	溝102 上層	弥生	劍		46	24	9.5	12.7	(粘板岩)	小片	磨製
84	350-S41	16,17 R	溝122 貝層	室町	硯		68	86	21		(粘板岩)	1/3	
85	388-S53	20 S	溝125 石組	中世	石帯		20.5	40	7	0.7	蛇紋岩	1/2	
86		14 L	溝105	弥生	石庖丁?		34	49	10.5	16.8	サヌカイト	?	
87		13 G	溝102 下層	弥生	剝片		29.5	24.5	10	5.9	サヌカイト	1/2?	
88		P, Q	包含層	不明	不明		49	44	21.5	674	玄武岩	1/4	
89	403-S57	13 H	表土	不明	不明		82	63	76	538.8	石英斑岩	1/4?	中央両面穴
90		15,16 Q	溝112	古墳	不明		26.5	11	3.5	1.7	結晶片岩	破片	非石器?
91		11,12 L	落ち込み101	古墳	磨石?		50	48.8	50.5	161.4	花崗斑岩	完形	非石器?
92		11,12 L	落ち込み101	古墳	磨石?		69.5	72	48.5	333.4	花崗斑岩	完形	非石器?
93		13,14 N	溝110	古墳	不明		53	64.5	29.5	117.9	(花崗岩)	1/2	表面を研磨
94		20 S	溝122	中世	不明		135.5	55	37	349.9	ギョウ灰岩	完形	石斧に似る
95	370-S51	20 S	溝122	中世	砥石		74	35	35		安山岩	?	使用面3残
96		17 U	溝123 2層	中世	砥石		51.5	53.5	16		ギョウ灰岩質 流紋岩	<1/2	4面使用
97		15 R	溝122 1層	中世	砥石		31	60	12		ギョウ灰岩質 流紋岩	?	2面使用
98	347-S40	17 R	溝122 2層	中世	砥石		43.5	40	12		安山岩	?	4面使用
99		16 R	溝122 1層	中世	コア?		44	45	18		サヌカイト	?	非石器
100	404-S59	14-17 S	表土	不明	砥石		80	50	18		安山岩	?	3面使用
101	350-S45	18,19 R	溝122 中央貝層	中世	砥石		38.5	17	10		ギョウ灰岩質 流紋岩	破片	2面使用

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	型式	計測最大値(mm)			重量 (g)	材質	残存率	備考
							長	幅	厚				
102	350-S43	13,14 R	溝122 貝層	中世	砥石		114.5	48	11		流紋岩	?	3面使用
103	350-S44	16,17 R	溝122 貝層	中世	砥石		75.5	27.5	19.5		安山岩	>1/2	全面使用
104	350-S42	16,17 R	溝122 貝層	中世	砥石		48.5	28	14		流紋岩	?	2面使用
105	353-S47	16,17 R	溝122 3層(貝層下)	中世	砥石		60	29	29		ギョウ灰岩	?	4面使用
106	353-S48	16,17 R	溝122 3層(貝層下)	中世	砥石?		189.5	60	30		流紋岩	小欠損	3面使用

鉄器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			重量 (g)	残存率	備 考	
						長	幅	厚				
1	403-I71	J 区	東西溝		不明	58.5	11.5	6.5	18.4	?		
2	403-I72	F 区	現用水	現代	不明	31.5	38	3	6.6	?	板状。	
3	170-I4	13F	溝101 上部土器溜り	奈良	不明	51.5	24	5.5	22.4	?	板状。湾曲。	
4	170-I2	13F	溝101 上部土器溜り	奈良	釘	35.5	8.5	8	2.9	2/3	断面方形。	
5	170-I1	13F	溝101 上部土器溜り	奈良	不明	107	18	4	25.6	?	板状。湾曲。	
6	170-I3	11,12F	溝101 上部土器溜り	奈良	釘?	27	4.5	4.5	1.1	1/2 ?	断面方形。	
7	403-I73	10H,I	近現代溝上層 II	現代	釘?	37	6	6	1.7	2/3 ?	湾曲。錆化甚大。断面方形。	
8	403-I69	J 区	東西溝		不明	21.5	11.5	10	11.4	?	断面円形。	
9	343-I17	17,18R	溝122 1層	中世	楔?	35	17.5	11.5	10.9	小欠損	铸造品。	
10	343-I12	17,18R	溝122 1層	中世	釘	43.5	23.5	5.5	5.4	1/2	頭部不明。断面方形。	
11	343-I11	17,18R	溝122 1層	中世	釘?	28	17	8.5	6.1	1/3	断面方形。	
12	343-I16	17,18R	溝122 1層	中世	刀子茎?	36	9.5	4	1.7	1/2 ?	断面長方形。	
13	343-I8	17,18R	溝122 1層	中世	釘	49.5	6	6	3.0	3/4	頭部先端欠損。	
14	350-I28	15R	溝122 貝層	中世	釘	65	9.5	7.5	6.0	7/8	先端欠損。	
15	404-I76		溝122 ?	中世	鎌?	41	3.5	6.5	2.5	4/5	手部欠損。取手状のものか。	
16	347-I20	17,18R	溝122 2層	中世	釘	57	6.5	6.5	10.2	4/5	頭部欠損。断面方形。	
17		16,17AA	溝123 3層	中世	釘	68.5	19	25	33.7	3/4	10×8mmの角釘。	
18		16AA	溝123 現代	中世	不明	105	15	2.5	13.4	?	板状。ねじってある。	
19	343-I9	15-17R	溝122 1層	中世	釘	53	7	6	3.3	3/4	頭・先端欠損。断面方形。	
20		15-17R	溝122 1層	中世	釘	25	13.5	7	2.3	1/3	頭部のみ。6.5×4mmの角釘。	
21	343-I10	17,18R	溝122 1層	中世	釘	40.5	17	5.5	7.5	2/3	先端欠損。10×4mmの角釘。	
22	343-I15	17,18R	溝122 1層	中世	釘?	25	12	7	4.9	1/2	頭部が丸味もち楔に似る。	
23	343-I18	17,18R	溝122 1層	中世	不明	23.5	23.5	5	7.2	?	板状。	
24			確認 1 T r.	不明	釘	25	31	13.5	16.4	1/4	頭部のみ。断面方形。	
25	347-I25	18,19R,S	溝122 2層	中世	不明	20	20.5	4	3.1	?	板状。	
26	353-I34	16,17R	溝122 3層(貝層下)	中世	釘	49.5	12	17.5	10.6	2/3	先端欠損。8.5×6mmの角釘。	
27	347-I19	16R	溝122 2層	中世	釘	38.5	16	14	10.1	1/2	先端欠損。11×8mmの角釘。	
28	350-I30	18R	溝122 貝層	中世	釘	22.5	8	5	1.7	1/2	頭が丸味もつ。4.5×5mmの角釘。	
29	350-I29	18R	溝122 貝層	中世	釘?	54.5	5	4.5	4.8	2/3 ?	鎌か。屈曲。断面方形(4×5mm)。	

番号	掲載図 ・遺物 番 号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			重量 (g)	残存率	備 考
						長	幅	厚			
30		15-17AA	現代溝or表土	現代	不明	92.5	18	8	26.5	?	板状。
31		15AA	現代溝or表土	現代	不明	85.5	7.5	7.5	15.0	?	断面円形。把手に似る。
32	395-168	18W-X	溝133	中世	釘?	28	6	6.5	2.1	?	なかほどで屈曲。断面方形。
33	347-124	18,19R,S	溝122 2層	中世	不明	46	18	14	35.3	?	断面台形。
34		18,19R,S	溝122 2層	中世	釘?	19.5	7	6.5	1.0	1/3?	頭部・先端部欠損。断面方形。
35	347-121	16Z	溝123 2層	中世	釘?	57.5	15	8.5	6.9	3/4	頭部・先端部欠損。断面方形。
36		17R	溝122 3層	中世	不明	45.5	19	4	4.2	?	鋸で器形等不明。
37	343-113	16R	溝122 1層	中世	釘	42.5	16	8.5	9.6	2/3	先端欠損。断面長方形12.5×4.5 mm
38	353-135	17U	溝123 3層	中世	釘?	31.5	10.5	5.5	2.1	1/2?	頭・先端欠。断面方形(6.5×5mm)。
39	350-133	16,17R	溝122 貝層	中世	鋸?			11	60.5	1/15?	口径不明。
40	353-136	17V	溝123 3層	中世	鋸先	56	103	13.5	132.8	1/4	袋穂が欠損。
41		16Z	溝123 2層	中世	キセル				3.0	?	縁膏がういている。
42	317-17	17S	土壌184	中世	不明	13	26	6	2.5	?	板状。
43	347-123	17U	溝123 2層	中世	釘	31	4	3	5.2	1/2	両端欠損。断面方形。
44		14L	P 8 3 3	鎌倉	釘	26	7.5	6	1.6	1/2	両端欠損。断面方形。
45		16Q	土壌176	鎌倉	不明	28.5	16	6	2.8	?	釘の頭か。
46		12N	P 1 4 2	鎌倉	釘?	38.5	9	8	2.6	1/2?	両端欠損。断面方形。
47		10K	土壌207	江戸	釘?	12	4	5	0.9	1/6?	断面方形。
48		14N	P 3 8 5	中世	不明	16	11	1	2.0	?	管状のものか。剝離が進行。
49		16Q	P 8 4	中世	不明	28.5	13.5	4	1.6	?	板状。
50		10L	堀101 柱穴1	室町	釘	24.5	4	5.5	2.3	1/2	頭部欠損。屈曲。断面方形。
51		130	建物138 柱穴7	鎌倉	釘	16.5	11	10	1.0	1/3	先端欠損。6.5 × 4mmの角釘。
52		13-15N,0	表土	現代	釘	19.5	5	4	0.6	1/4	頭部は生きているか。
53		13N	井戸130	鎌倉	釘	27.5	3.5	3.5	0.3	1/2	両端欠損。断面方形。
54	370-149	20S	溝122	中世	釘	33	10	11	5.6	2/3	先端欠損。7.5 × 5mmの角釘。
55	370-148	20S	溝122	中世	釘?	23	5.5	3	0.9	1/3?	両端欠損。断面方形。
56	404-174	20,21R	暗灰褐色土層	不明	釘	50.5	7	17	3.2	小欠損	断面方形。
57	388-154	20S	溝122 張り出し部	中世	釘	40	14	11	6.1	2/3	まがっている。10 × 5mmの角釘。
58	388-164	21S	溝122 張り出し部	中世	釘	27.5	16	8	6.9	1/3	両端欠損。断面方形。
59	388-161	21S	溝122 張り出し部	中世	釘	23	7	7.5	1.3	1/2	先端欠損。6 × 5mmの角釘。
60	388-153	21S	溝122 張り出し部	中世	釘	39	8	12	3.1	2/3	先端欠損。7 × 5mmの角釘。
61	388-152	21S	溝122 張り出し部	中世	釘	55	8	8	3.8	9/10	先端欠損。6 × 5.5mm の角釘。
62		19U	表土	現代	鎌	42.5	7	4.5	3.2	1/2	釘の可能性もあり。
63	359-141	20S	溝122 貝層中	中世	釘?	60	6	6	6.9	3/4	ねじまがる。両端欠損。断面方形。
64	388-157	21S	溝122 張り出し部	中世	釘	21.5	5	4	1.4	1/3	頭部欠損。断面方形。
65	364-145	20S	溝122 最下層	中世	不明	63.5	15.5	10.5	14.1	?	両端欠損。
66	364-144	20R,S	溝122 最下層 貝層中	中世	錐	43.5	3	3.5	1.5	?	捻ってある。先端欠損。
67	388-156	20T	溝125	中世	釘?	20.5	6	4	0.7	1/3	4.5 × 3.5 mmの角釘。頭に丸味。
68			表土	現代	釘?	23	11	6	3.1	?	断面方形。

百間川米田遺跡 3

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			重量 (g)	残存率	備考
						長	幅	厚			
69			表土	現代	錐	25.5	4.5	3.5	0.8	?	先端残存するか。捻ってある。
70	359-139	19S	溝122 中層	中世	錐	44	6	5	1.5	?	捻ってある。両端欠損。
71	359-138	20S	溝122 上層(上部)	中世	不明	32.5		4	3.7	?	環状。絞具か。
72	388-162	20S	溝125 石組	中世	釘	48.5	4.5	4	0.9	3/4	両端欠損。断面方形。
73	370-150	20S	溝122	中世	鋸先?	25	58.5	9.5	4.5	1/6	錆化甚大。
74	404-175	20S	溝122	中世	釘	18	3.5	3	0.1	1/3	両端欠損。断面方形。
75		19S	溝122 中層	中世	不明	30	32	6	5.6	?	板状。周縁欠損。
76	359-140	19S	溝122 中層	中世	不明	31	33.5	5.5	5.4	?	一辺残存。段あり。
77		20T	床土	現代	釘?	22.5	4.5	4.5	0.8	1/3	まがる。両端欠損。断面方形。
78		20T	床土	現代	釘?	27.5	5.5	5.5	2.4	1/3	まがる。両端欠損。断面方形。
79	364-147	20S	溝122 下層	中世	不明	46.5	63	5	48.5	?	板状。若干湾曲か。
80	388-163	21S	溝122 張り出し部	中世	錐	38.5	7	4.5	1.5	?	捻ってある。
81	359-142	20S	溝122 貝層中	中世	不明	30	30.5	5.5	6.5	?	板状。
82	281-16	20S	井戸141 井戸内	室町	不明	30		5	8.9	?	板状。周縁欠損。鋳造。
83	364-146	20S	溝122 下層	中世	不明	44	62.5	6.5	25.4	?	表面錆化。鋳造。
84	388-159	21S	溝122 張り出し部	中世	錐	20	5	3.5	0.5	?	両端欠損 捻ってある。
85	388-158	21S	溝122 張り出し部	中世	釘?	16.5	4	4.5	0.5	1/4	両端欠損。断面方形。
86	388-155	21S	溝122 張り出し部	中世	釘	30	7.5	7.5	1.9	小欠損	5×5.5 mmの角釘。
87	388-165	21S	溝122 張り出し部	中世	不明	23	30	4.5	7.1	?	板状。周縁欠損。
88	388-166	21S	溝122 張り出し部	中世	不明	29	36	4	4.3	?	湾曲。鍋のようなものか。
89		20R	暗褐色土	不明	釘?	19.5	5.5	5.5	1.7	1/2?	鏽ぶくれ。両端欠損。断面方形。
90		20S	溝129	中世	釘?	28	6	4.5	0.9	1/3	両端欠損。断面方形。
91		19S	表土	現代	不明	29.5	49	7.5	11.4	?	鋳造。もりあがった部分がある。
92	388-160	21S	溝122 張り出し部	中世	釘?	20.5	9	6	1.8	?	両端欠損。断面方形。
93	364-143	20S	溝122 下層	中世	釘?	37	4	4	1.3	2/3?	両端欠損。断面方形。
94		14L	土壙156	室町	釘	37.5	11.5	9	4.7	1/2	先端欠損。10.5×5.5 mmの角釘。
95		130	P 5 6 1	室町	釘?	47	10	9.5	6.6	2/3	両端欠損。断面方形。
96		12.13L	溝105	弥生	不明	32	6	3.5	1.1	?	羽子板状。断面方形。
97		16Q	溝121	平安	釘	32.5	12.5	6	13.7	1/3	錆化甚大。12.5×5.5mmの角釘。
98		16Q	溝121	平安	釘	51	8.5	7.5	5.3	3/4	頭が丸く薄い。断面方形。
99		13Q	南端淡灰黃褐色砂質土	不明	釘	95.5	20.5	26.5	45.2	ほぼ完	9.5×9.5mmの角釘。先端欠損。
100		11L	土壙152	鎌倉	釘?	40	7	7	2.6	2/3	両端欠損。断面方形。
101		130	建物138 柱穴3	鎌倉	釘?	29	16	7.5	5.4	?	頭部か。断面方形。
102		16Q	暗褐色粘性土	不明	釘	20	4	4	0.6	1/3	断面円形。
103		11,12K,L	包含層	不明	釘?	33	5.5	7.5	4.2	1/2	頭部蒲鉾形。先端欠損。断面方形。
104		11,12K,L	建物126 柱穴11	室町	釘?	16.	3.5	3.5	0.6	1/5	両端欠損。断面方形。
105		15,16Q	溝112	古墳	釘?	29.5	6	5	1.1	1/2	両端欠損。断面方形。
106		12N	井戸127	鎌倉	釘	30	5.5	6	1.5	1/2	両端欠損。断面方形。
107		13N	P 2 0 0	中世	釘?	30	5	4	0.7	1/2	両端欠損。断面円形。

銅器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			重量 (g)	残存率	備考
						長	幅	厚			
108		13N	P 2 0 0	中世	釘?	23	4.5	4	0.4	1/3	両端欠損。断面円形。
109		13N	井戸126	平安	釘	38	13	16	10.7	2/3	鎌化甚大。先端欠損。
110		14,15Q	溝115	平安	釘?	19	11	7	1.7	?	断面方形。
111		12N	建物137 柱穴2	鎌倉	釘?	27.5	5.5	5.5	2.2	1/3	両端欠損。断面方形。
112	350-127	14 R	溝122 貝層	中世	釘	89.5	6.5	7		完形	先端小欠損。5×8mmの角釘。
113	350-131	14 R	溝122 貝層	中世	?	29	14	4		?	釘の頭か。
114	350-132	14 R	溝122 貝層	中世	鋸先	61	112	12		?	刃部は若干欠損。
115	347-126	13-15 R	溝122 2層	中世	蓋?	106.5	72.5	18.5		?	中央につまみ状のものあり。
116		15 I	土塙149	鎌倉	?	105	17	10	23.5	?	両端欠損。
117			遺構検出中	不明	釘	55	10.5	9	10.6	?	両端欠損。
118			遺構検出中	不明	釘	35	6.5	6	1.7	?	両端欠損。断面ほぼ正方形。
119			下流部包含層	不明	釘	42.5	8	7.5	5.2	?	両端欠損。下端部曲がる。
120		17-19Q,R	溝122	中世	釘	24	9.5	9	4.3	?	両端欠損。
121		15 K	井戸122	鎌倉	釘	63	6.5	5	2.0	1/2	両端欠損。残存悪し。
122			井戸133	室町	釘?	21	9.5	7	1.1	?	両端欠損。頭部に近い部分か。
123		17-19Q-Z	溝123	中世	釘	15	9.5	6	1.6	?	両端欠損。
124			遺構検出中	不明	釘	17.5	6	4	0.8	?	先端欠損。3.5×2.5mmの角釘。

銅器一覧表

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			重量 (g)	残存率	備考
						長	幅	厚			
1	359-B8	19S	溝122 中層	中世	柄?	36.9	11.5	3.6	6.2	一部	花文浮彫付薄板
2		21S	溝122 張出し貝層	中世	錢貨	25.6		1.4	4.3	完形	永楽通寶 初鑄1408年
3		21S	溝122 張出し貝層	中世	錢貨	25.4		1.1	3.8	完形	元祐通寶?B 初鑄1086年
4		20S	溝122 下層	中世	錢貨	24.2		1.0	3.1	完形	元通寶
5		20S	溝122 最下層貝層	中世	薄板	(32.6	(28.5	1.4	5.8	一部	
6		20S	溝125 貝層	中世	錢貨	23.0		1.6	4.0	完形	洪武通寶? 初鑄1368年
7		20S	溝125 下層(石組)	中世	錢貨	20.0		0.9	1.4	完形	元祐通寶A 初鑄1086年
8		140	N o. 2 2 (柱穴)	鎌倉	錢貨	23.8		1.5	4.1	完形	至和元寶E 初鑄1055年
9		11,12K,L	建物126 柱穴18	室町	錢貨	23.2		1.2	1.6	完形	判読不能
10		10K	土塙207	江戸	錢貨	24.1		1.2	1.9	完形	洪武通寶C 初鑄1368年
11		16P	P 5 0 2	鎌倉	錢貨	24.3		1.0	2.8	完形	開元通寶F 初鑄621年
12		13L	P 9 4 4	中世	錢貨	23.8		1.2	2.7	完形	元符通寶D 初鑄1098年
13		10K	P 1 0 6 i	鎌倉	錢貨	24.2		0.9	1.9	完形	政和通寶B 初鑄1111年
14			包含層	不明	煙管?	(29.7	10.6	0.5	1.6	一部	管状
15			包含層	不明	錢貨	24.3		1.2	3.0	完形	淳化元寶C 初鑄990年
16			遺物検出中	不明	錢貨	24.4		1.2	2.5	完形	寛永通寶 初鑄1726年
17		17T		不明	錢貨	24.6		1.2	2.2	完形	皇宋通寶H 初鑄1038年

百間川米田遺跡 3

番号	掲載図 ・遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	計測最大値(mm)			重量 (g)	残存率	備考
						長	幅	厚			
18		16N	井戸134	室町	銭貨	23.5		1.4	3.2	完形	治平元寶 A?
19	229-B5	18Q	建物164 柱穴3	鎌倉	銭貨	25.0		1.2	2.7	完形	聖宋元寶 F?
20	229-B4	18Q	建物164 柱穴3	鎌倉	銭貨	24.9		1.0	2.9	完形	皇宋通寶 J
21	212-B1	170	建物148 柱穴6	鎌倉	銭貨	24.3		1.1	3.0	完形	景德元寶
22	212-B2	170	建物148 柱穴6	鎌倉	銭貨	24.3		1.1	3.1	完形	景德元寶
23	212-B3	170	建物148 柱穴6	鎌倉	銭貨	24.9		1.2	3.2	完形	天聖元寶 C
24		160	P 2 4 2	中世	銭貨	23.8		1.4	3.6	完形	嘉祐通寶 F?
25	347-B6	16R	溝122 2層	中世	煙管	(44.0	14.7	(5.3	3.0	一部欠	
26		16R	溝122 2層	中世	銭貨	24.4		1.2	2.0	完形	熙寧元寶 E
27		16R	溝122 1層	中世	銭貨	24.2		1.1	2.3	完形	元祐通寶 A
28		18R	溝122 断面①	中世	銭貨	25.1		1.6	4.5	完形	元寶or 元通寶
29		15R	溝122 2層	中世	銭貨	24.1		1.2	3.5	完形	皇宋通寶 ?
30		15R	溝122 2層	中世	銭貨	25.1		1.0	3.2	完形	祥符元寶
31		14R	溝122 2層	中世	銭貨	23.0		1.3	3.4	完形	洪武通寶 C
32		18R	溝122 3層	中世	銭貨	24.9		1.2	3.1	完形	景德元寶 ?
33		17R	溝122 3層	中世	銭貨	25.1		1.1	3.6	完形	元豐通寶 D?
34		17R	溝122 3層	中世	銭貨	25.1		1.0	2.9	完形	元豐通寶 E?
35		17R	溝122 3層	中世	銭貨	23.9		1.0	3.0	完形	治平元寶 ?
36		17R	溝122 3層	中世	銭貨	24.5		1.0	3.4	完形	元豐通寶 B
37		17R	溝122 3層	中世	銭貨	24.5		1.4	4.2	完形	紹聖元寶 A?
38	353-B7	15R	溝122 3層	中世	輪	23.4	21.0	2.8	1.9	完形	耳環状
39		14R	溝122 3層	中世	銭貨	24.7		1.0	2.5	完形	宣和通寶 B
40		14R	溝122 3層	中世	銭貨	23.0		1.4	2.9	完形	判読不能
41		15R	溝122 3層	中世	銭貨	24.0		1.4	3.3	完形	元寶
42		14-17R-W	表土	不明	銭貨	22.9		1.4	3.3	完形	寛永通寶
43				不明	銭貨	(23.4		1.0	1.1	1 / 2	判読不能

骨角器一覧表

遺物 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	器種	型式	計測最大値(mm)			重量 (g)	種名	残存率	備考
						長	幅	厚				
1	15M	P 6 8 4	平安	栓?		31	17	16	9.1	ニホンジカ角	完形	
2	19S	溝122 下層	中世			126	29.5	26		ニホンジカ角(幼体)		
3	18,19S	溝122 中央貝層	中世	刺突具?		135	27.5	21	35.3	ニホンジカ角(幼体)	完形	先端を加工
4	14,15R	溝122 3層	中世			133.5	49	19	74.6	ニホンジカ角	一部欠	人為的に刺いだ痕

土錐一覧表

番号	規範図 番号	出土 地区	遺 跡 名・層 位	時代	型 式	計測最大値 (cm)		重量 (g)	胎 土	焼 成 色	調 色	残存部	備 考
						長	幅						
1	150-C5	12P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A I	87	31	78.4	0.5 ~ 1 mmの粒子多く含む	良	淡灰色~淡褐色	完形	
2	150-C6	13P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A I	87.5	32.5	82.8	0.5 ~ 1 mmの粒子多く含む	良	淡灰(黄)色 黒斑有り	完形	
3	150-C7	11P	用水路 (溝101 上部)		A I	100	32	96.0	0.5 mm以下の粒子多く含む	良	淡褐色 黑斑有り	完形	
4	150-C8	13P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A I	111.5	34.5	134.8	0.5 mm以下の粒子多く含む	良	淡黄色	完形	
5	150-C9	13P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A II?	54	27.5	23.8	1 mm内外の粒子含む	やや良	明灰黃色	1/4	
6	150-C11	13P	溝101 上部及び近世用水	古墳	A I	72	31	42.3	1 mm以下の粒子、均質	良	淡灰黄色	1/2	
7	41-C3	13II	井戸109 1 ~ 3層	古墳	A I	52	40	42.0	2 mm以下、粒子は揃わない	良	暗灰黄色 黑斑有り	1/4	
8		10J	池101	江戸	B I	30	39	32.8	0.5 ~ 1 mmの粒子を含む	良	灰褐褐色 (繊状)	1/4	
9		11,12L	落ち込み101	古墳	A I	84	32	8	3 mm以下の粒子、粗い	良	褐色	小欠損	
10		11,12K,L	落ち込み101	古墳	A I	60	39	15.5	71.4 1 ~ 2 mmの大粒子を含む	良	淡黃色淡黄色 黑斑有り	2/3	
11		13N	溝	古墳	A I	60.5	36	15	94.7 1 mm以下の粒子	良	灰黄色 赤褐色 (繊状)	完形	
12		11,12K,L	包合層		A I	96.5	40	13.5	0.5 mm以下の粒子多く含む	良	明褐色 (繊状)	小欠損	
13		11,12K,L	落ち込み101	古墳	A I	97	32.5	14.5	48.2 0.5 ~ 1 mmの粒子多く含む	やや良	淡灰黄色 (繊状)	1/3	
14		11,12K,L	落ち込み101	古墳	A I	74	35.5	12	29.1 1 mm以下の粒子多く含む	良	淡褐色 (繊状)	1/3	
15		15I	井戸114 梓外	古墳	A I	66.5	34	13	62.9 0.5 ~ 1 mmの大粒子を含む	良	灰黄色	2/3	
16	255-C69	15L	井戸123	鐵倉	A I	89.5	48.5	15	144.1 0.5 mm以下の細粒子多し	良	淡灰(橙)色	完形	
17	159-C36	15L	井戸119	奈良	A II①	81.5	27.5	9.5	58.9 0.5 ~ 1 mmの粗粒子多し	良	にぶい橙色	完形	
18		11,12K,L	包合層		A II①	86	26	8	56.1 1 mm粒子多く、2 ~ 3 mm若干	良	淡橙色 (繊状)	小欠損	
19		11,12K,L	落ち込み101	古墳	A II①	81	27.5	7.5	59.7 0.5 ~ 1 mm粒子を含む	やや良	明橙色 (繊状)	小欠損	
20	150-C13	11P	用水路 (溝101 上)		A II②	73	26	8.5	51.2 1 mm内外の粒子多し	やや良	淡灰黄色 (繊状の橙色)	小欠損	
21	150-C14	13P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A II②	71	24.5	7.5	42.4 1 mm内外の粒子少なめ	やや良	黃橙色	小欠損	
22	150-C15	13P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A II②	67	28	8	42.3 1 mm以下の細粒子少なめ	不良	にぶい橙色	3/4	
23	150-C12	14,13P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A II②	35	30	12	22.0 1 mm程度の粒子少なめ	やや良	灰蒙色、暗灰色	1/2	
24	150-C19	12P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A II②	71	25	8	32.1 1.5 mm以下の粒子含む	やや良	淡橙色	2/3	
25	150-C25	12P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A II②	40.5	26.5	9	21.4 0.5 mm程の細粒子含む	不良	明灰黃褐色	1/2	
26	150-C20	12P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A II②	74.5	27	12	66.6 1 mm以下の粒子少なめ	不良	淡灰黄色 明褐色	3/4	
27	150-C21	12P	溝101 上部甕部部分	古墳	A II②	60.5	27.5	9	37.6 0.5 mm未満粒子種、均質	やや良	にぶい橙色	3/4	
28	150-C22	13P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A II②	50	30	12.5	19.6 0.5 mm未満粒子種、均質	良	にぶい橙色	1/4	
29	150-C24	13P	溝101 上部土器割り下層	古墳	A II②	44.5	28.5	10	32.2 1 mm以内の粒子含む、地質	やや良	淡灰黄色 暗灰色	1/3	

番号	掲載図 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	型式	計測最大値 (mm)		重量 (g)	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
						長	幅							
30	150-C23	13F	槽101 上部及び近世用土	古墳	A II ②	52	29	11	20.4	1 mm 以内粒子含む、胎土細	やや良	暗灰黄色	灰黒色	1/3
31	41-C1	13H	井戸109 , 1 ~ 3 層	古墳	A II ②	51	28	10	34.2	1.5 mm 程の粒子含む	良	灰黄色	黒斑有り	2/3
32	41-C2	13H	井戸109 , 1 ~ 3 層	古墳	A II ②	38	29	13	10.5	1 mm 以下の粒子多め、均質	良	灰黑色		1/4
33	150-C26	11F	槽101 上部土器窓下層	古墳	A II ②	33.5	25.5	10	11.2	0.5 ~ 1 mm 2 ~ 4 mm の粒子	良	淡灰黄褐色		1/4
34	150-C17	11F	槽101 上部土器窓下層	古墳	A II ②	67.5	27.5	11.5	49.3	0.5 mm 以下の粒子多し	良	暗灰黄褐色		完形
35	150-C16	13F	槽101 上部土器窓下層	古墳	A II ②	72	23	6.5	36.3	1 mm 程の粒子多く含む	良	淡灰黄色		小欠損
36	13N,14N	槽111		古墳	A II ②	62	27	8.5	46.7	0.5 ~ 1 mm 程の粒子多し	良	淡灰褐色		小欠損
37		30,140	槽112	古墳	A II ②	76.5	27.5	10	59.1	3 mm 以下の粒子、不均質	不良	黃褐色		小欠損
38		16P, Q	槽111 or 112	古墳	A II ②	71.5	30.5	11.5	67.0	1 mm 前後の粒子多い	やや良	暗灰褐色		小欠損
39		111,12K,L	建物126	室町	A II ②	20	26	10	11.0	1 mm 以下の粒子含む	良	淡灰黄色		1/3
40		13N,14N	槽111	古墳	A II ②	68.5	27.5	8.5	51.0	0.5 ~ 1.5 mm の粒子多し	良	淡赤褐色		完形
41		13N,0	槽112	古墳	A II ②	67.5	28	8	52.1	1 ~ 1.5 mm の粒子やや多し	良	にぶい黄褐色	暗灰白色	小欠損
42		13N,0	槽112	古墳	A II ②	76	27	8	55.2	1 mm 以下の粒子含む	良	淡灰黄色		小欠損
43	P, Q	匂合層		古墳	A II ②	69	27	9	34.6	1 mm 以下の粒子含む	良	黃白色		2/3
44		11,12K,L	落ち込み101	古墳	A II ②	32	25.5	8	8.8	1 mm 以下の粒子、均質	良	暗灰黄色		1/4
45		12N,0	槽112	古墳	A II ②	64	28	12	25.4	0.5 mm 程の粒子含み、均質	やや甘	にぶい黄褐色		1/3
46		13,14N	溝110	古墳	A II ②	63.5	30.5	9	56.8	1 mm 以下の粒子を多く含む	良	暗灰黄色	赤褐色	完形
47		13,14N	槽110	古墳	A II ②	31.5	20.5	7	6.8	1 mm の粒子多、2 ~ 3 mm 稀	やや甘	暗赤色	灰黄色	1/6
48		13,14N	溝110	古墳	A II ②	51.5	23	7	12.9	1 mm 以下の粒子やや多し	良	灰黄色		1/3
49		13,14N	溝110	古墳	A II ②	74	25.5	9	43.6	1.5 mm 以下の粒子含む	良	淡灰黄色		3/4
50		12,13 L	槽105	新生	A II ②	70.5	28	9	57.4	1 mm の粒子粗く含む	良	淡橙色	(繊状)	完形
51		14 L	P 8 4 8	中世	A II ②	61	28	9.5	41.6	0.5 ~ 1 mm 比較的多く含む	良	黃白色	灰白色 (繊状)	小欠損
52		11,12 L	溝110	古墳	A II ②	61	26	6.5	33.4	1 mm 以下の粒子含む	良	赤褐色	淡黄橙色 (繊状)	9/10
53		11,12 L	落ち込み101	古墳	A II ②	74	25	8	45.9	1 mm 以下の粒子含む	良	赤褐色	黃白色 (繊状)	完形
54		12 L	P 1 0 0 2	糞食	A II ②	37	23	5	8.2	1 mm 以下の粒子含む	良	暗灰色		1/4
55		13 N	溝111	古墳	A II ②	34	23	9	9.5	1 mm 未満の粒子やや少なめ	やや良	暗灰色		1/4
56		11,12 K,L	落ち込み101 上層断面壁	古墳	A II ②	43	27	8	11.6	0.5 mm 程度の粒子含む	良	淡橙色		1/3
57		12,13 L	槽105	新生	A II ②	55	25	6	11.8	1 mm 程度の粒子含む	良	にぶい橙色	灰黄色	1/3
58		12,13 L	溝105	新生	A II ②	69	32.5	9	64.3	1 mm 程度の粒子含む	良	淡黄色		3/4
59		15 P, Q	暗褐色粘性砂質土		A II ②	62	26	10	43.7	0.5 ~ 1.5 mm の粒子まばら	良	淡黄色		5/6

番号	掲載図 番	出土 地区	遺構 名・層位	時代	型式	計測最大値 (mm)	重量 (g)	胎 土	焼成 色	調 査率	備 考
					長 幅 厚						
60	14 N P 7 3 4	鐵食	A II ②	64.5	27.5	8	51.7	1 mm未満の粒子、2 mm以上	良	淡黄色	淡橙色
61	11,12 L 落ち込み101	古墳	A II ②	63	28	7.5	42.4	0.5 ~ 1 mmの大粒子含む	良	明赤褐色	(繊状)
62	13-15N,0 表土		A II ②	64	28.5	10	45.1	0.5 ~ 2 mmの大粒子含む	良	淡黄色	灰白色の帶
63	13N 滑111	古墳	A II ②	73.5	30	8.5	60.0	0.5 ~ 3 mmの大粒子を含む	良	灰黄色	黒斑有り
64	11,12 L 落ち込み101	古墳	A II ②	41.5	22	8	8.4	粒子の細かい粘土	良	灰色	
65	11,12 L 落ち込み101	古墳	A II ②	34.5	23.5	8	7.0	0.5 mm以下の粒子、均質	良	淡灰黄色	
66	11,12 L 落ち込み101	古墳	A II ②	40.5	26.5	12	8.5	細かい粒子	良	淡灰黄色	
67	11,12K,L 包含層		A II ②	70.2	27	10	46.0	0.5 ~ 1 mmの粒子含む	良	淡黄褐色	(繊状)
68	11,12K,L 包含層		A II ②	61	27.5	8.5	42.9	0.5 ~ 2 mmの大粒子を含む	良	淡橙色	(繊状)
69	11,12K,L 包含層		A II ②	62	28.5	10	62.9	1 mm未満の粒子を含む	良	淡灰黄色	(繊状)
70	11,12K,L 包含層		A II ②	61	28	10	49.4	1 mm未満の粒子を含む	良	淡橙色	帶状に盤色灰黄色
71	14 N,0 滑111	古墳	A II ②	69	29	11	59.4	0.5 ~ 3 mmと不揃い	良	赤褐色	部分的に淡橙色
72	11,12K,L 包含層		A II ②	72	25	7	42.3	1 mm未満の粒子を含む	良	橙色	(繊状)
73	10-14K,L 表土		A II ②	68.5	25.5	9	45.4	1 ~ 3 mmの粒子多、不均質	良	淡橙色	(繊状)
74	13 N 滑111	古墳	A II ②	73	28	7.5	54.4	1 mm以上の粒子を含む	良	淡灰黄色	(繊状)
75	11,12K,L 落ち込み101	古墳	A II ②	47.5	27	7	20.5	1 mm程の粒子を含む	良	淡灰褐色	(繊状)
76	13,14N,0 滑111	古墳	A II ②	73	27.5	8	60.0	0.5 mm以下の粒子多く含む	良	赤褐色	
77	11,12K,L 落ち込み101	古墳	A II ②	76.5	27	10	60.4	0.5 ~ 3 mmの粒子粗い	良	淡灰黄色	部分的に明橙色
78	13,14N,0 滑111	古墳	A II ②	68.5	27.5	10	56.0	1 mm以下の粒子多く含む	良	淡灰褐色	(繊状)
79	14 N,0 滑111	古墳	A II ②	63	27.5	8	40.7	0.5 ~ 3 mmの粒子、粗目	良	明橙色	
80	11,12K,L 落ち込み101	古墳	A II ②	47	27	8	14.2	0.5 ~ 1 mmの粒子含む	良	灰黄色	部分的に灰褐色
81	11,12K,L 包含層		A II ②	72.5	27.5	8.5	60	0.5 ~ 1 mmの粒子、不均質	良	灰黄色	部分的に淡橙色
82	11,12K,L 落ち込み101	古墳	A II ②	40.5	25	7	20.4	0.5 ~ 2 mmの粒子を含む	良	明橙色	
83	10-14K,L 表土		A II ②	57	26.5	8	18.4	0.5 ~ 1 mmの粒子を含む	良	橙色	
84	13,14N,0 滑111	古墳	A II ②	59	30.5	11	62.2	1 mm未満の粒子均質に含む	良	灰黄色	黒斑 1 / 2
85	13,14N,0 滑111	古墳	A II ②	71.5	30	12	49.0	0.5 ~ 1.5 mmの大粒子を含む	良	暗灰黄色	
86	11,12K,L 落ち込み101	古墳	A II ②	64	25	7.5	42.0	0.5 mm以下の粒子多し	良	淡灰色	暗灰色
87	10-14K,L 表土		A II ②	32	25	10	9.2	1 ~ 5 mmの粒子、粗い	良	淡灰黄色	
88	11,12K,L 落ち込み101	古墳	A II ②	66	24	8	46.8	0.5 ~ 1 mmの粒子多し	良	淡灰褐色	(繊状)
89	10-14K,L 表土		A II ②	32.5	26	8.5	8.9	1 mm以下の細かい粒子含む	良	明橙色	

番号	揭露箇所番号	出土地区	遺構名・層位	時代	型式	計測最大値 (mm)	重量 (g)	胎土	焼成	色	觸	残存率	備考
90		11.12K,L	落ち込み101	古墳	A II ②	38	29	9.5	15.4	0.5 ~ 5 mm粒子含むも精良	良	淡灰黄色 (縮状)	1/4
91		10-14K,L	表土		A II ②	53	25.5	10.5	19.2	0.5 ~ 1.5 mmの粒子不均質	良	淡灰黄色	1/3
92		11.12K,L	落ち込み101	古墳	A II ②	40.5	23	11	12.8	0.5 ~ 1.5 mmの粒子、精良	良	灰黄色	1/4
93		11.12K,L	落ち込み101	古墳	A II ②	48	24	12.5	14.4	1 mm未満の粒子を若干含む	良	暗灰黄色 部分的に明褐色	1/3
94		11.12K,L	落ち込み101	古墳	A II ②	47	27	13	14.9	0.5 mm程度の粒子、精良	不良	灰黄色	1/5 土壌が凝固
95		11.12K,L	落ち込み101	古墳	A II ②	30	23	9.5	7.6	0.5 mm程度の粒子、精良	不良	灰色	1/6
96		11.12K,L	落ち込み101	古墳	A II ②	72	23	7.5	18.3	2 mm以下の粒子、粗い	不良	淡灰黄色 (縮状)	1/3
97		11.12K,L	包含層		A II ②	67.5	24	7	15.7	1.5 mm以下の粒子、不均質	良	淡褐色	1/2
98		11.12K,L	包含層		A II ②	53	26	6	14.0	2 mm以下の粒子、不均質	良	淡紫色	1/3
99		11.12K,L	落ち込み101	古墳	A II ②	59	25	9.5	11.8	0.5 mm以下の細かい粒子	やや良	淡褐色 (縮状)	1/5
100	13 N	井戸26 ②			A II ②	74	27.5	10	61.7	0.5 ~ 1 mm程の粒子多し	良	淡褐色	小矢損
101	353-C103	18 R	薄122 3層	中世	A II ②	65	27.5	7.5	46.0	0.5 ~ 1 mm程の細粒子多し	良	淡灰黄色	完形
102	343-C85	16 R	薄122 1層	中世	A II ②	49.5	30	9.5	44.1	0.5 mm程の粒子多く、均質	良	淡灰黄色	1/2
103	17 Q	薄111 ~ 113		古墳	A II ②	63.5	24	8	33.9	0.5 ~ 1 mmの粒子を含む	良	にぶい橙色	3/4
104		遺構検出中			A II ②	66.5	27	8.5	49.4	0.5 ~ 1 mmの粒子多く含む	良	淡灰黄色	小矢損
105		下流部包含層			A II ②	52.5	29.5	12.5	29.7	0.5 ~ 1 mmの粒子を含む	良	灰褐色 黒褐色	1/4
106	150-C33	13F	薄101 西トレンチ	古墳	A?	65.5	39	11	72.5	1 mm以内の粒子含む	やや良	にぶい黄褐色	小矢損
107	157-C35	11 J	井戸118 井筒内	奈良	A III	66.5	42	17.5	117.3	0.5 ~ 1 mmの粒子多く含む	良	灰黑色	完形
108	157-C34	11 J	井戸118 墓土下層	奈良	A III	68.5	41	14.5	114.5	1 mm前後の粒子多く含む	やや良	暗灰黑色	完形
109		遺構検出中			A III	59.5	30	14	50.2	1 mm程度の粒子を含む	良	淡灰黃褐色	完形
110	150-C10	13-F	薄101 上部土器層り下層	古墳	A I ?	60	34	14	60.5	1 mm内外の粒子を含む	やや良	淡灰黄色	完形
111	370-C137	20 S	薄122	中世	A III	58	32	10	50.4	1 mm内外の粒子比較的多し	やや良	灰褐色 赤褐色	完形
112	12 N	井戸127 堀り方		鐵倉	A II ③	58.5	26	7	39.1	2 mm以下の粒子含む	やや良	暗灰黄色	完形
113	12.13 L	薄105		弥生	A II ③	56	27	10.5	56.2	0.5 ~ 2 mm程度の粒子含む	普通	淡褐色 黑斑	完形
114	404-C163	21 S,T	側溝		A II ③	52.5	20	8.5	24.2	1 ~ 3 mmの粒子多量に含む	やや良	暗灰黄色 淡灰黃色	完形
115	150-C27	13- 16	薄101 中層	古墳	A II ③	54	23	8.5	31.6	2 mm程度の粒子、不均質	不良	赤褐色 淡灰黃色	小矢損
116	404-C162	21 S	薄122 張り出し部	中世	A II ③	29	20	8	12.2	0.5 ~ 2 mm大の粒子多し	やや良	暗灰黃色	1/2
117	343-C84	17.18 R	薄122 1層	中世	B I	59.5	21	9	22.6	0.5 mm以下の細粒子多し	良	淡赤褐色	小矢損
118	350-C96	14 R	薄122 シジミ層	中世	B I	58.5	21.5	9	20.6	0.5 ~ 2 mm大の粒子含む	良	灰黄色	完形
119	404-C164	20 T	床土		B I	54	20.5	9	18.9	1 mm以下の粒子、小石若干	良好	暗赤橙色	2/3

番号	地質図 番 遺物 番	出土 地区	遺構名・層位	時代	型式	計測最大値 (mm) 長	幅 厚	重量 (g)	胎 土	焼成 色	調 査	残存率	備 考
120	364-C121	20 S	溝122 最下層貝層	中世	B I	40.5	22	11	16.9	0.5 mm以下の粒子、均質	良	淡灰黄色	1 / 2
121	364-C120	20 S	溝122 最下層貝層	中世	B I	42.5	21.5	10	15.9	0.5 mm以下の粒子、均質	良	淡灰黄色	1 / 2
122	404-C166				B I	66	19.5	10	27.7	0.5 mm以下の粒子若干含む	良好	暗灰黄色 黒斑有り	小欠損 端部整形
123	364-C122	20 S	磚122 下層	中世	B I	55.5	24	10	28.7	0.5 mm以上の粒子を含む	やや良	赤褐色	4 / 5
124	370-C135	20 S	溝122	中世	B I	49.5	19	8	18.3	0.5 mm程の粒子、やや均質	良	明灰黄色 部分的灰褐色	完形
125	388-C148	21 S	溝122 張り出し部下層	中世	B I	24.5	20.5	8	7.1	1 mm以下の粒子多し、粗目	良	暗灰黄色	1 / 2
126	388-C149	21 S	溝122 張り出し部下層	中世	B I	39	18	7	14.7	1 ~ 2 mm大の粒子粗い胎土	やや甘	淡灰黄色 半分黒斑	1 / 2
127	166-C44	20 S	溝115	古代	B I	44.5	22	9	17.9	0.5 mm以下の細砂粒多し	良	淡赤橙色	1 / 2
128	166-C39	20 S	溝115	古代	B I	50	18	7	12.7	1 mm内の粒子少し、3 mm稀	良好	灰黄色 黑斑有り	小欠損
129	170-C53	13 F	溝101 上層	古墳	B I	63.5	27	12.5	33.6	1 mm程の粒子を含み、均質	良好	にじむ橙色 部分的暗褐色	9 / 10
130	170-C57	12F, F	近代用木地盤		B I	23.5	18.5	7	5.3	0.5 ~ 1.5 mm程の粒子含む	良好	暗灰褐色 部分的に淡橙色	1 / 2
131	170-C55	13F	溝101 上部土器窓り上層	奈良	B I	64.5	22.5	11	26.4	0.5 mm程の粒子含み均質	良好	にじむ橙色 部分的赤橙色	9 / 10
132	170-C56	13, 14 F	溝101 上部土器窓り上層	奈良	B I	50	13.5	6	14.8	1 mm以下の粒子を含む	やや良	淡灰黄色	4 / 5
133	170-C54	13F	溝101 上部土器窓り上層	奈良	B I	63.5	24.5	10	28.7	1 mm以下の粒子を少し含む	良好	にじむ橙色	完形
134	170-C52	13F	溝101 上部土器窓り	奈良	B I	44	29.5	10.5	24.4	1 mm内の粒子を含む	やや良	淡灰黄色 (縦状に赤橙色)	1 / 2
135	170-C51	12F	溝101 上部土器窓り	奈良	B I	44.5	29.5	11	21.0	1 mm内の粒子を含み均質	やや良	淡灰黄色 (縦状に明橙色)	1 / 3
136			下流部包含層 暗渠		B I	47	22.5	9	20.3	0.5 ~ 3 mm粒子多く不均質	やや良	黄白色	2 / 3
137	P-Q	包含層			B I	47	17	7	10.8	0.5 mm大の粒子含む、稍良	やや良	明が橙色 部分的に暗褐色	1 / 2
138	15 P	井戸138	鍊倉	B I	62.5	20.5	10	27.2	0.5 mm大の粒子含む、均質	良好	暗灰黄色	完形	端部成形
139	346-C87	17, 18R	溝122 第2層	中世	B II	54	15.5	7.5	10.7	0.5 ~ 1 mmの粒子多く含む	良	灰黑色	2 / 3
140	343-C75	17, 18R	溝122 1層	中世	B II	69	12	4.5	5.9	0.5 ~ 2 mmの粒子、不均質	良好	赤褐色	3 / 4
141	170-C63	13, 14F	溝101 上部土器窓り下層	古墳	B II	43.5	16.5	5.5	8.7	0.5 mm以下の粒子精良均質	良	淡灰黄色	2 / 3
142	170-C58	13F	溝101 上部土器窓り上層	奈良	B II	68.5	10.5	5.5	14.0	1 ~ 3 mmの粒子を含む	良	淡灰黄色	小欠損
143	11, 12K, L	包含層			B II	36.5	14.4	5	6.3	0.5 mm以下の粒子多く含む	良	淡灰黄色	1 / 2
144	388-C151	21 S	溝122 張り出し	中世	B II	64	17	6.5	16.8	1 mm内の粒子を含む	良	暗灰黄色 黑斑有り	小欠損
145	166-C49	20 S	溝115	古代	B III	42	19	9	11.9	0.5 mm以下の粒子多し	良	暗灰色	小欠損
146	166-C43	20 S	溝115	古代	B III	40.5	21.5	9.5	16.0	0.5 ~ 1 mm程の粒子を含む	良好	淡灰黄色	完形
147	166-C48	20 S	溝115	古代	B III	41	19	7.5	13.1	0.5 mm以下の粒子を含む	良	淡灰黄色	完形
148	166-C46	20 S	溝115	古代	B III	36	19.5	8	11.2	0.5 mm以下の粒子、均質	良	淡灰黄色 暗黄色	完形
149	370-C136	20 S	溝122	中世	B III	41	21	8	15.6	0.5 mm以下の粒子多く均質	良	淡灰黄色 暗黄色	完形

番号	掲載図 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	型式	計測最大値 (mm)	重量 (g)	胎 土	焼成 色	調 査	残存率	備 考	
150	166-C47	20 S	溝115	古代	BⅢ	40	20.5	8	14.4	0.5 mm程の粒子少々、均質	良好	淡灰黄色	完形 端部整形
151	166-C45	20 S	溝115	古代	BⅢ	39.5	21	8.5	14.5	0.5 mm程の粒子少々、均質	良	灰黑色	完形 端部整形
152	11 L	P 1 0 8 1	近世	BⅣ	32	12	5	4.5	細かい粒子、精良	良	淡灰黄色 (繊状に淡褐色)	1/2	
153	170-C60	13 F	溝101 中央 レンチ	古墳	BⅣ	55.5	14.5	5.5	8.4	0.5 mm程の粒子若干、均質	良	淡灰黄色 部分的に明橙色	完形
154	170-C61	11-130, F	北上がり表土攪乱	古墳	BⅣ	53	14.5	6	10.7	1.5 mm内外の粒子含む	良好	灰黑色 一部明灰褐色	完形
155	170-C59	13 F	溝101 上部土器觸り	古墳	BⅣ	56.5	14.5	6	10.4	0.5 mm以下の粒子含み均質	良	淡灰黄色 部分的に明褐色	完形 端部整形
156	170-C62	13 F	溝101 上部土器觸り	古墳	BⅣ	54	14	4	9.4	1 mm以内の粒子出穂的含む	良好	灰黄色 黒斑有り	完形
157	267-C71	16 N, 0	井戸134	室町	BⅣ	50	11.5	4	5.3	0.5 mm程の粒子含み、均質	良好	灰黄色 明橙色	小欠損
158		不明分		BⅣ	29.5	13.5	6	3.9	0.5 ~ 1 mmの粒子含み均質	良	灰黄色	1/2	
159		下流部包含層		BⅣ	23	13	5	3.0	0.5 mm程の粒子若干含む	良	灰黑色 部分的に暗赤褐色	1/2	
160		下流部包含層		BⅣ	42	12.5	5	4.5	0.5 ~ 1 mmの粒子含む	良	淡褐色 黄白色 (繊状)	小欠損	
161		下流部包含層 潜渠を含む		BⅣ	39.5	9	3	2.9	2 mm以下の粒子含む	良	灰白色 淡橙色	小欠損	
162		遺構検出中		BⅣ	39.5	12	6	4.5	0.5 mm以下の粒子含み均質	良	にじい橙色 (繊状)	小欠損	
163		遺構検出中		BⅣ	46	14	5.5	8.7	0.5 mm以下の粒子含み均質	良	淡灰黄色 黒斑有り	小欠損 端部整形	
164	370-C133	20 S	溝122	中世	BⅣ	55	15	6	10.7	0.5 mm程の粒子若干、均質	良好	にじい橙色 (繊状)	3/4
165	359-C114	19 S	溝122	中世	BⅣ	38.5	11	4	3.5	1 mm以下の粒子若干、均質	良好	赤褐色	小欠損
166	364-C123	20 S	溝122 下層	中世	BⅣ	55	13.5	4	9.8	1 ~ 3 mmの粒子含む、精良	やや良	暗灰褐色 部分的に暗灰黄色	完形
167	359-C117	20 S	溝122 貝殻中	中世	BⅣ	25.5	11.5	4	2.5	0.5 mm程の粒子若干、均質	良好	暗灰褐色 部分的に赤褐色	1/2
168	404-C158	20 T	表土剝ぎ	BⅣ	44.5	11	4	5.2	1 mm大の粒子少々含む	良好	暗褐色	小欠損	
169	370-C134	20 S	溝122	中世	BⅣ	54	14	7	10.5	0.5 mm以下の粒子含み均質	良好	暗灰褐色 部分的に灰白色	4/5
170	370-C132	20 S	溝122	中世	BⅣ	42.5	10	3.5	5.1	1 mm以下の粒子含む	良好	淡黃褐色	2/3
171	370-C129	20 S	溝122	中世	BⅣ	39	9	3	2.7	0.5 mm程の粒子若干、均質	良好	赤褐色	小欠損
172	388-C150	21 S	溝122 張り出し部	中世	BⅣ	34	11	4.5	2.6	0.5 mm程の粒子若干、均質	良好	暗褐色 部分的に明橙色	1/2
173	404-C157	20 S, T	黄茶色土	BⅣ	45	13	5	5.7	1 mm以下の粒子若干含む	良好	淡褐色	小欠損	
174	166-C42	20 S	溝115	古代	BⅣ	36	16	6	9.9	0.5 mm以下の粒子含み均質	良好	暗灰色	1/2 端部整形
175	166-C38	20 S	溝115	古代	BⅣ	24	11	5.5	2.5	1 mm以下の粒子若干、均質	良好	淡灰黄色	1/2
176	166-C40	20 S	溝115	古代	BⅣ	29.5	16	6.5	7.7	0.5 ~ 1 mmの粒子多く含む	良好	暗灰黄色	1/2
177	370-C130	20 S	溝122	中世	BⅣ	45.5	12	3.5	6.3	1 mm内外の粒子散在	良好	にじい橙色 带状に暗褐色	小欠損
178	281-C72	20 S	井戸141 上部	室町	BⅣ	43	11	5	5.0	粒子が殆ど目立たず均質	良好	灰黄色	小欠損
179	166-C41	20 S	溝115	古代	BⅣ	33	16.5	6	9.2	1 mm以下の粒子を含む	良好	灰黑色	1/2 端部整形

番号	地図番号	出土地区	遺構名・層位	時代	型式	計測最大値 (mm)	重量 (g)	胎土	焼成色	調査	残存率	備考
180	166-C37	20 S	群115	古代	B V	46	10.5	4	4.7	0.5 mm以下の粒子種、均質	良好	灰白色
181	370-C131	20 S	群122	中世	B V	49	11	4	6.3	1 mm以内の粒子を含む	良好	暗黄褐色
182	356-C110	15 R	群122 土壌内	中世	B V	42.5	13.2	6	5.4	0.5 mm以下の粒子、均質	良	灰黒色 一部淡灰黄色
183	346-C86	15, 16 R	群122 2層	中世	B V	52	15.5	5.5	11.7	0.5 mm以下の粒子多く含む	良	淡灰黄色
184	350-C94	18 R	群122 貝層	中世	B V	51	13.5	4	5.1	0.5 mm以下の粒子種、均質	良好	黑色 赤紫色
185	374-C147	16 AA	群123 中央断面 7層	中世	B V	47.5	8	3	3.4	0.5 ~ 1.5 mmの粒子含む	良好	赤褐色 部分的に灰黄色
186	404-C161	14-16W-Z		B V	33	12	4	4.0	1 mm未満の粒子含む	良	灰白色 黒斑有り	
187	353-C102	17 R	群122 3層	中世	B V	39	15	5.5	5.8	1 mm内外の粒子を含む	良好	暗灰黄色 部分的に淡橙色
188	374-C140	16 AA	群123 1層	中世	B V	43.5	10	4	3.7	0.5 ~ 1.5 mmの粒子を含む	良好	赤褐色
189	353-C100	18 R	群122 3層	中世	B V	45.5	11.5	3.5	5.4	0.5 mmの粒子を含む	良好	淡灰黄色
190	343-C79	15 R	群122 1層	中世	B V	46.5	11.5	4	4.3	0.5 ~ 2 mmの粒子を含む	良好	赤紫色
191	346-C88	16 R	群122 2層	中世	B V	50.5	14	5	6.3	0.5 ~ 1.5 mmの粒子を含む	良好	明褐色
192	353-C101	14-15R	群122 3層	中世	B V	34	11	4.5	3.8	0.5 mmの粒子種、均質	良好	明橙色
193	346-C89	14 R	群122 2層	中世	B V	37	10.5	4.5	3.3	0.5 ~ 1 mmの粒子若干含む	良	暗灰黄色
194	343-C81	14 R	群122 1層	中世	B V	39.5	12.5	5	5.4	0.5 ~ 1 mmの粒子を含む	良好	淡黄褐色 灰黄色
195	356-C111	17 S	群122 2層	中世	B V	41	10.5	4	4.4	0.5 mm程の粒子若干、均質	良好	赤橙色 赤紫色 (縮状)
196	343-C80	17 S	群122 上層	中世	B V	41.5	13	5	5.6	0.5 ~ 1 mmの粒子散在	良	暗赤褐色 部分的に赤紫色
197	343-C78	14 R	群122 1層	中世	B V	49	12	4	6.7	0.5 ~ 1 mmの粒子を含む	良好	暗茶褐色
198	374-C142	16, 17AA	群123 2層	中世	B V	31.5	13	5.5	2.6	0.5 mm程の粒子若干、均質	良好	淡橙色 部分的に黒色
199	346-C80	17 S	群122	中世	B V	40.5	12.5	4	6.4	0.5 ~ 1 mmの粒子含み均質	やや甘	灰白色
200	343-C76	16 R	群122 1層	中世	B V	43	11.5	3.5	3.9	0.5 ~ 1.5 mmの粒子含む	良	灰黒色
201	350-C85	16, 17 R	群122 貝層	中世	B V	38	11	3.5	5.0	0.5 ~ 1.5 mmの粒子含む	良	灰黄色
202	374-C143	16, 17 AA	群123 2層	中世	B V	54.5	11	4	4.9	0.5 mmの粒子を含み、均質	良	灰黒色
203	374-C144	15, 16 AA	群123 2層	中世	B V	47	11.5	4	4.9	0.5 ~ 1 mmの粒子を含む	良	赤橙色
204	343-C83	16 R	群122 1層	中世	B V	48	19.5	9.5	16.3	0.5 ~ 5 mmの大粒子、粗い	良	灰黄色 黒斑有り
205		15 P	井戸138	鍾乳	B V	50.5	16.5	4	12.4	精良	良	灰白色
206	404-C160	20 S	床土	B V	33.5	10	4	2.9	0.5 ~ 1.5 mmの粒子を含む	良	暗赤褐色	
207	323-C74	21 S	土壤191	中世	B V	32	8	3	1.9	0.5 ~ 1 mmの粒子を含む	良	赤橙色 明褐色 (縮状)
208	374-C145	15, 16 AA	群123 2層	中世	B V	16.5	11	3	0.6	0.5 ~ 1 mmの粒子を含む	良	黃褐色
209	404-C159	14-16W-Z	表土	B V	23.5	7.5	2	1.4	0.5 mm以下の細かい粒子	やや甘	灰白色	
											?	

番号	掲載図 番号	出土 地区	遺構名・層位	時代	型式	計測最大値 (mm)			重量 (g)	胎 土	焼成 色	開 闢	残存率	備考		
						長	幅	厚								
210	P.Q	包含層		B.V	30	8.5	4	1.9	0.5 mm以下の細かい粒子	良好	暗黄褐色	部分的に赤褐色	少火燒	完形		
211	15 Q	P 6 2 4		中世	B.V	33.5	14.5	5	6.2	1 mm以下の粒子を含む	良	灰黃色			完形	
212	364-C125	20S.21T	澗15	古代	C	60	34	23.5	47.5	0.5 mmの粒子1 ~ 2 mm若干	良	にぶい橙色	片面黒斑有り		完形	
213	20 S	澗122 下層		中世	C	50.5	36	25	51.8	0.5 mmの細かい粒子を含む	良	淡灰黃色			完形	
214	388-C155	21 S	澗22 張り出し部F層	中世	C	44	25.5	19	25.6	1 mm内外の粒子を含む	良	暗灰黃色			完形	
215	404-C167	14-16W-7	表土		C	44.5	28	19.5	21.8	0.5 mm以下の細かい粒子	良	淡灰黃色			少火燒	
216	404-C168	16 R	澗15	古代	C	34	21	19.5	13.4	0.5 ~ 1 mmの粒子、均質	良好	暗灰黃色			少火燒	
217	170-C64	12,13F	澗101 上部土器窪り上層	奈良	C	46.5	27.5	17	33.7	0.5 mm以下の粒子を含む	良	灰黑色			少火燒	
218		15Q16P.Q	表土		C	39	32	26.5	26.1	1 mm以下の粒子、粗い	良	にぶい橙色	黒斑	5 / 6		
219	346-C91	16 R	澗122 2層	中世	D	31	32	31.2	1 mm大の粒子を含み、均質	良	淡橙褐色	灰黃色			完形	
220	353-C104	16,17 R	澗122 3層(貝層下)	中世	D	28.5	27.5	12	19.1	0.5 mm以下の細かい粒子	良	淡灰黃色	部分的に暗黃色		完形	
221	359-C115	19 S	澗122 上層	中世	D	39	32.5	12.5	19.0	0.5 mmの細かい粒子、均質	良好	淡灰藍色	部分的に淡褐色	1 / 2		
222	15 0	建物139 柱穴4		織合	D	27.5	31.5	11.5	19.5	精良	良	暗灰黃色	淡黃褐色斑		完形	
223	370-C138	20 S	澗122	中世	E	52	18	13	13.0	0.5 mm以下の細かい粒子	良	淡灰黃色	黒斑有り		完形	
224	388-C152	21 S	澗122 張り出し部	中世	E	33.5	14	15	9.4	1 mm内外の粒子を含む	良	淡灰黃色	部分的に淡橙色	1 / 2		
225	388-C153	21 S	澗22 張り出し部	中世	E	22.5	10.5	10	3.4	1 mm大の粒子を含む、粗い	良	暗黃褐色		1 / 2		
226	388-C156	21 S	澗22 張り出し部	中世	E	34	12.5	5	7.5	1 mm以下の粒子多く、粗い	良	灰白色	部分的に赤橙色	1 / 2		
227	388-C154	21 S	澗122 張り出し部	中世	E	64.5	17	13	15.8	1 mm程度の粒子多く含む	良	灰褐色	部分的に明橙色		完形	
228	170-C65	13 F	澗101 上部土器窪り	古墳	E	51	16.5	14	12.4	1 mm以下の粒子含む、均質	良	淡灰黃色		2 / 3		
229	170-C67	13 F	澗101 上部土器窪り	古墳	E	29.5	17	15	9.9	0.5 mm以下の細かい粒子	良好	にぶい橙色		1 / 2		
230	170-C66	13,14 F	澗101 上部土器窪り上層	奈良	E	61	15	13	11.7	0.5 mm以下の粒子、均質	良	暗灰褐色		6 / 7		
231		14 L	建物132 柱穴5	織合	E	32.5	13	10.5	4.3	0.5 mm程度の粒子、均質	良	暗黃褐色		1 / 2		
232	353-C105	17,18 R	澗122 第3層	中世	E	31	11.5	12	5.5	0.5 mm大の粒子を含む	良好	灰黑色		1 / 2		
233	364-C124	20 S	澗122 下層	中世	F	22.5	22	13	3.0	0.5 mm程度の粒子、3mm稀に	やや甘	暗灰黃色		?		
234		21 S	澗115	古代	F	25.5	22.5	21	0.5 mm以下の砂粒含む	良	白色	灰黑色		完形	土玉	
235		13 P	土壤132	古墳	B.V	19	8	8	1.2	0.5 mm程の粒子、やや粗い	やや良	にぶい橙色			完形	土蟠か質問
236		14Q	南端下り淡灰褐色砂質土		B	54	23.5	9	29.4	0.5 mm以下の砂粒を含む	良好	灰褐色		3 / 4		
237		11,12L	落ち込み101	古墳	A	45	41	16.5	72.9	2 mm以下の粗砂粒多く含む	良好	暗褐色		一部欠		
238	150-C31	13 F	澗101 上部土器窪り下層	古墳	A.M	55	24	106.0	1.5 mm以下の白色砂粒多	良	淡黃灰色		1 / 2			
239	150-C30	13 F	澗101 上部土器窪り下層	古墳	A.M	61	48	21	58.3	3 mm以下の白色砂粒多	良	淡灰褐色		1 / 3		

番号	鉢輪器 番	出土 地区	遺構名・層位	時代	型式	計測最大値 (mm)		重量 (g)	胎	土	焼成	色	調	残存率	備考
						長	幅								
240	150-C28	13 F	導101 上部擾乱	茶良	A I ②	42.5	30	10	14.2	0.5 mm以下の最右少々	良	淡灰黃色	1 / 2		
241	150-C29	11 E	導101 上部土器窓り下層	古墳	A I ②	42.5	28	10	28.3	0.5 ~1 mmの石英・長石	やや良	暗灰色	3 / 4		
242	150-C18	13 F	導101 上部土器窓り下層	古墳	A I ②	69	25	7	31.1	1 mm以下の白色砂粒多	やや良	黃褐色		小次損	

型式分類

- A. ズン胴で穴が中央を凹通
 ① 長80mm以上, 檻30mm以上, 若干不正形
 ② 長70mm未満, 幅30mm未満, 小型
 ③ 長70mm未満, 幅30mm未満, 中太
- B. 上下の口部分が細い中太の筋巻形
 ① 中太で長い
 ② 中太で短い
- C. 球円球, 長軸にそって溝がある
 D. 球形で溝がある
 E. 両端に穴のある輪骨形
 F. 不明土製品

土器転用土製円盤一覧表

番号	遺構	土器の種類	直径	厚さ	重さ	調整	掲載図・遺物番号
1	溝122	備前	2.0cm	1.4cm	8g	打ち欠き	
2	溝122	須恵質	2.2cm	0.9cm	6g	打ち欠き	
3	溝122	備前	2.6cm	0.9cm	9g	打ち欠き	370-C128
4	溝122	備前	2.2cm	0.9cm	6g	打ち欠き	
5	溝122	瓦質	2.8cm	0.9cm	8g	打ち欠き	
6	溝122	備前	3.0cm	1.0cm	8g	打ち欠き	
7	溝122	備前	2.4cm	1.1cm	11g	打ち欠き	
8	溝122	瓦質	2.8cm	1.1cm	10g	打ち欠き	
9	溝122	備前	2.6cm	0.9cm	9g	打ち欠き	353-C106
10	溝122	備前	3.1cm	1.0cm	11g	打ち欠き	
11	溝122	備前	2.9cm	1.0cm	11g	打ち欠き	
12	溝122	瓦	3.3cm	1.6cm	16g	磨き	
13	溝122	瓦	2.9cm	1.8cm	18g	磨き	
14	溝122	備前	2.9cm	1.3cm	15g	打ち欠き	
15	溝122	備前	3.2cm	0.9cm	12g	打ち欠き	
16	溝122	備前	3.4cm	1.0cm	14g	打ち欠き	
17	溝122	備前	3.5cm	1.2cm	17g	打ち欠き	
18	溝122	備前	3.3cm	0.8cm	15g	打ち欠き	
19	溝122	備前	3.0cm	1.2cm	16g	打ち欠き	
20	溝122	瓦質	3.3cm	0.8cm	11g	磨き	353-C107
21	溝122	備前	3.2cm	1.0cm	15g	打ち欠き	
22	溝122	備前	3.7cm	0.9cm	17g	打ち欠き	
23	溝122	備前	3.6cm	1.3cm	24g	打ち欠き	
24	溝122	備前	3.6cm	0.9cm	17g	打ち欠き	

番号	遺構	土器の種類	直径	厚さ	重さ	調整	掲載図・ 遺物番号
25	溝122	備前	3.7cm	1.1cm	20g	打ち欠き	
26	溝122	備前	3.9cm	1.2cm	20g	打ち欠き	
27	溝122	備前	3.9cm	1.3cm	23g	打ち欠き	
28	溝122	備前	3.5cm	1.1cm	21g	打ち欠き	370-C127
29	溝122	備前	3.9cm	0.9cm	18g	打ち欠き	
30	溝122	須恵質	3.6cm	1.1cm	20g	打ち欠き	
31	溝122	備前	3.9cm	0.8cm	19g	打ち欠き	
32	溝122	備前	3.6cm	0.9cm	16g	打ち欠き	
33	溝122	須恵質	4.2cm	1.2cm	21g	打ち欠き	
34	溝122	備前	3.9cm	0.8cm	20g	打ち欠き	
35	溝122	備前	4.3cm	0.9cm	22g	打ち欠き	
36	溝122	備前	4.0cm	1.7cm	34g	打ち欠き	
37	溝122	備前	4.0cm	1.2cm	24g	打ち欠き	
38	溝122	備前	4.5cm	1.6cm	39g	打ち欠き	
39	溝122	備前	4.3cm	0.9cm	22g	打ち欠き	
40	溝122	瓦	3.9cm	1.8cm	29g	磨き	
41	溝122	須恵質	4.3cm	1.0cm	26g	打ち欠き	359-C113
42	溝122	須恵質	4.2cm	1.1cm	24g	打ち欠き	353-C108
43	溝122	備前	4.3cm	1.1cm	27g	打ち欠き	
44	溝122	備前	4.2cm	0.9cm	24g	打ち欠き	
45	溝122	備前	4.7cm	1.0cm	26g	打ち欠き	
46	溝122	瓦	4.9cm	1.7cm	36g	打ち欠き	
47	溝122	瓦質	4.1cm	1.1cm	24g	磨き	
48	溝122	備前	4.4cm	0.8cm	22g	打ち欠き	
49	溝122	備前	4.6cm	1.2cm	32g	打ち欠き	

番号	遺構	土器の種類	直 径	厚 さ	重 さ	調 整	掲載図・ 遺物番号
5 0	溝122	瓦質	4.6cm	0.9cm	24g	打ち欠き	
5 1	溝122	備前	4.5cm	1.1cm	26g	打ち欠き	
5 2	溝122	備前	4.6cm	1.0cm	24g	打ち欠き	
5 3	溝122	備前	4.7cm	0.9cm	29g	打ち欠き	
5 4	溝122	備前	4.5cm	0.9cm	29g	打ち欠き	
5 5	溝122	須恵質	5.1cm	1.3cm	39g	打ち欠き	
5 6	溝122	備前	4.7cm	0.8cm	27g	打ち欠き	
5 7	溝122	備前	5.0cm	0.9cm	30g	打ち欠き	
5 8	溝122	備前	4.7cm	1.2cm	36g	打ち欠き	
5 9	溝122	備前	4.5cm	1.2cm	36g	打ち欠き	
6 0	溝122	備前	4.5cm	1.4cm	44g	打ち欠き	
6 1	溝122	瓦	4.6cm	1.9cm	43g	磨き	
6 2	溝122	備前	4.5cm	1.0cm	28g	打ち欠き	
6 3	溝122	瓦	4.9cm	1.8cm	44g	磨き	
6 4	溝122	備前	4.8cm	1.0cm	33g	打ち欠き	
6 5	溝122	備前	5.3cm	1.2cm	44g	打ち欠き	
6 6	溝122	瓦	4.8cm	1.8cm	44g	打ち欠き	
6 7	溝122	瓦質	5.1cm	1.1cm	37g	打ち欠き	356-C112
6 8	溝122	備前	5.3cm	1.0cm	33g	打ち欠き	
6 9	溝123	瓦	5.4cm	1.9cm	55g	磨き	374-C146
7 0	溝122	備前	5.2cm	0.9cm	38g	打ち欠き	
7 1	溝122	瓦	5.7cm	2.5cm	95g	磨き	350-C99
7 2	溝122	瓦	5.8cm	2.1cm	73g	磨き	
7 3	溝122	瓦	5.4cm	1.9cm	75g	磨き	364-C119
7 4	溝122	備前	5.4cm	1.0cm	39g	打ち欠き	

番号	遺構	土器の種類	直径	厚さ	重さ	調整	掲載図・ 遺物番号
75	溝122	瓦	5.3cm	1.9cm	56g	打ち欠き	
76	溝122	瓦	6.4cm	2.1cm	85g	磨き	
77	溝122	瓦	5.7cm	2.2cm	79g	磨き	
78	溝122	備前	5.9cm	1.6cm	71g	打ち欠き	
79	溝122	備前	5.7cm	1.4cm	63g	打ち欠き	
80	溝122	瓦	6.5cm	1.9cm	77g	磨き	
81	溝122	備前	6.4cm	1.2cm	78g	打ち欠き	
82	溝122	備前	6.1cm	1.3cm	75g	打ち欠き	353-C109
83	溝122	瓦質	6.4cm	1.2cm	63g	打ち欠き	
84	溝122	備前	6.8cm	1.2cm	71g	打ち欠き	
85	溝122	備前	7.1cm	1.3cm	93g	打ち欠き	
86	溝122	瓦	5.4cm	1.8cm	59g	磨き	
87	溝122	瓦	5.7cm	2.2cm	77g	打ち欠き	
88	溝122	瓦	5.6cm	2.3cm	87g	磨き	
89	溝123	備前	5.9cm	1.2cm	51g	打ち欠き	374-C141
90	溝122	備前	7.4cm	1.0cm	79g	打ち欠き	
91	溝122	瓦	7.1cm	2.6cm	160g	磨き	350-C98
92	溝122	須恵質	7.8cm	1.1cm	88g	打ち欠き	370-C126
93	溝122	備前	7.6cm	1.3cm	9.4g	打ち欠き	
94	溝122	須恵質	6.1cm	1.3cm	74g	打ち欠き	
95	溝122	瓦	5.8cm	1.8cm	35g	打ち欠き	
96	溝122	瓦質土器	6.2cm	0.9cm	38g	打ち欠き	
97	溝122	備前	5.6cm	1.3cm	55g	打ち欠き	
98	溝122	瓦	9.1cm	2.1cm	181g	打ち欠き	
99	溝122	瓦	6.9cm	1.9cm	102g	磨き	364-C118

番号	遺構	土器の種類	直径	厚さ	重さ	調整	掲載図・遺物番号
100	溝122	備前	7.2cm	1.3cm	103g	打ち欠き	
101	溝122	瓦	8.2cm	2.2cm	178g	磨き	350-C97
102	溝122	備前	6.6cm	1.1cm	62g	打ち欠き	
103	溝122	瓦	5.4cm	2.1cm	74g	磨き	
104	溝122	瓦	5.8cm	1.8cm	71g	磨き	
105	溝122	備前	6.4cm	1.5cm	75g	打ち欠き	
106	溝122	瓦	6.3cm	1.8cm	66g	打ち欠き	
107	池101	瓦	4.2cm	1.5cm	28g	磨き	
108	池101	瓦	6.2cm	3.0cm	116g	打ち欠き	

動物遺体同定資料一覧表

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
1	13F	溝101	13-⑧	奈良	1985.7.16	左下頸歯	ウマ	
2	9,10G	表土		不明	1985	左肩甲骨	イノシシ?	
2	9,10G	表土		不明	1985	頭骨	ハモ(魚)?	
3	13F	溝101	中層	奈良	1985.7.16	左下頸歯3点	ウマ	
4	12F	溝101	最上層ないし(攪乱)	奈良	1985.6.27	右下頸歯	ウマ	
5	11E,F	第2トモ現代溝	南肩部	現代	1985.5.11	下頸歯	ウシ	
6	10J	池101		江戸初期	1985.9.	肢骨?	?	
7	12,13F	溝101	上層-最上層	奈良	1985.6.27	右下頸歯	ウマ	
8	12F	溝101	上層	奈良	1985.6.27	右下頸歯	ウマ	
9	11-13D-F	表土、攪乱	地下がり	不明	1985.5.20	歯	ウシ	
10	11-13D-F	表土、攪乱		不明	1985.5.27	歯	ウシ	
10	11-13D-F	表土、攪乱		不明	1985.5.27	?	?	
11	20S	溝122		中世	1983.9.8	右大腿骨	ウシ	鑑定用
12-1	20S	溝122	最下層	中世	1983.9.26	左大腿骨	ウシ	鑑定用
12-2	20S	溝122	最下層	中世	1983.9.26	右側頭骨	ウシ(若年)	鑑定用
13-1	20S	溝122		中世	1983.9.10	中足骨	ウマ	鑑定用
13-2	20S	溝122		中世	1983.9.10	中足骨	ウシ	鑑定用
13-3	20S	溝122		中世	1983.9.10	基節骨	ウシ	鑑定用
14	20S	溝122		中世	1983.9.7	右大腿骨	ウシ	鑑定用
15-1	20S	溝122	(抜)張出し	中世	1983.9.30	右踵骨	ウシ	鑑定用
15-2	20S	溝122	(抜)張出し	中世	1983.9.30	蹄骨	ウマ	鑑定用
16	20S	溝122		中世	1983.9.12	中足骨	ウマ(幼年)	鑑定用
17	20R	包含層	暗褐色土	不明	1983.8.28	中手骨	ウマ?	
18	20R	包含層	暗褐色土	不明	1983.8.28	中手骨	ウシ?	

動物遺体同定一覧表

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
18	20R	包含層	暗褐色土	不明	1983. 8. 28	?	?	鑑定用
19	20S	溝122		中世	1983. 9. 12	頭蓋骨	イヌ	鑑定用
20	20R	P-17		中世	1983. 8. 31	切歯11本	ウマ	
21	20S,T	中央トレンチ		不明	1983. 9. 22	手根骨又は足根骨	?	
22	20S	溝122		中世	1983. 9. 6	寛骨	ウシ	鑑定用
23	20S	溝122		中世	1983. 9. 9	右上頸歯	ウマ	
24		溝122		中世	1983. 9. 6	上頸歯	ウシ	
25	20S	溝122	張出し	中世	1983. 9. 30	中節骨	ウシ	鑑定用
26	20R	P-59		中世	1983. 8. 30	右上頸歯	ウマ	
27	20S	溝122		中世	1983. 9. 9	?	?	
28	20S	溝122	下層	中世	1983. 9. 19	?	?	
29	20S	溝122	下層	中世	1983. 9. 19	手根骨又は足根骨	ウシ	鑑定用
30	20S	溝122	下層	中世	1983. 9. 14	?	?	
31-1	20S	溝122	最上層	中世	1983. 10. 18	左上腕骨	ウシ	鑑定用
31-2	20S	溝122	最上層	中世	1983. 10. 18	右大腿骨	ウシ	鑑定用
31-3	20S	溝122	最上層	中世	1983. 10. 18	左脛骨	ウシ	鑑定用
31-4	20S	溝122	最上層	中世	1983. 10. 18	右大腿骨	ウシ	鑑定用
31-5	20S	溝122	最上層	中世	1983. 10. 18	左踵骨	ウシ	鑑定用
32	20S	溝122	凹地上層	中世	1983. 10. 21	落角	ニホンジカ	鑑定用
33	20S	溝122	凹地内	中世	1983. 10. 18	右前腕骨(橈尺骨)	ウマ	鑑定用
34	21S	溝122・溝125	張出し、下層	中世	1983. 10. 12	左大腿骨	ニホンジカ	鑑定用
35-1	20S	井戸141		室町	1983. 10. 13	左大腿骨	ウシ	鑑定用
35-2	20S	井戸141		室町	1983. 10. 13	左脛骨	ウシ	鑑定用
35-3	20S	井戸141		室町	1983. 10. 13	左距骨	ウシ	鑑定用
35-4	20S	井戸141		室町	1983. 10. 13	左足根骨	ウシ	鑑定用
35-5	20S	井戸141		室町	1983. 10. 13	左中足骨	ウシ	鑑定用
36	20S	井戸141		室町	1983. 10. 13	肢骨6 胸骨1 頭骨	キジ科の一種	鑑定用
37	20S	井戸141	内	室町	1983. 10. 12	右寛骨	ウシ	鑑定用
38	20S	井戸141	上部	室町	1983. 10. 11	右中手骨	ウシ	鑑定用
39	21S	溝122	張出し部下層	中世	1983. 10. 8	右距骨	ウマ	鑑定用
40	20S	井戸141		室町	1983. 10. 6	右距骨	ウシ	鑑定用
41	21S	溝122	張出し部貝層中	中世	1983. 10. 11	右下頸骨	ウシ	鑑定用
42	20S	溝122	貝層中	中世	1983. 10. 13	?	?	鑑定用
43	20S	溝122	下層	中世	1983. 10. 12	下頸骨	ウマ	鑑定用
44	21S	溝122	張出し部	中世	1983. 10. 1	中節骨	ウマ	鑑定用
45	20S	井戸141		室町	1983. 10. 7	下頸歯	ウシ	
46	20S	井戸141		室町	1983. 10. 11	下頸歯	ウシ	
47	20S	溝122	最上層(凹地)	中世	1983. 10. 13	頸骨?	?	
48	21S	溝122	張出し部	中世	1983. 10. 5	右上腕骨	スッポン	鑑定用
49	20S	溝115		古代	1983. 12. 1	?	?	
50	19S	溝122	中層	室町	1983. 11. 21	右上頸歯	ウマ	
51-1	19S	溝122	中層	中世	1983. 11. 21	?	?	
51-2	19S	溝122	中層	中世	1983. 11. 21	?	?	
52	19S	溝122	下層	中世	1983. 11. 25	手根骨又は足根骨	ウシ	鑑定用
53	19S	溝122	下層	中世	1983. 11. 25	肢骨	?	
54	19S	溝122	中層	中世	1983. 11. 21	右上頸歯	ウマ	
55	20S	溝122	凹地上層	中世	1983. 10. 24	頭骨	ウシ	鑑定用

百間川米田遺跡 3

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
56	20R	溝110	黒褐色土	弥生後期	1983.12. 5	右上顎歯	ウマ	
57	21S	溝122		中世	1983	基節骨	ウマ	鑑定用
58	20S	表面		不明	1983.10.14	左距骨	ウシ?	
59	19S	溝122	上層	中世	1983.11.18	左上顎歯・切歎	ウマ	
60	20,21R	包含層	暗灰褐色土	不明	1983.10.15	右中足骨	ウシ?	
61-1	19S	溝122	下層	中世	1983.11.30	頭骨	ウシ	鑑定用
61-2	19S	溝122	下層	中世	1983.11.30	角(加工品)	ニホンジカ (幼体)	鑑定用
61-3	19S	溝122	下層	中世	1983.11.30	中手骨	ウマ	鑑定用
62	19S	溝122	中層	中世	1983.11.24	中手骨	ウシ	鑑定用
63	19S	溝122	中層(鉄分沈着中)	中世	1983.11.18	右上顎歯切歎	ウマ	
64	20S	溝122	凹地上層	中世	1983.10.25	右上腕骨	ネコ(若年)	鑑定用
65	19T	土壌187		中世	1983.11.29	歯	ウマ	
66-1	20S	溝122	凹地上層	中世	1983.10.20	手根骨又は足根骨	ウシ	鑑定用
66-2	20S	溝122	凹地上層	中世	1983.10.20	?	?	
67	21S	溝122	上・上部	中世	1983.10.28	頭骨?	?	
68	21S	溝122		中世	1983	右上腿骨	ニホンジカ	鑑定用
69	16N	井戸3		室町	1985.2.25	左下腿骨・脛骨	ウシ?	
70	17,18R	溝122	肩の貝	中世	1985.2	右上顎歯2本	ウマ	
71		包含層	下流部(暗渠含む)	不明	1985.2.7	左上顎歯	ウマ	
71		包含層	下流部(暗渠含む)	不明	1985.2.7	?	?	
72	16N	井戸134		室町	1985.2.25	右下腿骨・脛骨	ウシ?	
73	16N	井戸134		室町	1985.2	?	?	
74	15H	土壌149		鎌倉	1985.2.22	歯	?	
75	15I	井戸113		古墳初期	1985.3	肢骨?	?	
76	17,18Q	溝110		古墳初期	1985.3.25	肢骨	?	
77		包含層	遺構検出中	不明	1985.2.1	肢骨?	?	
78	15K	井戸122		鎌倉前期	1985.3.16	肢骨	?	
79	16N	井戸133		室町	1985	肢骨?	?	
79	16N	井戸133		室町	1985	顎骨?	?	
80	15II	土壌149		鎌倉	1985		ウマ?	
81	13N	土壌161		室町	1985.8.26	右大腿骨	ウシ?	
82	13M	井戸125		鎌倉	1985	自然落角	ニホンジカ	
83	16P	P-506		中世	1985.8.30	?	?	
84	15Q,16PQ	表土		不明	1985.7.20	手根骨又は足根骨	?	
85	11,12K,L	包含層		不明	1985.9.27	左上顎歯	ウシ	
86	P,Q	包含層		不明	1985.9.27	?	?	
87	16Q	P-550		中世	1985.9.6	?	?	
88	11,12K,L	包含層		不明	1985.9.27	左上顎歯	ウシ	
89	16O	井戸135		鎌倉後期	1985.3.7	?	?	
90	15P	P-651		鎌倉	1985.11.11	?	?	
91	15M	P-684		平安?	1985.10.25	角(加工品)	ニホンジカ	
92	14Q	土壌173		平安末期	1985.9.11	?	ウマ	
93	12N	井戸127	堀り方	鎌倉	1985.9.17	肢骨	イノシシ?	
93	12N	井戸127	堀り方	鎌倉	1985.9.17	?	?	
94	13N	井戸131	井戸枠内	平安末期	1985.10.21	右下顎骨歯	?	
95	14N	井戸129	灰色粘質土層	鎌倉	1985.8.7	肢骨?	ニホンジカ?	
96	13N	井戸130	上部	鎌倉	1985.8.29	?	?	

動物遺体同定一覧表

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
97	13N	井戸130	東半上部	鎌倉	1985. 9. 2	肢骨?	?	
98	130	建物138	柱 4	鎌倉	1985. 8. 2	角	ニホンジカ	
99	14,15Q	溝115		奈良平安	1985. 9. 9	左上頸歯	ウマ	
100	14,15Q	溝115		奈良平安	1985. 11. 30	前腕骨(尺骨)	イノシシ?	
101	13N	井戸126		平安末期	1985. 9. 25	?	?	
101	13N	井戸126		平安末期	1985. 9. 25	?	?	
102	13N	井戸131		平安末期	1985. 10. 21	右前上頸骨	クロダイ?	
102	13N	井戸131		平安末期	1985. 10. 21	?	?	
102	13N	井戸131		平安末期	1985. 10. 21	?	?	
102	13N	井戸131		平安末期	1985. 10. 21	?	?	
103	16AA	溝123	中央断面 2層	中世	1985. 11. 12	右中足骨	ウシ	鑑定用
104-1	15R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 9	頭骨	ヒト	鑑定用
104-2	15R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 9	上顎歯	ウシ	
104-3	15R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 9	右肩甲骨	ウマ	鑑定用
104-4	15R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 9	中手骨又は中足骨	ウシ?	
105	17S	溝122	上層	中世	1985. 7. 20	左大腿骨	ウシ	鑑定用
106	15R	溝122	土壤内	中世	1985. 10. 9	左上頸骨	ウシ	鑑定用
107	18R	溝122	右岸突出部	中世	1985. 8. 19	基節骨	ウシ	鑑定用
108	15-17AA	現代溝OR表土		不明	1985. 10. 31		ウシ?	
109	16,17AA	溝123	3層	中世	1985. 11. 8	左中手骨	ウシ?	
110		表土	南拡張区	不明	1985. 10. 17	下顎歯・上顎歯	ウマ、ウシ	
111	17S	溝122		中世	1985. 7. 23	末節骨	ウシ	鑑定用
112-1	16,17R	溝122	貝層	中世	1985. 9. 19	?	魚?	
112-2	16,17R	溝122	貝層	中世	1985. 9. 19	?	?	
113	15R	溝122	貝層	中世	1985. 9. 18	左中足骨	サギ科の大型種	鑑定用
114-1	16,17R	溝122	貝層	中世	1985. 9. 19	切歯	ウマ	
114-2	16,17R	溝122	貝層	中世	1985. 9. 19	?	?	
115	18,19R	溝122	中央貝層	中世	1985. 8. 22	角(加工品)	ニホンジカ (幼体)	
115	18,19R	溝122	中央貝層	中世	1985. 8. 22	左前齶蓋骨	マダイ	鑑定用
116	18R	溝122	下層中央貝層	中世	1985. 8. 21	左下頸歯	ウマ	
117	13,14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 7	中手骨	ウマ	鑑定用
118-1	14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 9	左中足骨	ウシ	鑑定用
118-2	14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 9	肋骨	?	鑑定用
119-1	13,14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 7	右下頸歯	ウシ	鑑定用
119-2	13,14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 7	下顎歯	ウシ	
119-3	13,14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 7	肩甲骨	ウシ	鑑定用
119-4	13,14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 7	中手骨又は中足骨	?	
119-5	13,14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 7	?	?	鑑定用
119	13,14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 17	?	?	鑑定用
119	13,14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 17	右鼻骨	ウシ	鑑定用
119	13,14R	溝122	貝層	中世	1985. 10. 17	下顎骨歯槽部	?	鑑定用
120-1	15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 9	角(角坐骨が残る)	ニホンジカ	鑑定用
120-2	15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 9	右上腕骨	ウマ	鑑定用
121	18R	溝122	3層	中世	1985. 8. 21	左脛骨	ウシ	鑑定用
122	17R	溝122	3層	中世	1985. 9. 14	左下頸角～下顎枝 後部	ウマ	鑑定用
123	15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 9	左第3中手骨及び 第4中手骨片	ハシブトガラス	鑑定用

百間川米田遺跡 3

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
124-1	18R	溝122	3層	中世	1985. 8. 3	左距骨	ウマ	鑑定用
124-2	18R	溝122	3層	中世	1985. 8. 3	胸甲の一部	スッポン	鑑定用
125	13-15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	頭骨?	?	
126	16,17R	溝122	3層	中世	1985. 9. 9	切歯	ウマ	
127-1	16,17R	溝122	3層	中世	1985. 9. 21	左上頸歯	ウマ	
127-2	16,17R	溝122	3層	中世	1985. 9. 21	右桡骨	ウシ	鑑定用
127-3	16,17R	溝122	3層	中世	1985. 9. 21	?	?	
128	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	前腕骨(尺骨)	ウシ	鑑定用
129	17R	溝122	3層	中世	1985. 9. 14	左口蓋骨	ウシ	鑑定用
130-1	17R	溝122	3層	中世	1985. 8. 21	肋骨	?	
130-2	17R	溝122	3層	中世	1985. 8. 21	右下頸骨	ウシ	鑑定用
131-1	13-15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 3	左下頸骨	ウシ	鑑定用
131-2	13-15R	溝122	3層	中世		下頸歯	ウシ	
131-3	13-15R	溝122	3層	中世		下腿骨・脛骨	ニホンジカ?	
131-4	13-15R	溝122	3層	中世		右上腕骨	ウマ	鑑定用
131-5	13-15R	溝122	3層	中世		右脛骨	ウシ	鑑定用
131-6	13-15R	溝122	3層	中世		?	?	
132-1	19R	溝122	3層	中世	1985. 8. 9	肋骨	ウシ	鑑定用
132-2	19R	溝122	3層	中世	1985. 8. 9	左脛骨	ウシ	鑑定用
132-3	19R	溝122	3層	中世	1985. 8. 9	右下頸骨	ウマ	鑑定用
132-4	19R	溝122	3層	中世	1985. 8. 9	?	?	
132-5	19R	溝122	3層	中世	1985. 8. 9	?	?	
132-6	19R	溝122	3層	中世	1985. 8. 9	?	?	
132-7	19R	溝122	3層	中世	1985. 8. 9	頭骨	ウシ	鑑定用
132-8	19R	溝122	3層	中世	1985. 8. 9	右寛骨	ウシ	鑑定用
133-1	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	角(加工品)	ニホンジカ	
133-2	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	右上腕骨	ウマ	鑑定用
133-3	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	左中足骨	ウシ	鑑定用
133-4	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	下腿骨・脛骨	ニホンジカ?	
133-5	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	右頸骨	ウシ	鑑定用
133-6	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	上頸前歯	ウシ	
133-7	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	切歯2本	ウシ	
133-8	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	下頸歯	ウシ	
133-9	14,15R	溝122	3層	中世	1985. 10. 2	上頸歯2本	ウシ	
134	16R	溝122	1層	中世	1985. 8. 27	上頸歯	ウシ	
135	19R	溝122	2層	中世	1985. 7. 29	右下頸歯・骨	ウマ	
136-1	16,17R	溝122	2層	中世	1985. 7. 25	左下頸歯	ウマ	
136-2	16,17R	溝122	2層	中世	1985. 9. 9	距骨	ウシ	鑑定用
137	17R	溝122	2層	中世	1985. 7. 30	左上頸歯	ウマ	
138	15,16R	溝122	2層	中世	1985. 9. 2	角	ニホンジカ	鑑定用
139	16R	溝122	2層	中世	1985. 8. 28	右上頸犬歯	オオカミ	鑑定用
140	16,17R	溝122	2層	中世	1985. 9. 9	?	?	
141-1	17,18R	溝122	2層	中世	1985. 7. 30	下腿骨・脛骨	ニホンジカ?	
141-2	17,18R	溝122	2層	中世	1985. 7. 30	左下頸骨	ウシ	鑑定用
142-1	16R	溝122	2層	中世	1985. 9. 3	頭骨	ヒト	鑑定用
142-2	16R	溝122	2層	中世	1985. 9. 3	左距骨	ウシ	鑑定用
142-3	16R	溝122	2層	中世	1985. 9. 3	角	ニホンジカ	鑑定用

動物遺体同定一覧表

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
143	15R	溝122	2層	中世	1985. 9.14	頭骨	ヒト	鑑定用
144	14R	溝122	2層	中世	1985.10. 1	左下顎骨・歯	ウン	鑑定用
145	14,15R	溝122	2層	中世	1985.10. 1	環椎	ウン	鑑定用
146	13N	井戸130	上部	鎌倉	1985. 8.29	左下顎歯	ウン	
147	17Q	P-1140		中世	1985.11.11	上顎歯	ウン	
148	13N	井戸131		鎌倉	1985.10.22	歯	ウン	
149	13N	井戸131		鎌倉	1985.10.22	右下顎犬歯	イヌ	鑑定用
148	13N	井戸131		鎌倉	1985.10.22	寛骨	ウン?	
149	18,19R,S	溝122	2層	中世	1985. 7.25	歯	ウマ	
150	18,19R,S	溝122	2層	中世	1985. 7.25	歯	ウマ	
151	14R	溝122	2層	中世	1985. 9.18	?	?	
152	14R	溝122	2層	中世	1985. 9.18	歯	ウン	
153	15R	溝122	2層	中世	1985. 9. 9	歯 2	ウン	
154	15R	溝122	2層	中世	1985. 9.10	歯 2	ウン	
155	19R	溝122	2層	中世	1985. 7.29	下顎骨	ウマ	鑑定用
156-1	16,17R	溝122	2層	中世	1985. 9. 9	?	?	
156-2	16,17R	溝122	2層	中世	1985. 9. 9	左顎骨	ウン	鑑定用
156-3	16,17R	溝122	2層	中世	1985. 9. 9	歯	ウマ	
157-1	15,16R	溝122	2層	中世	1985. 9. 2	歯	ウン	
157-2	15,16R	溝122	2層	中世	1985. 9. 2	角?	ニホンジカ	
158	15R	溝122	1層	中世	1985. 9. 5	歯	ウン	
159	20R	包含層	暗褐色土	不明	1983. 8.28	歯	ウマ	鑑定用
160	20S	溝122	下層	中世	1983. 9.14	?	ウン	
161	21S	溝122	張り出し	中世	1983. 9.30	歯	ウン?	
162	19S	溝122	下層	中世	1983.11.25	歯	ウマ	
163	21S	溝122	張り出し 下層	中世	1983.10.11	右大腿骨	ウマ	鑑定用
164	21S	溝122	張り出し部 下層	中世	1983.10. 7	胸甲	スッポン	鑑定用
165	19S	溝122	中層	中世	1983.11.19	左上腕骨	ウン	鑑定用
166-1	13-15R	溝122	2層	中世	1985.10. 1	歯 2	ウン?	
166-2	13-15R	溝122	2層	中世	1985.10. 1	頭骨	ウン	鑑定用
166-3	13-15R	溝122	2層	中世	1985.10. 1	左大腿骨	ウン	鑑定用
	130	P-269		鎌倉	1985. 9.25	胸部	鞘翅目	昆虫遺体

種子同定資料一覧表

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
1		溝122		中世	1983.	4個体	マツ	毬果
2	20S	溝122		中世	1983.10.28	1個体	マツ	毬果
3	20S	溝122	上層	中世	1983.11.18	完形1粒	モモ	種子
4	19S	溝122	中層	中世	1983.11.21	完3半1	モモ	種子
5	20S	溝122	下層	中世	1983. 9.13	3個体	マツ	毬果
6	20S	溝122	下層	中世	1983. 9.21	1個体	マツ	毬果

百間川米田遺跡 3

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
7	20S	溝122	下層	中世	1983. 9.17	1個体	マツ	穂果
8	20S	溝122	下層上部	中世	1983. 9.13	完形1粒	モモ	種子
9	21S	溝122	張り出し貝層中	中世	1983.10.11	4個体	マツ	穂果
10	20S	溝122	凹地	中世	1983.10.21	完形1果	マツ	穂果
11	20S	溝122	凹地	中世	1983.10.21	完形2粒	モモ	種子
12	20S	溝122	凹地下層	中世	1983.10.21	半欠1粒	ウメ?	種子
13		溝125		中世	1983.	完1半1	モモ	種子
14		溝125		中世	1983.	2個体	マツ	穂果
15		溝125		中世	1983.	半欠1粒	オニグルミ	種子
16	20S	溝115		古代	1983.12. 1	完2半1	モモ	種子
17	21S	土壇191		中世	1983. 9.22	1粒	?	鑑定用⑩
18	19T	土壇187		中世	1983.11.29	完形1粒	モモ	種子
19	19P,Q	井戸139	上層	室町	1985. 2.12	完形1粒	センダン	鑑定用⑥
20	16N	井戸134		室町	1985. 2.25	半欠1粒	マツ	穂果
21	16N	井戸134		室町	1985. 2.25	完形2粒	モモ	種子
22	15L	井戸123		鎌倉	1985. 3.12	半欠1粒	モモ	種子
23	15L	井戸123		鎌倉	1985. 2.22	完1半5	モモ	種子
24	15L	井戸123		鎌倉	1985. 2.22	半欠1	オニグルミ?	種子
25	15K	井戸122		鎌倉前半	1985. 3.16	完1半2	モモ	種子
26	13J	井戸121		室町	1985. 3.	完形1粒	マツ	穂果
27	13J	井戸121		室町	1985. 3.	43粒	?	種子
28	15I	井戸114 ?	井戸枠内	古墳初頭	1985. 3.23	完形2粒	モモ	種子
29	15I	井戸114		古墳初頭	1985. 3.23	完形4粒	モモ	種子
30	15I	井戸114		古墳初頭	1985. 3.	半欠1粒	モモ	種子
31	15I?	井戸114 ?		古墳初頭	1985.	完2半1	モモ	種子
32	15I?	井戸114 ?		古墳初頭	1985.	完形7粒	スモモ	種子
33	15I	井戸114		古墳初頭	1985. 3.25	完形2粒	モモ	種子
34	15I	井戸114		古墳初頭	1985. 3.23	完形2粒	スモモ	鑑定用⑦
35	15I	井戸114		古墳初頭	1985. 3.23	完形1粒	ムクノキ	鑑定用⑧
36	15I	井戸114		古墳初頭	1985. 3.25	半欠1粒	?	鑑定用⑨
37	15I	井戸114	最下層	古墳初頭	1985. 3.28	完形4粒	モモ	種子
38	15I	井戸114	井戸枠外	古墳初頭	1985. 3.13	完10半5	モモ	種子
39	15I	井戸114	井戸枠外	古墳初頭	1985. 3.23	完形12粒	モモ	種子
40	15I	井戸114	井戸枠外	古墳初頭	1985. 3.23	半欠1粒	スモモ	種子
41	16I	井戸112		古墳初期	1985. 3.12	完形2粒	モモ	種子

種子同定一覧表

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
42	16I	井戸111	中層	弥生末期	1985.	完形8粒	モモ	種子
43	17Q	土墳141		古墳初頭	1985.11.20	半欠2粒	モモ	種子
44	14K	建物132柱穴3			1985.	完形1粒	モモ	種子
45	11J	井戸118	井筒内下部	奈良	1985.9.3	半欠1粒	モモ	種子
46	11G	井戸105	中層	弥生後期	1985.7.15	完形1粒	モモ	種子
47	9G	井戸103	第6・7層	古墳初期	1985.8.26	完形2粒	モモ	種子
48	9G	井戸103	第8層	古墳初頭	1985.9.3	半欠1粒	?	鑑定用①
49	9G	井戸103	第8層	古墳初頭	1985.9.3	58粒	タデ属の一種	鑑定用②
50	9G	井戸103	第9・10層	古墳初頭	1985.9.4	完形1粒	ヒョウタン	種子
51	9G	井戸103	第9・10層	古墳初頭	1985.9.4	1粒	?	鑑定用③
52	9G	井戸103	第9・10層	古墳初頭	1985.9.4	半欠1粒	樹皮?	鑑定用④
53	10F	井戸101		古墳初頭	1985.8.30	完10半9	モモ	種子
54	10F	井戸101		古墳初頭	1985.8.30	半欠	ヒョウタン	果皮
55	10F	井戸101	上・中層	古墳初頭	1985.8.30	完形1粒	モモ	種子
56	14G	土墳105		弥生後期	1985.7.	102粒	ヒョウタン	種子
57	13G	井戸107	上層	古墳初頭	1985.7.31	完形1粒	モモ	種子
58	13G	井戸107	中層(一部上層)	古墳初頭	1985.8.2	完1半4	モモ	種子
59	13G	井戸107	4層	古墳初頭	1985.8.8	完1半1	モモ	種子
60	13G	井戸107	第6層	古墳初頭	1985.8.9	完形1粒	モモ	種子
61	13G	井戸107	第8層	古墳初頭	1985.8.6	完形1粒	モモ	種子
62	10H	井戸108		弥生後期	1985.7.31	半欠1粒	モモ	種子
63	9G	井戸102	第1層	古墳初頭	1985.8.6	完形1粒	モモ	種子
64	13H	井戸109	第4層	古墳初期	1985.8.19	52粒	モモ	種子
65	11I	井戸120		平安前期	1985.9.18	完形6粒	?	種子
66	11I	井戸120		平安前期	1985.9.18	完形1粒	?	種子
67	11I	井戸120		平安前期	1985.9.18	半欠1粒	?	種子
68	11I	井戸120		平安前期	1985.9.18	半欠1粒	?	種子
69	13F	溝101	中層	古墳前期	1985.9.3	半欠2粒	モモ	種子
70	9,10E	溝101	中層下部	古墳前期	1985.7.1	完形1粒	モモ	種子
71	12F	溝101	下層	弥生	1985.7.23	完形1粒	モモ	種子
72	13F	溝101	下層	弥生	1985.9.11	破片	モモ	種子
73	11E,F	溝101	下層	弥生	1985.7.5	完形5粒	モモ	種子
74	10J	池101		江戸初期	1985.8.6	完形4粒	(シングリ類)?	種子
75	10J	池101		江戸初期	1985.8.6	一部	ヒョウタン	果皮
76	10J	池101		江戸初期	1985.8.6	半欠1粒	?	果皮?

百間川米田遺跡 3

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
77	10H, I	近現代溝	上層Ⅱ	近現代	1985. 6. 3	完形3粒	コナラ属	種子
78	10H	近現用木	10ライン上層土手部分	近現代	1985. 9. 20	完形2粒	コナラ属	種子
79	15P	井戸138		鎌倉	1985.10.17	半欠1粒	モモ	種子
80	15P	井戸138		鎌倉	1985.10.17	完形1粒	マツ	種子
81	15P	井戸138		鎌倉	1985.10.17	完1半2	モモ	種子
82	15P	井戸117		鎌倉	1985.	完74半1	モモ	種子
83	14P	井戸127		古墳前期	1985.10.17	完形1粒	オニグルミ	種子
84	13N	井戸127		鎌倉	1985.	完形1粒	モモ	種子
85	13N	井戸127		鎌倉	1985. 9	1／4粒	モモ	種子
86	13N	井戸127		鎌倉	1985.	半欠1粒	オニグルミ	種子
87	12N	井戸127	井筒内	鎌倉	1985. 9. 18	完形1粒	モモ	種子
88	13N	井戸129		鎌倉	1985. 8. 23	完形1粒	カヤ	鑑定用⑤
89	13N	井戸128		平安末期	1985. 8. 10	1／2粒	モモ	種子
90	13N	井戸128		平安末期	1985. 8. 10	完形1粒	モモ	種子
91	13N	井戸130		鎌倉	1985. 9.	完12半3	モモ	種子
92	13N	井戸130	上部	鎌倉	1985. 8. 29	1／8粒	モモ	種子
93	13N	井戸130	東半上部	鎌倉	1985. 9. 2	1／8粒	モモ	種子
94	13N	井戸130	井戸枠内	鎌倉	1985. 9. 14	完1半1	モモ	種子
95	13N	井戸130	井戸枠外	鎌倉	1985. 9. 14	半欠1粒	モモ	種子
96	13N	井戸130	堀り方内	鎌倉	1985. 9. 18	半欠1粒	モモ	種子
97	13N	井戸131		平安末期	1985.10.21	完2半1	モモ	種子
98	16P	井戸116		弥生後期	1985.11.18	完形4粒	モモ	種子
99	16P	井戸116	下層	弥生後期	1985.11.25	完1半1	モモ	種子
100	16P	井戸116	最下層	弥生後期	1985.12. 4	完形3粒	モモ	種子
101	16P	井戸116	底面	弥生後期	1985.12. 5	完形1粒	モモ	種子
102	15Q	溝115	1号貝塚	平安	1983.11.29	完形1粒	モモ	種子
103	13M	No37(井戸)125		鎌倉	1985.	半欠2粒	オニグルミ	種子
104	14Q	No46(土壙)173		平安末期	1985. 9. 11	半欠1粒	モモ	種子
105	13N	No48(井戸)126		平安末期	1985. 9. 25	半欠1粒	モモ	種子
106	13N	No48(井戸)126	内側	平安末期	1985. 9. 25	完4半5	モモ	種子
107	11,12K,L	落ち込み101		古墳前期	1985.12.16	1／8粒	モモ	種子
108	130	建物138	柱穴 1 8	鎌倉	1985. 8. 2	完形1粒	モモ	種子
109	16P	建物157	柱穴 4	鎌倉	1985.11. 1	完1半1	モモ	種子
110	16Q	建物157	柱穴 7	鎌倉	1985.11. 1	完1半1	モモ	種子
111	16Q	建物157	柱穴 8	鎌倉	1985.11.11	完形1粒	モモ	種子

種子同定一覧表

番号	地区名	遺構名	土層名	時代	出土年月日	残存状況	種名	備考
112	11L	P 1 2 4 5		古墳後期	1985.12.27	完形1粒	モモ	種子
113	150	P 1 2 8 5		鎌倉	1986. 1.19	完形1粒	モモ	種子
114	17U ?	溝122	3層	中世	1985. 6.	1個体	マツ	毬果
115	15・16R	溝122	2層	中世	1985. 9. 2	1粒	モモ	種子
116	16R	溝122	2層	中世	1985. 9. 3	半欠1粒	モモ	種子
117	16R	溝122	2層	中世	1985. 8.28	半欠2粒	モモ	種子
118	18R	溝122	3層	中世	1985. 8. 3	半欠1粒	オニグルミ	種子
119	15R	土壌		中世	1985. 7.30	半欠1粒	モモ	種子
120	18S	土壌185		中世	1985. 8. 7	1粒	モモ	種子
121	14L,M	土壌128		弥生後期	1985.12.26	7 6粒	モモ	種子

百間川米田遺跡遺構一覧表

1 建物・塀一覧表

2 新旧遺構名称対照表

凡例

- 1 建物の方位は磁石方位であり、Nは磁北を指す。
- 2 遺構名称対照表のうち、担当者の欄は略号で示す（第2章第3節参照）
I：井上弘 Y：柳瀬昭彦 H：平井勝・平井泰男 E：江見正己 O：岡本寛久
K：古谷野寿郎 U：宇垣匡雅

建物・塀一覧表

名称	検出 地区	時代	規格	庇数	規模(cm)		床面積 (m ²)	棟方向	柱間(cm)		柱穴 形状	備考
					梁間	桁行			梁間	桁行		
建物 101	15I	弥生	2×1間	無	330	410	13.5	N 24° W	330	190,220	円形	
建物 102	14,15I,J	古墳?	2×1間	無	270	288	7.8	N 18° 30' E	270	144	円形	
建物 103	15K	弥生末期	2×1間	無	360	520	18.7	N 7° 30' W	360	260	円形	
建物 104	15L	弥生?	2×1間	無	272	400	10.9	N 6° 30' E	272	184,216	円形	
建物 105	16L	弥生?	2×1間	無	250	322	8.1	N 2° E	250	146,176	円形	
建物 106	16L,M	弥生末期	2×1間	無	290	356	10.3	N 19° E	290	178	円形	
建物 107	17N	弥生?	2×1間	無	270	288	7.8	N 2° W	270	144	円形	
建物 108	10I	奈良?	3×1間	無	430	580	24.9	N 19° E	430	200,190	方形	
建物 109	16M,N	古代	3×3間	無	453	528	23.9	E 10° 30' S	151	176	方形	
建物 110	18P	奈良?	? ?	(194)	(388)	(7.5)	N 13° E	194	194	方形		
建物 111	9F	中世?	2×1間	無	236	280	6.4	E 17° S	236	280	円形	
建物 112	10F	中世?	1×1間	無	232	246	5.3	N 19° W	232	246	円形	
建物 113	11G,F	中世?	1×1間	無	274	324	8.6	E 13° S	274	324	円形	
建物 114	13G	中世?	1×1間	無	240	242	5.5	E 17° S	240	242	円形	
建物 115	13G	中世?	2×1間	無	340	350	11.9	E 20° S	340	166,184	円形	
建物 116	14G	中世?	2×1間	無	212	338	6.8	E 21° 30' S	212	158,180	円形	
建物 117	14G	中世?	1×1間	無	252	380	9.4	E 21° S	252	170,210	円形	
建物 118	9G	中世?	2×1間	無	290	332	9.6	W-E	290	162,170	円形	
建物 119	11I	中世?	? × 2間	無	—	410	—	N 16° E	—	200,210	円形	
建物 120	12H	中世?	1×1間	無	208	260	5.3	N 8° 30' W	208	260	円形	
建物 121	12,13I	中世?	2×1間	無	234	330	7.7	N 20° E	234	165	円形	
建物 122	13I	中世?	2×1間	無	380	380	14.4	N 14° E	380	180,200	円形	
建物 123	13H	中世?	1×1間	無	304	308	9.1	N 12° 30' E	304	308	円形	
建物 124	14H,I	中世?	5×2間	無	288	650	18.7	N 37° E	138,150	116~158	円形	
建物 125	16H,I	中世?	2×1間	無	264	276	7.3	E 3° 30' S	264	132,144	円形	
建物 126	11,12K,L	室町	5×3間	北一面	600	990	59.4	E 7° S	200	198	円形	
建物 127	12L	中世?	2×2間	無	432	456	19.7	N 19° E	216	228	円形	
建物 128	13K	中世?	2×1間	無	306	498	15.2	E 17° S	306	226,272	円形	
建物 129	13K,L	鎌倉後?	1×1間	無	188	244	4.6	E 15° 30' S	188	244	円形	
建物 130	13K	鎌倉?	2×1間	無	248	416	10.3	E 8° 30' S	234,248	208	円形	
建物 131	13,14K,L	鎌倉	3×2間	無	468	912	42.7	N 10° 30' E	210,258	304	円形	
建物 132	14K,L	鎌倉	4×1間	無	420	866	36.4	N 10° E	420	198,214,256	円形	内角91° 30'
建物 133	14,15J,K	鎌倉	2×1間	無	356	532	18.9	N 12° 30' E	356	190,266,342	円形	
建物 134	14,15K	鎌倉	3×1間	無	404	720	29.1	E 8° S	404	240	円形	
建物 135	14M	室町?	1×1間	無	230	264	6.1	E 14° 30' S	230	264	方形	
建物 136	14,15L,M	鎌倉	2×1間	無	256	428	10.9	N 15° E	256	213	方形	
建物 137	12N,0	鎌倉	3×1間	無	368	804	29.6	N 6° 30' E	368	268	円形	
建物 138	12,13N,0	鎌倉	3×1間	4面	634	1034	65.6	E 12° S	444	278	円形	

百間川米田遺跡 3

名称	検出地区	時代	規格	底数	規模(cm)		床面積 (m ²)	棟方向	柱間(cm)		柱穴 形状	備考
					梁間	桁行			梁間	桁行		
建物 139	15N,0	鎌倉	2×1間	無	400	468	18.7	N 11° E	186,214	468	円形	
建物 140	150	鎌倉	1×1間	無	202	206	4.2	E 10° S	202	206	円形	
建物 141	160	中世?	1×1間	無	294	330	9.7	N 20° 30'E	294	330	円形	
建物 142	16M,N	中世?	2×1間	無	296	328	9.7	E 14° S	296	164	円形	
建物 143	17,18M,N	中世?	? ?	(532)	(356)	(18.9)	E 8° 30'S	220,312	356	方形		
建物 144	17,18N,0	鎌倉	3×3間 東一面	650	816	53.0	N 12° 30'E	174,238	210,280,326	円形		
建物 145	17N	中世?	1×1間	無	259	291	7.5	E 12° 15'S	259	291	円形	
建物 146	17N,0	中世?	2×1間	無	320	368	11.8	N 13° E	320	174,184,194	円形	
建物 147	16,170	室町?	3×2間	無	444	790	35.1	E 9° S	196,248	194,298	円形	
建物 148	17,180	鎌倉後半	2×1間	無	380	528	20.1	N 12° 30'E	190	528	円形	
建物 149	16,17P	鎌倉	3×1間	無	420	888	37.3	E 8° 30'S	420	296	円形	
建物 150	17,18P	鎌倉後半	2×2間	無	384	456	17.6	N 11° E	192	228	円形	
建物 151	13P,Q	鎌倉	2×1間	無	410	536	22.0	E 5° 30'S	410	220,316	円形	
建物 152	13P,Q	室町	3×1間	無	404	642	25.9	E 4° S	404	198,246	円形	
建物 153	14,15P,Q	室町?	3×2間	無	436	748	32.6	E 7° 30'S	218	234,280	円形 緩付	
建物 154	14,15Q	鎌倉	3×1間	無	324	495	16.0	E 8° 30'S	324	165	円形	
建物 155	14,15Q	中世	3×1間	無	356	504	17.9	E 6° 30'S	356	168	円形	
建物 156	16P	鎌倉	2×1間	無	383	460	17.6	N 11° 30'E	383	230	円形	
建物 157	15,16P,Q	鎌倉	3×2間 南北二面	680	840	57.1	E 11° 30'S	160,180	260,290	円形 内角91° 30		
建物 158	15,16P,Q	鎌倉	2×1間	無	332	514	17.1	E 14° S	332	257	円形	
建物 159	16P,Q	室町?	2×1間	無	365	400	14.6	N 12° 30'E	365	200	円形	
建物 160	16P,Q	鎌倉	2×1間	無	436	554	24.2	E 14° S	436	277	円形	
建物 161	17,18Q	鎌倉	1×1間	無	246	454	11.2	E 12° S	246	454	円形	
建物 162	17,18Q	中世	1×1間	無	414	424	17.6	E 6° 30'S	414	424	円形	
建物 163	18Q	中世	2×1間	無	286	412	11.8	E 7° S	286	206	円形	
建物 164	18,19Q	鎌倉?	2×1間	無	330	444	14.6	E 13° S	330	222	円形	
建物 165	18T	中世	2×1間	無	432	508	21.9	E 3° S	432	234,274	円形	
建物 166	19S	中世	2×1間 北1面	418	534	22.3	E 3° S	260	256,276	円形		
建物 167	19S	中世	1×1間	無	170	244	4.1	N 11° E	170	238,244	円形	
建物 168	20S	中世	1×1間	無	164	184	2.8	E 15° S	164	160,184	円形	
建物 169	20,21T	中世	3×1間	無	300	650	19.5	N 5° E	300	186,220,244	円形	
建物 170	19U	中世	1×1間	無	246	246	6.0	N 7° E	246	246	円形	
屏 101	10K,L11J	室町	(4間)		1458		N 12° E		228,360,508	方形		
屏 102	11J	中世	1間		366		E 6° S		366	円形		
屏 103	12N,0	鎌倉?	2間		592		N 10° E		296	円形		
屏 104	15N	鎌倉	3間		644		E 10° 30'S		192,260	円形		
屏 105	170	中世?	2間		392		E 16° S		196	円形		
屏 106	17N,0	中世	3間		600		E 14° 30'S		200	円形		
屏 107	17,180	鎌倉	2間		396		E 10° S		198	円形		

建物一覧表

名称	検出 地区	時代	規格	庇数	規模(cm)		床面積 (m ²)	棟方向	柱間(cm)		柱穴 形状	備考
					梁間	桁行			梁間	桁行		
屏 108	13,14P	室町?	3間			595		E 6° 30'S		177,194,224	円形	
屏 109	15Q	鎌倉?	2間			402		E 10° S		190,212	円形	
屏 110	16P	鎌倉	2間			396		E 14° 30'S		198	円形	

新旧遺構名稱对照表

報告書遺構名	地 区	担当者	年度	調査時遺構名	報告書遺構名	地 区	担当者	年度	調査時遺構名	報告書遺構名	地 区	担当者	年度	調査時遺構名
堅穴住居101	15H	I. H	1984	住居2	堅穴住居102	13K	I. O	1985	No73-74	堅穴住居103	16,17W	I. H	1984	住居1
堅穴住居104	17W	I. H	1984	住居3	堅穴住居105	13,14Q	I. O	1985	No53					
建物101	15I	I. H	1984	建物7	建物102	14,15I,J	I. H	1984	建物16	建物103	15K	I. H	1984	建物15
建物104	15L	I. H	1984	建物5	建物105	16L	I. H	1984	建物4	建物106	16L,M	I. H	1984	建物9
建物107	17N	I. H	1984	建物2	建物108	10I	Y. U	1985	建物15	建物109	16M,N	I. H	1984	建物23
建物110	18P	I. H	1984	建物3	建物111	9F	Y. U	1985	建物8	建物112	10F	Y. U	1985	建物7
建物113	11G,H	Y. U	1985	建物6	建物114	13G	Y. U	1985	建物5	建物115	13G	Y. U	1985	建物5
建物116	14G	Y. U	1985	建物2	建物117	14G	Y. U	1985	建物1	建物118	9G	Y. U	1985	建物14
建物119	10I	Y. U	1985	建物13	建物120	12H	Y. U	1985	建物9	建物121	12,13I	Y. U	1985	建物10
建物122	13I	Y. U	1985	建物11	建物123	13H	Y. U	1985	建物12	建物124	13I,14H,I	I. H	1984	建物17
建物124	14H,I	1.H Y.U	1984,5	建物17 建物3	建物125	16H,I	I. H	1984	建物8	建物126	11,12K,L	I. O	1985	建物52
建物127	12L	I. O	1985	No108	建物128	13K	I. O	1985	No109	建物129	13K,L	I. O	1985	No107
建物130	13L	I. O	1985	No92	建物131	13,14K,L	I.H 1.0	1984,5	建物14	建物132	14K,L	I.H 1.0	1984,5	建物13 No93
建物133	14,15J,K	I. H	1984	建物11	建物134	14,15K	I. H	1984	建物12	建物135	14M	I. O	1985	No95
建物136	14,15L,M	I.H 1.0	1984,5	建物 6	建物136	14L,15L,M	I. O	1985	No90	建物137		I. O	1985	No51
建物138	12,13N,O	I. O	1985	No50	建物139	15N,0	I. O	1985	No87	建物140	15O	I. O	1985	No88
建物141	16O	I. H	1984	建物30	建物141	16O	I. O	1985	No94	建物142	16M,N	I. H	1984	建物10
建物143	17,18M,N	I. H	1984	建物18	建物144	17,18N,0	I. H	1984	建物1	建物145	17N	I. H	1984	建物19
建物146	17N,0	I. H	1984	建物20	建物147	16,17O	I. H	1984	建物21	建物148	17,18O	I. H	1984	建物22
建物149	16,17P	I. H	1984	建物25	建物150	17,18P	I. H	1984	建物24	建物151	13P,Q	I. O	1985	No41
建物152	13P,Q	I. O	1985	No42	建物153	14,15P,Q	I. O	1985	No60	建物154	14,15Q	I. O	1985	No47
建物155	14,15Q	I. O	1985	No98	建物156	16P	I. O	1985	No61	建物157	15,16P,Q	I. O	1985	No59
建物158	15,16P,Q	I. O	1985	No100	建物159	16P,Q	I. O	1985	No101	建物160	16P,Q	I. O	1985	No99
建物161	17,18Q	I. H	1984	建物26	建物162	17,18Q	I. H	1984	建物29	建物163	18Q	I. H	1984	建物28
建物164	18,19Q	I. H	1984	建物27	建物165	18T	H. K	1983	建物1	建物166	19S	H. K	1983	建物5

新旧遺構名称对照表

報告書遺構名	地 区	担当者	年度	調査時遺構名	報告書遺構名	地 区	担当者	年度	調査時遺構名	報告書遺構名	地 区	担当者	年度	調査時遺構名
建物167	19S	H. K	1983	建物4	建物168	20S	H. K	1983	建物2	建物169	20-2T	H. E	1985	建物1
建物170	19U	H. K	1983	建物3										
堀101	10K,L,11J	I. O	1985	No.62	堀102	11J	I. O	1985	No.96	堀103	12N,0	I. O	1985	No.105
堀104	15N	I. O	1985	No.89	堀105	17O	I. H	1984	柵1	堀106	17N,0	I. H	1984	柵2
堀107	17,18O	I. H	1984	柵3	堀108	13,14P	I. O	1985	No.104	堀109	15Q	I. O	1985	No.103
堀110	16P	I. O	1985	No.102										
井戸101	10F	Y. U	1985	井戸4	井戸102	9G	Y. U	1985	井戸10	井戸103	9F	Y. U	1985	井戸3
井戸104	9F	Y. U	1985	井戸12	井戸105	11G	Y. U	1985	井戸2	井戸106	12G	Y. U	1985	井戸6
井戸107	13G	Y. U	1985	井戸7	井戸108	10H	Y. U	1985	井戸9	井戸109	13H	Y. U	1985	井戸11
井戸110	13H	Y. U	1985	井戸8	井戸111	16I	I. H	1984	井戸12	井戸112	16I	I. H	1984	井戸11
井戸113	15I	I. H	1984	井戸10	井戸114	15I	I. H	1984	井戸9	井戸115	14G	I. O	1985	No.58
井戸116	16P	I. O	1985	No.30	井戸117	14Q	I. O	1985	No.11	井戸118	11I	Y. U	1985	井戸1
井戸119	15L	I. H	1984	井戸13	井戸120	11I	Y. U	1985	井戸13	井戸121	13I	I. H	1984	井戸8
井戸122	15K	I. H	1984	井戸7	井戸123	15L	I. H	1984	井戸6	井戸124	13H	I. O	1985	No.38
井戸125	13M	I. O	1985	No.37	井戸126	13N	I. O	1985	No.48	井戸127	12N	I. O	1985	No.14
井戸128	13N	I. O	1985	No.17	井戸129	13N	I. O	1985	No.16	井戸130	13N	I. O	1985	No.19
井戸131	13N	I. O	1985	No.20	井戸132	14N	I. O	1985	No.27	井戸133	16N	I. H	1984	井戸5
井戸134	16N,0	I. H	1984	井戸3	井戸135	16N,0	I. H	1984	井戸4	井戸136	13P	I. O	1985	No.4
井戸137	15P	I. O	1985	No.10	井戸138	15P	I. O	1985	No.9	井戸139	19P,Q	I. H	1984	井戸1
井戸140	18Q	I. H	1984	井戸2	井戸141	20S	H. K	1983	井戸1					
土壌01	9G	Y. U	1985	土壌15	土壌102	11G	Y. U	1985	土壌11	土壌103	11G	Y. U	1985	土壌10
土壌04	12G	Y. U	1985	土壌16	土壌105	14G	Y. U	1985	土壌5	土壌106	13H	Y. U	1985	土壌5
土壌07	13H	Y. U	1985	土壌4	土壌108	9I	Y. U	1985	土壌14	土壌109	9I	Y. U	1985	土壌12
土壌10	10I	Y. U	1985	土壌6	土壌111	12I	Y. U	1985	土壌13	土壌112	12I	Y. U	1985	土壌9
土壌13	12I	Y. U	1985	土壌8	土壌114	12J	Y. U	1985	土壌3	土壌115	12I	Y. U	1985	土壌2
土壌16	12J	Y. U	1985	土壌1	土壌117	13J	Y. U	1985	井戸5	土壌118	15J	I. H	1984	P11

報告書遺跡名	地 区	担当者	年度	調査時遺構名	報告書遺構名	地 区	担当者	年度	調査時遺構名	報告書遺構名	地 区	担当者	年度	調査時遺構名
土壤119	15J,K	I. H	1984	P10	土壤120	15K	I. H	1984	P9	土壤121	15K	I. H	1984	P8
土壤122	15K	I. H	1984	P7	土壤123	14K	I. H	1984	P12	土壤124	15K	I. H	1984	P13
土壤125	15K	I. H	1984	P14	土壤126	17K	I. H	1984	P383	土壤127	14L	I. O	1985	No71
土壤128	14L,M	I. O	1985	No70	土壤129	13,14W	I. O	1985	No82	土壤130	17W	I. H	1984	P15
土壤131	17M	I. H	1984	P1	土壤132	170	I. O	1985	No40	土壤133	13P	I. O	1985	No43
土壤134	14Q	I. O	1985	No12	土壤135	16Q	I. O	1985	No83	土壤136	16P	I. O	1985	No84
土壤137	17Q	I. O	1985	No85	土壤138	17Q	I. O	1985	No86	土壤139	17Q	I. H	1984	No4
土壤140	17Q	I. H	1984	No3	土壤141	17Q	I. H	1984	No2	土壤142	17Q	I. H	1984	No1
土壤143	19R	H. K	1983	土壤15	土壤144	19R	H. K	1983	土壤9	土壤145	20R	H. K	1983	土壤8
土壤146	150	I. O	1985	No28	土壤147	15Q	I. O	1985	No8	土壤48	14Q	I. O	1985	No32
土壤149	15H	I. H	1984	P5	土壤150	11K	I. O	1985	No67	土壤51	11L	I. O	1985	P1080
土壤152	11L	I. O	1985	No65	土壤153	11L	I. O	1985	No66	土壤54	12K	I. O	1985	P1000
土壤155	13L	I. O	1985	P947	土壤156	14L	I. O	1985	No69	土壤57	120,P	I. O	1985	No81
土壤158	12N	I. O	1985	No13	土壤159	130	I. O	1985	No31	土壤60	13N	I. O	1985	No15
土壤161	13N	I. O	1985	No18	土壤162	140	I. O	1985	No26	土壤63	140	I. O	1985	No25
土壤164	140	I. O	1985	No24	土壤165	140	I. O	1985	No23	土壤66	150	I. O	1985	No29
土壤167	170	I. H	1984	P2	土壤168	170	I. H	1984	P3	土壤69	14P	I. O	1985	No3
土壤170	14Q	I. O	1985	No2B	土壤171	14Q	I. O	1985	No2A	土壤72	15P	I. O	1985	No5
土壤173	14Q	I. O	1985	No46	土壤174	15Q	I. O	1985	No45	土壤75	16Q	I. O	1985	No6
土壤176	16Q	I. O	1985	No77	土壤177	13R	H. E	1985	土壤9	土壤78	13R	H. E	1985	土壤7
土壤179	15R	H. E	1985	土壤10	土壤180	16R	H. E	1985	土壤6	土壤81	16R	H. E	1985	土壤8
土壤182	16,17R	H. E	1985	土壤3	土壤183	17R	H. E	1985	土壤2	土壤84	17S	H. E	1985	土壤1
土壤185	18S	H. E	1985	土壤5	土壤186	18S	H. E	1985	不整形土壤	土壤87	19S,T	H. K	1983	土壤12
土壤188	19S	H. K	1983	土壤14	土壤189	19S	H. K	1983	土壤13	土壤190	21R	H. K	1983	土壤10
土壤191	21S	H. K	1983	土壤1	土壤192	21T	H. K	1983	土壤11	土壤193	18T	H. E	1985	土壤16
土壤194	16W	H. E	1985	土壤12	土壤195	17W	H. E	1985	土壤11	土壤196	15A	H. E	1985	土壤21

報告書遺構名	地 区	擔當者	年 度	調查時遺構名	報告書遺構名	地 区	擔當者	年 度	調査時遺構名	報告書遺構名	地 区	擔當者	年 度	調查時遺構名
土壤197	15AA	H. E	1985	土壤22	土壤198	15,16AA	H. E	1985	土壤20	土壤99	15AA	H. E	1985	土壤24
土壤200	16AA	H. E	1985	土壤19	土壤201	16AA	H. E	1985	土壤18	土壤202	17Z	H. E	1985	土壤13
土壤203	16AA	H. E	1985	土壤23	土壤204	16AA, BB	H. E	1985	土壤17	土壤205	17BB	H. E	1985	土壤14
土壤206	17BB	H. E	1985	土壤15	土壤207	10K	I. O	1985	No.63	土壤208	11L	I. O	1985	P. 1081
溝101	9-14E,F	Y. U	1985	F溝	溝102	9-15G,15H	Y. U	1985	G溝	溝103	9,10F,G	Y. U	1985	溝 3
溝104	9G	Y. U	1985	溝 4	溝105	11-16K,L	I. H. I. O	1984,5	溝 1 No.72	溝106	11L,M,12M	I. O	1985	No.75
溝107	12K,L,13L	I. O	1985	No.68	溝108	14L	I. O	1985	No.78	溝109	14,15I-N	I. O	1985	No.79,80
溝110	12-21N-S	H. K. I. H 1.0	1983-5	溝12 溝 2 No.49, 57	溝111	10-19L-R	I. H. I. O	1984,5	溝 3 No.39,56	溝112	11-17M-Q	I. O	1985	No.55
溝113	12,130,14P	I. O	1985	No.36	溝114	14P, Q	I. O	1985	No.64	溝115	14-16G,R 19-21S,T	H. K. I. O	1983,5	溝 11 No.35
溝116	15L	I. H	1984	溝 4	溝117	170,P,18N,0	I. H	1984	溝 6	溝118	18P	I. H	1984	No.5
溝119	14Q,15P,Q	I. O	1985	No.54	溝120	14Q,15Q	I. O	1985	No.33	溝121	16Q,17Q	I. O	1985	No.34,44
溝122	13-21R,S	H. K. H. E	1983,5	溝 1 溝 2	溝123	16,17S-AA	H. E	1985	溝 3	溝124	15-18MA,BB	H. E	1985	溝 4
溝125	20,21S,T	H. K	1983	溝 5	溝126	20S	H. K.	1983	溝 4	溝127	20S	H. K	1983	溝 2
溝128	20S	H. K	1983	溝 3	溝129	20S	H. K	1983	溝 6	溝130	19,20S,T	H. K	1983	溝 10
溝131	17,18T-Z	H. E	1985	溝 4	溝132	17,18T-Z	H. E	1985	溝 5	溝133	17,18T-Z	H. E	1985	溝 6
溝134	17,18T-Z	H. E	1985	溝 7										

図版 1



1. 百間川米田遺跡調査前遠景（東から）



2. E～R調査区全景（南西から）

図版 2



1. F～J調査区全景（南西から）



2. G～J調査区全景（西から）



1. F～H調査区全景（部分・南西から）



2. F～I調査区全景（南東から）

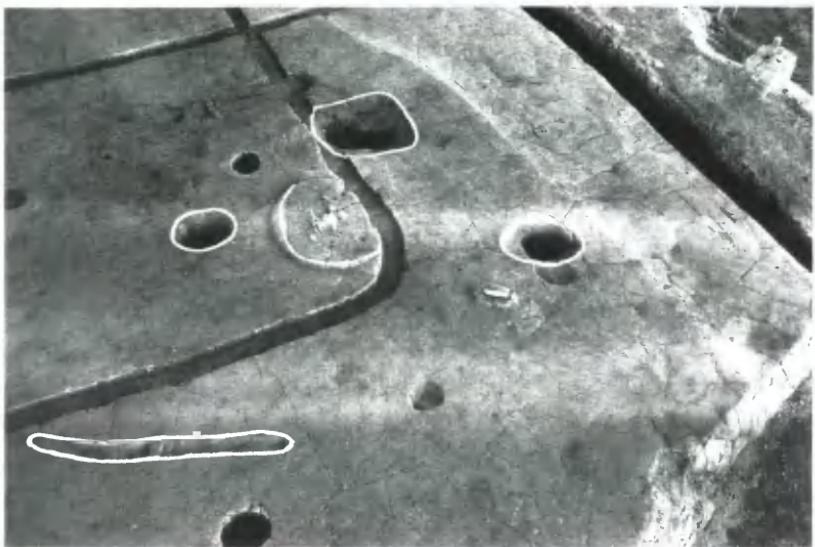
図版 4



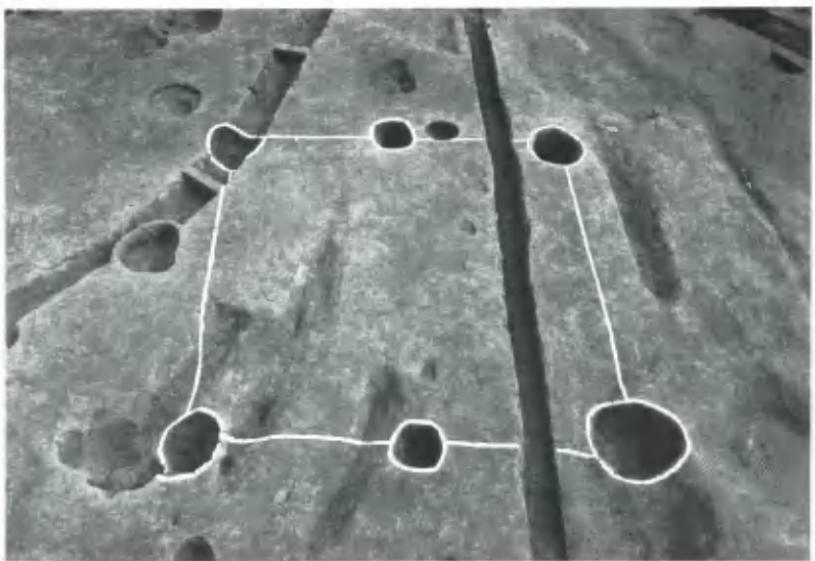
1. 竪穴住居102（南から）



2. 竪穴住居103（北から）



1. 穂穴住居105（北西から）



2. 建物142（北から）

図版 6



1. 井戸101 断面（西から）



2. 井戸101 遺物出土状態（東から）



25



24



26

3. 井戸101 出土遺物（約1/4）



1. 井戸 102 断面（南東から）

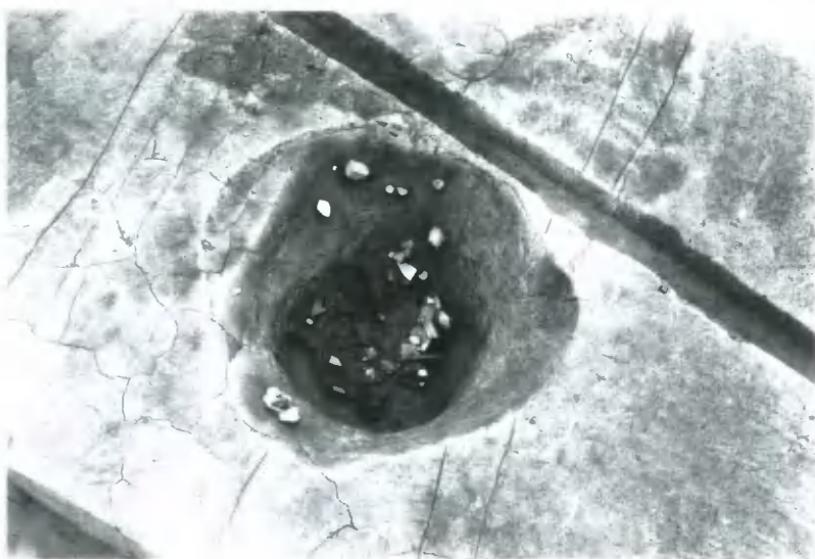


2. 井戸 102 完掘状態（東から）

図版 8



1. 井戸103 断面（南西から）



2. 井戸103 遺物出土状態〔1〕（南西から）



1. 井戸103 遺物出土状態〔2〕(南西から)



2. 井戸103 遺物出土状態〔3〕(南西から)

図版10



36



58



56



62



53



63

井戸103 出土遺物〔1〕(約1/4)



64



64



66



64



46



37



52

井戸103 出土遺物〔2〕(約1/4, 約2/5)

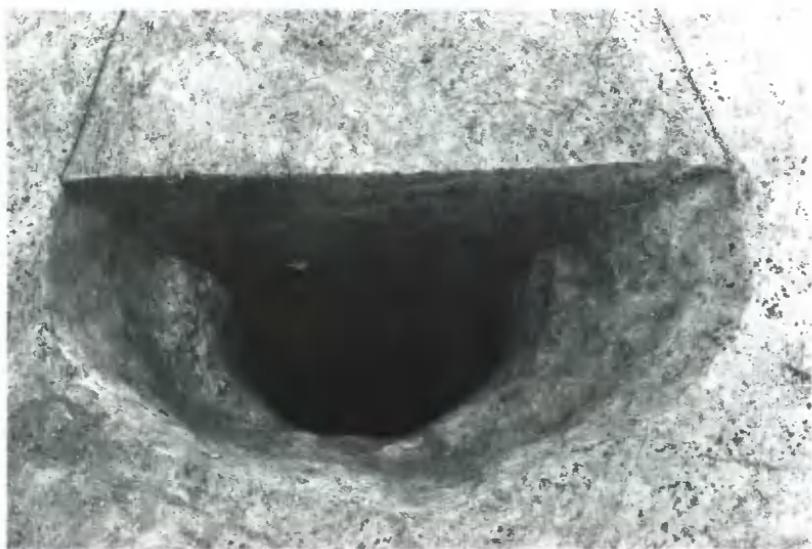
図版12



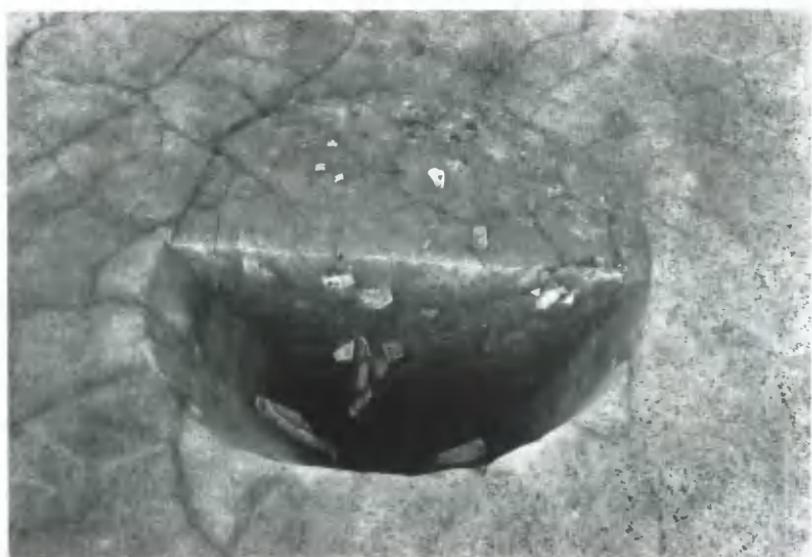
W 1

W 2

井戸103 出土遺物〔3〕(約1/4, 約1/5)



1. 井戸104 断面（南西から）



2. 井戸105 断面（西から）

図版14



1. 井戸105 完掘状態（西から）



83



69



83



69

2. 井戸105 出土遺物（約1/4）



1. 井戸105出土鉢69の内面に描かれた線刻絵画〔1〕(鹿と弧文)



2. 井戸105出土鉢69の内面に描かれた線刻絵画〔2〕(鹿と弧文の拡大)

図版16



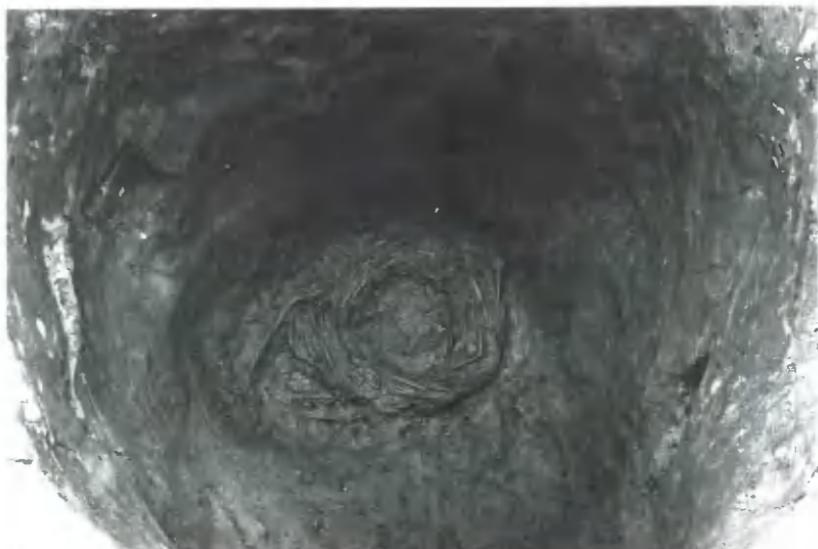
1. 井戸106 断面（西から）



2. 井戸107 断面（南西から）



1. 井戸107 検出過程（南西から）



2. 井戸107 底部出土蔓製品（西から）

図版18



102



117



117



111

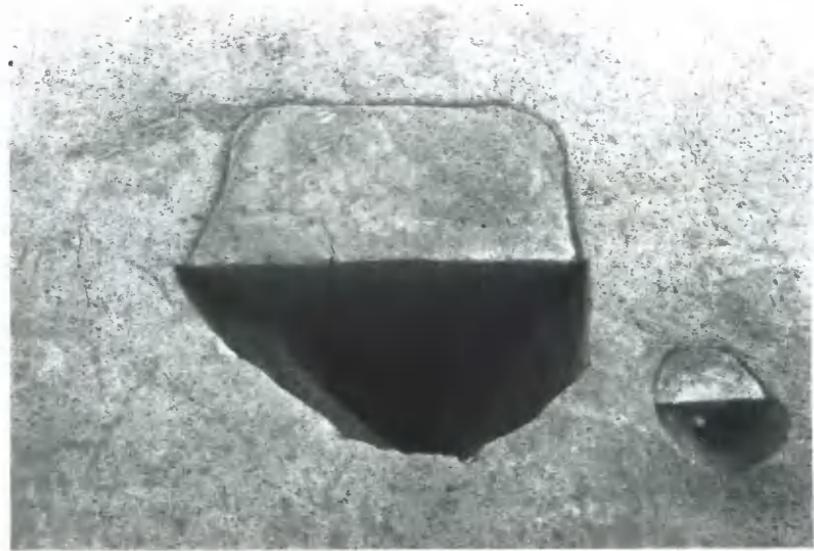


W 3

井戸107 出土遺物 (約1/4)



1. 井戸108 断面（南東から）

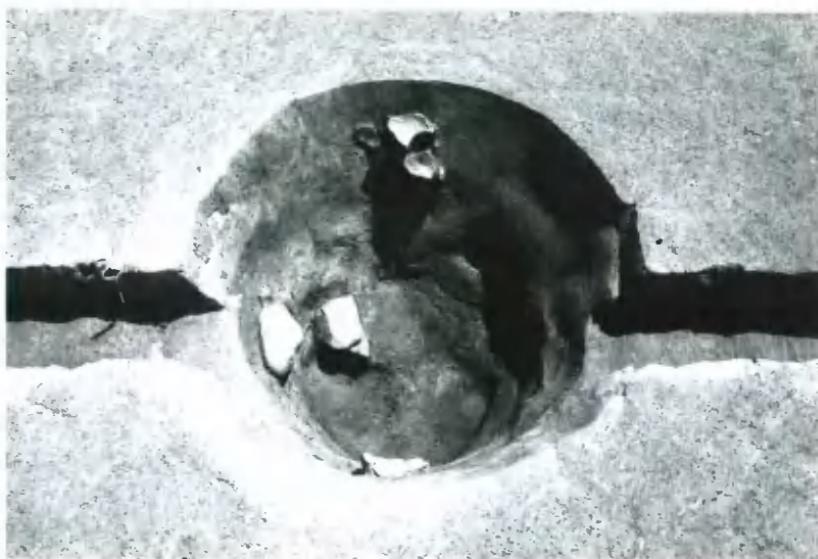


2. 井戸109 断面（西から）

図版20



1. 井戸110 断面（西から）



2. 井戸110 遺物出土状態（西から）



1. 井戸111 遺物出土状態（西から）



188



192



150



171

2. 井戸111 出土遺物〔1〕

図版22



176



179



177



182



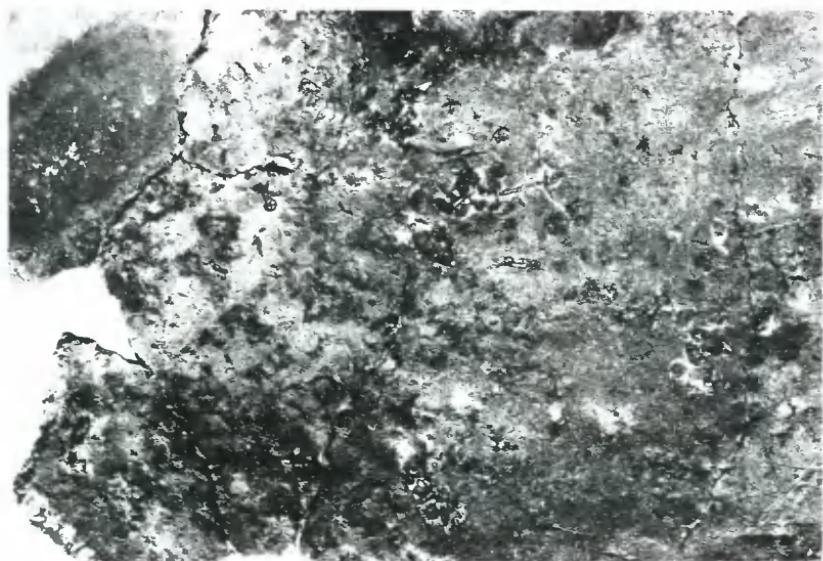
178



185



1. 井戸112（南から）



2. 井戸112出土土器195内面に付着する炭化米

図版24



198



200



196



199



197



201



1. 井戸113

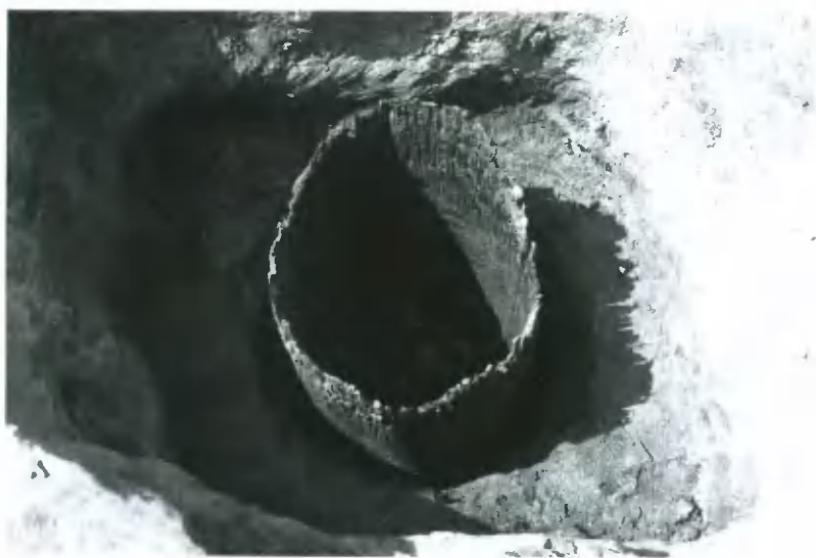


2. 井戸115・出土遺物

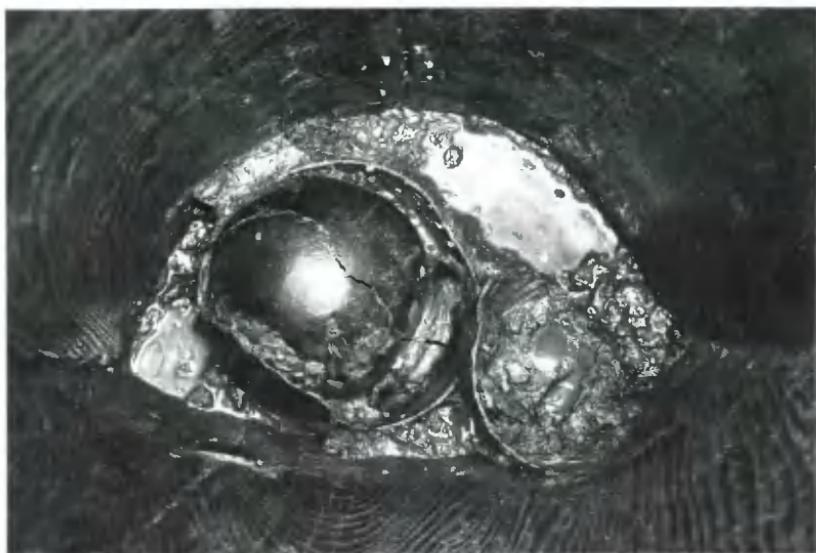
図版26



1. 井戸114 (北東から)



2. 井戸114 井戸枠 (北東から)



1. 井戸114 井戸枠内遺物出土状態（南東から）



206



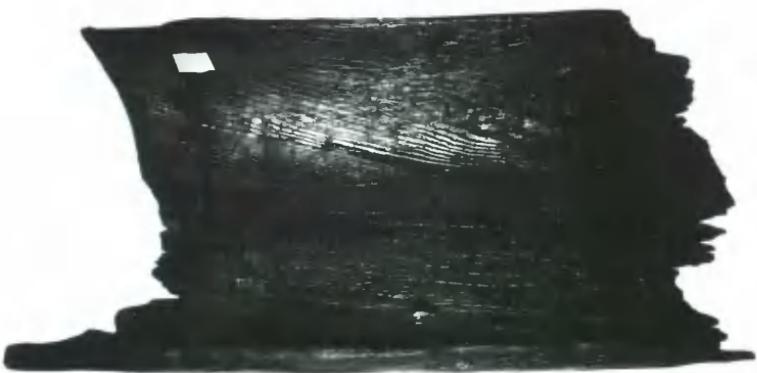
炭化米



炭化米

2. 井戸114 出土遺物

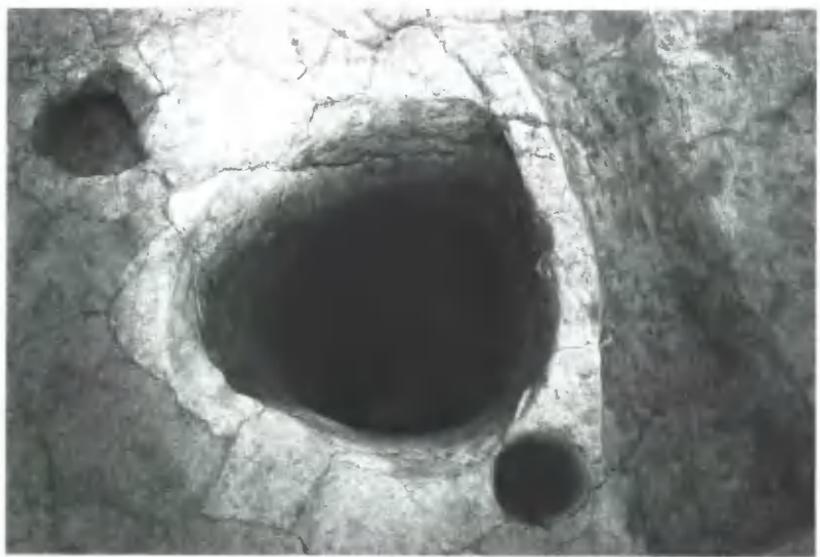
図版28



井戸114 井戸枠 (W 4)



1. 井戸116 遺物出土状態（北から）



2. 井戸116 完掘状態（東から）

図版30



228



226

222

井戸116 出土遺物〔1〕



221



224



223



225



井戸116 出土遺物〔2〕

図版32



227

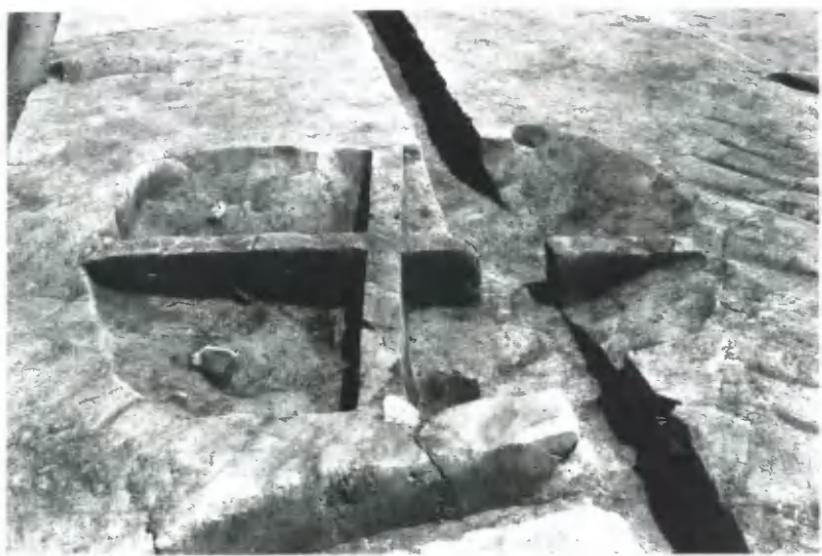
1. 井戸116 出土遺物〔3〕



2. 井戸117



1. 土壌103（西から）



2. 土壌113（南西から）

図版34



1. 土壌105 遺物出土状態（西から）



238



241



242

2. 土壌105 出土遺物〔1〕(約1/4)



239



240



241

土壤105 出土遺物〔2〕(約1/4)

図版36



245



251



249



252



250

土壤105 出土遺物〔3〕(約1/4)



266



272



275



267



275

図版38



256



261



257



262



258



283



287



294

土壤105 出土遺物〔5〕(約1/4)

1



2



3

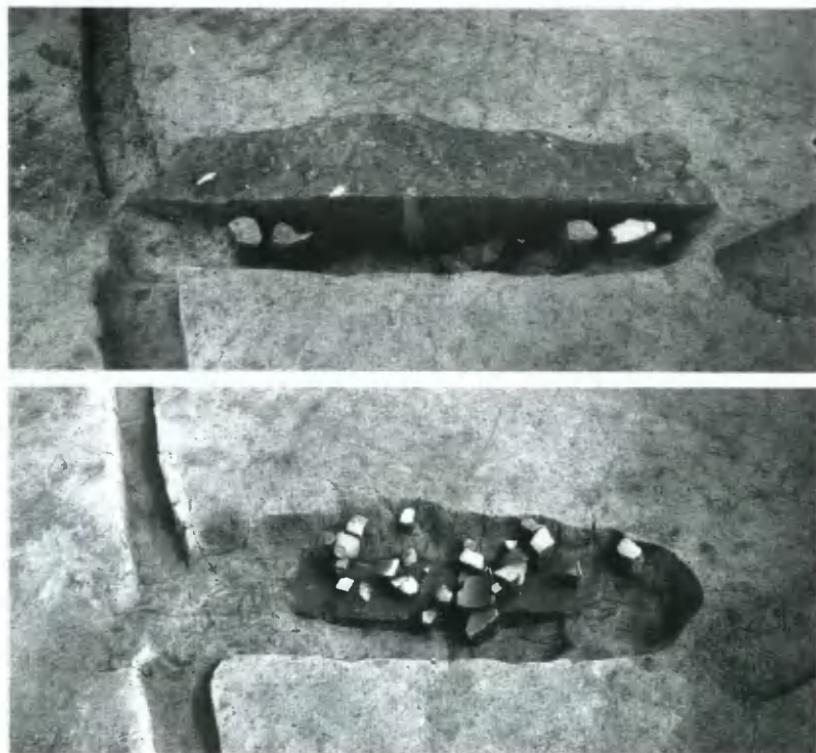


1. 土壌106（西から）

2. 土壌108（西から）

3. 土壌110（南東から）

図版40



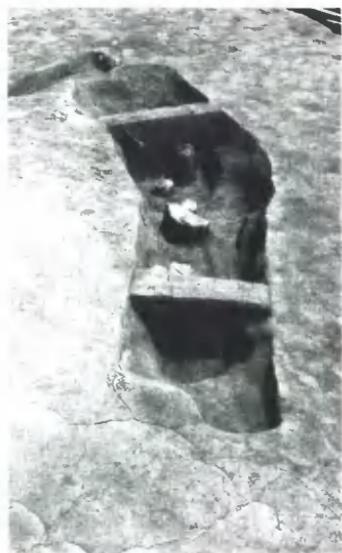
320



土壌114（南西から）・出土遺物



1. 土壌115・116（南西から）

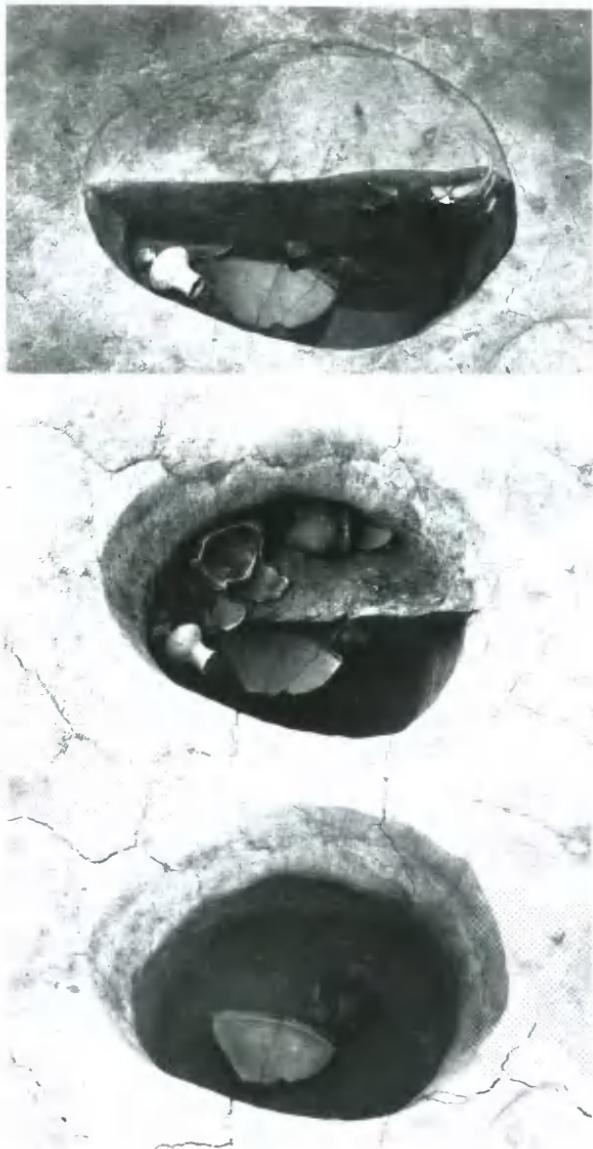


2. 土壌115・116（北西から）



3. 土壌116 出土遺物（約1/4）

図版42



土壤117 遺物出土状態



346



356



345



340



338



344



347

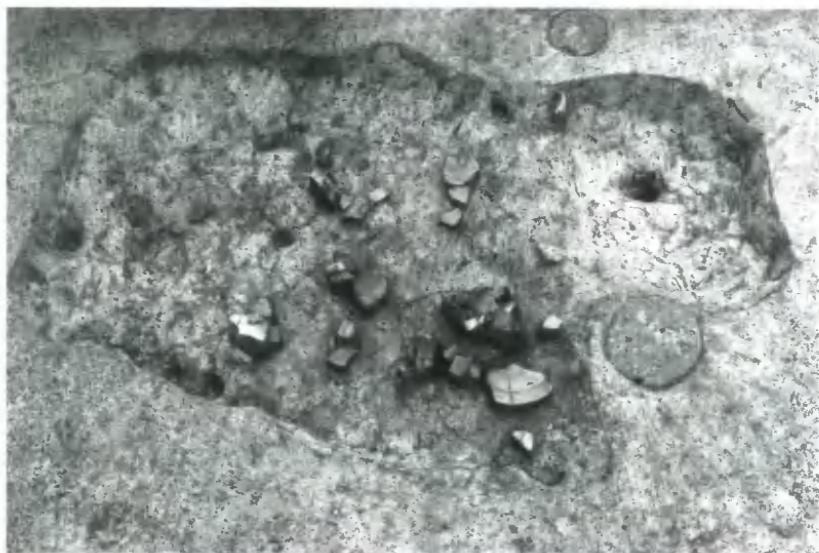
図版44



1. 土壌128 (南から)



2. 土壌128 出土はしご状木器



1. 土壌131（南から）



2. 土壌134（東から）

図版46



1. 溝101 全景（西から）



2. 溝101 全景（東から）

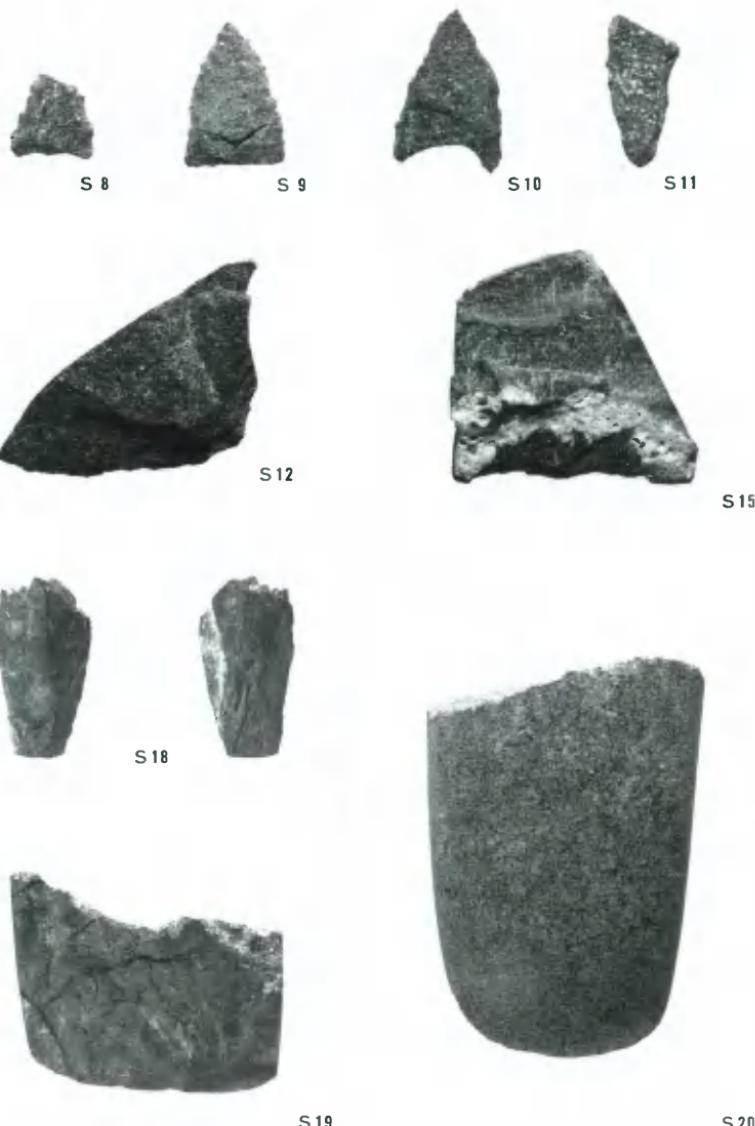


1. 溝102 B—B'断面（東から）



2. 溝102 C—C'断面（西から）

図版48



溝102 出土石器



514



530



532



533



534



満111・110（左下）・105（右下）出土遺物



図版50



1. 溝101上部包含層下層 遺物出土状態〔1〕(西から)



2. 溝101上部包含層下層 遺物出土状態〔2〕(東から)



1. 溝101上部包含層下層 遺物出土状態〔3〕(南から)



2. 溝101上部包含層下層 遺物出土状態〔4〕(南西から)

図版52



619



622



632



646

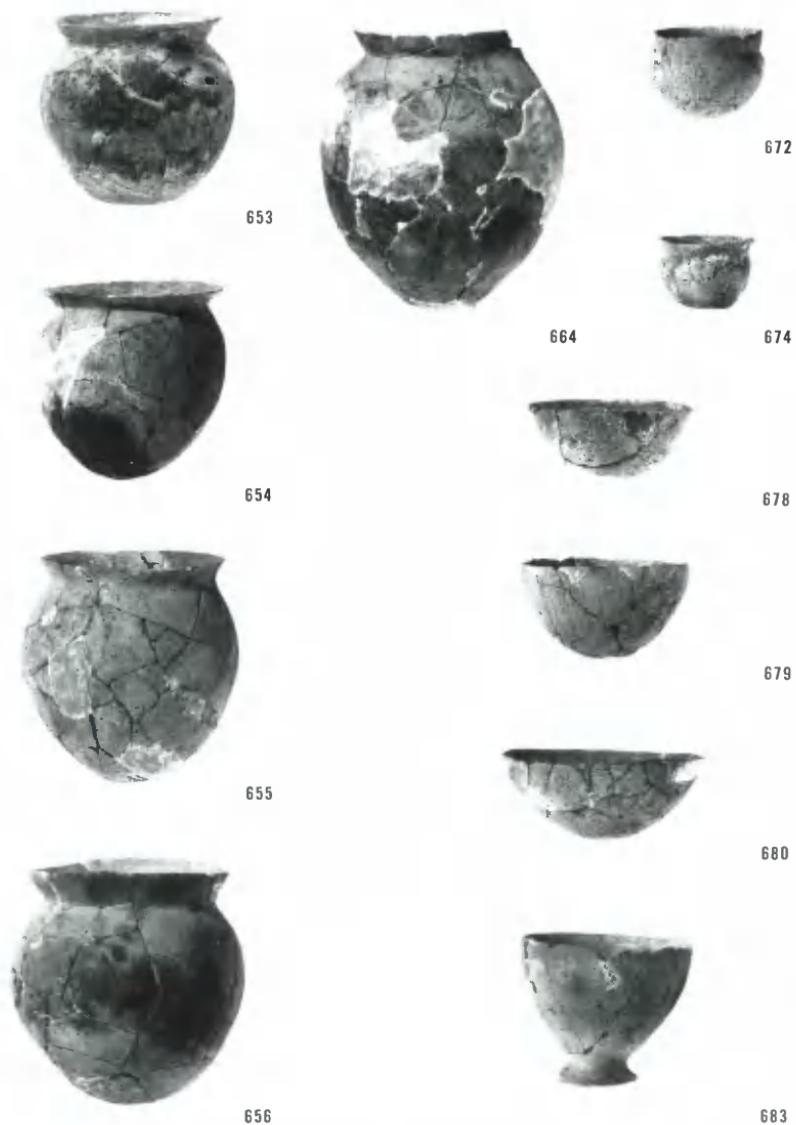


642



657

溝101上部包含層下層 出土遺物〔1〕(約1/4)



溝101上部包含層下層 出土遺物〔2〕(約1/4)

図版54



692



699



695



701



696



689



698



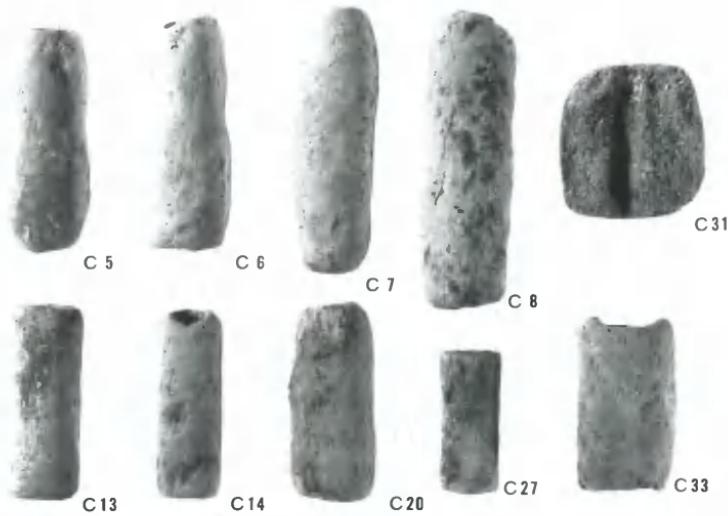
690

溝101上部包含層下層 出土遺物〔3〕(約1/4)



688

691



C 5

C 6

C 7

C 8

C 31

C 13

C 14

C 20

C 27

C 33

図版56



溝101上部包含層下層 出土遺物〔5〕(約9/10, 約1/2)



1. 井戸118 断面（南西から）



2. 井戸118 遺構検出過程〔1〕(西から)

図版58



C 34

C 35

井戸118 遺構検出過程 [2]・出土遺物 [1]



1



2



3



4



5



6



7

1.2 北東隅柱

5.6 南西隅柱

3.4 北西隅柱

7. 南東隅柱



8. 南西添杭

図版60



1. 井戸119 井側検出状態（北から）



714



715



717



716



712

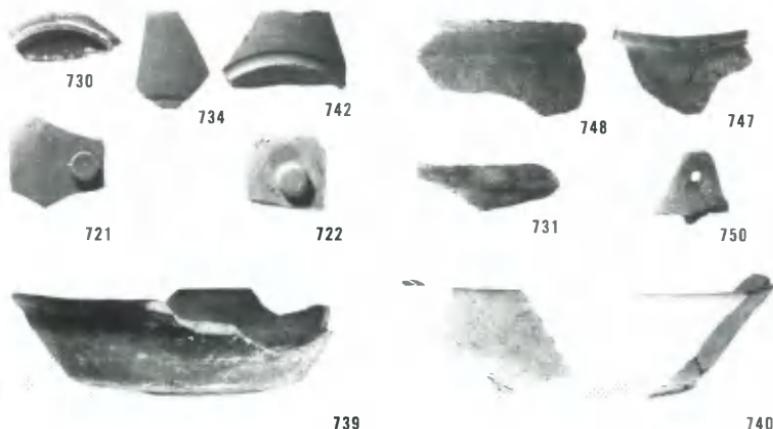


718

2. 井戸119 出土遺物



1. 溝115（南西から）



2. 溝115 出土遺物

図版62



1. 溝101上部包含層上層 遺物出土状態（北から）



762



775



770



773

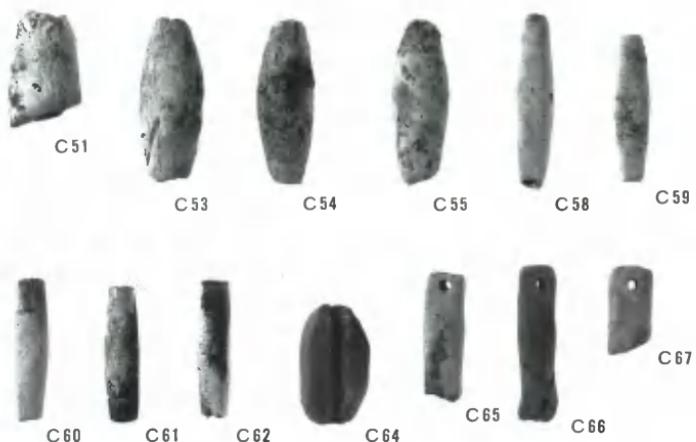


771



783

2. 溝101上部包含層上層 出土須恵器



1. 溝101上部包含層上層 出土土錐（約1/2）



C68



2. 溝101上部包含層上層 出土土馬（約4/5）

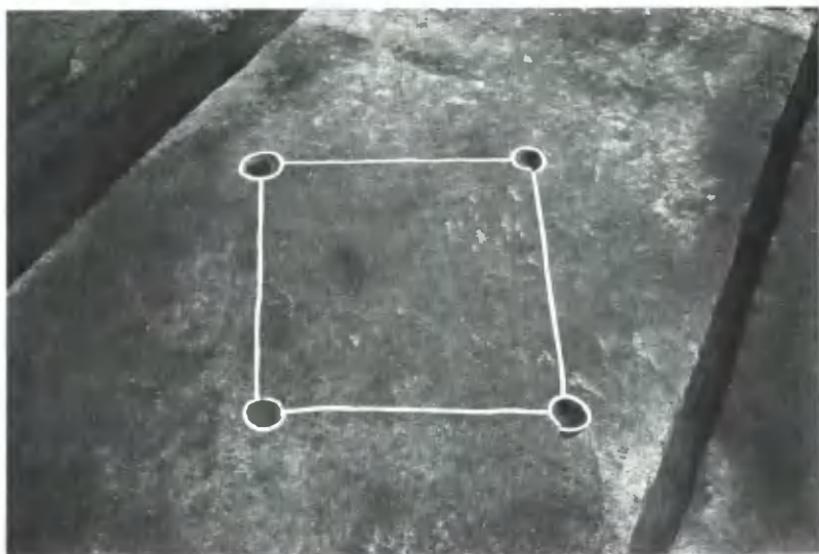
図版64



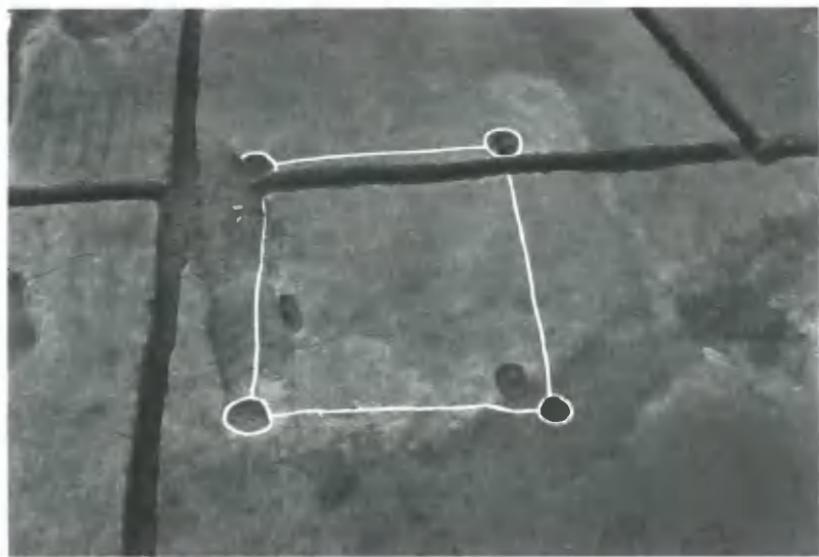
1. 建物108・119（南西から）



2. 建物111（北から）

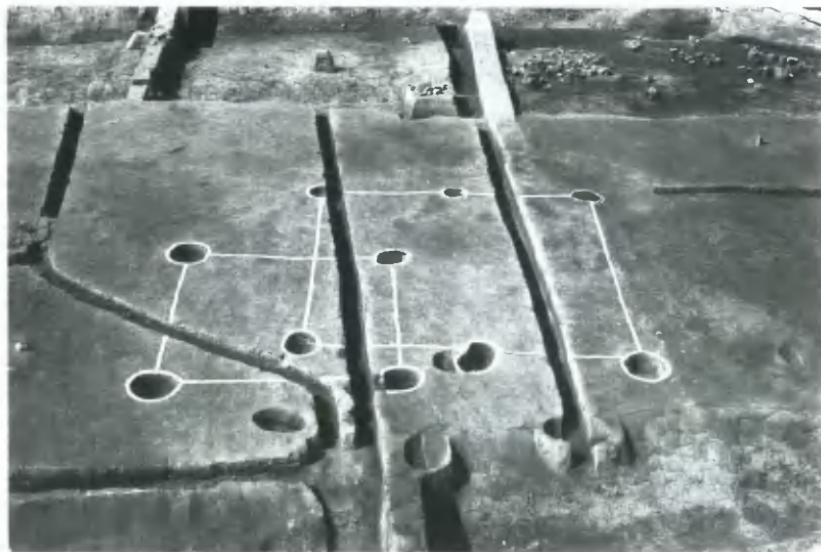


1. 建物112（北西から）

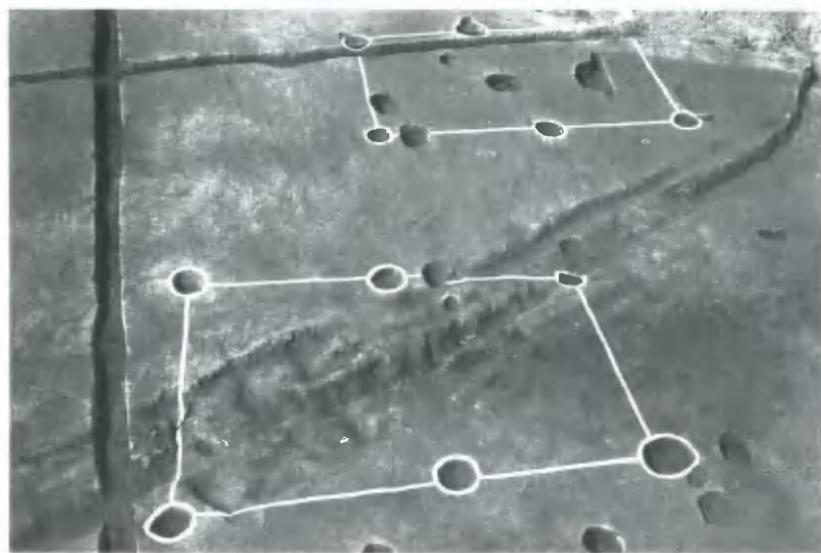


2. 建物113（東から）

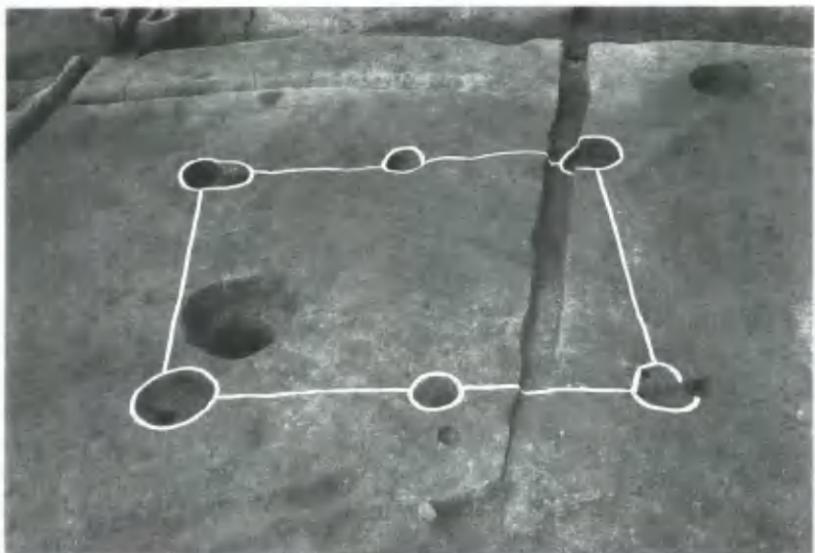
図版66



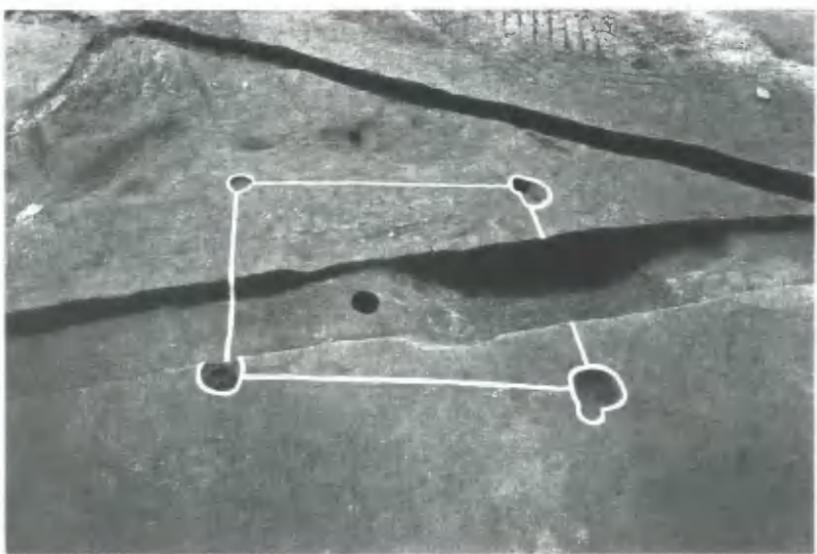
1. 建物114・115（南から）



2. 建物116・117（南から）

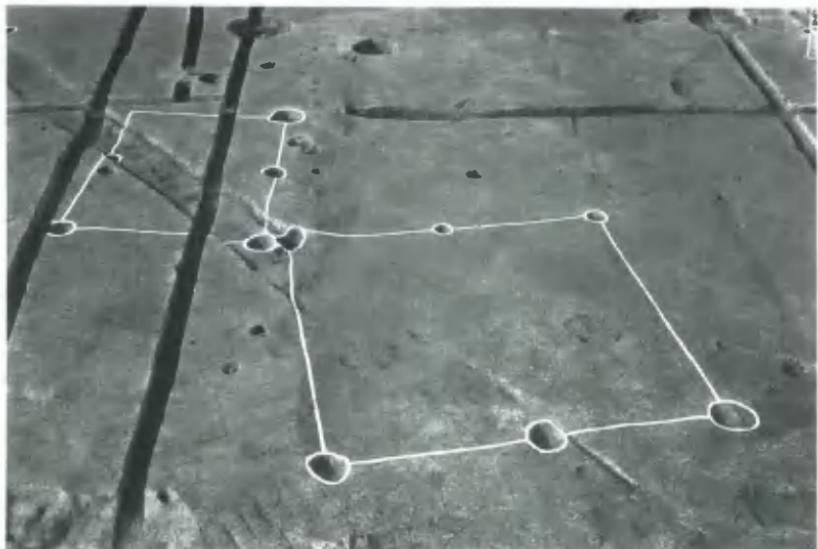


1. 建物118（南から）

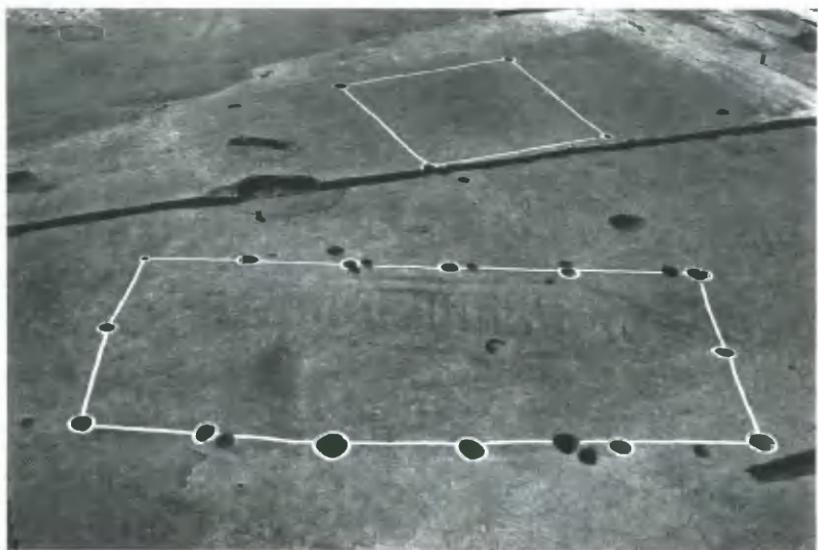


2. 建物120（南西から）

図版68



1. 建物121・122（南から）



2. 建物123・124（南東から）



14~19M~Q区中世遺構群全景（南から）

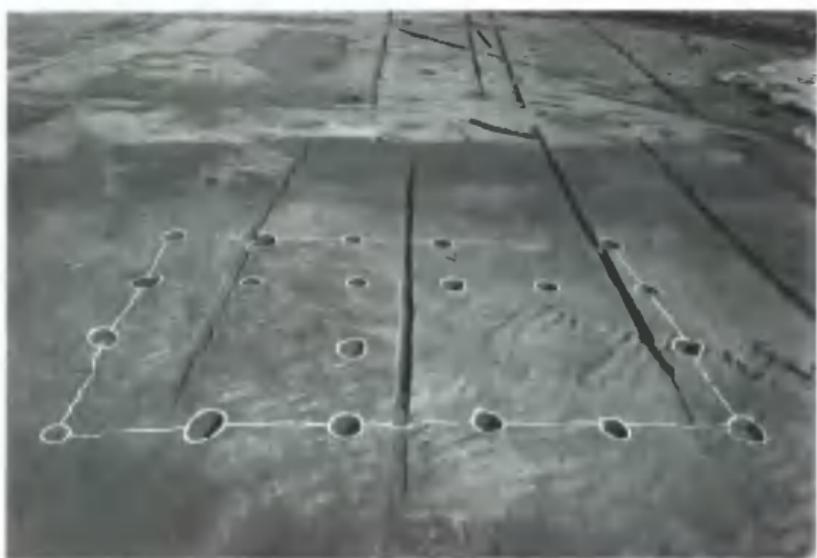
図版70



1 1983年度調査区全景（南西から）



2 R区以南調査区全景（南から）



1 建物126（南から）

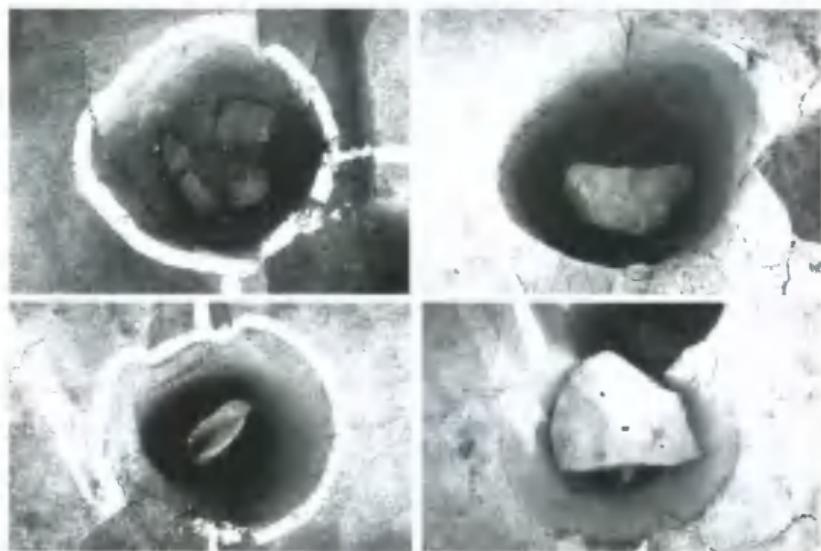


2. 建物126・堀101（西から）

図版72



1 建物130・131・132（南から）



2. 建物131 柱穴 1(左上)・3(左下)・11(右上)・12(右下)



1. 建物133・134（南から）



2. 建物137（東から）

図版74



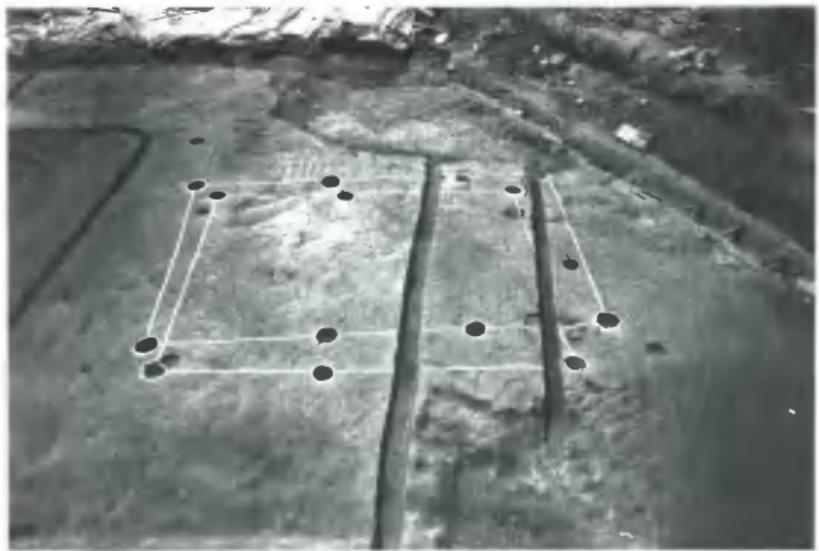
1. 建物138（南から）



2. 建物137・138・塚103（南から）



1. 調査風景 N～R区（北西から）



2 建物151・152（北から）

図版76



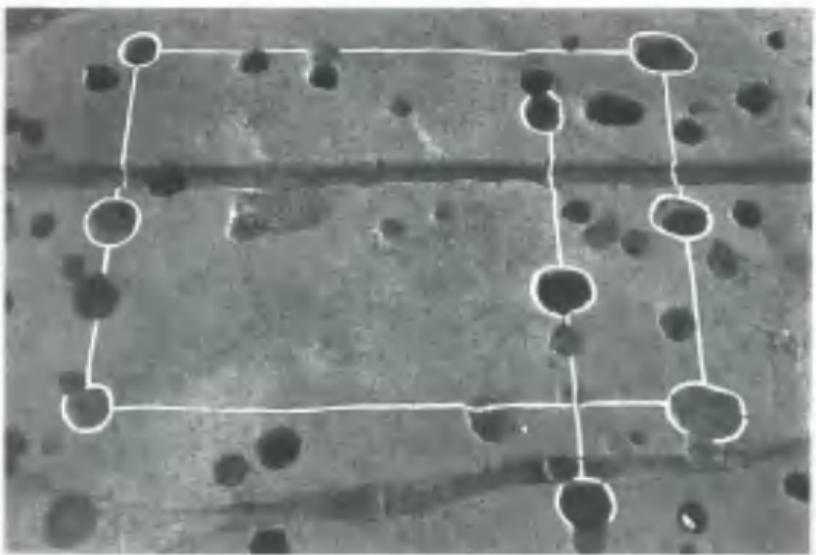
1 建物143～149（南から）



2 建物143・144・146・塀105・106（南から）



1. 建物147・149（南から）



2. 建物148・塀107（西から）

図版78



1. 14~16P・Q区 中世建物群と溝122（南から）



2. 建物154・155（北から）



1. 建物153（北から）



2. 建物153～160（西から）

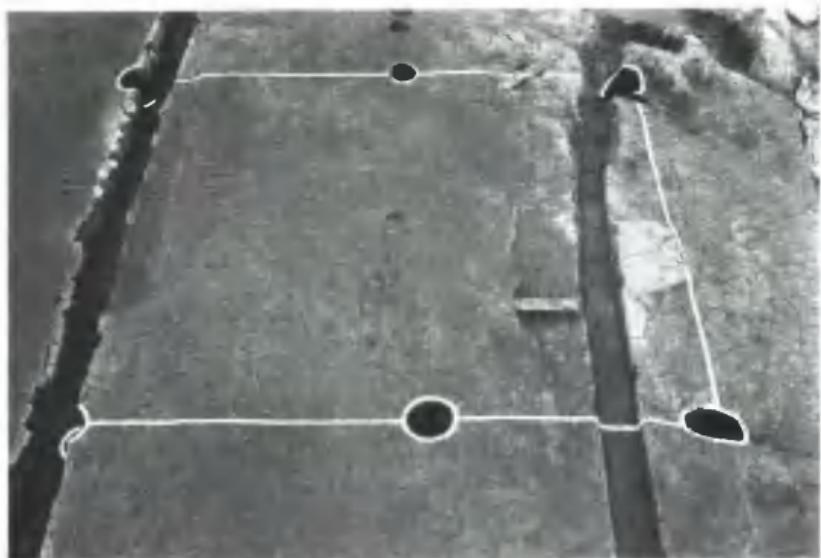
図版80



1. 建物157・満120・121（南から）



2. 建物153～160（北から）



1. 建物165（南から）

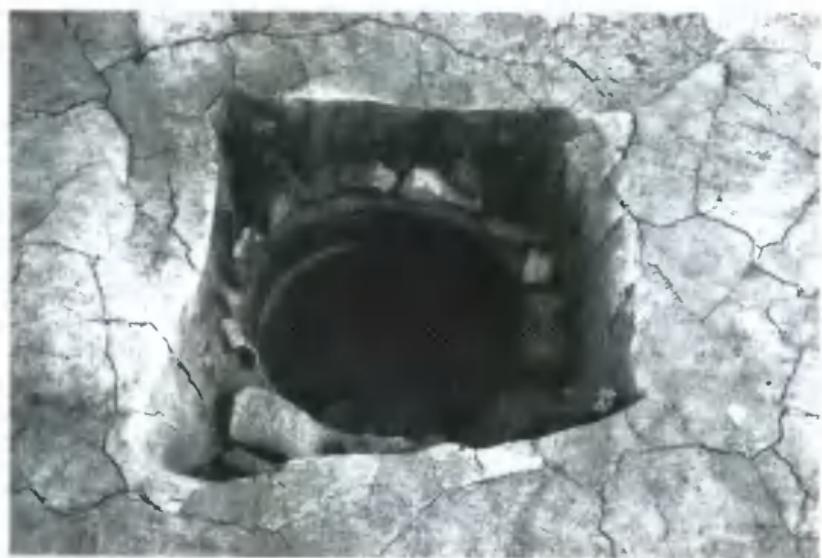


2. 建物166・167（南から）

図版82



1. 井戸120 半掘状態（南から）



2. 井戸120 検出状態（南から）



井戸120 遺構検出過程

図版84



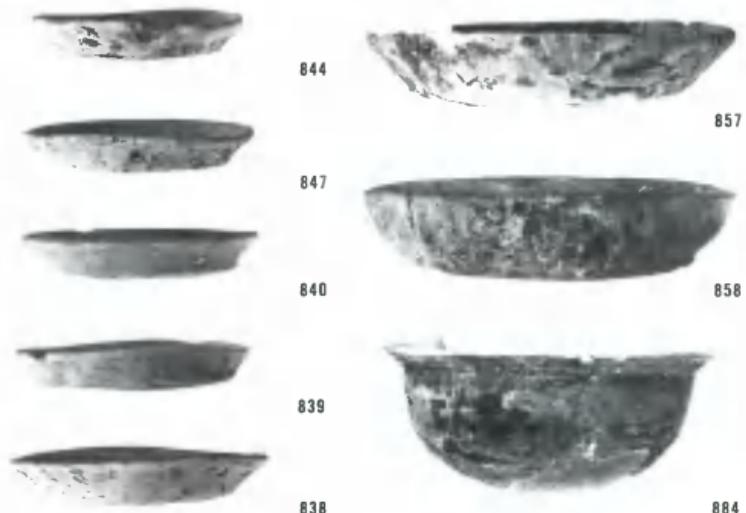
1. 井戸121（西から）



2. 井戸122（西から）



1 井戸122 遺物出土状態（南西から）



2. 井戸122 出土遺物

図版86



1. 井戸123（北から）



2. 井戸123 井戸枠と曲物（北から）



1. 井戸124（南から）



2. 井戸126（西から）・出土遺物

図版88



1. 井戸125（南から）

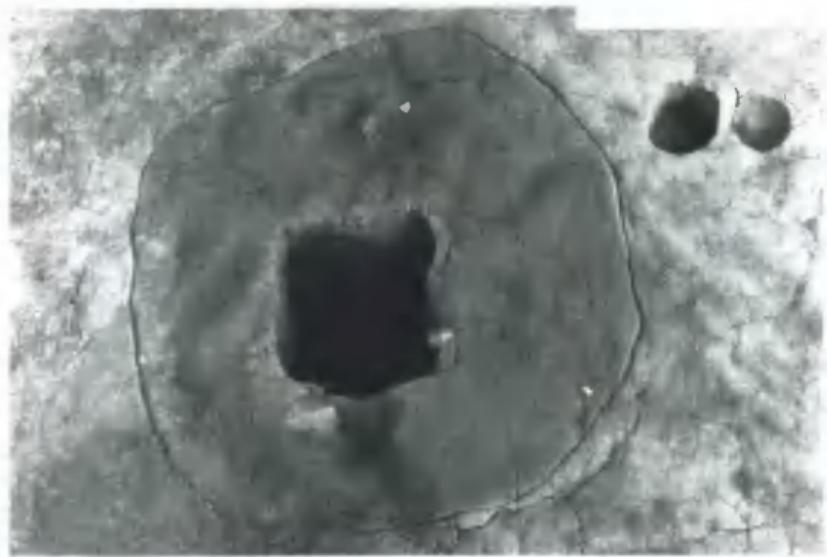


C70

2. 井戸125 出土陶磚

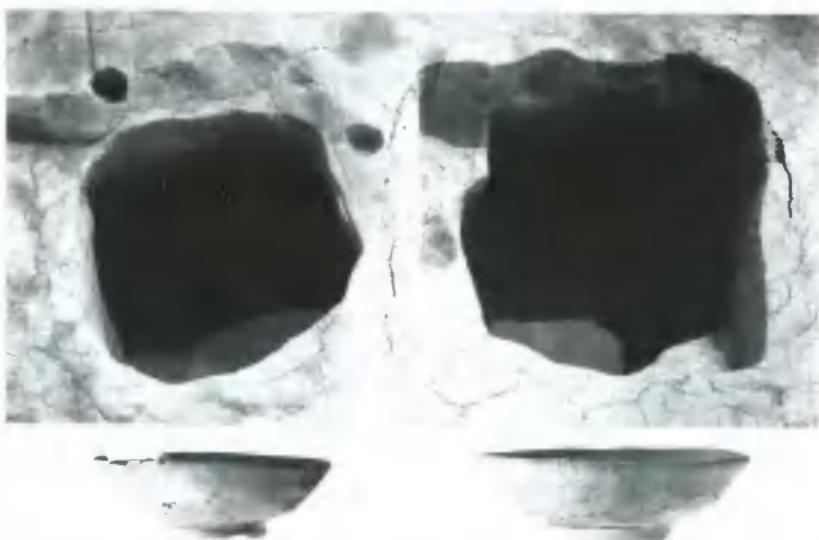


1 井戸127 半掘状態（南から）

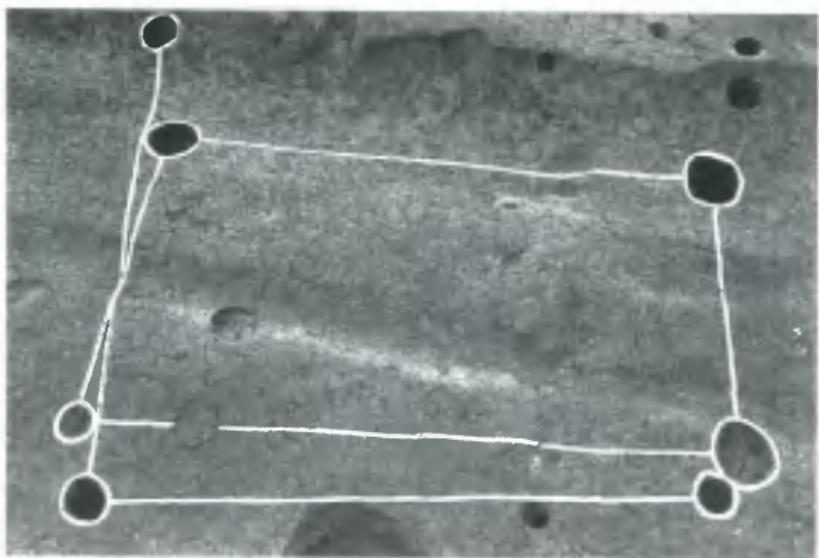


2 井戸127 井側完掘状態（南から）・出土遺物

図版90



1. 井戸128・129（西から）・井戸129 出土遺物



2. 建物161・162（北から）



1. 井戸130 半掘状態（西から）



2 井戸130 完掘状態（西から）。出土遺物

図版92



1. 井戸130（西から）・出土遺物



2. 井戸131（北から）・出土遺物



1. 井戸出土の横様（井戸130・131）



2. 横様の木組状態

図版94



1. 井戸132 完掘状態（南から）



2. 井戸132 半敷状態（南から）



1. 井戸133 完掘状態（南から）



2. 井戸133 半截状態（南から）

図版96



1. 井戸135 (東から)



953



969



952



977



970

2. 井戸135 出土遺物



1. 井戸136 完掘状態（北から）



2. 井戸136 半截状態（北から）

図版98



1. 井戸137 完掘状態・出土遺物



2. 井戸138 完掘状態（西から）



1. 井戸139 完掘状態（西から）



2. 井戸139 半蔵状態（東から）

図版100



1. 井戸134 完掘状態（西から）



2 井戸140 完掘状態（西から）・出土斎串

図版101



井戸140 出土遺物

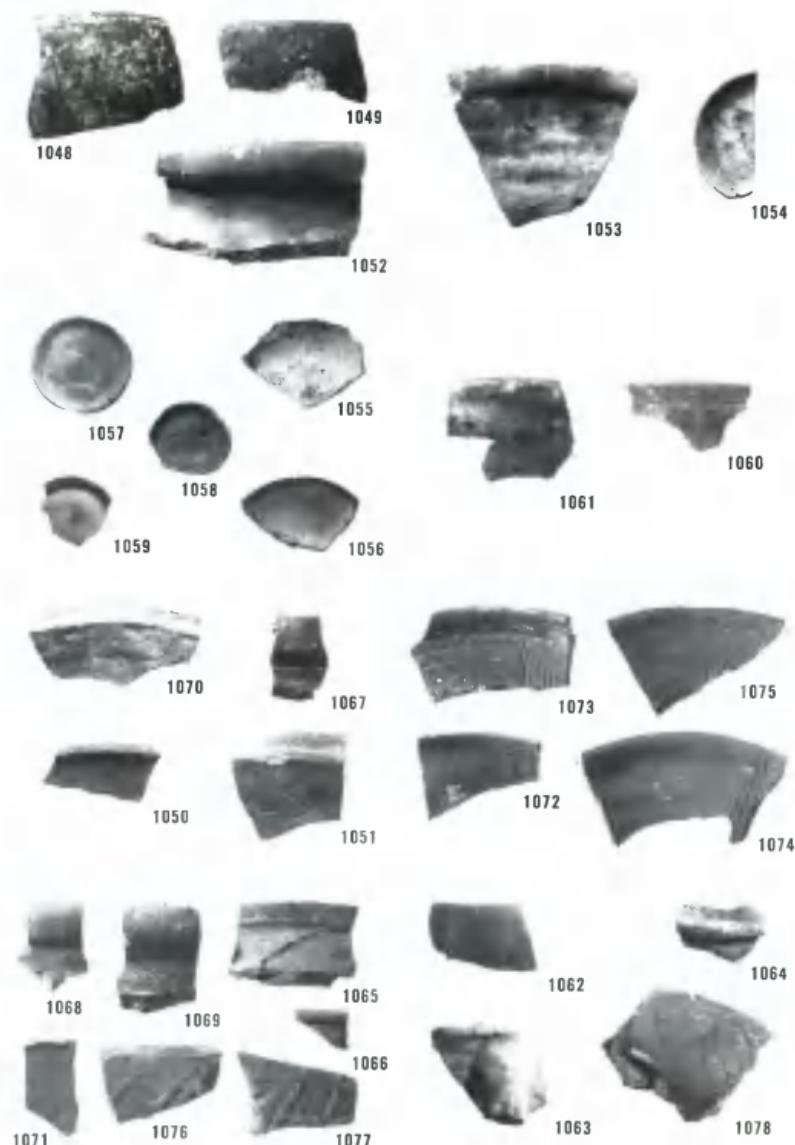
図版102



1. 井戸141 (南から)



2. 井戸141 内部 (南から)



井戸141 出土遺物

図版104



1 土壌141（南東から）



2 土壌149（西から）



1 土壌156 (南から)



2 土壌161 (西から)

図版106



1. 土壙159 遺物出土状態（東から）



1190



1188



1189

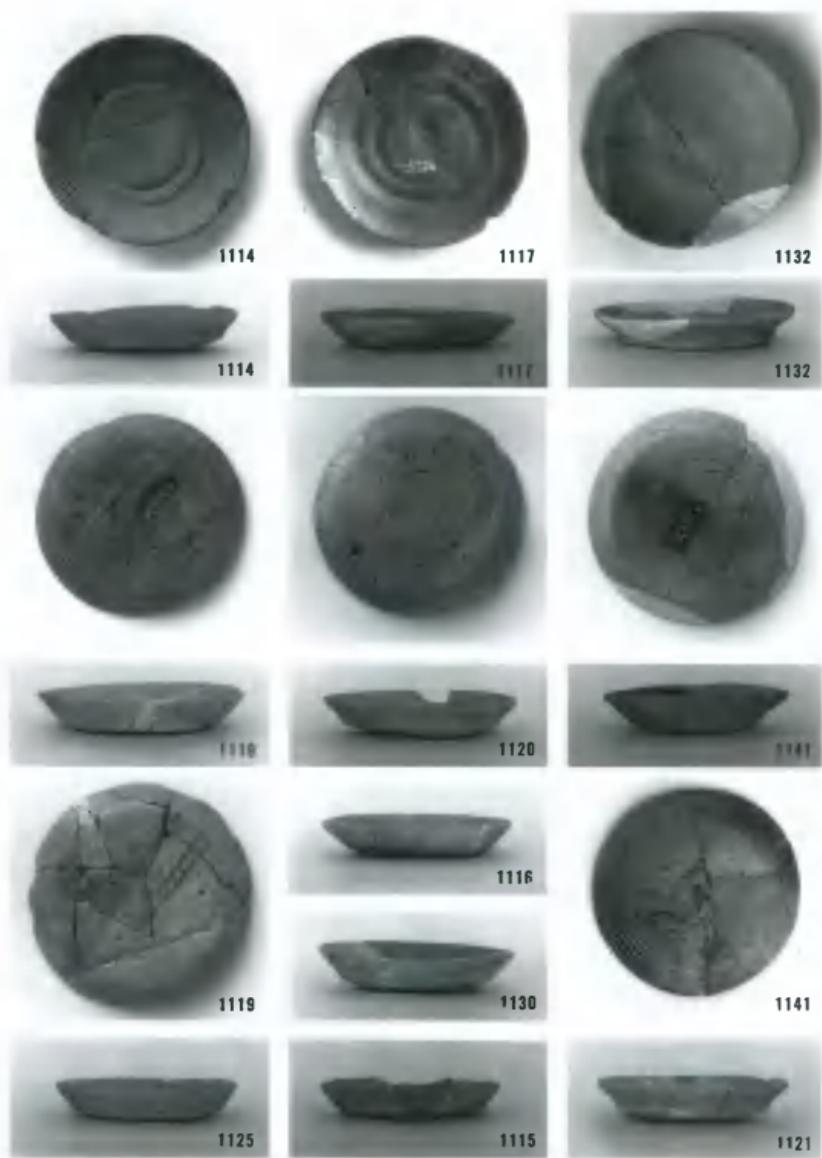


1184

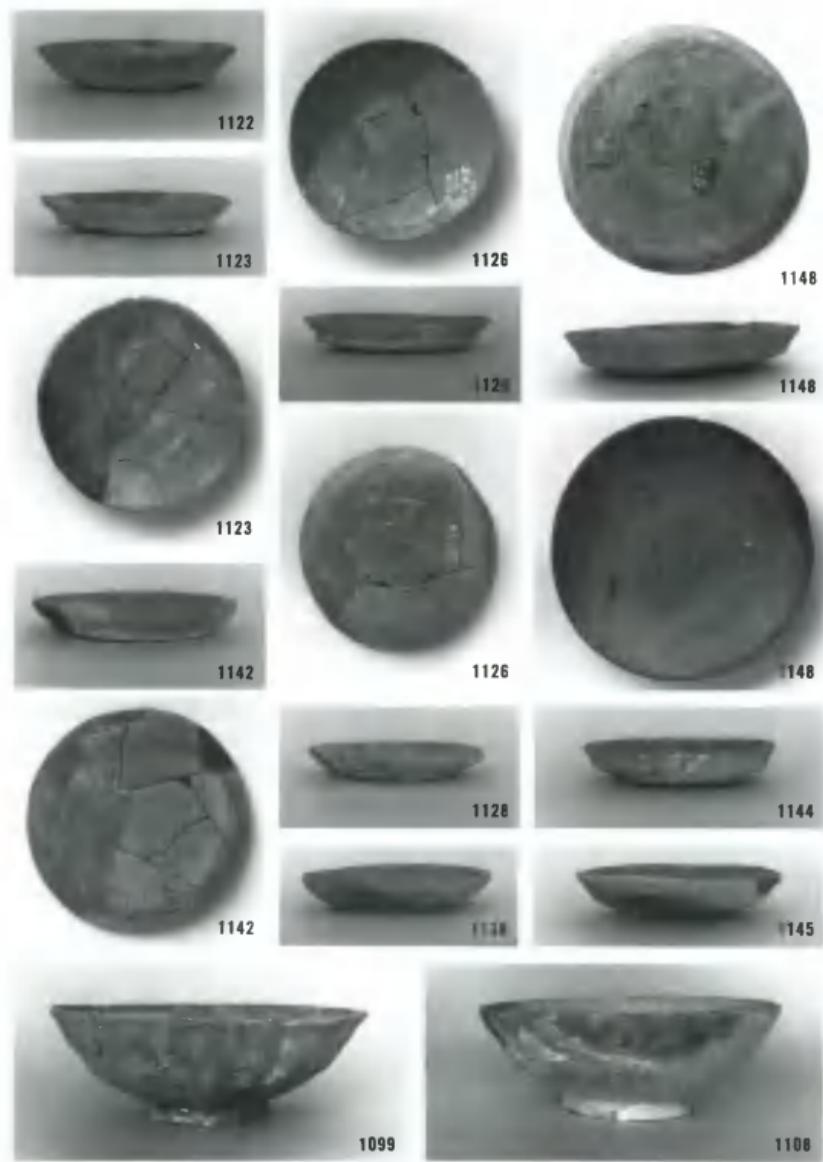
2. 土壙159 出土遺物〔1〕



図版108



土壤159 出土遺物〔3〕



土壤159 出土遺物〔4〕

図版110



1100



1103



1100



1104



1101



1104



1101



1105



1102



1106

図版111



1109



1107



1114



1110



1182



1181



1182

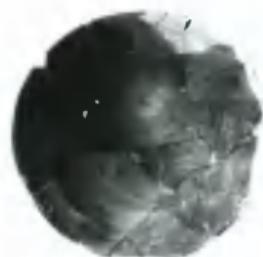


1181



1182

図版112



1157



1160



1157



1160



1157



1160



1159



1162



1159



1162

土壤159 出土遺物〔7〕



1164



1166



1164



1166



1164



1166



1168



1170

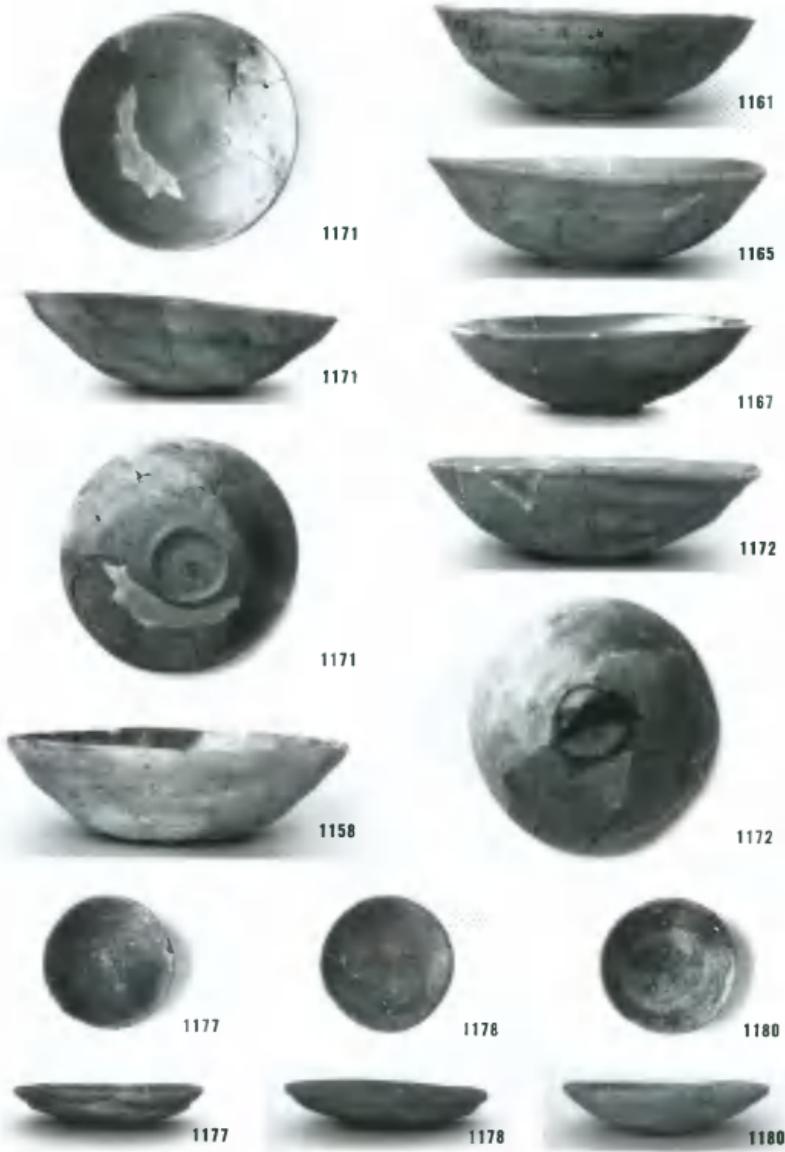


1168



1170

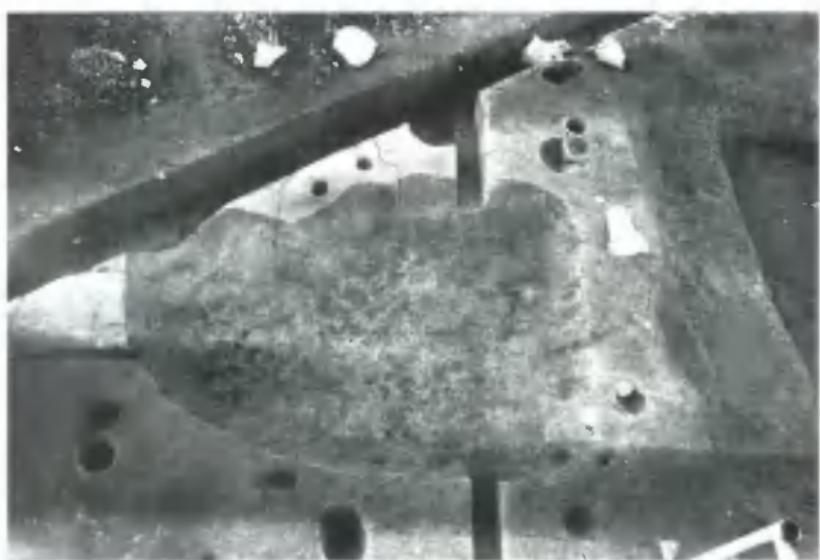
図版114



土壤159 出土遺物〔9〕

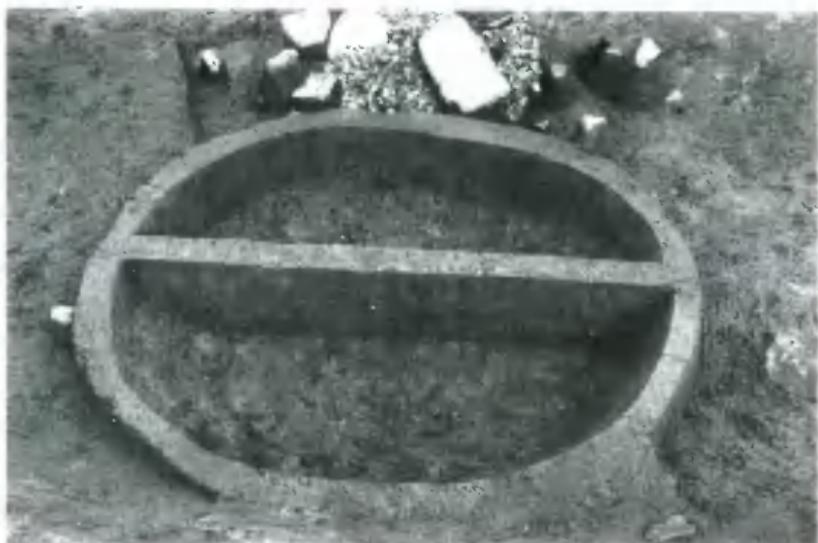


1. 土壌168（西から）



2. 土壌207（東から）

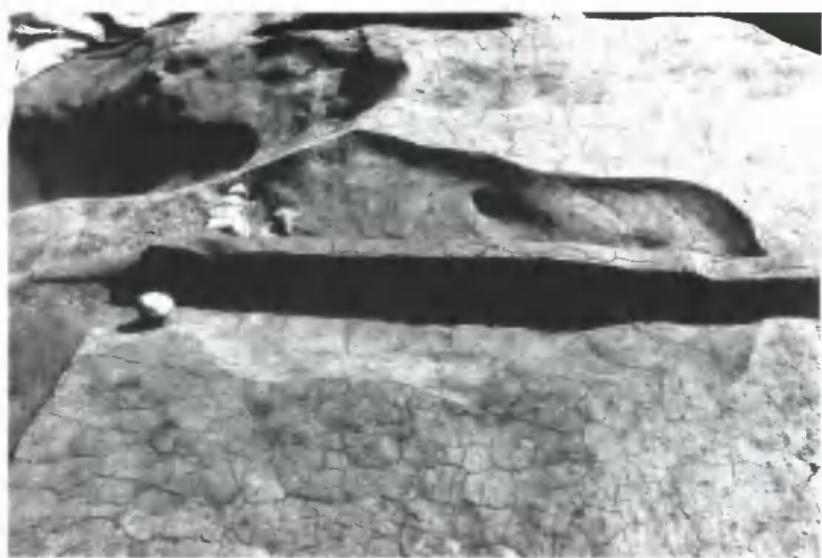
図版116



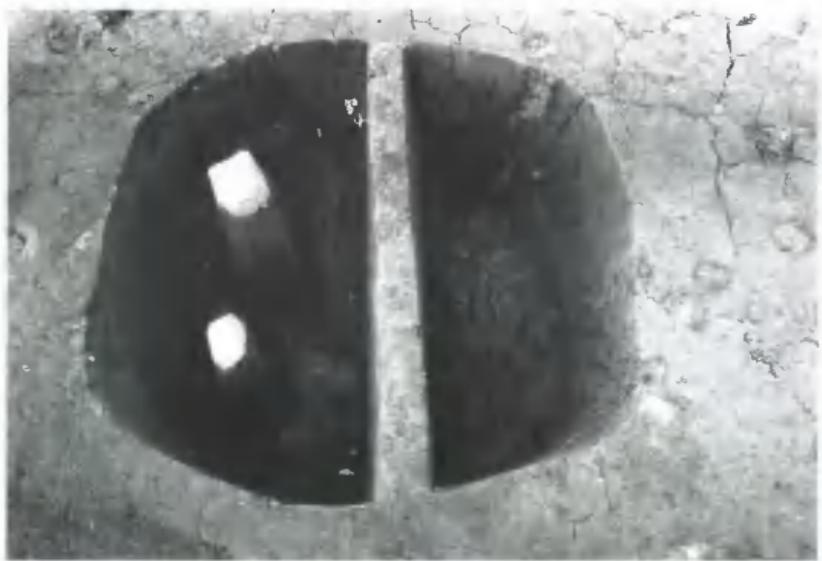
1. 土壌177（南から）



2. 土壌178（南から）



1 土壌179（西から）



2. 土壌180（南から）

図版118



1. 土壌181（南から）



2. 土壌182（東から）



1. 土壌183（東から）



2. 土壌184（南から）

図版120



1 土壌187 (南から)



2 土壌191 (南から)



1. 土壌193（東から）

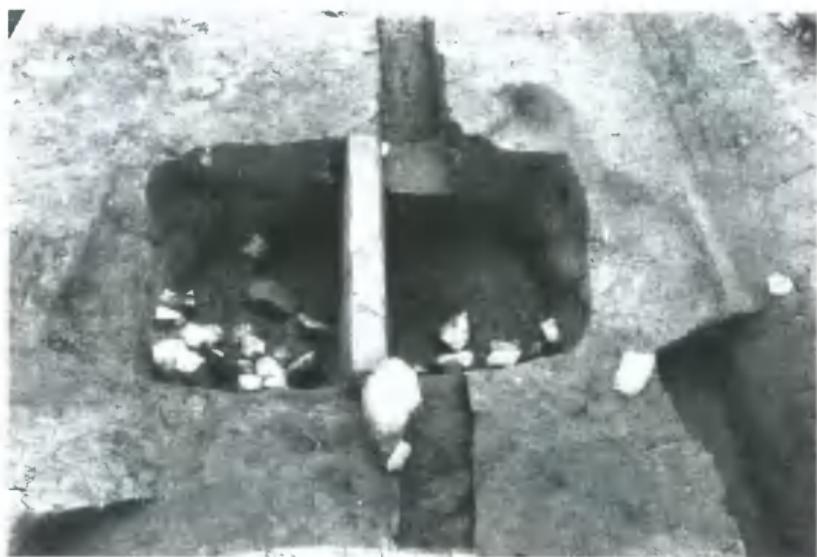


2. 土壌194（東から）

図版122



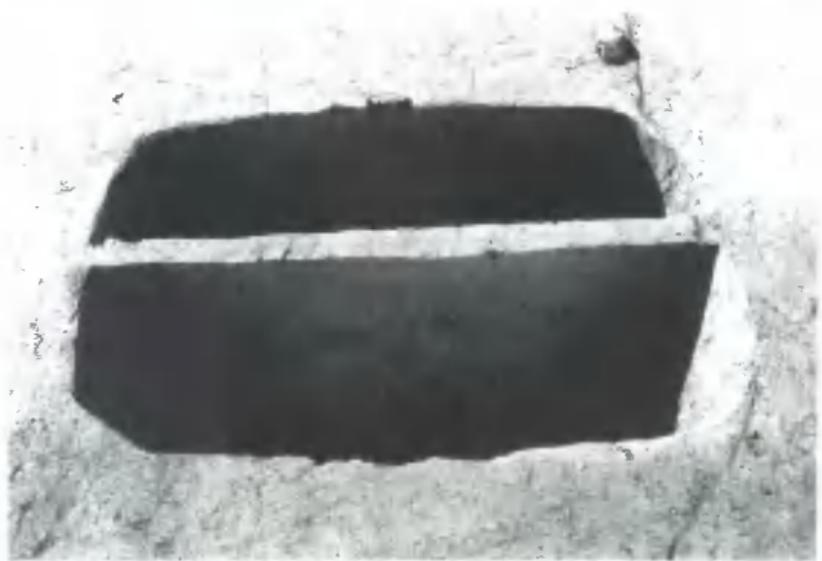
1 土壌196 石組（南から）



2 土壌196 石組下の土壌（北から）



1. 土壌197 (南から)

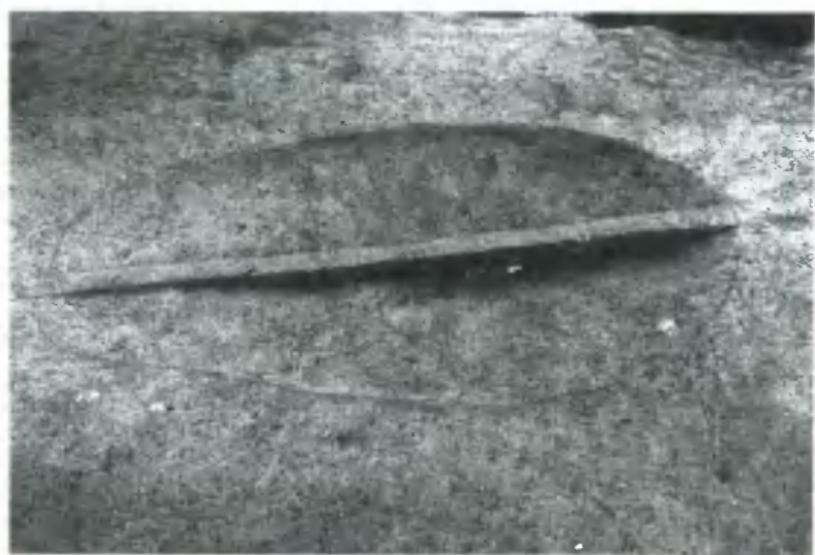


2. 土壌198 (南から)

図版124



1. 土壌199 (南から)



2. 土壌200 (北から)



1. 土壌201（西から）



2. 土壌203（東から）

図版126



1. 溝122（東から）



2. 溝122（西から）



3. 溝122 16R区貝塚および遺物検出状態（東から）



1. 溝122 18R区貝塚および遺物検出状態（西から）



2. 溝122 20R区凹地内の呪符出土状態

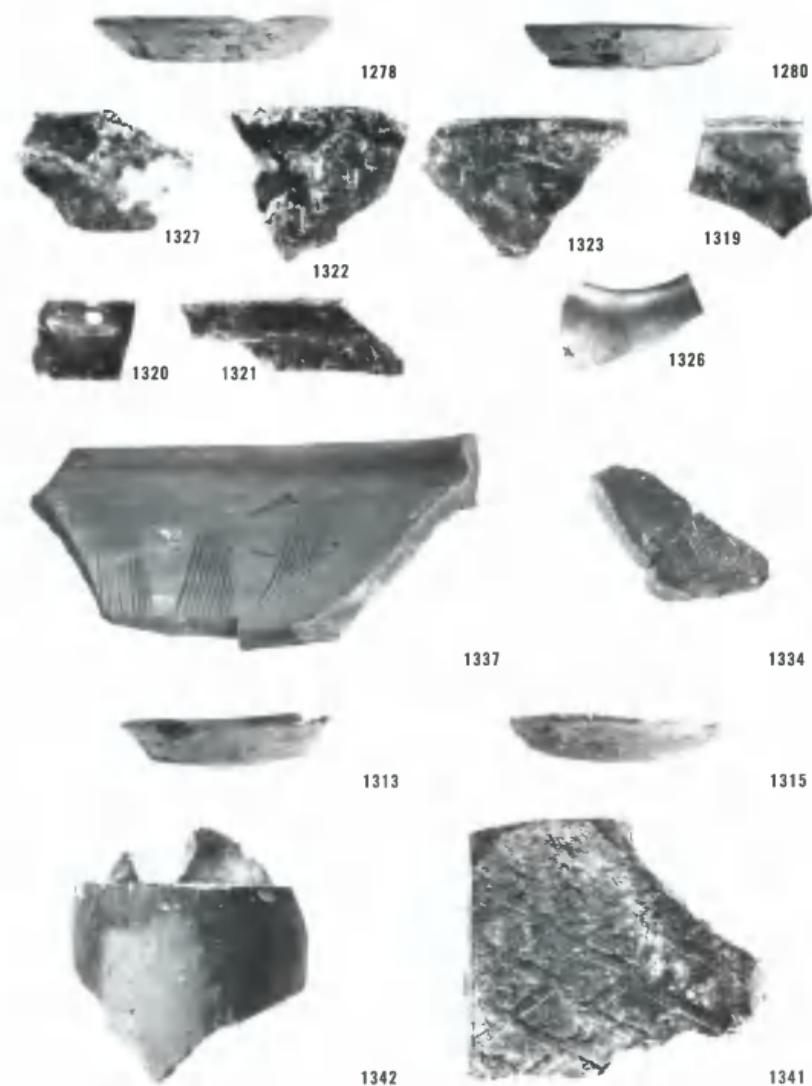
図版128



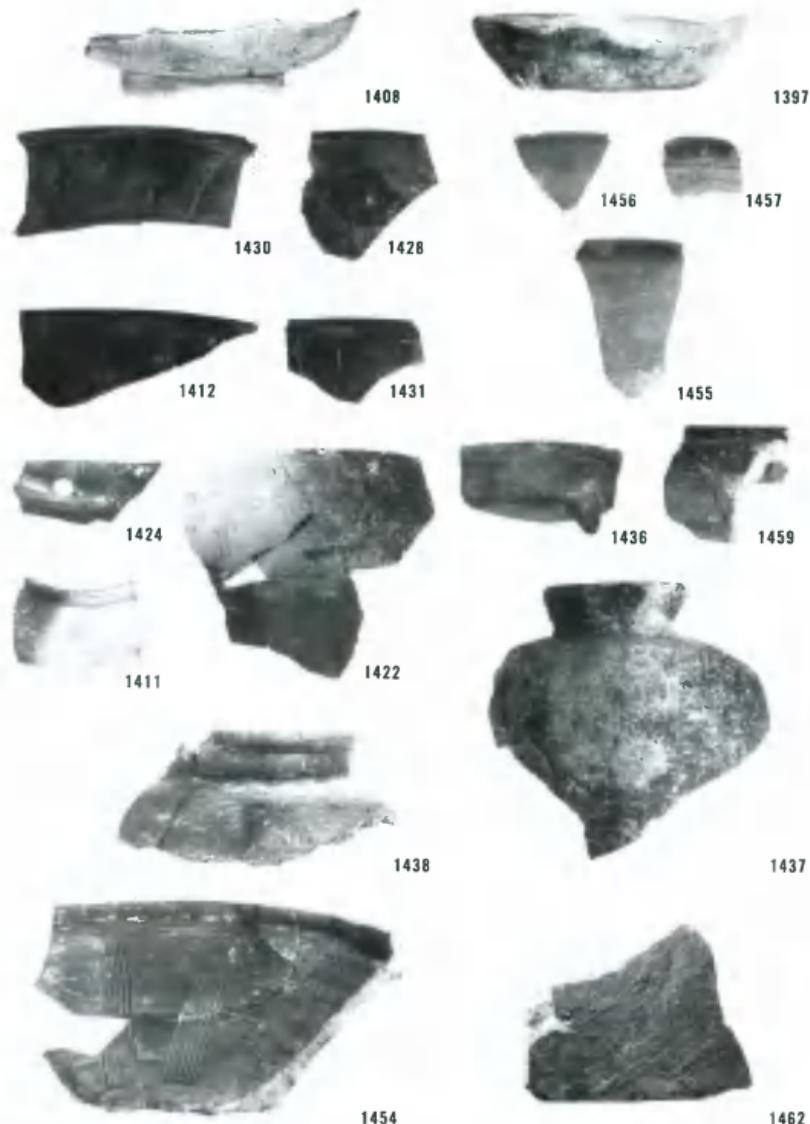
1. 溝122 梱出土状態



2. 溝122 下駄出土状態



図版130

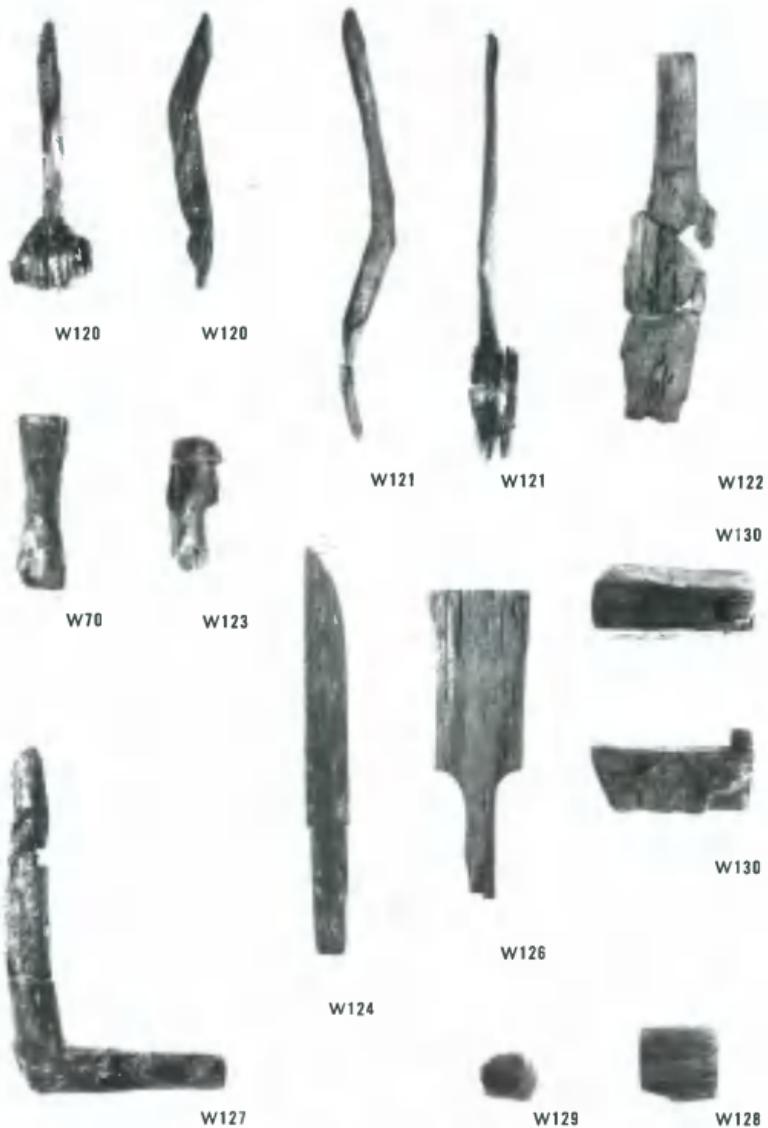


溝122 下層出土遺物



溝122 出土遺物

図版132



溝122 出土遺物

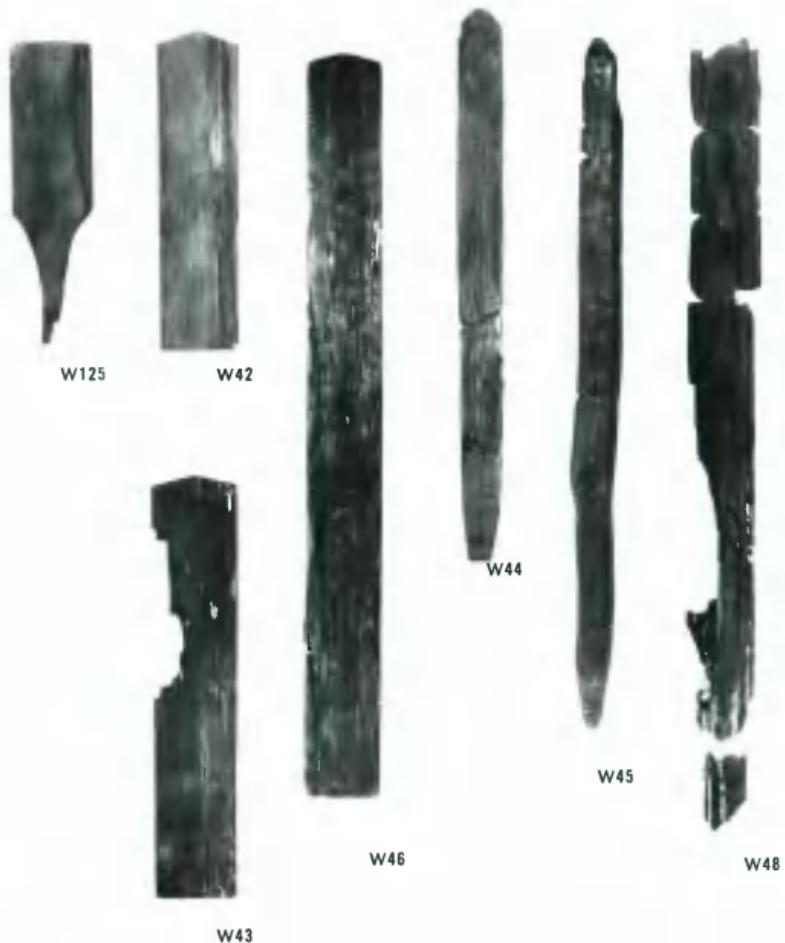


1. 溝123（南から）



2 溝123 木製品出土状況

図版134



図版134 漢123 出土遺物



1. 溝124（西から）



2. 溝124 出土遺物

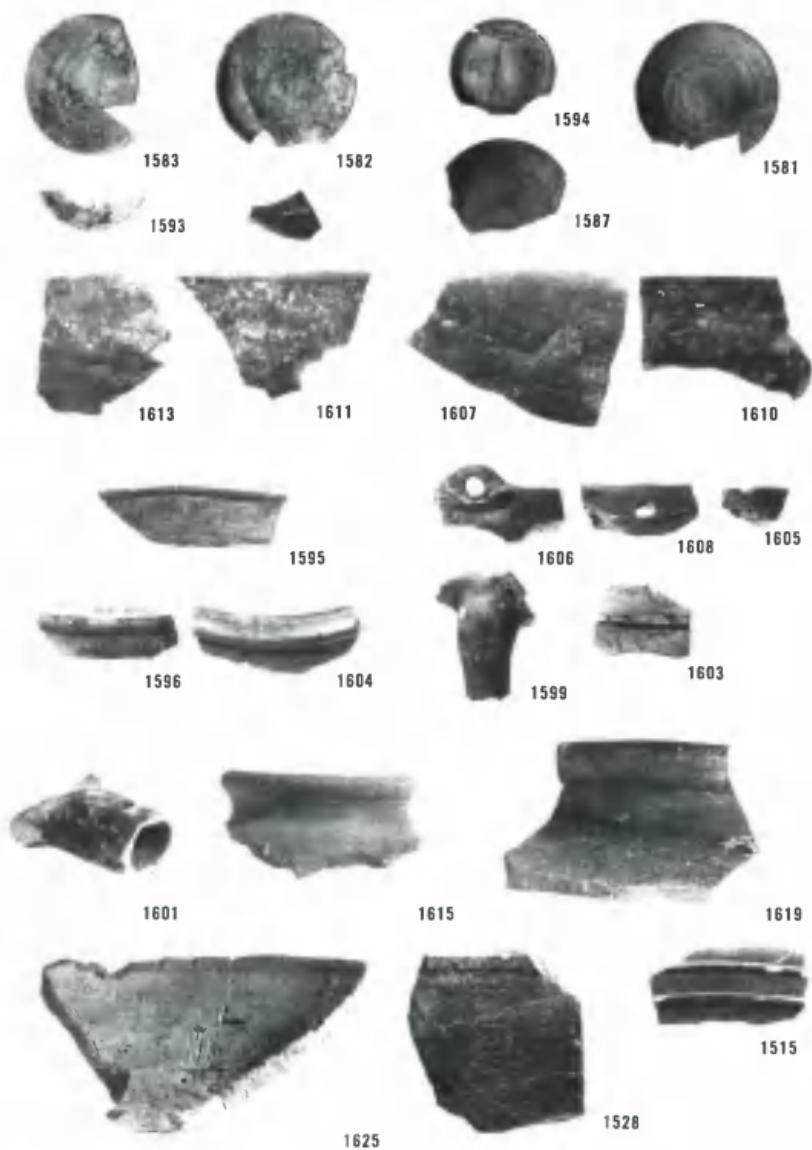
図版136



1. 溝125 遺物出土状態（北西から）



2. 溝125（北西から）



満122・125 出土遺物

図版138



1. 溝131（南から）



2. 溝132・133・134（北から）



1. 池101 (北から)



2. 池101 茶椀出土状態



3. 池101 下駄出土状態

図版140



1632



1641



1651



1643



1654



1653



1654

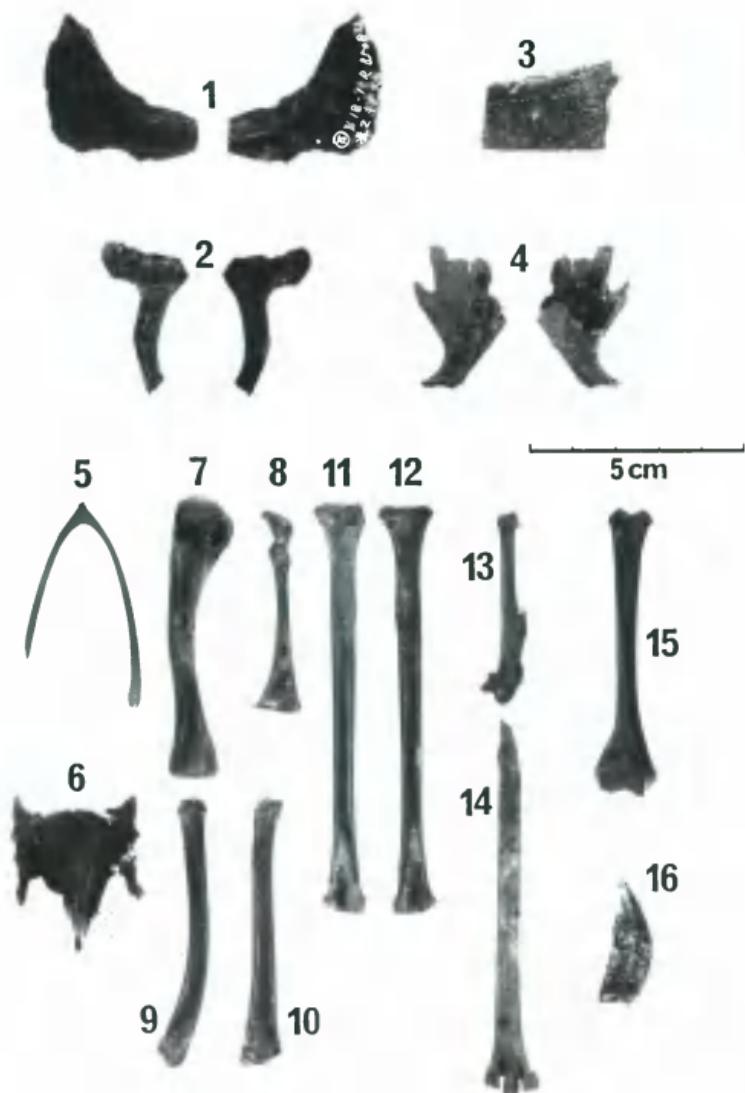
池101 出土遺物



百間川米田遺跡出土の人骨

1:左頭頂骨 2:前頭骨 3:大腿骨 4:脛骨 5:大腿骨(未成人)

図版142



百間川米田遺跡出土の魚類、爬虫類、鳥類および哺乳類

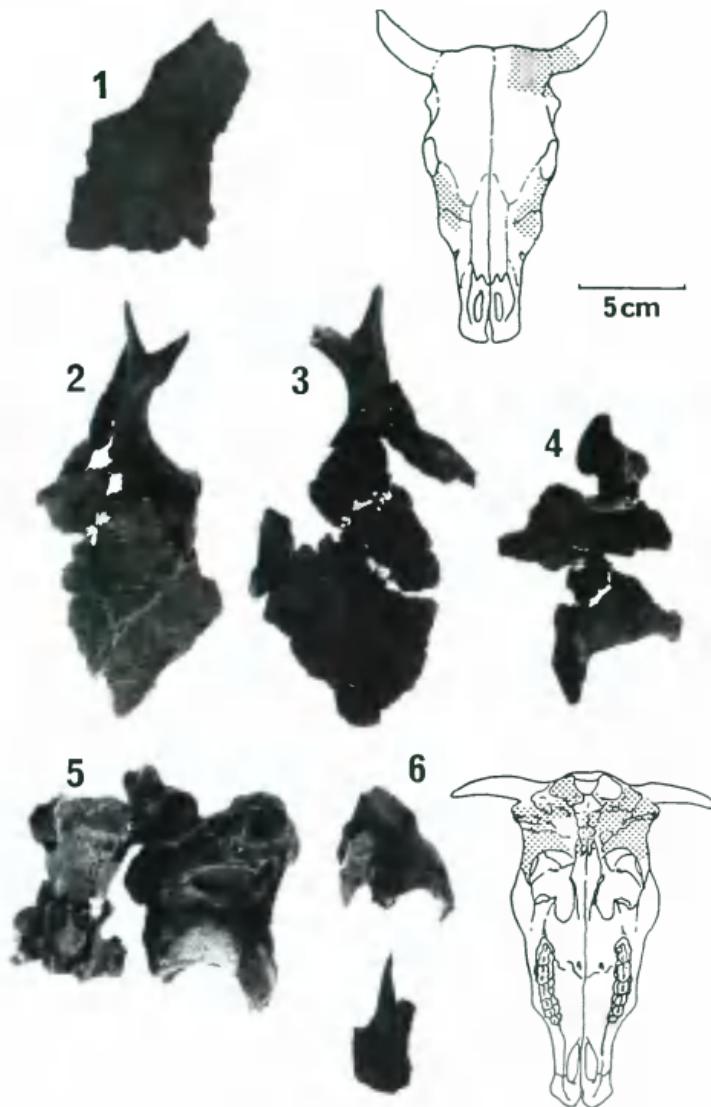
1 マダイ左前鰓蓋骨の内面および外面、2 スッポン右上腕骨、3・4 スッポン胸甲の一部、5 キジ科の一種の鎖骨、6 キジ科の一種の胸骨近位半、7 キジ科の一種の右上腕骨、8 キジ科の一種の左烏口骨、9 キジ科の一種の右尺骨、10 キジ科の一種の右上大腿骨、11 キジ科の一種の右脛骨、12 キジ科の一種の左脛骨、13 ハシブトガラスの左第III+IV中手骨、14 サキ科の大型種の左中足骨、15 ネコ右上腕骨(若年)、16 オオカミ右上顎犬齒



百間川米田遺跡出土のシカ

1. 角坐部を含む角、2. 同拡大図（切痕を示す）、3. 右前頭骨および角、4. 角、5. 同拡大図（切痕を示す）、6. 右大腿骨遠位半、7. 左大腿骨

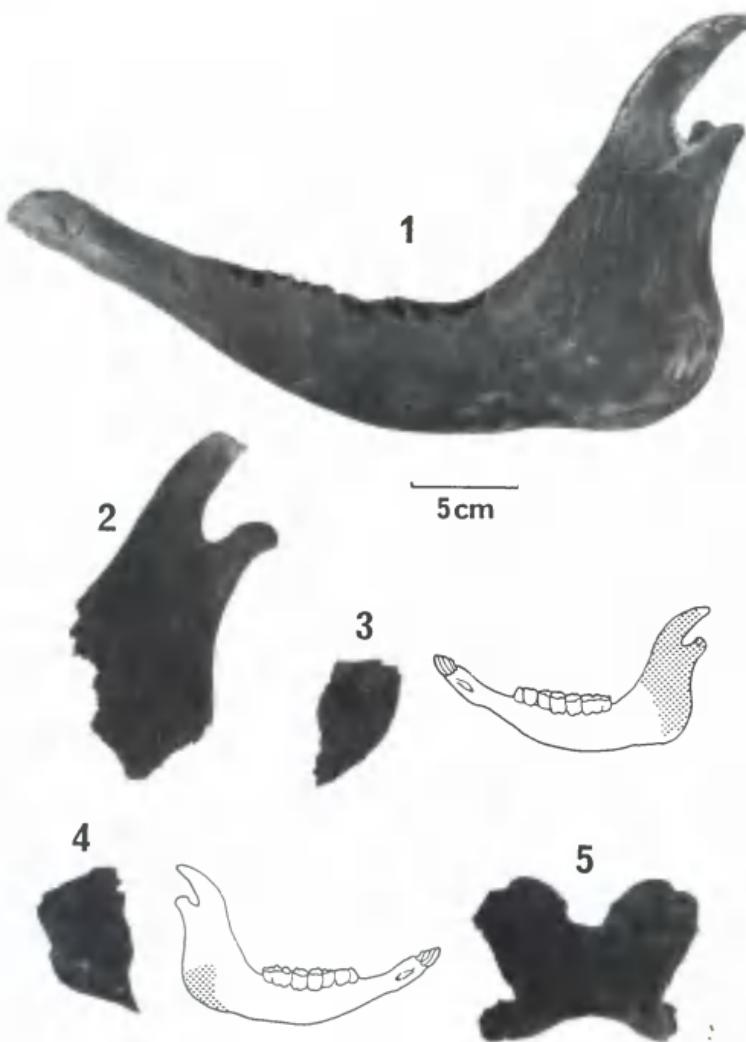
図版144



百間川米田遺跡出土のウシ

それぞれの出土部位の位置を図のシャドウ部で示した（以下同じ）

1：左前頭骨および角坐部、2：右頬部、3：左頬部、4：左後頭部底面観、5：右後頭部底面観、6：右側頭骨下
頸窩、7：左口蓋骨水平板



百間川米田遺跡出土のウシ

1：左下顎骨、2：左下顎枝、3：左下顎角、4：右下顎角、5：環椎

図版146



百間川米田遺跡出土のウシ

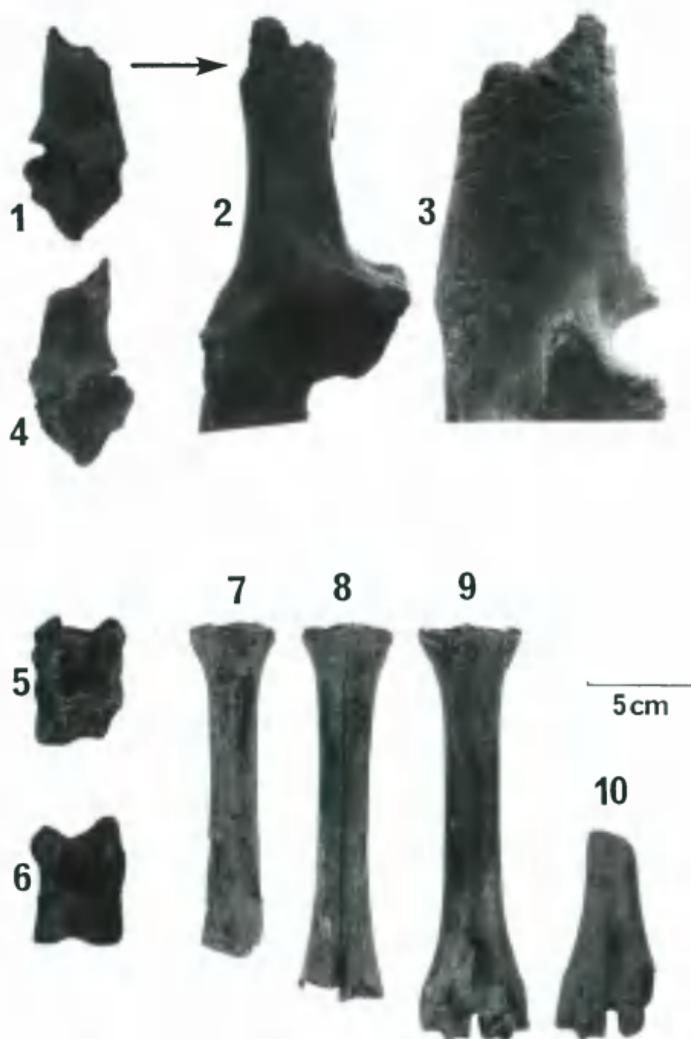
1：左上腕骨遠位骨幹部、2・3：同拡大図（切痕を示す）、4：右中手骨、5：右中手骨、6：右寛骨、7：同拡大図（咬痕を示す）



百間川米田遺跡出土のウシ

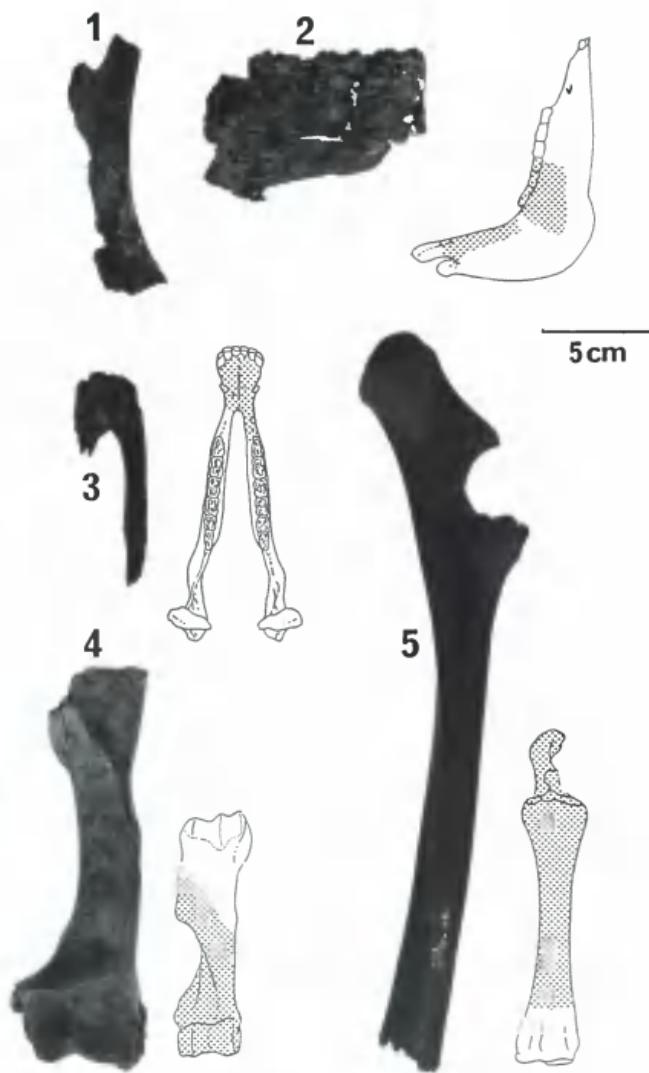
1：左寛骨（寛骨臼部に病変がある）、2：右大腿骨近位部、3：左大腿骨、4：左脛骨

図版148



百間川米田遺跡出土のウシ

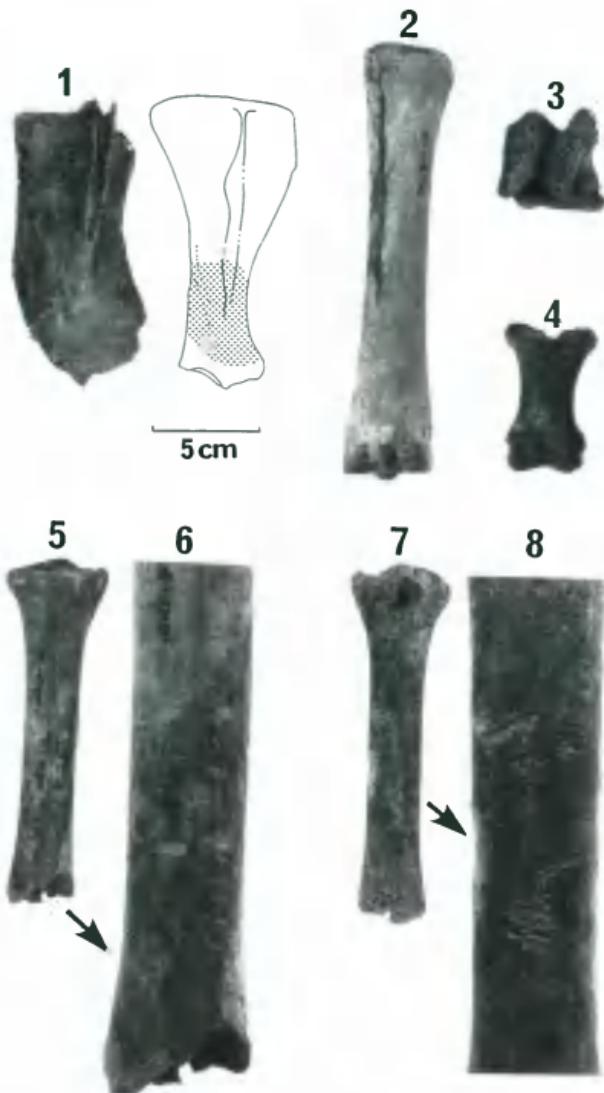
1 : 右踵骨、2 - 3 : 同拡大図(咬痕を示す)、4 : 左踵骨、5 : 右距骨、6 : 左距骨、7 : 右中足骨(若年)、8 : 左中足骨(若年)、9 : 左中足骨、10 : 右中足骨遠位半



百間川米田遺跡出土のウマ

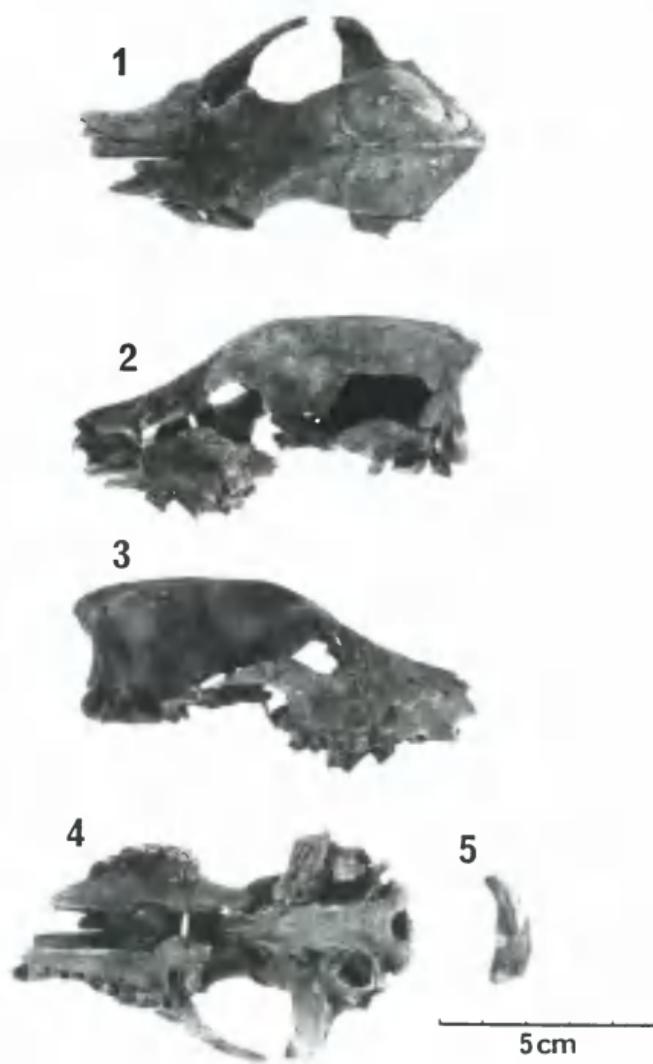
1：右下顎枝前縁、2：右下顎体外面(第1大臼歯～第3臼歯)、3：下顎骨正中部、4：右上腕骨、5：右橈尺骨

図版150



百間川米田遺跡出土のウマ

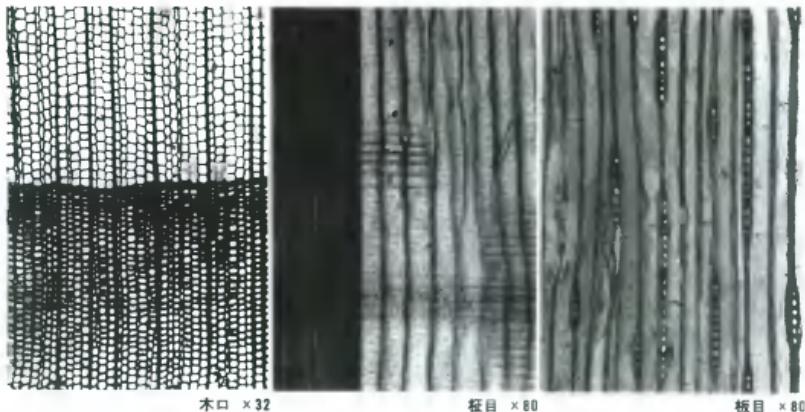
1 . 右肩甲骨近位部背面、2 . 左中手骨、3 : 右距骨、4 : 基節骨、5 . 左中足骨前面、6 : 同拡大図（切痕を示す）、7 . 左中足骨後面、8 : 同拡大図（嚼歯類の咬痕を想われるもの）



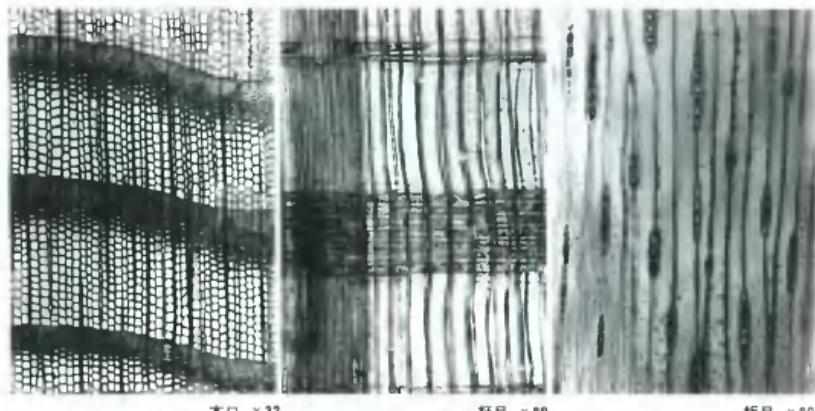
百間川米田遺跡出土のイヌの頭蓋骨

1. 上面観、2. 左側面観、3. 右側面観、4. 底面観、5. 遊離歯の下顎右犬齒

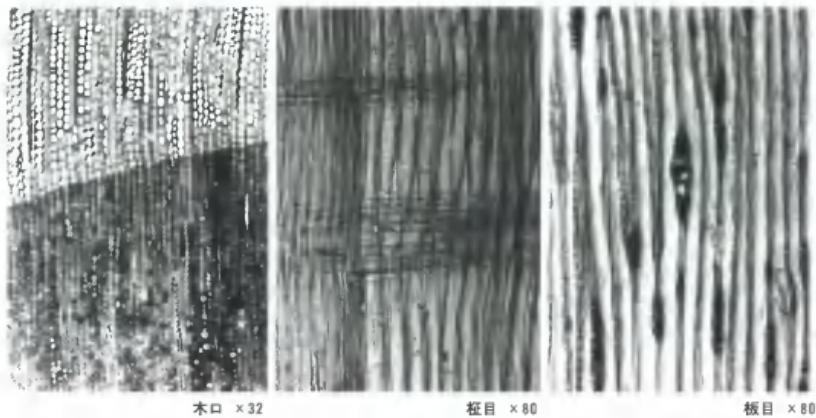
図版152



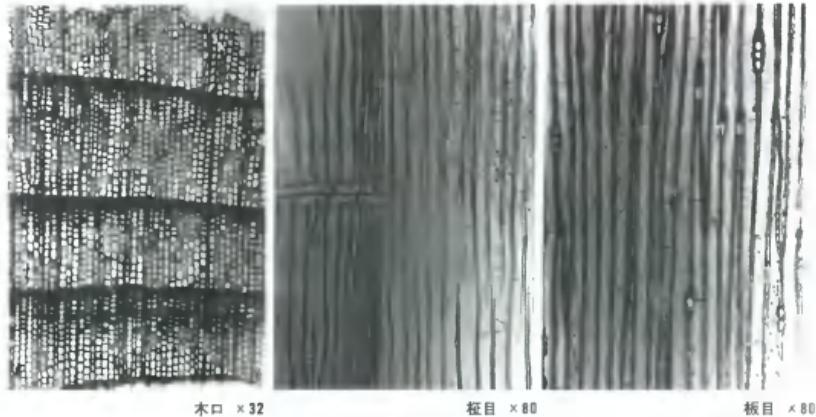
Abies sp. No. 98



Tsuga sp. No. 8

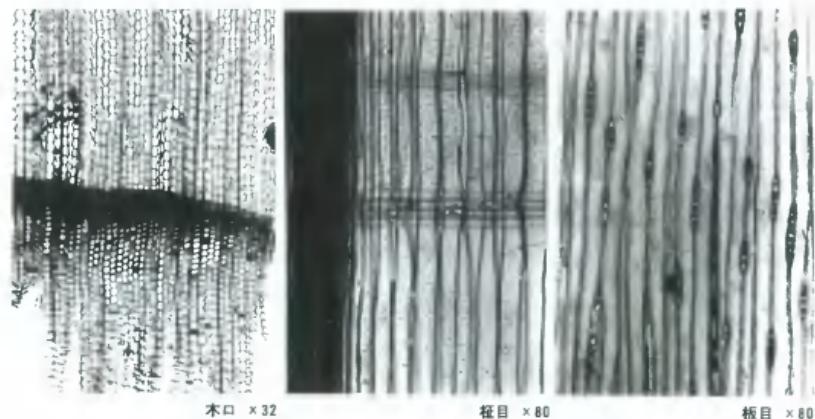


Pityo (subgen. *Diploctyton*) sp. No. 36

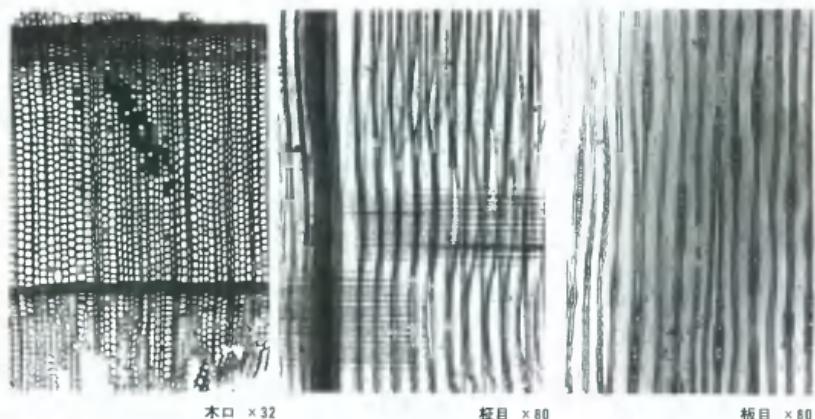


Sciadopitys verticillata No. 131

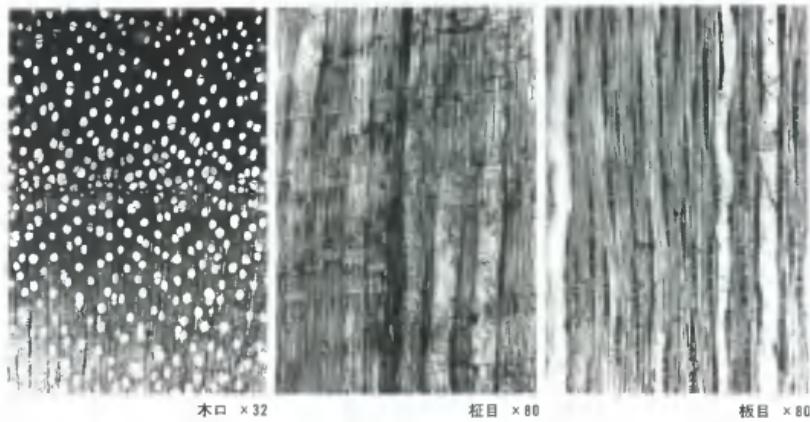
図版154



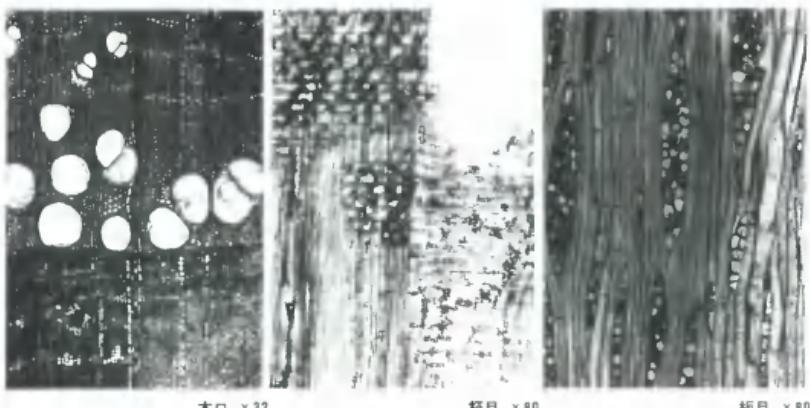
Cryptomeria japonica No. 15



Chamaecyparis sp. No. 66

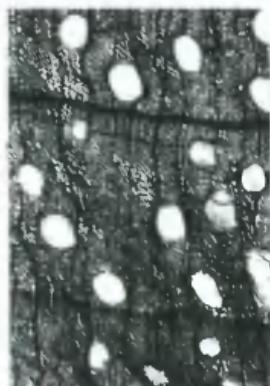


Salix sp. No. 35



Platycarya strobilifera No. 106

図版156



木口 $\times 32$



弦目 $\times 80$



板目 $\times 80$

Juglans ailanthifolia No. 2



木口 $\times 32$

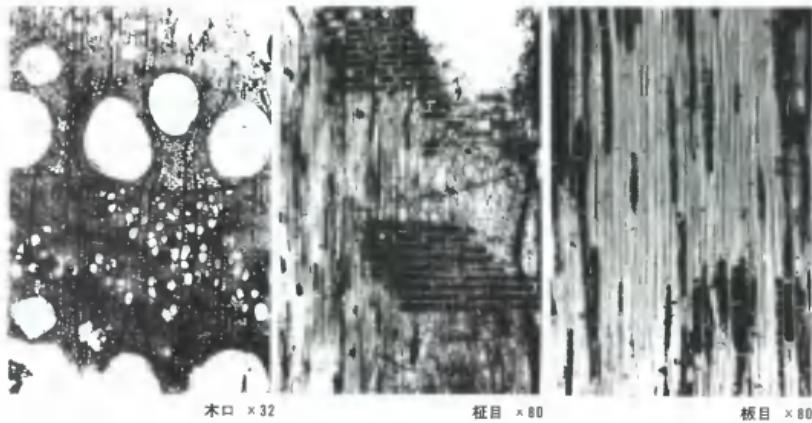


弦目 $\times 80$

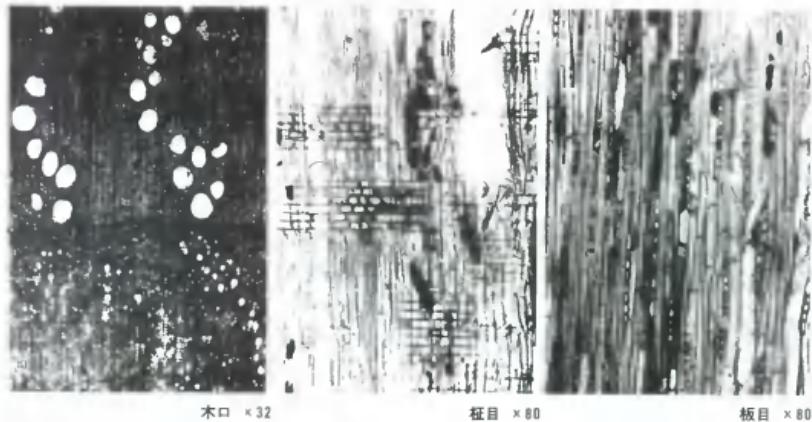


板目 $\times 80$

Quercus (subgen. *Dylelobalanopsis*) sp. No. 79



Cestrotus crenatus sp. No. 4



Castanopsis sp. No. 140

図版158



木口 ×32



桿目 ×80



板目 ×80

Zelkova serrata No. 94



木口 ×32

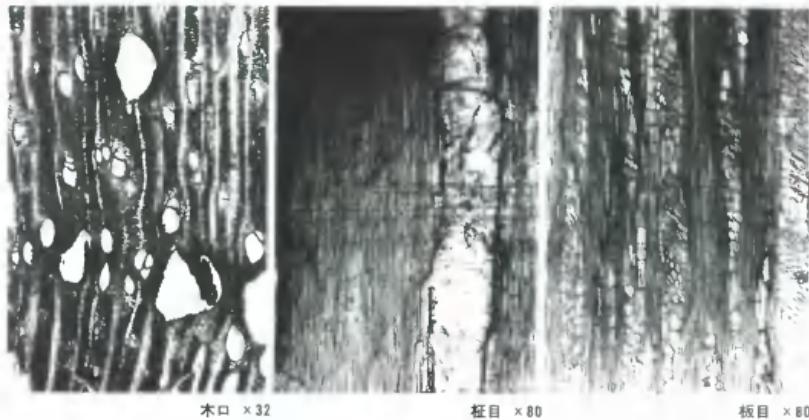


桿目 ×80

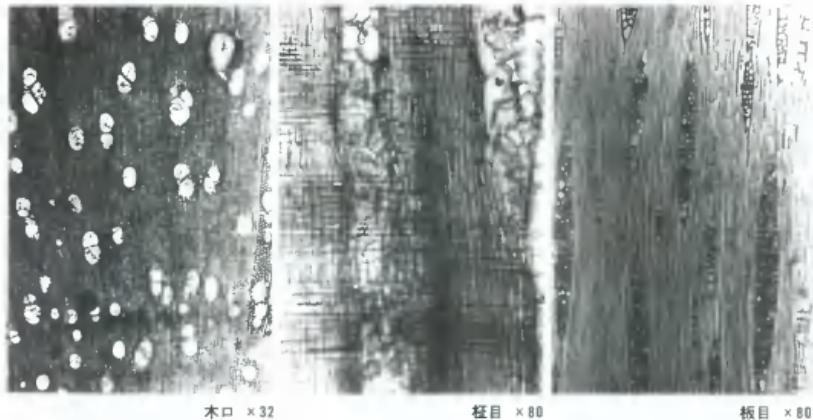


板目 ×80

Celtis sp. No. 73

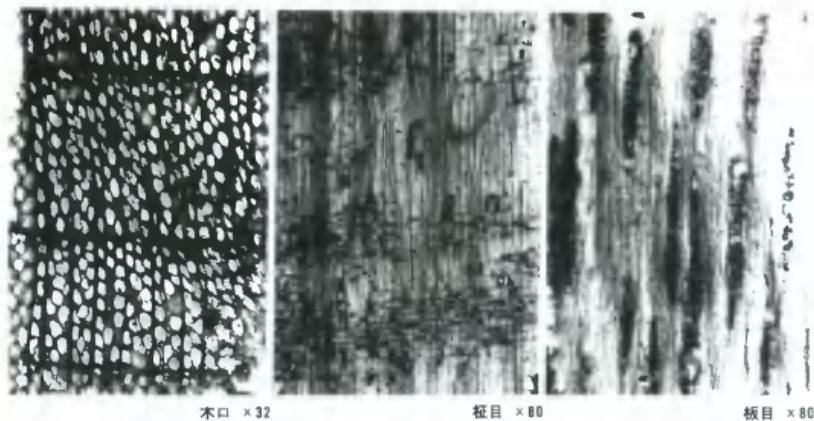


Aphananthe rapens No. 82

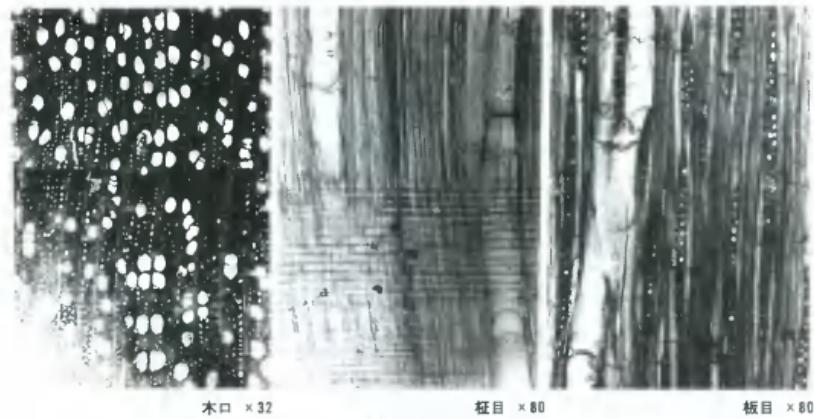


cf. *Elegia* sp. No. 69

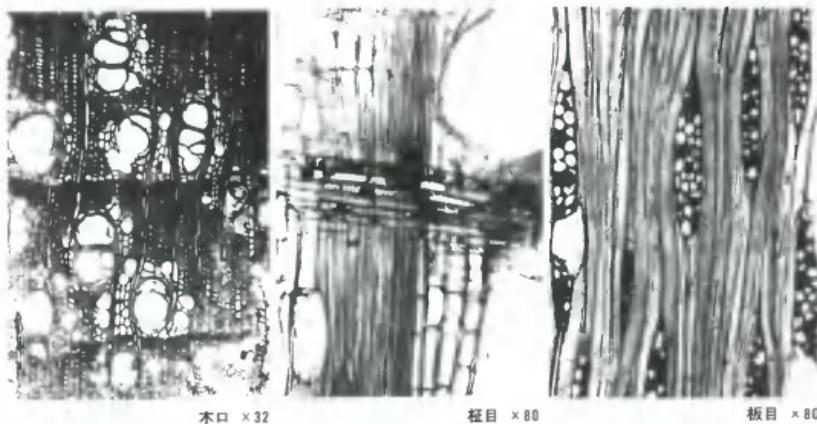
図版160



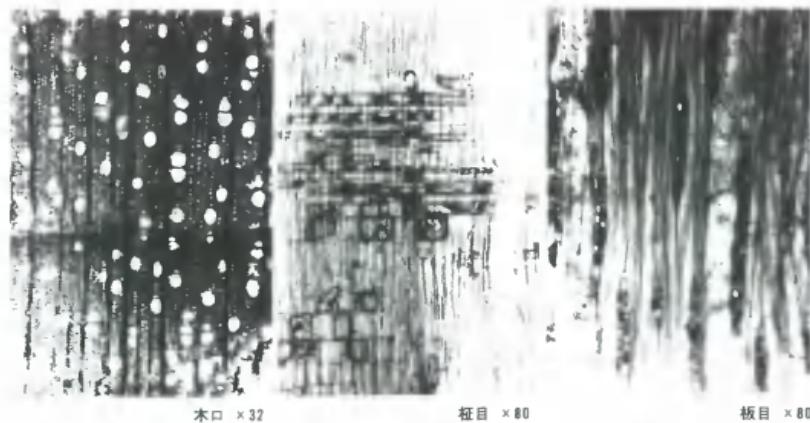
Cercidiphyllum japonicum No. 3



Magnolia sp. No. 78

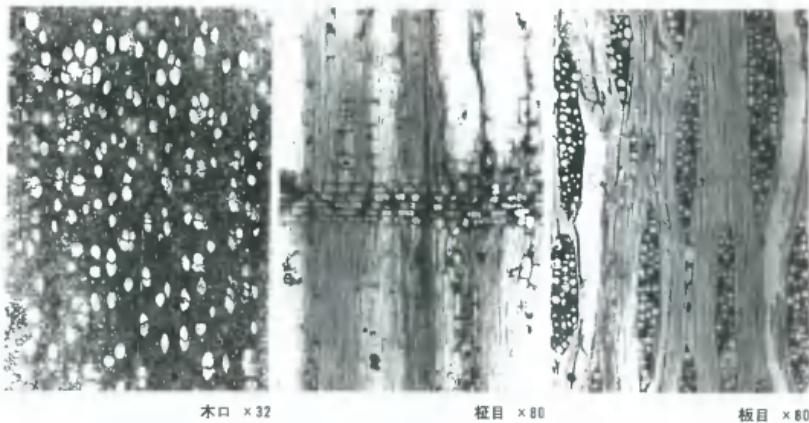


Cinnamomum camphora No. 83

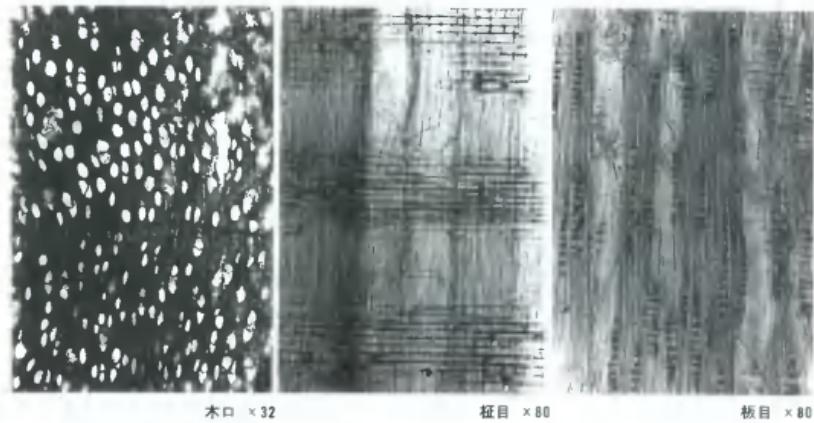


Neoditryas sp. No. 148

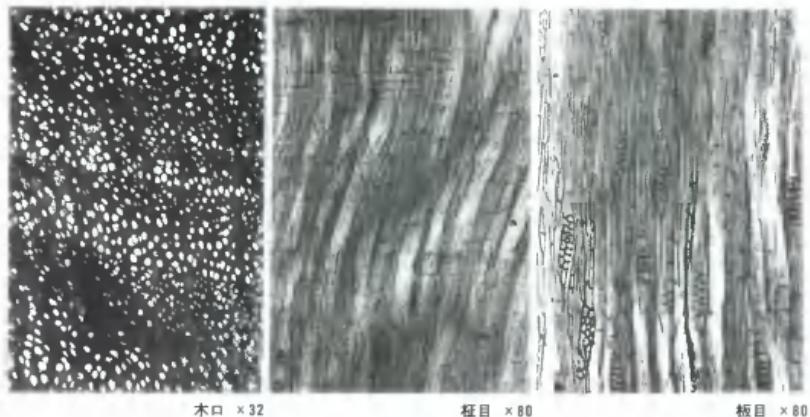
図版162



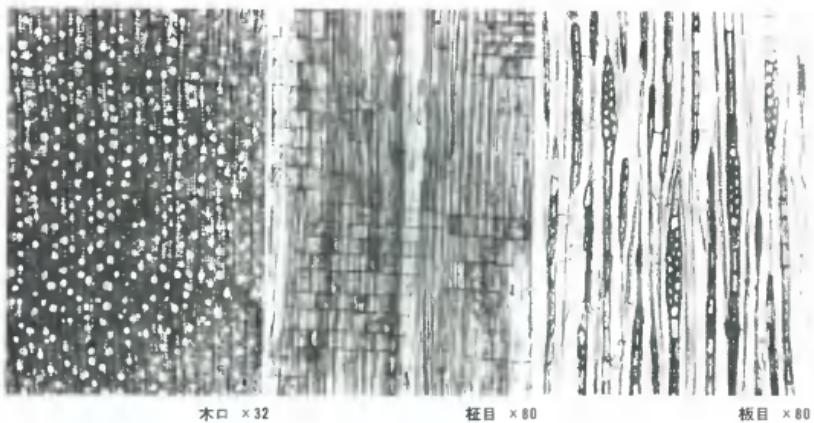
Prunus sp. No. 1



Acer palmatum var. *dissectum* No. 5

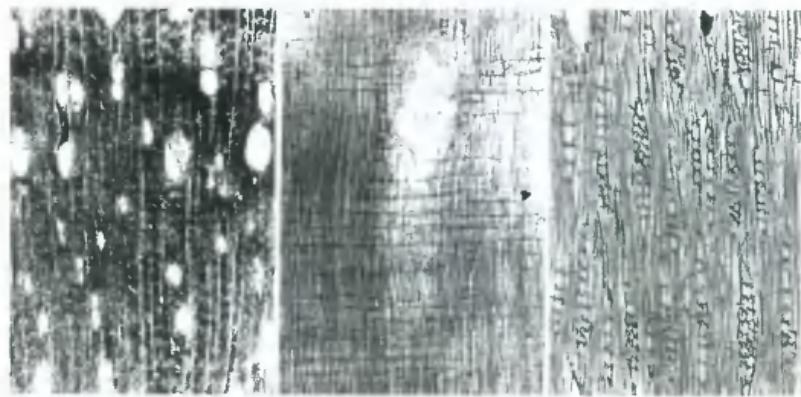


c.f. *Eurya japonica* No. 27



Eurya japonica No. 28

図版164



木口 × 32

柾目 × 80

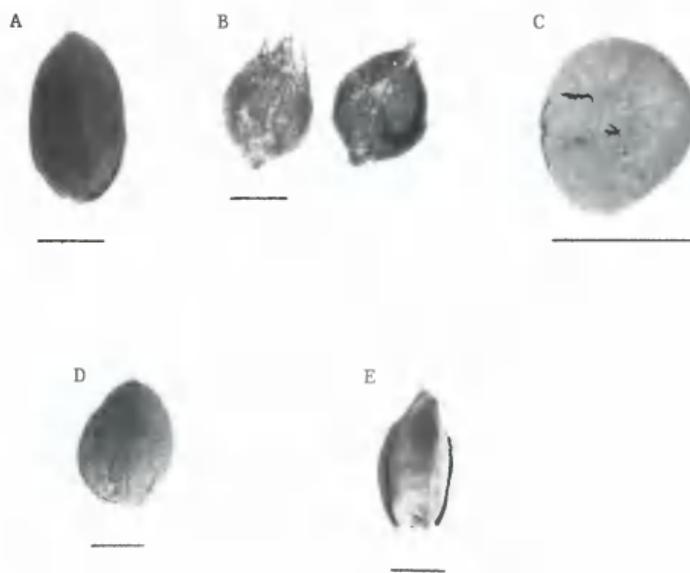
板目 × 80

Diospyros sp. No. 32



木口 × 32

Gramineae (subfam. Bambusoideae) sp. No. 43



A: *Torrugula aculeata* No. 5 B: *Polygonum* sp. No. 2
C: *Apiumanthus capillaris* No. 8 D: *Lemna gibba* No. 7
E: *Melica ciliolata* No. 6

スケール：Aは1cm, Bは1mm, その他は5mm。

図版166

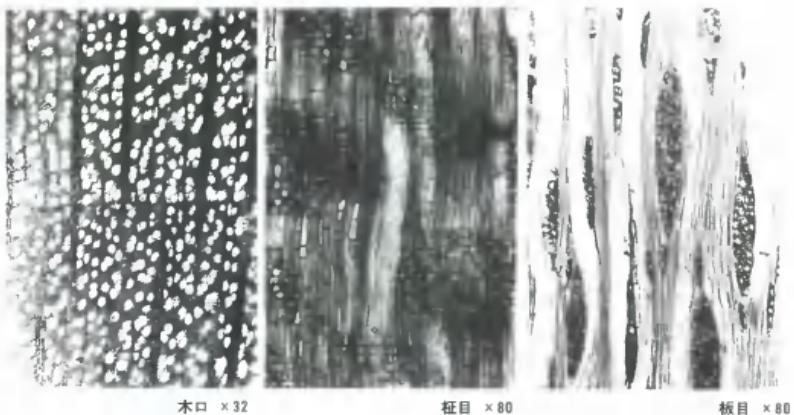


- 1: *Pistia* (subgen. *Diplastodon*) sp. No. 10 2: *Cyperus yagana* No. 32
 3: *Auglyra ciliostachysfolia* No. 23 4: *Quercus* (subgen. *Quercus*) sp. No. 15
 5: *Quercus* sp. No. 31 6: *Prunus galilaea* No. 13
 7: *P. mume* No. 8 8: *P. persica* No. 3 9: *Acacia turbinata*
 No. 16 10: *A. turbinata* No. 22 11: *Cornus controversa* No. 14
 12: *Cyperax* sp. No. 21

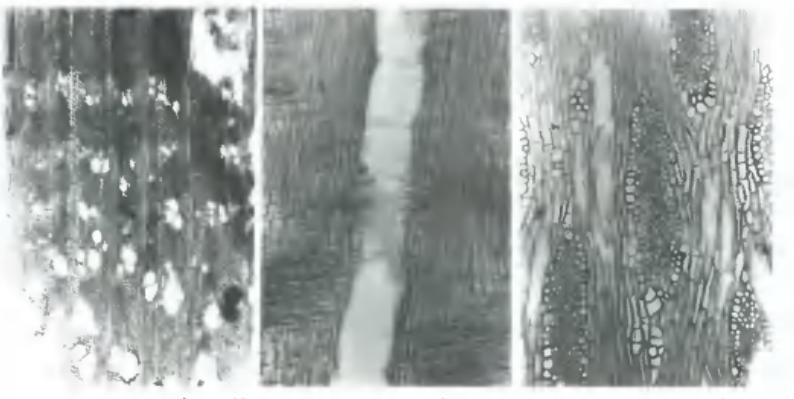
スケール 1, 3, 8, 10は10mm. 2は1mm

4～7, 9, 12は5mm. 11は2mm

百間川米田遺跡出土種子同定（昭和61年度）写真

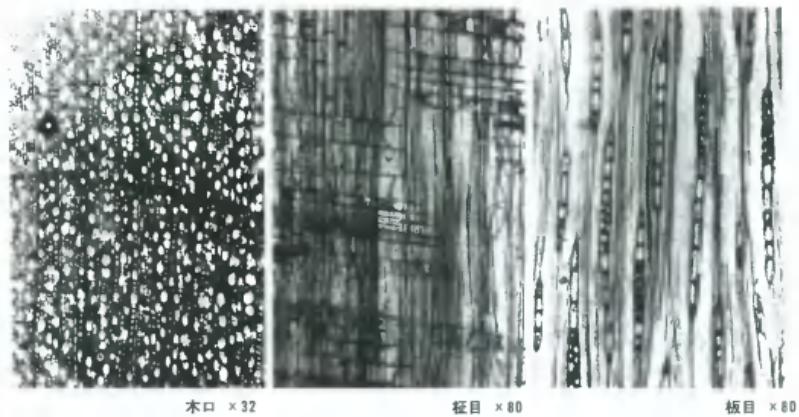


Prunus sp. No. 6

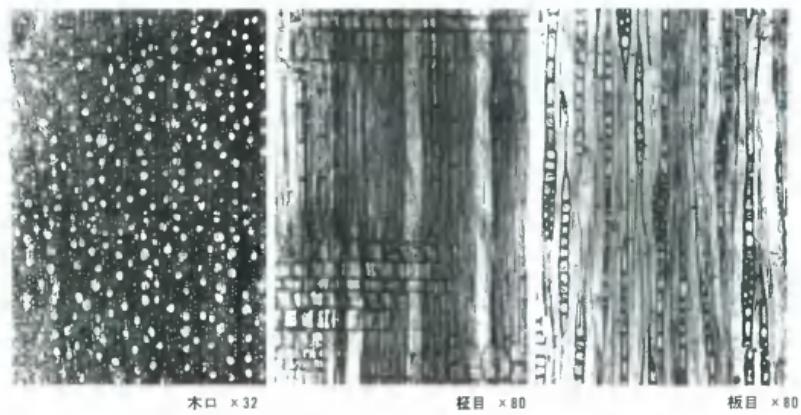


cf. *Cladraspis* sp. No. 60

図版168



Cleyera japonica No. 61



Eurya japonica No. 26

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
百間川米田遺跡（旧当麻遺跡）3

(表・図版)

1989年9月20日 印刷

1989年9月30日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター

岡山市西花尻1325-3

発行 建設省岡山河川工事事務所

岡山市鹿田町2-4-36

岡山県教育委員会

岡山市内山下2-4-6

印刷 西日本法規出版株式会社

岡山市高柳西町1-23